

超大国日本国召喚

一般通過愉悦部

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

超大国日本国「念願の異世界転生を果たしたぜ！」

第7艦隊「ここをアメリカ合衆国のキャンプ地とする！」

巻き込まれた他国軍「くそっ…じれっつーな 俺らちよつと植民地獲得しに行つてきます!!」

異世界「こつちくんな」

※ほぼほぼストーリー上の流れは一緒ですが、敵対国は原作以上に痛い目に遭いま

す。

※簡単に言えばアメリカみたいな軍事力持った日本が異世界で無双するなろう系の作者自己満の作品です。

シミュレーションではないので、そこら辺は注意してクレメンス



2022/7/22 『原作の大幅コピー』での削除対策として現在大規模修正中です。最新話も書いているのでお待ちください。

この小説はフィクションです。実在の人物や団体・国家、また政治的意図などとは関係ありません。

目次

設定集

設定集 日本国概要 | 1

設定集 陸上自衛隊の編成 | 26

設定集 陸上自衛隊・海兵隊の車両・航

空機 | 94

設定集 自衛隊の小火器・火砲・ロケツ

ト・誘導弾 | 176

設定集 海上自衛隊の編成 | 195

設定集 海上自衛隊の艦艇 | 231

設定集 航空自衛隊・海上自衛隊・海

兵隊の航空機 | 336

設定集 航空自衛隊の編成 | 422

設定集 海兵隊の編成・装備 | 439

設定集 語集・登場人物紹介 | 460

第1章 導かれし巨大なる太陽

プロローグ 強化日本国召喚 | 507

第1話 異世界との接触 | 513

第2話 訪問者、そして驚愕 | 560

第3話 戦争前夜 | 581

第4話 ギム防衛戦 | 611

第5話 ロデニウス沖大海戦 | 624

第6話 太陽神の使い | 658

第7話 黒い死神 | 686

第8話 第4世代戦闘機 v s . ワイ

バーン | 708

第9話	成層圏の要塞	729		
第10話	オペレーション・ホールイ ンワン	747		
間話	異世界のモグラ叩き	793		
第2章	太陽に滅ぼされる栄光			
第1話	軍祭、奇襲、対応	809		
第2話	空想上の国	869		
第3話	憤慨する日出ざる国	903		
第4話	開戦	964		
第5話	殲滅される異世界軍	1031		
第6話	亡国の解放	1076		
第7話	皇都大空襲	1118		
第8話	エストシラント沖大海戦	1458		
	降伏			
	第16話 クーデター、そして無条件	1425		
	下編			
	第15話 ニュー・ノルマンディー	1388		
	中編			
	第14話 ニュー・ノルマンディー	1366		
	上編			
	第13話 ニュー・ノルマンディー	1354		
	第12話 地獄の黙示録	1322		
	第11話 本土上陸	1295		
	第10話 空の神兵	1237		
	第9話 破壊神の創造	1173		

	間話	異世界の鬼退治――1	1489
1512	間話	ムー国への武器輸出 第1話	
	第3章	崩れゆく均衡	
	第1話	世界最強の国――	1532
	第2話	世界最強の国の驚愕――	1550
	第3話	先進12カ国会議――	1576
1612	第4話	フォーク海峡迎撃戦 前編	
1666	第5話	フォーク海峡迎撃戦 後編	
1678	第6話	フォーク海峡砲撃戦――1	
	第7話	フォーク海峡砲撃戦――2	1693

設定集

設定集

日本国概要

日本

日本国（にほんこく、につぽんこく、英：Japan）、または日本（にほん、につぽん）は、東アジアに位置し、日本列島および南西諸島・伊豆諸島・小笠原諸島、ユーラシア大陸中華地方などからなる民主制国家。首都は東京都。

概要

地形は起伏に富み、火山地・丘陵を含む山地の面積は国土の約75%を占め、沿岸の平野部に人口が集中している。国内には行政区分として47の都道府県があり、主に日本人（大和民族・琉球民族・アイヌ民族）・外国人系の人々が居住し、日本語を通用する。内政においては、明治維新後の1889年に大日本帝国憲法を制定し立憲国家となった。1947年には現行の日本国憲法を施行。

日本は古くから中国大陸、朝鮮半島との関係が深く、飛鳥時代・奈良時代には遣隋使、遣唐使といった交易を通して法制度・仏教・儒教・漢文等を輸入し、国家体制の構築に役立てている。

また、正倉院にペルシア・インドを由来とする文化財が複数含まれることを例に取れるように、唐や朝鮮に限らず交易を通じてアジア・シルクロード文化も流入している。

律令体制樹立後の平安時代末期より武家政権が成立し、幾度も交替する。

江戸時代に至って交際国を限定する「鎖国」を行ったが、外圧を受けて開国し、明治維新の過程で王政復古の大号令で武家政権が終焉し、廃藩置県などを経て中央集権化が完了した後自由民権運動を受けて大日本帝国憲法が制定され、立憲君主制国家となる。

同時に西洋の資本主義を参考にして日本初の銀行や東京株式取引所および銀行と取引を行う会社が次々と創業された。並行して工業化も進展し、ここに西洋化・近代化が果たされ、日本は近代国家に移行する。

また、この時現在まで続く日米安全保障条約・日米永久同盟をアメリカ合衆国と結ぶ。これにより国内の急速的な発展、日本の世界威信向上へと繋がった。

日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦での勝利を経て不平等条約を撤廃させ、領土を拡張し、人種的差別撤廃提案は拒否されたものの国際連盟の常任理事国の地位を確保した。

大正デモクラシーを受けて政治的・文化的発展をみ、普通選挙法が成立する。

世界恐慌を逃れ、第二次世界大戦には連合国として参戦。序盤にも日中戦争で本土に被害を負うも、反撃。1943年8月8日にイタリヤ王国が、1945年3月7日に中華人民共和国、1945年8月15日にドイツ国が降伏し、日本国は威信、工業力、軍事力を拡大させ、新たに成立した国際連合の常任理事国として就任。世界3番目の超大国に君臨する。

1947年に国民主権、基本的人権の尊重、自由貿易を謳う日本国憲法が制定され、日本は民主制国家となる。

冷戦下ではソビエトと一番近い西側大国としてソビエトと対立する。

1960年代から高度経済成長期に入り、工業化が加速し科学技術立国が推進された結果経済大国にもなった、プラザ合意を経てバブル経済に突入し、1980年代末にバブル経済が崩壊するが、その後も世界各国への輸出により栄えている。その後は世界最大の対外純資産国となっている。

GDPは世界第1位かつ購買力平価は世界第3位であり、世界最大の経済大国である。

21世紀に入ってからアメリカに押されつつあるもののエレクトロニクス産業や自動車産業の中心地であり、トヨタ、日産、ホンダ、東芝、ソニー、パナソニック、日

立製作所など多数の大企業を輩出する。

また、高等教育終了率98.89%を誇り、『世界の科学室』と呼ばれるほど、科学技術や最先端技術のリーダーとされる。

21世紀に入っても日本国はアメリカ合衆国と並ぶ覇権国家として君臨し続けた。(また超大国を上回る極超大国とも言われることがあった)

経済面でアメリカ合衆国は財政赤字、ヨーロッパ諸国は衰退する一方、バブル経済が崩壊してもIT技術やインターネット会社発達、中華地方の工場などによる海外への輸出により栄え、世界に影響力を強めた。

WTO、G7、G20、OECD、北大西洋条約機構(NATO)、西太平洋条約機構(WETO)、米州相互援助条約などの加盟国でもある。

同盟は日米安全保障条約、日米永久同盟、日英同盟、日仏同盟、日豪同盟、日韓同盟がある。

日本は、2010年の世界の軍事支出の29%を占める世界最大の軍事大国である。世界で2番目に核兵器を開発した国であり、ドイツ・中華人民共和国に原子爆弾を投下し、戦争において核兵器を使用したことがあるのはアメリカと並ぶが、世界で一番核兵器を使用した国である。

第二次世界大戦の戦勝国であることから、国際連合安全保障理事会の常任理事国であ

り、国連から核兵器の保有を合法的に認められている他、NATOの加盟国でもある。

日本国自衛隊は陸上自衛隊・海上自衛隊・航空自衛隊・航空宇宙自衛隊・海兵隊で構成されており、北米（日本北米軍）・アジア（日本インド・太平洋軍）・欧州（日本欧州軍）・アフリカ（日本アフリカ軍）・中東（日本中央軍）・南米（日本南方軍）など世界中の国家に多数の駐留軍事拠点（自衛隊基地）を設置し、同盟国などの国家安全保障を担っている。

日本国は現在、国際社会に最も多大な影響を及ぼす政治的・経済的・軍事的勢力であり、科学研究および技術革新における世界のリーダー的存在であるともされている。

事実上の世界2国のみを超大国として君臨しており、総合力ではアメリカ合衆国を凌ぐと言われている。

年表

江戸時代

1853年 黒船来航（ペリー提督、浦賀に来航）

1858年 日米修好通商条約締結、安政の大獄

1863年 薩英戦争

1864年 第1次長州征伐

1866年 薩長同盟、成立

1867年 徳川幕府第15代将軍徳川慶喜、大政奉還

同年 王政復古の大号令で明治新政府が樹立

明治時代

1868年 戊辰戦争（～1869年）

1877年 西南戦争

1889年 大日本帝国憲法が配布

1890年 大日本帝国陸軍、大日本帝国海軍、大日本帝国海兵隊が発足

1894年 関税自主権、治外法権の回復に成功

同年 日清戦争（～1895年）

1900年 日米安全保障条約、日米永久同盟締結

1902年 日英同盟締結

1904年 日露戦争（～1905年）

大正時代

1914年 第一次世界大戦。オーストリアがセルビアに宣戦布告、世界大戦が始まる。中央同盟国（ドイツ、オーストリア、オスマン帝国・ブルガリアなど）と連合国（イギリス、フランス、ロシア、セルビア、アメリカ、日本、イタリアなど）との戦い。日本は史実と異なり、西部戦線にも参加。新兵器としては毒ガス・機関銃・火炎放射器・戦車・潜水艦・飛行機などが使用された。犠牲者は約1000万人となる。ドイツのルシタニア号事件、無制限潜水艦作戦を契機に孤立主義のアメリカが連合軍に参戦する。これにより連合国が勝利

1918年 シベリア出兵（干渉戦争）連合国はロシアでソビエト政権に反対する勢力を支援するが、撤退。日本は史実と異なりアメリカと一緒に撤退

1919年 ヴェルサイユ条約。第一次世界大戦の講和条約

1920年 国際連盟が発足する。常任理事国はイギリス、フランス、日本、イタリアの4カ国。アメリカは議会の承認が降りず不参加

1922年 日仏同盟締結

同年 ワシントン会議。四カ国条約、九カ国条約、ワシントン海軍軍縮条約締結（日英同盟は破棄されず）

1923年 関東大震災

昭和時代

1929年 世界恐慌発生

1930年 ロンドン海軍軍縮会議

1932年 中華内戦勃発。

1936年 中華内戦、共産主義の共産党が勝利、中華人民共和国建国。敗北した国

民党は台湾へ逃れ台湾民国を建国。日台同盟締結。ロンドン軍縮会議、ドイツ脱退、建艦競争。

1937年 日米英仏4ヶ国連合締結

1938年 日米安全保障条約により、日本に在日アメリカ軍、アメリカ本土、ハワイ、

グアムに在米大日本帝国陸海軍、海兵隊が進駐

1939年 第二次世界大戦（1945年）1939年9月 ドイツによるポーランド侵攻から始まる。枢軸国（ドイツ、イタリア、中華人民共和国など）と連合国（イギリス、フランス、アメリカ、日本、ソ連、中華民国1のちの台湾など）の世界各地での戦い。イタリア・中華人民共和国が降伏後、ドイツに原爆が投下されて戦争終結。新兵器や虐殺などの影響により犠牲者は約4000〜5000万人位。

同年9月1日 ナチス・ドイツ、ポーランドへ侵攻。第2次世界大戦勃発

同年9月2日 イギリスおよびフランス、共同で最後通牒を送付

同年9月3日 イギリス・フランス、ドイツに宣戦布告。アメリカ合衆国、中立を表

明

同年9月4日 大日本帝国、日英同盟第5章によりドイツに宣戦布告。アメリカ合衆国は中立を宣言（日米永久同盟は『日本』が宣戦布告した場合はアメリカは宣戦布告が出来ない）

同年9月17日 ソビエト連邦のポーランド侵攻

同年10月31日 ドイツ国防軍のエーリッヒ・フォン・マンシュタイン中将、フランス侵攻計画（「マンシュタイン計画」）を立案。ベルギーではなく、アルデンヌの森を通過。

同年11月1日 大日本帝国、欧州派遣軍を設立。陸軍は欧州方面軍、海軍は遣欧艦隊（第8艦隊）、海兵隊は遣欧部隊（第12海兵師団）を編成

1940年2月27日 欧州派遣軍、呉港を出発

同年5月10日 ドイツがフランス、オランダ、ベルギー、ルクセンブルクに侵攻（黄色作戦）

同年5月15日 オランダ降伏

同年5月24日 英仏軍によるダンケルクからの撤退作戦ダンケルクの戦い（ダイナモ作戦）開始

同年5月28日 ベルギー降伏

同年6月10日 イタリアがイギリス・フランスに対し宣戦布告

同年6月14日 ドイツがパリに無血入城

同年6月20日 日本欧州派遣軍、ポーツマスへ入港

同年6月23日 シヤルル・ド・ゴール、ロンドンにおいて自由フランス委員会設立

同年7月10日 バトル・オブ・ブリテン開始、ヴェイシー・フランス発足（史実と違いフランス全土が領土。陸軍・海軍・空軍存続）。ヴェイシー・フランスは枢軸国入り

同年9月27日 独伊仏中四国同盟締結

同年11月11日 タラント空襲。大日本帝国海軍欧州派遣軍遣欧艦隊の第9航空戦隊とイギリス艦隊がイタリア海軍の軍港を空襲

1941年6月22日 ドイツ、バルバロッサ作戦発動しソ連を総攻撃（独ソ戦、ミンスクの戦い）

同年7月28日 中華人民共和国、自由フランス領南部インドシナへ進駐

同年8月9日 大西洋憲章締結。アメリカ、イギリス、日本による憲章。大日本帝国

海軍戦艦『大和』甲板で締結

同年9月30日 モスクワ攻略作戦（タイフーン作戦）開始

同年10月19日 例年よりも早い冬の訪れにより、ドイツ軍の進攻止まる

同年11月26日 日本、中国へトウゴウ・ノート提示

同年11月27日 中国、トウゴウ・ノートを最後通牒として認識

同年12月1日 中国、日本、アメリカ、イギリス、オランダに対し開戦を決定

同年12月8日 佐世保湾攻撃、中華人民共和国第1空母航空部隊による長崎県佐世保港への空襲、その際、視察に来ていた皇太子殿下が負傷。国民の戦意が高まる。中華人民共和国、日本・アメリカ・イギリス・オランダ・台湾へ宣戦布告

同年同日 中華人民共和国軍、マレー半島、ウエーク島、フィリピン、香港、グアムへ侵攻。日本・アメリカ・イギリス・オランダ・台湾、連名で中華人民共和国へ宣戦布告

同年12月10日 マレー沖海戦、イギリス東洋艦隊の戦艦2隻が中華人民共和国空軍のH-39（H-111）、H-38（Dol17）、H-40（Ju-88）によって撃沈される。大艦巨砲主義が終焉を迎える

同年12月11日 ドイツがアメリカに宣戦布告

同年12月15日 フロンティア共和国、連合軍に加盟。同時にフロンティア共和国から連合軍が中国本土へ侵攻

同年12月25日 中国軍が香港占領、香港駐在のイギリス軍降伏

1942年1月1日 連合国共同宣言調停

同年2月15日 中国軍、シンガポール占領

同年2月28日 バタビア沖海戦、ABDA J5 各国艦隊、中国艦隊に敗北

同年3月7日 ニューギニア戦線においてポートモレスビーの覇権をめぐり中国と

日本・アメリカ・オーストラリアが衝突

同年3月8日 中国軍、東部ニューギニア占領、ニューギニアの戦い

同年3月15日 台湾沖海戦。中国海軍、台湾・日本連合艦隊に敗北

同年3月23日 日米軍、山東半島へ上陸

同年4月5日 セイロン沖海戦、中国海軍の第1・2・3機動艦隊にイギリス海軍敗

北

同年5月7日 珊瑚海海戦。中国海軍の第3機動艦隊（空母4隻）対日本海軍第1空

母機動艦隊第2空母打撃群第5航空戦隊（空母2隻）とアメリカ海軍第17任務部隊（空

母2隻）の戦い。中国側が空母1隻（軽空母）撃沈、2隻大破、連合国側が空母1隻（ア

メリカのレキシントン）撃沈、1隻（翔鶴）大破。

同年6月5日 沖繩沖海戦。沖繩を占領し、早期講和を目指す中華人民共和国海軍司

令長官？ 志？ による沖繩攻撃。参加兵力は中国側：第1・2・4機動艦隊（空母8

隻)、沖繩攻略艦隊(空母1隻、戦艦2隻)、主力部隊(戦艦7隻)。日本・アメリカ側：
米第17任務部隊(空母1隻)、米第16任務部隊(空母2隻)、日第1・2航空戦隊
(空母4隻)

。まず最初に中国の第1攻撃隊が沖繩本島の飛行場を攻撃するが、攻撃が不十分だと
して第2次攻撃を要請。当初の対艦兵装から隊地兵装へ転換。だが、索敵機から米・日
機動部隊発見の報告があり対艦装備へ変更。

その際に、日米空母機動艦隊第1次攻撃隊の第2航空戦隊(飛龍・蒼龍)艦爆隊が中
国空母4隻を爆撃。4隻大破炎上(後に全艦沈没)。また、第1航空戦隊攻撃隊・第2航
空戦隊雷撃隊が空母1隻を撃沈。米空母艦載機も空母1隻を大破させる。

残った2隻は第2次攻撃隊を発艦。米空母1隻(ヨークタウン)と日空母1隻(蒼龍)
を大破させる(のちに両艦撃沈処分)。日米機動部隊も第2次攻撃隊を発艦。空母1隻
の前部飛行甲板を大破させる。双方戦闘終了し、中国空母2隻は残った艦載機を前部収
容するが、その時大破した空母に日潜水艦が雷撃、撃沈。また、残った空母も日米第2
次攻撃隊が放った雷撃によって気化したガソリンが誘爆、轟沈。中国側は空母8隻と全
艦載機を失い、日米側は空母2隻を失った。日米側の勝利。同時に北京攻防戦始まる

同年7月18日 中国軍、ポートモレスビー攻略作戦開始

同年8月7日 日米連合軍、ガダルカナル島に上陸

同年8月9日 第1次ソロモン海戦

同年8月24日 第2次ソロモン海戦

同年10月26日 南太平洋海戦

同年11月12日 第3次ソロモン海戦

同年11月20日 大日本帝国陸軍、アメリカ合衆国陸軍により北京陥落。かの有名な『紫禁城の星条旗・日の丸』が撮られる。

1943年2月2日 中国軍、ガダルカナル島より撤退開始

同年7月4日 クルスク会戦

同年7月25日 クーデターによりムツソリーニが首相解任、幽閉

同年9月3日 連合国軍がイタリア半島上陸開始（イタリア侵攻、ベイタウン作戦）、

イタリアが連合国と休戦協定締結

同年9月23日 ムツソリーニを国家元首とするイタリア社会共和国樹立

同年11月5日 南京で大東亜会議開催

同年11月22日 カイロ会談

1944年6月6日 ノルマンディー上陸作戦、アメリカ、イギリス、日本、自由フ

ランス等が参加。

同年6月15日 日本・アメリカ軍がサイパン上陸、サイパンの戦い

同年6月19日 マリアナ沖海戦。中国側が空母3隻を失い敗北

同年8月25日 連合国軍、パリ入城

同年10月23日 レイテ沖海戦。史上最大規模の海戦

1945年2月4日 ヤルタ会談。アメリカ合衆国・イギリス・ソビエト連邦、大日本帝国による連合国首脳会談。日本は東條英機首相、昭和天皇が参加。第二次世界大戦が終盤に入る中、ソ連対中参戦と国際連合の設立について協議された他、ドイツ及び中部・東部ヨーロッパにおける米ソの利害を調整すること、また昭和天皇よりイギリスや自由フランスへ植民地を解放するよう求めた。世界大戦後の「ヤルタ体制」と呼ばれる国際レジームを規定した。超大国主導の勢力圏確定の発想が色濃く、東西冷戦の端緒となった。「クリミア会議」とも呼ばれる。

同年3月5日 ソビエト連邦、中華人民共和国に宣戦布告

同年4月30日 大日本帝国により南京に史上初の原子爆弾投下、毛沢東戦死。南京陥落。

同年5月7日 中華人民共和国、降伏

同年5月21日 東京条約締結。中華人民共和国の解体、賠償金の支払い、河北・北京・天津・山東・安徽・江蘇・上海・江西・浙江・福建・広東の一部・香港・マカオの日本への999年間の割譲、中華民国政府の設立を決定

同年6月1日 中華民国政府誕生。だが国内は連合国軍最高司令官総司令部の統治下に置かれる

同年7月26日 1. ドイツの軍国主義の勢力を除去する2. ドイツの戦争能力が皆無になるまで占領する3. カイロ宣言の履行及びドイツの主権は米・日・英・中が決定する。4. ドイツを民主主義国家とする（言論・宗教・思想の自由など）を定める東京宣言。アメリカ・イギリス・大日本帝国・中華民国によるドイツ国に対しての宣言。

同年8月2日 東京協定、ドイツ降伏後はアメリカ、イギリス、フランス、日本、ソ連で5分割される

同年8月6日 アメリカ合衆国により、ドイツのケルンに史上2度目の原子爆弾投下

同年8月9日 大日本帝国により、ドイツのミュンヘンに史上3度目の原子爆弾投下

同年8月10日 ナチス・ドイツ総統、アドルフ・ヒトラー自殺

同年8月15日 フランスブルク政府、東京宣言を受諾

同年9月2日 ドイツハンブルク港で大日本帝国海軍戦艦『紀伊』艦上で降伏文書調印。ドイツ国降伏、第二次世界大戦集結。日本国は戦勝国に

同年10月 国際連合が発足。常任理事国はアメリカ合衆国、グレートブリテン及び北アイルランド連合王国、大日本帝国、フランス第四共和政、ソビエト社会主義共和国

連邦

同年【西側】——資本主義、第一世界

1. 西側（政治）：トルーマン・トウジョウドクトリン
2. 西側（経済）：マーシャル・コイズミプラン
3. 西側（軍事）：北大西洋条約機構（NATO）、西太平洋条約機構（WETO）
4. 西側（陣営）：西ヨーロッパ、西ドイツ、日本、韓国、台湾、カナダ、南米諸国など

【東側】——社会主義、第二世界

1. 東側（政治）：コムソフォルム
2. 東側（経済）：COMECON（コメコン）
3. 東側（軍事）：ワルシャワ条約機構（WTO）
4. 東側（陣営）：東ヨーロッパ、東ドイツ、中国、北朝鮮、キューバ、ベトナム、ラオス、カンボジア、モンゴルなど

【中立】——第三世界

1. 中立（陣営）：インド・アフリカなどの発展途上国などの、陣営が設立。冷戦開始。東西冷戦（アメリカ陣営・西側 vs ソビエト陣営・東

側)。ヤルタ会談からはじまりマルタ会談で東西冷戦は終結した。

1946年2月 第二次世界大戦の被害に心を痛めた昭和天皇による民主化宣言。

同年3月 大日本帝国陸軍、大日本帝国海軍が解体され、大日本帝国陸上自衛隊、大日本帝国海上自衛隊となる。海兵隊は存続。また、陸軍航空隊、海軍航空隊も解体され、新たに大日本帝国航空自衛隊となる。(1947年の日本国に改名により日本国陸上自衛隊、日本国海上自衛隊、日本国航空自衛隊、日本国海兵隊となる)

同年5月 憲法変更反対派の将校らによる5・15事件

同年6月 日本国憲法公布

1947年1月 日本国憲法施行

同年1月27日 日本国憲法により国名を『大日本帝国』から『日本国』へ変更。同月、国際連合より正式受理

1950年 朝鮮戦争勃発。日本国は国連軍側で参戦(1953年休戦)

1955年 日本国海上自衛隊が世界初の原子力潜水艦『おやしお』を就役、同年1月17日に東京湾で歴史的な通信『本艦、原子力にて航行中』という文を発信した。

1956年 日本国海上自衛隊、世界初の潜水艦発射弾道ミサイル『ヤタガラスA-2』を配備。

1957年 日本国の宇宙航空研究開発機構(JAXA)、世界初の人工衛星『おおす

み』の打ち上げ成功。東側諸国に『オオスミ・ショック』とも呼ばれるほど驚愕させた。また、『おおすみ』の発射に使われた『イプシロンA-5』ロケットは史上初の大陸間弾道ミサイルとなる。

1960年 ベトナム戦争勃発。日本は南ベトナム側で参戦（1970年撤退）

1964年東京オリンピック開催

1970年 核拡散防止条約締結。連合国（国際連合）の5大国（常任理事国）であるアメリカ合衆国、日本国、ソビエト社会主義共和国連邦、イギリス、フランス共和国以外の核兵器保有を禁止する条約

1975年 第2次中華内戦勃発、中華国内内で共産党勢力による暴動が起きる。中華民国政府は日本・アメリカに支援を要請するも、ソ連が核の使用を仄めかした為、援軍を断念。国連軍を治安回復の目的で介入させようとするも、ソ連の拒否権で却下された。

1978年 中華民国政府、台湾民国に名前を変えて台湾へ亡命

1979年 中華人民共和国設立、日本とアメリカは当初は認めなかったが、台湾と尖閣諸島問題が発生し、国として認める。

平成時代

1989年 昭和天皇崩御。元号『平成』に改元

同年11月 ドイツのベルリンの壁が崩壊

同年12月 マルタ会談。アメリカ、日本国とソ連による首脳会談、日本からは海部俊樹総理大臣が参加（東西冷戦の終結）

1990年 東西ドイツ統一。ドイツ連邦共和国にドイツ民主共和国が編入する

1991年 湾岸戦争勃発。 国際連合 vs イラク。日本は国際連合側で参戦。

（国際連合の勝利）

同年12月 ソビエト社会主義共和国連邦崩壊。ロシア連邦構成。

1995年 阪神淡路大震災

同年 地下鉄サリン事件

2001年9月 アメリカ同時多発テロが発生

同年10月 アフガニスタン紛争勃発、自衛隊はアメリカ側で参戦（2011年の東日本大震災の影響で撤退、2012年6月に再参戦するも2014年の日中台湾紛争で再度撤退。2016年2月に再々参戦し、2018年9月に財政面から完全撤退）

2003年 イラク戦争 自衛隊はアメリカ側で参戦（2011年3月に東日本大震災の影響で完全撤退）

2011年3月 東日本大震災

同年11月 国際宇宙ステーションが完成する

2014年 極東戦争（東亜戦争、尖閣紛争、第3次世界大戦）。中国軍部の急進派が中々台湾に侵攻しない共産党上層部に対しクーデターを起こす。上層部を監禁した後は台湾へ侵攻。そのまま尖閣諸島・南西諸島に侵攻。その後南京まで陸上自衛隊が侵攻。クーデター部隊は降伏。

同年3月14日 中国人民解放軍中部戦区の司令員がクーデターを起こし、共産党上層部を拘束

同年3月16日 東部戦区、南部戦区も呼応

同年5月1日 クーデター軍、中華人民解放国設立を宣言、だが国連に認められず。

同年5月14日 クーデター軍、台湾へ侵攻。金門島、彰化県が占領

同年6月1日 クーデター軍、与那国島、尖閣諸島へと侵攻。

同年6月2日 クーデター軍、日本国中華地方へ侵攻。陸上自衛隊南部方面隊は兵力に劣るも、兵器の性能さ、兵の練度で時間を稼ぐ

同年6月5日 クーデター軍、002（杭州）型2番艦『広東』率いる機動部隊『第3機動艦隊』を尖閣沖に展開。対する日本側は戦艦の激化を恐れるのと、国民の反戦感情からスーパーキャリアーを投入せず、『いずも』型軽空母5番艦『いぶき』率いる第1

艦隊第5軽空母打撃群を投入

同年8月12日 『いぶき』率いる第5軽空母打撃群、『第3機動部隊』に勝利。『広東』中破

同年8月25日 台湾台中市で大規模な虐殺発生。世界中の反感を買う。また、政府はこれを受けてクーデター軍へ宣戦布告。『極東戦争』始まる。(これまでの『いぶき』の戦闘は『尖閣紛争』、台湾の戦闘は『台湾侵攻』、中華地方の戦闘は『中華地方侵攻』と呼ばれる)。アメリカは日米永久同盟を根拠として介入を狙うも国内の戦意がまだ低かった為断念

同年9月3日 クーデター軍、大規模攻勢作戦『曙光工程』実施。西表島、石垣島、宮古島へ侵攻。台湾の台北に侵攻

同年9月5日 アメリカ軍ワスプ級強襲揚陸艦『ボノム・リシヤール』、空母キラール『東風DF-21D』により撃沈、護衛の海上自衛隊はつゆき型護衛艦『はつゆき』大破。日本・アメリカの戦意高まる

同年9月6日 アメリカ・日本、国連で国連軍による中華人民共和国クーデター軍への攻撃を行う法案を提案。ロシアは拒否権を使おうとするが、本気になった日本とアメリカを恐れて断念

同年9月20日 日本・アメリカの大規模攻勢『旭作戦』開始。西表島、石垣島、宮

古島、与那国島、尖閣諸島奪還。

同年10月2日 世界最大の空母対決・海戦『東シナ海海戦』勃発。日本・アメリカ連合が空母5隻、軽空母2隻、中国側が空母6隻を投入。日本・アメリカ側空母一隻中破、軽空母一隻大破。中国側空母4隻撃沈。1隻大破

同年10月5日 東シナ海海戦で大破・自力航行不能になった『遼寧』、海上自衛隊特殊作戦任務部隊第1群団の攻撃で拿捕

同年10月23日 台湾に国連軍が集まる

同年10月25日 台湾にて国連軍の大規模攻勢作戦『天雷作戦』開始

同年11月30日 台湾よりクーデター軍敗走

同年12月8日 日本国中華地方より国連軍、中国に侵攻

同年12月25日 国連軍武漢占領

同年12月31日 西部戦区、北部戦区国連軍側に付く。フロンティア共和国軍、クーデター軍首都『西安』まで迫る

2014年1月3日 西安包囲戦始まる

同年2月12日 国連軍西安占領。クーデター軍上層部は重慶へ。共産党上層部解放

同年2月15日 重慶陥落、クーデター軍最高司令官自殺。クーデター軍降伏

同年2月27日 ニューヨーク条約締結。クーデターに関わった将校や幹部は全員死刑か終身刑、一般兵士は禁固刑、人民解放軍の戦車・軍艦・戦闘機などを国連軍参加国へ引き渡す、賠償金の支払い、広東省全域（中国が海上貿易ができなくなる為湛江市以外、海南省、遼寧省を日本に999年間割譲などが決定

2016年 熊本地震

令和時代

2019年5月 元号『令和』に改元

2020年 東京オリンピック開催（新型コロナは起きなかった）

同月、日本国異世界へ転移

設定集 陸上自衛隊の編成

日本国自衛隊

日本国自衛隊は軍隊であると日本国憲法第9条によって制定されている。(階級などはこちらの自衛隊と変わりない)

内閣総理大臣は日本国自衛隊の総指揮官としての権限を有するが、敵対行為等に対する自衛隊の投入に際し、内閣と国会が共同で判断することを求めている。

国会の戦争宣言がないまま内閣総理大臣が自衛隊を投入した場合、48時間以内に国会に報告する義務がある。

しかし、国会による宣戦布告を悠長に待っているのは先制攻撃が不可能になってしまう、逆に敵対国から先制攻撃を受けてしまったりする危険性がある為、内閣総理大臣は指揮権を根拠に宣戦布告無しで戦争を開始できることが慣例的に定着している。

自衛隊の階級

陸上自衛隊	海上自衛隊	航空自衛隊	海兵隊	他国軍
元帥	元帥	上級陸将	上級海将	上級空将
上級陸将	上級海将	上級空将	大將	陸将
陸将	海将	海兵将	少将	一等陸佐
中將	陸将補	海将補	空将補	海兵将補
海兵将	海兵将補	空将補	海兵将補	少将
空将	海兵将	中將	陸将補	海将補
海兵将	中將	陸将補	海将補	空将補
中將	陸将補	海将補	空将補	海兵将補
陸将補	海将補	空将補	海兵将補	少将
海将補	空将補	海兵将補	少将	一等陸佐
少将	一等陸佐	一等陸佐	一等陸佐	一等陸佐

等海佐 一等空佐 一等海兵佐 大佐 二等陸佐 二等海佐 二等空佐 二等海兵佐 中佐 三等陸佐 二等海佐 三等空佐 三等海兵佐 少佐
日本国陸上自衛隊

常備自衛官589, 745人と即応予備自衛官151, 137人。

戦車3, 817両、装甲車13, 990両、高射機関砲115両、ロケット弾発射機など260機、野戦砲(各種榴弾砲)870門、迫撃砲2, 100門、無反動砲5, 600門。駐屯地の数は346(駐屯地261・分屯地95)

日本列島防衛を主任務とし、諸外国への攻撃の際にも展開することになる。

陸上自衛隊師団／旅団編成

(歩兵・普通科)師団／旅団……歩兵を中心とした部隊。こちらの自衛隊の師団と変わらない。

主な編成は普通科連隊×3、戦車連隊×

1

——師団／旅団司令部

——師団／旅団司令部付隊

——第○普通科連隊【4個普通科中隊基幹】

- 第○普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕
- 第○普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕（旅団編成の場合2個普通科連隊のみ）
- 第○戦車大隊〔4個戦車中隊基幹〕
- 第○偵察戦闘大隊
- 第○後方支援大隊
- 第○高射特科大隊
- 第○施設大隊
- 第○通信大隊
- 第○飛行隊

機械化師団／旅団……装軌車両を主体とした重部隊。装甲車両を用いて地上を迅速に移動できる部隊。

機甲部隊と同等の機動力を持つため、機甲科部隊と連携して作戦を実施できる。

- 師団／旅団司令部
- 師団／旅団司令部付隊
- 第○機械化連隊〔2～3個機械化中隊基幹〕
- 第○機械化連隊〔2～3個機械化中隊基幹〕（旅団編成の場合1個機械化連隊の

み)

— 第○普通科連隊【2～3個機械化中隊基幹】

— 第○特科大隊

— 第○後方支援隊

— 第○高射特科大隊

— 第○偵察隊

— 第○施設隊

— 第○通信隊

— 第○飛行隊

自動化師団／旅団 装輪車両を主体とした地域防衛・機動部隊。即応機動師団／旅団に
 違い部隊である

が、諸職種連合では無い。

— 師団／旅団司令部

— 師団／旅団司令部付隊

— 第○自動化連隊【3個自動化中隊基幹】

— 第○自動化連隊【3個自動化中隊基幹】（旅団編成の場合1個自動化連隊のみ）

— 第○普通科連隊【3個普通科中隊基幹】

― 第〇特科大隊

― 第〇後方支援隊

― 第〇高射特科大隊

― 第〇偵察隊

― 第〇施設隊

― 第〇通信隊

― 第〇飛行隊

機甲師団／旅団……機甲打撃力を有する部隊。機甲科部隊を主力として諸職種連合化された師団。

主な編成は、

― 師団／旅団司令部

― 師団／旅団司令部付隊

― 第〇戦車連隊〔4～5個戦車中隊基幹〕

― 第〇戦車連隊〔4～5個戦車中隊基幹〕

― 第〇戦車連隊〔4～5個戦車中隊基幹〕

― 第〇普通科連隊〔3～4個普通科中隊基幹〕

― 第〇武装偵察戦闘連隊〔3～4個武装偵察戦闘中隊基幹〕

― 第〇特科連隊

― 第〇後方支援連隊

― 第〇偵察戦闘大隊

― 第〇高射特科大隊

― 第〇施設大隊

― 第〇通信大隊

― 第〇飛行隊

即応機動師団／旅団……即応能力を持った部隊。装輪装甲車などにより機動力と被輸送性を高めた諸職

事の際などに必要に応じて諸職種部隊でパッケージ化された師団／旅団。有

異なり、平時より諸職種部隊で編成
隊となる普通科／機械化／自動化戦闘団とは

されている。

― 師団／旅団司令部

― 師団／旅団司令部付隊

― 第〇即応機動連隊【3個即応機動中隊基幹】

— 第〇即応機動連隊【3個即応機動中隊基幹】
 — 第〇即応機動連隊【3個即応機動中隊基幹】
 — 第〇即応機動連隊【3個即応機動中隊基幹】
 騎兵師団／旅団……ヘリコプターを使用する機動部隊。名前こそ騎兵師団だが現在の
 自衛隊で馬は特殊

されない。
 な儀礼、祭典のみに用いられるのみで実戦には投入

— 師団／旅団司令部
 — 師団／旅団司令部付隊
 — 第〇空中機動連隊【3個騎兵中隊基幹】
 — 第〇空中機動連隊【3個騎兵中隊基幹】
 — 第〇空中強襲連隊【3個騎兵中隊基幹】
 — 第〇重装騎兵連隊【3個戦車連隊基幹】
 特科師団／旅団特科（砲兵）を主体とする部隊。
 — 師団／旅団司令部
 — 師団／旅団司令部付隊
 — 第〇特科連隊【3個特科大隊基幹】

—— 第〇特科連隊〔3個特科大隊基幹〕

—— 第〇地对艦ミサイル連隊〔4個地对艦ミサイル中隊基幹〕

—— 第〇地对艦ミサイル連隊〔4個地对艦ミサイル中隊基幹〕

—— 第〇地对艦ミサイル連隊〔4個地对艦ミサイル中隊基幹〕

高射特科団……対空火器を保有している部隊。

—— 団司令部

—— 団司令部付隊

—— 第1高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕

—— 第2高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕

施設団……所謂工兵が所属している部隊。

—— 団司令部

—— 団司令部付隊

—— 第〇施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕

—— 第〇施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕

—— 第〇施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕

方面航空隊…… 対戦車ヘリコプターによる戦闘及び方面隷下の各部隊に対する航空

偵察・空中機動・

航空輸送・指揮連絡等を主任務とする部隊。

― 隊司令部

― 隊司令部付隊

― 第〇対戦車ヘリコプター隊

― 第〇戦闘ヘリコプター隊

― 〇部方面ヘリコプター隊

― 〇部方面観測氣象隊

― 〇部方面航空野整備隊

陸上自衛隊連隊編成

普通科連隊……普通科で構成される部隊。高機動車や73式小型トラックを装備。

― 第〇普通科連隊本部

― 本部管理中隊

― 中隊本部

― 重迫撃砲小隊

― 情報小隊

― 施設作業小隊

― 通信小隊

— 補給小隊

— 衛生小隊

— 第○普通科中隊

— 本部管理班

— 第○小隊

— 第○小隊

— 第○小隊

— 第○小隊

— 迫撃砲小隊

— 対戦車小隊

— 第○普通科中隊

— 本部管理班

— 第○小隊

— 第○小隊

— 第○小隊

— 第○小隊

— 迫撃砲小隊

—— 对戦車小队

—— 第○普通科中队

—— 本部管理班

—— 第○小队

—— 第○小队

—— 第○小队

—— 第○小队

—— 迫撃砲小队

—— 对戦車小队

—— 第○普通科中队

—— 本部管理班

—— 第○小队

—— 第○小队

—— 第○小队

—— 第○小队

—— 迫撃砲小队

—— 对戦車小队

—— 第○普通科中隊

—— 本部管理班

—— 第○小隊

—— 第○小隊

—— 第○小隊

—— 第○小隊

—— 迫撃砲小隊

—— 対戦車小隊

—— 重迫撃砲中隊

—— 対戦車中隊

機械化連隊……普通科で構成される機動部隊。高機動車や

自動化連隊

戦車連隊

即応機動連隊

偵察戦闘連隊

武装偵察戦闘連隊

特科連隊

後方支援連隊

空中機動連隊

空中強襲連隊

重装騎兵連隊

偵察戦闘大隊

高射特科大隊

施設大隊

通信大隊

飛行隊

陸上総隊

方面隊や方面軍に所属しない部隊の管理も担当する。

—— 陸上自衛隊特殊作戦軍団^{J G S D F S O C}

—— 第1特殊作戦部隊

—— 特殊作戦群

—— 第1特殊作戦群

—— 第2特殊作戦群

— 第3特殊作戦群

— 第4特殊作戦群

— 第5特殊作戦群

— 陸上自衛隊特殊作戦支援司令部

— 第227支援群

— 陸上自衛隊民事活動及び心理作戦司令部

— 第7心理作戦群

— 第8心理作戦群

— 第9心理作戦群

— 第10心理作戦群

— 第57民生旅団

— 最先端特殊作戦センター

— 第1特殊作戦部隊零作戦分遣隊

— 第1空挺軍

— 第1空挺団

— 第3空挺団

— 第2空挺軍

—— 第2空挺団

—— 第4空挺団

—— 第75中央即応機動連隊

—— 連隊本部

—— 第1即応機動大隊

—— 本部管理中隊

—— 中隊本部

—— 機動小隊

—— 情報小隊

—— 対戦車小隊

—— 重迫撃砲小隊

—— 補給小隊

—— 整備小隊

—— 衛生小隊

—— 第1中隊

—— 第2中隊

—— 第3中隊

— 第4中隊

— 対戦車小隊（65式84mm無反動砲もしくは01式軽対戦車誘導弾）

— 迫撃砲小隊（90式51mm軽迫撃砲×2）

— 狙撃班

— 第2即応機動大隊

— 本部管理中隊

— 中隊本部

— 機動小隊

— 情報小隊

— 対戦車小隊

— 重迫撃砲小隊

— 補給小隊

— 整備小隊

— 衛生小隊

— 第1中隊

— 第2中隊

— 第3中隊

- 第4中隊
 - 対戦車小隊（65式84mm無反動砲もしくは01式軽対戦車誘導弾）
 - 迫撃砲小隊（90式51mm軽迫撃砲×2）
 - 狙撃班
- 第3即応機動大隊
 - 本部管理中隊
 - 中隊本部
 - 機動小隊
 - 情報小隊
 - 対戦車小隊
 - 重迫撃砲小隊
 - 補給小隊
 - 整備小隊
 - 衛生小隊
- 第1中隊
- 第2中隊
- 第3中隊

—— 第4中隊

—— 対戦車小隊（65式84mm無反動砲もしくは01式軽対戦車誘導弾）

—— 迫撃砲小隊（90式51mm軽迫撃砲×2）

—— 狙撃班

—— 施設中隊

—— 爆発装置処理隊

—— 第1ヘリコプター団

—— 第2ヘリコプター団

—— 第3ヘリコプター団

—— システム通信団

—— 中央情報隊

—— 中央特殊武器防護隊

—— 対特殊武器衛生隊

—— 国際活動教育隊

—— 中央放射能除染団

北部方面隊（北海道地方）

北海道防衛を主任務とする。

—— 北部方面総監部

—— 第2師団〔3個普通科連隊、1個戦車連隊基幹〕

—— 第3普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕

—— 第25普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕

—— 第26普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕

—— 第2戦車連隊〔5個戦車中隊基幹〕

—— 第2特科連隊

—— 第2後方支援連隊

—— 第2偵察戦闘大隊

—— 第2高射特科大隊

—— 第2施設大隊

—— 第2通信大隊

—— 第2飛行隊

—— 第5自動化旅団（ロシア連邦への初動作戦を担当）〔2個自動化連隊、1個普通科連隊基幹〕

—— 第4自動化連隊〔3個自動化中隊基幹〕

- 第6自動化連隊【3個自動化中隊基幹】
- 第27普通科連隊【3個普通科中隊基幹】
- 第5特科大隊
- 第5後方支援隊
- 第5高射特科大隊
- 第5偵察隊
- 第5施設隊
- 第5通信隊
- 第5飛行隊
- 第7機甲師団【4個戦車連隊、1個普通科連隊、1個武装偵察戦闘連隊基幹】
- 第70戦車連隊【5個戦車中隊基幹】
- 第71戦車連隊【5個戦車中隊基幹】
- 第72戦車連隊【5個戦車中隊基幹】
- 第73戦車連隊【5個戦車中隊基幹】
- 第11普通科連隊【4個普通科中隊基幹】
- 第74武装偵察戦闘連隊【4個武装偵察戦闘中隊基幹】
- 第7特科連隊

- 第7 後方支援連隊
- 第7 偵察戰鬥大隊
- 第7 高射特科大隊
- 第7 施設大隊
- 第7 通信大隊
- 第7 飛行隊
- 第1 1 機械化旅団（北方領土駐屯）〔2個機械化連隊、1個普通科連隊基幹〕
- 第1 8 機械化連隊〔3個機械化中隊基幹〕
- 第2 8 機械化連隊〔3個機械化中隊基幹〕
- 第1 0 普通科連隊〔3個機械化中隊基幹〕
- 第1 1 特科大隊
- 第1 1 後方支援隊
- 第1 1 高射特科大隊
- 第1 1 偵察隊
- 第1 1 施設隊
- 第1 1 通信隊
- 第1 1 飛行隊

— 第1騎兵師団〔2個空中機動連隊、1個空中強襲連隊、1個重装騎兵連隊基幹〕

— 第11空中機動連隊〔3個騎兵中隊基幹〕

— 第12空中機動連隊〔3個騎兵中隊基幹〕

— 第13空中強襲連隊〔3個騎兵中隊基幹〕

— 第14重装騎兵連隊〔3個戰車連隊基幹〕

— 北部即応機動師団〔4個即応機動連隊基幹〕

— 第1即応機動連隊〔3個即応機動中隊基幹〕

— 第2即応機動連隊〔3個即応機動中隊基幹〕

— 第3即応機動連隊〔3個即応機動中隊基幹〕

— 第4即応機動連隊〔3個即応機動中隊基幹〕

— 第1特科師団〔2個特科連隊、3個地对艦ミサイル連隊基幹〕

— 第1特科連隊〔3個特科大隊基幹〕

— 第2特科連隊〔3個特科大隊基幹〕

— 第1地对艦ミサイル連隊〔4個地对艦ミサイル中隊基幹〕

— 第2地对艦ミサイル連隊〔4個地对艦ミサイル中隊基幹〕

— 第3地对艦ミサイル連隊〔4個地对艦ミサイル中隊基幹〕

— 第1高射特科団〔2個高射特科群基幹〕

——第1高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕

——第2高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕

——第2施設団〔3個施設群基幹〕

——第12施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕

——第13施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕

——第14施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕

——北部方面航空隊〔2個戦闘ヘリコプター隊、1個ヘリコプター隊、1個観測気

象隊、1個航空野整備隊基幹〕

——第1対戦車ヘリコプター隊

——第11戦闘ヘリコプター隊

——北部方面ヘリコプター隊

——北部方面観測氣象隊

——北部方面航空野整備隊

東北方面隊（東北地方）

東北地方の防衛を主任務とする。

——東北方面総監部

— 第17旅団【3個普通科連隊基幹】

— 第10普通科連隊【3個普通科中隊基幹】

— 第11普通科連隊【3個普通科中隊基幹】

— 第21普通科連隊【3個普通科中隊基幹】

— 第17特科大隊

— 第17後方支援隊

— 第17高射特科大隊

— 第17偵察隊

— 第17施設隊

— 第17通信隊

— 第17飛行隊

— 第9自動化師団【2個自動化連隊、2個普通科連隊基幹】

— 第5自動化連隊【3個自動化中隊基幹】

— 第21自動化連隊【3個自動化中隊基幹】

— 第39普通科連隊【3個普通科中隊基幹】

— 第42普通科連隊【3個普通科中隊基幹】

— 第5戰車大隊【3個戰車中隊基幹】

- 第5偵察戰鬪大隊
- 第5特科大隊
- 第5後方支援隊
- 第5高射特科大隊
- 第5施設隊
- 第5通信隊
- 第5飛行隊
- 第28機械化旅団〔3個機械化連隊基幹〕
- 第32機械化連隊〔3個機械化中隊基幹〕
- 第48機械化連隊〔3個機械化中隊基幹〕
- 第23普通科連隊〔3個機械化中隊基幹〕
- 第28特科大隊
- 第28後方支援隊
- 第28高射特科大隊
- 第28偵察隊
- 第28施設隊
- 第28通信隊

— 第28飛行隊

— 第6機甲師団〔3個戦車連隊、1個普通科連隊、1個武装偵察戦闘連隊基幹〕

— 第60戦車連隊〔5個戦車中隊基幹〕

— 第61戦車連隊〔5個戦車中隊基幹〕

— 第62戦車連隊〔5個戦車中隊基幹〕

— 第5普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕

— 第21武装偵察戦闘連隊〔4個武装偵察戦闘中隊基幹〕

— 第6特科連隊

— 第6後方支援連隊

— 第6偵察戦闘大隊

— 第6高射特科大隊

— 第6施設大隊

— 第6通信大隊

— 第6飛行隊

— 第2騎兵師団〔2個空中機動連隊、1個空中強襲連隊、1個重装騎兵連隊基幹〕

— 第21空中機動連隊〔3個騎兵中隊基幹〕

— 第22空中機動連隊〔3個騎兵中隊基幹〕

- 第23空中強襲連隊【3個騎兵中隊基幹】
- 第24重裝騎兵連隊【3個戰車連隊基幹】
- 東部即応機動師団【4個即応機動連隊基幹】
 - 第5即応機動連隊【3個即応機動中隊基幹】
 - 第6即応機動連隊【3個即応機動中隊基幹】
 - 第7即応機動連隊【3個即応機動中隊基幹】
 - 第8即応機動連隊【3個即応機動中隊基幹】
- 第2特科旅団【2個特科連隊、1個地对艦ミサイル連隊基幹】
 - 第3特科連隊【3個特科大隊基幹】
 - 第4特科連隊【3個特科大隊基幹】
 - 第4地对艦ミサイル連隊【4個地对艦ミサイル中隊基幹】
- 第2高射特科団【2個高射特科群基幹】
 - 第3高射特科群【4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹】
 - 第4高射特科群【4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹】
- 第4施設団【3個施設群基幹】
 - 第22施設群【3個施設中隊、1個坑道中隊基幹】
 - 第23施設群【3個施設中隊、1個坑道中隊基幹】

— 第23施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕
 — 東北方面航空隊〔2個戦闘ヘリコプター隊、1個ヘリコプター隊、1個観測気象隊、1個航空野整備隊基幹〕

— 第2対戦車ヘリコプター隊
 — 第21戦闘ヘリコプター隊
 — 東北方面ヘリコプター隊
 — 東北方面観測気象隊
 — 東北方面航空野整備隊

東部方面隊（関東・甲信越・静岡地方）

東京を中心とした防衛を主任務とする。

— 東部方面総監部
 — 第1師団〔3個普通科連隊、1個戦車連隊基幹〕
 — 第1普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕
 — 第32普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕
 — 第34普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕
 — 第1戦車連隊〔5個戦車中隊基幹〕

- 第1 特科連隊
- 第1 後方支援連隊
- 第1 偵察戰鬪大隊
- 第1 高射特科大隊
- 第1 施設大隊
- 第1 通信大隊
- 第1 飛行隊
- 第1 2 機械化師団〔3 個機械化連隊、1 個戰車連隊基幹〕
- 第2 機械化連隊〔3 個機械化中隊基幹〕
- 第1 3 機械化連隊〔3 個機械化中隊基幹〕
- 第3 0 普通科連隊〔3 個機械化中隊基幹〕
- 第1 2 戰車連隊〔5 個戰車中隊基幹〕
- 第1 2 特科大隊
- 第1 2 後方支援隊
- 第1 2 偵察戰鬪大隊
- 第1 2 高射特科大隊
- 第1 2 施設隊

— 第12通信隊

— 第12飛行隊

— 第30自動化旅団〔2個自動化連隊、1個普通科連隊基幹〕

— 第29自動化連隊〔3個自動化中隊基幹〕

— 第36自動化連隊〔3個自動化中隊基幹〕

— 第47普通科連隊〔3個普通科中隊基幹〕

— 第30特科大隊

— 第30後方支援隊

— 第30高射特科大隊

— 第30偵察隊

— 第30施設隊

— 第30通信隊

— 第30飛行隊

— 第15機甲旅団〔1個戦車連隊、1個普通科連隊、1個武装偵察戦闘連隊基幹〕

— 第48戦車連隊〔5個戦車中隊基幹〕

— 第52普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕

— 第31武装偵察戦闘連隊〔4個武装偵察戦闘中隊基幹〕

- 第15 特科連隊
- 第15 後方支援連隊
- 第15 偵察戰鬪大隊
- 第15 高射特科大隊
- 第15 施設大隊
- 第15 通信大隊
- 第15 飛行隊
- 第3 騎兵師團〔2 個空中機動連隊、1 個空中強襲連隊、1 個重裝騎兵連隊基幹〕
 - 第3 1 空中機動連隊〔3 個騎兵中隊基幹〕
 - 第3 2 空中機動連隊〔3 個騎兵中隊基幹〕
 - 第3 3 空中強襲連隊〔3 個騎兵中隊基幹〕
 - 第3 4 重裝騎兵連隊〔3 個戰車連隊基幹〕
- 東部即応機動師團〔4 個即応機動連隊基幹〕
 - 第9 即応機動連隊〔3 個即応機動中隊基幹〕
 - 第10 即応機動連隊〔3 個即応機動中隊基幹〕
 - 第11 即応機動連隊〔3 個即応機動中隊基幹〕
 - 第12 即応機動連隊〔3 個即応機動中隊基幹〕

— 第3特科旅団〔2個特科連隊、1個地对艦ミサイル連隊基幹〕

— 第4特科連隊〔3個特科大隊基幹〕

— 第5特科連隊〔3個特科大隊基幹〕

— 第5地对艦ミサイル連隊〔4個地对艦ミサイル中隊基幹〕

— 第3高射特科団〔2個高射特科群基幹〕

— 第5高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕

— 第6高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕

— 第1施設団〔3個施設群基幹〕

— 第22施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕

— 第23施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕

— 第23施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕

— 東部方面航空隊〔2個戦闘ヘリコプター隊、1個ヘリコプター隊、1個観測気象隊、1個航空野整備隊基幹〕

— 第3対戦車ヘリコプター隊

— 第31戦闘ヘリコプター隊

— 東部方面ヘリコプター隊

— 東部方面観測気象隊

— 東部方面航空野整備隊

中部方面隊（東海・北陸・関西・中国・四国地方）

関西を中心とした防衛を主任務とする。

— 中部方面総監部

— 第3師団〔3個普通科連隊、1個戦車連隊基幹〕

— 第7普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕

— 第36普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕

— 第37普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕

— 第3戦車連隊〔5個戦車中隊基幹〕

— 第3特科連隊

— 第3後方支援連隊

— 第3偵察戦闘大隊

— 第3高射特科大隊

— 第3施設大隊

— 第3通信大隊

— 第3飛行隊

— 第10機械化旅団〔3個機械化連隊基幹〕

- 第14 機械化連隊【3個機械化中隊基幹】
- 第33 機械化連隊【3個機械化中隊基幹】
- 第35 普通科連隊【3個機械化中隊基幹】
- 第10 特科大隊
- 第10 後方支援隊
- 第10 高射特科大隊
- 第10 偵察隊
- 第10 施設隊
- 第10 通信隊
- 第10 飛行隊
- 第13 自動化師団【2個自動化連隊、2個普通科連隊基幹】
- 第8 自動化連隊【3個自動化中隊基幹】
- 第17 自動化連隊【3個自動化中隊基幹】
- 第46 普通科連隊【3個普通科中隊基幹】
- 第52 普通科連隊【3個普通科中隊基幹】
- 第13 特科大隊
- 第13 後方支援隊

- 第13偵察戰鬪大隊
- 第13高射特科大隊
- 第13施設隊
- 第13通信隊
- 第13飛行隊
- 第14機甲旅団〔1個戰車連隊、1個普通科連隊、1個武装偵察戰鬪連隊基幹〕
- 第15戰車連隊〔5個戰車中隊基幹〕
- 第50普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕
- 第51武装偵察戰鬪連隊〔4個武装偵察戰鬪中隊基幹〕
- 第14特科連隊
- 第14後方支援連隊
- 第14偵察戰鬪大隊
- 第14高射特科大隊
- 第14施設大隊
- 第14通信大隊
- 第14飛行隊
- 第4騎兵師団〔2個空中機動連隊、1個空中強襲連隊、1個重装騎兵連隊基幹〕

- 第4 1 空中機動連隊〔3個騎兵中隊基幹〕
- 第4 2 空中機動連隊〔3個騎兵中隊基幹〕
- 第4 3 空中強襲連隊〔3個騎兵中隊基幹〕
- 第4 4 重装騎兵連隊〔3個戰車連隊基幹〕
- 中部即応機動師団〔4個即応機動連隊基幹〕
 - 第9 即応機動連隊〔3個即応機動中隊基幹〕
 - 第1 0 即応機動連隊〔3個即応機動中隊基幹〕
 - 第1 1 即応機動連隊〔3個即応機動中隊基幹〕
 - 第1 2 即応機動連隊〔3個即応機動中隊基幹〕
- 第4 特科旅団〔2個特科連隊、1個地对艦ミサイル連隊基幹〕
 - 第6 特科連隊〔3個特科大隊基幹〕
 - 第7 特科連隊〔3個特科大隊基幹〕
 - 第6 地对艦ミサイル連隊〔4個地对艦ミサイル中隊基幹〕
 - 第4 高射特科団〔2個高射特科群基幹〕
 - 第7 高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕
 - 第8 高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕
- 第3 施設団〔3個施設群基幹〕

— 第31施設群【3個施設中隊、1個坑道中隊基幹】
 — 第32施設群【3個施設中隊、1個坑道中隊基幹】
 — 第33施設群【3個施設中隊、1個坑道中隊基幹】
 — 中部方面航空隊【2個戦闘ヘリコプター隊、1個ヘリコプター隊、1個観測気象隊、1個航空野整備隊基幹】

— 第3対戦車ヘリコプター隊

— 第31戦闘ヘリコプター隊

— 中部方面ヘリコプター隊

— 中部方面観測気象隊

— 中部方面航空野整備隊

西部方面隊（九州地方）

九州を中心とした防衛を主任務とする。

— 西部方面総監部

— 第4師団（朝鮮への初動作戦を担当）【3個普通科連隊、1個戦車連隊基幹】

— 第16普通科連隊【4個普通科中隊基幹】

- 第40普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕
- 第41普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕
- 第4戦車連隊〔5個戦車中隊基幹〕
- 第4特科連隊
- 第4後方支援連隊
- 第4偵察戦闘大隊
- 第4高射特科大隊
- 第4施設大隊
- 第4通信大隊
- 第4飛行隊
- 第20機械化旅団（台湾への初動支援を担当）〔3個機械化連隊基幹〕
- 第67機械化連隊〔3個機械化中隊基幹〕
- 第78機械化連隊〔3個機械化中隊基幹〕
- 第35普通科連隊〔3個機械化中隊基幹〕
- 第20特科大隊
- 第20後方支援隊
- 第20高射特科大隊

- 第20偵察隊
- 第20施設隊
- 第20通信隊
- 第20飛行隊
- 第15自動化旅団【2個自動化連隊、1個普通科連隊基幹】
 - 第51自動化連隊【3個自動化中隊基幹】
 - 第52自動化連隊【3個自動化中隊基幹】
 - 第77普通科連隊【3個普通科中隊基幹】
 - 第15特科大隊
 - 第15後方支援隊
 - 第15高射特科大隊
 - 第15偵察隊
 - 第15施設隊
 - 第15通信隊
 - 第15飛行隊
- 第8機甲師団【3個戰車連隊、1個普通科連隊、1個武装偵察戰鬪連隊基幹】
 - 第8戰車連隊【5個戰車中隊基幹】

- 第42戦車連隊【5個戦車中隊基幹】
- 第43戦車連隊【5個戦車中隊基幹】
- 第44普通科連隊【4個普通科中隊基幹】
- 第21武装偵察戦闘連隊【4個武装偵察戦闘中隊基幹】
- 第8特科連隊
- 第8後方支援連隊
- 第8高射特科大隊
- 第8施設大隊
- 第8通信大隊
- 第8飛行隊
- 第5騎兵師団【2個空中機動連隊、1個空中強襲連隊、1個重装騎兵連隊基幹】
 - 第51空中機動連隊【3個騎兵中隊基幹】
 - 第52空中機動連隊【3個騎兵中隊基幹】
 - 第53空中強襲連隊【3個騎兵中隊基幹】
 - 第54重装騎兵連隊【3個戦車連隊基幹】
- 西部即応機動師団【4個即応機動連隊基幹】
 - 第13即応機動連隊【3個即応機動中隊基幹】

- 第14 即応機動連隊〔3個即応機動中隊基幹〕
- 第15 即応機動連隊〔3個即応機動中隊基幹〕
- 第16 即応機動連隊〔3個即応機動中隊基幹〕
- 第5 特科師団〔2個特科連隊、3個地对艦ミサイル連隊基幹〕
- 第8 特科連隊〔3個特科大隊基幹〕
- 第9 特科連隊〔3個特科大隊基幹〕
- 第7 地对艦ミサイル連隊〔4個地对艦ミサイル中隊基幹〕
- 第8 地对艦ミサイル連隊〔4個地对艦ミサイル中隊基幹〕
- 第9 地对艦ミサイル連隊〔4個地对艦ミサイル中隊基幹〕
- 第5 高射特科団〔2個高射特科群基幹〕
- 第9 高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕
- 第10 高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕
- 第4 施設団〔3個施設群基幹〕
- 第4 1 施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕
- 第4 2 施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕
- 第4 3 施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕
- 西部方面航空隊〔2個戦闘ヘリコプター隊、1個ヘリコプター隊、1個観測気

象隊、1個航空野整備隊基幹】

——第4対戦車ヘリコプター隊

——第41戦闘ヘリコプター隊

——西部方面ヘリコプター隊

——西部方面観測気象隊

——西部方面航空野整備隊

南部方面隊（中華地方）

中華地方（日本が日中戦争で得た河北・北京・天津・山東・安徽・江蘇・上海・江西・浙江・福建・広東の一部・香港・マカオ）を中心とした防衛を主任務とする。また陸上自衛隊で最も野戦練度が高い。防衛予定地が広大なため、北部管轄区・中部管轄区・南部管轄区に分かれている。

——南部方面総監部

——南部方面総監部付隊

——第6騎兵師団【2個空中機動連隊、1個空中強襲連隊、1個重装騎兵連隊基

幹】

——第51空中機動連隊【3個騎兵中隊基幹】

——第52空中機動連隊【3個騎兵中隊基幹】

— 第53空中強襲連隊〔3個騎兵中隊基幹〕

— 第54重裝騎兵連隊〔3個戰車連隊基幹〕

— 南部即応機動師団〔6個即応機動連隊基幹〕

— 北部管轄区担当

— 第17即応機動連隊〔3個即応機動中隊基幹〕

— 第18即応機動連隊〔3個即応機動中隊基幹〕

— 中部管轄区担当

— 第19即応機動連隊〔3個即応機動中隊基幹〕

— 第20即応機動連隊〔3個即応機動中隊基幹〕

— 南部管轄区担当

— 第21即応機動連隊〔3個即応機動中隊基幹〕

— 第22即応機動連隊〔3個即応機動中隊基幹〕

— 第6特科師団〔3個特科連隊、3個地对艦ミサイル連隊基幹〕

— 北部管轄区担当

— 第10特科連隊〔3個特科大隊基幹〕

— 第10地对艦ミサイル連隊〔4個地对艦ミサイル中隊基幹〕

— 中部管轄区担当

——第11特科連隊〔3個特科大隊基幹〕

——第11地对艦ミサイル連隊〔4個地对艦ミサイル中隊基幹〕

——南部管轄区担当

——第12特科連隊〔3個特科大隊基幹〕

——第12地对艦ミサイル連隊〔4個地对艦ミサイル中隊基幹〕

——第6高射特科連隊〔3個高射特科群基幹〕

——第11高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕

——第12高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕

——第13高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕

——第6施設団〔3個施設群基幹〕

——第41施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕

——第42施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕

——第43施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕

——南部方面航空隊〔6個戦闘ヘリコプター隊、1個ヘリコプター隊、1個観測

氣象隊、1個航空野整備隊基幹〕

——第5対戦車ヘリコプター隊

——第51戦闘ヘリコプター隊

— 第6対戦車ヘリコプター隊

— 第61戦闘ヘリコプター隊

— 第7対戦車ヘリコプター隊

— 第71戦闘ヘリコプター隊

— 南部方面ヘリコプター隊

— 南部方面観測気象隊

— 南部方面航空野整備隊

— 北部管轄区

— 北部管轄区総監部

— 第21師団〔3個普通科連隊、1個戦車連隊基幹〕

— 第63普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕

— 第64普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕

— 第65普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕

— 第21戦車連隊〔5個戦車中隊基幹〕

— 第21特科連隊

— 第21後方支援連隊

— 第21偵察戦闘大隊

— 第21高射特科大隊

— 第21施設大隊

— 第21通信大隊

— 第21飛行隊

— 第22機械化旅団【3個機械化連隊基幹】

— 第66機械化連隊【3個機械化中隊基幹】

— 第67機械化連隊【3個機械化中隊基幹】

— 第68普通科連隊【3個機械化中隊基幹】

— 第22特科大隊

— 第22後方支援隊

— 第22高射特科大隊

— 第22偵察隊

— 第22施設隊

— 第22通信隊

— 第22飛行隊

— 第26自動化旅団【2個自動化連隊、1個普通科連隊基幹】

— 第69自動化連隊【3個自動化中隊基幹】

【幹】

- 第70 自動化連隊【3 個自動化中隊基幹】
- 第71 普通科連隊【3 個普通科中隊基幹】
- 第26 特科大隊
- 第26 後方支援隊
- 第26 高射特科大隊
- 第26 偵察隊
- 第26 施設隊
- 第26 通信隊
- 第26 飛行隊
- 第32 機甲師団【2 個戰車連隊、1 個普通科連隊、1 個武装偵察戰鬪連隊基幹】
- 第72 戰車連隊【5 個戰車中隊基幹】
- 第73 戰車連隊【5 個戰車中隊基幹】
- 第74 普通科連隊【5 個普通科中隊基幹】
- 第75 武装偵察戰鬪連隊【4 個武装偵察戰鬪中隊基幹】
- 第32 特科連隊
- 第32 後方支援連隊

— 第32 高射特科大隊

— 第32 施設大隊

— 第32 通信大隊

— 第32 飛行隊

— 中部管轄区

— 第23 師団【3個普通科連隊、1個戦車連隊基幹】

— 第76 普通科連隊【4個普通科中隊基幹】

— 第78 普通科連隊【4個普通科中隊基幹】

— 第79 普通科連隊【4個普通科中隊基幹】

— 第23 戦車連隊【5個戦車中隊基幹】

— 第23 特科連隊

— 第23 後方支援連隊

— 第23 偵察戦闘大隊

— 第23 高射特科大隊

— 第23 施設大隊

— 第23 通信大隊

- 第23飛行隊
- 第26機械化旅団【3個機械化連隊基幹】
- 第80機械化連隊【3個機械化中隊基幹】
- 第81機械化連隊【3個機械化中隊基幹】
- 第82普通科連隊【3個機械化中隊基幹】
- 第22特科大隊
- 第22後方支援隊
- 第22高射特科大隊
- 第22偵察隊
- 第22施設隊
- 第22通信隊
- 第22飛行隊
- 第27自動化旅団【2個自動化連隊、1個普通科連隊基幹】
- 第83自動化連隊【3個自動化中隊基幹】
- 第84自動化連隊【3個自動化中隊基幹】
- 第85普通科連隊【3個普通科中隊基幹】
- 第27特科大隊

— 第27 後方支援隊

— 第27 高射特科大隊

— 第27 偵察隊

— 第27 施設隊

— 第27 通信隊

— 第27 飛行隊

— 第9 機甲師団〔2個戦車連隊、1個普通科連隊、1個武装偵察戦闘連隊基幹〕

— 第86 戦車連隊〔5個戦車中隊基幹〕

— 第87 戦車連隊〔5個戦車中隊基幹〕

— 第88 普通科連隊〔5個普通科中隊基幹〕

— 第89 武装偵察戦闘連隊〔4個武装偵察戦闘中隊基幹〕

— 第9 特科連隊

— 第9 後方支援連隊

— 第9 高射特科大隊

— 第9 施設大隊

— 第9 通信大隊

— 第9 飛行隊

— 南部管轄区

— 南部管轄区総監部

— 第25師団【3個普通科連隊、1個戦車連隊基幹】

— 第90普通科連隊【4個普通科中隊基幹】

— 第91普通科連隊【4個普通科中隊基幹】

— 第92普通科連隊【4個普通科中隊基幹】

— 第93戦車連隊【5個戦車中隊基幹】

— 第4特科連隊

— 第4後方支援連隊

— 第4偵察戦闘大隊

— 第4高射特科大隊

— 第4施設大隊

— 第4通信大隊

— 第4飛行隊

— 第24機械化旅団【3個機械化連隊基幹】

— 第94機械化連隊【3個機械化中隊基幹】

— 第95機械化連隊【3個機械化中隊基幹】

— 第96普通科連隊【3個機械化中隊基幹】

— 第22特科大隊

— 第22後方支援隊

— 第22高射特科大隊

— 第22偵察隊

— 第22施設隊

— 第22通信隊

— 第22飛行隊

— 第29自動化旅団【2個自動化連隊、1個普通科連隊基幹】

— 第97自動化連隊【3個自動化中隊基幹】

— 第98自動化連隊【3個自動化中隊基幹】

— 第99普通科連隊【3個普通科中隊基幹】

— 第29特科大隊

— 第29後方支援隊

— 第29高射特科大隊

— 第29偵察隊

— 第29施設隊

【幹】

- 第29 通信隊
- 第29 飛行隊
- 第10 機甲師団〔2 個戰車連隊、1 個普通科連隊、1 個武装偵察戰闘連隊基
- 第59 戰車連隊〔5 個戰車中隊基幹〕
- 第60 戰車連隊〔5 個戰車中隊基幹〕
- 第61 普通科連隊〔5 個普通科中隊基幹〕
- 第62 武装偵察戰闘連隊〔4 個武装偵察戰闘中隊基幹〕
- 第10 特科連隊
- 第10 後方支援連隊
- 第10 高射特科大隊
- 第10 施設大隊
- 第10 通信大隊
- 第10 飛行隊

地域別方面軍

北米方面軍／在米陸上自衛隊（第1方面軍）

— 北米方面軍総監部

— 第121師団【3個普通科連隊、1個戦車連隊基幹】

— 第100普通科連隊【4個普通科中隊基幹】

— 第101普通科連隊【4個普通科中隊基幹】

— 第102普通科連隊【4個普通科中隊基幹】

— 第103戦車連隊【5個戦車中隊基幹】

— 第121特科連隊

— 第121後方支援連隊

— 第121偵察戦闘大隊

— 第121高射特科大隊

— 第121施設大隊

— 第121通信大隊

— 第121飛行隊

— 第110自動化旅団【2個自動化連隊、1個普通科連隊基幹】

— 第104自動化連隊【3個自動化中隊基幹】

— 第105自動化連隊【3個自動化中隊基幹】

— 第106普通科連隊【3個普通科中隊基幹】

- 第110特科大隊
- 第110後方支援隊
- 第110高射特科大隊
- 第110偵察隊
- 第110施設隊
- 第110通信隊
- 第110飛行隊
- 第11特科団〔2個特科連隊基幹〕
 - 第11特科連隊〔3個特科大隊基幹〕
 - 第12特科連隊〔3個特科大隊基幹〕
- 第11高射特科団〔2個高射特科群基幹〕
 - 第11高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕
 - 第12高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕
- 第10施設団〔3個施設群基幹〕
 - 第10施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕
 - 第11施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕
 - 第12施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕

— 北米方面軍航空隊〔2個戦闘ヘリコプター隊、1個ヘリコプター隊、1個観測
気象隊、1個航空野整備隊基幹〕

— 第100対戦車ヘリコプター隊

— 第101戦闘ヘリコプター隊

— 北米方面ヘリコプター隊

— 北米方面観測気象隊

— 北米方面航空野整備隊

— 欧州方面軍／在欧陸上自衛隊（第2方面軍）

— 第211師団〔3個普通科連隊、1個戦車連隊基幹〕

— 第107普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕

— 第108普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕

— 第109普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕

— 第110戦車連隊〔5個戦車中隊基幹〕

— 第211特科連隊

— 第211後方支援連隊

— 第211偵察戦闘大隊

— 第211高射特科大隊

- 第211 施設大隊
- 第211 通信大隊
- 第211 飛行隊
- 第236 機械化旅団【3個機械化連隊基幹】
 - 第111 機械化連隊【3個機械化中隊基幹】
 - 第112 機械化連隊【3個機械化中隊基幹】
 - 第113 普通科連隊【3個機械化中隊基幹】
- 第236 特科大隊
- 第236 後方支援隊
- 第236 高射特科大隊
- 第236 偵察隊
- 第236 施設隊
- 第236 通信隊
- 第236 飛行隊
- アフリカ方面隊
 - アフリカ方面隊總監部
 - 第267 自動化師団【2個自動化連隊、1個普通科連隊基幹】

- 第114 自動化連隊【3個自動化中隊基幹】
- 第115 自動化連隊【3個自動化中隊基幹】
- 第116 普通科連隊【3個普通科中隊基幹】
- 第267 特科大隊
- 第267 後方支援隊
- 第267 高射特科大隊
- 第267 偵察隊
- 第267 施設隊
- 第267 通信隊
- 第267 飛行隊
- 第22 特科団【2個特科連隊基幹】
 - 第22 特科連隊【3個特科大隊基幹】
 - 第23 特科連隊【3個特科大隊基幹】
- 第22 高射特科団【2個高射特科群基幹】
 - 第22 高射特科群【4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹】
 - 第23 高射特科群【4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹】
- 第20 施設団【3個施設群基幹】

— 第20施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕
 — 第21施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕
 — 第22施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕
 — 欧州方面軍航空隊〔2個戦闘ヘリコプター隊、1個ヘリコプター隊、1個観測
 気象隊、1個航空野整備隊基幹〕

— 第200対戦車ヘリコプター隊

— 第201戦闘ヘリコプター隊

— 欧州方面ヘリコプター隊

— 欧州方面観測気象隊

— 欧州方面航空野整備隊

中央方面軍（第3方面軍）

— 第356師団〔3個普通科連隊、1個戦車連隊基幹〕

— 第117普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕

— 第118普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕

— 第119普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕

— 第120戦車連隊〔5個戦車中隊基幹〕

— 第3 5 6 特科連隊

— 第3 5 6 後方支援連隊

— 第3 5 6 偵察戦闘大隊

— 第3 5 6 高射特科大隊

— 第3 5 6 施設大隊

— 第3 5 6 通信大隊

— 第3 5 6 飛行隊

— 第3 6 9 自動化旅団【2個自動化連隊、1個普通科連隊基幹】

— 第1 2 1 自動化連隊【3個自動化中隊基幹】

— 第1 2 2 自動化連隊【3個自動化中隊基幹】

— 第1 2 3 普通科連隊【3個普通科中隊基幹】

— 第3 6 9 特科大隊

— 第3 6 9 後方支援隊

— 第3 6 9 高射特科大隊

— 第3 6 9 偵察隊

— 第3 6 9 施設隊

— 第3 6 9 通信隊

【幹】

- 第369飛行隊
- 第327機甲師團【2個戰車連隊、1個普通科連隊、1個武装偵察戰鬥連隊基幹】
- 第124戰車連隊【5個戰車中隊基幹】
- 第125戰車連隊【5個戰車中隊基幹】
- 第126普通科連隊【5個普通科中隊基幹】
- 第127武装偵察戰鬥連隊【4個武装偵察戰鬥中隊基幹】
- 第327特科連隊
- 第327後方支援連隊
- 第327高射特科大隊
- 第327施設大隊
- 第327通信大隊
- 第327飛行隊
- 第33特科團【2個特科連隊基幹】
- 第33特科連隊【3個特科大隊基幹】
- 第34特科連隊【3個特科大隊基幹】
- 第33高射特科團【2個高射特科群基幹】

——第33 高射特科群〔4 個高射中隊、1 個高射搬送通信中隊基幹〕
 ——第34 高射特科群〔4 個高射中隊、1 個高射搬送通信中隊基幹〕
 ——第30 施設団〔3 個施設群基幹〕

——第30 施設群〔3 個施設中隊、1 個坑道中隊基幹〕
 ——第31 施設群〔3 個施設中隊、1 個坑道中隊基幹〕
 ——第32 施設群〔3 個施設中隊、1 個坑道中隊基幹〕
 ——中央方面軍航空隊〔2 個戦闘ヘリコプター隊、1 個ヘリコプター隊、1 個観測
 氣象隊、1 個航空野整備隊基幹〕

——第300 対戦車ヘリコプター隊
 ——第301 戦闘ヘリコプター隊
 ——中央方面ヘリコプター隊
 ——中央方面観測氣象隊
 ——中央方面航空野整備隊

南方方面軍（第4方面軍）

——第489 師団〔3 個普通科連隊、1 個戦車連隊基幹〕
 ——第128 普通科連隊〔4 個普通科中隊基幹〕

- 第129 普通科連隊【4 個普通科中隊基幹】
- 第130 普通科連隊【4 個普通科中隊基幹】
- 第131 戰車連隊【5 個戰車中隊基幹】
- 第489 特科連隊
- 第489 後方支援連隊
- 第489 偵察戰鬪大隊
- 第489 高射特科大隊
- 第489 施設大隊
- 第489 通信大隊
- 第489 飛行隊
- 第461 機械化旅団【3 個機械化連隊基幹】
- 第132 機械化連隊【3 個機械化中隊基幹】
- 第133 機械化連隊【3 個機械化中隊基幹】
- 第134 普通科連隊【3 個機械化中隊基幹】
- 第461 特科大隊
- 第461 後方支援隊
- 第461 高射特科大隊

— 第461偵察隊

— 第461施設隊

— 第461通信隊

— 第461飛行隊

— 第44特科団〔2個特科連隊基幹〕

— 第44特科連隊〔3個特科大隊基幹〕

— 第45特科連隊〔3個特科大隊基幹〕

— 第44高射特科団〔2個高射特科群基幹〕

— 第45高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕

— 第46高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕

— 第40施設団〔3個施設群基幹〕

— 第40施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕

— 第41施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕

— 第42施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕

— 南方方面軍航空隊〔2個戦闘ヘリコプター隊、1個ヘリコプター隊、1個観測

気象隊、1個航空野整備隊基幹〕

— 第400対戦車ヘリコプター隊

- 第401戦闘ヘリコプター隊
 - 南方方面ヘリコプター隊
 - 南方方面観測気象隊
 - 南方方面航空野整備隊
- アジア・太平洋方面軍／在大陸上自衛隊（第5方面軍）（台湾へ駐留）
- 第529旅団【2個普通科連隊、1個戦車連隊基幹】
 - 第135普通科連隊【4個普通科中隊基幹】
 - 第136普通科連隊【4個普通科中隊基幹】
 - 第137戦車連隊【5個戦車中隊基幹】
 - 第529特科連隊
 - 第529後方支援連隊
 - 第529偵察戦闘大隊
 - 第529高射特科大隊
 - 第529施設大隊
 - 第529通信大隊
 - 第529飛行隊
- 第55特科団【2個特科連隊基幹】

- 第55特科連隊〔3個特科大隊基幹〕
- 第56特科連隊〔3個特科大隊基幹〕
- 第55高射特科団〔2個高射特科群基幹〕
 - 第55高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕
 - 第56高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕
- 第50施設団〔3個施設群基幹〕
 - 第50施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕
 - 第51施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕
 - 第52施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕
- アジア・太平洋方面軍航空隊〔2個戦闘ヘリコプター隊、1個ヘリコプター隊、1個観測気象隊、1個航空野整備隊基幹〕
 - 第500対戦車ヘリコプター隊
 - 第501戦闘ヘリコプター隊
 - アジア・太平洋方面ヘリコプター隊
 - アジア・太平洋方面観測気象隊
 - アジア・太平洋方面航空野整備隊

第1空挺軍

所属政体：日本国

所属組織：陸上自衛隊

部隊編成単位：軍

兵種／任務／特性：空挺

所在地：千葉県船橋市

編成地：習志野

標語：精鋭無比

上級単位：陸上総隊

隷下運用部隊：第1空挺団・第3空挺団

陸上総隊隷下の空挺軍。主に東日本を担当する。

ロシア連邦への軍事作戦の際には統合任務軍インド・太平洋軍と共に作戦行動を行う。

第2空挺軍

所属政体：日本国

所属組織：陸上自衛隊

部隊編成単位：軍

兵種／任務／特性：空挺

所在地：福岡県福岡市

編成地：福岡

標語：精鋭無敵

隷下運用部隊：第2空挺団・第4空挺団

陸上総隊隷下の空挺軍。主に西日本・中華を担当する。

朝鮮半島及び中国への軍事作戦の際には統合任務軍インド・太平洋軍と共に作戦行動を行う。

設定集 陸上自衛隊・海兵隊の車両・航空機

車両

戦車

○10式戦車

分類 主力戦車 (MBT)

全長 9.42 m

全幅 3.24 m

全高 2.30 m

重量 約44 t

速度 70 km/h

主砲 10式戦車砲 (44口径120mm滑腔砲) [A・B・C型]

10式戦車砲改 (55口径120mm滑腔砲) [D・F型]

副武装 12.7mm重機関銃M2 (砲塔上面)

90式車載7.62mm機関銃 (主砲同軸)

10式RWS (90式機関銃+ 96式40mm自動てき弾銃)

10式アクティブ防護システム（砲塔上面）

装甲 複合装甲（正面要部）

均質圧延鋼装甲

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

10式市街地戦闘キット（TUSK）

装填方式 自動もしくは半自動

乗員・3〜4名

運用数 日本国陸上自衛隊 A型 1, 200両

D型 240両

F型 97両

日本国海兵隊 B型 300両

D型 56両

2010年に正式採用された、日本国が開発した第4・5世代主力戦車。海外にも輸出されていた。通常型のA型、軽量化した海兵隊専用のB型、海外輸出用に所々改良・再設計したC型、主砲を55口径にしたD型、D型の能力向上型で最新のF型がある。史

実とは違い、主砲の装填装置に特殊な機構を搭載し、手動装填・半自動装填・自動装填に切り替えることができる。場合によっては装填手による装填の方が自動装填の速度を上回ること、そして戦車の整備に必要な人員を確保するためにこの様になった。

A型（基本型）

基本形態。陸上自衛隊の主力戦車。

B型

海兵隊仕様。所々が軽量化されているが、防御力・機動力共にA型と変更点は無い。

C型（陸自・海兵隊不採用）

海外輸出用。先端技術のブラックボックス化や外国人用に車内の容積を広くした型。

D型

東亜戦争の教訓から主砲の砲身長を44口径から55口径に変更した物。

E型

対ゲリラコマンドの対戦車火器為に防御力上昇などの性能を上げた物。

○90式戦車

分類 主力戦車（MBT）

全長・9・80m

全幅・3.40 m

全高・2.30 m

重量・52.2 t (B型は49.7 t)

速度・70 km/h

主砲 90式戦車砲 (44口径120 m滑腔砲)

90式戦車砲改 (55口径120 m滑腔砲)

副武装・90式車載7.62 m機関銃 (主砲同軸)

12.7 m重機関銃M2 (砲塔上面)

89式RWS (CROWSのライセンス生産、砲塔上面)

89式アクティブ防護システム (砲塔上面)

装甲 複合装甲 (砲塔及び車体正面・側面)

チヨバム・アーマーJP型 (砲塔・車体側面)

均質圧延鋼装甲

増加装甲 (装着時は各部)

爆発反応装甲 (司令部の判断による)

89式市街地戦闘キット (TUSK)

装填方式 自動

乗員・3名

運用数 日本国陸上自衛隊 A型 760輛

C型 210輛

日本国海兵隊 B型 190輛

1990年に正式採用された、日本国が開発した第3世代主力戦車。海外にも輸出され、ベストセラーとなった。通常型のA型、海兵隊用の軽量型のB型、砲塔を改良し、55口径に改修したC型がある。史実と異なる、C4Iシステムも装備。

A型

基本形態。陸上自衛隊のサブ主力戦車。

B型

海兵隊様に色々と軽量化を施した形態。

C型

主砲を55口径に換装した形態。

○89式戦車

分類 主力戦車(MBT)

全長・9.83 m

全幅・3.66 m

全高・2.37 m

重量・53.7 t

速度・67 km/h

主砲 44口径120 mm滑腔砲Rh120

副武装 12.7 mm重機関銃M2 (砲塔上面)

74式車載7.62 mm機関銃 (主砲同軸)

89式RWS (CROWS)のライセンス生産、砲塔上面)

89式アクティブ防護システム (砲塔上面)

装甲 複合装甲 (砲塔前面および車体前面)

均質圧延鋼板 (車体)

増加装甲 (装着時は各部)

爆発反応装甲 (司令部の判断による)

89式市街地戦闘キット (TUSK)

装填方式 手動

乗員・4名

運用数 日本国陸上自衛隊 A型 280輛

B型 240輛

C型 130輛

E型 360輛

G型 120輛

日本国海兵隊

A型 450輛

D型 120輛

1989年に正式採用された、アメリカが開発したM1エイブラムスを改良し、ライセンス生産した第3世代主力戦車1989年にM1A1を原型にしたA型が生産された。M1A1相当のA型、M1A1AIMV1相当のB型、M1A1AIMV2/SA相当のC型、M1A1FEP相当の海兵隊型のA型の改装型のD型、M1A2相当のE型、M1A2 SEPV2相当のF型、M1A2C/SEPV3相当のG型がある。

○86式戦車

分類 主力戦車(MBT)

全長 9.63m

全幅 3.56 m

全高 2.27 m

重量 53.7 t

速度 70 km/h

主砲 86式戦車砲（44口径120 m滑腔砲）

副武装 12.7 mm重機関銃M2（砲塔上面）

74式車載7.62 mm機関銃（主砲同軸）

89式RWS（CROWS）のライセンス生産、砲塔上面）

89式アクティブ防護システム（砲塔上面）

装甲 複合装甲（砲塔前面および車体前面）

均質圧延鋼板（車体）

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

89式市街地戦闘キット（TUSK）

装填方式 自動

乗員・3名

運用数 日本国陸上自衛隊 241両

74式開発後に第3世代主力戦車が出てきた為に急遽設計された戦車。外見は『征途』の86式。

○74式戦車

分類 主力戦車 (MBT)

全長 9.41 m

全幅 3.18 m

全高 2.25 m

重量 38.42 t

速度 53 km/h

主砲 51口径105 mmライフル砲 L7A1 (A・B・C・D・E・F型)

44口径120 mmライフル砲 (G型)

44口径120 mm滑腔砲 (H型)

副武装 74式車載7.62 mm機関銃 (主砲同軸、H型以外)

90式車載7.62 mm機関銃 (H型のみ)

12.7 mm重機関銃 M2 (砲塔上面)

装甲 均質圧延鋼装甲

複合装甲（砲塔・車体全面及び砲塔側面、G・H型のみ）

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（連隊長の判断による）

装填方式 手動（A↘G型）

自動（H型）

乗員・3〜4名

運用数 日本国陸上自衛隊 G型 100輛

H型 80輛

日本国海兵隊 E型 150輛

G型 250輛

H型 160輛

1974年に正式採用された、日本国の第2・5世代主力戦車（G・H型は第3世代主力戦車）。海外にも輸出。色々な型式がある。

A型（初期生産型）

初期に生産された型式。7割はB型へ改修されたが、残る3割は1989年退役。

74式戦車A型照準用暗視装置付^W_N^V_D^A

アクティブ型赤外線暗視装置を砲塔に取り付けた型式。

74式戦車A型ドーザー^W_D付

車体前方に障害物除去用のドーザー（排土板）が取り付けられた型式。

74式戦車照準用^W_N暗視装置^A_Dドーザー^W_D付

前述の2つの装備を取り付けた型式。

B型（退役）

APDS及び75式HEPの2弾種に加え、APFSDSを運用できるようFCSや弾薬架を改良した型式。変更までに配備された400輦以上の初期型全てがB型に改良された。殆どがD型へ改良。1991年退役。

C型（陸自・海兵隊不採用）

B型をモデルに海外輸出用に輸出国の言語に車内表記を変え、外国人用に車内レイアウトを変えて大きくした型式。自衛隊には配備されなかった。

D型（退役）

砲身にサーマルスリーブを装着した型式。B型以前の物は全てD型に改良された。1991年退役。

E型（陸自は退役、海兵隊では現役）

HEPに代わり91式HEAT-MPを射撃できるようにFCSを改良した型式。

陸自では2003年退役も、海兵隊では現役。

F型（退役）

92式地雷原処理ローラを装備できるようにした型式。数量は10輛以下。1995年退役。

G型（74式戦車改）

74式戦車改修型。74式が正式採用された後に、各国が第3世代主力戦車を生み出した為、1979年に製作が行われた。1980年には試作型として1輛が制作され、正式に74式戦車G型として正式採用されて生産された。主な改修点は、主砲を105mm砲から120mm砲へ改装、複合装甲の採用、目標の自動追尾機能を兼ね備えたパッシブ式暗視装置や発煙弾発射機と連動するレーザー検知装置、強力なYAGレーザーを使用したレーザー測遠機などを装備したもので、前述の他、90式戦車のものに類似したサイドスカートが標準装備されている。

H型（74式戦車改二）

74式戦車G型を改修した型式。1984年に次期主力戦車（後の90式戦車）の砲塔案（後に16式で採用）を乗せた試作型が改修され、性能試験で性能が良好であった為、86式戦車と共に採用された。G型からの改修点はライフル砲から滑腔砲へ改装、砲塔の改修、C4I装置の設置など。

○16式軽戦車

分類 軽戦車

全長・8・45 m

全幅・2・98 m

全高・2・87 m

重量・約26 t

乗員数・4名

主武装・52口径105 mmライフル砲

副武装・12・7 mm重機関銃M2

90式車載7・62 mm機関銃

10式RWS（90式機関銃＋96式40 mm自動てき弾銃）

10式アクティブ防護システム（砲塔上面）

装甲 均質圧延鋼装甲

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

10式市街地戦闘キット（TUSK）

速度・80km/h以上

2016年に採用された軽戦車。16式機動戦闘車（キドセン）ファミリーの一員。主に空挺部隊に使用される。

装甲車（AC）

装軌装甲車

○10式装甲戦闘車

分類 装甲戦闘車（FV、AFV、歩兵戦闘車、IFV）

全長・6.8m

全幅・3.2m

全高・2.5m

重量・28.6t

乗員数・3名＋兵員10名

主武装 70口径40mm機関砲(ボフォース 40mm L/70機関砲)

副武装 中距離多目的誘導弾発射装置×2

90式車載7.62mm機関銃(主砲同軸)

10式RWS(90式機関銃＋ 96式40mm自動てき弾銃)

10式アクティブ防護システム(砲塔上面)

装甲 均質圧延鋼装甲

増加装甲(装着時は各部)

爆発反応装甲(司令部の判断による)

89式市街地戦闘キット(TUSK)

速度・70km/h

2010年に正式採用された日本国の歩兵戦闘車。89式装甲戦闘車の後継。外見は『89式装甲戦闘車 後継』と調べてで来てくるこいつ↓車体側部に大きなエアバックがあり、上陸作戦にも使用される。

○89式装甲戦闘車

分類 装甲戦闘車（FV、AFV、歩兵戦闘車、IFV）

全長・6・8 m

全幅・3・2 m

全高・2・5 m

重量・26・5 t

乗員数・3名＋兵員7名

主武装・90口径35mm機関砲KDE

副武装・79式対舟艇対戦車誘導弾発射装置×2

74式車載7・62mm機関銃

89式RWS（CROWSのライセンス生産、砲塔上面）

89式アクティブ防護システム（砲塔上面）

装甲 均質圧延鋼装甲

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

89式市街地戦闘キット（TUSK）

速度・70 km/h

1989年に正式採用された歩兵戦闘車。基本的に現実と相違点無し。

○73式装甲車

分類 装甲兵員輸送車 (APC)

全長・5.80 m

全幅・2.90 m

全高・2.21 m

重量・13.3 t

速度 60 km/h

6 km/h (浮航)

乗員数・4名+兵員8名収容

主武装 12.7 mm重機関銃M2

副武装 74式車載7.62 mm機関銃

7.62 mm機関銃M1919 (生産当初)

装甲 アルミ合金

増加装甲 (装着時は各部)

爆発反応装甲 (司令部の判断による)

1973年正式採用の装甲車。現実と変更点なし。

○10式装甲車

分類 装甲兵員輸送車（APC）

全長・6.8 m

全幅・3.2 m

全高・2.5 m

重量・26.5 t

速度 70 km/h

乗員数 4名＋兵員10名

主武装 12.7 mm重機関銃M2

副武装 90式車載7.62 mm機関銃

10式RWS（90式機関銃＋96式40 mm自動てき弾銃）

10式アクティブ防護システム（砲塔上面）

装甲 均質圧延鋼装甲

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

10式市街地戦闘キット（TUSK）

2010年に正式採用された装甲車。外見は

○AAV-7（74式水陸両用装甲兵員輸送車）

分類 水陸両用装甲兵員輸送車（AAV）

全長・8.161 m

全幅・3.269 m

全高・3.315 m

重量・25.652 t

乗員数・3名＋兵員25名収容

または貨物4.5 t

装甲・44.45―7.4 mm

主武装 96式40 mm自動てき弾銃

副武装 12.7 mm重機関銃M2×1

速度 72.42 km/h（地上整地時）

13 km/h (水上航行時)

1974年に配備された水陸両用車。海兵隊に配備中。

装輪装甲車

○16式機動戦闘車

分類 機動戦闘車 (MCV)

全長・8.45 m

全幅・2.98 m

全高・2.87 m

重量・約26 t

乗員数・4名

主武装・52口径105 mmライフル砲

副武装・12.7 mm重機関銃M2

90式車載7.62 mm機関銃

10式RWS (90式機関銃 + 96式40 mm自動てき弾銃)

10式アクティブ防護システム (砲塔上面)

装甲 均質圧延鋼装甲

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

10式市街地戦闘キット（TUSK）

速度・100km/h以上

2016年に正式採用された装輪戦車。

○89式機動戦闘車

分類 機動戦闘車（MCV）

全長・6.84 m

全幅・2.48 m

全高・1.85 m

重量・14.5 t

乗員数 4名

装甲・均質圧延鋼板（車体）

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

89式市街地戦闘キット（TUSK）

主武装 52口径105mmライフル砲

副武装 12・7mm重機関銃M2（砲塔上面）

74式車載7・62mm機関銃（主砲同軸）

89式RWS（CROWS）のライセンス生産、砲塔上面）

89式アクティブ防護システム（砲塔上面）

速度・100km/h

1989年に正式採用された装輪戦車。外見は96式装輪装甲車に南アフリカの
ルーイカットの砲塔を乗せたもの。

○87式偵察警戒車

分類 偵察戦闘車（RCV）

全長・5.99m

全幅・2.48m

全高・2.80 m

重量・15.0 t

乗員数・5名

主武装・25 m機関砲KBA—B02

副武装・74式車載7.62 m機関銃

79式対舟艇対戦車誘導弾発射機×2 (B型のみ)

速度・100 km/h

1987年に正式採用された偵察車。A型(ノーマル)とB型があり、B型はA型に7^重9式対舟艇対戦車誘導弾^Mを付けた^Aの^T。

○96式偵察警戒車

分類 偵察戦闘車(RCV)

全長・8.555 m

全幅・3.05 m

全高・2・735 m

重量・26・0 t

乗員数・4名

主武装 45口径120 mm滑腔砲

副武装 12・7 mm重機関銃M2（砲塔上面）

74式車載7・62 mm機関銃（主砲同軸）

89式RWS（CROWSのライセンス生産、砲塔上面）

89式アクティブ防護システム（砲塔上面）

装甲 均質圧延鋼板（車体）

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

89式市街地戦闘キット（TUSK）

速度・108 km/h

1996年に正式採用された、イタリアのチェンタウロ戦闘偵察車をライセンス生産したもの。87式偵察警戒車の補佐。

○87式装甲戦闘車（エレファントFV）

分類 装甲戦闘車（IFV、FV）

全長・6・39 m

全幅・2・50 m

全高・2・69 m

重量・12・80 t

乗員数・3名＋兵員6名

主武装 M242 25 mm機関砲

副武装 M240 7・62 mm機関銃（同軸・車載）

速度 100 km/h（陸上）

12 km/h（水上）

1987年に海兵隊で正式採用された装甲戦闘車。アメリカが開発したLAV-25をライセンス生産したもの。この型を基本として以下の『87式装甲戦闘車ファミリー』（通称、エレファントシリーズ）が開発された。

○87式装甲戦闘車 A1型（エレファントFV A1）

分類 装甲戦闘車 (IFV、FV)

全長・6.39 m

全幅・2.50 m

全高・2.69 m

重量・12.80 t

乗員数・3名+兵員6名

主武装 M242 25 mm機関砲

副武装 M240 7.62 mm機関銃 (同軸・車載)

速度 100 km/h (陸上)

12 km/h (水上)

第1次改修型。SLEP改修 (延命改修) を受けた型。1990年代後半から改修が行われている。LAV-25A1相当の車両。

○87式装甲戦闘車 A2型 (エレファントFV A2)

分類 装甲戦闘車 (IFV、FV)

全長・6.39 m

全幅・2・50 m

全高・2・69 m

重量・12・80 t

乗員数・3名+兵員6名

主武装 M242 25 mm機関砲

副武装 M240 7・62 mm機関銃（同軸・車載）

速度 100 km/h（陸上）

12 km/h（水上）

第2次改修型。増加装甲の追加、熱線暗視装置の搭載、IED起爆妨害装置の搭載などの改修が行われた。LAV-25A2相当の車両。

○87式対戦車誘導弾発射車（エレファントATGM）

分類 対戦車誘導ミサイル発射車

全長・6・39 m

全幅・2・50 m

全高・2・69 m

重量・12・80 t

乗員数・3名＋兵員6名

主武装 79式対舟艇対戦車誘導弾連装発射機×2基

副武装 90式車載7・62mm機関銃（同軸・車載）

速度 100 km/h（陸上）

12 km/h（水上）

1987年に海兵隊に正式採用された対戦車誘導ミサイル発射車。87式装甲戦闘車ファミリー（通称、エレファントシリーズ）の一員。87式装甲戦闘車の砲塔を取り外し、87式対戦車誘導弾連装発射機をつけたもの。

○87式自走迫撃砲（エレファントMC）

分類 迫撃砲搭載車

全長・6・39 m

全幅・2・50 m

全高・2・69 m

重量・12・80 t

乗員数・3名

主武装 81mm迫撃砲 L16

60mm迫撃砲(B)

副武装 90式車載7.62mm機関銃

速度 100km/h

1987年に海兵隊に正式採用された対戦車誘導ミサイル発射車。87式装甲戦闘車ファミリィ(通称、エレファントシリーズ)の一員。87式装甲戦闘車の兵員室にハッチを設け、車内に81mm迫撃砲 L16 と360度旋回可能なターレットを搭載した自走迫撃砲。

○96式装輪装甲車(クーガーAPC)

種類 装輪装甲人員輸送車(APC)

全長・6.84 m

全幅・2.48 m

全高・1.85 m

重量・14.5 t

乗員数 2名

便乗者： 12名（乗員含む）

装甲 圧延鋼板

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

89式市街地戦闘キット（TUSK）

主武装 12.7mm重機関銃M2（車体上面）

89式RWS（CROWSのライセンス生産、車体上面）

89式アクティブ防護システム（車体上面）

速度・100km/h

1996年に正式採用された、装輪装甲人員輸送車（APC）。この型を基本として以下の『96式装輪装甲車ファミリー』（通称、クーガーシリーズ）が開発された。現在、16式装輪装甲車が採用されたが、2040年まで現役を勤める事が決定し、また、転移が起こった為、今後も使用される。

○96式装輪装甲偵察戦闘車（クーガーARCV）

種類 装甲偵察戦闘車（ARCV）

全長・6.84 m

全幅・2.48 m

全高・1.85 m

重量・14.5 t

乗員数 4名

便乗者： 12名（乗員含む）

装甲 複合装甲（車体前面・側面）

均質圧延鋼装甲

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

89式市街地戦闘キット（TUSK）

主武装・25mm機関砲KBA|B02

副武装・90式車載7.62mm機関銃

79式対舟艇対戦車誘導弾発射機×2

速度・100km/h

1996年に採用された装甲偵察戦闘車。96式装輪装甲車ファミリー（通称、クー

ガーシリーズ)の一員。戦争中や戦争後の占領地の警備で従来の装甲車だと敵兵のRP Gなどでやられ、装甲戦闘車(歩兵戦闘車)や戦車だとコストが高い為、この車両が開発された。

○99式自走120mm迫撃砲(クーガーマC)

種類 迫撃砲搭載車(MC)

全長・6.84 m

全幅・2.48 m

全高・1.85 m

重量・14.5 t

乗員数 5名

装甲 圧延鋼板

増加装甲(装着時は各部)

爆発反応装甲(司令部の判断による)

89式市街地戦闘キット(TUSK)

主武装 120mm迫撃砲 RT

81mm迫撃砲 L16(牽引)

又は、60mm迫撃砲（B）（牽引）

副武装 90式車載7・62mm機関銃

速度・100km/h

1999年に採用された自走迫撃砲。96式装輪装甲車ファミリー（通称、クーガーシリーズ）の一員。96式装輪装甲車の車体後部、96式装輪装甲車では兵員室があった所に120mm迫撃砲 RT 搭載している。

○96式指揮通信車（クーガーCCV）

種類 指揮通信車（CCV、CV）

全長・6.84 m

全幅・2.48 m

全高・1.85 m

重量・14.5 t

乗員数 2名

便乗者： 12名（乗員含む）

装甲 圧延鋼板

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

89式市街地戦闘キット（TUSK）

主武装 12.7mm重機関銃M2（車体上面）

89式アクティブ防護システム（車体上面）

速度・100km/h

1996年に採用された指揮通信車。96式装輪装甲車ファミリー（通称、クーガーシリーズ）の一員。前代の82式指揮通信車が、現代でも一線装備として使用されているが、増大する情報量への対応、指揮通信要員が携帯式のパソコン等を持ち込んで処理するなど、開発時とは様相が変化してきており車内の容量は圧倒的に不足しているため、開発された。

○96式特科前線観測車（クーガーFSV）

種類 砲兵前線観測車（FSV）

全長・6.84 m

全幅・2.48 m

全高・1.85 m

重量・14.5 t

乗員数 2名

便乗者： 12名（乗員含む）

装甲 圧延鋼板

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

89式市街地戦闘キット（TUSK）

主武装 12.7mm重機関銃M2（車体上面）

89式RWS（CROWSのライセンス生産、車体上面）

89式アクティブ防護システム（車体上面）

速度・100km/h

1996年に正式採用された砲兵前線観測車。96式装輪装甲車ファミリー（通称、クーガーシリーズ）の一員。ベトナム戦争に置いて、特科の前線観測員（FO）の被害が多かった為、開発された。

○96式戦闘施設車(クーガーCEVs)

種類 戦闘工兵車(CEVs)

全長・6.84 m

全幅・2.48 m

全高・1.85 m

重量・14.5 t

乗員数 2名

便乗者： 12名(乗員含む)

装甲 圧延鋼板

増加装甲(装着時は各部)

爆発反応装甲(司令部の判断による)

89式市街地戦闘キット(TUSK)

主武装 90式車載7.62mm機関銃

速度・100km/h

1996年に正式採用された工兵車。96式装輪装甲車ファミリー(通称、クーガーシリーズ)の一員。施設科の作業用のアタッチメント装備が用意されている派生型。

○96式野戦救急車(クーガーMEV)

種類 野戦救急車(MEV)

全長・6.84 m

全幅・2.48 m

全高・1.85 m

重量・14.5 t

乗員数 3名

便乗者：4名(担架付の場合)

6名(担架を取り外した場合)

装甲 圧延鋼板

増加装甲(装着時は各部)

爆発反応装甲(司令部の判断による)

89式市街地戦闘キット(TUSK)

主武装 90式車載7.62mm機関銃

速度・100km/h

1996年に正式採用された野戦救急車。前線で負傷した兵士を直ぐに救護所や野戦病院に運ぶのが役割の車両。96式装輪装甲車ファミリー（通称、クーガーシリーズ）の一員。基本的に非武装で、兵員輸送タイプが銃座を設けている車体上部には煙幕弾投射器が設置されているほか、負傷者を搬送するスペースを確保するためキャビン後部の天井が30cmほど高くなっている。車長、操縦手、衛生兵の計3人が固有の搭乗員で、後部キャビンは左右2台ずつ計4台の担架を収容することができる。担架を取り外せば、軽傷者を6人まで乗せられる。車内に本格的な医療設備はなく、心電計、酸素吸入器、自動体外式除細動器^D程度しか備えられていない。

○96式自走対戦車誘導弾発射車（クーガーATGM-1）

種類 対戦車誘導ミサイル車（ATGM）

全長・6.84 m

全幅・2.48 m

全高・2.47 m

重量・14.5 t

乗員数 2名

便乗者： 12名（乗員含む）

装甲 圧延鋼板

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

89式市街地戦闘キット（TUSK）

主武装 25mm機関砲KBA-B02

副武装 87式対戦車誘導弾4連装発射機×2基

90式車載7・62mm機関銃

速度・100km/h

1996年に正式採用された対戦車誘導ミサイル車。96式装輪装甲車ファミリー（通称、クーガーシリーズ）の一員。

96式装輪装甲車の車体後部に87式対戦車誘導弾4連装発射機2基と25mm機関砲KBA-B02を乗せた車両。かなり車高が高くなっている。外見は96式装輪装甲車にADATSの機関砲をミサイル発射機の間に入れたもの。

○96式装甲戦闘車（クーガーFV）

種類 装甲戦闘車（FV、歩兵戦闘車、AFV）

全長・6.84 m

全幅・2.48 m

全高・1.85 m

重量・14.5 t

乗員数 2名

便乗者： 8名（乗員含む）

装甲 圧延鋼板

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

89式市街地戦闘キット（TUSK）

主武装 70口径90式30mm機関砲×2基

副武装 87式対戦車誘導弾連装発射機×2基

90式車載7.62mm機関銃

12.7mm重機関銃M2（車体上面）

89式RWS（CROWSのライセンス生産、車体上面）

89式アクティブ防護システム（車体上面）

速度・100km/h

1996年に正式採用された装輪式の歩兵戦闘車。96式装輪装甲車ファミリー（通称、クーガーシリーズ）の一員。車体中部に30m機関砲2基と側面に87式対戦車誘導弾連装発射機を持つ砲塔を96式装輪装甲車につけたもの。

○96式自走高射機関砲（クーガーAW）

種類 自走高射機関砲（AW、自走式対空砲、SPAG）

全長・6.84 m

全幅・2.48 m

全高・1.85 m

重量・14.5 t

乗員数 4名

装甲 複合装甲（車体前面・側面）

圧延鋼板

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

89式市街地戦闘キット（TUSK）

主武装 M168 20mm バルカン砲×2基 (A型)

GAU-8 30mm ガトリング砲×1基 (B型)

副武装 91式携帯地对空誘導弾4連装発射機×2基

90式車載7.62mm機関銃

12.7mm重機関銃M2 (車体上面)

89式アクティブ防護システム (車体上面)

速度・100km/h

1996年に正式採用された自走対空砲。96式装輪装甲車ファミリー (通称、クーガーシリーズ) の一員。A型とB型があり、B型は最強の機関砲『GAU-8』を一门装備する。

○08式自走中距離多目的誘導弾発射車 (クーガーATGM-2) 《b》

種類 対戦車誘導ミサイル車 (ATGM)

全長・6.84m

全幅・2.48m

全高・1.85m

重量・14.5 t

乗員数 4名

装甲 複合装甲（車体前面・側面）

圧延鋼板

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

89式市街地戦闘キット（TUSK）

主武装 連装中距離多目的誘導弾発射器×2機

副武装 90式車載7・62mm機関銃

12.7mm重機関銃M2（車体上面）

89式アクティブ防護システム（車体上面）

速度・100km/h

2008年に正式採用された対戦車誘導弾ミサイル車。96式装輪装甲車ファミリー（通称、クワガーシリーズ）の一員。96式装輪装甲車に中距離多目的誘導弾を乗せたもの。

○16式装輪装甲車（ワイバーンAPC）

種類 装輪装甲人員輸送車（APC）

全長・7.84 m

全幅・2.58 m

全高・1.96 m

重量・17.8 t

乗員数 2名

便乗者： 12名（乗員含む）

装甲 圧延鋼板

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

89式市街地戦闘キット（TUSK）

主武装 12.7mm重機関銃M2（車体上面）

89式RWS（CROWSのライセンス生産、車体上面）

89式アクティブ防護システム（車体上面）

速度・100km/h

2016年に正式採用された装輪装甲車。96式装輪装甲車の後継だが、転移によつ

て退役が取り止められたために同時に調達している。外見は三菱の案

《big》○01式軽装甲機動車（LAWV〔ラウブ〕）

分類 装甲車（LAV）

全長・4.4 m

全幅・2.04 m

全高・1.85 m

重量・4.5 t

乗員数・4名（上面ハッチを開け、後部座席間に機関銃手を座らせた場合は5名）

乗員配置・前席2名、後席2名（+1名）

装甲・圧延鋼板・防弾ガラス

速度・約100 km/h

2001年に正式採用された装甲車。

○10式対地雷伏撃防護車（M—ATV）

○07式対地雷伏撃防護車（クーガー）

○08式対地雷伏撃防護車（マックスプロ）

○99式装甲機動車（輸送防護車）

分類 歩兵機動車（IMV）

全長・7.18 m

全幅・2.48 m

全高・2.65 m

重量・14.5 t

乗員数 操縦士1名

戦闘員9名

装甲・STANAG 4569レベル以上

主武装 89式RWS（CROWSのライセンス生産、車体上面、任務により取り外す）

89式アクティブ防護システム（車体上面）

速度・100 km/h

1999年に正式採用した歩兵機動車。オーストラリアが開発したブッシュユマス

ター装甲車をライセンス生産したもの。

《b》自走砲

自走迫撃砲

○96式自走120mm迫撃砲

分類 自走迫撃砲(MSP)

全長・6・70m

全幅・2・99m

全高・2・95m

重量・23・5t

乗員数 5名

主武装 120mm迫撃砲 RT

副武装 12・7mm重機関銃M2

速度・50km/h

1996年に正式採用された自走迫撃砲。73式けん引車などと共通の車体に120mm迫撃砲を搭載したもの。

自走榴弾砲

○203mm自走榴弾砲

分類 自走榴弾砲（SP、HSP、SPG）

全長 10.732 m

全幅 3.15 m

全高 3.145 m

重量 28.35 t

乗員数 5名

乗員配置 5＋8名

装甲 最大12.7 mm

主武装 M201A1 203 mm 37口径榴弾砲

速度 54.72 km/h

1984年に正式採用された自走榴弾砲。退役中であり、84輜まで退役したが、転移により現役に戻された。

○ 99式自走155mm榴弾砲

分類 自走榴弾砲 (SP、HSP、SPG)

全長 12.2 m (砲身引き込み時 11.3 m)

全幅 3.2 m

全高 3.9 m (積載時 4.3 m)

重量 40.0 t

速度 49.6 km/h

主砲 52口径155mm榴弾砲 × 1基

副武装 ・ 12.7 mm重機関銃M2

乗員 ・ 4名

1999年に正式採用された自走榴弾砲。75式自走155mmりゅう弾砲の後継として開発された長砲身・長射程の自走砲。射撃や装填の自動化が進み、データリンク装置を始めとした高度な砲兵システムに対応している。

○ 19式装輪自走155mm榴弾砲

分類 自走榴弾砲 (SP、HSP、SPG)

全長・約11.21m

全幅・約2.5m

全高・約3.4m

重量・25.0t以下

速度・90km/h

主砲・52口径155mm榴弾砲 ×1基

乗員・5名

2019年に正式採用された自走榴弾砲。転移時は試作車を使った試験が行われていた。

自走ロケット弾発射機

○多連装ロケットシステム 自走発射機M270 MLRS

分類 多連装ロケットシステム(MLRS)

全長・7.06m

全幅・2.97m

全高・2.6m

重量・24・756 t

乗員数 3名

主武装 227mmロケット弾12連装発射機（再装填時間：8分）

速度・64km/h

1992年に正式採用された自走ロケット弾発射機。システム全体は発射機、弾薬車、指揮装置で構成される。

○10式高機動多連装ロケットシステム

分類 多連装ロケットシステム（MLRS）

全長・7・06 m

全幅・2・97 m

全高・2・6 m

重量・24・756 t

乗員数 3名

主武装 227mmロケット弾12連装発射機（再装填時間：8分）

速度・64km/h

2010年に正式採用された自走ロケット弾発射機。外見は19式装輪自走155

m m榴弾砲のトラックにMLRSのロケットを乗せたもの。

自走高射機関砲

《big》○87式自走高射機関砲

分類 自走高射砲（SPAG、AW）

全長・7.99 m

全幅・3.18 m

全高・4.40 m

重量・38.0 t

乗員数・3名

主武装 90口径35mm対空機関砲KDA×2

副武装 74式車載7.62mm機関銃

速度・53 km/h

1987年に正式採用され自走高射砲。A型とB型があるが、その違いはサイドスカーートを付けているかの違い。

○90式自走高射機関砲

分類 自走高射砲 (SPAAG、AW)

全長・9・80 m

車体長・7・55 m

全幅・3・40 m

全高・2・30 m

重量・50・2 t

速度・70 km/h

主武装 95口径90式30mm機関砲×2基

副武装 90式車載7・62mm機関銃

装甲 複合装甲 (砲塔及び車体正面・側面)

チヨバム・アーマーJ P型 (砲塔・車体側面)

均質圧延鋼装甲

増加装甲 (装着時は各部)

爆発反応装甲 (司令部の判断による)

89式市街地戦闘キット (TUSK)

乗員・3名

1990年に正式採用された自走高射砲。90式戦車の車体に87式自走高射砲の砲塔を乗せ、35mm機関砲から30mm機関砲へ換装したもの。

○10式自走高射機関砲

分類 自走高射砲（SPAAG、AW）

全長・9.42m

全幅・3.24m

全高・2.30m

重量・約44t

速度・70km/h

主砲 95口径90式30mm機関砲×2基

副武装 90式車載7.62mm機関銃

10式アクティブ防護システム（砲塔上面）

装甲 複合装甲（正面要部）

均質圧延鋼装甲

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

10式市街地戦闘キット (TUSK)

乗員・3名

2010年に正式採用された自走高射砲。10式戦車の車体に90式自走高射機関砲の砲塔を乗せたもの。

○16式自走高射機関砲

分類 自走高射砲 (SPAG、AW)

全長・9・42 m

全幅・3・24 m

全高・2・30 m

重量・約44 t

速度・70 km/h

主砲 70口径40 mm機関砲 (ポフォース 40 mm L/70機関砲) × 2基

副武装 90式車載7・62 mm機関銃

10式アクティブ防護システム (砲塔上面)

装甲 複合装甲 (正面要部)

均質圧延鋼装甲

増加装甲（装着時は各部）

爆発反応装甲（司令部の判断による）

10式市街地戦闘キット（TUSK）

乗員・3名

2016年に正式採用された自走高射砲。10式戦車の車体に40mm機関砲2基をつけた砲塔を乗せたもの。

多用途装輪車両

○85式高機動車（HLMV）

Block・I

非装甲型

Block・IA

基本型。貨物・人員輸送などに使用される。

Block・IA1

基本型。貨物・人員輸送などに使用される。ウインチ増備。

Block. IA2

Block. IAの能力向上型。

Block. IB

対戦車誘導弾搭載型。 87式対戦車誘導弾搭載。

Block. IB1

対戦車誘導弾搭載型。 87式対戦車誘導弾搭載。

Block. IB2

Block. IBの能力向上型。

Block. IC

野戦救急車型。担架2台または負傷者6名を収容可。

Block. IC1

野戦救急車型。担架4台または負傷者8名を収容可。

Block. ID

武装型。機銃をループに搭載。

Block. ID1

武装型。機銃をループに搭載。ウインチ増備。

Block. ID2

Block. IDの能力向上型。

Block. IE

120mm迫撃砲 RT牽引型。重迫牽引車とも呼ばれる。

Block. IF

航空自衛隊統合末端攻撃統制官向け。

Block. IG

指揮や警備向けの4人乗り車両。

Block. II

装甲型

Block. IIA

基本型。貨物・人員輸送などに使用される。

Block. IIA1

基本型。貨物・人員輸送などに使用される。

Block. IIA2

Block. IIAの能力向上型。

Block. IIB

対戦車誘導弾搭載型。87式対戦車誘導弾搭載。

Block. II B 1

対戦車誘導弾搭載型。87式対戦車誘導弾搭載。ウインチ増備。

Block. II B 2

対戦車誘導弾搭載型。装甲強化。87式対戦車誘導弾搭載。

Block. II B 3

対戦車誘導弾搭載型。装甲強化。87式対戦車誘導弾搭載。ウインチ増備。

Block. II B 4

Block. II B の能力向上型。

Block. II B 5

Block. II B 2 の能力向上型。

Block. II C

野戦救急車型。担架2台または負傷者6名を収容可。

Block. II C 2

野戦救急車型。担架4台または負傷者8名を収容可。

Block. II D

武装型。機銃をルーフに搭載。

Block. II D 1

武装型。機銃をルーフに搭載。ウインチ増備。

Block. II D 2

武装型、装甲強化。機銃をルーフに搭載。

Block. II D 3

武装型、装甲強化。機銃をルーフに搭載。ウインチ増備。

Block. II D 4

武装型。キャビン上部に銃座を備えた車両。増加装甲を取り付け可能

Block. II D 5

Block. II D の能力向上型。

Block. II D 6

Block. II D 2 の能力向上型。

Block. II E

重量型。車体が大型化し、積載量が増加。

Block. II E 1

Block. II E の能力向上型。

Block. II F

重装甲型。

Block. II F 1

Block. II F の能力向上型。

Block. II G

ポリカーボネート製フロントウィンドウ、ケブラー装甲を備えた、7.62mm徹甲弾・155mm榴弾弾片・5kg級対車輛地雷に耐える防護仕様車。旧モデルに比べ自重が倍増した代わりに、エンジンもターボ付き190馬力に強化されている。防盾付き機銃または擲弾発射器をリングマウントに搭載。

Block. II G 1

Block. II G の航空自衛隊統合末端攻撃統制官向け。

Block. III (93式近距離地对空誘導弾「SAM-3」)

91式携帯地对空誘導弾(SAM-2)の発射/観測/誘導装置を装備。

Block. IV (96式多目的誘導弾システム)

発射機、射撃指揮装置などを装備した型が1セットに所属。

Block. V (03式中距離地对空誘導弾)

幹線無線伝送装置、幹線無線中継装置、射撃管制装置を装備した型が1セットに所属。

Block. VI (中距離多目的誘導弾)

通信・電子機器利用に特化した小隊本部が乗車する指揮用車両及び発射機・追尾装置・

自己評価装置を一体化したシステムを搭載した射撃分隊用車両がある。

Block. VII (基地防空用地対空誘導弾)

発射装置を装備した型が1セットに所属。航空自衛隊のみに配備されている。

Block. VIII (地上レーダ装置1号改 JTPS-P23)

地上監視レーダ搭載。

Block. IX (低空レーダ装置 JTPS-P18)

対空レーダ搭載。

Block. X (衛星単一通信可搬局装置 JMRC-C4)

衛星通信器搭載。

Block. XI (師団通信システム)

指揮通信機器を搭載。普通科・特科連隊(大隊)本部管理中隊や通信大隊などの部隊のみ配備されている。

Block. XII (ReCs 端末搭載型)

Block. XIII (航空電源車)

航空機のエンジンを始動する発電機を搭載している。陸上自衛隊の飛行場に配備されている。

Block. XIV (発煙機3型)

発煙器を搭載。

Block. XV (化学剤監視装置)

化学剤監視装置を搭載。

○89式偵察軽攻撃車両

○93式レンジャー特殊作戦車両

○19式汎用軽機動車（GPLV）

航空機

攻撃ヘリコプター

○AH-1S 攻撃ヘリコプター

分類 対戦車ヘリコプター

乗員 前席：射撃手／後席：操縦士（計2名）

全長／胴体長：17・44／13・59m

全高：4・19m

固定武装 20mm M197 ガトリング砲×1（固定武装）

通常武装 空対空ミサイル 91式携帯地对空誘導弾

AIM-9 サイドワインダー

90式空対空誘導弾

04式空対空誘導弾

対戦車ミサイル 87式対戦車誘導弾

79式対舟艇対戦車誘導弾

BGM-114 ヘルファイア

AGM-65 マーベリック

対レーダーミサイル AGM-122 サイドアーム

爆弾 CBU-55 FAE I燃料気化爆弾

焼夷弾

ロケット弾 ハイドラ70 FFAR M261 (19発)ポッド。最大4

基。

127mmズーニー・ロケットランチャー

1969年に正式採用された戦闘ヘリコプター。AH-64Eの採用により退役が
始まっている。

○AH-64D アパッチロングボウ/AH-64E アパッチ・ガーディアン 攻撃
ヘリコプター

分類 戦闘ヘリコプター

全長：17.76m

基。

全高：4.95 m

乗員：2名（前席：射撃手兼副操縦士／後席：操縦士）

固定武装：M230A1 30mm機関砲×1

通常武装 空対空ミサイル 91式携帯地对空誘導弾

AIM-9 サイドワインダー

90式空対空誘導弾

04式空対空誘導弾

対戦車ミサイル 87式対戦車誘導弾

79式対舟艇対戦車誘導弾

BGM-114 ヘルファイア

AGM-65 マーベリック

対レーダーミサイル AGM-122 サイドアーム

爆弾 CBU-55 FAE I 燃料気化爆弾

焼夷弾

ロケット弾 ハイドラ70 FFAAR M261（19発）ポッド。最大4

127mmズーニー・ロケットランチャー

1992年に正式採用された戦闘ヘリコプター。AH-64Eは2011年から。

○AH-2 隼 攻撃ヘリコプター

分類 戦闘ヘリコプター

全長：19.77m

全高：5.36m

乗員：2名（前席：射撃手兼副操縦士／後席：操縦士）

固定武装：M230A1 30mm機関砲×1

通常武装 空対空ミサイル 91式携帯地对空誘導弾

AIM-9 サイドワインダー

90式空対空誘導弾

04式空対空誘導弾

対戦車ミサイル 87式対戦車誘導弾

79式対舟艇対戦車誘導弾

BGM-114 ヘルファイア

AGM-65 マーベリック

対レーダーミサイル AGM-122 サイドアーム

爆弾 CBU-55 FAE I 燃料気化爆弾

焼夷弾

ロケット弾 ハイドラ70 FFAR M261(19発)ポッド。最大4
基。

127mmズーニー・ロケットランチャー

2000年に富士重工業と三菱重工業が共同開発した戦闘ヘリコプター。巨大な機体を誇り、20mm機関砲を食らっても生き残れる。二周反転プロペラを採用。外見はコレ↓ <https://www.pixiv.net/artworks/82511756> を二重反転プロペラにしたもの。作者様(<https://www.pixiv.net/users/2354693>)に許可を得て使わせてもらいました。ありがとうございます。

○U/AH-2 隼II 攻撃・輸送ヘリコプター

分類 戦闘/輸送ヘリコプター

全長 19.77m

全高 5.36 m

乗員 2名（前席：射撃手兼副操縦士／後席：操縦士）

兵員 8名

固定武装：M230A1 30mm機関砲×1

通常武装 空対空ミサイル 91式携帯地对空誘導弾

AIM-9 サイドワインダー

90式空対空誘導弾

04式空対空誘導弾

対戦車ミサイル 87式対戦車誘導弾

79式対舟艇対戦車誘導弾

BGM-114 ヘルファイア

AGM-65 マーベリック

対レーダーミサイル AGM-122 サイドアーム

爆弾 CBU-55 FAE I燃料気化爆弾

焼夷弾

ロケット弾 ハイドラ70 FFR M261（19発）ポッド。最大4

基。

127mmズーニー・ロケットランチャー

AH-12の後部を兵員室に改良したもの。

○AH-13 大鷲 攻撃ヘリコプター

分類 攻撃ヘリコプター

全長 13.4m

全高 3.8m

乗員 2名(前席：射撃手兼副操縦士／後席：操縦士)

固定武装 20mm M197 ガトリング砲×1基(A型)

M230A1 30mm機関砲×1基(B型)

通常武装 空対空ミサイル 91式携帯地对空誘導弾

AIM-9 サイドワインダー

90式空対空誘導弾

04式空対空誘導弾

対戦車ミサイル 87式対戦車誘導弾

79式対舟艇対戦車誘導弾

基。

BGM-114 ヘルファイア

AGM-65 マーベリック

対レーダーミサイル AGM-122 サイドアーム

爆弾 CBU-55 FAE I 燃料気化爆弾

焼夷弾

ロケット弾 ハイドラ70 FFAR M261 (19発) ポッド。最大4

127mmズーニー・ロケットランチャー

2010年に正式採用された攻撃ヘリコプター。OH-1の攻撃ヘリコプター化したもの。

○AH-5 大鷹 攻撃ヘリコプター

分類 戦闘ヘリコプター

全長 (機関砲含む) 14.10m

全高 3.84m

乗員 2名 (前席: 射撃手兼副操縦士 / 後席: 操縦士)

固定武装：M230A1 30mm機関砲×1
 通常武装 空対空ミサイル 91式携帯地对空誘導弾

AIM-9 サイドワインダー

90式空対空誘導弾

04式空対空誘導弾

対戦車ミサイル 87式対戦車誘導弾

79式対舟艇対戦車誘導弾

BGM-114 ヘルファイア

AGM-65 マーベリック

対レーダーミサイル AGM-122 サイドアーム

爆弾 CBU-55 FAE I燃料気化爆弾

焼夷弾

ロケット弾 ハイドラ70 FFAR M261(19発)ポッド。最大4

基。

127mmズーニー・ロケットランチャー

2014年に正式採用された攻撃ヘリコプター。外見はBF2042のRAH-6

8 ヒューロンの二重反転プロペラを単発にしたの。

○AH-1Z ヴァイパー 攻撃ヘリコプター

分類 攻撃ヘリコプター

全長 17.8 m

全高 4.37 m

乗員 2名(前席：射撃手兼副操縦士／後席：操縦士)

固定武装 M197 20mm機関砲×1門(弾薬 750発)

通常武装 空対空ミサイル 91式携帯地对空誘導弾

AIM-9 サイドワインダー

90式空対空誘導弾

04式空対空誘導弾

対戦車ミサイル 87式対戦車誘導弾

79式対舟艇対戦車誘導弾

BGM-114 ヘルファイア

AGM-65 マーベリック

対レーダーミサイル AGM-122 サイドアーム

爆弾 CBU-55 FAE I燃料気化爆弾

焼夷弾

ロケット弾 ハイドラ70 FFAR M261(19発)ポッド。最大4

基。

127mmズーニー・ロケットランチャー

2000年に海兵隊で正式採用された攻撃ヘリコプター。

○AH/MH-6 ナイトバード 戦闘/汎用/特殊作戦ヘリコプター

分類 戦闘/汎用/特殊作戦ヘリコプター

全長 9.80m

全高 3.0m

乗員 2名

定員 6名(外装式ベンチ使用時)

武装 機銃:M230機関砲×1門, またはGAU-19×2門(M型除くAH-6

のみ)、またはM134×2門

ロケット弾:LAU-68D/A ハイドラ70

ミサイル：AGM-114 ヘルファイア×2（M型除くAH-6のみ）、またはステインガー×2基（M型除くAH-6のみ）

1980年に正式採用された戦闘／汎用／特殊作戦ヘリコプター。様々な用途に使用される。

汎用ヘリコプター

○UH-1J 汎用ヘリコプター

分類 汎用ヘリコプター

全長 17.44 m

全高 3.97 m

胴体幅 2.86 m

乗員 1〜4名

1959年にUH-1Aが正式採用された汎用ヘリコプター。1989年にUH-1Jが正式採用。UH-2の採用により退役中。

○UH-2 汎用ヘリコプター

分類 汎用ヘリコプター

全長 17.1 m

全高 4.6 m

胴体幅 13.1 m

乗員 1～2名

乗客 13名

2008年に正式採用された汎用ヘリコプター。

○UH-60JA 多用途ヘリコプター

分類 多用途ヘリコプター／汎用ヘリコプター

全長 19.76 m

全幅 5.43 m

全高 5.13 m

乗員 1～2名

乗客 5名

1975年に正式採用された多用途ヘリコプター。

○UH-1N ツインヒューイ 汎用ヘリコプター

分類 汎用ヘリコプター

全長 12.69 m

全高 4.4 m

乗員 4名（操縦士、副操縦士、チーフ、射手）

定員 兵士6―8名または同等の貨物

武装 2.75インチ ロケット弾ポット

GAU-16 12.7 mm重機関銃

GAU-17 7.62 mm ミニガン または90式車載 7.62 mm機

関銃

1971年に海兵隊に正式採用された汎用ヘリコプター。

○UH-1Y ヴェノム 汎用ヘリコプター

分類 汎用ヘリコプター

全長 17.78 m

全高 4.5 m

乗員 2—4名（操縦士、副操縦士、ガンナーなど）

定員 6—10名

武装 ハイドラ70ロケット弾ポッド用ステーション×2

GAU—16／GAU—21 50口径12.7 m重機関銃

GAU—17 7.62 mマガトリング銃または90式車載7.62 m機関銃
銃用マウント×2

2009年に海兵隊に正式採用された汎用ヘリコプター。UH—1N ツイン
ヒューイを改造する形で近代化改修した機体。

輸送ヘリコプター

○CH—47J／JA／JF チヌーク 輸送ヘリコプター

分類 輸送ヘリコプター

全長 30.18 m

胴体長 15.54 m

胴体幅 3.87 m

全高：5.69 m

乗員：3名（操縦士、副操縦士、機上整備員）

積載能力 兵員32名（センサーシート取り付けで55名）、または担架24台と衛生兵2名。

1963年に正式採用された輸送ヘリコプター。

電子戦ヘリコプター

○EH-60AクイックフィックスII 電子戦ヘリコプター

分類 電子戦ヘリコプター

全長：19.76 m

全幅：5.43 m

全高：5.13 m

乗員 1〜2名

乗客 5名

1989年に正式採用された電子戦ヘリコプター。電子戦機に改修されたCH-6

4。

特殊作戦ヘリコプター

○MH-47D/E/G 特殊作戦ヘリコプター

分類 特殊作戦ヘリコプター

全長 30.18 m

胴体長 15.54 m

胴体幅 3.87 m

全高：5.69 m

乗員：3名（操縦士、副操縦士、機上整備員）

1980年代後半から実戦運用された特殊作戦ヘリコプター。特殊作戦部隊の潜入・撤収用に改修したヘリコプター。前部にM134ミニガンとローディング・ランプにM60D、AAQ-16 FLIR、空中給油プローブ、救難ホイスト、デジタル・コックピットが装備された。

○MH-60 特殊作戦ヘリコプター

分類 特殊作戦ヘリコプター

全長 19.76 m

全幅 5.43 m

全高 5.13 m

乗員 1〜2名

乗客 5名

1980年代にUH-60を特殊作戦部隊の潜入・撤収用に改修したヘリコプター。前部にM134ミニガンとローディング・ランプにM60D、AAQ-16 FLIR、空中給油プローブ、救難ホイスト、デジタル・コックピットが装備された。

観測ヘリコプター

○OH-1 観測ヘリコプター

分類 観測ヘリコプター

全長 13.4 m

全高 3.8 m

全幅 11.6 m

胴体幅 1 m

武装 91式携帯地对空誘導弾×4

乗員 2名

1991年に正式採用された観測ヘリコプター。

垂直離着陸機

○V | 22 / MV | 22B オスプレイ

分類 輸送機

全長 17.47 m

全幅 25.54 m

全高 6.63 m

2005年に正式採用された輸送機。垂直離着陸能力を持つ。自衛隊では全隊が採用している。

設定集 自衛隊の小火器・火砲・ロケット・誘導弾

陸上自衛隊の分隊

現実とは違い、分隊編成をアメリカ陸軍と同じく9人としている。

分隊長（2等陸曹）と副分隊長（3等陸曹2名）、小銃手（2名）、SAW手（2名）、対戦車手（2名）の計9名で構成されている。

また、分隊は4名で1組の射撃班を2個に分けて戦闘を行うこともある。

この場合は、射撃班は副分隊長、小銃手、対戦車手、SAW手をそれぞれ1名ずつで構成する。

分隊長：分隊をまとめる長。主に2等陸曹が担当する。装備は89式小銃か10式小銃、89式拳銃。

副分隊長：分隊長の補佐。主に3等陸曹が担当する。また、2人に一人はMK・11か64式II型狙撃銃を持った選抜射手となり、持たない方は装備は60ミリ迫撃砲(B)を持つ。89式小銃か10式小銃かMK・11狙撃銃、89式拳銃、60ミリ迫撃砲(B)。小銃手：分隊の中核。一人が110mm個人携帯対戦車弾、10式擲弾発射器、M59

0を持つ時もある。装備は89式小銃か10式小銃、M590、89式拳銃、110mm個人携帯対戦車弾、10式擲弾発射器。

SAW手：分隊支援火器を扱う役。5.56mm機関銃MINIMIを携行する。装備は5.56mm機関銃MINIMI、89式拳銃。

対戦车手：対戦車を行う。01式軽対戦車誘導弾（軽MAT）か84mm無反動砲を装備し、他と違い装備が重いためMP5かMP7を持つ。装備はMP5・MP7、89式拳銃、01式軽対戦車誘導弾か84mm無反動砲。

小銃

○89式5.56mm小銃

全長：920mm（折曲銃床式は最短670mm）、

銃身長：420mm

使用弾薬：89式5.56mm普通弾

口径：5.56mm

重量：3,500g

発射速度：650—850発／分

豊和工業によって開発された純国産の自動小銃。64式小銃の後継として、1989

年に自衛隊に制式採用された。自衛隊のほか、海上保安庁、警視庁でも使用される。

現実とは違いタイ王国、インドネシア、シンガポールなどに輸出しているので定価が下がっている。

又、機関部に専用のピカティニー・レールを素早くつけられるようになっている。

○89式5.56mm小銃改(一型)

全長：920mm

銃身長：420mm

使用弾薬：89式5.56mm普通弾

口径：5.56mm

重量：3,500g

発射速度：650—850発/分

初期型の不満点を改良したタイプ。一型とも呼ばれる。大体がこれなのでそのまま『改』がつかない場合が多い。

○89式5.56mm小銃改二(二型)

全長：900mm

銃身長：420mm

使用弾薬：89式5.56mm普通弾

口径：5. 56mm

重量：3, 500g

発射速度：650—850発／分

市街地戦／特殊部隊対応型。89式にM—ROCKのハンドガードとM4のストックを当てはめた物。外見は『89式カスタム』で調べると出てくるやつ。

《b》○89式5. 56mm短小銃《big》

全長：720mm

銃身長：310mm

使用弾薬：89式5. 56mm普通弾

口径：5. 56mm

重量：2, 850g

発射速度：650—850発／分

後方支援部隊に配備される短小銃。ブルバップ式。

外見は北大路機関様の記事、『89式小銃の改良 市街戦・近接戦闘へ』の89式短小銃。

↓ <https://blogimg.goo.ne.jp/userimage>

／12／b5／3af24lcc8dff6284f6fc209b0835990

d. jpg

(使用許可を頂きました。ありがとうございます。2022/9/4)

○10式5.56mm小銃

全長：850.9mm

銃身長：368.3mm

使用弾薬：89式5.56mm普通弾

口径：5.56mm

重量：2,680g

発射速度：700 | 950発/分

M4カービンを豊和工業が改良したもの。主に市街地戦を行う部隊や第1, 2空挺軍、特殊作戦軍によって使用される。

○64式7.62mm小銃

全長：990mm

銃身長：450mm

使用弾薬：7.62x51mm NATO弾

口径：7.62mm

重量：約4,300g

発射速度：最大約500発／分（450発／分）

豊和工業によって製造された国産3丁目のアサルトライフル。

史実と比べて部品数が大幅に削減されている。

改（一型／I型）と改二（二型／II型）、単小銃（カービン型）がある。

ヨーロッパ諸国にも輸出され、「西側のカラシニコフ」「サムライのAK」と呼ばれる。

改二諸元

全長：990mm

銃身長：450mm

使用弾薬：5.56×45mm NATO弾

口径：5.56mm

重量：約4,000g

発射速度：最大約500発／分

近代化改修がなされた64式小銃。5.56mmになっている。木製であった部分

が樹脂製になっている。

主な改修点は安全装置の改良、部品削減。

分隊の副分隊長がスコープを着けて使用することもある。

単小銃型諸元

全長：850 mm

銃身長：350.8 mm

使用弾薬：5.56×45 mm NATO弾

口径5.56 mm

重量：約2,700 g

発射速度：約750発/分

改二をカービン化した形態。折曲銃床式。

○61式小銃

短機関銃・機関拳銃

○H&K MP5

全長：550 mm (ストック展開時700 mm)

銃身長：225 mm

使用弾薬：9 x 19 mmパラベラム弾

口径：9 mm

重量：約3,080 g

発射速度：800発/分

1970年に正式採用された短機関銃。100式短機関銃及びM3グリースガンの後継。

1型がA3基準、2型がA5基準であり、双方とも野戦に対応できるように精密な部品などは改修されている。

主に分隊で対戦車手によって運用される。

○H & K MP7

全長：415 mm (ストック展開時638 mm)

銃身長：180 mm

使用弾薬：4.6 x 30 mm弾

口径：4.6 mm

重量：MP7A1：1.9 kg

MP7A2 : 1.96 kg

発射速度：約850発／分

2001年に正式採用されたPDW。UZIの後継。

○UZI

全長：470mm（ストック展開時650mm）

銃身長：264mm

使用弾薬：9×19mmパラベラム弾

口径：9mm

重量：約3,800g

発射速度：600発／分

1951年に正式採用された短機関銃。MP7の採用により、警察や予備役に回されている。

○9mm機関拳銃

全長：339mm（ストック展開時520mm）

銃身長：120mm

使用弾薬：9×19mmパラベラム弾

口径：9mm

重量：約2,800kg

発射速度：約1,185発/分

1980年に正式採用されたマシンピストル。主に指揮官や戦車長用。

現実より早く作られており、ストックも設計されており、リコイルが容易になった。

○グロツク18CJ

全長：186mm

銃身長：114mm

使用弾薬：9×19mmパラベラム弾

口径：9mm

重量：703g

発射速度：約1,200発/分

2005年に採用されたマシンピストル。9mm機関拳銃の後継。

グロツク18Cに3点バーストを追加した、陸自オリジナルモデル。

拳銃

○75式9mm拳銃

全長：206mm

銃身長：112mm

使用弾薬：9×19 mmパラベラム弾

口径：9 mm

重量：830 g

発射速度：40発／分

1975年に正式採用された拳銃。SIG製のSIG SAUER P226をライセンス生産したもの。

89式拳銃の採用によって予備役行きになった。

○89式9 mm拳銃

全長：217 mm

銃身長：125 mm

使用弾薬：9×19 mmパラベラム弾

口径：9 mm

重量：970 g

発射速度：40発／分

1989年に正式採用された拳銃。ベレッタ製のベレッタM92Fをライセンス生産したもの。

○10式9 mm拳銃

全長：195 mm

銃身長：108 mm

使用弾薬：9×19 mmパラベラム弾

口径：9 mm

重量：770 g

2010年に正式採用された拳銃。H&K製のH&K USPをライセンス生産したものの。

独自に改良が加されている。主に日本国特殊作戦軍（JSOCOM）によって使用されている。

○16式9 mm拳銃

全長：204 mm

銃身長：114 mm

使用弾薬：9×19 mmパラベラム弾

口径：9 mm

重量：705 g

2016年に正式採用された拳銃。海兵隊のM45ピストルの後継。グロック社のグロック17をライセンス生産したもの。

○ 20式9mm拳銃

全長：186・5mm

銃身長：105mm

使用弾薬：9×19mmパラベラム弾

口径：9mm

重量：710kg

2020年（中央暦1640年）に正式採用された拳銃。
 転移前に輸入したH&K SFP9をライセンス生産したもの。

機関銃

汎用機関銃

○ 62式7・62mm機関銃

全長：1,200mm

銃身長：524mm

使用弾薬：7・62x51mm NATO弾

口径：7・62mm

重量：10,700kg

発射速度：650発／分

1962年に正式採用された汎用機関銃。現実よりも部品が大幅に減少しており、使
いやすくなっている。

○90式7.62mm機関銃／90式車載7.62mm機関銃

全長：1,263mm

銃身長：630mm

使用弾薬：7.62×51mm NATO弾

口径：7.62mm

重量：11,790g

発射速度：650—1,000発／分

1990年に正式採用された汎用／車載機関銃。M240のライセンス生産したも
の。

62式7.62mm機関銃の後継。

分隊支援火器^S_A^W

○5.56mm機関銃 MINI MI

全長：1,038mm

銃身長：465mm

使用弾薬：5.56×45mm NATO弾

口径：5.56mm

重量：6.9～10kg

発射速度：1,000発/分

1985年に正式採用された分隊支援火器。

重機関銃

○12.7mm重機関銃M2

全長：1,645mm

銃身長：1,143mm

使用弾薬：12.7×99mm NATO弾（通常弾、焼夷弾、徹甲弾など）

口径：12.7mm

重量：38.1kg～58kg

発射速度：485～635発/分

1935年に正式採用された重機関銃。

採用から半世紀以上か過ぎてゐるが、信頼性の高さから後継は無い。

狙撃銃

○64式7・62mm狙撃銃

64式小銃Ⅱ型。詳しい諸元は64式小銃へ。

○M110対人狙撃銃

全長：1,029ㄱ1,118mm

銃身長：508mm

使用弾薬：7・62x51mm NATO弾

口径：7・62mm

重量：6,940g

2010年に正式採用された狙撃銃。

64式狙撃銃の後継。

○L96A2対人狙撃銃

全長：1,230mm

銃身長：657mm

使用弾薬：338ラプア・マグナム弾

口径：8・6mm

重量：6,500ㄱ6,900g

1986年正式採用された狙撃銃。

2005年にL96A1からAWMに変更された。

○M24対人狙撃銃

全長：1,092mm

銃身長：610mm

使用弾薬：7.62x51mm NATO弾

口径：7.62mm

重量：4,400g

2012年正式採用された狙撃銃。

L96A2の後継。特殊部隊では2000年から使用されていた。

○バレットM82A1対物狙撃銃

全長：1,447.8mm

銃身長：736.7mm

使用弾薬：12.7x99mm NATO弾

口径：12.7mm

重量：12,900g

2010年に正式採用された対物狙撃銃。

散弾銃

○モスバーク M590

全長：1,041mm

銃身長：35.56(101.6mm)

使用弾薬：12ゲージ

口径：12ゲージ

重量：3.29mm

1980年に正式採用された散弾銃。

榴弾砲

155mmりゅう弾砲 FH70

16式155mmりゅう弾砲

105mmりゅう弾砲

無反動砲・ロケット発射筒

79式84mm無反動砲

70式66mm個人携帯対戦車弾

94式110mm個人携帯対戦車弾

迫撃砲

14式60mm迫撃砲

- 9 1 式 8 1 m m 迫撃砲 L 1 6
- 9 2 式 1 2 0 m m 迫撃砲 R T
- 対空誘導弾
- 8 9 式 長距離地対空誘導弾
- 0 3 式 中距離地対空誘導弾
- 8 1 式 短距離地対空誘導弾
- 1 1 式 短距離地対空誘導弾
- 9 3 式 近距離地対空誘導弾
- 対戦車誘導弾
- 7 9 式 対舟艇対戦車誘導弾
- 8 7 式 対戦車誘導弾
- 9 6 式 多目的誘導弾システム
- 0 9 式 中距離多目的誘導弾
- 0 1 式 軽対戦車誘導弾
- 地对艦誘導弾
- 8 8 式 地对艦誘導弾
- 1 2 式 地对艦誘導弾

設定集 海上自衛隊の編成

海上自衛隊の編成

常備自衛官329, 568人と即応予備自衛官150, 369人。

原子力空母12隻と軽空母5隻、ヘリ空母4隻、揚陸艦46隻、原子力潜水艦79隻、通常動力潜水艦20隻を中核に、巡洋艦35隻、駆逐艦148隻、フリゲート38隻、哨戒艦50隻など主要水上戦闘艦約337隻、戦闘機、戦闘攻撃機や対潜哨戒機などの作戦機約2,897機を保有する世界最大の海軍。民主化後に陸軍や航空部門ではアメリカに勝てないと判断した旧軍上層部はせめて海軍は世界最強であってほしいと願い、海上自衛隊は世界最強・最大の海軍となっている。

階級

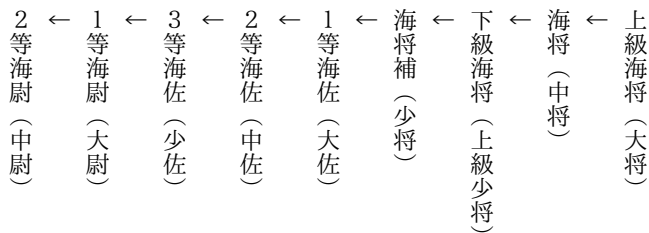
○内は他国軍の階級

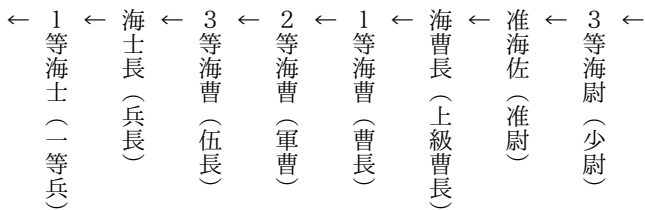
元帥

←

【高級海将】（上級海将）

←





2等海士（二等兵）

海上幕僚監部

海上自衛隊の作戦に関する計画の立案や部隊等の管理及び運営の調整に関する事務等を掌ることを任務とする、防衛省に置かれる特別の機関。現実と違い、前線などで作戦などを管轄する将校が幕僚、後方で作戦全体、兵站を管轄する将校が参謀となっている。長は海上幕僚長（元帥位）。

自衛艦隊：護衛艦隊・潜水艦隊・掃海艦隊・航空集団の管理・運用を担う部隊。司令官は高級海将。

護衛艦隊：6個の艦隊を纏める艦隊。海上自衛隊の自衛艦隊に所属し、多様な艦艇を主力とした海上自衛隊の中核を担う部隊。司令官は上級海将。

航空集団：自衛艦隊に所属する航空部隊。空母航空団と航空団・航空群の管理を担う。航空団は輸送機など、航空群は哨戒機の管理・指揮を行う。司令官は上級海将。

航空団：航空集団に所属する対潜・哨戒・偵察部隊。第1・2艦隊以外の各艦隊に配備

され、所属は各艦隊だが、指揮は航空集団が取る。司令官は上級海将。

潜水艦隊：自衛隊隊に所属する潜水艦部隊。司令官は上級海将。

掃海艦隊：自衛艦隊に所属する掃海部隊。有事の際の機雷戦を主任務とする。各護衛艦隊の艦隊には掃海隊群と掃海隊が編成され、所属は掃海艦隊だが、作戦指揮は護衛艦隊が行う。司令官は上級海将。

艦隊：いくつかの護衛隊群が集まってできる集団。第1～8艦隊がある。司令官は海将。

護衛隊群：2～4つの護衛隊と1～2つの空母打撃群が集まって構成される。戦闘時は2つ以下の護衛隊で構成。司令官は下級海将。

護衛隊：4隻の護衛艦で構成される部隊。ミサイル巡洋艦^G1隻、汎用護衛艦^D3隻で構成されるCGグループとミサイル^D護衛艦^G2隻と汎用護衛艦^D2隻で構成されるDDGグループがある。司令官は1等海佐でCGグループはミサイル巡洋艦^G長、DDGグループはミサイル^D護衛艦^G2隻の内の名前が上の艦長。

空母打撃群：1隻の空母と直属ミサイル巡洋艦、空母護衛隊群で構成される空母機動部隊。司令官は海将補。

軽空母打撃群：いずも型軽空母1隻と軽空母護衛隊群で構成される空母機動部隊。司令

官は海將補。

ヘリコプター空母打撃群：ヘリコプターを運用する打撃群。所謂対潜空母。護衛は各護衛隊から出す。

司令官は海將補。

空母航空団：空母打撃群に所属する航空部隊。空母の艦載機が所属。指揮・所属は護衛艦隊が担うが、管理は航空集団になる。司令官は1等海佐

軽空母航空団：軽空母打撃群に所属する飛行部隊。軽空母の艦載機が所属。司令官は1等海佐。

空母護衛隊：空母打撃群直属の護衛部隊。ミサイル（イージス）駆逐艦2隻・汎用護衛艦4隻・攻撃／通常導力潜水艦1隻・補給艦で構成。ただし、第5空母護衛隊群のみ、ミサイル（イージス）駆逐艦4隻・汎用護衛艦6隻・攻撃原子力潜水艦3隻・補給艦で構成。司令官は1等海佐（護衛隊の先任艦長）

軽空母打撃群護衛隊：軽空母打撃群直属の護衛部隊。ミサイル（イージス）駆逐艦2隻と汎用護衛艦2隻で構成。司令官は1等海佐（護衛隊の先任艦長）

揚陸隊群／水陸機動打撃群：1隻の強襲揚陸艦と2隻の揚陸艦、2隻の輸送揚陸艦で構成される上陸部隊。作戦行動時には『第〇水陸機動戦隊』となり、各護衛隊から数隻の護衛艦が合流する。第1艦隊のみ各護衛隊群の指揮下で、他の部隊は各艦隊の指揮下で

行動する。司令官は海将補

フリゲート隊群：2個のフリゲート隊6隻のフリゲートで構成される部隊。主にフリゲート隊が対応できない大規模船団護衛に就く。第1艦隊のみ各護衛隊群の指揮下で、他の部隊は各艦隊の指揮下で行動する。司令官は海将補。

フリゲート隊：3隻のフリゲートで構成される部隊。主に海上保安庁・哨戒隊群が対応できない近海に接近した敵部隊への攻撃、小々中規模船団護衛に就く。司令官は1等海佐

哨戒隊群：哨戒隊が2つ集まって出来た部隊。主に近海の哨戒を担い、海上保安庁が対応できない事態の対応もする。第1艦隊のみ各護衛隊群の指揮下で、他の部隊は各艦隊の指揮下で行動する。司令官は海将補

哨戒隊：3隻の哨戒隊で構成された部隊。主に近海の哨戒を担い、海上保安庁が対応できない事態の対応もする。司令官は1等海佐

遠征部隊管理群：爆発物処理部隊、沿岸河川部隊、建設部隊を集めた部隊

上陸部隊：海兵隊の部隊が各艦隊の揚陸隊群／水陸機動打撃群に乗艦し作戦行動する際に編成される。

特殊作戦任務部隊：通称、SOTF（エスオーティーエフ）。海上自衛隊の特殊部隊（空挺、潜水、上陸、野戦）。対テロ・臨検もやるが、特別警備隊が主に担当する。10つ

の群団に分かれている。各艦隊に所属しているが、作戦は海上総隊の特殊作戦任務部隊本隊の命令を受ける。

特殊警備隊：通称、SBU（エスビーユー）。海上自衛隊の特殊部隊（臨検、強襲上陸、人質、対テロ）。空挺・潜水・上陸もやるが、特殊作戦任務部隊が主に担当する。各艦隊に所属しているが、作戦は海上総隊の特殊作戦警備隊本隊の命令を受ける。

立入検査隊・通称、MIT（ミット）。護衛艦付き立入検査隊とも呼ばれる。各艦に編成されており、

臨検の際に編成さ各艦隊に所属しているが、作戦は海上総隊の立入検査隊本隊の命令を受ける。

第零艦隊：海軍の艦船の特殊部隊。天皇陛下が船で移動される際などに護衛に就く以外は基本行動は秘密裏。この艦隊の予定を知っているのは海自内でも限られた人員のみ。構成艦全ての戦闘能力は高く、一隻で中小国は滅亡させることができる。世界最強の艦隊。

地方隊：主として担当の警備区域の防衛・警備及び自衛艦隊等の後方支援にあたる部隊。横須賀、呉、佐世保、舞鶴、大湊、旅順、香港に配備。嚮導護衛艦1隻、護衛艦4隻で構成。

統合軍における区分

第1・2艦隊：日本国海上自衛隊太平洋艦隊

第5艦隊：日本国海上自衛隊中央艦隊

第6・8艦隊：日本国海上自衛隊欧州艦隊

第7艦隊：日本国海上自衛隊北米艦隊

自衛艦隊

海上総隊

― 第零艦隊

― 第1部隊 (アマテラス、イザナミ)

― 第2部隊 (ヤマトタケル、イザナギ)

― 第3部隊 (スサノオ、タケミカヅチ)

― 第零艦隊後方支援隊

― 第10艦隊 (サイバー部隊)

護衛艦隊

第1艦隊（本土）

— 第1護衛隊群（横須賀）

— 第1護衛隊

— 第2護衛隊

— 第7護衛隊

— 第8護衛隊

— 第1空母打撃群 旗艦：ずいかく型航空母艦『ずいかく』

— 第1空母打撃群直屬ミサイル巡洋艦

— 第1空母護衛隊

— 第1空母航空団

— 第5空母打撃群 旗艦：ひりゆう型航空母艦『ひりゆう』

— 第5空母打撃群直屬ミサイル巡洋艦

— 第5空母護衛隊

— 第5空母航空団

— 第5軽空母打撃群 旗艦：いずも型軽空母『いぶき』

— 第5軽空母打撃群護衛隊

— 第5軽空母航空団

― 第1フリゲート隊群

― 第11フリゲート隊

― 第12フリゲート隊

― 第1哨戒隊群

― 第11哨戒隊

― 第12哨戒隊

― 第1揚陸隊／第11水陸機動戦隊 旗艦：しきしま型強襲揚陸艦『しきしま』

― 第1海上補給隊

― 第1戦闘支援隊

― 第2護衛隊群（佐世保）

― 第3護衛隊

― 第9護衛隊

― 第2空母打撃群 旗艦：ずいかく型航空母艦『しょうかく』

― 第2空母打撃群直属ミサイル巡洋艦

― 第2空母護衛隊

― 第2空母航空団

― 第1ヘリコプター空母打撃群 旗艦：ひゅうが型ヘリコプター搭載型航空母艦

『ひゅうが』

— 第2フリゲート隊群

— 第21フリゲート隊

— 第22フリゲート隊

— 第2哨戒隊群

— 第21哨戒隊

— 第22哨戒隊

— 第2揚陸隊／第12水陸機動戦隊 旗艦：しなの型強襲揚陸艦『しなの』

— 第2海上補給隊

— 第2戦闘支援隊

— 第3護衛隊群（舞鶴）

— 第4護衛隊

— 第10護衛隊

— 第3空母打撃群 旗艦：ずいかく型航空母艦『あまぎ』

— 第3空母打撃群直属ミサイル巡洋艦

— 第3空母護衛隊

— 第3空母航空団

『はつせ』

― 第2ヘリコプター空母打撃群 旗艦：ひゅうが型ヘリコプター搭載型航空母艦

― 第3フリゲート隊群

― 第31フリゲート隊

― 第32フリゲート隊

― 第3哨戒隊群

― 第31哨戒隊

― 第32哨戒隊

― 第3揚陸隊／第13水陸機動戦隊 旗艦：しきしま型強襲揚陸艦『はつせ』

― 第3海上補給隊

― 第3戦闘支援隊

― 第4護衛隊群（呉）

― 第5護衛隊

― 第11護衛隊

― 第4空母打撃群 旗艦：ずいかく型航空母艦『かつらぎ』

― 第4空母打撃群直屬ミサイル巡洋艦

― 第4空母護衛隊

- ― 第4空母航空団
- ― 第2軽空母打撃群 旗艦：いずも型軽空母『かが』
- ― 第2軽空母打撃群護衛隊群
- ― 第2軽空母航空団
- ― 第4フリゲート隊群
- ― 第41フリゲート隊
- ― 第42フリゲート隊
- ― 第4哨戒隊群
- ― 第41哨戒隊
- ― 第42哨戒隊
- ― 第4揚陸隊／第14水陸機動戦隊 旗艦：しなの型強襲揚陸艦『あかぎ』
- ― 第4海上補給隊
- ― 第4戦闘支援隊
- ― 第5護衛隊群（大湊）
- ― 第6護衛隊
- ― 第12護衛隊
- ― 第6空母打撃群 旗艦：ずいかく型航空母艦『たいほう』

― 第6空母打撃群直屬ミサイル巡洋艦

― 第6空母護衛隊

― 第6空母航空団

― 第5フリゲート隊群

― 第51フリゲート隊

― 第52フリゲート隊

― 第5哨戒隊群

― 第51哨戒隊

― 第52哨戒隊

― 第5揚陸隊／第15水陸機動戦隊 旗艦：しきしま型強襲揚陸艦『さつま』

― 第5海上補給隊

― 第5戦闘支援隊

― 海上自衛隊特殊作戦任務部隊第1群団

― 海上自衛隊特別警備隊第1大隊

― 海上自衛隊立入検査隊第1大隊

― 第1艦隊遠征部隊管理群

― 第1艦隊上陸部隊

第2艦隊（中華地方）

— 第6護衛隊群

— 第7空母打撃群（上海） 旗艦：ひりゅう型航空母艦『こくりゅう』

— 第7空母打撃群直屬ミサイル巡洋艦

— 第67空母護衛隊

— 第7空母航空団

— 第13護衛隊

— 第20護衛隊

— 第7護衛隊群

— 第8空母打撃群（旅順） 旗艦：ひりゅう型航空母艦『はくりゅう』

— 第8空母打撃群直屬ミサイル巡洋艦

— 第78空母護衛隊

— 第8空母航空団

— 第3軽空母打撃群 旗艦：いずも型軽空母『ひよう』

— 第3軽空母打撃群護衛隊群

— 第3軽空母航空団

— 第14護衛隊

— 第21護衛隊

— 第5フリゲート隊群

— 第51フリゲート隊

— 第52フリゲート隊

— 第5哨戒隊群

— 第51哨戒隊

— 第52哨戒隊

— 第6揚陸隊／第16水陸機動戦隊

旗艦：しなの型強襲揚陸艦『ちとせ』

— 第2艦隊潜水艦隊

— 第12潜水隊群

— 第12攻撃潜水隊群

— 第12戦略潜水隊群

— 海上自衛隊特殊作戦任務部隊第2群団

— 海上自衛隊特別警備隊第2大隊

— 海上自衛隊立入検査隊第2大隊

— 第2艦隊遠征部隊管理群

— 第2艦隊上陸部隊

第5艦隊（中東）〔転移後、ムーに駐留〕

— 第8護衛隊群

— 第9空母打撃群（ジブチ） 旗艦：ずいかく型航空母艦『しょうほう』

— 第9空母打撃群直属ミサイル巡洋艦

— 第89空母護衛隊

— 第9空母航空団

— 第3ヘリコプター空母打撃群 旗艦：いつくしま型ヘリコプター搭載型航空母

艦『いつくしま』

— 第15護衛隊

— 第22護衛隊

— 第7揚陸隊／第17水陸機動戦隊 旗艦：しきしま型強襲揚陸艦『やしま』

— 第5艦隊潜水艦隊

— 第13潜水隊群

— 第13攻撃潜水隊群

— 第13戦略潜水隊群

— 海上自衛隊特殊作戦任務部隊第3群団

— 海上自衛隊特別警備隊第3大隊

— 海上自衛隊立入検査隊第3大隊

— 第5艦隊遠征部隊管理群

— 第5艦隊上陸部隊

— 第5艦隊航空群

第6艦隊（地中海）【転移後、アルタラスに駐留】

— 第9護衛隊群

— 第10空母打撃群（ターラント） 旗艦：ずいかく型航空母艦『ずいほう』

— 第10空母打撃群直属ミサイル巡洋艦

— 第91空母護衛隊

— 第10空母航空団

— 第5ヘリコプター空母打撃群 旗艦：いつくしま型ヘリコプター搭載型航空母

艦『あきつしま』

— 第16護衛隊

— 第23護衛隊

— 第8揚陸隊／第18水陸機動戦隊 旗艦：しなの型強襲揚陸艦『みずほ』

— 第6艦隊潜水艦隊

— 第14潜水隊群

— 第14 攻撃潜水隊群

— 第14 戦略潜水隊群

— 海上自衛隊特殊作戦任務部隊第4 群団

— 海上自衛隊特別警備隊第4 大隊

— 海上自衛隊立入検査隊第4 大隊

— 第6 艦隊遠征部隊管理群

— 第6 艦隊上陸部隊

— 第6 艦隊航空群

第7 艦隊（アメリカ）〔転移後、クワ・トイネに駐留〕

— 第11 護衛隊群

— 第11 空母打撃群（サンデイエゴ） 旗艦：ずいかく型航空母艦『りゆうじょう』

— 第11 空母打撃群直属ミサイル巡洋艦

— 第11 空母護衛隊

— 第11 空母航空団

— 第4 軽空母打撃群 旗艦：いずも型軽空母『じゅんよう』

— 第4 軽空母打撃群護衛隊群

— 第4 軽空母航空団

— 第17 護衛隊

— 第24 護衛隊

— 第9 揚陸隊／第19 水陸機動戦隊 旗艦：しきしま型強襲揚陸艦『ふじ』

— 第7 艦隊潜水艦隊

— 第15 潜水隊群

— 第15 攻撃潜水隊群

— 第15 戦略潜水隊群

— 海上自衛隊特殊作戦任務部隊第5 群団

— 海上自衛隊特別警備隊第5 大隊

— 海上自衛隊立入検査隊第5 大隊

— 第7 艦隊遠征部隊管理群

— 第7 艦隊上陸部隊

— 第7 艦隊航空群

— 第8 艦隊（欧州）【転移後、パーパルディアに駐留】

— 第12 護衛隊群

— 第12空母打撃群（ポーツマス） 旗艦：ずいかく型航空母艦『りゆうほう』

— 第12空母打撃群直属ミサイル巡洋艦

— 第12空母護衛隊

— 第12空母航空団

— 第18護衛隊

— 第25護衛隊

— 第4ヘリコプター空母打撃群 旗艦：いつくしま型ヘリコプター搭載型航空母

艦『まつしま』

— 第13護衛隊群

— 第13空母打撃群（ブレスト） 旗艦：ずいかく型航空母艦『ほうしょう』

— 第13空母打撃群直属ミサイル巡洋艦

— 第13空母護衛隊

— 第13空母航空団

— 第1軽空母打撃群 旗艦：いずも型軽空母『いずも』

— 第1軽空母打撃群護衛隊群

— 第1軽空母航空団

— 第19護衛隊

— 第26護衛隊

— 第10揚陸隊／第20水陸機動戦隊

旗艦：しなの型強襲揚陸艦『くらま』

— 第8艦隊潜水艦隊

— 第16潜水隊群

— 第16攻撃潜水隊群

— 第16戦略潜水隊群

— 海上自衛隊特殊作戦任務部隊第6群団

— 海上自衛隊特別警備隊第6大隊

— 海上自衛隊立入検査隊第6大隊

— 第8艦隊遠征部隊管理群

— 第8艦隊上陸部隊

— 第8艦隊航空群

潜水艦隊

— 第1潜水艦隊（横須賀）

— 第1潜水隊群

— 第1攻撃潜水隊群

— 第1 戰略潛水隊群

— 第2 潛水艦隊（呉）

— 第2 潛水隊群

— 第2 攻撃潛水隊群

— 第2 戰略潛水隊群

— 第3 潛水艦隊（舞鶴）

— 第3 潛水隊群

— 第3 攻撃潛水隊群

— 第3 戰略潛水隊群

— 第4 潛水艦隊（大湊）

— 第4 潛水隊群

— 第4 攻撃潛水隊群

— 第4 戰略潛水隊群

— 第5 潛水艦隊（佐世保）

— 第5 潛水隊群

— 第5 攻撃潛水隊群

— 第5 戰略潛水隊群

— 第6潜水艦隊（那覇）

— 第6潜水隊群

— 第6攻撃潜水隊群

— 第6戦略潜水隊群

航空集団

— 空母航空団

— 第1空母航空団

— 第2空母航空団

— 第3空母航空団

— 第4空母航空団

— 第5空母航空団

— 第6空母航空団

— 第7空母航空団

— 第8空母航空団

— 第9空母航空団

— 第10空母航空団

— 第11空母航空団

— 第12空母航空団

— 軽空母航空団

— 第1軽空母航空団

— 第2軽空母航空団

— 第3軽空母航空団

— 第4軽空母航空団

— 第5軽空母航空団

— 航空群

— 第1航空群（鹿屋）

— 第2航空群（八戸）

— 第3航空群（厚木）

— 第4航空群（那覇）

— 第5航空群（小松）

— 第6航空群（浜松）

— 第7航空群（北京）

— 第8航空群（香港）

— 第9航空群（上海）

― 第10航空群（択捉）

― 航空団

― 第11航空団

― 第21航空団

― 第51航空団

― 第61航空団

― 第111航空団

掃海隊群

― 掃海隊群司令部

― 第1掃海隊（横須賀）

― 第2掃海隊（舞鶴）

― 第3掃海隊（佐世保）

― 第4掃海隊（呉）

― 第5掃海隊（香港）

― 第6掃海隊（旅順）

― 第11掃海隊（ジブチ）

― 水陸両用戦・機雷戦戦術支援隊

海洋業務・対潜支援群

— 対潜資料隊（横須賀）

— 対潜評価隊（横須賀）

— 沖繩海洋観測所（沖繩）

— 下北海洋観測所（青森）

— 鹿児島音響測定所（鹿児島）

— 香港音響測定所（香港）

— 第1海洋観測隊（横須賀）

— 第1音響測定隊（呉）

開発隊群

— 開発隊群司令部（船越地区）

— 指揮通信開発隊（船越地区）

— 艦艇開発隊（船越地区）

— 試験艦：「きさらじ」

— 航空プログラム開発隊（厚木地区）

横須賀地方隊

— 横須賀地方総監部

— 第111護衛隊

— 第11掃海隊

— 横須賀警備隊

— 横須賀陸警隊

— 横須賀港務隊

— 横須賀水中処分隊

— 第1ミサイル艇隊

— 横須賀教育隊

— 横須賀彈藥整備補給所

— 横須賀造修補給所

— 横須賀基地業務隊

— 横須賀衛生隊

— 横須賀音楽隊

呉地方隊

— 呉地方総監部

— 第122護衛隊

— 第22掃海隊

— 呉警備隊

— 呉陸警隊

— 呉港務隊

— 呉水中処分隊

— 第2ミサイル艇隊

— 呉教育隊

— 呉彈藥整備補給所

— 呉造修補給所

— 呉基地業務隊

— 呉衛生隊

— 呉音楽隊

佐世保地方隊

— 佐世保地方総監部

— 第133護衛隊

— 第33掃海隊

— 佐世保警備隊

— 佐世保陸警隊

― 佐世保港務隊

― 佐世保水中処分隊

― 第3ミサイル艇隊

― 佐世保教育隊

― 佐世保彈藥整備補給所

― 佐世保造修補給所

― 佐世保基地業務隊

― 佐世保衛生隊

― 佐世保音楽隊

舞鶴地方隊

― 舞鶴地方総監部

― 第144護衛隊

― 第44掃海隊

― 舞鶴警備隊

― 舞鶴陸警隊

― 舞鶴港務隊

― 舞鶴水中処分隊

―新潟基地分遣隊

―第4ミサイル艇隊

―舞鶴教育隊

―舞鶴彈藥整備補給所

―舞鶴造修補給所

―舞鶴基地業務隊

―舞鶴衛生隊

―舞鶴音楽隊

大湊地方隊

―大湊地方総監部

―第155護衛隊

―第55掃海隊

―大湊警備隊

―大湊陸警隊

―大湊港務隊

―大湊水中処分隊

―第5ミサイル艇隊

— 大湊教育隊

— 大湊彈藥整備補給所

— 大湊造修補給所

— 大湊基地業務隊

— 大湊衛生隊

— 大湊音楽隊

旅順地方隊

— 旅順地方総監部

— 第266護衛隊

— 第66掃海隊

— 旅順警備隊

— 旅順陸警隊

— 旅順港務隊

— 旅順水中処分隊

— 第6ミサイル艇隊

— 旅順教育隊

— 旅順彈藥整備補給所

——旅順造修補給所

——旅順基地業務隊

——旅順衛生隊

——旅順音楽隊

香港地方隊

——香港地方総監部

——第277護衛隊

——第77掃海隊

——香港警備隊

——香港陸警隊

——香港港務隊

——香港水中処分隊

——第7ミサイル艇隊

——香港教育隊

——香港彈藥整備補給所

——香港造修補給所

— 香港基地業務隊

— 香港衛生隊

— 香港音楽隊

教育航空集団

— 教育航空集団司令部（下総航空基地）

— 下総教育航空群（千葉）

— 第203教育航空隊

— 第203整備補給隊

— 下総航空基地隊

— 徳島教育航空群（徳島）

— 第202教育航空隊

— 第202整備補給隊

— 徳島航空基地隊

— 小月教育航空群（山口）

— 第201教育航空隊

— 小月教育航空隊

— 第201整備補給隊

— 小月航空基地隊

— 第211教育航空隊（鹿児島）

— 第212教育航空隊（鹿児島）

練習艦隊

— 練習艦隊司令部

— 直轄艦：練習艦「かしま」

— 第1練習隊群

— 第1練習空母打撃群

— 第1練習隊

設定集 海上自衛隊の艦艇

航空母艦

○ずいかく型航空母艦

艦種 航空母艦（原子力空母）

運用者 日本国海上自衛隊

建造期間 1966年 — 1980年（1〜3番艦）

1978年 — 1985年（4〜8番艦）

1992年 — 2008年（9・10番艦）

就役期間 1975年 — 就役中

建造数 10隻

前級 ほうしょう（CVN-65）

次級 ひりゆう型航空母艦

基準排水量 74,000トン以上

満載排水量 約100,000トン

全長・333.1m

最大幅 89.4 m

水線幅 40.8 m

吃水 11.3 | 12.1 m

原子炉 APWR 2 加圧水型原子炉 × 2 基

主機 蒸気タービン (65, 000 hp (48 MW)) × 4 基

推進器 スクリュープロペラ × 4 軸

出力 260, 000 shp

速力 30ノット

乗員 操艦要員 3, 200名

航空要員 2, 480名

司令部要員 60名

兵装：高性能20mm機関砲(CIWS) × 2基

シースパロー短SAM 8連装発射機 × 2基

RAM近SAM 21連装発射機 × 2基

搭載機 CTOLE機 + ヘリコプター (冷戦期：90機、現在：70機前後)

F | 14E、F/A | 18E/F、EA | 18G、E | 2C/D、C | 2、S

H | 60J/k、MCH | 101、MH | 53E等

同型艦 CVN—68 ずいかく

CVN—69 しょうかく

CVN—70 あまぎ

CVN—71 かつらぎ

CVN—72 たいほう

CVN—73 しょうほう

CVN—74 ずいほう

CVN—75 りゅうじょう

CVN—76 りゅうほう

CVN—77 ほうしょう

1975年から就航した世界初の量産型原子力空母。

ほうしょう型に次ぐ2世代目の原子力空母のとして建造された。満載排水量は10万tに達し、史上最大の軍艦として有名。

30年以上の長きにわたって十隻が建造された上、艦の寿命が長いいため、運用期間が非常に長い艦級としても知られる。

全艦の建造は三菱重工業香港造船所が担当した。

外見はニミッツ級。

○ひりゅう型航空母艦

艦種：航空母艦（原子力空母）

運用者：日本国海上自衛隊

建造期間：2008年 — 建造中

就役期間：2017年 — 就役中

計画数：10隻

建造数：2隻

前級：ずいかく型航空母艦

次級：（最新）

基準排水量：77,000トン以上

満載排水量：101,600トン

全長：345m

最大幅：79.7m

水線幅：42m

吃水：13.4m

原子炉：APWR—2B 加圧水型原子炉×2基

主機：蒸気タービン×4基

推進器：スクリュープロペラ×4軸

速度：最大30ノット以上(56+k m/h)

乗員：操艦要員：2, 180名

航空要員：2, 480名

兵装：高性能20mm機関砲(CIWS)×3基

ESSM短SAM 8連装発射機×2基

RAM近SAM 21連装発射機×2基

M2 12.7mm重機関銃×4基

搭載機 C T O L機 + ヘリコプター 75機以上

F/A—18E/F、F—35C、E—2C/D、EA—18G、C—2A、S
H—60J/K、MCH—101等

同型艦：CVN—78 ひりゅう

CVN—79 はくりゅう

CVN—80 こくりゅう

CVN—81 せいりゅう (建造中)

CVN-82 じんりゅう (起工中)

2017年から就航した世界最大の航空母艦。

ずいかく型に次ぐ3世代目の原子力空母のとして建造された。

全艦の建造は三菱重工業香港造船所が担当した。

全5隻建造予定。外見はジェネラルRフォード級の艦橋をニッツ級につけたの。

○しゅうりゅう型航空母艦

建造所：黒海造船工場

大連造船所 (工事再開)

三菱重工業香港造船所 (改修)

運用者：中国人民解放軍海軍 ↓ 日本国海上自衛隊 (鹵獲)

艦種・航空母艦

級名 アドミラル・クズネツオフ級航空母艦

001型航空母艦 (就役後)

しゅうりゅう型航空母艦 (鹵獲後)

前級：バクー

次級：山東↓無し（鹵獲後）

艦歴 発注 1998年（ウクライナよりスクラップとして購入）

起工 1985年12月6日（ヴァリヤーク）

2005年4月26日（工事再開）

進水 1988年11月25日（ヴァリヤーク）

就役 2012年9月25日（遼寧）

再就役 2018年1月3日（しゅうりゆう）

軽荷排水量：43,000 t

基準排水量：58,500 t

満載排水量：67,500 t

全長：305 m

最大幅：78 m

推進：スクリュープロペラ×4軸

速力：30ノット（推定値）

乗員：1,960名

兵装 高性能20mm機関砲（CIWS）×2基

RAM近SAM 21連装発射機×2基

ESSM短SAM 8連装発射機×2基

搭載機：40機 F/A-18F、E-2C/D、C-2、SH-60J/K他

2016年に起こった日中紛争に置いて、潜水艦による攻撃で推進力を失った空母『遼寧』が、海上自衛隊特殊作戦部隊による攻撃で無力化され、降伏したため日本側が鹵獲した艦。

2017年から近代化改修をしていたため、転移時は公試航行中であつた。

新世界暦2年／中央暦1640年8月にひりゅう型『はくりゅう』就役により練習空母になる。

同型艦 CV-83↓TVCV-83 しょうりゅう

軽空母

○いずも型軽空母

艦種：軽空母

建造所：ジャパン マリンユナイテッド

横浜事業所 磯子工場

運用者：日本国海上自衛隊

建造期間：2005年～2015年

就役期間：2008年 — 就役中

建造数：5隻

前級：無し

次級：最新

基準排水量：21,280トン

満載排水量：27,900トン

全長：250.8m

最大幅：39.5m

深さ：23.8m

吃水：7.8m

機関方式：COGAG方式

主機：LM2500IECガスタービンエンジン (28,000ps) × 4基

推進器：スクリュープペラ × 2軸

最大速力：30ノット

乗員：約510名

兵装：高性能20mm機関砲（CIWS）×2基

SeaRAM 近SAMシステム×2基

搭載機：30機

AV-8B ハリアーII、F-35B、SH-60J/k、MCH-101他

同型艦：CVL-1 いずも

CVL-2 かが

CVL-3 ひよう

CVL-4 じゅんよう

CVL-5 いぶき

2008年から就役した軽空母。

航空母艦が修理などで不在時に艦隊制空をするために建造された。

外見は空母いぶきのいぶき型。

ヘリコプター搭載型航空母艦

○ひゅうが型ヘリコプター搭載型航空母艦

艦種：ヘリコプター搭載型航空母艦

建造所：アイ・エイチ・アイ マリンユナイテッド横浜工場

運用者：日本国海上自衛隊

建造期間：1998年～2002年

就役期間：2001年～就役中

建造数：2隻

前級：しらね型

次級：いつくしま型

基準排水量：13,950トン

満載排水量：19,000トン（推定値）

全長：197m

最大幅：33m

深さ：22m

吃水：7m

高さ：48m

機関方式：COGAG方式

主機：LM2500ガスタービンエンジン×4基

推進器：可変ピッチ・プロペラ×2

速度：30ノット

乗員：約340 | 360名

兵装 高性能20mm機関砲(CIWS)×2基

Mk. 41 VLS (16セル)×1基

ESSM 短SAM

VLA SUM

324mm3連装短魚雷発射管×2基

機関銃座×7基

搭載機：11機

SH-60J/K、MCH-101、MV-22他

同型艦：DDH-181 ひゅうが

DDH-182 いせ

2001年から就役したヘリコプター搭載型航空母艦。

本来ならCVHだか、当初では駆逐艦として設計されたため、DDHになつてゐる。

○いつくしま型ヘリコプター搭載型航空母艦

艦種：ヘリコプター搭載護衛艦

建造所：ジャパンマリンユナイテッド横浜事業所 磯子工場

運用者：日本国海上自衛隊

建造期間：2004年～2009年

就役期間：2007年 — 就役中

建造数：2隻

前級：ひゅうが型

次級：最新

基準排水量：19,500トン

満載排水量：26,000トン

全長：248.0m

最大幅：38.0m

深さ：23.5m

吃水：7.3m

機関方式：COGAG方式

主機：LM2500IECガスタービンエンジン (28,000ps)×4基

最大速力：30ノット

乗員：約470名

兵装 高性能20mm機関砲（CIWS）×2基

SeaRAM 近SAMシステム×2基

搭載機：14機

SH-60J/K、MCH-101、MV-22他

同型艦 DDH-183 いつくしま

DDH-184 まつしま

DDH-185 あきつしま

2007年に就役したヘリコプター搭載型航空母艦。
外見は現実のいずも型。

強襲揚陸艦

○しなの型強襲揚陸艦

艦種：強襲揚陸艦

建造所：三菱重工業香港造船所

運用者：日本国海上自衛隊

建造期間・1984年 | 2008年

就役期間・1989年 | 就役中

建造数：5隻

前級：えとろふ型

次級：しきしま型

軽荷排水量：27,565 | 28,295トン

満載排水量：40,329 | 41,684トン

全長：257.3 m

水線長：237.14 m

最大幅：42.67 m

水線幅：32.31 m

吃水：8.53 m

機関方式：COGAG方式

主機：LM1980ガスタービンエンジン×4基

速力：28ノット

乗員：士官66名＋下士官兵1,004名

上陸部隊1, 687名+予備184名

兵装：高性能20mm機関砲(CIWS)×2基

12.7mm単装機銃×数挺

ESSM 短SAM 8連装発射機×2基

Sea RAM 近SAM発射機×2基

搭載機 30機(全てVTOL機の場合20機)

AV-8B ハリアーII、F-35B、AH-1Z ヴァイパー、AH-64

N、MV-22、MCH-101、

UH-2、SH-60J/K他

搭載艇：LCAC-1級エア・クッション型揚陸艇×3隻

搭載数：戦車5両、装甲戦闘車/装輪装甲車25両、榴弾砲8門、各種トラック6

8両、兵站車両10両および支援車両若干

同型艦 LHA-1 しなの

LHA-2 あかぎ

LHA-3 ちとせ

LHA-4 みずほ

LHA-5 くらま

1989年に就役した強襲揚陸艦。

自衛隊の現在の主力揚陸艦。LCCを3隻格納できる。

外観はいずれも型の飛行甲板艦首を四角形にしたもの。

○しきしま型強襲揚陸艦

艦種：強襲揚陸艦

建造所：アイ・エイチ・アイ マリンユナイテッド横浜工場

運用者：日本国海上自衛隊

建造期間：2009年 | 2015年

就役期間：2012年 | 就役中

建造数：5隻

前級：しなの型

次級：最新

基準排水量：48,560 t

満載排水量：50,870 t

全長：263.4 m

最大幅：32.3 m

吃水：8.7 m

機関方式・COGAG方式

主機：ディーゼル発電機×6基 + 補助電動機×2基

推進器：スクリュープロペラ×2軸

速力：最大29ノット

乗員：士官65名 + 下士官兵994名

上陸部隊1, 687 | 1, 871名

兵装 高性能20mm機関砲(CIWS)×2基

M2 12.7mm連装機銃×7基

ESSM 短SAM8連装ミサイル発射機×2基

Sea RAM 近SAM 発射機×2基

搭載機：30機(全てVTOR機の場合20機)

AV-8B ハリアーII、F-35B、AH-1Z ヴァイパー、AH-64

N、MV-22、MCH-101、UH-2、SH-60J/K他

搭載艇：LCAC-1級エア・クッション型揚陸艇×2艇

搭載数：戦車4両、装甲戦闘車/装輪装甲車20両、榴弾砲7門、各種トラック6

5両、兵站車両8両および支援車両若干

同型艦：LHD―6 しきしま

LHD―7 はつせ

LHD―8 さつま

LHD―9 やしま

LHD―10 ふじ

しなの型の発展型。

L C A C の搭載艇数が減った代わりに、いぶき型レベルの航空機運用能力を手に入れた。

また、LHDからLHDに艦種表記が変わっている。外観は現実のいぶき型にウエルドックをつけたの。

ミサイル巡洋艦

○しらつゆ型ミサイル巡洋艦

艦種：ミサイル巡洋艦

建造所：三菱重工業神戸造船所

運用者：日本国海上自衛隊

建造期間：1980年 — 1994年

就役期間：1983年 — 就役中

建造数：27隻

前級：きたかみ型

次級：あおぼ型

基準排水量：7,242 t

満載排水量：9,763 t — 10,010 t

全長：172.46 m

全幅：16.76 m

水線幅：18.0 m

吃水：7.46 m (最大10.51 m)

機関方式：COGAG方式

主機：GE LM2500—30ガスタービンエンジン(21,500bhp 16.04MW)×4基

推進器：可変ピッチプロペラ(5翔)×2軸

速力：最大30ノット

乗員：358名

兵装 62口径5インチ単装砲Mod. 4×2基

90式30mm単装機関砲×2基

高性能20mm機関砲CIWS×2基

M2 12.7mm単装機銃×4基

Mk. 41 mod. 2 VLS (61セル)×2基

SM-2 SAM

SM-3 ABM

VLA SUM

ESSM 短SAM

トマホーク TLAM

90式艦対艦誘導弾 (SSM-1B) 4連装発射筒×2基

324mm3連装短魚雷発射管×2基

艦載機：SH-60J/K×2機

海上自衛隊の主力巡洋艦。

外見はタイコンデロガ級ミサイル巡洋艦。

タイコンデロガ級では1〜5番艦は解体されたが、しらつゆ型は大改修した。

○あおば型ミサイル巡洋艦

艦種：ミサイル巡洋艦

建造所：三菱重工長崎造船所

運用者：日本国海上自衛隊

建造期間：1990年 — 1995年

就役期間：1993年 — 就役中

建造数：2隻

前級：しらつゆ型

次級：ふるたか型

準同型艦：ふるたか型

基準排水量：4,900トン

満載排水量：5,200トン

全長：170 m

最大幅：17.4 m

深さ：9.9 m

吃水：4.95 m

機関方式：COGAG方式

主機 TM3Bガスタービンエンジン(22, 500 shp)×2基

SM1Aガスタービンエンジン(13, 500 shp)×2基

推進器：可変ピッチ・プロペラ×2軸

乗員：285人

兵装 73式54口径5インチ単装速射砲×1基

高性能20mm機関砲 (CIWS)×2基

87式単装艦対地巡行ミサイル発射機

トマホーク・アメノハバヤSLCM

Mk. 41 mod. 2 VLS(64セル)×1基

SM-2 SAM

SM-3 ABM

ESSM 短SAM

VLA SUM

90式艦対艦誘導弾発射筒×2基

324mm3連装短魚雷発射管×2基

搭載機：SH-60J/K×1機

同型艦 CG-76 あおば

CG-77 きぬがさ

対地巡行ミサイルを積んだ巡洋艦。

トマホーク・アメノハバヤは日本が改造したトマホークで、射程3,000km、速度マッハ6.9、火力は通常型トマホークの5.8倍、誤差は5mmという超強力巡行ミサイル。

だが、代償として巨大化し、Mk.41VLSに入らなくなったため、本艦が建造された。

現在でも海上発射可能な艦は本艦型と後述のやまと型のみ。

凶悪な性能のため、アメリカやイギリスが購入したがっているが、まだ輸出されていない（試験用として3発だけアメリカに提供された）。

各国海軍との演習では真つ先に狙われる。また、その性能からアメリカでは『ロンギヌス』とも呼ばれる。

外見ははたかぜ型のアスロックの部分にVLSを追加し、第2砲塔を撤去してヘリコプター格納庫を作った。

○ふるたか型ミサイル巡洋艦

艦種：ミサイル巡洋艦

建造所：三菱重工業長崎造船所

運用者：日本国海上自衛隊

建造期間：1996年 — 1999年

就役期間：1999年 — 就役中

建造数：2隻

前級：しらつゆ型

次級：すずや型

準同型艦：あおば型

基準排水量：4,950トン

満載排水量：5,250トン

全長：170m

最大幅：17.4m

深さ：9.9m

吃水：4.95m

機関方式：COGAG方式

主機 TM3Bガスタービンエンジン(22,500shp)×2基

SMLAガスタービンエンジン(13,500shp)×2基

推進器：可変ピッチ・プロペラ×2軸

乗員：285人

兵装 62口径5インチ単装砲Mod. 4×2基

高性能20mm機関砲 (CIWS) ×2基

Mk. 41 mod. 2 VLS (64セル) ×1基

SM | 2 SAM

SM | 3 ABM

ESSM 短SAM

VLA SUM

トマホーク TLAM

Sea RAN 近SAM 21連装発射基×1基

90式艦対艦誘導弾発射筒×2基

324mm 3連装短魚雷発射管×2基

搭載機：SH | 60J / K ×1機

同型艦 CG | 78 ふるたか

CG | 79 かこ

あおば型の準同型艦。

トマホーク・アメノハバヤ発射基を撤去し、5インチ単装砲を取り付けた。外見はあおば型の発射基を撤去して5インチ砲をつけた。

○ふそう型ヘリコプター搭載型ミサイル巡洋艦

艦種：ヘリコプター搭載型護衛艦↓ヘリコプター搭載型ミサイル巡洋艦

建造所：アイ・エイチ・アイ マリンユナイテッド呉工場

運用者：日本国海上自衛隊

建造期間：1987年 — 1991年

就役期間：1990年 — 就役中

建造数：2隻

前級：しらね型

次級：最新

基準排水量：5,850トン

満載排水量：7,100トン

全長：159m

最大幅：18.5m

深さ：11.5m

吃水：5.6 m

主機：石川島播磨FWD2 2胴型水管缶（60kgf/cm²，480℃）×2

缶

石川島播磨2胴衝動型蒸気タービン（35,000hp）×2基

推進器：スクリュープロペラ×2軸

最大速度：32ノット

乗員・375名

兵装 73式54口径5インチ単装速射砲×2基

高性能20mm機関砲（CIWS）×2基

Sea RAM近SAMシステム×1基

Mk. 41 mod. 2 VLS（61セル）×1基

SM-2 SAM

SM-3 ABM

トマホーク TLAM

Mk. 41 mod. 2 VLS（16セル）×1基

VLSUM

ESSM 短SAM

90式艦対艦誘導弾4連装発射筒×2基

324mm3連装短魚雷発射管×2基

搭載機：MCH-101、SH-60J/K 哨戒ヘリコプター×3機

同型艦 DDH-179 ふそう

DDH-180 やましろ

はるな型の後継艦。

外見はしらね型のアスロックとシースパローの部分にVLSをつけた形。

○すずや型巡洋艦

艦種：ミサイル巡洋艦

建造所：三菱重工業香港造船所

運用者：日本国海上自衛隊

建造期間：2008年 — 2014年

就役期間：2011年 — 就役中

建造数：2隻

前級：あおば型・ふるたか型

次級：最新

基準排水量：9,785 t

満載排水量：11,689 t

全長：189.7 m

全幅：19.89 m

水線幅：19.72 m

吃水：8.98 m (11.32 m)

機関方式：COGAG方式

主機：GE LM2500—30ガスタービンエンジン (21,500 bhp 16.

04MW) × 4基

推進器：可変ピッチプロペラ (5翔) × 2軸

速度：最大30ノット

乗員：398名

兵装 62口径5インチ単装砲Mod. 4 × 1基

90式30mm単装機関砲 × 2基

高性能20mm機関砲CIWS × 2基

Sea LAM 近SAM21連装発射基 × 2基

M2 12.7mm単装機銃 × 4基

Mk. 41 mod. 2 VLS (64セル) × 2基

SM | 2 SAM

SM | 3 ABM

VLA SUM

ESSM 短SAM

トマホーク TLAM

90式艦対艦誘導弾 (SSM | 1B) 4連装発射筒 × 2基

324mm 3連装短魚雷発射管 × 2基

艦載機 : SH | 60J / K × 2機

同型艦 CG | 85 すずや

CG | 86 よしの

海上自衛隊最新型巡洋艦。世界最大のイージス艦。

外見はもがみ型を大きくしたもの。

ミサイル護衛艦 (ミサイル駆逐艦)

○ふぶき型護衛艦

艦種 : ミサイル護衛艦

建造所：三菱重工業香港造船所、他

運用人：日本国海上自衛隊

建造期間・1985年 — 1993年（ベースライン1）（DDG—101）DDG

—121）

1995年 — 1997年（ベースライン2）（DDG—122）DDG—

172）

1997年 — 現在（ベースライン3）（DDG—188）DDG—19

8）

2019年 — 現在（ベースライン4）（DDG—201）211）

就役期間・1991年 — 就役中（ベースライン1）

1998年 — 就役中（ベースライン2）

2000年 — 就役中（ベースライン3）

計画数：90隻予定

建造数 ベースライン1：20隻

ベースライン2：50隻

ベースライン3：10隻予定

ベースライン4：10隻予定

前級：はたかぜ型

次級：こんごう型・あたご型（まや型）

基準排水量：7, 250トン

満載排水量：8, 850―9, 700トン

全長 153, 77m ※ベースライン1, 2, 3

160m ※ベースライン4

最大幅：21m

深さ：12m

吃水：6.2m

機関方式：COGAG方式

主機・LM2500ガスタービンエンジン×4基

推進器：可変ピッチ・プロペラ×2軸

最大速度：30ノット

乗員：300人

兵装 54口径127mm単装速射砲×1基

90式30mm機関砲×2基

高性能20mm機関砲（CIWS）×2基

Mk. 41 mod. 6 VLS (29+61セル) ※ベースライン1, 2
 (32+64セル) ※ベースライン3, 4

SM | 2 SAM

SM | 3 ABM

VLA SUM

シースパロー 短SAM

ESSM 短SAM

トマホーク TLAM

ハーブーン SSM4 連装発射筒×2基 ※ベースライン1

90式艦対艦誘導弾発射筒×2基 ※ベースライン2, 3, 4

324mm3連装短魚雷発射管×2基

搭載機 SH | 60J / K×2機 ※ベースライン3, 4のみ, 1, 2は給油設備の

み

海上自衛隊の防空中枢護衛艦。イージスシステム搭載。

外見はアーレイ・バーク級（ベースラインはフライトI、ベースライン2, 3はフライトII、IIA、ベースライン4はフライトIII）

○こんごう型護衛艦

艦種：ミサイル護衛艦

建造所：三菱重工長崎造船所

運用者：日本国 海上自衛隊

建造期間：1990年 — 1998年

就役期間：1993年 — 就役中

建造数：4隻

前級・ふぶき型

次級・あたご型

基準排水量：7,250トン

満載排水量：9,485トン

全長：161 m

最大幅：21 m

深さ：12 m

吃水：6.2 m

機関方式：COGAG方式

主機・LM2500ガスタービンエンジン×4基

推進器：可変ピッチ・プロペラ×2軸

最大速度：30ノット

乗員：300人

兵装 54口径127mm単装速射砲×1基

高性能20mm機関砲(CIWS)×2基

Mk. 41 mod. 6 VLS (29+61セル)

SM-2 SAM

SM-3 ABM

VLA SUM

シースパロー 短SAM

ESSM 短SAM

トマホーク TLAM

ハーブーン SAM4連装発射筒×2基

324mm3連装短魚雷発射管×2基

搭載機：ヘリコプター甲板のみ

同型艦 DDG-173 こんごう

DDG-174	きりしま
DDG-175	みょうこう
DDG-176	ちようかい

ふぶき型ベースライン1の能力向上型として建造された護衛艦。
外見・能力共にこの世界と変わり無し（ESSM・シースパローが使えるようになったぐらい）

○あたご型護衛艦

艦種：ミサイル護衛艦

建造所：三菱重工業長崎造船所

運用者：日本国海上自衛隊

建造期間：1998年 — 2006年

就役期間：2001年 — 就役中

建造数：4隻

前級：こんごう型・ふぶき型

次級：やまと型

基準排水量：7,750～8,200トン

満載排水量：10,000～10,250トン

全長：165～170 m

最大幅：21 m

深さ：12 m

吃水：6.2 m

機関方式：COGAG方式・COGLAG方式

主機：LM2500ガスタービンエンジン×4基

推進器：可変ピッチ・プロペラ×2軸

速力：30ノット以上

乗員：300人

兵装 62口径5インチ単装砲×1基

高性能20mm機関砲×2基

Mk. 41 mod. 20 VLS (64+32セル)

SM | 2 SAM

SM | 3 ABM

VLA SUM

ESSM 短SAM

トマホーク TLAM

90式艦対艦誘導弾 4連装発射筒×2基

324mm3連装短魚雷発射管×2基

搭載機：SH-60J/K哨戒ヘリコプター×1機

同型艦 DDG-177 あたご

DDG-178 あしがら

DDG-179 まや

DDG-180 はぐろ

ふぶき型ベースライン2の能力向上型として建造された。

あたご・あしがらとまや・はぐろは各部に差があるため、区別される場合もある。

○やまと型護衛艦

艦種：ミサイル護衛艦

建造所：三菱重工香港造船所

運用者：日本国海上自衛隊

建造期間：2006年 | 2015年

就役期間：2009年 | 就役中

建造数：8隻

前級：あたご型

次級：最新

基準排水量：11,950トン

満載排水量：13,650トン

全長：178m

最大幅：21.8m

深さ：12m

吃水：6.2m

機関方式：COGAG方式・COGLAG方式

主機：LM2500ガスタービンエンジン×4基

推進器：可変ピッチ・プロペラ×2軸

速度：30ノット以上

乗員：300人

兵装 62口径5インチ単装砲×1基

高性能20mm機関砲×2基

SeaRAM 近SAMシステム×2基

Mk. 41 mod. 20 VLS (64+32セル)

SM | 2 SAM

SM | 3 ABM

SM | 6 ERAM

VLA SUM

ESSM 短SAM

01式垂直発射装置(16セル)

トマホーク・アメノハバヤ

90式艦対艦誘導弾 4連装発射筒×2基

324mm3連装短魚雷発射管×2基

搭載機: SH-60J/K哨戒ヘリコプター×1機

同型艦 DDG | 212 やまと

DDG | 213 むさし

DDG | 214 たかお

DDG | 215 はるな

DDG	—	216	ひえい
DDG	—	217	みかさ
DDG	—	218	はるか
DDG	—	219	みらい

海上自衛隊最新鋭・最強のイージス艦。AI戦闘システム『高天原』を搭載し、高度な戦闘システムを誇る。

あおば型と同じく、トマホーク・アメノハバヤを搭載可能。

汎用護衛艦

○むらさめ型護衛艦

艦種：汎用護衛艦

運用者：日本国海上自衛隊

建造期間：1986年 — 1999年

就役期間：1989年 — 就役中

建造数：9隻

前級・あさぎり型

次級・たかなみ型

基準排水量：4,550トン

満載排水量：6,200トン

全長 151 m

最大幅 17.4 m

深さ・10.9 m

吃水・5.2 m

機関方式・COGAG方式

主機 LM2500ガスタービンエンジン(16,500ps)×2基

SM1Cガスタービンエンジン(13,500ps)×2基

推進器 可変ピッチ・プロペラ×2軸

最大速力・30ノット

乗員・165名

兵装 62口径76ミリ単装速射砲×1基

高性能20mm機関砲×2基

Mk.48 mod.0↓4 VLS(16セル)×1基

シースパロー／ESSM短SAM

Mk. 41 mod. 9 VLS (16セル) × 1基
 VLA SUM

ハーブーンSSM 4連装発射筒 × 2基

324mm 3連装短魚雷発射管 × 2基

搭載機・SH-60J/K哨戒ヘリコプター × 1機

第2世代汎用護衛艦。

基本的に現実と変わり無し。

建造年が早くなっただけ。

○たかなみ型護衛艦

艦種・汎用護衛艦

運用者 日本国海上自衛隊

建造期間・1991年 | 2002年

就役期間・1994年 | 就役中

建造数・5隻

前級・むらさめ型

次級・かげろう型

基準排水量 4,650トン
 満載排水量 6,300トン

全長・151 m

最大幅・17.4 m

深さ・10.9 m

吃水・5.3 m

機関方式・COGAG方式

主機 LM2500ガスタービンエンジン(16,500ps)×2基

SM1Cガスタービンエンジン(13,500ps)×2基

推進器 可変ピッチ・プロペラ×2軸

最大速度・30ノット

乗員・175名

兵装 54口径127mm速射砲×1基

高性能20mm機関砲(CIWS)×2基

Mk.41 mod.9 VLS(32セル)×1基

シースロー短SAM

ESSM短SAM

V L A S U M

90式艦対艦誘導弾SSM 4連装発射筒×2基

324mm3連装短魚雷発射管×2基

搭載機・SH-60J/K哨戒ヘリコプター×1(2)機

第2世代汎用護衛艦。

基本的に現実と変わり無し。

こちらも建造年が早くなっただけ。

○かげろう型護衛艦

艦種・汎用護衛艦

運用者 日本国海上自衛隊

建造期間・2003年 | 2010年

就役期間・2006年 | 就役中

建造数 10隻

前級・たかなみ型

次級・ゆうぐも型

基準排水量 4,890トン

満載排水量 6,500トン

全長・156 m

最大幅 18.5 m

深さ・11.4 m

吃水・5.6 m

機関方式・COGAG方式

主機・LM2500ガスタービンエンジン(16,500ps)×2基

SMICガスタービンエンジン(13,500ps)×2基

推進器・可変ピッチ・プロペラ×2軸

最大速度・30ノット

乗員・170名

兵装 62口径76ミリ単装速射砲×1基

高性能20mm機関砲(CIWS)×2基

Mk.41 mod.20VLS(32セル)×1基

SM-2 SAM

ESSM 短SAM

Mk.41 mod.20 VLS(16セル)×1基

VLA SUM

トマホーク T L A M

90式艦対艦誘導弾 S S M 4連装発射筒×2基

324mm3連装短魚雷発射管×2基

搭載機・S H | 60 J / K 哨戒ヘリコプター×1機

第3世代汎用護衛艦。

むらさめ型の発展型で、S M | 2の発射機能がついた。
外見はむらさめ型。

○ゆうぐも型護衛艦

艦種・汎用護衛艦

運用者・日本国海上自衛隊

建造期間・2005年 | 2014年

就役期間・2008年 | 就役中

建造数・10隻

前級・かげろう型

次級・あきづき型

基準排水量 4, 850トン

満載排水量 6, 450トン

全長・158 m

最大幅 18.4 m

深さ・11.9 m

吃水・7.3 m

機関方式・COGAG方式

主機 LM2500ガスタービンエンジン(16, 500ps)×2基

SM1Cガスタービンエンジン(13, 500ps)×2基

推進器・可変ピッチ・プロペラ×2軸

最大速度・30ノット

乗員・175名

兵装 54口径127mm速射砲×1基

高性能20mm機関砲(CIWS)×2基

Mk.41 mod.20 VLS(32セル)×1基

SM-2 SAM

ESSM 短SAM

トマホーク T L A M

M k. 4 1 m o d. 2 0 V L S (1 6 セル) × 1 基

V L A S U M

9 0 式艦対艦誘導弾 S S M 4 連装発射筒 × 2 基

3 2 4 m m 3 連装短魚雷発射管 × 2 基

搭載機・S H | 6 0 J / K 哨戒ヘリコプター × 2 機

第3世代汎用護衛艦。

たかなみ型の発展型で、S M | 2 の発射機能が着いた。
外見はたかなみ型。

○あきづき型護衛艦

艦種・汎用護衛艦 (D D)

運用者 日本国海上自衛隊

建造期間・2 0 0 7 年 | 2 0 1 4 年

就役期間・2 0 1 0 年 | 就役中

建造数・1 0 隻

前級・ゆうぐも型

次級・あさひ型

基準排水量・5,150トン

満載排水量・6,950トン

全長・160 m

最大幅・18.3 m

深さ・10.9 m

吃水・5.4 m

機関方式・COGAG方式

主機・SM1Cガスタービンエンジン(16,000ps)×4基

推進器・可変ピッチ・プロペラ×2軸

最大速度・30ノット

乗員・約200名

兵装 62口径5インチ単装砲×1基

高性能20mm機関砲(CIWS)×2基

Mk.41 mod.29 VLS(32セル)×1基

SM-2 SAM

ESSM短SAM

トマホーク T L A M

M k. 41 mod. 29 V L S × 1 基

07式 S U M

90式艦対艦誘導弾 S S M 4連装発射筒 × 2基

324mm 3連装短魚雷発射管 × 2基

搭載機・S H | 60 K 哨戒ヘリコプター × 2機

第4世代汎用護衛艦。

現実と変わり無し。

S M | 2が発射可能になり、16セル増えた。

10隻建造された。

○あさひ型護衛艦

艦種・汎用護衛艦

運用者・海上自衛隊

建造期間・2008年 | 2015年

就役期間・2011年 | 就役中

建造数・10隻

前級・あきづき型

次級・最新

基準排水量・5,250トン

満載排水量・6,880トン

全長・160m

最大幅・19.3m

深さ・11.9m

吃水・5.7m

機関方式・COGLAG方式

主機・LM2500IECガスタービンエンジン×2基

推進器・可変ピッチ・プロペラ×2軸

最大速力・30ノット

乗員・約230名

兵装 62口径5インチ単装砲×1基

高性能20mm機関砲(CIWS)×2基

Mk.41 mod.9 VLS(32セル)×1基

SM-2 SAM

E S S M 短 S A M

トマホーク T L A M

M k . 4 l m o d . 9 V L S (1 6 セル) × 1 基

0 7 式 S U M

9 0 式艦対艦誘導弾 4 連装発射筒 × 2 基

3 2 4 m m 3 連装短魚雷発射管 × 2 基

搭載機 ・ S H - 6 0 K 哨戒ヘリコプター × 1 機

第 4 世代汎用護衛艦。

現実と変わり無し。

S M - 2 が発射可能になった。

フリゲート

○むつき型護衛艦 (フリゲート)

艦種 ・ フリゲート

運用者 ・ 海上自衛隊

建造期間 ・ 2 0 0 8 年 | 2 0 1 3 年

就役期間・2009年 — 就役中

建造数・10隻（1～5番艦がベースライン1、6～10番艦がベースライン2）

前級・たつた型

次級・最新（もがみ型）

満載排水量 5,950 t

全長・142.0 m

全幅・19.4 m

機関方式・CODLAG

主機 LM2500+G4ガスタービンエンジン（43,500 shp）×1基

推進・スクリュープロペラ×2軸

速度・最大27 kt

乗員 145名

兵装 54口径127mm単装速射砲（コンパクト砲）「ベースライン1のみ」

62口径5インチ砲（Mod.4）「ベースライン2のみ」

62口径76mm単装砲×1基「ベースライン1のみ」

Sea LAM 近SAM ×1基「ベースライン2のみ」

高性能20mm機関砲（CIWS）×2基「両ベースラインに搭載」

96式30mm連装機関砲×2基
 Mk. 41 VLS (16セル)×1基

ESSM 短SAM

07式VLA SUM

Sea RAM×1基

90式艦対艦誘導弾4連装発射筒×4基

324mm3連装短魚雷発射管×2基

艦載機・SH-60J/K哨戒ヘリコプター×1機

イタリアと共同開発したフリゲート。イタリアではカルロ・ベルガミーニ級フリゲートとして就役。

外見はアメリカのコンステレーション級ミサイルフリゲート。

○あさぎり型護衛艦(フリゲート)

艦種・汎用護衛艦

運用者・日本国海上自衛隊

建造期間・1980年 | 1987年

就役期間・1983年 | 現在

建造数・8隻

前級・きたかぜ型

次級・むらさめ型

基準排水量・3,500トン

満載排水量・4,900トン

全長・137.4m

最大幅・14.6m

深さ・8.8m

吃水・4.4m

機関方式・COGAG方式

主機・SM1Aガスタービンエンジン(13,500PS)×4基

推進器・可変ピッチ・プロペラ×2軸

最大速度・30ノット

乗員・220名

兵装 62口径76mm単装速射砲×1基

高性能20mm機関砲(CIWS)×2基

SeaLAM近SAM×1基

Mk. 41 mod. 9 VLS×1基

ESSM 短SAM

VLA SUM

ハーブーン SSM4連装発射筒×2

324mm3連装短魚雷発射管×2基

搭載機・SH-60J哨戒ヘリコプター×1機

あさぎり型護衛艦を改装したもの。

アスロツクの部分にVLS、シースパローの部分にSea LAMを追加した。

○もがみ型護衛艦（多目的護衛艦）

艦種・多機能護衛艦（フリゲート）

運用者 日本国海上自衛隊

建造期間・2005年 | 建造中

就役期間・2008年 | 就役中

計画数・22隻

建造数・20隻（2021年6月現在）

前級・たつた型

次級 最新（むつき型）

基準排水量 3,900トン

満載排水量 5,500トン

全長・133.0 m

最大幅・16.3 m

深さ・9.0 m

機関方式・CODAG方式

主機 MT30ガスタービンエンジン×1基

MAN社12V28/33D STC ディーゼルエンジン×2基

推進器・スクリュープロペラ×2軸

最大速力・30ノット

乗員・約90名

兵装 62口径5インチ砲×1基

RWS×2基

Mk.41 VLS (16セル)×1基

ESSM 短SAM

07式VLA SUM

Sea RAM×1基

17式SSM 4連装発射筒×2基

324mm3連装短魚雷発射管×2基

搭載機・SH-60K哨戒ヘリコプター×1機

基本的に現実と変わり無し。

建造年が早くなっただけ。

護衛艦

○やまぎり型護衛艦

艦種・護衛艦

運用者・日本国海上自衛隊

建造期間・1975年 | 1990年

就役期間・1977年 | 現在

建造数 59隻(14隻現役、1隻練習艦)

前級・ちはや型

次級・あぶくま型

基準排水量 3,225 t

満載排水量 4,100トン

全長 137.4m

最大幅 14.6 m

吃水 4.4 m

機関方式・COGAG方式

主機・SM1Aガスタービンエンジン(13,500ps)×4基

推進器・可変ピッチ・プロペラ×2軸

最大速度・30ノット

乗員・220名

兵装 62口径76mm単装速射砲×1基

高性能20mm機関砲(CIWS)×2基

Mk.38 25mm単装機銃×2基

Mk.13 mod.4 ミサイル単装発射機×1基

SM-1MR SAM

ハーブーン SSM4連装発射筒×2

324mm3連装短魚雷発射管×2基

搭載機・SH-60J哨戒ヘリコプター×1機

同型艦 DD-293 やまぎり

日本版O・Hペリー級。外見はあぶくま型の主砲と艦橋の間にMk. 13発射機を入れて、後部にヘリコプター格納庫を追加したの。地方護衛隊で運用中。

○はるぐも型護衛艦

艦種・護衛艦

運用者・日本国海上自衛隊

建造期間・1969年 — 1975年

就役期間・1972年 — 現在

建造数 31隻(14隻現役、2隻練習艦)

前級・はつゆき型

次級・きたかぜ型

基準排水量 3,500トン

満載排水量 4,900トン

全長・137.4m

最大幅・14.6m

深さ・8.8m

吃水・4.4m

機関方式・COGAG方式

主機・SM1Aガスタービンエンジン（13, 500ps）×4基

推進器・可変ピッチ・プロペラ×2軸

最大速度・30ノット

乗員・220名

兵装 73式54口径5インチ単装速射砲×1基

高性能20mm機関砲×2基

Mk. 13 mod. 4 ミサイル単装発射機×1基

SM-1MR SAM

Mk. 41 mod. 9 VLS×1基

ESSM 短SAM

VLA SUM

ハーブーン SSM4連装発射筒×2

324mm3連装短魚雷発射管×2基

搭載機・SH-60J哨戒ヘリコプター×2機

海上自衛隊の護衛艦。外見ははつゆき型の主砲を127mm単装砲へ変更、後部の

シースパローをMk. 13発射機に変更した物。地方護衛隊で運用中。
嚮導護衛艦

○きたかぜ型嚮導護衛艦

艦種・汎用護衛艦

運用者・日本国海上自衛隊

建造期間・1974年 — 1979年

就役期間・1976年 — 現在

建造数・23隻(7隻現役、2隻練習艦)

前級・はるぐも型

次級・あさぎり型

基準排水量・3,500トン

満載排水量・4,900トン

全長・137.4m

最大幅・14.6m

深さ・8.8m

吃水・4.4m

機関方式・COGAG方式

主機・S M 1 A ガスタービンエンジン (13, 500 P S) × 4 基

推進器・可変ピッチ・プロペラ × 2 軸

最大速度・30ノット

乗員・220名

兵装 62口径5インチ単装砲 × 2 基

高性能20mm機関砲 (C I W S) × 2 基

M k. 41 mod. 9 V L S × 1 基

E S S M 短 S A M

V L A S U M

ハーブーン S S M 4 連装発射筒 × 2

324mm3連装短魚雷発射管 × 2 基

搭載機・S H - 60 J 哨戒ヘリコプター × 1 機

海上自衛隊の嚮導護衛艦。外見は S e a R A M ではなく5インチ単装砲を乗せたあ

さざり型。

地方護衛隊で運用中。

揚陸艦

○いず型輸送揚陸艦

艦種・ドック型輸送揚陸艦

運用者 日本国海上自衛隊

建造期間・2005年—建造中

就役期間・2008年 — 就役中

建造数・24隻

前級 おがさはら級

次級・最新

基準排水量・19,500トン

満載排水量・26,000トン

全長・219.8m

最大幅 28m

吃水・7.1m

機関方式・CODAG方式

主機 MT30ガスタービンエンジン×1基

MAN社12V28/33D STC デイゼルエンジン×2基

推進器・スクリーンプロペラ×2軸

最大速力・25ノット

乗員・120名

兵装 62口径76mm単装速射砲（スーパー・ラピッド砲）×1基

高性能20mm機関砲（CIWS）×4基

Sea LAM 近SAM×3基

搭載機 SH-60J/K、MCH-101、MV-22他

搭載艇・LCCA-1級エア・クッション型揚陸艇×3艇

海上自衛隊の主力輸送揚陸艦。

外見はサン・アントニオ級ドック型輸送揚陸艦を少し伸ばしたの。

○つがる型揚陸艦

艦種・ドック型揚陸艦

運用者 日本国海上自衛隊

建造期間・1981年 | 1992年

就役期間・1985年 | 就役中

建造数・12隻

前級・よなぐに型

次級 最新

基準排水量・11,099—11,590 t

満載排水量・15,883—16,568 t

全長・185.8 m

最大幅・25.60 m

吃水・6.25 m

機関方式・CODAD方式

主機・コルトーピルスティック16PC2—5 V400ディーゼルエンジン×4基

推進器・可変ピッチ・プロペラ×2軸

最大速度・22ノット

乗員 士官21名+曹士289—299名

揚陸部隊：士官27名+曹士375名

兵装 高性能20mm機関砲(CIWS)×2基

90式30mm機関砲×2基

Sea LAM 近SAM×3基

海上自衛隊の揚陸艦。

外見はおおすみ型の艦橋を前方に動かして左右に伸ばし、後ろにクレーンなどをつけたの。

輸送艦

○おおすみ型輸送艦

種別・輸送艦

運用者・日本国 海上自衛隊

建造期間・1995年 | 2003年

就役期間・1998年 | 就役中

建造数・3隻

前級・みうら型

次級・最新

基準排水量・8,900 t

満載排水量・14,000 t

全長・178.0 m

最大幅・25.8 m

深さ・17.0 m

吃水・6.0 m

主機・三井16V42M—Aディーゼルエンジン×2基

推進器・可変ピッチ・プロペラ×2軸

最大速度・22ノット

乗員・135名

兵装・高性能20mm機関砲(CIWS)×2基

搭載艇・エアクッション型揚陸艇(LCAC)×2隻

基本的に現実と変わり無し。

哨戒艦

○みねかぜ型哨戒艦

種別・哨戒艦

運用者 日本国海上自衛隊

建造期間・1998年—2010年

就役期間・1999年— | 就役中

建造数・30隻

前級・うみ型

次級・最新

基準排水量・1,980 t

満載排水量・2,500 t

全長・110 m

最大幅・13.5 m

深さ・5.5 m

吃水 4.6 m

主機・三井16V42M—Aディーゼルエンジン×2基

推進器・可変ピッチ・プロペラ×2軸

最大速度・27ノット

乗員・90名

兵装 62口径76mm単装速射砲（スーパー・ラピッド砲）×2基

90式艦対艦誘導弾発射筒×2基

Sea RAM 近SAM×1基

90式30mm単装機関砲×2基

324mm3連装短魚雷発射管×2基

搭載機 SH—60J/K×1機

海上自衛隊の哨戒艦。

外見はもがみ型を小さくしてVLSを付ける部分に76mm砲をつけたの。
○かみかぜ型哨戒艦

艦種・哨戒艦

運用者 日本国海上自衛隊

建造期間 2000年—2013年

就役期間 2002年—就役中

建造数 20隻

前級 むつき型

次級 最新

満載排水量・1,520トン

全長・88.4メートル

最大幅・12.2メートル

吃水・4.6メートル

主機・三井16V42M—Aディーゼルエンジン×2基

推進器・可変ピッチ・プロペラ×2軸

速力・25ノット

乗員・80名

兵装 62口径76mm単装速射砲×1基

Sea LAM 近SAM ×1基

90式単装30mm機関砲機関砲×2基

90式艦対艦誘導弾発射筒×2基

搭載機 SH-60J/K

もがみ型の小型版。

外見はイタリア海軍のコマンダンテ級哨戒艦をもがみ型に近くした感じ。

ミサイル艇

○はやぶさ型ミサイル艇

艦種・ミサイル艇

運用者・日本国 海上自衛隊

建造期間・1996年—2005年

就役期間・1997年— 就役中

建造数・30隻

前級・1号型

次級・さくら型ミサイル艇

基準排水量・200トン

満載排水量・240トン

全長・50.1 m

最大幅・8.4 m

深さ・4.2 m

吃水・1.7 m

主機・LM500—G07ガスタービンエンジン×3基

推進器・ウォータージェットポンプ×3基

速力・最大44ノット

兵装 62口径76ミリ単装速射砲×1基

90式SSM連装発射筒×2基

海上自衛隊のミサイル艇。

基本的に現実と変わり無し。

建造数が増えただけ。

○さくら型ミサイル艇

艦種・ミサイル艇(PG)

運用者・海上自衛隊

建造期間・2000年 | 2010年

就役期間・2001年 | 就役中

建造数・20隻

前級・はやぶさ型ミサイル艇

次級・まつ型ミサイル艇

基準排水量・210トン

満載排水量・250トン

全長・55.1m

最大幅・8.4m

深さ・4.2m

吃水・1.7m

主機・LM500—G07ガスタービンエンジン×3基

推進器・ウォータージェットポンプ×3基

速度・最大44ノット

兵装 62口径76ミリ単装速射砲×1基

90式SSM連装発射筒×2基

90式単装30mm機関砲×1基

Sea RAM 近SAM×1基

海上自衛隊のミサイル艇。

外見ははやぶさ型を伸ばして複合艇がある所にSSM、SSMがあつたところにRAMを追加した。

○まつ型ミサイル艇

艦種・ミサイル艇

運用者・海上自衛隊

建造期間・2005年 | 2015年

就役期間・2006年 | 就役中

建造数・6隻

前級・さくら型ミサイル艇

次級・なし

基準排水量・300トン

満載排水量・340トン

全長・62.3m

最大幅・8.8 m

深さ・4.6 m

吃水・1.92 m

主機・LM500—G07ガスタービンエンジン×3基

推進器・ウォータージェットポンプ×3基

速度・最大40ノット

兵装 62口径76ミリ単装速射砲×2機

90式SSM連装発射筒×2基

93式近距離地对空誘導弾×1基

96式40mm連装機関砲×1基

JM61—RFS 20mm機銃×2基

はやぶさ型の発展型。

外見ははやぶさ型を大きくし、複合艇のところに近SAMとSSMを入れ、SSMのあつたところに40mmと76mm砲を配置した形。

潜水艦

原子力潜水艦

○たいげい型原子力潜水艦

種別・攻撃型原子力潜水艦

運用者 日本国海上自衛隊

建造期間・1990年 | 2010年

就役期間・1993年 | 就役中

建造数・30隻

前級・はるしお型

次級・最新

基準排水量・5,930 t

水中排水量・7,300 t

全長・109.0 m

最大幅・10.1 m

深さ・10.3 m

吃水・9.85 m

機関 原子力ギアード・タービン推進 (30,000 s h p)

S6G型加圧水型原子炉・1基

蒸気タービン・2基

2次推進モーター(325HP)・1基

推進器・スクリュープロペラ×1軸

速力 水上：24ノット

水中：35ノット

乗員・127名

兵装 HU-606 533mm魚雷発射管×6門

89式魚雷

ザブロック UUM

ハーブーン USM

トマホーク SLCM

トマホーク SLCM用VLS×12基

潜水艦魚雷防御システム

海上自衛隊の主力原子力潜水艦。

外見はそうりゆう型をロサンゼルス級並みに大きくしたの。

巡行ミサイル潜水艦

○おやしお型巡行ミサイル潜水艦

種別・巡行ミサイル潜水艦

運用者・海上自衛隊

建造期間・1980年—1990年

就役期間・1983年— 就役中

建造数・11隻

前級・ゆうしお型

次級・あさしお型

基準排水量・2,750トン

水中排水量・3,500トン

全長・92.0m

最大幅・8.9m

深さ・10.3m

吃水・7.4m

機関方式・ディーゼル・エレクトリック方式

主機 川崎12V25/25Sディーゼル機関×2基

推進器・スクリューパー×1軸

速力 20ノット

乗員・70名

兵装 HU-605 533mm魚雷発射管×6門

89式魚雷

ハーブーンUSM

トマホークSLCM用VLS ×10基

トマホーク SLCM

海上自衛隊の巡行ミサイル潜水艦。通常動力。

外見はおやしお型が伸びただけ。

○あさしお型巡行ミサイル潜水艦

艦種・巡行ミサイル原子力潜水艦

建造期間・1970年 | 1989年

就役期間・1973年 | 就役中

建造数 18隻

前級 おやしお型

次級・最新

排水量 18,750 t

全長・170・67 m

全幅・12・8 m

吃水・11・1 m

機関 原子力蒸気タービン推進 (60,000 shp)

三菱重工業社製 S8G 加圧水型原子炉・1基

蒸気タービン・2基

推進器 スクリュープロペラ 1軸

速力・35ノット

乗員・155名

兵装 HU-605 533 mm 魚雷発射管×4門

89式魚雷

ハープーン U S M

Mk. 45 V L S × 24基

トマホーク S L C M

海上自衛隊の巡行ミサイル原子力潜水艦。

元々は弾道ミサイル原子力潜水艦だったが、せいりゆう型の就役によって巡行ミサイ

ル原子力潜水艦になった。

外見はオハイオ級。

弾道ミサイル潜水艦

○せいりゆう型弾道ミサイル潜水艦

艦種・戦略ミサイル原子力潜水艦

建造期間・2000年—建造中

就役期間・2003年—就役中

建造数 20隻

前級・あさしお型

次級・最新

排水量 20,810 t

全長・170・99 m

全幅・13・1 m

吃水・11・1

機関 原子力ターボ・エレクトリック方式

三菱重工業社製S1B加圧水型原子炉・1基

ポンプジェット推進・1軸

速力・25ノット

乗員・155名

兵装 HU-607 533mm魚雷発射管×6基

89式魚雷

ハーブーン・ブロック2 (UGM-84L) USM

ミサイルハッチ×26基

天雷A5 SLBM

海上自衛隊の弾道ミサイル原子力潜水艦。

26基の弾道ミサイル発射管を備える。

通常動力型潜水艦

○そうりゆう型潜水艦

種別・通常動力型潜水艦

運用者・日本国海上自衛隊

建造期間・2002年 — 2018年

就役期間・2005年 — 就役中

建造数・35隻

前級・おやしお型

次級・最新

基準排水量・2,900トン

水中排水量・4,200トン

全長・84.0m

最大幅・9.1m

深さ・10.3m

吃水・8.5m

機関方式 ディーゼル・スターリング・エレクトリック方式(10番艦まで)

ディーゼル・エレクトリック方式(11番艦以降)

主機 川崎12V25/25SBディーゼル機関×2基

川崎/コックムス4V-275R MkIIIスターリング機関×4基(10番

艦まで)

鉛蓄電池(10番艦まで)

リチウムイオン電池（11番艦以降）

推進電動機×1基

推進器・スクリュープロペラ×1軸

速度・水上：13ノット（24 km/h）

水中：20ノット（37 km/h）（10番艦まで）、18ノット（33 k

m/h）（11番艦以降）

乗員・65名

兵装 HU—606 533mm魚雷発射管×6門

89式魚雷

ハープーンUSM

潜水艦魚雷防御システム（8番艦以降）

海上自衛隊の潜水艦。通常動力。現実と変わり無し。建造年が早くなっただけ。

原子力ミサイル巡洋艦

○アマテラス型原子力ミサイル巡洋艦

艦種・原子力ミサイル巡洋艦

運用者・日本国海上自衛隊

建造期間・2010年―2017年

就役期間・2013年―現在

計画数・31隻

建造数・3隻

前級・無し

次級・最新

満載排水量・14,797 t

全長・210 m

幅・24.5 m

吃水・8.4 m

機関方式・原子力機関

主機・APWR 2 原子炉×2基

推進器・スクリーンプロペラ 2軸

速度・最大30.3ノット

乗員・106名

兵装 三菱62口径205mm連装砲×3基

18式電磁投射砲×1基

90式単装30mm機関砲×2基

Mk. 41 VLS (64セル) × 6基

SM | 2 SAM

SM | 3 ABM

ESSM 短SAM

トマホーク SLCM

搭載機 SH | 60K × 2機

FFOSN | 2 UAV × 3機

同型艦 CGN | 6 アマテラス

CGN | 7 ヤマトタケル

CGN | 8 スサノオ

海上自衛隊が誇る最強巡洋艦。

独自のレーダーシステムにより100目標を同時に撃墜できる能力を持つ。

だが、値段が高すぎる。

各国海軍との演習では「勝負にならないからアマテラス型だけは出さないでくれ」と頼まれたほど。

外見はズムウォルト級の伸ばして後部に2個砲塔をつけたの。色は変わる。

原子力ミサイル駆逐艦

○イザナミ型原子力ミサイル駆逐艦

艦種・原子力ミサイル駆逐艦

運用者・日本国海上自衛隊

建造期間・2011年 | 建造中

就役期間・2016年 | 現在

計画数・20隻

建造数・2隻

前級 無し

次級 最新

満載排水量・14,797 t

全長・183 m

幅・24.5 m

吃水・8.4 m

機関方式 原子力方式

主機 APWR | 三菱重工業社製×2基

推進器・スクリュープロペラ 2軸

速度・最大30ノット

乗員・106名

兵装 AGS 62口径155mm単装砲×2基

90式30mm機関砲×2基

Mk. 57 VLS (20セル)×4基

ESSM 短SAM

トマホーク SLCM

搭載機・SH-60K×2機+

FFOSN-1 UAV×3機

同型艦 DDGN-1 イザナミ

DDGN-2 イザナギ

DDGN-3 タケミカヅチ

海上自衛隊の原子力ミサイル駆逐艦。

外見はズムウォルト級。

戦艦

○きい型戦艦

艦種・戦艦

運用者・大日本帝国海軍↓日本国海上自衛隊

建造期間・1941年—1943年

就役期間・1944年—就役中(3回予備役)

計画数・4隻

建造数・2隻

前級・とさ型戦艦

次級—最新

要目

基準排水量・84,890 t

満載排水量・102,580 t

全長・328.6 m

最大幅・39.4 m

吃水・12.3 m (公試状態・平均)

主機・艦本式タービン×4基

推進器・スクリューパー×4軸

速力・28ノット

乗員・約2,950名

兵装 45口径51cm連装砲×4基

54口径127mm単装速射砲×6基

62口径5インチ単装砲×4基

62口径76mm単装速射砲×10基

Mk. 41 VLS (64セル)×8基

SM-2 SAM

SM-3 ABM

ESSM 短SAM

VLA SUM

90式艦対艦誘導弾 SSM

トマホーク SLAM

90式艦対艦誘導弾発射筒×4基

高性能20mm機関砲(CIWS)×8基

Sea LAM 近SAM×4基

90式連30mm機関砲×4基

M 2 12.7 mm 重機関銃 × 多数

搭載機 SH-60J/K × 4機

MCH-101 × 2機

同型艦 BB-42 きい

BB-43 ひぜん

海上自衛隊の戦艦。超大和型。世界最大の戦艦としてギネスに乗っている。
第2次世界大戦ではドイツ海軍相手に大暴れし、「ミヨルニル」と恐れられた。
外見はWOWSの薩摩を近代化改装したの。

○とさ型戦艦

艦種・戦艦

運用者・大日本帝国海軍↓日本国海上自衛隊

建造期間・1939年—1942年

就役期間・1942年—就役中（4回予備役）

計画数・2隻

建造数・1隻

前級・大和型戦艦

次級 さい(紀伊)型戦艦

基準排水量・68,000 t

満載排水量・76,800 t

全長 279.40 m

最大幅・38.9 m

吃水・10.4 m

主缶・口号艦本式重油専焼水管缶×12基

主機・艦本式タービン×4基

推進器・スクリュープロペラ×4軸

速度・27ノット

乗員・約2,500名

兵装 45口径46cm3連装砲×4基

60口径15.5cm3連装砲×4基

54口径127mm単装砲×8基

Mk.41 VLS (64セル)×4基

SM-2 SAM

S M | 3 A B M

E S S M 短 S A M

V L A S U M

9 0 式艦対艦誘導弾 S S M

トマホーク S L A M

高性能 2 0 m m 機関砲 (C I W S) × 6 基

9 0 式艦対艦誘導弾発射筒 × 4 基

搭載機 S H | 6 0 K × 6 機

同型艦 B B | 4 1 とさ

海上自衛隊の戦艦。改大和型。

外見は大和型を伸ばして第4砲塔を追加したの。

大型ミサイル巡洋艦

○あづま型大型ミサイル巡洋艦

艦種 大型巡洋艦

運用者 大日本帝国海軍↓日本国海上自衛隊

建造期間 1940年—1944年

就役期間 1942年—就役中（予備役5回）

前型・天城型巡洋戦艦

次型・無し

基準排水量 31,400 t

満載排水量 38,000 t

全長・240.0 m

全幅・27.5 m

喫水・8.8 m

主缶・口号艦本式重油専焼水管缶8基

主機・艦本式オールギヤード・タービン4基4軸

最大速度・33.0ノット（約61 km/h）

乗員・1,300名

兵装 50口径31cm3連装砲×3基

54口径127mm単装砲×4基

62口径76mm単装速射砲×4基

Mk. 41 VLS (32セル) × 4基

SM-2 SAM

SM-3 ABM

ESSM 短SAM

VLA SUM

90式艦対艦誘導弾 SSM

トマホーク SLAM

90式艦対艦誘導弾発射筒 × 4基

高性能20mm機関砲 (CIWS) × 4基

同型艦 CBG-1 あづま

CBG-2 ざおう

海上自衛隊の大型巡洋艦。外見はWOWSの吾妻

練習艦

○はたかぜ型練習艦

艦種 ミサイル練習艦

運用者 日本国海上自衛隊

建造期間 1971年～1978年

就役期間 1974年—就役中

建造数 5隻（練習艦2隻）

前型 たちかぜ型

次型・無し（護衛艦籍時ふぶき型）

基準排水量 4,600 t

満載排水量 5,900 t

全長・150 m

全幅・16.4 m

喫水・4.8 m

主機 TM3Bガスタービンエンジン×2基

SM1Aガスタービンエンジン×2基

最大速度・30ノット

乗員・260名

兵装 73式54口径5インチ単装速射砲×2基

高性能20mm機関砲（CIWS）×2基

Mk.13 mod.4 単装ミサイル発射機×1基

SM-1MR SAM

ハーブーン SSM4連装発射筒×2基

アスロック SUM8連装発射機×1基

324mm3連装短魚雷発射管×2基

同型艦 TVG—3520 はたかぜ

TVG—3521 しまかぜ

はたかぜ型ミサイル護衛艦を練習艦に改装したの。

はたかぜ型の諸元は現実と変わらない（建造数が5隻にふえただけ）

なお同型艦は友好国へ輸出されている。

○ゆうぎり型練習艦

艦種・練習護衛艦

運用者・日本国海上自衛隊

建造期間・1975年—1990年

就役期間・1977年—現在

建造数 59隻（14隻現役、1隻練習艦）

前級・ちはや型

次級・あぶくま型

基準排水量 3,225 t

満載排水量 4,100トン

全長 137.4 m

最大幅 14.6 m

吃水 4.4 m

機関方式・COGAG方式

主機・SMAガスタービンエンジン(13,500ps)×4基

推進器・可変ピッチ・プロペラ×2軸

最大速度・30ノット

乗員・220名

兵装 62口径76mm単装速射砲×1基

高性能20mm機関砲(CIWS)×2基

Mk.38 25mm単装機銃×2基

Mk.13 mod.4 ミサイル単装発射機×1基

SM-1MR SAM

ハーブーン SSM4連装発射筒×2

324mm3連装短魚雷発射管×2基

搭載機・SH-60J哨戒ヘリコプター×1機

同型艦 DD-293 やまぎり

日本版O・Hペリー級。外見はあぶくま型の主砲と艦橋の間にMk.13発射機を入れて、後部にヘリコプター格納庫を追加したの。

○あさぐも型練習艦

艦種・練習護衛艦

運用者・日本国海上自衛隊

建造期間・1969年—1975年

就役期間・1972年—現在

建造数 31隻(14隻現役、2隻練習艦)

前級・はつゆき型

次級・きたかぜ型

基準排水量 3,500トン

満載排水量 4,900トン

全長・137.4m

最大幅・14.6 m

深さ・8.8 m

吃水・4.4 m

機関方式・COGAG方式

主機・SM1Aガスタービンエンジン（13,500ps）×4基

推進器・可変ピッチ・プロペラ×2軸

最大速度・30ノット

乗員・220名

兵装 73式54口径5インチ単装速射砲×1基

高性能20mm機関砲×2基

Mk. 13 mod. 4 ミサイル単装発射機×1基

SM1MR SAM

Mk. 41 mod. 9 VLS×1基

ESSM 短SAM

VLA SUM

ハーブーン SAM4連装発射筒×2

324mm3連装短魚雷発射管×2基

搭載機・SH-60J哨戒ヘリコプター×2機

海上自衛隊の練習艦。外見ははつゆき型の主砲を127mm単装砲へ変更、後部のシースパローをMk.13発射機に変更した物。

○なみかぜ型練習艦

艦種・汎用護衛艦

運用者・日本国海上自衛隊

建造期間・1974年—1979年

就役期間・1976年—現在

建造数・23隻(7隻現役、2隻練習艦)

前級・はるぐも型

次級・あさぎり型

基準排水量・3,500トン

満載排水量・4,900トン

全長・137.4m

最大幅・14.6m

深さ・8.8 m

吃水・4.4 m

機関方式・COGAG方式

主機・SM1Aガスタービンエンジン（13,500ps）×4基

推進器・可変ピッチ・プロペラ×2軸

最大速力・30ノット

乗員・220名

兵装 62口径5インチ単装砲×2基

高性能20mm機関砲（CIWS）×2基

Mk.41 mod.9 VLS×1基

ESSM 短SAM

VLA SUM

ハーブーン SAM4連装発射筒×2

324mm3連装短魚雷発射管×2基

搭載機・SH-60J哨戒ヘリコプター×1機

海上自衛隊の練習艦。外見はSeaRAMではなく5インチ単装砲を乗せたあさぎ

設定集 航空自衛隊・海上自衛隊・海兵隊の航空機

戦闘機

○F-15J/DJイーグル

分類 制空戦闘機

全長 20.04 m

全高 5.66 m

全幅 13.04 m

乗員 1名(DJ型は2名)

最大速度 M2.5

実用上昇限度 19,000 m

武装 固定武装 JM61A1 20mmバルカン砲×1基

短射程空対空ミサイル

AIM-9L サイドワインダー

^A90式空対空誘導弾³

^A04式空対空誘導弾⁵

中射程空対空ミサイル

AIM-7F/M スパロー

99式空対空誘導弾^A99式空対空誘導弾^A(B^B)16式空対空誘導弾^A

AIM-120 AMRAAM

運用数 航空自衛隊 F-15J 1740機

F-15EJ 45機

1972年にF-15JAが導入された制空戦闘機。F-104戦闘機の後継機。

F-15JはF-15Cを、F-15DJはF-15Dをライセンス生産したもの。F

-15AJ、F-15BJは1995年に退役。開発にも日本は関わっているので安く
なっている。

米国のMSIPに倣い1985年以降の生産分は性能向上がされており、この機体は
J-MSIP、それ以前の機体はPre-MSIPと区別されている。

Pre-MSIPは2005年に退役。残ったF-15J/DJ全1755機は『J
SI』と呼ばれる改修を全機受けた。これによって『F-15X』レベルとなる戦闘力

を手に入れた。

F-115AJ イーグル

1972年に正式採用された戦闘機。初期生産型。1995年退役。

F-115BJ イーグル

1972年に正式採用された偵察機。F-115AJの複座型。戦闘機としては退役したが、改修を施され、RF-115BJとして運用中。

F-115J イーグル

1979年に正式採用された戦闘機。1985年以降の生産型は改修を施されJ-MSIPと呼ばれており、1985年以前の型Pre-MSIPと呼ばれ退役が進んでいる。現在運用中の機体は殆どがJ-MSIP機である。

F-115DJ イーグル

1979年に正式採用された戦闘機。J型の複座型。

○F-2 ハイパー／スーパー／ファイナル・ゼロ

分類 戦闘機／戦闘爆撃機（C/D型）

多用途戦闘機／マルチロール機（A/B/E/F型）

全長 15.52m 全幅 11.13m（翼端ランチャー含む）／10.80m（含

まず)

全高 4.96 m

乗員 1名 (A/C/E型)

2名 (B/D/F型)

最大速度 M1.7 (A/B型)

M2.0 (C/D/E/F型)

武装 固定武装 JM61A1 20mmバルカン砲×1基

短射程空対空ミサイル

AIM-9L サイドワインダー

90式空対空誘導弾³04式空対空誘導弾⁵

中射程空対空ミサイル

AIM-7F/M スパロー

99式空対空誘導弾⁴99式空対空誘導弾 (B)⁴16式空対空誘導弾⁷

AIM-120 AMRAAM

空対地ミサイル

AGM | 65 マーベリック

AGM | 84K SLAM | ER

AGM | 154 JSOW

97^A式空対地誘導弾²08^A式空対地誘導弾³

極超音速空対地ミサイル (C・D型のみ)

08^S式極超音速空対地誘導弾¹

極超音速空対艦ミサイル (C・D型のみ)

10^S式極超音速空対艦誘導弾¹

極超音速空対空誘導弾 (C・D型のみ)

12^S式極超音速空対空誘導弾¹

多目的ミサイル

14^M式多目的誘導弾¹

空対艦ミサイル

93^A式空対艦誘導弾²16^A式空対艦誘導弾³

対レーダーミサイル

AGM-88 HARM

96式対輻射源ミサイル^A_R^M

爆弾類

Mk. 77 7501b 焼夷爆弾

GBU-15 TV誘導／赤外線誘導爆弾

各種ナパーム弾 (BLU-1・BLU-27)

Mk. 80 シリーズ

クラスター爆弾各種 (BLU-1、BLU-27/B、BL755、C

BU-52/58/71/87/89/97)

『ペイヴウェイ』シリーズレーザー誘導爆弾

JDAM

WCMD

運用数 航空自衛隊 A型 560機

B型 56機

C型 104機

D型 48機

E型	440機
F型	57機
G型	43機
H型	12機

1978年に正式採用された戦闘機。A型の初期生産型（アメリカ空軍でのA型相当）は退役。

日本が米国とF-16を開発し、アメリカが日本にF-16を基本とした戦闘機を開発しているよと言われたので開発された。だが、F-16とは外見以外全く違う（C/D型に至っては面影ぐらいしかない）

A・B・C・D・E・F型がある。主に青色の迷彩だが、これは海外での戦闘はF-15が主に担うため。だが実際に湾岸戦争でF-2Aが参加したが、青色が空の色と同じであり見えにくくそのままになった。

F-2A ハイパー・ゼロ

1978年に正式採用された戦闘機。F-2の初期型。初期生産型の機体は退役済み。後期生産型は改修を受け2040年まで使用される予定だった。前期生産型は米

空軍のF-16A型、後期生産型はF-16C型に相当。

航空自衛隊にて560機が運用中。

F-2B ハイパー・ゼロ

F-2Aの複座型。航空自衛隊で56機運用中。

F-2C スーパー・ゼロ

1990年に正式採用された戦闘機。海上自衛隊にはF/A-18Eの後継機として2015年に採用された。F-2Aを攻撃機的能力を強めた機体。勿論空戦能力はA型とあまり変わらない。

エンジンを2基にしたリ、デルタ翼とコックピット前方にカナードを備え、カナードデルタと呼ばれる形式の機体構成になった。

航空自衛隊では104機、海上自衛隊では51機が運用中。外見は『F-2 初期案』と調べれば出てくる奴

F-2D スーパー・ゼロ

F-2Cの複座型。航空自衛隊で48機、海上自衛隊で8機が運用中。

F-2E ファイナル・ゼロ

2000年に正式採用された戦闘機。F-2Aの近代化・能力向上型。改修内容はF-16CにF-22のコックピットを詰めた感じ。航空自衛隊にて440機が運用中。

F-2F ファイナル・ゼロ

F-2Eの複座型。航空自衛隊にて57機が運用中。

F-2G ファイナル・ゼロ改

2005年に正式採用された戦闘機。F-2Eをベースにこの世界の『F-2スーパー改』の見た目にドーサルスパインを付けたの。航空自衛隊にて43機運用中。

F-2H ファイナル・ゼロ改

F-2Hの改良型。航空自衛隊にて12機運用中。

○F-14 トムキャット

全長 18.87 m

全幅 19.55 m

全高 4.88 m

乗員 1名

最大速度 M2.3

実用上昇限界 20,000 m

武装 固定武装 JM61A1 20mmバルカン砲×1基

短射程空対空ミサイル

A I M | 9 L サイドワインダー

9 0 式^A空^A対^M空^M誘[|]導[|]弾³

0 4 式^A空^A対^M空^M誘[|]導[|]弾⁵

中射程空対空ミサイル

A I M | 7 F / M スパロー

9 9 式^A空^A対^M空^M誘[|]導[|]弾⁴

9 9 式^A空^A対^M空^M誘[|]導[|]弾⁴ (B^B)

1 6 式^A空^A対^M空^M誘[|]導[|]弾⁷

A I M | 1 2 0 A M R A A M

長射程空対空ミサイル

1 0 式^A空^A対^M空^M誘[|]導[|]弾⁶

空対艦ミサイル

9 3 式^A空^S対^M艦[|]誘[|]導[|]弾²

1 6 式^A空^S対^M艦[|]誘[|]導[|]弾³

J o i n t S t r i k e M i s s i l e^S

空対地ミサイル

A G M | 6 5 マーベリック

AGM—84K SLAM—ER

AGM—154 JSOW

AG^AG^GM—154¹ JSOW²AG^AG^GM—154¹ JSOW²³

対レーダーミサイル

AGM—88 HARM

AG^A6^R式対輻射源ミサイル¹

爆弾類

Mk. 77 7501b 焼夷爆弾

GBU—15 TV誘導／赤外線誘導爆弾

各種ナパーム弾(BLU—1・BLU—27)

Mk. 80 シリーズ

BU—52／58／71／87／89／97

クラスター爆弾各種(BLU—1、BLU—27／B、BL755、C)

『ペイヴウエイ』シリーズレーザー誘導爆弾

運用数 海上自衛隊 E型 564機

1973年に正式採用された戦闘機。A・B・C・D・E型がある（E型以外は退役）。

F-14E ファイナル・トムキャット

1997年に正式採用された戦闘機。アビオニクス類とコックピット、エンジンを一式すべてF/A-18Eのものに換装し、エンジンをF5に変更、超音速巡航能力の追加と機動性の向上、AN/APG-81 AESAレーダーの搭載、フライ・バイ・ワイヤとCCVの装備、燃料タンクを防護する乾燥ベイフォームの追加、AN/AYK-14コンピューターを新型のM8メモリーモジュールへ変更コックピットを航法用FLIRと暗視装置に完全対応したものへと変更、カラーデジタル移動地図の搭載、統合直接攻撃弾薬^Aへの対応、機体全周にFLIRの装備、HUDからHMDへの変更、CFT装備、エアインテークの小型化・傾斜化、火器管制装置のAN/APG-71のレーダー作動モードの追加、胴体下への攻撃用FLIRの装備やLANTIRN運用能力の付加による本格的な対地攻撃能力の付加ハードポイントのサブステーション数の増加、大型カラーディスプレイなどの採用による完全なグラスコックピット化、コンピューターの設置による単座化、HARM、SLAM、AGM-65 マーベリックへの対応などの改修がされている近代化改修型。アメリカ軍から退役したことで、グラマンが三菱に設計図など全てを渡した。海上自衛隊にて564機運用中。

F-14F ファイナル・トムキャット

1998年に正式採用された戦闘機。F-14Eの複座型。

○F-3 心神（スーパー・スワロウ）

分類 マルチロール機

全長 18.174 m

全幅 10.099 m

全高 4.514 m

乗員 1名

最大速度 M2.5

実用上昇限界 20,000 m

武装 固定武装 JM61A1 20mmバルカン砲×1基

短射程空対空ミサイル

AIM-9L サイドワインダー

^A90式^A空^M対^M空¹誘³導³弾

^A04式^A空^M対^M空¹誘⁵導⁵弾

中射程空対空ミサイル

A I M | 7 F / M スパロ |

9 9 式^A空^A対^M空^M誘⁴導⁴弾

9 9 式^A空^A対^M空^M誘⁴導⁴弾 (B)

1 6 式^A空^A対^M空^M誘⁷導⁷弾

A I M | 1 2 0 A M R A A M

長射程空対空ミサイル

1 0 式^A空^A対^M空^M誘⁶導⁶弾

極超音速空対地ミサイル

0 8 式^S極^A超^G音^G速^M空^M対¹地¹誘¹導¹弾

極超音速空対艦ミサイル

1 0 式^S極^A超^S音^S速^M空^M対¹艦¹誘¹導¹弾

極超音速空対空誘導弾

1 2 式^S極^S超^A音^A速^M空^M対¹空¹誘¹導¹弾

多目的ミサイル

1 4 式^M多^P目^G的^M誘¹導¹弾

空対艦ミサイル

9 3 式^A空^S対^M艦¹誘²導²弾

16^A式空対艦誘導弾¹₃

Joint^J Strike^S Missile^M

空対地ミサイル

AGM-65 マーベリック

AGM-84K SLAM-ER

AGM-154 JSOW

97^A式空対地誘導弾²_G

08^A式空対地誘導弾³_G

対レーダーミサイル

AGM-88 HARM

96^A式対輻射源ミサイル¹_R

運用数 航空自衛隊 158機

2005年に正式採用された戦闘機。純国産戦闘機。F-22と世界最強の座を競い合った。航空自衛隊が158機運用中

外見は↓<http://japanese.china.org.cn/jp/tx>
t/2012-03/05/content_24811047.htm

○F-5 風神（スーパー・オスカー）

分類 制空戦闘機

全長 18.99 m

全高 5.34 m

全幅 13.49 m

乗員 1名

最大速度 M2.68

実用上昇限界 20,000 m

武装 固定武装 JM61A1 20mmバルカン砲×1基

短射程空対空ミサイル

AIM-9L サイドワインダー

90式空対空誘導弾³04式空対空誘導弾⁵

中射程空対空ミサイル

AIM-7F/M スパロー

99式空対空誘導弾⁴

9^A9^A式空対空誘導弾⁴ (B)

1^A6^A式空対空誘導弾⁷

A I M | 1 2 0 A M R A A M

長射程空対空ミサイル

1^A0^A式空対空誘導弾⁶

極超音速空対地ミサイル

0^S8^S式極超音速空対地誘導弾¹

極超音速空対艦ミサイル

1^S0^S式極超音速空対艦誘導弾¹

極超音速空対空誘導弾

1^S2^S式極超音速空対空誘導弾¹

多目的ミサイル

1^M4^P式多目的誘導弾¹

巡航ミサイル

S C A L P | E G ストーム・シャドウ

A G M | 1 5 8 J A S S M

9^A8^L式空中発射巡行ミサイル³

空対艦ミサイル

14式空中発射巡行ミサイル^{A L C M}93式空対艦誘導弾^{A S M}16式空対艦誘導弾^{A S M}Joint Strike Missile^{J S M}

空対地ミサイル

AGM-65 マーベリック

AGM-84K SLAM-ER

AGM-154 JSOW

97式空対地誘導弾^{A G}08式空対地誘導弾^{A G M}

対レーダーミサイル

AGM-88 HARM

96式対輻射源ミサイル^{A R M}

運用数 航空自衛隊 120機

2014年に正式採用された戦闘機。世界最高峰の性能を持つ。航空自衛隊が12

0 機運用中。

外見は↓ <https://twitter.com/lamflow/stat>

(Twitterの『らみなーふうう』(<https://twitter.com/Lamflow>)さんに許可をもらい使わせていただきました。ありがとうございます)

○F-6 雷神(スーパー・フランク)

分類 制空戦闘機

全長 19.89 m

全高 5.84 m

全幅 15.67 m

乗員 1名

最大速度 M2.8

実用上昇限界 20,000 m

武装 固定武装 JM61A1 20mmバルカン砲×1基

短射程空対空ミサイル

A I M | 9 L サイドワインダー

9 0 式^A空^A对^M空^M誘¹導³弾

0 4 式^A空^A对^M空^M誘¹導⁵弾

中射程空对空ミサイル

A I M | 7 F / M スパロー

9 9 式^A空^A对^M空^M誘¹導⁴弾

9 9 式^A空^A对^M空^M誘¹導⁴弾 (B^B)

1 6 式^A空^A对^M空^M誘¹導⁷弾

A I M | 1 2 0 A M R A A M

長射程空对空ミサイル

1 0 式^A空^A对^M空^M誘¹導⁶弾

極超音速空对地ミサイル

0 8 式^S極^A超^G音^G速^G空^M对¹地¹誘¹導¹弾

極超音速空对艦ミサイル

1 0 式^S極^A超^S音^S速^S空^M对¹艦¹誘¹導¹弾

極超音速空对空誘導弾

1 2 式^S極^S超^A音^A速^M空¹对¹空¹誘¹導¹弾

多目的ミサイル

14^M式^P多目的誘導^M弾¹

巡航ミサイル

SCALP | EG ストーム・シャドウ

AGM | 158 JASSM

98^A式^L空中^C発射^M巡行³ミサイル14^A式^L空中^C発射^M巡行⁴ミサイル

空対艦ミサイル

93^A式^S空対艦^M誘導²弾16^A式^S空対艦^M誘導³弾Joint^J Strike^S Missile^M

空対地ミサイル

AGM | 65 マーベリック

AGM | 84K SLAM | ER

AGM | 154 J S O W

97^A式^G空対地^M誘導²弾08^A式^G空対地^M誘導³弾

対レーダーミサイル

AGM-88 HARM

96式対輻射源ミサイル^A_R^M

運用数 航空自衛隊 104機

2015年に正式採用された戦闘機。外見は『F-3外見』で調べると出てくる防衛省の予想図。『F-3』『F-5』が高価になった為、安価な戦闘機として開発された。また、海外にも輸出している。航空自衛隊にて104機運用中。

○F-22A ラプター

分類 制空戦闘機

全長 18.92 m

全高 5.08 m

全幅 13.56 m

乗員 1名

最大速度 M2.42

実用上昇限界 20,000 m

武装 固定武装 JM61A1 20mmバルカン砲×1基

短射程空対空ミサイル

AIM-9L サイドワインダー

90^A式空対空誘導弾³

04^A式空対空誘導弾⁵

中射程空対空ミサイル

AIM-7F/M スパロー

99^A式空対空誘導弾⁴

99^A式空対空誘導弾⁴ (B^B)

16^A式空対空誘導弾⁷

AIM-120 AMRAAM

空対地ミサイル

AGM-65 マーベリック

AGM-84K SLAM-ER

AGM-154 JSOW

97^A式空対地誘導弾²

08^A式空対地誘導弾³

対レーダーミサイル

AGM-88 HARM

96式対放射線ミサイル^A_R^M

運用数 航空自衛隊 350機

2000年に正式採用された戦闘機。日米共同開発。航空自衛隊が350機運用中。

○F-35 ライトニング II

分類 多用途戦闘機 (A型)

多用途戦闘機／垂直・短距離離着陸機 (B型)

多用途戦闘機／艦上戦闘機 (C型)

全長 15.67 m (A型)

15.61 m (B型)

15.70 m (C型)

全高 4.39 m (A型)

4.36 m (B型)

4.48 m (C型)

全幅 10.67 m (A/B型)

13.11 m (C型)

乗員 1名

最大速度 M1.6

武装 固定武装 GAU—22/A 25 mm ガトリング砲 (A型/日本版C型の

み)

短射程空対空ミサイル

90式空対空誘導弾³

04式空対空誘導弾⁵

中射程空対空ミサイル

99式空対空誘導弾⁴

99式空対空誘導弾 (B)^B

16式空対空誘導弾⁷

AIM—120 AMRAAM

空対地ミサイル

AGM—65 マーベリック

AGM—84K SLAM—ER

AGM-154 JSOW

97式空対地誘導弾²

08式空対地誘導弾³

空対艦ミサイル

93式空対艦誘導弾²

16式空対艦誘導弾³

巡航ミサイル

SCALP-EG ストーム・シャドウ

AGM-158 JASSM

98式空中発射巡行ミサイル³

14式空中発射巡行ミサイル⁴

対レーダーミサイル

AGM-88 HARM

96式対輻射源ミサイル¹

運用数 航空自衛隊 A型 360機

海兵隊 B型 320機

海上自衛隊 B型 179機

C型 56機

2014年にB型、2015年にA型、2017年にC型が正式採用された戦闘機。日米が主導で開発。

A型は航空自衛隊が360機、B型は海兵隊が320機と海上自衛隊が179機、C型は海上自衛隊が56機を運用中。

F-35A ライトニングII

2015年に正式採用された戦闘機。基本形となる地上での運用を想定した空軍仕様。

航空自衛隊で360機運用中。

F-35B ライトニングII

2014年に正式採用された戦闘機。強襲揚陸艦でのSTOVL運用を想定した海兵隊仕様。

海兵隊で320機、海上自衛隊で179機運用中。

F-35C ライトニングII

2017年に正式採用された戦闘機。空母でのカタパルト運用を想定した海軍仕様。海上自衛隊で56機運用中。

戦闘爆撃機

○F-15E/EX ストライクイーグル/イーグルII

分類 戦闘爆撃機(マルチロール機)

全長 19.44 m

全高 5.63 m

全幅 13.05 m

乗員 2名

最大速度 M2.5

実用上昇限度 18,200 m

武装 固定武装 JM61A1 20mmバルカン砲×1基

短射程空対空ミサイル

AIM-9L サイドワインダー

90式空対空誘導弾³04式空対空誘導弾⁵

中射程空対空ミサイル

AIM-7F/M スパロー

99式空対空誘導弾⁴

9^A9^A式空_A対空_M誘導₄弾 (B)

1^A6^A式空_A対空_M誘導₇弾

A I M | 1 2 0 A M R A A M

空対地ミサイル

A G M | 6 5 マーベリック

A G M | 8 4 K S L A M | E R

A G M | 1 5 4 J S O W

9^A7^A式空_G対地_M誘導₂弾

0^A8^G式空_G対地_M誘導₃弾

空対艦ミサイル

9^A3^A式空_S対艦_M誘導₂弾

1^A6^S式空_S対艦_M誘導₃弾

極超音速空対地ミサイル

0^S8^A式極_A超音速_G空_M対地₁誘導₁弾

極超音速空対艦ミサイル

1^S0^A式極_S超音速_S空_M対艦₁誘導₁弾

極超音速空対空誘導弾

1^S2^S式極超音速対空誘導弾^A

多目的ミサイル

1^M4^P式多目的誘導弾^G

対レーダーミサイル

AGM-88 HARM

9^A6^R式対輻射源ミサイル^M

爆弾類

Mk. 77 7501b 焼夷爆弾

GBU-15 TV誘導／赤外線誘導爆弾

各種ナパーム弾 (BLU-1・BLU-27)

Mk. 80 シリーズ

クラスター爆弾各種 (BLU-1、BLU-27/B、BL755、C

BU-52/58/71/87/89/97)

『ペイヴウェイ』シリーズレーザー誘導爆弾

JDAM

WCMD

運用数 航空自衛隊 E型 253機

E X 型 8 機

1987年に導入された戦闘爆撃機。F-115の爆弾搭載量を大幅に拡大した物。E X型は能力向上型で2018年末に導入。

航空自衛隊がE型は253機、E X型を8機運用中。E X型は中西重工業（中島航空機と川西航空機が合併した会社）がライセンス生産を続ける。

○F-115SE サイレントイーグル

分類 戦闘爆撃機（マルチロール機）

全長 19.44 m

全高 5.63 m

全幅 13.05 m

乗員 2名

最大速度 M2.5

実用上昇限度 18,200 m

武装 固定武装 JM61A1 20mmバルカン砲×1基

短射程空対空ミサイル

AIM-9L サイドワインダー
 90式空対空誘導弾³
 04式空対空誘導弾⁵
 中射程空対空ミサイル

AIM-7F/M スパロー
 99式空対空誘導弾⁴
 99式空対空誘導弾⁴
 16式空対空誘導弾⁷
 AIM-120 AMRAAM

空対地ミサイル

AGM-65 マーベリック
 AGM-84K SLAM-ER
 AGM-154 J SOW
 97式空対地誘導弾²
 08式空対地誘導弾³
 空対艦ミサイル

93式空対艦誘導弾²

1^A6式空対艦誘導弾¹₃

極超音速空対地ミサイル

08^S式極超音速空対地誘導弾¹

極超音速空対艦ミサイル

10^S式極超音速空対艦誘導弾¹

極超音速空対空誘導弾

12^S式極超音速空対空誘導弾¹

多目的ミサイル

14^M式多目的誘導弾¹

対レーダーミサイル

AGM-88 HARM

96^A式対輻射源ミサイル¹

爆弾類

Mk. 77 7501b 焼夷爆弾

GBU-15 TV誘導／赤外線誘導爆弾

各種ナーム弾 (BLU-1・BLU-27)

Mk. 80 シリーズ

クラスター爆弾各種（BLU-1、BLU-27/B、BL755、C
BU-52/58/71/87/89/97）

『ペイヴウエイ』シリーズレーザー誘導爆弾

J D A M

W C M D

運用数 航空自衛隊 56機

2017年に導入された戦闘爆撃機。F-15Eにステルス機能をつけた物。
航空自衛隊が56機運用中。

○F/A-18C/D/E/F ホーネット/スーパーホーネット

分類 艦上攻撃機、戦闘攻撃機

全長 17.07～18.38 m

全高 4.66m～4.88 m

全幅 11.43m～13.62 m

乗員 1～2名

最大速度 M2.68

実用上昇限界 20,000 m

武装 固定武装 JM61A1 20mmバルカン砲×1基

短射程空対空ミサイル

AIM-9L サイドワインダー

90式空対空誘導弾³

04式空対空誘導弾⁵

中射程空対空ミサイル

AIM-7F/M スパロー

99式空対空誘導弾⁴

99式空対空誘導弾⁴ (B^B)

16式空対空誘導弾⁷

AIM-120 AMRAAM

長射程空対空ミサイル

10式空対空誘導弾⁶

空対艦ミサイル

93式空対艦誘導弾²

16式空対艦誘導弾³

Joint^J Strike^S Missile^M
 空対地ミサイル

AGM-65 マーベリック

AGM-84K SLAM-ER

AGM-154 JSOW

AGM-154 JSOW

AGM-154 JSOW

対レーダーミサイル

AGM-88 HARM

AGM-88 HARM

爆弾類

Mk. 77 7501b 焼夷爆弾

GBU-15 TV誘導／赤外線誘導爆弾

各種ナパーム弾 (BLU-1・BLU-27)

Mk. 80 シリーズ

クラスター爆弾各種 (BLU-1、BLU-27/B、BL755、C)

BU-52/58/71/87/89/97)

『ペイヴウエイ』シリーズレーザー誘導爆弾

J D A M

W C M D

運用数 海上自衛隊 E型 530機

F型 20機

海兵隊 C型 134機

D型 95機

1995年に正式採用された戦闘攻撃機。F/A-18自体は1979年に採用。

A・B・C・D・E・F型がある（C・D・E・F型以外は退役）。

F/A-18C ホーネット

A/Bのアップグレード型。外見上の変化は少ないが、機体の軽量化によつて搭載量の少なさを改善した他、夜間作戦能力の付与、エンジンの強化などが段階的に行われた。海兵隊が134機運用中。

F/A-18D ホーネット

F/A-18Cの複座型。海兵隊が95機運用中。

F/A-18E スーパーホーネット

原型機よりも機体を大型化し、アビオニクスやエンジンの更新によって性能が大幅に向上させた機体。海上自衛隊が530機運用中。

F/A-118F スーパーホーネット

F/A-118Eの複座型。海上自衛隊が20機運用中。

攻撃機

○A-10C サンダーボルトII

分類 攻撃機

全長 16.16 m

全高 4.42 m

全幅 17.42 m

乗員 1名

最大速度 676 km/h

実用上昇限度 13,640 m

武装 固定武装 GAU-8 30 mm ガトリング砲×1基

短射程空対空ミサイル

AIM-9L サイドワインダー

空対地ミサイル

9^A0^A式空対空誘導弾¹³
 0^A4^A式空対空誘導弾¹⁵

AGM—65 マーベリック

AGM—84K SLAM—ER

AGM—154 JSOW

9^A7^G式空対地誘導弾¹²

0^A8^G式空対地誘導弾¹³

多目的ミサイル

1^M4^P式多目的誘導弾¹

爆弾類

Mk. 77 7501b 焼夷爆弾

GBU—15 TV誘導／赤外線誘導爆弾

各種ナパーム弾 (BLU—1・BLU—27)

Mk. 80 シリーズ

クラスター爆弾各種 (BLU—1、BLU—27/B、BL755、C

BU—52/58/71/87/89/97)

『ペイヴウエイ』シリーズレーザー誘導爆弾

J D A M (C型)

W C M D (C型)

ロケット弾・

L A U—61 / L A U—68 ロケット弾ポッド (ハイドラ70 7

0 mm ロケット弾 / A P K W S 70 mm ロケット弾)

L A U—131 ロケット弾ポッド (ハイドラ70 70 mm ロケッ

ト弾×7発)

運用数 航空自衛隊 C型 253機

1975年に正式採用された対地攻撃機。戦車、装甲車その他の地上目標の攻撃と若干の航空阻止により地上軍を支援する任務を担う。A・C型がある (A型は退役)。

航空自衛隊で253機運用中。

O A—10A

前線航空管制を主任務とした機体。

A—10C

A型をグラスコックピット化したもの、A型の改修。2005年初飛行。

○AV-8B/J ハリアー II

分類 攻撃機

全長 14.12 m 全幅 9.25 m

全高 3.55 m

乗員 1名

最大速度 1,065 km/h

実用上昇限度： 15,240 m

武装 固定武装 GAU-12 25mm機関砲

短射程空対空ミサイル

AIM-9L サイドワインダー

90式空対空誘導弾³04式空対空誘導弾⁵

中射程空対空ミサイル

99式空対空誘導弾⁴99式空対空誘導弾⁴ (B^B)16式空対空誘導弾⁷

空対艦ミサイル

A I M | 1 2 0 A M R A A M

9^A3^S式空対艦誘導弾¹₂

1^A6^S式空対艦誘導弾³

J o i n t^J S t r i k e^S M i s s i l e^M

空対地ミサイル

A G M | 6 5 マーベリック

A G M | 8 4 K S L A M | E R

A G M | 1 5 4 J S O W

9^A7^G式空対地誘導弾²

0^A8^G式空対地誘導弾³

対レーダーミサイル

A G M | 8 8 H A R M

9^A6^R式対輻射源ミサイル¹

爆弾類

M k . 7 7 7 5 0 1 b 焼夷爆弾

G B U | 1 5 T V 誘導／赤外線誘導爆弾

各種ナパーム弾 (BLU-1・BLU-27)

Mk. 80 シリーズ

クラスター爆弾各種 (BLU-1、BLU-27/B、BL755、C
BU-52/58/71/87/89/97)

『ペイヴウェイ』シリーズレーザー誘導爆弾

J D A M

W C M D

運用数 海兵隊 112機

1980年に正式採用された攻撃機。1975年にアメリカのマグダネル・ダグラス
によって提出された性能向上型のAV-8Bを日本の中西重工業で回収された機体。

海兵隊で112機運用中。

○A/T-4 スーパー・ドルフィン

分類：攻撃機／戦闘攻撃機

乗員：2名

全長：13.00 m (ピトー管部含む) / 11.96 m (胴体部)

全高：4.6 m

翼幅：9.94 m

武装 固定武装 JM61A1 20mmバルカン砲×2基

短射程空対空ミサイル

AIM-9L サイドワインダー

90式^A空対空^A誘導^M弾³

04式^A空対空^A誘導^M弾⁵

中射程空対空ミサイル

99式^A空対空^A誘導^M弾⁴

99式^A空対空^A誘導^M弾⁴ (B^B)

16式^A空対空^A誘導^M弾⁷

AIM-120 AMRAAM

空対艦ミサイル

93式^A空対艦^S誘導^M弾²

16式^A空対艦^S誘導^M弾³

Joint^J Strike^S Missile^M

空対地ミサイル

AGM-65 マーベリック

AGM-84K SLAM-ER

AGM-154 JSOW

AGM-154 空対地誘導弾²AGM-154 空対地誘導弾³

対レーダーミサイル

AGM-88 HARM

AGM-88 式対輻射源ミサイル¹

爆弾類

Mk. 77 7501b 焼夷爆弾

GBU-15 TV誘導／赤外線誘導爆弾

各種ナパーム弾 (BLU-1・BLU-27)

Mk. 80 シリーズ

クラスター爆弾各種 (BLU-1、BLU-27/B、BL755、C

BU-52/58/71/87/89/97)

『ペイヴウェイ』シリーズレーザー誘導爆弾

JDAM

WCMD

運用数 航空自衛隊 125機

1987年に正式採用された攻撃機。航空自衛隊で125機運用中。

○AC-130U/W/J スプリーキーII/ステインガー II/ゴーストライダー

分類 対地攻撃機・ガンシップ局地制圧用攻撃機

全長 29.8 m

全高 11.7 m

翼幅 40.4 m

乗員 13名 士官5名（機長、副操縦士、航法士、火器管制官、電子戦担当官）

下士官8名（航空機関士、TVオペレーター、赤外線検出担当士、ロード

マスター、砲手4名）

最高速度 480 km/h

上昇限度 9,100 m

武装 U型 GAU-12 25 mmガトリング砲5砲身×1門

40 mm機関砲×1門

105 mm榴弾砲×1門

W・J型

GAU-23/A 30 mm機関砲×1門

105mm榴弾砲×1門（AC—130J ゴーストライダーのみ搭載）

AGM—176 グリフィン、GBU—44/B バイパーストライク

AGM—114 ヘルファイア、GBU—39、GBU—53/B

運用数 航空自衛隊 30機

1968年に正式採用された対地攻撃機。ロッキードC—130ハーキュリーズに

重火器を搭載した対地攻撃機。

元が輸送機だけに高い積載量と長い航続距離を備えており、必要ならば一晩中支援し続けることも可能。

○AC—1 雷鳴

分類 対地攻撃機・ガンシツプ^{局地制圧用攻撃機}

全長 29.0m

全高 9.99m

翼幅 30.6m

乗員 13名 士官5名（機長、副操縦士、航法士、火器管制官、電子戦担当官）

下士官8名（航空機関士、TVオペレーター、赤外線検出担当士、ロー

ドマスター、砲手4名）

武装 GAU—12 25mmガトリング砲5砲身×1門

95口径90式30mm連装機関砲×2基

40mm機関砲×1門

105mm榴弾砲×1門

運用数 航空自衛隊 5機

1970年に正式採用された対地攻撃機。AC-130を模範して作られた。

爆撃機

○B-52 ストラトフォートレス

分類 戦略爆撃機

全長 47.55m

全高 12.41m

全幅 56.39m

乗員 5名 (機長、副操縦士、レーダーナビゲーター、航法士、電子戦オペレーターEW(O))

武装 空対地ミサイル

AGM-84K SLAM-ER

AGM-154 JSOW

9^A7^G式空対地誘導弾¹₂

0^A8^G式空対地誘導弾¹₃

空対艦ミサイル・

AGM-84 ハープーン

9^A3^S式空対艦誘導弾¹₂

1^A6^S式空対艦誘導弾¹₃

巡航ミサイル

SCALP-EG ストーム・シャドウ

AGM-158 JASSM

9^A8^L式空中発射巡行ミサイル¹₃

1^A4^L式空中発射巡行ミサイル¹₄

極超音速空対地ミサイル

0^S8^A式極超音速空対地誘導弾¹

極超音速空対艦ミサイル

1^S0^A式極超音速空対艦誘導弾¹

極超音速空対空誘導弾

1^S2^S式極超音速空対空誘導弾¹

多目的ミサイル

1_M4_P式多目的誘導弾^{M1}

AGM-86「ALCM/CAALCM」?×20発

AGM-129「ACM」?

爆弾類・Mk. 82通常爆弾（胴体内28発、翼下18発）

GBU-31「JDAM」

CBU-103／-104／-105「WCM D*3」

B61戦術核爆弾 など

運用数 航空自衛隊 78機

1955年に正式採用された爆撃機。アメリカ・ボーイング社が開発した長距離戦略爆撃機。愛称は「成層圏の要塞」を意味するストラトフォートレス。

○B-1 ランサー

分類 戦略爆撃機

全長 44.81m

全高 10.36m

全幅 41.67 m

乗員 4名

武装 爆弾

減速ユニット装備 Mk-82 無誘導爆弾×84

Mk-82 円錐 無誘導爆弾×84

Mk-62 無誘導爆弾×84

Mk-65 無誘導爆弾×8

CBU-87/89/97 クラスタ爆弾ユニット (CBU)×30

CBU-103/104/105 風力安定クラスタ爆弾×30

GBU-31 JDAM GPS 誘導爆弾 (Mk-84 汎用型と BLU

-109の組み合わせ)×24

GBU-38 JDAM GPS 誘導爆弾 (Mk-82 汎用型)×17

Mk-84 汎用爆弾×24

GBU-39 小型誘導爆弾 (6弾頭パックなら×96、4弾頭パックなら

×144)

B61自由落下核爆弾×16

空対地ミサイル

AGM-158X24

AGM-154 JSOWx12

9^A7^A式空^G対^M地[|]誘[|]導²弾0^A8^G式空^M対[|]地[|]誘³導³弾

運用数 航空自衛隊 59機

1975年に正式採用された爆撃機。可変翼を持つ爆撃機。

○B-2 スピリット

分類 戦略爆撃機

全長 21.03m

全幅 52.43m

全高 5.18m

最高速度 約1,000km/h

巡航速度 M0.8

乗員 2名

武装 爆弾

減速ユニット装備 Mk—82 無誘導爆弾×84

Mk—82 円錐 無誘導爆弾×84

Mk—62 無誘導爆弾×84

Mk—65 無誘導爆弾×8

CBU—87／89／97 クラスタ爆弾ユニット(CBU)×30

CBU—103／104／105 風力安定クラスタ爆弾×30

GBU—31 JDAM GPS 誘導爆弾(Mk—84 汎用型とBLU

—109の組み合わせ)×24

GBU—38 JDAM GPS 誘導爆弾(Mk—82 汎用型)×17

Mk—84 汎用爆弾×50

GBU—39 小型誘導爆弾(6弾頭パックなら×96、4弾頭パックなら

×144)

B61 自由落下核爆弾×16

B83 自由落下核爆弾×16

空対地ミサイル

AGM—158×24

AGM—154 JSOW×12

9^A7^A式空対地誘導弾¹
 0^A8^G式空対地誘導弾³
 航空自衛隊 22機

1990年に正式採用された爆撃機。日米共同開発のステルス爆撃機。独特の外見を持つ。

○B/P—1

分類 戦術爆撃機

全長 38.0 m

全高 12.1 m

翼幅 35.4 m

最高速度 M0.81

巡航速度 M0.68

乗員 4名

武装 爆弾

減速ユニット装備 Mk—82 無誘導爆弾×84

Mk—82円錐 無誘導爆弾×84

Mk—62 無誘導爆弾×84

Mk—65 無誘導爆弾×8

CBU—87／89／97 クラスタ爆弾ユニット(CBU)×30

CBU—103／104／105 風力安定クラスタ爆弾×30

GBU—31 JDAM GPS 誘導爆弾(Mk—84汎用型とBLU

—109の組み合わせ)×24

GBU—38 JDAM GPS 誘導爆弾(Mk—82汎用型)×17

Mk—84汎用爆弾×50

GBU—39 小型誘導爆弾(6弾頭パックなら×96、4弾頭パックなら

×144)

空対地ミサイル

AGM—158×24

AGM—154 JSOW×12

97式空対地誘導弾²

08式空対地誘導弾³

空対艦ミサイル

9^A3^S式空対艦誘導弾¹
 1^A6^S式空対艦誘導弾³
 Joint^J Strike^S Missile^M

運用数 航空自衛隊 105機
 2008年に正式採用された爆撃機。哨戒機『P-1』の爆弾倉とソノブイ発射口を改良し、爆弾を積めるようにした。

偵察機

○RF-15B J

分類 偵察機

全長 20.04 m

全高 5.66 m

全幅 13.04 m

乗員 1名

最大速度 M2.5

実用上昇限度 19,000 m

武装 固定武装 JM61A1 20mmバルカン砲×1基

短射程空対空ミサイル

AIM-9L サイドワインダー

90式空対空誘導弾¹_A³

04式空対空誘導弾⁵_A^M

偵察ポッド TAC-1

運用数 航空自衛隊 34機

1978年に正式採用された偵察機。F-15BJに偵察ポッドをつけた機体。
航空自衛隊で34機運用中。

○RF-15J

分類 偵察機

全長 20.04 m

全高 5.66 m

全幅 13.04 m

乗員 1名

最大速度 M2.5

実用上昇限度 19,000 m

武装 固定武装 JM61A1 20mmバルカン砲×1基

短射程空対空ミサイル

AIM-9L サイドワインダー

90式空対空誘導弾³

04式空対空誘導弾⁵

偵察ポッド TAC-1

1996年に正式採用された偵察機。F-15JのPre-MSI P機に偵察ポッドをつけたの。

○U-2S ドラゴンレディ

分類 偵察機

全長 19.13 m

全幅 31.39 m

全高 4.88 m

乗員 1名

最高速度 M0.8

最高高度 27,000 m

武装 無し

運用数 航空自衛隊 27機

1987年に正式採用された偵察機。RQ-4やMQ-9、RQ-1の正式採用で退
役中。

○SR-71 ブラックバード

分類 偵察機

全長 32.73 m

全幅 16.94 m

全高 5.63 m

乗員 2名

最高速度 M3.3

巡行高度 25000 m

武装 無し

運用数 航空自衛隊 6機

1963年に正式採用された偵察機。世界最高速度を出す。
退役が進んでおり、6機しかない。

○RQ-1/MQ-1 プレデター

分類 偵察機

全長 8.22 m

翼幅 14.8 m

最高速度 217 km/h

実用上昇限度 7,620 m

武装 AGM-114 ヘルファイア×2

AIM-92 ステインガー×2

運用数 航空自衛隊 410機

1995年に正式採用された偵察機。

○MQ-9 リーパー

分類 偵察機

長さ 11 m

翼幅 20 m

最高速度 482 km/h

運用高度 7,600 m

武装 AGM-114 ヘルファイア

ペイブウェイII

AIM-92 ステインガー

運用数 航空自衛隊 140機

2007年に正式採用された偵察機。

○MQ-1C グレイイーグル

分類 偵察機

全長 8 m

翼幅 17 m

全高 2.1 m

最高速度 135 kts

武装 AGM-114 ヘルファイア

ペイブウェイII

AIM-92 ステインガー

運用数 陸上自衛隊 116機

2009年に正式採用された偵察機。

○MQ-4C トライトン

分類 無人機

全長 14.5 m

全幅 39.9 m

全高 4.6 m

最大速度 575 km/h

運用高度 18,288 m

運用数 海上自衛隊 198機

2013年に正式採用された偵察機。

○RQ-4 グローバルホーク

分類 無人機

全長 13.52 m

全幅 35.42 m

全高 4.64 m

巡航速度 343 kt

実用上昇限度 19,800 m

運用数 航空自衛隊 215機

2000年に正式採用された偵察機。

○O5式無人偵察機

分類 偵察機

全長 13.8 m

全幅 36.2 m

全高 4.3 m

実用上昇高度 19,500 m

運用数 陸上自衛隊 125機

海上自衛隊 242機

航空自衛隊 305機

2005年に正式採用された偵察機。無人機研究システムを大きくしたの。
海上自衛隊では艦載機としても運用中。

○08式遠隔操縦観測システム

分類 偵察機

全長 3.8 m

全幅 1.2 m

全高 1.3 m

実用上昇高度 2,500 m

運用数 陸上自衛隊 310機

海上自衛隊 108機

2008年に正式採用された偵察機。通称、FFOS-1。

○16式無人偵察機システム

分類 偵察機

全長 5.5m

全幅 1.3m

全備重量 285kg

運用数 陸上自衛隊 96機

海上自衛隊 52機

2016年に正式採用された偵察機。通称、FFRS-2。

輸送機

○C-130H ハーキユリーズ

分類：戦術輸送機

乗員：4名（操縦士、副操縦士、航法手、航空機関士）

定員：兵員92名（空挺隊員であれば64名）

搭載量：19,356kg

全長： 29.79 m

全高： 11.66 m

翼幅： 40.41 m

最大速度： 602 km/h

実用上昇限度： 10,060 m

運用数 航空自衛隊 89機

海上自衛隊 5機

1975年に正式採用された輸送機。C-130自体は1954年に導入。(A・B型を採用、現在は退役)

航空自衛隊で89機、海上自衛隊で5機運用中。

○C-2 ブルドリーム

分類：戦術輸送機

乗員： 3名(操縦士2名・ロードマスター(空中輸送員)1名)、2〜5名(補助席)

+110名(貨物室)

全長： 43.9 m

全高： 14.2 m

翼幅：44.4 m

最大速度：マッハ0.82

実用上昇限度：43,000 ft

運用数 航空自衛隊 279機

2005年に正式採用された輸送機。航空自衛隊にて279機運用中。

○C-3 ヘラクレス

分類：戦略・戦術輸送機

全長：53.8 m

全幅：56.1 m

全高：17.3 m

最高巡航速度：M0.77

実用上昇限度：13,716 m

運用数 航空自衛隊 227機

2008年に正式採用された輸送機。航空自衛隊にて227機運用中。

外見はC-2の機体を大きくしたもの。

○C-5A/B/M ギャラクシー／スーパーギャラクシー

分類：戦略輸送機

全幅：67.89 m

全長：75.3 m

全高：19.84 m

最大速度：マッハ0.79

巡航速度：マッハ0.77

実用上昇限度：10,895 m

乗員：通常8名 最小4名（操縦士、先任操縦士、副操縦士、航空機関士2名、ロードマスター（空中輸送員）3名）

運用数 航空自衛隊 89機

1968年に正式採用された輸送機。A/B型は既に退役。
航空自衛隊にて89機運用中。

○C-225 ブルーホエール／ムリーヤ

分類：戦略輸送機

乗員：11名（機長、専任操縦士、副操縦士、航空機関士 2名、航法士、通信士、
ロードマスター^{空中輸送員}4名）

全幅：88.74 m

全長：84.00 m

全高：18.10 m

最高速度：850 km/h

巡航速度：800 km/h

航続距離：15,400 km

運用数 航空自衛隊 3機

1993年にソ連崩壊によつて経済が未熟であつたウクライナから、日本がアントノフAn-225の2号機を買い取り、またO・K・アントノウ記念航空科学技術複合体（ANTKアントノウ）から三菱重工へ、An-225の技術や設計図に亘る所有権を全て移転させ、2号機を参考に作られた輸送機。（2号機はANACargoが運航中）。

航空自衛隊が3機運航中。

○C-2 グレイハウンド

分類：艦上輸送機

全長：17.3 m

全高：4.85 m

全幅：24.6 m

最大速度：574 km/h || M0.47

巡航速度：465 km/h || M0.38

実用上昇限度：10,211 m

航続距離：2,889 km

乗員：3名（操縦士 2名、航空機関士1名）

運用数 海上自衛隊 23機

1962年に正式採用された輸送機。海上自衛隊にて23機運用中。

哨戒機

○P-3 オライオン

分類：対潜哨戒機

乗員：11名

全長：35.6 m

全高：10.3 m

翼幅：30.4 m

最大速度：761.2 km/h || M0.62

実用上昇限度：8,600 m

1958年に正式採用された対潜哨戒機。海上自衛隊で187機運用中。

○P-1

分類：対潜哨戒機

乗員：11名

全長：38.0m

全高：12.1m

翼幅：35.4m

最大速度：996km/h
M0.81

実用上昇限度：13,520m

運用数 海上自衛隊 123機

2008年に正式採用された対潜哨戒機。海上自衛隊で123機運用中

空中給油輸送機

○KC-130H ハーキュリーズ

分類：空中給油・輸送機

乗員：4名（操縦士、副操縦士、航法手、航空機関士）

定員：兵員92名（空挺隊員であれば64名）

搭載量： 19,356 kg

全長： 29.79 m

全高： 11.66 m

翼幅： 40.41 m

最大速度： 602 km/h

実用上昇限度： 10,060 m

運用数 航空自衛隊 396機

海兵隊 74機

1960年に正式採用された空中給油機。航空自衛隊にて396機、海兵隊にて74

機運用中。

○KC-135 ストラトタンカー

分類：空中給油・輸送機

全長：41.53 m

全高：12.7 m

全幅：39.88 m

運用数 航空自衛隊 52機

1956年に正式採用された空中給油・輸送機。航空自衛隊にて52機運用中。

○KC-767 フライ・タンカー

分類：空中給油・輸送機

乗員：3名

全長：48.51m

全高：15.90m

全幅：47.57m

最大速度：マツハ0.86

実用上昇限度：13,137m

運用数 航空自衛隊 114機

2006年に正式採用された空中給油機。航空自衛隊にて114機運用中。

○KC-46 ペガソス

分類：空中給油・輸送機

乗員：3人（操縦士，副操縦士，空中給油オペレーター）

定員：人員114人

全長：50.5m

全高：15.9m

翼幅：48.1 m

最大速度：マッハ 0.86

実用上昇限度：12,200 m

運用数 航空自衛隊 4機

2018年に正式採用された空中給油・輸送機。航空自衛隊にて4機運用中。

早期警戒機・早期警戒管制機

○E-2C/D ホークアイ/アドバンスド・ホークアイ

分類：早期警戒機

全長：17.56 m

全高：5.58 m

全幅：24.56 m

運用数 海上自衛隊 C型 54機

D型 12機

航空自衛隊 C型 10機

D型 4機

1961年に正式採用された早期警戒機。現在E-2CとE-2Dの2機種を採用。

海上自衛隊がC型54機、D型12機、航空自衛隊がC型10機、D型4機を運用中。

○E-767 J-1WACCS
ジェイワックス

分類：早期警戒管制機

乗員：操縦士2名、機器操作員19名

全長：48.51m

全高：15.85m

翼幅：47.57m

運用数 航空自衛隊 10機

1993年に正式採用された早期警戒管制機。E-3の後継機。

航空自衛隊で10機運用中。

○E-3 セントリー

乗員：E-3A 操縦士4名、機器操作員13名

E-3B/C 操縦士4名、機器操作員17名

全長：46.62m

全高：12.73m

翼幅：44.42m

運用数 航空自衛隊 22機

1975年に正式採用された早期警戒管制機。航空自衛隊にて22機運用中。

○E/P—1

分類 早期警戒機

全長 38.0 m

全高 12.1 m

翼幅 35.4 m

最高速度 M0.81

巡航速度 M0.68

運用数 航空自衛隊 12機

2010年に正式採用された早期警戒機。航空自衛隊のE—2ホークアイの後継機。

航空自衛隊にて12機運用中。

○E—52 ゴットフオートレス

分類 早期警戒管制機

全長 47.55 m

全高 12.41 m

全幅 56.39 m

乗員 17名

運用数 航空自衛隊 5機

1984年に正式採用された早期警戒管制機。B-52を早期警戒管制機化したもの。

航空自衛隊にて5機運用中。

電子戦機・電子戦訓練支援機・電子測定機

○EC-1A/B

分類：電子戦機／電子戦訓練支援機

乗員：13名

全長：29.0 m

全高：9.99 m

翼幅：30.6 m

運用数 航空自衛隊 A型 4機

B型 3機

1986年に正式採用された電子戦機／電子戦訓練支援機。A型が電子戦機、B型が電子戦訓練支援機。

退役中。航空自衛隊でA型6機、B型3機運用中。

○EC-2A/B

分類：電子戦機／電子戦訓練支援機

乗員：17名

全長：43.9 m

全高：14.2 m

翼幅：44.4 m

最大速度：マッハ 0.82

実用上昇限度：43,000 ft

運用数 航空自衛隊 A型 14機

B型 5機

2007年に正式採用された電子戦機／電子戦訓練支援機。EC-1A/Bの後継機。

航空自衛隊でA型14機、B型5機運用中。

○EC-130

分類：電子戦機／心理戦・情報戦活動機／空中指揮統制機／通信妨害機

乗員：15名

全長：29.79 m

全高： 11.66 m

翼幅： 40.41 m

最大速度： 602 km/h

実用上昇限度： 10,060 m

運用数 D型 3機

E型 5機

E(RR)型 1機

E(ABCCCIII)型 2機

H型 3機

1980年に正式採用された電子戦機／心理戦・情報戦活動機／空中指揮統制機／通信妨害機。

EC-130D(電子戦機)、EC-130E(心理戦・情報戦活動機)、EC-13

0E(RR)(E型の発展型)、EC-130E ABCCCIII(空中指揮統制機)、

EC-130H(通信妨害機)がある。航空自衛隊でD型3機、E型5機、E(RR)型

1機、E(ABCCCIII)型2機、H型3機運用中。

○EA-18G グラウラー

分類：電子戦機

全幅：13.62 m（主翼端ポッドを含む）／9.94 m（主翼折り畳み時）

全長：18.38 m

全高：4.88 m

最大速度：マッハ1.8

戦闘上昇限度：15,240 m

乗員：2名

武装：短射程空対空ミサイル

AIM-9L サイドワインダー

90式空対空誘導弾³

04式空対空誘導弾⁵

中射程空対空ミサイル

AIM-7F/M スパロー

99式空対空誘導弾⁴

99式空対空誘導弾⁴ (B)

16式空対空誘導弾⁷

AIM-120 AMRAAM

対レーダーミサイル

AGM | 88 HARM
 96式対^A輻射^R源^Mミ^Lサイ^Lル

運用数 海上自衛隊 117機

2006年に正式採用された電子戦機。川西重工業でライセンス生産。
 海上自衛隊で117機運用中。

○EA/T-4A/B エレクトロニック・ドルフィン

分類：電子戦機

乗員：2名

全長：13.00 m (ピトー管部含む) / 11.96 m (胴体部)

全高：4.6 m

翼幅：9.94 m

運用数 航空自衛隊 A型 15機

海上自衛隊 B型 36機

1976年に正式採用された電子戦機。A型は通常機、B型は垂直^V／短距離^S離着陸^O機^L型。

航空自衛隊でA型15機、B型36機運用中。

○RC-2

分類：電子測定機

乗員：17名

全長：43.9 m

全高：14.2 m

翼幅：44.4 m

最大速度：マッハ 0.82

実用上昇限度：43,000 ft

運用数 航空自衛隊 6機

2010年に正式採用された電子測定機。航空自衛隊にて6機運用中。

実験機

○X-7 (ATD-X7) 先進技術実証機

分類：実験機

全長 19.635 m

全幅 12.564 m

全高 5.324 m

乗員 1名

最大速度 M2.8

実用上昇限界 20,000 m

武装 固定武装 JM61A1 20mmバルカン砲×1基

短射程空対空ミサイル

AIM-9L サイドワインダー

90式^A空対空誘導弾¹

04式^A空対空誘導弾⁵

中射程空対空ミサイル

AIM-7F/M スパロー

99式^A空対空誘導弾⁴

99式^A空対空誘導弾⁴ (B^B)

16式^A空対空誘導弾⁷

AIM-120 AMRAAM

長射程空対空ミサイル

10式^A空対空誘導弾⁶

極超音速空対地ミサイル

08式^S極超音速空対地誘導弾¹

極超音速空対艦ミサイル

10式極超音速空対艦誘導弾^{S A S M 1}

12式極超音速空対空誘導弾^{S S A M 1}

多目的ミサイル

14式多目的誘導弾^{M P G M 1}

空対艦ミサイル

93式空対艦誘導弾^{A S M 2}

16式空対艦誘導弾^{A S M 3}

Joint Strike Missile^{J S M}

空対地ミサイル

AGM-65 マーベリック

AGM-84K SLAMER

AGM-154 JOW

97式空対地誘導弾^{A G M 2}

08式空対地誘導弾^{A G M 3}

対レーダーミサイル

AGM-88 HARM

96式対輻射源ミサイル^A₁

2015年に初飛行した実験機。外見はエースコンバット7のX-02ワイバーン。空中指揮機

○E-747 蒼鷹

分類：空中指揮機

全長：70.6m

運用数 航空自衛隊 4機

1999年に正式採用された空中指揮機。航空自衛隊で3機運用中。元政府専用機。

戦場監視機

○E-8 ジョイントスターズ

分類：戦場監視機

全長：46.42m

運用数 航空自衛隊 16機

1988年に正式採用された戦場監視機。航空自衛隊で16機運用中。

○E-1 大鷹

分類：戦場監視機

全長 38.0 m

全高 12.1 m

翼幅 35.4 m

最高速度 M0.81

巡航速度 M0.68

運用数 航空自衛隊 4機

2010年に正式採用された戦場監視機。P-1を改造したもの。

人員・要人輸送機

○ボーイングE777-300ER 政府専用機

分類：政府専用機

運用数 航空自衛隊 2機

2005年に正式採用された政府専用機。閣僚やその家族、邦人輸送の際に使われる。(総理は総理大臣専用機)

○ボーイングE737-BBJ3 政府専用機

分類：政府専用機

運用数 航空自衛隊 2機

2005年に正式採用された政府専用機。

○エアバスE380 内閣総理大臣専用機

分類：内閣総理大臣専用機

運用数 航空自衛隊 2機

2007年に正式採用された内閣総理大臣専用機。

○エアバスE350-1000 内閣総理大臣専用機

分類：内閣総理大臣専用機

運用数 航空自衛隊 2機

2015年に正式採用された内閣総理大臣専用機。

○ボーイングE787-9 皇室専用機

分類：皇室専用機

運用数 航空自衛隊 2機

2011年に正式採用された皇室専用機。

○三菱E-150 皇室専用機

分類：皇室専用機

運用数 航空自衛隊 2機

2005年に正式採用された皇室専用機。三菱MRJ-150のビジネスジェット

版。

設定集 航空自衛隊の編成

航空幕僚監部の下に部隊管理系統として10個の航空軍団が編制され、航空集団は4つの地方航空隊、各主要軍団は一つ

または複数の航空軍によって編成されている。各航空軍及び地方航空隊は複数の航空団および群・飛行隊によって編成されている。

——航空総隊《GAC》

航空自衛隊の各地方航空隊および高射部隊、警戒管制部隊などの防空戦闘部隊を一元的に指揮・統括している組織である。航空総隊指揮官が指揮を執っており、防衛大臣から直接、指揮監督を受ける。

——航空総隊司令部【ACH】

——北部航空方面隊《第1航空軍》【NADF / 1stAF】

——北部航空方面隊司令部

——第1航空団

——第6航空団

第11航空団

第1高射群

第6高射群

北部航空施設隊

北部航空音楽隊

中部航空方面隊《第2航空軍》〔C A D F / 2 n d A F〕

中部航空方面隊司令部

第2航空団

第7航空団

第12航空団

第2高射群

第7高射群

中部航空施設隊

中部航空音楽隊

西部航空方面隊《第3航空軍》〔W A D F / 3 r d A F〕

西部航空方面隊司令部

第3航空団

第8航空団

第13航空団

第3高射群

第8高射群

西部航空施設隊

西部航空音楽隊

南部航空方面隊《第4航空軍》〔SADF/4thAF〕

南部航空方面隊司令部

第4航空団

第9航空団

第14航空団

第4高射群

第9高射群

南部航空施設隊

南部航空音楽隊

南西航空方面隊《第5航空軍》〔SADF/5thAF〕

南西航空方面隊司令部

第5航空団

第10航空団

第15航空団

第5高射群

第10高射群

南西航空施設隊

南西航空音楽隊

第1航空戦術教導軍《第6航空軍》〔1stATDA/6stAF〕

飛行教導群

高射教導群

基地警備教導隊

第1作戦情報軍《第7航空軍》〔1stAIA/7stAF〕

作戦情報処理団

電波情報収集団

情報処理団

第1作戦システム運用軍《第8航空軍》〔1stOPA/8stAF〕

作戦システム管理群

指揮所運用隊

第1電子作戦軍

第1電子作戦群

第2電子作戦群

航空戦闘軍団《ACC》

航空自衛隊の各航空隊などの派遣戦闘部隊を一元的に指揮・統括している組織である。航空戦闘集団指揮官が指揮を執っており、防衛大臣から直接、指揮監督を受ける。航空自衛隊の海外派遣部隊であり、フォース・プロバイダーとしての性格が強く、構成部隊指揮官は各地域の統合軍の指揮により作戦を展開する。

航空戦闘軍団司令部

北米航空方面軍《第11航空軍》

北米航空方面軍司令部

第111遠征航空団

第112遠征航空団

第113輸送遠征航空団

第114遠征高射群

第115遠征航空支援作戦群

中央航空方面軍《第12航空軍》

第121遠征航空団

第122遠征航空団

第123輸送遠征航空団

第124遠征高射群

第125遠征航空支援作戦群

欧州航空方面軍《第13航空軍》

第131遠征航空団

第132遠征航空団

第133輸送遠征航空団

第134遠征高射群

第135遠征航空支援作戦群

アフリカ航空方面軍《第14航空軍》

第141遠征航空団

第142遠征航空団

第143輸送遠征航空団

第144遠征高射群

第145遠征航空支援作戦群

アジア・太平洋航空方面軍《第15航空軍》

第151遠征航空団

第152遠征航空団

第153輸送遠征航空団

第154遠征高射群

第155遠征航空支援作戦群

南方航空方面軍《第16航空軍》

第161遠征航空団

第162遠征航空団

第163輸送遠征航空団

第164遠征高射群

第165遠征航空支援作戦群

—— 航空戦略軍団《ASC》

航空自衛隊の核爆弾搭載型爆撃機や大陸間弾道ミサイルなどの核戦力部隊を一元的

に指揮・統括している組織である。航空戦略軍団指揮官が指揮を執っており、防衛大臣から直接、指揮監督を受ける。

航空戦略軍団司令部

第1航空戦略軍《第21航空軍》

第211爆撃航空団

第212爆撃航空団

第213爆撃航空団

第214爆撃航空団

第215爆撃航空団

第2航空戦略軍《第22航空軍》

第221大陸間弾道ミサイル航空団

第222大陸間弾道ミサイル航空団

第223大陸間弾道ミサイル航空団

第224大陸間弾道ミサイル航空団

第225大陸間弾道ミサイル航空団

航空戦術軍団《ATC》

航空自衛隊の活動を支える輸送機部隊、管制部隊などを統括する組織である。司令部は東京都府中市。航空輸送軍団司令官は空将をもって充てられ、防衛大臣の指揮監督を受ける。

航空戦術軍団司令部

第1航空戦術軍《第31航空軍》

第311戦術航空団

第312戦術航空団

第2航空戦術軍《第32航空軍》

第321戦術航空団

第322戦術航空団

第1警戒航空軍《第33航空軍》

第331警戒航空団

第332警戒航空団

第2警戒航空軍《第34航空軍》

第341警戒航空団

第342警戒航空団

第1航空保安管制隊

飛行管理団

飛行情報団

第1航空気象隊

中枢気象隊《big》

第1飛行点検隊

飛行点検隊

第1航空機動衛生隊

航空機動衛生隊

第1特別航空輸送隊

航空予備軍団《ARC》

航空自衛隊の予備兵力として現役部隊に兵力・サービスを提供することが目的であり、人員・機材を含む予備役部隊の管理・整備・訓練・派遣をつかさどっている。ARC傘下には予備役部隊として2個航空軍・28個航空団がある。予備役人員は原則非常勤であるが、部隊の円滑な運用のために常勤人員も配属されている。

航空予備軍団司令部

第1航空予備軍《第41航空軍》

第411予備航空団

第2航空予備軍《第42航空軍》

第421予備航空団

第3航空予備軍《第43航空軍》

第431予備航空団

航空予備役人事センター

—— 航空特殊作戦軍団《SAOC》

航空自衛隊の特殊作戦を実施する部隊である。各特殊部隊要員の潜入支援や対テロ作戦、偵察・観察、戦闘搜索救難の実施のほか、ラジオ・テレビ・SNSなどを用いた心理戦も行なう。

—— 航空特殊作戦軍団司令部

—— 第1特殊作戦航空軍《第51航空軍》

—— 第1特殊作戦群

—— 第11特殊作戦情報中隊

—— 第1特殊作戦整備群

—— 第1特殊作戦任務支援団

第1特殊作戦医療群

第2特殊作戦航空軍《第52航空軍》

第21特殊戦術群

第221特殊戦術中隊

第223特殊戦術中隊

第22特殊戦術群

第222特殊戦術飛行隊

第3特殊作戦航空軍《第53航空軍》

第31特殊作戦群

第3特殊作戦整備群

第3特殊作戦任務支援群

第3特殊作戦医療群

第4特殊作戦航空軍《第54航空軍》

第41特殊作戦群

第4特殊作戦整備群

第5特殊作戦航空軍《第55航空軍》

第51特殊作戦飛行隊

第52特殊戦術中隊

第53特殊作戦中隊

第5特殊作戦整備群

第6特殊作戦航空軍《第56航空軍》

第61特殊作戦群

第6特殊作戦訓練群

第16航空試験飛行隊

航空自衛隊特殊作戦学校

航空作戦センター

第701特殊作戦航空団

第7011特殊作戦群

第701特殊作戦整備群

第701特殊作戦任務支援群

航空資材軍団《AMC》

航空自衛隊の活動を支える兵站部隊などを統括する組織である。司令部は東京都府中市。航空資材軍団司令官は空将をもって充てられ、防衛大臣の指揮監督を受ける。

航空資材軍団司令部

第1航空資材軍《第61航空軍》

第611資材航空団

第612資材航空団

第2航空資材軍《第62航空軍》

第621資材航空団

第622資材航空団

第3航空資材軍《第63航空軍》

第631資材航空団

第632資材航空団

第4航空資材軍《第64航空軍》

第641資材航空団

第642資材航空団

第5航空資材軍《第65航空軍》

第651資材航空団

第652資材航空団

航空宇宙作戦軍団《AOC》

航空自衛隊のスペースデブリ等の監視、軍事衛星の打ち上げ・運用などの自衛隊の戦略に必要な宇宙空間における機器の運用や技術開発の支援を行っている。弾道ミサイル発射に対する早期警戒も任務であり、地上の大型早期警戒レーダーも管轄下である。運用している軍事衛星としてはGPS衛星などの航法衛星や通信衛星、早期警戒衛星などがあげられる。

1個航空軍・2個センター編制であり、が衛星の運用・ミサイル早期警戒を担当している。また、JAXAやアメリカ宇宙軍と協力し、宇宙空間の常時監視体制を構築する。これにより、スペースデブリや他国の人工衛星等が日本の人工衛星に影響を及ぼさないかの監視や日本の人工衛星を他国からの攻撃や妨害、それに宇宙ごみから守るための「宇宙状況監視」を行う。他にも、電波妨害や不審な人工衛星や高度約3万6千キロの静止軌道の監視、隕石監視も行なう予定である。

—— 航空宇宙作戦軍団司令部

—— 第1航空宇宙作戦軍

—— 航空宇宙ミサイルシステムセンター《SMSC》

—— 航空宇宙防衛システム航空団

—— 衛星測位システム運用・管制航空団

—— 打ち上げ・射場システム航空団

— 軍事衛星通信航空団

— 航空宇宙配備赤外線システム航空団

— 宇宙開発試験航空団

— 次世代航空宇宙開発センター

— 航空教育集団《AEG》

航空自衛隊における一般教育、飛行教育、術科教育などを一元的に統括・実施する組織である。

司令部は静岡県浜松市の浜松基地に所在している。なお、航空自衛隊幹部学校以外の学校は航空教育集団司令官の指揮監督下であり、航空教育集団司令官は、空将をもって充てられ、防衛大臣の指揮監督を受ける。

— 航空教育集団司令部

— 第1教育航空軍《第81航空軍》

— 第2教育航空軍《第82航空軍》

— 第11飛行教育航空軍《第83航空軍》

— 第12飛行教育航空軍《第84航空軍》

— 第13飛行教育航空軍《第85航空軍》

— 航空教育隊

飛行教育航空隊

教材整備隊

航空自衛隊幹部候補生学校

航空自衛隊第1術科学校

航空自衛隊第3術科学校

航空自衛隊第4術科学校

航空自衛隊第5術科学校

航空開発実験集団《A D E G》

航空自衛隊で使用する航空機や装備品の開発および航空医学・人間工学に着目した研究などを行う組織である。司令部は東京都府中市の府中基地に所在している。航空開発実験集団司令官は、空将をもって充てられ、防衛大臣の指揮監督を受ける。

航空開発実験集団司令部

飛行開発実験軍《第91航空軍》

電子開発実験軍《第92航空軍》

航空医学実験軍《第92航空軍》

設定集 海兵隊の編成・装備

《編成》

海兵隊総隊

- 第1水陸機動軍
- 第1水陸機動軍団司令部
- 第1水陸機動師団
- 第2水陸機動師団
- 第1戦闘上陸師団
- 第2戦闘上陸師団
- 第1特科師団
- 第1上陸戦闘偵察連隊
- 第1施設連隊
- 第1後方支援連隊
- 水陸機動教育隊
- 特殊作戦軍

— 特殊作戦軍司令部

— 海兵特殊作戦連隊

— 本部中隊

— 第1海兵特殊作戦大隊：アジア・太平洋担当

— 第1海兵特殊急襲中隊

— 第11海兵特殊作戦中隊

— 第12海兵特殊作戦中隊

— 第13海兵特殊作戦中隊

— 第2海兵特殊作戦大隊：中東担当

— 第21海兵特殊作戦中隊

— 第22海兵特殊作戦中隊

— 第23海兵特殊作戦中隊

— 第3海兵特殊作戦大隊：欧州・アフリカ担当

— 第31海兵特殊作戦中隊

— 第32海兵特殊作戦中隊

— 第33海兵特殊作戦中隊

— 海兵襲撃支援連隊

— 連隊本部

— 第1海兵特殊作戦支援大隊

— 第2海兵特殊作戦支援大隊

— 第3海兵特殊作戦支援大隊

— 海兵特殊作戦訓練センター

第1海兵遠征軍団（太平洋海兵隊）

— 第1海兵遠征軍

— 第1海兵遠征軍司令部

— 第1海兵師団

— 第11海兵航空団

— 第11海兵兵站群

— 第11海兵遠征旅団

— 第12海兵遠征旅団

— 第11海兵遠征隊

— 第12海兵遠征隊

— 第13海兵遠征隊

— 第3海兵遠征軍

——第3海兵遠征軍司令部

——第3海兵師團

——第13海兵航空團

——第13海兵兵站群

——第13海兵遠征旅團

——第14海兵遠征旅團

——第14海兵遠征隊

——第15海兵遠征隊

——第16海兵遠征隊

第2海兵遠征軍團（大西洋海兵隊）

——第2海兵遠征軍

——第2海兵遠征軍司令部

——第2海兵師團

——第22海兵航空團

——第23海兵兵站群

——第22海兵遠征旅團

——第23海兵遠征旅團

—— 第22海兵遠征隊

—— 第23海兵遠征隊

—— 第24海兵遠征隊

—— 第4海兵遠征軍

—— 第4海兵遠征軍司令部

—— 第4海兵師団

—— 第24海兵航空団

—— 第25海兵兵站群

—— 第24海兵遠征旅団

—— 第25海兵遠征旅団

—— 第25海兵遠征隊

—— 第26海兵遠征隊

—— 第27海兵遠征隊

—— 第3海兵遠征軍団（海兵予備役軍団）

—— 第5海兵遠征軍

—— 第5海兵遠征軍司令部

—— 第5海兵師団

—— 第11海兵航空団

—— 第11海兵兵站群

《編成内訳》

海兵隊は航空部隊も含めた諸兵科統合部隊であり、陸上自衛隊とは異なつた編制を取っている。通常編制が戦闘を見越した海兵空地任務部隊編制となつている。アメリカ海兵隊と共通であり、1946年の再編成の際に構成された。MAGTFの最大規模のものは海兵遠征軍であり、1個海兵師団および1個海兵航空団からなる。必要に應じ、より小規模な海兵遠征旅団や海兵隊遠征隊が編成される。平時においてMAGTFは、MEFで4隊、MEBで8隊、MEUで12隊を編制し、有事にはこれらが組み合わされ、組み替えられて作戦が実行される。また、海兵隊総隊はMAGTFではなく、精鋭部隊である水陸機動軍を編成する。この部隊は日本国の数多い島嶼の即時奪還などを目的とした部隊である。

【海兵空地任務部隊構成内容】

指揮部隊

他の部隊を指揮する司令部と、それらを支援する諜報、通信、管理支援を行う部隊。

地上戦闘部隊

歩兵科部隊を中核として、機甲科・特科・施設科、更には斥候・偵察・狙撃および前線航空管制や水陸両用強襲車その他が含まれる部隊。

航空戦闘部隊

MAGTFの航空戦力を担う単位であり、あらゆる航空機（回転翼機、固定翼機）、操縦士と整備要員および航空運用のための指揮統制を含む。理想的には6つの能力（強襲支援、対航空機戦、攻撃航空支援、電子戦、航空機とミサイルの管制、航空偵察）を提供するが、この全能を發揮できるのは海兵遠征旅団以上の規模のMAGTFに限られる。

施設戦闘部隊

MAGTFのための支援部隊すべてを含む単位。通信、戦闘工兵、自動車輸送、衛生、補給、空輸などの特定専門グループ、上陸支援チームなどで構成され、海兵空地任務部隊の即応性の継続と継戦能力の維持に必要な全てが含まれる。

【海兵空地任務部隊規模】

部隊規模	指揮官	総人員規模	地上戦闘部隊	航空戦闘部隊	施設戦闘部隊
独力での継戦能力	海兵遠征軍	海兵将、海兵将補	2〜9万名	師団	航空団
60日間(約2ヶ月)	海兵遠征旅団	海兵将補	3,000〜2万名	連隊基幹	

航空群 連隊 30日間(約1ヶ月) 海兵遠征隊 一等海兵佐 1, 500〜3, 000名 大隊基幹 航空隊 大隊 15日間(約半月)

【水陸機動軍構成内容】

水陸機動軍は、敵国に島嶼などを占領された際に、奪還や島嶼住民の解放などを行う部隊である。その任務内容から第2の特殊部隊とも呼ばれており、隊員の8割がレンジャー隊員である。有事においては、水陸機動師団、戦闘上陸師団の部隊を選抜し、水陸機動任務部隊を編成する。その作戦規模から3つの内いずれかの部隊を構成する。

水陸機動師団

水陸機動団の主力部隊の一つであり、水陸機動軍の地上戦闘部隊。5個普通科大隊及び対戦車大隊を基幹としている。両用戦部隊として、島嶼防衛・奪還を任務としている。戦闘上陸師団

水陸機動軍(主に水陸機動師団の人員)の輸送艦から揚陸地点への上陸、機甲部隊による上陸部隊の支援、上陸前後における部隊の火力支援を主目的とする。

特科師団

火力誘導中隊は野戦特科火力、艦砲射撃、航空爆撃等の陸・海・空自衛隊の火力の誘

兵将補 3, 000 \sim 5, 000名 旅団基幹 旅団基幹 旅団基幹 中隊基幹 中隊
 基幹 中隊基幹 水陸機動団 一等海兵佐 1, 500 \sim 2, 500名 連隊基幹
 連隊基幹 連隊基幹 小隊基幹 小隊基幹 小隊基幹

【特殊作戦群の編成】

——海兵特殊作戦連隊

——本部中隊

——第1海兵特殊作戦大隊：アジア・太平洋担当

——第1海兵特殊急襲中隊

——第11海兵特殊作戦中隊

——第12海兵特殊作戦中隊

——第13海兵特殊作戦中隊

——第2海兵特殊作戦大隊：中東担当

——第21海兵特殊作戦中隊

——第22海兵特殊作戦中隊

——第23海兵特殊作戦中隊

——第3海兵特殊作戦大隊：欧州・アフリカ担当

——第31海兵特殊作戦中隊

—— 第32海兵特殊作戦中隊

—— 第33海兵特殊作戦中隊

—— 海兵襲撃支援連隊

—— 連隊本部

—— 第1海兵特殊作戦支援大隊

—— 第2海兵特殊作戦支援大隊

—— 第3海兵特殊作戦支援大隊

—— 海兵特殊作戦訓練センター

海兵特殊作戦連隊

1個連隊に3個大隊編成で、軍属合わせて約3,000名という規模となっている。基本的には大隊と支援群がセットになって運用される。直接的な行動は特殊作戦大隊が、兵站や支援砲撃、情報収集などは支援群が担当している。

海兵特殊作戦中隊

1個大隊に4個編成された中隊は大隊の一部として行動する他、情報収集・通信・支援パッケージを追加された増強大隊となることもある。

海兵特殊作戦群

1 個中隊に5個編成されたチームは14名で編成され、一等海兵尉×1、海兵曹長×1、運用主任（一曹）×1、通信主任（二曹）×1、班長×2、副班長×2、班員×4、衛生要員×2で構成されている。

海兵特殊作戦支援群

大隊をあらゆる面からサポートすることを任務としている。それぞれの特殊作戦大隊に対して、一つの支援群大隊（Mが支援を行うのが基本だが、それぞれを構成する中隊は特殊作戦中隊や、あるいは他の支援群大隊に容易に組み入れることができる。

海兵特殊急襲中隊

海兵隊版ゼロ・フォース。対テロ及び人質救出の専門部隊として設立された。麾下部隊は2個海兵特殊急襲群。

《装備》

【車両】

主力戦車

- 10式戦車（B，D，E型）
- 90式戦車（B，C型）
- 89式戦車（A，D，G型）

○74式戦車（E，G，H型）
軽戦車

○16式軽戦車

水陸両用装甲兵員輸送車

○AAV-7

○ACV-8

歩兵戦闘車

○10式装甲戦闘車

○89式装甲戦闘車

○87式装甲戦闘車

装輪装甲車

○16式機動戦闘車

○87式偵察警戒車

○96式偵察警戒車

装軌装甲車

○73式装甲車

○10式装甲車

自走迫撃砲

○87式自走迫撃砲

自走ロケット弾発射器

○10式高機動多連装ロケットシステム

自走高射機関砲

○87式自走高射機関砲

○90式自走高射機関砲

歩兵機動車

○01式軽装甲機動車

○07式対地雷伏撃防護車

○08式対地雷伏撃防護車

○10式対地雷伏撃防護車

○99式装甲機動車

多用途装輪車

○85式高機動車

○89式偵察軽攻撃車両

○93式レンジャー特殊作戦車両

- 19式汎用軽機動車

【火砲】

榴弾砲

- 89式105mm榴弾砲（L118 105mm榴弾砲）

- 16式155mm榴弾砲

対空誘導弾

- 11式短距離地对空誘導弾

- 81式短距離地对空誘導弾

- 93式近距離地对空誘導弾

- 91式携帯地对空誘導弾

対戦車誘導弾

- 79式対舟艇対戦車誘導弾

- 87式対戦車誘導弾

- 96式多目的誘導弾システム

- 01式軽対戦車誘導弾

- 中距離多目的誘導弾

対戦車擲弾発射器

○ S M A W ロケットランチャー

○ 64式66mm擲弾銃 (Block IX)

○ 89式対戦車擲弾発射器 (AT-4)

迫撃砲

○ 81mm迫撃砲 L16

○ 120mm迫撃砲 RT

【小火器】

拳銃

○ M45 A1 C Q B P

○ 16式拳銃

○ グロツク18C J (水陸機動団が使用)

○ 10式9mm拳銃 (特殊部隊が使用)

○ H & K H K 45 (特殊部隊が使用)

短機関銃・P D W・機関拳銃

○ U Z I

○9mm機関拳銃

○SIG MPX (特殊部隊が使用)

○KRIS Vector (特殊部隊が使用)

○H&K MP5 (特殊部隊が使用)

○H&K MP7 (特殊部隊が使用)

○FN P90 (特殊部隊が使用)

小銃

○64式7.62mm小銃

○89式5.56mm小銃

○89式5.56mm短小銃

○10式5.56mm小銃

○20式5.56mm小銃

○H&K HK433 (水陸機動団が使用)

○H&K G36A2 (特殊部隊が使用)

○H&K HK416A2 (特殊部隊が使用)

○H&K HK417A2 (特殊部隊が使用)

○FN SCAR (特殊部隊が使用)

○SIG MCX (特殊部隊が使用)
重機関銃

○12.7mm重機関銃M2

汎用機関銃

○62式7.62mm機関銃

○90式7.62mm機関銃

○10式7.62mm機関銃 (IMI Negev NG7)

分隊支援火器

○5.56mm機関銃 MINI MI

狙撃銃

○M40対人狙撃銃

○10式対人狙撃銃 (豊和 HCR CHASSIS RIFLEのハンドガードを

M-LOKに換装し、破水性を高めたもの)

マークスマンライフル

○64式7.62mm狙撃銃

○10式7.62mm狙撃銃 (L129A1) (水陸機動団が使用)

対物ライフル

○バレットM82A1

散弾銃

○レミントンM870 MCS

○ベネリ M4 スーペル90

○M26 MASS

擲弾発射機

○89式擲弾発射器(MGL-140)

○96式40mm自動擲弾銃

【航空機】

戦闘機

○F-35B Lightning II

○F/A-18E Hornet

攻撃機

○AV-8B Harrier II

輸送機

○Beechcraft C-12 Huron

○C-27J Spartan

○CASA CN|235

○Transall C|160NG

○EADS CASA C|295M

空中給油機

○KC|130H

○Airbus A330 MRTT

攻撃ヘリコプター

○AH|1Z Viper

○WAH|64 Apache

輸送ヘリコプター

○UH|1Y Venom

○UH|1N Twin Huey

○CH|53E Super Stallion

○CH|53K King Stallion

○AW|101 Merlin

○MV|22B Osprey

無人航空機

- RQ | 11 Raven
- Scan Eagle
- RQ | 20 Puma
- RQ | 21 Black Jack
- 遠隔操縦観測システム
- 無人偵察システム
- MQ | 9 Reaper
- Black Hornet
- Nano

設定集 語集・登場人物紹介

中央捜査総局

通称『CDGI』。法務省の外局であり、都道府県をまたいで、政治事案やテロ・スパイ、政府の汚職などの捜査を担当する機関。捜査局の名の通り捜査・逮捕までを管轄としており、逮捕後の起訴・拘留などは公安調査庁・公安警察などの法務機関が執行している。逆に地方自治体の条例では犯罪となるが、刑法には規定が無い犯罪については管轄外となる。さらに、誘拐事件では、未解決のまま通報から24時間を経過すると、広域事件として警察庁（警視庁・都道府県警察）から捜査主体が移される。

《構成》

——中央捜査総局長官（一名）

——中央捜査総局副長官（二名）

——情報部

——公安調査部

——刑事部

——警備部

——特殊機動戦術部隊^S_M^T_U（特殊部隊）

——サイバー対策部

——科学研究部

——情報技術部

——人事募集部

中央国家情報局

通称『C N I A』。内閣直轄の情報機関。1949年創設。アメリカのC I Aをもとに作られた情報機関。H U M I N Tなどを行う。また下記の事も行う。

○日本国に友好的な政権樹立の援助

○日本国に敵対する政権打倒の援助

○日本に敵対する指導者の暗殺

○外国のジャーナリストのスパイ・協力者獲得

○外国の保守政党の選挙に資金提供

○外国の左派政党の弱体化

○外国の与野党に日本国に友好的な政治家の育成

- 国内外でのスパイ養成
- 自衛隊の戦闘地域での情報収集
- 外国での情報操作
- 反政府組織などの援助・人材育成
- インターネット上での諜報活動／謀略活動
- クラッカー養成
- 外国へのサイバー攻撃

《構成》

- 中央国家情報局長（一名）
 - 中央国家情報局副局长（一名）
 - 統括本部
 - 作戦部
 - 情報部
 - 科学技術部
 - 警備部
 - 特殊行動機関通称『SAO』、『S機関』、『SA機関』とも呼ばれる。C N I Aにおいて隠密作戦や準軍事作戦を行う準軍事部門。

——特殊^S作戦^O行動^A部隊^F
——政策^P活動^A部隊^T

国家安全保障局

通称『N I S A』。防衛省直轄の情報機関。1943年創設。これを元にしてNSAが創設された。SIGINTやTECHINTを主に行う。

○核戦争への対処

○通信情報（音声会話、コンピュータデータ）

○受信・収集・監視（地上アンテナ、情報収集艦、空軍機、人工衛星、インターネット、その他）

○分類・集積・配信（巨大データベース：『八咫鳥』）

○エシユロンの開発、運用、管理

○通信情報収集の資産の管理等（アンテナ、情報ネットワーク）

○海外の暗号の解読・解析

○暗号技術

○開発

○規制と管理

○盗聴

○日本政府の秘密通信

○暗号化機器とシステムの開発と維持

○暗号認証提供

○基準作成

○外国のリーダーサイト配置図などの作成

○無人偵察機の運用・管理・情報解析

《構成》

—— 国家安全保障局長官（一名）

—— 国家安全保障局副長官（二名）

—— 統括本部

—— 警備室

—— 人事室

—— サイバー対策室

—— 技術室

—— 研究室

—— 安全保障大学校

国家統合情報局

通称『N I n J A』。外務省直轄の情報機関。1952年創設。I M I N T及びM A S I N T、O S I N Tを主に行う。

○偵察衛星の画像収集・解析

○空自偵察機の偵察画像解析

○レーダー信号の傍受(R A D I N T)

○核爆発や、エンジンの周波数から得られる情報の収集(F R E Q U E N C Y)

○紫外線・可視光線・赤外線から得られる情報の収集(E O)

○地震、大気の振動、磁場の变化等から得られる情報の収集(G E O P H Y S I C A

L)

○放射線から得られる情報の収集(N U C I N T)

○化学物質の分析から得られる情報の収集(M A T E R I A L S)

○一般的なメディアが公開している出版物や活字情報、放送内容の分析

《構成》

——国家統合情報局長(一名)

——国家統合情報局長(二名)

——統括官

——法律顧問

——監査総監

——主席財務執行官

——調達官

——運用室

——武官情報管理室

——国際協力室

——広報室

——総務部

——情報部

——情報解析部

——核対策室

——地理対策室

——大気情報集積部

——分析部

——人事部

——情報管理部

中央国家憲兵団

通称『C N G』。法務省の傘下の部隊。5・15事件を機にフランスの国家憲兵隊・イタリヤのカラビニエリを参考に設立された国家憲兵組織。主に東京都の警備、皇宮警察との調整、警察が対処しきれない凶悪事件の対処、行政機関の警備、在外公館の警備にあたる。制服はカラビニエリを参考にしており、カッコいいと評される。

《構成》

—— 統括部

—— 中央国家憲兵団統括部長官

—— 中央国家憲兵団統括部副長官

—— 国家憲兵総局

—— 財務局

—— 人事局

—— 作戦役務局

—— 刑事局

—— 国際協力局

—— 調達局

—— 情報技術局

——機動警備部隊

——治安介入部隊S₁U警察庁や警視庁のS I T、S A T、A F Sが対処できない事件に
出動する特殊部隊

——機動憲兵隊機動運用部隊。暴動鎮圧や雑踏警備のほか、他部門の応援なども所
掌する

——機動運用小隊強行犯対策・人質救出作戦部隊。機動運用小隊で対応困難であ
れば広域機動運用小隊が対応し、より重大なものであればS I Uの担当となる

——広域機動運用小隊

——高機動部隊特科車両隊。装甲戦闘車両などを運用する

——地方憲兵隊地方配備部隊。大阪・愛知・福岡・札幌・広島・沖縄に配備

——警邏対応小隊警邏隊。また強行犯への初動対応も担当する。

——特殊警備部隊シークレットサービス通称『S S U』。政府要人及び海外要人の警備にあたる。

——国際派遣分隊外務省の指揮下に配属されて在外公館の警備を行う部隊

——海上警備部隊

——航空警備部隊

《階級》

——大將（統括部長官）

——中將（統括部副長官・国家憲兵総局長・機動警備部隊長）
——少將（国家憲兵総局各局長・治安介入部隊指揮官・機動憲兵隊長・地方憲兵隊長・
特殊警備部隊長）

——大佐

——中佐

——少佐

——大尉

——中尉

——少尉

——上級曹長

——曹長

——軍曹

——伍長

——兵長

——上等兵

——一等兵

——二等兵

《裝備》

- Beretta 92A1 (一般隊員が装備)
- Colt Python (全士官が装備)
- H&K USP (機動憲兵隊が装備)
- H&K HK45 (治安介入部隊が装備)
- FN Five-seven (治安介入部隊が装備)
- 89式小銃 (機動憲兵隊が装備)
- 64式小銃 (機動憲兵隊が装備)
- AR15 (機動憲兵隊が装備)
- M4 (治安介入部隊が装備)
- H&K HK416 (治安介入部隊が装備)
- SIG MCX (治安介入部隊が装備)
- Mk. 14 EBR (機動憲兵隊が装備)
- SR25 (機動憲兵隊が装備)
- H&K G28 (治安介入部隊が装備)
- SIG MPX (機動憲兵隊が装備)
- H&K MP5 (機動憲兵隊・治安介入部隊が装備)

- H&K MP7 (一般隊員が装備)
- 49式短機関銃 (機動憲兵隊が装備)
- 9mm機関拳銃 (機動憲兵隊が装備)
- FN P90 (治安介入部隊が装備)
- Mk.48 (治安介入部隊・高機動部隊が装備)
- M2 Browning (治安介入部隊・高機動部隊が装備)
- Origin-12 (機動憲兵隊が装備)
- Kel-Tec KSG (機動憲兵隊が装備)
- Benelli M4 (機動憲兵隊・治安介入部隊が装備)
- M870 (機動憲兵隊・治安介入部隊が装備)
- Remington M700 (機動憲兵隊・治安介入部隊が装備)
- AWP (機動憲兵隊・治安介入部隊が装備)
- AMP DSR-1 (機動憲兵隊・治安介入部隊が装備)
- H&K PSG-1 (機動憲兵隊・治安介入部隊が装備)

東亜軍事サービス株式会社

1978年に設立された民間軍事会社。民間企業、政府、および非営利のクライアント

トに対し、警備、危機管理サポートやコンサルティング、軍事作戦の援助、及びリスク管理サービスなどを提供する組織。武器や車両などは諸外国から中古で安価で買い取ったもの。択捉島に本部があり、日本最大の軍事訓練施設の『択捉総合訓練施設』があり、そこでは安価で近現代の銃が撃てることで国内旅行の目玉スポットでもある。

主な業務

○軍事サービス

訓練を受けた自社要員と、戦車や装甲車などの陸上車両、ヘリコプターや戦闘機など航空機を含む装備を有し、戦闘への参加、戦地での護衛、治安維持活動、危険地域での輸送、後方支援、軍事コンサルティング等を提供する。

○軍事訓練サービス

前述の国内最大級の軍事訓練施設の他、射撃訓練場、軍用犬訓練施設を保有しており、民間人のみならず正規軍に対しても戦闘訓練を提供する。

○航空機リース

様々な航空機を航空会社にリースする。世界二位の大きさを誇る。

装備

小火器

— アサルトライフル

○ M 4

○ 89式小銃

○ 64式小銃

○ AUG

○ FA—MAS

○ H&K G 3

○ H&K HK 33

○ H&K HK 416

○ FN FAL

○ FN F2000

○ Ak. 5C

○ Cz 805 BREN

○ Kbs wz. 1996
ベリル

○ AK—47

○ AKM

○ AK—74

- AK | 74 M
- AK | 101
- AK | 102
- AEK | 971
- AN | 94
- AK | 108
- AK | 19
- AS VAL
- OTS | 14
- IMI ガリル
- IWI ACE
- IMI TAR | 21
- K2C1
- M14
- SIG MCX
- ブッシュマスター ACCR
- AR70 / 90

- M k . 1 4 E B R
- L 1 A 1
- M A S | 4 9
- S K S
- セミオートライフ
- A R 1 0
- A R 1 5
- G 3
- S I G M C X
- M 1 1 0 A 1 S D M R
- M 1 4
- S I G 5 3 0
- S I G 5 2 0
- S I G 5 5 1
- S I G 5 5 0
- A R X 2 0 0
- A R X 1 6 0

- ミニ14
- SR25
- SVD
- VSS
- HK G28
- レミントン R11
- L129A1
- 短機関銃 / PDW
- S&W M76
- TEC—DC9
- イングラムM10
- コルト9mmSMG
- クリスヴェクター
- SIG MPX
- Vz. 61
- スコープオンEVO3
- H&K MP5

○H & K MP 7

○ワルサーMP

○ベレッタM12

○スターリング

○ステアーTMP

○AUG 9mm

○PM 84

○UZI

○KI

○PP 19 ビゾン

○PP 19 01

○49式短機関銃（ニューナンプM66短機関銃）

○9mm機関拳銃

○FN P90

○CBJMS

— 機関銃

○M249

- S S | 7 7
- P K P
- P K M
- P K
- R P | 4 6
- V z . 5 9
- M G 4
- M 6 0
- R P K
- R P D
- C I S ウルティマックス100
- I M I ネゲヴ
- H & K M G 4
- M I N I M I
- F N M A G
- M 2 4 0
- M 2 7 I A R

○62式7・62mm機関銃

○M2ブローニング

○KPV

○NSV

○Kord

— 散弾銃

○オリジン12

○ベネリM4

○サイガ12

○ヴェープル12

○AA—12

○M870

○M590

○KSG

○M37

○ベネリ・ノヴァ

○ベネリ・スーパードヴァ

- K S | 2 3
- T O Z | 1 9 4
- ベガス
- M 2 6 M A S S
- R D I ストライカー | 1 2
- 狙撃銃
- ウインチェスター | M 7 0
- レミントン M 7 0 0
- M 4 0
- M 2 4 M W S
- バレット M 9 8 B
- レミントン M S R
- バレット M R A D
- M 2 1
- M 1 4 D M R
- M 3 9 E M R
- M k . 1 4 E B R

- L96A1
- AWM
- AXMC
- FR|F1
- FR|F2
- PGM ウルティマ・ラティオ
- PGM 338
- H&K PSG|1
- H&K MSG|90
- DSR|1
- ワルサーWA2000
- ブレイザーR93
- ヘーネルRS9
- ツアスタバM79
- ツアスタバM07
- SAKO TRG
- SAKO M23

○SV—98

○豊和ゴールデンベア

○豊和M1500

○バレットM82

○マクミランTAC—50

○アーマライトAR—50

○アキュラシーAW50

○PGM ヘカートII

○ゲパート

○ダネル NTW—20

○KBP OSV—96

○KSVK

— 拳銃

○S&W M39

○S&W M&P

○スプリングフィールドXD

- スプリングフィールドXDM
- M A S M l e . 1 9 5 0
- H & K H K 4 5
- H & K M k . 2 3
- H & K P 7
- H & K V P 7 0
- H & K U S P
- H & K P 2 0 0 0
- H & K P 3 0
- H & K V P 9
- ワルサー P 5
- ワルサー P 9 9
- ワルサー P P S
- ワルサー P P Q
- ワルサー P D P
- ベレッタ 9 2
- ベレッタ 9 3 R

- ベレッタ90 | T w o
- ベレッタ8000
- ベレッタPx4
- ベレッタAPX
- FN ブローニング・ハイパワー
- FN FN X
- FN F i v e | s e v e n
- SIG P 2 2 0
- SIG P 2 2 6
- SIG P 2 3 0
- SIG P 2 3 8
- SIG P 2 3 8
- SIG P 2 3 9
- SIG P 3 2 0
- SIG P r o
- SIG M O S Q U I T O
- グロツク17
- グロツク17 L

- グロツク 3 0
- グロツク 3 3
- グロツク 3 9
- グロツク 3 4
- グロツク 3 5
- グロツク 4 1
- グロツク 3 6
- グロツク 4 2
- グロツク 4 3
- C z 7 5
- C z 1 0 0
- C z 1 1 0
- C z P | 1 0 C
- A r e x R e x Z e r o 1
- ベクター C P l
- マカロフ P M
- スチエツキン A P S

車両

——戦車

- MP-443
- MP-446
- レベテフ・ピストル
- GSh-18
- デザートイーグル
- K5
- M41D ウォーカーブルドック
- M48A5 パットン
- M60A3 パットン
- M551 シェリダン
- FV4201 チーフテン
- FV101 スコーピオン
- Ikv-91
- Strv-103

- P T | 7 6
- T | 5 4
- T | 5 5
- T | 6 2
- T | 6 4
- T | 7 2
- レオパルド 1
- A M X | 3 0
- M 1 エイブラムス
- M 1 A 1 エイブラムス
- T A M
- T A M | 2 C
- T A M | 2 I P
- チャレンジャー 1
- チャレンジャー 2
- メルカバ
- アリエテ

○OF-40

○K1

○K2

○CM11

○レオパルド2

○ルクレール

○PT-91 トヴァルドイ

航空機

—— 戦闘機

○F-4 ファントムII

○F-111 アードヴァーク

○F-8 クルセイダー

○F-5 フリーダムファイター／タイガーII

○ホーカー・シドレー ハリアー

○BAC ライトニング

○ダッソー ミラージュIII

- MiG—21
- MiG—19
- サブ 35 ドラケン
- F—15 イーグル
- F—16 ファイティング・ファルコン
- F—20 タイガーシャーク
- AV—8B ハリアーII
- F—14 トムキャット
- F/A—18 ホーネット
- トーンード ADV
- ミラージュF1
- ミラージュ2000
- F—1
- サブ 37 ビゲン
- Su—27
- MiG—29
- Su—17

— 輸送機

(部隊輸送の他、リースにも用いられる)

○ボーイング707

○ボーイング717

○ボーイング727

○ボーイング737

○ボーイング747

○ボーイング757

○ボーイング767

○ボーイング777

○ボーイング787

○エアバスA300

○エアバスA310

○エアバスA318

○エアバスA319

○エアバスA320

○エアバスA321

- エアバスA330
- エアバスA340
- エアバスA350 XWB
- エアバスA380
- エンブラエルE-Jet
- DHC-8 ダツシユ 8
- YS-11
- BAe ATP
- ビツカース VC-10
- An-24 コーク
- An-148
- Il-62
- Il-86
- Il-96
- Tu-154
- Tu-204
- DC-9

○MD|80

○MD|90

○DC|10

○MD|11

○L|1011 トライスター

○ATR 42

○ATR 72

特殊部隊

○自衛隊

統合軍

——特殊作戦統合任務部隊

——陸上自衛隊特殊作戦軍団

——第1特殊作戦部隊

——特殊作戦群

——第1特殊作戦群

——第2特殊作戦群

——第3特殊作戦群

- 第4特殊作戰群
- 第5特殊作戰群
- 特殊作戰支援司令部
- 第227支援群
- 民事活動及び心理作戰司令部
- 第7心理作戰群
- 第8心理作戰群
- 第9心理作戰群
- 第10心理作戰群
- 第57民生旅団
- 第75中央即応機動連隊
- 第1特殊作戰航空団
- 第102特殊作戰航空隊
- 第103特殊作戰航空訓練隊
- 最先端特殊作戰センター
- 第1特殊作戰部隊零作戰分遣隊
- 海上自衛隊特殊任務部隊

— 第1特殊任務群

— 第1特別警備隊

— 第2特別警備隊

— 第3特別警備隊

— 第4特別警備隊

— 第2特殊任務群

— 第5特別警備隊

— 第6特別警備隊

— 第7特別警備隊

— 第8特別警備隊

— 第3特殊任務群

— 第10特別輸送群

— 第11特別輸送群

— 第4特殊任務群

— 第12特別輸送群

— 第13特別輸送群

— 第5特殊任務群

- 第14 特殊作戰支援群
- 第15 特殊作戰支援群
- 海上自衛隊特殊作戰任務部隊
- 第10 特殊任務群
- 第20 予備群（予備役）
- 第21 予備群（予備役）
- 航空自衛隊航空特殊作戰軍団
- 第^{第5}1 特殊¹作戰^航航空^空軍
- 第1 特殊作戰群
- 第11 特殊作戰情報中隊
- 第1 特殊作戰整備群
- 第1 特殊作戰任務支援団
- 第^{第5}2 特殊²作戰^航航空^空軍
- 第1 特殊作戰醫療群
- 第21 特殊戰術群
- 第221 特殊戰術中隊
- 第223 特殊戰術中隊

—— 第2 2 特殊戰術群

—— 第2 2 2 特殊戰術飛行隊

—— 第2 2 4 特殊戰術飛行隊

—— 第2 2 5 特殊戰術飛行隊

—— 第2 2 6 特殊戰術飛行隊

—— 第2 特殊作戰整備群

—— 第^第3⁵特殊³作戰^航航空^空軍^軍

—— 第3 1 特殊作戰群

—— 第3 特殊作戰整備群

—— 第3 特殊作戰任務支援群

—— 第3 特殊作戰醫療群

—— 第4 特殊作戰航空軍《第5 4 航空軍》

—— 第4 1 特殊戰術群

—— 第4 2 1 特殊戰術中隊

—— 第4 2 3 特殊戰術中隊

—— 第4 2 特殊戰術群

—— 第4 2 2 特殊戰術飛行隊

- 第4 2 4 特殊戰術飛行隊
- 第4 2 5 特殊戰術飛行隊
- 第4 2 6 特殊戰術飛行隊
- 第4 特殊作戰整備群
- 第5 特殊作戰航空軍《第5 5 航空軍》
- 第5 1 特殊作戰飛行隊
- 第5 2 特殊戰術中隊
- 第5 3 特殊作戰中隊
- 第5 特殊作戰整備群
- 第6 特殊作戰航空軍《第5 6 航空軍》
- 第6 1 特殊戰術群
- 第6 2 1 特殊戰術中隊
- 第6 2 特殊戰術群
- 第6 2 2 特殊戰術飛行隊
- 第6 2 4 特殊戰術飛行隊
- 第6 特殊作戰訓練群
- 第1 6 航空試驗飛行隊

——航空自衛隊特殊作戦学校

——航空作戦センター

——第701特殊作戦航空団

——第7011特殊作戦群

——第701特殊作戦整備群

——第701特殊作戦任務支援群

——海兵隊特殊作戦軍

——海兵特殊作戦連隊

——本部中隊

——第1海兵特殊作戦大隊：アジア・太平洋担当

——第1海兵特殊急襲中隊

——第11海兵特殊作戦中隊

——第12海兵特殊作戦中隊

——第13海兵特殊作戦中隊

——第2海兵特殊作戦大隊：中東担当

——第21海兵特殊作戦中隊

——第22海兵特殊作戦中隊

——第23海兵特殊作戦中隊

——第3海兵特殊作戦大隊：欧州・アフリカ担当

——第31海兵特殊作戦中隊

——第32海兵特殊作戦中隊

——第33海兵特殊作戦中隊

——海兵襲撃支援連隊

——連隊本部

——第1海兵特殊作戦支援大隊

——第2海兵特殊作戦支援大隊

——第3海兵特殊作戦支援大隊

——海兵特殊作戦訓練センター

○警察庁

○特殊急襲部隊^{SAT}：各都道府県警察の警備部に所属。対テロ特殊部隊。

○特殊事件捜査係ST：各都道府県警察の刑事部に所属。人質・誘拐事件専門部隊。

【以下は特殊部隊ではないが、特殊部隊に準ずる部隊】

○銃器対策部隊^{ASF}：各都道府県警察の警備部に所属。銃器等を使用した事案への初

動対応部隊

○緊急時初動対応部隊^R_T：複数箇所でも事案が発生した場合の初動対応にあたるために、銃器対策部隊から選抜された要員によって編成されているの各都道府県警察の初動対応部隊。

○臨海部初動対応部隊^W_T：臨海部において銃器等を使用した事案が発生した場合に、初動対応にあたる各都道府県警察（内陸県以外）の水上初動対応部隊。

○NBCテロ対応専門部隊^N_C^T：各都道府県警察の警備部に所属。NBCテロ対応部隊。

○爆発物処理班^E_D：各都道府県警察の警備部に所属。爆発物処理専門部隊。

○警視庁東京国際空港テロ対処部隊^O：警視庁の警備課に所属。東京国際空港の専従警備部隊。

○千葉県警察成田国際空港警備隊^O：千葉県警察の警備課に所属。成田国際空港の専従警備部隊。

○中央国家情報局

——特殊行動機関^S_A^O

——特殊作戦行動部隊^S_O^A_F

——第一班

—— 第二班

—— 第三班

—— 第四班

—— 第五班

—— 政策活動部隊^{P A T}

—— 第一班

—— 第二班

○ 国土交通省

—— 国境・離島警備局

—— 国境^B・離島^I警備隊^G

—— 税関監視局

—— 特務捜査班^{S I T}

○ 法務省

—— 中央国家憲兵団

—— シークレットサービス^{J P S S}

—— 襲撃対応部隊

—— 治安介入部隊^{S I U}

—— 出入国在留管理庁

—— 特別任務部隊^S_T^F

—— 中央捜査総局

—— 警備部

—— 特殊機動戦術部隊^S_M^T_U

○厚生労働省

—— 麻薬取締部

—— 特殊取締班^S_B^C

○環境省

—— 原子力規制委員会

—— 原子力特別警備部隊^A_F^S_S^F

《登場人物》

日本政府

《国務大臣》

○阿倍野真三 《あべのしんぞう》

内閣総理大臣。普段は外見は真面目で優しいとネットなどでは評判だが、知る人ぞ知

る内面はただのオタクである。転移の3ヶ月前にアメリカ大統領と性癖の違いで争いになった。(阿倍野は黒髪ボブ巨乳ドイツ美少女、アメリカ大統領は茶髪スレンダー美少女)。好きな作品はブ○アカ、ウ○娘、F○TEシリーズ、東○、艦○れ、ガ○パン、ア○マス。元ネタは第90・96・97・98代内閣総理大臣。

○須賀秀義《すがひでよし》

内閣官房長官。普段は弾ける総理の暴走ストッパー。胃薬は友達。アメリカ国務長官とは週末に愚痴を言い合う仲。元ネタは第99代内閣総理大臣。

○嘉納太郎《かのうたろう》

副総理兼財務大臣。閣下とも呼ばれるカリスマのある人。異世界に転移したと分かってからは内閣で1番はしゃいでいる。元ネタは第92代内閣総理大臣。

○川野小太郎《かわのこたろう》

防衛大臣。T w i t t e r が趣味で呼ばば来る。元ネタは第145・146代外務大臣。

○岸和田義雄《きしわだよしお》

外務大臣。お酒が好きな酒豪。『岸和田ノート』と呼ばれる大学ノートを持ち歩いている。このノートは岸和田とお酒を飲んでいた時に相手が漏らした黒歴史も入っているがために『デ○ノート(命名:阿倍野)』とも呼ばれている。一回弱みを握られた中央

憲兵団長官が奪おうとして一悶着あつた。元ネタは第100代、101代内閣総理大臣。

○茂森敏樹《しげもりとしき》

法務大臣。頭の回転が速く、有能であるが感情の起伏が激しく短気。元ネタは第55代自民党幹事長。

○石橋繁《いしばししげる》

文部科学大臣。鉄オタ・ミリオタ・ドルオタ。趣味は文部科学省大臣室でオタ芸をすること。それを岸和田ノートに記入されたために岸和田には頭が上がらない。元ネタは第4代防衛大臣。

○高市佳奈

総務大臣。信者が多いが影は薄い。元ネタは第18・19・23代総務大臣。

○加藤信夫

厚生労働大臣。カツラ。元ネタは第84代内閣官房長官。

○林原芳正

農林水産大臣。麻雀好きのギャンブラー。名前のせいで年末になるといじられる。

元ネタは第151代外務大臣。

○西村俊康

経済産業大臣。世界美人図鑑というサイトを運営中。元ネタは第29代経済産業大臣。

○佐川鉄夫

国土交通大臣。影が薄い2。元ネタは第24・25代国土交通大臣。

○小泉進次郎

環境大臣。苗字は『しょういずみ』である。ネットで大人気である。元ネタはあの人。

○牧可憐

デジタル大臣。影が薄い3。元ネタは第2代デジタル大臣。

○中畠翔平

国家公安委員会委員長。最近禿げてきたのでそれを気にしている。

○細川達良

日本国自衛隊統合幕僚長。孫が可愛い。

○大久保通俊

国家情報長官日本の情報機関を引率する機関の長。大久保利通とよく言われる

第1章 導かれし巨大なる太陽 プロローグ 強化日本国召喚

2019年5月3日

日本国 神奈川県 横須賀市 横須賀地方総監部 屋上

「壮観だな」

「ああ」

そう談笑しているのは2人の男性。1人はこの地方総幹部に勤める人物であり、もう1人も同じ職場の同僚だ。

2人を見る先には2人の母国日本国の軍艦や同盟国アメリカ合衆国、三枚舌イギリスの紳士やトリコロフランスの国の軍艦が所狭しに並んでいる。

なぜこんなにも多くの軍艦が並んでいるかというところの日本天国皇の象徴下の即位に合わせて陸・海・空の合同パレードを行うのである。

参加国、軍は以下の通り

アメリカ合衆国

アメリカ陸軍

第1軍団第7歩兵師団

アメリカ海軍

第7艦隊第5空母打撃群 ニミッツ級航空母艦「ロナルド・レーガン」

タイコンデロガ級ミサイル巡洋艦「アンティータム」

タイコンデロガ級ミサイル巡洋艦「チャンセラーズビル」

タイコンデロガ級ミサイル巡洋艦「シャイロー」

第15駆逐戦隊 アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦「バリ」

アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦「ベンフォールド」

アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦「ミリアス」

アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦「ヒギンズ」

アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦「ハワード」

アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦「デューイ」

アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦「ラルフ・ジョンソン」

アメリカ空軍

第18航空団

第35戦闘航空団

イギリス

イギリス陸軍

ロイヤルアングリアン連隊第2大隊 ザ・ポーチヤーズ

第2王立戦車連隊

イギリス海軍

第1空母打撃群 クイーン・エリザベス級空母「クイーン・エリザベス」

45型駆逐艦「ダイヤモンド」

「デイフエンダー」

「ドラゴン」

「デアリング」

23型フリゲート「リッチモンド」

「セント」

アスチュアート級原子力攻撃型潜水艦 「アスチュアート」

ヴァンガード級原子力潜水艦 「ヴィクトリアス」

アルビオン級揚陸艦 「ブルワーク」

イギリス海兵隊 第42コマンドー

フランス共和国

フランス陸軍

第2機甲旅団

第6軽機甲旅団

第11落下傘旅団

フランス海軍

第1空母航空艦隊

艦計画 この世界では日本のお陰で建造された

シャルル・ド・ゴール級航空母艦 「シャルル・ド・ゴール」

フォルバン級駆逐艦 「フォルバン」 「シュヴァリエ・ポール」

アキテーヌ級駆逐艦 「アキテーヌ」 「プロヴァンス」 「アルザス」 「ロ

レーヌ」

イタリア共和国

イタリア陸軍

第132戦車連隊

第6騎兵連隊

第5歩兵連隊

第62歩兵連隊

イタリア海軍

第1航空打撃群 カヴール級航空母艦「カヴール」

ジユゼツペ・ガリバルデイ級ヘリコプター揚陸艦「ジユゼツペ・ガリ

バルデイ」

アンドレア・ドーリア級 「アンドレア・ドーリア」

「カイオ・ドゥイリオ」

デ・ラ・ペンネ級駆逐艦 「フランチェスコ・ミンベツリ」

ベルガミーニ級フリゲート「カルロ・マルゴツティーニ」

「アルピーノ」

マエストラーレ級フリゲート「グレカール」

「エスペロ」

他にもドイツ、韓国、オーストラリアなどの軍が入国している。

「よし、そろそろ帰るか。嫁さんが怖くてな」

「いいなあお前は。嫁がいて、俺なんて嫁のよの字も出ないぜ」

そんな軽口を叩きながら同僚たちは帰宅する。

次の日にとんでもないことが起きると知らずに……

第1話 異世界との接触

2019年5月3日。

日本各地は、お祝いムードが支配していた。

理由はこの国の象徴である天皇陛下が即位をしたからである。それに従って元号は『令和』になり、4月30日が天皇の即位の日及び即位礼正殿の儀の行われる日を休日とする法律という長つ苦しい法律のために休日、5月1日も即位記念日として休日となり、4月27日〜5月6日まで10連休という一大ビックイベントの為に、各地は観光客などが大勢襲来した。

そして、即位礼正殿の儀に先立ち新天皇に会談を申し込む外国首脳らが大勢来日し、一種の外交の場ともなっていた。

また、15日から開始される即位パレードの為に多くの外国軍らが来日、自衛隊の基地などでは一般公開などが行われ、盛り上がっていた。

その1日が終わる時、ある家族は、自分の家で皆と過ごし、あるカップルは、こたつで蜜柑を齧りながらテレビで即位記念の歌番組を見ていた。

その頃、日付変更線が最初の2019年の5月4日を迎えた時、それは起こった。

初めに気がついたのは国立天文台であった。

空が霞んで、霞が取れた後に星の位置がまるつきり変わっていたのだ。

また、インターネットの異常、国際電話が繋がらない、GPSの使用不能などが全国で一斉に起こる。

日本各地は混乱に包まれた。



中央暦1639年5月4日 午前9時——

《日本国 東京都 千代田区永田町 総理大臣官邸》

「難しいことは良い、つまり海外の何処とも連絡がつかないんだな？」

廊下を多数の人々が進む。苛立った声を発したのは内閣総理大臣『安倍野真三』。

普段は外見は真面目で優しいとネットなどでは評判だが、知る人ぞ知る内面はただのオタクである。普段はふざけるのだが、この状況に顔から読み取れるように怒りを覚えていた。

「はい。詳しく言うと北海道・沖縄などの多数の島々です。九州・四国は例外で通信が取

れます。青函トンネルが途切れているとの情報もありますが未確認です。確認を急いでいます」

「ですが、北海道の空自千歳基地、沖縄も空自那覇基地と通信が取れることから両島とも無くなった事では無いようです。群島はいかんせん数が多いので空自・海自で協力して通信を取っています」

総理の間に答えるのは内閣官房長官『須賀秀義』。内閣の女房役とも言われている役で、普段は弾ける総理の暴走ストッパーでもある。

「他にも全衛星が通信が不可能です。海底ケーブルも同様です。近海で全ケーブルが途切れているのが確認されています」

「…日本以外の国がなくなっただって言うのは…」

「可能性はありますが情報が少ないので何とも…」

二人と黒服の護衛は官邸地下の危機管理センターに入る。

「総理及び官房長官入られます」

「立たなくて良い、今の状況を教えてくれ」
「はっ」

二人が入ると中にいた人員が起立しようとするが手で抑える。
中央のテーブルに座ると内閣危機管理監が二人に報告する。

「防衛省によると、現在電波などは全く観測できず、太陽フレアによる通信障害も視野に入れているそうです」

「太陽フレア？」宇宙航空研究開発機構「JAXAから報告は？」

「ありません」

「…全く解らんな」

官房長官の言葉に危機管理監と総理は頷く。

「総理、デフコンはどうしますか？」

「3が妥当だな、これよりデフコン3を発令する。あと、国家安全保障会議N S Cを3時間後に開催する。準備をしてくれ」

「分かりました」

「防衛大臣、在日米軍は？」

「こちらと同じく混乱状態であるとのことですよ」

「中国の新兵器か？」

総理はウケると思ったが、状況が状況なので危機管理センターの職員は『もしかして……』と思っている。

つまり滑った。

「自衛隊の展開状況は？」

「はっ、陸上自衛隊は全方面隊が警戒体制であります。命令が有ればいつでも行けます」

「東北方面隊の第2騎兵師団・東北即応機動師団が緊急派遣要請があれば派遣できます」

「第1・2空挺軍全軍もいつでも出発できるということですよ」

「うん、海上自衛隊はどうなっている？」

「第1・2艦隊の哨戒隊・フリゲート隊が各諸島へ連絡を取っています」

「同じく第1・2艦隊の全護衛隊群は出撃準備を整えています」

「最後に航空自衛隊ですが、此方も全航空団が警戒態勢ですよ」

「了解した」

総理と官房長官がこれからのことを考えていると、会議室に声が響いた。

「防衛省から報告です。三沢基地から離陸した空自のRC—340偵察機のレーダーが未確認飛行物体を捉えたとの報告です」

「護衛機は？」

「つけていませんが」

「ふ…それ大丈夫なん？」

「大丈夫です。もし撃墜されたら報復するんで」

その時、職員が緊迫した声を上げる。

「未確認飛行物体、無線にて呼びかけるものなお反応なし。更に接近します！」

「敵味方識別装置に応答は？」

「無いとの事です」

「中国か？それともロシアか？はたまた北朝鮮か？」

会議室内が緊張に包まれる中、職員が声を上げる。

「防衛省より未確認飛行物体の画像来ます」

メインモニターが切り替わり、未確認飛行動物の姿が映される。その動物に、会議室内の皆は口をあぐりと大きく開けた。

コウモリのような皮膜の翼、鎌のように尖った尾。東方の同じ言葉とよく間違えられるが、これは前肢と翼が一体化しているために、こう呼ばれる――

「――ワイバーン」

総理大臣か、官房長官か、防衛大臣か、はたまた危機管理センターの職員か。誰が発したか解らないが、その言葉は静まり返った室内に、よく響き渡った。

◆◆

中央暦1639年5月4日午前9時――

《クワ・トイネ公国 首都マイハークより350km北の方角 クワ・トイネ公国軍第六

飛龍隊

よく晴れた朝、地球人が見たら目を疑う光景があつた。

大きい黒い鱗を持った物体——ワイバーンが空を飛んでいた。

その背中に乗るのは『マールパティマ』、クワ・トイネ公国の竜騎士だ。

彼はこの仕事に誇りを持っており、真面目な性格であつた。

「ん？なんだ！あれは！」

彼の目は自分以外いるはずのない空に何かが飛行しているのを確認していた。

「我、未確認騎を確認、これより要撃し、確認を行う。」

通信用魔道具を使っている間にも未確認騎はどんどん近づいてくる。

しつかり見える距離になった時、よく見るとワイバーンでないことがわかつた。

そもそも羽ばたいておらず、中央には何かわからない大きな円盤が回っている。

翼には2個で1つにまとめられている円柱状の何かがあり、大きな音を立てている。

そして——とてつもなく大きい。

かつて777—200LRが登場するまで、世界最長の航続距離性能を持つ航空機であるエアバスA330—500。その軍用機型の偵察機であるRC—340は異世界でもその直大な航続距離を活かして飛ばしていた。

マールパティマはRC—340を見て呆然としていたが、敵騎の進行方向がクワ・トイネの都市『マイハーク』に向かっていることに気づく。

「(不味い！未知の敵対国家であつたらマイハークが攻撃される!!)」

彼はのだかであり、温かい人々がいるマイハークを気に入っていた。だからこそ、この騎を止めなければならぬ。領空に近づいてきた騎は、後ろを取って海に追い返すのが基本だ。そのため彼は後ろに着こうとするが——追尾できない。

「なっ！こちらマールパティマ！未確認騎に追いつけない！」

『こちら司令部、ワイバーンが追いつけないわけがないだろう、もう一度報告せよ』

「事実だ！しかも未確認騎はマイハーク方面へ進行中！繰り返す、未確認騎はマイハークへ進行中！」

この報告により、司令部は大混乱になったが、第六飛龍隊が発進する様に命令が下つた。



10分後――

《マイハーク近郊 RC―340 コックピット内》

RC―340の機長と副操縦士は先ほど見たあり得ない光景に自分の目を疑っていた。それもそうだ。目の前に神話^ワ上の生物^イが現^バれれば誰^ンだつて驚く。

「俺ももう歳かな…： 龍みたいなのが飛んでたように見えたんだが」

「僕まだ30代なのにおじさんと呼ばれるのはきついんですけど…：」

「今の世代だともう25過ぎたらおじさんらしいぞ」

「マジすか」

軽口を叩いていてもしつかりと操縦桿を握り、前方の窓を望む。ワイバーンの鞍上には人間がいた。ならばここから近い地点に大陸か島があるだろう。

「写真を撮れたのは大きいな」

「でも上は全く信用しないでしような」

「そりやそうだろ、俺がその立場だったらまず第1にデマを疑うぞ」

「まあ、そうなりますよね」

「しかし…この世界はどうなっちゃったんだ？」

機長は、そうつぶやいた。

◆◆

15分後――

《RC―340 情報解析室》

14台ある状況表示コンソールが集められた情報解析室では、機器操作員らが操作をしていた。

ここではA340の元々旅客機であった機体構造を生かし、偵察によつて得られた情報やレーダー情報を使い情報分析の高速化を可能にしている。

「応答はあったか？」

「いいえ何も」

「同じく」

「ん？レーダー探知！方位2—2—5、距離約150km…陸地です！」

「戦術航空士、電波発信はあるか？」

「確認できません。近代国家では無いのかも」

「レーダー長からパイロットへ、陸地だ、針路2—2—5。変針してくれ」

『こちらパイロット、了解』

「あと陸地の写真を撮りたいんだが、高度500mまで降下可能か？」

『了解した、AA対空兵器を発見したら直様報告を』

機長の手の操縦桿が押され、水平尾翼の昇降舵が下へ傾く。249kNもの推力を誇る4基のロールス・ロイス Trent 500ターボファンエンジンが唸り、辺りに音を撒き散らす。

RC—340偵察機は、この世界を知るために降下していった。

◆◆

午前10時——

《クワ・トイネ公国 マイハーク守備隊》

貿易で栄えるクワ・トイネ屈指の都市、マイハーク。いつもはのどかな都市であったが、今日は違った。

「総員戦闘配置！これは訓練ではない！繰り返し！繰り返し！これは訓練ではない！」
「敵騎は相当速い！矢の照準を見間違えるなよ！！」

皆が空を見上げてみると大きな音を上げながら黒く大きい物体が降りてきた。そしてそれを見た人々は驚愕する。

——それはワイバーンと言うには、あまりにも大きすぎた。うるさく黒くそして大きすぎた。それは正に化け物だった

「なんだこの音は!？」

「魔法攻撃かもしれない！全員耳を塞げ！」

そういう間にも、敵騎はぐんぐんとこの都市に近づいてくる。近づくと敵騎の大きさが露呈し、人々はあまりの恐怖に立ち尽くしたり、ズボンの股が濡れたりしていた。

「ヒイツ！」

「神よ……」

「なんで大きさだ！」

「びびるなあ！総員矢を構えよ！」

それまで呆然としていた兵士たちもマイハーク防衛騎士団団長でいる『イーネ』の言葉に勇気づけられる。彼女の言葉に矢を構えて敵騎に狙いをつける。

「撃てえ!!」

大量の矢がRC―340に撃ち出されるが、機体の速度は早すぎ、当たらない。

「む！去っていったか……」

「（攻撃が目的ではないのか？ならばなぜ……）」



5分後――

《クワ・トイネ公国マイワーク近郊 高度2500m地点 第六飛龍隊》

迎撃命令を受けた第六飛龍隊は高度2500m地点で待機していた。敵騎を低空で捕捉し、導力火炎弾を撃ち込むと、市街地に被害が出かねない。

「目標発見！」

「導力火炎弾用意！」

導力火炎弾とは体内の粘性のある可燃性の化学物質に火炎魔法で点火し、炎を風魔法で包み込むものである。

その導力火炎弾を撃ち込もうとするが――

「なっ！」

敵騎は高度を上げ逃げてしまった。その高度はワイバーンの上昇限界の4,000mよりも高く、そして速く飛んでいる。

「ワイバーンよりも上に登れるだと…一体どんな国の竜なんだ…」

第六飛龍隊の竜騎士達は、呆然と敵騎を見送っていた。

◇◆◇

5分後——

《クワ・トイネ公国 マイハーク近郊上空 RC—340コックピット内》

「はっはっは！危なかったな！」

「危なかったなじゃすみませんよ！あの姿勢完全に火炎弾を撃ち込もうとしてたじゃないですか！」

「うるせー！だからお前は童○なんだよ！」

「なっ、貴方だつて○貞じゃないですか！」

「残念だったな、この前捨ててきた」

「なん…だ…と…」

『こちら情報解析室、全て丸聞こえだ。しようもない話をせずにさつさと基地に帰れ』

「うるせー！イ○ポチエリー野郎が！」

「そうだそうだ！」

『私はE〇でも童〇でもない、それに結婚している』

「Fu〇k!!」

上層部に聞かれたら怒られそうな会話をしながらRC―340は帰還した。

◆◆

中央暦1639年5月25日――

《日本国東京都東京千代田区首相官邸 国家安全保障会議^N》

国家安全保障に関する重要事項および重大緊急事態への対処を審議するための会議である。国家安全保障会議^N。国ごと異世界に転移し、また初めての文明がある国を見つけたと言うことから開催されていた。

「我が国の南西に大陸か…」

総理大臣はそうつぶやいた。RC―340が偵察した画像は確認した国家の文明レベルの判別に大いに役立った。

だが、それを調べる過程でコックピットのボイスレコーダーにパイロット二人のお喋

りが混ざり、上官の丸秘エピソードが入っていたためにパイロットと情報解析長は滅俸の上に左遷された。

「確認できた情報では中世レベルの国家があるようです、あとエルフなどの人種もいるようです」

「本当に異世界なのか…ラノベかな？」

「真面目に仕事してください」

「とゆうことは低身長爆乳エルフ耳少女がいる可能性が微レ存？」

「そこまでしとけよ総理
S S S。あと夫人に怒られんぞ」

近くの大臣たちは官房長官と総理の漫才をスルーしていることから、この内閣の総理へのイメージがわかる。

「こんな国は地球上に存在しないでしょうからこれは…」

「異世界…なのか…」

「バカ言え、そんなことがあることないでしょ」

「ではどうやって説明するのんだ！」

「それは……」

「ほら！言えないだろ！冗談なのはお前の髪だけにしろ！」

「なんだア？てめエ……」

禿げ大臣たちの喧嘩が始まるが防衛大臣の『川野小太郎』の一喝で終わった。

「ぐじぐじしてからないも始まらないだろ！これじゃあ国内の食料も時期になくなるぞ
！」

「貯蓄された食料だけでは到底足りない！これでは外からではなく内から滅亡する！」

「海自を派遣してその国家と連絡を取るのが先であろう！」

「うん、そうだな。防衛大臣、空母打撃群を見つけた大陸に派遣せよ」

「はっ」

これによって海上自衛隊第6艦隊第10空母打撃群が派遣されることになった。

《第10空母打撃群編成》

第6艦隊 第10空母打撃群 CVN-73 ずいほう

第10空母打撃群直屬ミサイル巡洋艦 CG-65 かわかぜ

CG-67 うみかぜ

第91空母護衛隊 DDG-155 むらくも

DDG-164 しののめ

DD-115 はやなみ

DD-116 はまなみ

DD-104 きりさめ

DD-106 さみだれ



新世界暦1639年5月26日――

《クワ・トイネ公国 マイハーク沖30kmの地点》

クワ・トイネ公国海軍第二艦隊所属の哨戒船『ピルーティー』はいつもの哨戒をしていた。
いた。

ピルーティー船長、『クルフォリス』は獣人の特徴である視力の良い目で水平線を見

ていた。

うつすらと見える大きな艦影。それも確認するべく彼は双眼鏡を覗く。

「なっ!」

彼の目に映つたのは100mを超える9隻の艦船。どれもがクワ・トイネの主力艦船より大きく、強大であつた。

彼は直様通信員に魔信を打つよう伝える。



10分後――

《クワ・トイネ公国 マイハーク港 クワ・トイネ公国海軍基地》

クワ・トイネ公国海軍第二艦隊司令『ノウカ』は、クワ・トイネ公国海軍基地司令室で副官らと話していた。

「ノウカ司令はどう考えますか? マイハークの未確認飛行物体の事?」

「やっぱり緑の神が使わした太陽神の使いではないですかねえ」

「うむ、北東海域は小さな島々があるだけだっただろ…ならば列強『パーパルディア皇国』、あるいは我が国と対立関係にある『ロウリア王国』だろうが…」

「飛行機械をパーパルディアがムーから輸入した可能性もあるな」

「だが…ムーの飛行機械は50mも無いしなあ」

「失礼します」

その時、部屋の扉が開き、通信兵が勢いよく入ってくる。

「どうした？」

「警戒中のブルーティーから通信。『マイハーク沖にて所属不明の大型船を発見。至急応援願う…』」

「今度は大型船か？まあ良い、近くにいる船は？」

「ミドリ少佐の『ピーマ』です」

「ミドリか…奴ならば適任だろう。ピーマに至急魔信を打て。未確認大型船を臨検させろ」

「はっ」



30分後――

《クワ・トイネ公国　マイハーク沖　公国海軍第二艦隊　軍船『ピーマ』》

「なんだあれは…船の化け物か…?」

公国海軍第二艦隊所属ピーマ船長『ミドリ』は、目の前の不審船団に対し臨検せよという命令を受け、報告の海域に向かった。そこには100mを大幅に超える船があり、あまりの大きさに距離を見間違えるほどであった。

「副船長、あの旗に見覚えは？」

「…神聖ミリシアルの国旗に若干似てますが、見覚えはありません」

「あれ程巨大な艦は？」

「数十年前、パールディア皇国の皇帝即位式典に参加した時、パールディアの100門戦列艦やムーの戦艦、ミリシアルの魔導戦艦を見ましたが、前方の艦には到底及びません」

「そうか…これより臨検を行う！2名ついてこい!!」

「はっ！」

だが、自分が臨検しなければ愛すべき国が滅ぼされるかもしれない。そう思つてミドリは小型船に乗り込んだ。

◆◆

同時刻——

《第10空母打撃群 旗艦『ずいほう』艦橋内》

「国籍不明船団接近！敵対の意思はない模様」

「まさかこの年代でガレー船を見ることになるとは……」

「やはり異世界と言うのは本当なのですね……」

国内では漁師たちが捕れる魚の種類が違ふと騒いだり、星の位置が違って新しい星があるとか国立天文台が発表したことによつて異世界に転移したのではないかと言う意見が多くなつてきていた。

事実、日本政府は異世界に転移したと断言しており、自衛隊高官や内閣には事実を公表したが、国民や国会には混乱を招くとし、公表していない。

だが、接触する第10空母打撃群には公表したが、殆どの人物が疑っていた。

「よし、外交団達をエレベーター3近くに待機させ、エレベーター3を下ろして国籍不明船団と対話を試みる。」

「そして特殊作戦任務部隊と各艦はMITを展開、不意の乗船に備え、各艦はM2重機関銃をいつでも発射できるようにしろ」

「ただし交戦は攻撃を受けた場合とし、こちらからの攻撃はしないように厳命しろ！」

「了解、MITの展開及び交戦規程を各艦に送信します」

これによって第10空母打撃群は異世界艦隊との接触に対応した。



3分後――

《第二艦隊主力船『ピーマ』船長 ミドリ》

近づいた時にまず思ったのはデカイ。自分が近づいている艦は目測で300m。その他の艦も100m以上あり、公国海軍の主力船の何倍もある。

さらに意味のわからない兵装。我が軍の主力武器は弓矢やバリスタであるが、不審船

は 6 2 口 径 5 インチ 単装 砲 灰色の箱に棒が突き出ている物 90 式 対艦誘導弾 4 連装 発射器 や 高 性 能 黒の台座に6本の細長い棒を纏め 2 0 その上に白い箱 機 関 を乗せた物、丸太を3本重ねた物など用途が意味不明な物を装備してあ る。

「しかし…どこから入るか…」

不審船は入る所がなく、何処から入って良いかわからない。その時、不審船の横についてある大きな甲板が下に動いた。

「む！魔法装具か!？」

「人です！人がいます！手を振っているようです！」

「敵意は無しか。行ってみよう」

オールを漕ぎ、降りてきた甲板に近づくと、近くに居た人間が港の荷物運搬用の機械のようなものを動かして、即席の階段を作り上げた。

「あそこから入れと言うことか…行くぞ！」

「はっー!」

ミドリは恐る恐る階段を上がり、付いてきた水夫もそれに従う。乗った後、階段を作った兵士に尋ねる。

「私はクワ・トイネ海軍、第二艦隊ピーマ船長ミドリである。貴船の所属と目的は?」

「!?言葉が通じる!?!」

「??」

なぜか驚いた兵士は、直ぐに再起動し、ミドリに向けて話し始める。

「私は日本国海上自衛隊、空母ずいほう所属航海科の橋上慎也です。私に外交権は御座いませんので、甲板上の外交官殿とご会談いただきたい」

「ほう…:そうか。わかった」

「どうやら外交権——我が国と国交を開きたいらしい。だが、このような巨船を作れる国があったら、とっくに見つけられているはずだ。そう考察している時、ハシガミが黒

い箱に向けて何かを喋り始めた。

「(ん?なんだ?)」

「動きます。ご注意ください」

「なんだn…うおおおおお!!」

「地面が動いたぞ!!」

魔法装具が動き、地面が浮き上がった。ミドリらは信じがたい出来事に瞠目する。装具が上がると、そこは騎馬戦ができるほどの大地であった。

「(こんなに広いとは!! 一体どんな国なのだ!)」

ミドリが困惑していると、紺色の整った礼服を着た男が、黒い筒を持った青色の服装をした兵士に脇を固められ、出て来た。

礼服を着た男が一步踏み出した時、ミドリの脇の部下が一瞬身構えたが、ミドリが諫めるように手で遮った。

「私は、クワ・トイネ公国海軍 第2艦隊所属船、ピーマ船長のミドリである」

「現在我が軍は警戒体制にあり、貴船はクワ・トイネ公国の領海に接近している」

「貴船の所属並びに航行目的を教えて頂きたい」

ミドリの言葉に礼服の男は一瞬驚いた表情に包まれたが、直ぐに切り替えられる。

「私は日本国外務省、アジア大洋州局大洋州課長の田中一久です」

「この度は日本政府を代表して、貴国と国交を樹立したくこの様な方法を取らせて頂きました」

「貴国外交関係者との会談を早期に臨みます」

「やはり貴方達は使者ということだな？」

「はい、そうなります」

「ですが…日本国と言う国名を私は存知でないのだが、何処にある国ですか？」

その言葉に、田中は一瞬言葉に詰まる。

「…我が国は一週間前、この世界に転移をして来たのです」

「なんと…」

転移という言葉にミドリも不思議そうな顔をし、後ろの海兵も困惑していた。

「勿論我が国もそれを信じられませんでしたが、AWACSや哨戒機による情報収集の結果、そう断定しました」

「哨戒騎…先日マイハーク上空に飛来した騎はもしかして…」

「はい、あれは予期せぬ領空侵犯でありました」

「我が国に敵意無しと断言できます」

「承知した。先ほどの国交開設の兼、政府に連絡をします」

「ありがとうございます。ご返答を頂くのに何日ぐらい掛かるのでしょうか？」

「船に戻り次第艦隊司令部に魔信で連絡するので…少々お待ち頂ければ」

田中達は15世紀〜16世紀のレベルの文明にその様な連絡機器があることに驚く。魔信と言うのだから、魔法があるかもしれない。

「（興味深い世界だな…）」

田中は率直に、そう考えた。



2時間後――

《クワ・トイネ公国 公都クワ・トイネ 政治部会会場『蓮の庭園』》

国花である蓮が所々に生え、他の花も美しく生える蓮の庭園。

クワ・トイネ首相官邸に隣接するこの庭園では、議会に相当する政治部会が開かれている。

「皆のもの、今回の鉄竜は何処の国だと考えますか？」

今回の会議では、数日前にマイハークに飛来した鉄竜の事であった。

味方ならば普通魔信で連絡を取る。領空侵犯をするという事は敵対国家の可能性も高い。

クワ・トイネ公国の首相『カナタ』である。彼はエルフ族の細身で長身の若い男性である。

カナタの右側に座っている情報分析部長が手を上げ、発言を許可される。

「我々情報分析部の分析担当官によると、ムーなどの機械文明国が扱う飛行機械の内、大型機に分類される物だそうです」

「ですが、ムーの飛行機械は、最大の機でも全長は28m、侵入騎の全長は50mに及びます」

「また、ムーなどではプロペラ——風車の羽根のような物ですね。それを回して導力を得るレシプロエンジンを使いますが、侵入騎はプロペラが無く、筒型の騒音を立てるものが付いています」

「そして侵入騎の速度はおそらく7000〜8000km/h。ムーの最新鋭戦闘機の数でも約350km/hだと聞いています」

「そうか」

「それと…」

「どうした？」

言うのを躊躇った情報分析部長にカナタは声を掛ける。

「はっ、ムーの遙か西、文明圏外で新興国家が誕生し、付近の国を荒らし回っているそう

です」

「彼らは、自らを第八帝国と名乗り、第2文明圏の大陸国家群連合に対して、宣戦を布告したと昨日諜報部に情報が入っています」

円卓を囲む男たちに笑いが灯る。文明圏外の国が列強国2カ国がいる第2文明圏に宣戦布告するなど気が狂った事である。

「その何が今回の件と関係あるのだ？」

「はい、実は第八帝国と名乗る国の侵略を受けた国に我が組織の職員がおりまして、その男は逃げ帰って来たのですが、その時20mの飛行機械を見たと言うのです」

「ふむ、おそらく気が錯乱しとるのであろう。兎も角その第八帝国？とやらは我々と遠く離れておるし関係無い。直ぐにレイフォルカムーに倒されるであろう」

分析部長の報告に軍務卿が反応する。会議は平行線を辿っていた。その時、パイプを口に咥えた第二艦隊司令、ノウカがやって来る。

「お待ちください、司令。この部会は招待された方しか入れません……」

「緊急の要件だ。良いであろう」

「ちよつとま…ゲホツゲボツ！煙たいです！」

防ごうとしたエルフもノウカが持つパイプの煙にやられて立ち止まる。

彼は円卓の前で敬礼し報告する。その前に外務卿『リンスイ』が彼に嘯み付いた。

「何事か第二艦隊司令!!あんたはお呼びでない筈だ!!」

「おやおやこれは外務卿。あなた方が話している未確認騎のことについて報告に来たのですよ」

リンスイも負けずと反論しようとするが、カナタの声で制止される。

「おやめなさい外務卿。未確認騎と関連した報告だと言っています」

「ありがとうございます首相、報告いたします」

ノウカは一息ついてから話し始める。

「数刻ほど前、第二艦隊の哨戒艦が大型船9隻と接触」

「その後、我が第二艦隊司令部の方で臨検を命令し、軍船ピーマが臨検に向かいました」
「臨検した大型船は所属を日本国と説明。自身は転移国家だと名乗り、先日のマイハークへの未確認侵入騎も自国の物だと説明しています」

「また、現在我が国の外交担当者との対談を求めています」

「なんだと！敵対的な行動を取りながら会談を求めると!!」

「日本国!?!なんだ？聞いたことがないぞ!!」

「首相、転移国家などとほざく連中のことなど聞く耳を持たなくて大丈夫ですぞ」

だが、首相はゆっくりと話し始める。

「近年、ロウリア王国は、亜人の殲滅と此処、ロデニウス大陸の征服を求め、近隣諸国を制圧。残るは我が国と同盟国のクイラ王国の2カ国のみとなりました」

「クイラ王国は、竜を持たない貧しい国ですが、国は天然の要塞、ロデニウス大山脈で囲まれ、山岳行動に優れた精鋭部隊の獣人部隊を保有しています」

「なのでロウリアは我が国と対立を深め、近頃は挑発も激しくなっています」
「ですが…」

「ノウカ司令、海軍代表として聞きたいことがあります」
「…なんででしょうか？」

まだ反抗しようとする外務卿に対し、カナタはノウカに尋ねる

「海軍はロウリアとその日本国、両国海軍と戦えますか？」

数秒の思考の後、ノウカは答える。

「…難しいでしょう。ロウリア海軍は14万人の兵と4000隻の船を揃えています」
「日本国にしても報告では、全船が100mを超える超巨大船。最大の船は300mに近いと報告にあります」

「武器は用途は不明なものが数多くあれど、大砲を装備していると聞きました」
「実際に開戦しましたら、全力は尽くしますが…苦戦は免れないかと…」

「…む…」

「このように我が国は2方面作戦で戦う余地はありません」

「まず、謝罪を受け入れると言う形で日本国との会談をしましょう」



15分後――

《第6艦隊 第10空母打撃群 空母ずいほう 飛行甲板上》

ずいほうの飛行甲板では、第10空母航空団第610^H多用途ヘリコプター¹飛行隊のS
H-60Kが発艦準備を整えていた。

クワ・トイネと数度更新し、公都クワ・トイネの郊外にあるワイバーンの飛行場に着
陸させてもらうことになっていた。

「間もなく出発します！ 宜しいですね!!」

「はい！ よろしくお願ひします!!」

パイロットと外交官リーダーの田中が喋り、ヘリコプターは発艦体制を整える。

機内には、外交団7名と、海自特殊作戦^S任務部隊^T第4群団^Fの一個分隊5名が護衛する。

『こちら管制室よりフォージャーへ注ぐ、発艦許可が降りた。発艦せよ』

「フォージャー、コピー。離陸する」

上部に取り付けられたローターが回転し、揚力を生む。

そのままSH-60Kは離陸してクワ・トイネ公国へ向かって行った。

◆◆

20分後――

《クワ・トイネ公国 公都クワ・トイネ郊外 ムスリント飛行場》

ムスリント飛行場司令を務める『メルポルスト』は、司令塔の上から向かって来る馬車に気がついた。

急いで下に降りて、馬車を迎える。

「外務局さん達ですか？何が御用で？」

メルポルストの問いに、外務局のリーダー『スルト』が答える。

「実は、我が国と会談をする予定の使節団が飛行場が周囲にないか確認されてね。そこで此処が使われることになったんだ」

「はあ……」

メルポルストは、事前に知らされてなかったため、困惑していた。後ろにいる司令部要員達もかなり困った顔をしている。

「しかし…：外交官がワイバーンで来るんですか？」

「いや…：詳しくはなんとも…」

その時、海の方角からパタパタと言う風を切る音が聞こえて来た。皆が不思議に思い、音の聞こえる方角を見つめる。

「なんだあれは!？」

「風車の羽が回転している!!？」

謎の騎は上空で静止し、周囲にパタパタと言う音と砂嵐を巻き起こす。

そのままゆつくりと、地面に車輪をつけた。

その後、横からドアが開き、外交官と及ばしき制服を着た男たちが降りて来る。

彼らは周囲を見渡し、此方を向いた。

スルトは意を決して、その男らに話しかける。

「日本国の皆様でお間違いないですか？」

「はい、日本国外務省アジア大洋州局大洋州課長の田中一久です」

「私はクワ・トイネ公国外務局のスルトです。本日はよろしくお願ひします」

いきなり課長クラスが出て来たことにビビるも、スルトは自然的に対応する。

「では早速公都の方へ馬車で向かいたいと思ひますが……後ろの方々もお連れの方でしょうか？」

スルトは田中の後ろに、黒い筒を持った青い服の男たちがいた。男達は黒い軽鎧を着ており、周囲を見渡していた。

「ああ、彼らは護衛です。念のため連れて来ましたが……迷惑でしたか？」

「いえいえ、大丈夫です。ですが全員は連れて行けず、会談場所への入室は出来かねませんが……」

「大丈夫です。ありがとうございます」

その後、外交団7名と護衛の特殊作戦^S・任務部隊^T2名は、馬車に乗り込み、一路公都へ向かった。

◆◆

1時間後――

《クワ・トイネ公国 公都クワ・トイネ 首相官邸 大会議室》

クワ・トイネ公国首相カナタは大会議室の椅子に座りながら考えていた。

我が国は貧弱であり、ロウリアとは戦争間近だ。

日本国は、軍務局からの報告によると300mの巨大船や高速・大型の飛行機械など、我が国と技術力が隔絶していると思われる。

もし、日本が北のパーパルディア皇国のような覇権主義国であつたら、我が国は最も簡単に潰されてしまう。

クワ・トイネを愛する者としてはそれは必ず避けたい。

幸いにも、軍事力を盾にした恫喝外交は行われていない為、もし味方に付いてくれたら強力な味方を得るであろう。

「日本国の使節団の皆様入られます!!」

クワ・トイネの参加員は立ち上がり、使節団を待つ。

扉が開き、日本国の使節団が入ってくる。

クワ・トイネ側の服装よりは装飾は付いてないが、布の質感は良く見える。

「どうぞお座りください」

「ありがとうございます」

カナタが使節団に着席を促す。

そして双方が腰を下ろした所で日本国の外交官が口を開いた。

「日本国外務省アジア大洋州局大洋州課長の田中一久と申します。本日はお忙しい中、このようなお時間を頂き、感謝いたします」

「クワ・トイネ公国首相カナタと言います。遠いところからよくいらつしやいました」

「私はクワ・トイネ公国外務卿リンスイです。この度の会議では司会進行を務めさせて

いただきます」

「先ず、我が国の早期警戒管制機^{A W A C S}が貴国の領空を侵犯したことお詫び申し上げます」
 「公に謝罪を受け入れます。その上で貴国についての誠実な説明を求めたい」

「ごもつともです、不確かな情報による誤解は双方にとつて損失となるでしょう」
 「そこで本日は資料を作成しましたので配布させていただきます」

日本側の側に控えていた職員が、カバンの中から数枚の資料を取り出し、クワ・トイ
 ネ側に配布する。

公国の参加者は、紙の薄さと綺麗さに瞠目する。

「(なんだこの紙の質は!!このような紙、これまでに一度も触ったことがないぞ!!)」
 驚くままリンスイは、資料を読み始めようとするが、すぐに顔を顰める。

「なんですか？この文字は？我々は全く読めませぬぞ」

「なんと…日本語を話せるのなら読めるところだと思っていましたか…間違いでしたか…」
 「私からするとあなた方が世界共通語を話しているように聞こえますぞ」

直ぐ様、田中はカバンから大きなボードを取り出し、説明を始める。

「では、口頭で説明をさせていただきたいと思えます」

「我が日本国は貴国から北東に1500kmに位置し、76万8000km²の国土と3億2700万人の人口を有する島国です」

「あそこの海域は無人か有人の島々しか無かった筈ですよ！」

「原因は不明ですので客観的事実から……この世界に国土ごと転移したと考えられます」

リンスイはフン、と鼻を鳴らし強めの口調で田中に声を上げる。

「そらまた始まった、あなた方はおとき話を元にしたホラ話を吹聴しておるのか!？」

「確かに、我々のいた惑星でもこんな事を言っている国がいたら馬鹿にするのも当然ですが……ですが我々は星の座標、惑星の大きさ、大気成分などの客観的証拠を集めた上で申し上げております」

田中はそう言った後、一旦言葉を区切り話し始める。

「我々は貴国使節団をお迎えする用意があります。私が言うより貴方方が選抜した使節団に見ていただければ信憑性は遥かに上がるでしょう」

「もちろん移動手段や滞在に掛かる部分は我が国が責任をもって行わせて頂きます」

「そんなこ…「よいと思います」首相!？」

「リンスイ、貴方ならわかると思うがあのような我々より劣る小島が集まっても大型船など到底建造できない」

「我々を超える文明の国がせっかく招いてくださるのだ。これを拒否する理由はない」

「それに日本国の方々の話ぶりは誠実で礼節を弁えておられる。国交開設も良いと私は思う」

その言葉に、リンスイは黙り込み、田中に国のトップから国交を開設しても良いという言質が取れたことに安堵する。

「して、貴国は我が国と国交を結ぶについて何が希望事項はありますか？」

「まず、この世界についての情報が欲しいです。我が国も総力を上げて情報を収集しています。流石に全部は分かりません」

「地理情報や把握してゐる限りの国家に関する情報などです。こちらとしましてはある程度の物品や技術の輸出、インフラ整備などを考えております」

「——それに希望があれば安全保障条約もです」

「!!」

カナタとリンスイは驚愕する。その言葉は公国が願つていた言葉であつた。

カナタは慎重に言葉を選びながら尋ねる。

「タナカ殿、本当ですか？」

「勿論。ですが国会——つまり議会の審議を通すことになりましたが、元いた世界でも数カ国と安全保障条約を結んでいたのです、それと同じ範囲であつたら不可能では無いと思ひます」

その言葉にカナタとリンスイは喜色の表情を浮かべる。

クワ・トイネにとってロウリア王国との緊張状態に光明が見えた瞬間であつた。

「タナカ殿、国交締結を前提に使節団の派遣をお受けいたします。リンスイ、早急に使節

団の編成をしなさい。大使には全権を委任します」

「はっ、早急に取り掛かります」

「では、タナカ殿。宜しくお願いします」

「此方こそよろしくお願いします、カナタ首相」

2人は硬い握手を結んだ。

第2話 訪問者、そして驚愕

中央暦1639年5月10日――

《クワ・トイネ公国 マイハーク港》

公国の最重要貿易拠点となっているマイハーク港。

そこには、日本へ派遣される、クワ・トイネ公国使節団の姿があった。

使節団の人員は、各部門の第一人者であり、多くの権限が与えられている。

既に、日本国外務省の職員が来国しており、使節団に挨拶していた。

「今回、使節団の皆様の引率を任せました、日本国外務省職員の平田と言います。よろしくお願ひします」

「此方こそ、宜しくお願ひします」

「では、今回のスケジュールを説明します」

そう言うと、平田はIpadを鞆から取り出し、地図を開く。

その光景に、使節団は驚愕する。板に色の付いた地図が現れたのだ。

「ヒラタ氏、その板は何ですか？」

「ああ、これはIpadと言われる電子機器です」

「あい？ぱつど？不思議な物ですな」

その後、スケジュールの説明が始まる。

「先ず、我々は我が国の豪華客船で中華地方南部の都市香港へ入港します」

「一泊した後、ヘリコプターで江西大演習場へ移動。そこで陸上自衛隊の演習を見ていただきます」

「演習後は南昌駅から新幹線で上海国際空港へ移動。空港隣接のホテルで一泊します」
「その後、内閣総理大臣専用機で東京へ移動、会談をします」

そこまで質問した後、一人の男が手を挙げる。

「質問よろしいでしょうか？ 内閣総理大臣専用機とはどのようなものでしょうか？」

「貴方は確か…外務省のヤゴウさんですね」

「内閣総理大臣専用機とは内閣総理大臣——我が国の政治的トップ専用旅客機、この世界風に言うなら鉄竜…でしょうか」

「ありがとうございます」

「では、ご案内いたします」

平田が使節団を先導し、ヤゴウも続こうとした時、クワ・トイネ公国軍務局から外務局に出向している将軍ハンキが話しかけてくる。

「ヤゴウ君、私は船旅が嫌いなのだが…どうすれば良いかね」

「ですよ、船旅ははじめじめし、船内は暗く、疫病も流行りますもんね」

「うむ。私は事前に日本へは2日で行けると聞いたが、伝達ミスではないかね？」

「はい。ですが、そこは『鉄竜』を運用する国なので…」

「『鉄船』と言うことか？それでは沈んでしまうではないか」

2人が話している時、平田が声を上げる。

「皆様、あれが今回ご乗船いただく豪華客船『飛鳥VI』です」
「「「(デカイ!)」」」」

それはもう、船ではなく一つの小島である様だった。

——『飛鳥VI』総トン数256, 580トン、乗客定員6, 547人、乗組員数2, 890人、全長368m、全幅69mの世界最大の豪華客船である。

「帆は? 帆は何処にあるんだ?」

「帆はこの船にありません、ディーゼル機関と言う機械によつて動かします」

「なつ、帆がいらなんなんて…是非とも見てみたいですね」

「あちらの小舟で乗船します、ついてきてください」



5時間後——

《マイハーク港より北に100kmの海上》

ハンキとヤゴウは興奮していた。

それもそのはず、公都クワ・トイネよりも発展した一つの街が船の中にあるのだ。

「これが船の上なのか……とても明るい、まるで光の精霊でも住んでいるかのようだ」
「全くだ。食事も豪華なのであろう」

2人は別れ、各々の部屋に入る。

ヤゴウは部屋に入ると、感嘆の声を挙げる。

「……城の様だ」

天井では硝子が光り輝き、部屋を照らしている。
そつとベットに触れた時、ヤゴウに電撃が走る。

「(なんだこの柔らかさは!!雲に座ったかの様だ!!)」

フカフカとしたベットはすぐに寝れそうであるが、彼はまだ部屋を探索しようとする。

「おお！熱湯が！熱湯がすぐに出てくるぞ！！…熱っ！！」

風呂を沸かして、火傷したり、

「この箱は…涼しい！！これであれば生肉も腐らせることはないぞ！！」

冷蔵庫を開け閉めしたり、

「む？これはなんだ？中央にボタンがあるな。押してみよう」

『トウトウトウン…自動で掃除を開始します…』

「ぬおおおお！動いたあ！喋ったあ！！?？」

ル〇バに驚いたり、彼はワクワクが止まらなかつた。

子供の頃に戻ったかの様で、彼は日記を書いていた。

「（こんな物を作り出してしまう日本国とはどんな国なのだろうか）」

「（列強国に匹敵する力を有しているのか…）」

「ワクワクが止まらない！童心に戻ったかの様だ！」

一方、ハンキは荷物を置いた後、船体後部のバーに来ていた。

「ふむ…どれが一番美味しいのですのかな？」

「私はこれがおすすめです」

「ではそれを一杯頂こう」

彼は、バーテンダーからカクテルを貰い、プールの側のデツキチエアに座る。

カクテルを一口飲むと、とても美味しく、溢してしまいそうになった。

「軽食を提供できますが…どれにしますか？」

「メニューは何かね？」

『黒毛和牛のハンバーガー』、『銀ダラのフィッシュ&チップス』、『北海道産高級ハムとチーズのサンドウィッチ』がありますか…」

「うむ、では黒毛和牛のハンバーガー？とやらを頂こう」

「畏まりました。少々お待ちください」

ハンバーガーと言う食べ物食べたことが無く、ワクワクする。数分後、パンの間に厚い肉が挟まれた物がやって来た。

「ほう…これがハンバーガーか」

一口口に入れると、幸福感が口に広がる。

柔らかく、肉汁が溢れて旨味が存在を發揮する。

「美味しい！美味しいぞー！」

これほどの美味しい食べ物が船で食べれる日本国とはどのような国なのだろうか。ハンキはおかわりしたカクテルを飲みながら考える。

「帆もオールも無く動く巨大船…」

「良い物だな…」



中央暦1639年5月12日――

《日本国中華地方香港市 香港港沖》

「皆様、見えてまいりましたのは、日本国中華地方香港市香港港です」

「この後はリムジンバス――大型の自動車でザ ペニンシユラ 香港まで移動していただきます」

ヤゴウ達は興奮のあまり甲板に朝早くから立ち、早くつかないかと待ち侘びていた。使節団の前に現れたのは見渡すばかりの大都市、50階以上ある建物が並び立つ姿はとても幻想的であった。

「(な、なんだこの都市は！マイハーク、いや第一文明圏の都市よりも巨大だ！)」

香港港に着岸してリムジンバスに乗り、一行はザ・ペニンシユラ香港へ向かった。

車内から見渡すと数えきれないほどの車達、『内燃機関』で動く車のことを聞かされているが、こんなにいるとは思いませんでした。

「明日は陸上自衛隊総合火力演習を見ていただきます」

「そうごうかりよくえんしゆう？とはなんだね？」

「総合火力演習はクワ・トイネで言うと言とうと陸軍のパレード…です」

使節団は優れた技術力を持つ日本国の陸軍が観れると知り、寝れない夜になるな、と思った。

(ベットがフカフカで即落ちした)



中央暦1639年5月13日――

《ザ・ペニンシユラ香港 ロビー》

「皆様おはよう御座います」

時間は午前8時、使節団は美味しい食事とフカフカベットでご満悦だ。

「まず、空港に移動していただき、その後ヘリコプターにて江西大演習場に移動していた

だきます」

江西大演習場は人工的に作られた演習場であり、広さは地球でもトップクラスであった。

一向は、リムジンバスで香港国際空港へ向かった。

空港の駐機場には、大きな音を立てながらEC-225政府専用ヘリコプターが駐機していた。

「こちらです！着いてきてください！」

「なんだね！この風は!？」

「ローターの風です！」

大きな音を立てるヘリコプターに使節団は戦々恐々し、ゆつくりと乗り込む。機内は清潔感があり、外の爆音もあまり聞こえなくなった。

「うおっ！飛んだあ!？」

「ヘリコプターはローターの浮力で上昇します！」

「すごい技術だ！是非とも我が国でも導入したいな！」

使節団を乗せたヘリコプターは江西大演習場に向けて出発した。



1時間後——

《日本国中華地方江西県 江西大演習場》

使節団を乗せたヘリコプターは、演習場の司令室の屋上へ着陸する。

「到着しました！ここが江西大演習場です」

「ほお、これはすごいですな」

「見ないものがたくさんあるぞ」

「彼方ですか？あれは陸上自衛隊の現役戦車です」

田中が指す先には陸上自衛隊の現役戦車である

『10式戦車A型』

『90式戦車A型』

『74式戦車G型』

『74式戦車H型』

の姿があつた。

「おお、すごい外見ですな！とても強そうだ」

「カッコいい！とってもかっこいいぞ！」

使節団には角張つており、重戦車のような威容な90式戦車が人気のようだ。

他にも『16式機動戦闘車』や『89式機動戦闘車』『89式装甲戦闘車』『10式装甲戦闘車』があつた。

一向は、一般観客から離れたVIP席に座り、演習開始を待つ。

南部方面総監の訓示が終わり、演習が始まる。

「皆様、まもなく10式戦車による射撃演習が始まります！」

平田の声により使節団は右側より侵入してきた戦車に目をやった。

『3、4の台、装甲車、1班、対りゆう、撃て！』

大きな音を立てて10式戦車の戦車砲から成形炸薬弾が発射される。そして大きな音と共に的に着弾した。

「すごい！威力が大魔道士並みだぞ！」

「あれがかの魔導砲とやらか！凄まじい火力だ！」

「しかし、あれであれば大魔導士を呼べばよいだろう？わざわざああゆうのを作らなくては良いのでは？」

戦争の方法を知らない外務省の人間が陸軍の人間に語りかける。

「いや、あれのすごい所は何両もおり、しかも見た感じ鉄で覆われている」

「おそらく魔法を跳ね返すだろう…、ヒラタ殿、あの地龍は何匹いるのだね？」

「ええと、我が国にはあの10式戦車A型がおよそ1, 200両ほど、全部の車両を含めると予備役含め3, 817両います」

「!!!」

平田の言葉に使節団は日本に来てから何回かわからない程の驚愕をする。

大砲の爆発は大魔道士級。一国に大魔道士など3人しかいないので、3, 800人など夢の様な数字である。

「凄まじいな…魔道士が3, 800人など…」

「我が国も是非導入したいな!」

「それにつきましては今夜協議しますので暫しお待ちください」

その後も演習は続き、陸上自衛隊の実力を目にした使節団は日本と友好を結んだのを神に感謝すると共に、日本の兵器を導入したいと考えた。



午後12時——

《日本国中華地方江西県南昌市 南昌駅》

一向は、南昌駅に来ていた。

駅には多くの人々がおり、人々は見慣れぬ格好をする使節団に驚いたり、黒い板を向けている。

ホームに入ると、アナウンスが聞こえて来た。

『中華新幹線をご利用頂きましてありがとうございます』

『間も無く12番線に12時15分発、みらい239号、上海国際空港行きが到着いたします』

『安全線の内側まで、お下がりください』

『Thank you for using the Zhonghua Shinkansen…』

到着を知らせるアナウンスが聞こえ、使節団は右を見て来る新幹線を探す。遠くの方で、うっすらと見える気がした。

「む！早いぞ!!」

「うおおおおおおお」

強烈な速度で来たソレは、急激に速度を落とし、ピタリとドアが使節団の前方へ止まる。

それを見た使節団は、固まっていた。

「…私は凄い所へ来ましたな…」

「…夢だと言ってくれよ…」

一向は新幹線に恐る恐る乗り込み、上海国際空港へ向かう。



中央暦1639年5月14日——

《日本国中華地方上海府 上海国際空港》

隣接のホテルで一泊した使節団は東京へ移動する。

空港内を移動するバスの中でハンキとヤゴウは会話していた。

「わしは驚き疲れた。もう一々驚かないぞ」

「私も驚きまくりましたし、もう何も怖くありません」

2人はぐったりとした表情で眩き、周りの使節団もうなづく。

バスが止まり、平田が一向へ告げる。

「着きましたので、移動します」

「あれがエアバスE380 内閣総理大臣専用機です」

そこには、クワ・トイネの家より巨大な飛行機があつた。とてつもない大きさの鉄竜に使節団は驚愕を隠せない。

「(一体何なんだこの国は!)」

「ミリシアルでもこれは作れまい。何という事だ…」

使節団は茫然自失となりながら、旅客機に乗り込んだ。

◇◆◇

午後5時——

《日本国関東地方東京都 迎賓赤坂離宮〔花鳥の間〕》

羽田国際空港に降り立ち、また東京観光を終わらした一向は旅館へ泊まっていた。

「7550万トン、我が国だけで賄えます」

「!!!」

今度は日本側が驚愕する。

7550万トン、それを一国で賄えるなど、とんでもない国だ。

「ただし、ただしです」

「これほどの量を定期的に運び出す設備を我が国は持ち合わせていません」

「…成程…これは両国にとってまたとない幸運なのかもしれません」

「幸運?」

「我が国の政府開発援助^Aで資金を出し、港湾施設の増強・穀倉地帯での鉄道整備などを提案します」

「我が国がインフラ整備・安全保障、貴国が食物を輸出する。如何でしょうか?」

「!!!」

「(日本国の技術は途轍もない!ならば、産業革命が起きるぞ!!)」



中央暦1639年5月20日——日本、クワ・トイネ国交開設、同時に日桑安全保障条約締結。

日本は転移危機を脱するべく、クワ・トイネ公国から農作物の輸入を開始。同時にク
イラ王国からの石油採掘権を取得。

それに伴い、両国のインフラ整備に着手。文化交流も盛んになり、この時までは順調
に進んでいた。
この時までは——

第3話 戦争前夜

中央暦1639年7月3日――

《ロウリア王国 王都ジン・ハーク 王城ハーク城 御前会議》

近年、クワ・トイネと対立を深めているロウリア王国。その王城では、クワ・トイネ
攻略会議が開かれていた。

地球にいたらボディビル大会で一位を取れそうな男、王国防衛騎士団將軍『パタジン』
が王の前にひざまづく。

「王よ、全ての準備が整いました。軍はいつでも侵攻出来ます」
「ふむ…2カ国を相手にして勝てるか？」

風呂好きでロウリア王『ハーク・ロウリア34世』は、バスローブの様な服を着て訪
ねる。

「二国は農民共の集まり、一国はワイバーンも持たぬ不毛な土地の民。亜人が大量に居る国に我が国が破れる事はありませぬ」

「宰相、先月クワ・トイネと安全保障を結んだ日本という国はどうだ？」

日本は、クワ・トイネからロウリアが差別主義である国家だと聞き、連絡は取っていなかった(クワ・トイネとクイラで日本が異世界で手に入れた物の殆どが手に入り、ロウリアはそんな魅力がなかったことも影響している)

「はっ、情報は少ないですが、ワイバーンを持たない国だそうです。恐るるに足りないかと」

「しかも彼の国はロデニウス大陸のクワ・トイネ公国から北東に約1000kmの所にある、新興国家です。1000kmも離れていることから、軍事的に影響があるとは考えられません」

「ほう、そうか。フハハハ…余は嬉しいぞ。ロデニウス大陸が統一され忌々しい亜人どもが、根絶やしにされるとはな。先々代国王の願いが遂に果たされる」

「大王様、統一の暁には、あの約束も、お忘れ無く、フフフ…」

「解つとるわ!!」

大王の横に控えていた黒いローブの男の声に、ハーク・ロウリアは苛立ちを隠さずに告げる。

「(ちつ、文明圏外国の蛮族と馬鹿にしゃがって。ロデニウスを統一したら、フィールアデス大陸にも攻め込んでやるわ)」

「パタジン、侵攻作戦を説明せよ」

「はっ」

「今回の作戦用総兵力は50万人、クワ・トイネ公国に差し向ける兵力は40万、残り10万は本土防衛用兵力となります」

「先ずはクワ・トイネ国境の人口10万人程の都市、『ギム』を先遣隊で制圧。クワ・トイネでは、食料が豊富であり、物資は現地で調達します。これは侵攻速度を早めるためでもあります」

「現在、臨時編成した先遣隊は国境付近で野営しており、陛下の命令があれば何時でも侵攻出来ませう」

パタジンの説明に、ハーク・ロウリアは満足そうになづく。

「うむ、大義であった。今宵此処に我がハーク・ロウリア34世の名において宣言する。クワ・トイネ公国・クイラ王国に対する戦争を許可する」

「亜人共をこの世から1匹残らず駆逐し、人間の未来を切り開くのだ——」



中央暦1639年7月9日——

《日本国 首都東京 首相官邸地下二階 ブリーフィングルーム 総理要旨説明室》

首相官邸の地下二階にある総理要旨説明室ブリーフィングルームでは、内閣と自衛隊幹部、情報組織長官らが集まり、2ヶ月間の報告をしていた。

「——これで、此処2ヶ月間の説明を終わります」

「うん、ありがとう」

日本は、クワ・トイネと国交を結んでから数週間後にクワ・トイネ公国の仲介で隣国

のクイラ王国とも間を置かずに国交を結んでいた。

クイラ王国からは、空自の『SR-71』や『U-2』偵察機によって、石油が埋蔵されていると確認されていた。

事実、クイラでは石油は道端の雑草並みの価値であり、地球諸国が見たら一周回って冷静になりそうなほどの石油が埋蔵されていた。（なお、本当に資源エネルギー庁の担当官は心肺停止して救急搬送された）

外務省の説明が終わり、今度は防衛省の番になる。中央のモニターに防衛省のロゴが映り、スライドに差し変わる。

「先ず、懸念事項であった衛星に関する報告です」

画面が切り替わり、衛星の軌道を表す画面に変わる。5つの衛星の光点とその軌道が映し出されていた。

「現在一機のリーダー偵察衛星と同じく一機の光学偵察衛星、一機のGPS衛星を軌道に投入できました」

「それを補助する二機の衛星データシステム衛星の軌道投入成功により、最低限であり

「さすが衛星偵察資産が復旧しました」

「ですが、依然として監視域には大幅な穴が開いたままになっています」

「現在、来月に新たに2機の衛星投入を目指して宇宙航空研究開発機構^Aと協議中です」

画面が切り替わり、今度は偵察機によって空撮されたと思われる画像が映る。

画像には、白色の円形もしくは長方形の何かが画面いっぱい埋め尽くされていた。

「これは一体？」

「これは先日、監視域の拡大のために飛行させているSR-71^{ブラックバード}夜鷹による、ロウリア／クワ・トイネ国境上空高度約37,000mからの空撮映像です」

防衛大臣『川野小太郎』は、ポインターで画像を差しながら説明する。

「この地点はロウリア／クワ・トイネ国境から西に60kmの地点です」

「これは…天幕か。ならば此処にいる兵士たちは全員ロウリア軍人だな」

中央国家憲兵団統括部長官『廣田孝允』が喋り、それに川野はうなづく。

「はい、推測から数はおおよそ35〜40万と思われれます」

「40万だと？」

「陸自の隊員数は約39万なので、つまり39万はロウリアと同じぐらいの人数なんですよね。ですよね、山谷元帥」

「…はい、そうです」

内閣官房長官『須賀秀義』の驚愕の声と共に、ネットから熱い支持（○）を受けている環境大臣『小泉進太郎』しょういずみを言葉に、陸上自衛隊陸上幕僚長『山谷泰稔』元帥が肯定する。

「はい総理。これはロウリア王国軍の動員可能戦力の8割にあたります」

「演習ではないのか？」

「明確な侵攻準備です。ロウリア王国は国軍として約30万を保有しており、それに各諸侯が諸侯軍を総括しています」

「確認出来た兵力から考えて各所領からも兵員をかき集めています」

外務大臣『樹茂成敏』の問いに、中央C国家情報局長官『國仙武史』NIAが答える。

ヒューミントを主にする中央^C国家情報局^Iはクワ・トイネと国交^Aを結んですぐにロウリアへスパイを送っていた。

「流石中央国家情報局、お耳が早い。他にワイバーンなどが確認されており、これは確実にロウリア王国によるクワ・トイネ並びにクイラへの本格的侵攻の準備だと思われる」

「では我が国はどうするべきだと思う」

「それは、統合幕僚長である『細川達良』元帥から説明させていただきます」

「ご説明いただきました細川です。自衛隊が取れる作戦は3つあります」

細川は、一息ついてから室内にいる全員を見渡しながら言う。

「プランAは空自戦略爆撃機隊による先制爆撃です」

「幸いロウリア王国軍はまだ国境まで距離があり、民間人居住区もない事から最も現実かつ大打撃を与えられます」

「ですが、世論が厳しくなると言うデメリットもあり、また戦略爆撃機離陸用の滑走路は建設中でありあと一週間ほどかかると思われます」

「プランBは、越境を待ってからの防衛戦闘からの逆侵攻作戦です」

「これはロウリア軍が分散し、包囲殲滅をしなければいけないと言うことと、クワ・トイネの民間人の被害が他のプランより大幅に多くなると予想されます」

「一方、クワ・トイネからの要請があれば自衛隊を投入できるようなっている安全保障条約の観点から言うと、このプランが国会からの反発も低いでしょう」

「プランCは外交による解決ですが…」

「無理だ。ロウリアはクワ・トイネと断交しない限り外交しないと通達されている」

「…このように難しいです」

「うむ、AかBになるが…どちらが正解か？」

「ロウリアは反獣人が盛んだと聞いています、メディアに流してロウリアへの制裁を促せば宜しいのでは？」

「それだ。官房長官、至急メディアに情報を流してくれ」

「了解しました」

「防衛大臣は総合幕僚監部と協議してJ S Fの構成を進めてくれ」

「分かりました」

「それと介入の申し立てについては私がカナタ氏に話そう。外務大臣は日程の確保をしてくれ」

「了解しました、ですがクワ・トイネ国内に専用機が着陸できる滑走路は前述の通り建設中です」

「特務艇『はしだて』での会談になりますますが宜しいでしょうか？」

「うむ、防衛大臣もその所頼む」

「この介入は前世世界の時よりも日本の危機に直面している。各員気を引き締めて取り掛かるように」

日本も戦争の準備を着々と進めて行った。



中央暦1639年7月10日午前――

《クワ・トイネ公国　マイハーク港　特務艇『はしだて』》

「外務卿、日本の総理直々のお呼び出しの案件はどう考える」

「はっ、十中八九ウリアの事でしょう……しかし参戦してくれるのか不参戦で中立の立場を表明しにきたのかは分かりませんが」

特務艇『はしだて』の艇内で、外務卿『リンスイ』とカナタが話す。直後、会議室の

着いてドアの前で待機していた護衛の自衛隊員が拳手の礼をする。

「クワ・トイネ公国首相カナタ氏、外務卿リンスイ氏入られます！」

ドアがガチャリと開けられ、中には立った人物らが見える。

「初めまして、日本国内閣総理大臣の安倍野真三と申します」

「クワ・トイネ公国首相カナタと言います。本日はご招待誠にありがとうございます」
「いえいえ、ではお座りください」

全員が座ったのを確認し、安倍野が本題を切り出す。

「まず初めに本題から行きましょう、こちらの写真をご覧ください」

そう言うと、安倍野の隣に控えた秘書から3枚の写真が机上に置かれる。

「これは？——ロウリア、軍ですか？」

「ええ、我が国の偵察機……あなた方の言葉で言うとは偵察型の鉄竜ですかね？それで撮影した一週間前の貴国とロウリアの国境になります」

「これは進行の準備ですね、間違いないです……これと本題に何か関連が？」

そう言つてカナタは阿倍野の方を向く。

「ええ、率直に言いましょう。我が国は貴国とロウリアの戦争に介入する準備があります」

「「？」」

阿倍野の言葉に、クワ・トイネ側の参加者一同は驚愕に包まれる。

「ほ、本当ですか？」

「ちよつと待つて頂きたい、ここで参戦が可能と言うことは何か等価にしなくてはならないのでは？」

リンスイが阿倍野に疑いを掛ける。ここで参戦するといきなり言われたのには何か

裏付けがあるかもしれないと疑っているためである。

それを感じ取った安倍野は疑いを晴らそうと説明する。

「いえいえ、そういう意図はございません」

「では何故我々側で参戦を？通常であれば我が国の軍事は貧弱、負ける可能性が高いのですよ？」

「我が国としては外見が違ふとだけで差別する国と協力したく無いと理由もあります
が、理由のほぼ全ては——」

「食料です。我が国は前世界でも人口のほぼ全てを輸入で頼ってきました」

安倍野の説明は続く。

「であるからに貴国が侵攻されれば我が国は飢餓で滅亡してしまうでしょう」

「なるほど理由は分かりました。クワ・トイネ公国首相として正式に日本国に参戦を要
請します」

「日本国内閣総理大臣としてそれを了承しました。ではこちらにサインを」

横に控えていた外務大臣が書類を取り出して、二人が署名をする。

「では、次に参戦するにして基地を建設したいのですが、何処かに何も無い平原などはございいますか？」

「ではダイタル平野が良いでしょう。近くに要塞都市エジエイもありますし。地図があれば場所を教えられたのですが」

「地図ですか、持っているか？」

「はい、こちらに」

机に広げられた地図を見てカナタは喫驚する。

「(なんと、こんなに正確な地図が……やはり日本国に参戦してもらったのは神の導きかもしれん)」

カナタは驚愕を隠しもせず、ダイタル平野の位置を示した。

数日後、マイハーク港から上陸した陸上自衛隊の施設部隊によってダイタル平野に4自衛隊合同の基地、『ダイタル総合任務基地』が建設されることとなる。



中央暦1639年7月13日――

《日本国 首都東京 首相官邸地下一階 内閣危機管理センター 国家安全保障会議》

首相官邸の地下一階に作られた内閣危機管理センターには、安倍野総理以下の国家安全保障会議のメンバーと、自衛隊の主要幹部が集まっていた。

自衛隊統合軍統合幕僚長の『赤城繁義』元帥が状況説明のために、正面のモニターを起動する。部屋が暗くなり、スクリーンにロデニウス大陸の地図が載る。

「自衛隊の展開状況を説明させていただきます」

「部隊はJTF―大鳳と命名し、総司令官は『金田義政』元帥の下、指揮されます」
統合任務部隊
 「ではJTF―大鳳の構成部隊を説明していきます」

《JTF―大鳳》 ○総司令官： 金田義政元帥（前職：統合軍アジア・太平洋方面軍指揮官）

――
 陸上構成任務部隊

幹

- 第7機甲師団〔4個戦車連隊、1個普通科連隊、1個武装偵察戦闘連隊基幹〕
- 第70戦車連隊〔5個戦車中隊基幹〕
- 第71戦車連隊〔5個戦車中隊基幹〕
- 第72戦車連隊〔5個戦車中隊基幹〕
- 第73戦車連隊〔5個戦車中隊基幹〕
- 第11普通科連隊〔4個普通科中隊基幹〕
- 第74武装偵察戦闘連隊〔4個武装偵察戦闘中隊基幹〕
- 第7特科連隊
- 第7後方支援連隊
- 第7偵察戦闘大隊
- 第7高射特科大隊
- 第7施設大隊
- 第7通信大隊
- 第7飛行隊
- 東部即応機動師団〔4個即応機動連隊基幹〕
- 第5即応機動連隊〔3個即応機動中隊基幹〕

第6 即応機動連隊【3個即応機動中隊基幹】

第7 即応機動連隊【3個即応機動中隊基幹】

第8 即応機動連隊【3個即応機動中隊基幹】

第2 2 特科大隊

第3 師団【3個普通科連隊、1個戰車連隊基幹】

第7 普通科連隊【4個普通科中隊基幹】

第3 6 普通科連隊【4個普通科中隊基幹】

第3 7 普通科連隊【4個普通科中隊基幹】

第3 戰車連隊【5個戰車中隊基幹】

第3 特科連隊

第3 後方支援連隊

第3 偵察戰鬥大隊

第3 高射特科大隊

第3 施設大隊

第3 通信大隊

第3 飛行隊

第1 5 自動化旅団【2個自動化連隊、1個普通科連隊基幹】

- 第51 自動化連隊〔3 個自動化中隊基幹〕
- 第52 自動化連隊〔3 個自動化中隊基幹〕
- 第77 普通科連隊〔3 個普通科中隊基幹〕
- 第15 特科大隊
- 第15 後方支援隊
- 第15 高射特科大隊
- 第15 偵察隊
- 第15 施設隊
- 第15 通信隊
- 第15 飛行隊
- 第26 自動化旅団〔2 個自動化連隊、1 個普通科連隊基幹〕
- 第69 自動化連隊〔3 個自動化中隊基幹〕
- 第70 自動化連隊〔3 個自動化中隊基幹〕
- 第71 普通科連隊〔3 個普通科中隊基幹〕
- 第26 特科大隊
- 第26 後方支援隊
- 第26 高射特科大隊

【基幹】

第26偵察隊

第26施設隊

第26通信隊

第26飛行隊

第6騎兵師団〔2個空中機動連隊、1個空中強襲連隊、1個重装騎兵連隊

第51空中機動連隊〔3個騎兵中隊基幹〕

第52空中機動連隊〔3個騎兵中隊基幹〕

第53空中強襲連隊〔3個騎兵中隊基幹〕

第54重装騎兵連隊〔3個戰車連隊基幹〕

第11特科団〔2個特科連隊基幹〕

第11特科連隊〔3個特科大隊基幹〕

第12特科連隊〔3個特科大隊基幹〕

第22高射特科団〔2個高射特科群基幹〕

第22高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕

第23高射特科群〔4個高射中隊、1個高射搬送通信中隊基幹〕

第30施設団〔3個施設群基幹〕

- 第30施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕
- 第31施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕
- 第32施設群〔3個施設中隊、1個坑道中隊基幹〕
- 南方方面軍航空隊〔2個戦闘ヘリコプター隊、1個ヘリコプター隊、1個観測気象隊、1個航空野整備隊基幹〕
- 第400対戦車ヘリコプター隊
- 第401戦闘ヘリコプター隊
- 南方方面ヘリコプター隊
- 南方方面観測気象隊
- 南方方面航空野整備隊
- 海上構成任務部隊
 - 第1艦隊
 - 第1護衛隊群（横須賀）
 - 第1護衛隊
 - 第2護衛隊
 - 第7護衛隊
 - 第8護衛隊

第1空母打撃群 旗艦：ずいかく型航空母艦『ずいかく』

第1空母打撃群直属ミサイル巡洋艦

第1空母護衛隊

第1空母航空団

第5空母打撃群 旗艦：ひりゆう型航空母艦『ひりゆう』

第5空母打撃群直属ミサイル巡洋艦

第5空母護衛隊

第5空母航空団

第5軽空母打撃群 旗艦：いずも型軽空母『いづも』

第5軽空母打撃群護衛隊

第5軽空母航空団

第1フリゲート隊群

第11フリゲート隊

第12フリゲート隊

第1哨戒隊群

第11哨戒隊

第12哨戒隊

きつらぎ』

- 第1揚陸隊／第11水陸機動戦隊 旗艦：しきしま型強襲揚陸艦『しきしま』
- 第1海上補給隊
- 第1戦闘支援隊
- 第4護衛隊群（呉）
 - 第5護衛隊
 - 第11護衛隊
 - 第4空母打撃群 旗艦：ずいかく型航空母艦『かつらぎ』
 - 第4空母打撃群直屬ミサイル巡洋艦
 - 第4空母護衛隊
 - 第4空母航空団
 - 第2軽空母打撃群 旗艦：いずも型軽空母『かが』
 - 第2軽空母打撃群護衛隊群
 - 第2軽空母航空団
 - 第4フリゲート隊群
 - 第41フリゲート隊
 - 第42フリゲート隊

『キ』

第4哨戒隊群

第41哨戒隊

第42哨戒隊

第4揚陸隊／第14水陸機動戦隊

旗艦：しなの型強襲揚陸艦『あか

《big》第4海上補給隊

第4戦闘支援隊

航空構成任務部隊

《big》北米航空方面軍《第11航空軍》

北米航空方面軍司令部

第111遠征航空団

第112遠征航空団

第113輸送遠征航空団

第114遠征高射群

第115遠征航空支援作戦群

アジア・太平洋航空方面軍《第15航空軍》

第151遠征航空団

第152遠征航空団

第153輸送遠征航空団

第154遠征高射群

第155遠征航空支援作戰群

第1航空戰略軍《第21航空軍》

第211爆擊航空団

第212爆擊航空団

第213爆擊航空団

第214爆擊航空団

第215爆擊航空団

第1航空戰術軍《第31航空軍》

第311戰術航空団

第312戰術航空団

第2警戒航空軍《第34航空軍》

第341警戒航空団

第342警戒航空団

第1特殊作戰航空軍《第51航空軍》

第1特殊作戰群

第11特殊作戰情報中隊

第1特殊作戰整備群

第1特殊作戰任務支援団

第1特殊作戰医療群

第1航空資材軍《第61航空軍》

第611資材航空団

第612資材航空団

第1海兵遠征軍団／太平洋海兵隊

第1海兵遠征軍

第1海兵遠征軍司令部

第1海兵師団

第11海兵航空団

第11海兵兵站群

第11海兵遠征旅団

第12海兵遠征旅団

第11海兵遠征隊

第12海兵遠征隊

第13海兵遠征隊

「以上の部隊で構成されます。また、部隊配置後の配置図について解説します」



中央暦1639年7月14日午前――

《ロウリア／クワトイネ国境付近　ロウリア王国東方討伐軍　本陣》

クワ・トイネとの国境まで約3kmの地点では、ロウリア王国東方征伐軍先遣隊が侵攻前最後の宴会を開いていた。酒を開け、近くで取ってきた魔獣を焼いて食べている。兵士たちは皆、先遣隊を務める為に精鋭であり、豪快に肉を食らっていた。

先遣隊作戦本部の将校用テントでは、先遣隊副将を務める『アテム』がワインを飲んでいた。

「アテム様。この度は東方討伐軍先遣隊副将就任おめでとうございます」

「我らが支援した飛龍では非武功を立てて頂きたい」

「ふふ…ありがたく使わせて頂きます」

「ですが私は巫人を殺せれば良いだけです」

「おお…怖い怖い」

ハーク・ロウリア34世の近くにいた黒いローブの男に似た男がアテムのテントに入ってきた。

雑談後、彼は先遣隊指揮官のテントに入っていく。侵攻前、最後の会議だ。

「明日、ギムの街を落とす」

先遣隊司令官のBクラス將軍『パンドール』は、顎を撫でながら告げる。

クワ・トイネ側から撤退の魔信があるが、侵攻は王が既に決定したこと。全てを無視する。

【ロウリア王国東方征伐軍先遣隊内訳】

- 総兵力：34,150人
- 指揮官：パンドール
- 副将：アデム
- 歩兵：20,000人
- 重装歩兵：5,000人
- 騎兵：2,000人
- 特化兵攻城兵器や、投射機等、特殊任務に特化した兵：1,500人
- 遊撃兵：2,000人
- 魔獣使い：2,500人
- 魔道士：1,000人
- 竜騎兵：150人

先遣隊でもこの兵力。人的資源が多いロウリアの誇る人海戦術である。

「はっ、戦利品はどうしましょうか」

「アデムよ、貴様に任せる」

「了解いたしました」

パンドールの言葉にアテムはニヤリと笑い、パンドールもニマニマと頬を緩ませる。

アテムはロウリア軍屈指の殺戮者であり、味方にも恐れられる人物であったが、同じく容赦をしないパンドールとは相性が良かった。

アテムは後ろの兵に告げる。

「ギムでは、略奪を咎めない、好きにしろ」

「はっ!!!」

「ふふ…男は吊り上げても良い、女は犯しても構いません。ああ、ワイバーンの食糧にするのも良いですねえ」

アテムの部下は、恐怖を感じ、直様テントから出ようとするが、呼び止められる

「いや、待て!!!」

「やはり、翫つてもいいが、1000人ばかり、生かして解き放て、恐怖を伝染させるのです」

「それと……敵騎士団の家族がギムにいた場合は、なるべく残虐に処分すること」

「は、はっ!!」

「(なんて奴だ、いくら亜人でも可哀想に…)」

アテムは兵に伝えにいく伝令の背中姿を一瞥し、一層笑みを深くした。

第4話 ギム防衛戦

中央暦1639年7月15日午後――

《クワトイネ公国西部 国境から20km 都市ギム》

クワ・トイネ公国軍西部方面騎士団団長『モイジ』は、通信室にいた。通信兵の肩に手を置いて、真剣な表情をしている。

「ロウリアからの通信はないか？」

モイジは通信士に尋ねる。通信士は首を振ってため息をつく。

「こちらからの通信は確かに届いているはずですが、現在のところ返信はありません」

「つまりロウリアは、我々からの通信は無視し続けています」

「そうか」

本来なら直ぐに落ちるであろうギムも日本国の装備で強化されている。

「日本国の装備があつてよかつたな、あれがなければ直ちに落ちてしまふだろう」

「ええ、あの性能は期待できます。気をつける点は数が少ないので慎重に使用すべきところでしょう」

【クワ・トイネ公国軍西部方面騎士団概要】

○司令官：モイジ

○小銃兵：80人

○歩兵：2,500人

○弓兵：200人

○重装歩兵：500人

○騎兵：200人

○軽騎兵：100人

○飛龍：24騎

○魔導師：30人

○その他、日本製の旧式小銃・大砲等あり

「この武器でロウリア兵を一人でも多く道連れにしてやる」

「ええ、ここが陥落しても西部騎士団強し、ということをロデニウス大陸に広めましよ

う」

その時、通信室のドアが開け放たれる。後ろには兵士と娘も見える。

「あなた！」

モイジの妻が入ってくる。

「おお、どうした。早くあれで逃げなさい」

モイジが指す先には日本製のマイクロバスがあった。市民はあれに乗り避難するこ
とになっていた。

「いや、私も闘うわ！」

「だめだ、闘うのは我ら軍人だけで良い」

「そうですよ、奥さん。わたしたちに任してください」

「でも…」

「心配するな、無事に帰ってくるさ」

「…約束よ…」

「ああ」

数分後、モイジの妻と娘を乗せたマイクロバスは要塞都市『エジエイ』に向かった。それを見送ったモイジは、団長室に入った。

「おそらく死ぬであろうが、妻と娘を守るのであれば悪魔とだって契約しよう」

彼は自慢の剣とM3グリースガン、26年式拳銃の整備を始める。

「首を洗って待つてろよ、ロウリア兵。この俺が一人残らず皆殺しにしてやる」



中央歴1639年7月15日早朝――

《クワトイネ公国西部 国境から20km 都市ギム》

それは突然であった。ギムの西方から赤い煙が上がる。緊急事態を知らせる赤い煙

であった。

また、魔信が入る。

「報告！ロウリア軍のワイバーンが多数侵攻中!!繰り返す多数侵攻中!!」

「了解した！早く帰還せよ！」

「分かりま……ぐあああああ!!!」

「おい……おい!!………クソッ!!」

モイジは報告をした兵士に心の中で黙祷を捧げ、兵たちに命令を出す。

「第一飛龍隊及び第二飛龍隊は全騎上がり、敵ワイバーンにあたれ!!」

「軽騎兵は、右側面から攪乱に徹せよ!!騎兵は遊撃とする、指示あるまで待機!!」

「最前列に小銃兵、指示があるまで撃つな!重装歩兵、その後に歩兵を配置、隊列を乱すな!」

「弓兵は、その後ろにつけ、最大射程で支援しろ!機関銃と砲は有効射程に入ったらどんな撃ち込め!」

「魔道士は、攻撃しなくて良い!全員で、風向きをこちらを風上としろ!!」

直ぐ様クワ・トイネの飛竜隊が迎撃に当たるが、練度も数も上のロウリア飛竜部隊にやられる。

「くそつ！やはり飛竜隊がやられたか…」

「そうだ！小銃隊及び機関銃隊！敵飛龍に向けて射撃せよ！」

「団長！そういえば倉庫に日本軍の対空砲がありました！」

「馬鹿野郎！それを早く言え！」

モイジの命令により銃が上空に放たれる。

小銃による被害はほとんどなかったが、精度の高い96式軽機関銃により、何騎かが被弾。そのうち一騎が墜落した。

「団長これです！」

部下の前にはタイヤ式のポフォース40mm高射機関砲があった。

「よし、急いで設置せよ！」

直ぐ様工兵によつて設営される。

「射撃開始い！」

「てえ!!」

乾いた音を出し、機銃が咆哮する。対空砲火を経験したことがないロウリア飛竜は狼狽し、少くない数が地面に激突することにより合計で30騎が墜落したり、戦線離脱をした。

「ウオオ!!さすがは日本の兵器だ！」

「喜ぶのはまだ早い!敵歩兵が来るぞ」

「野砲、射程圏内に入りました」

「よし、撃て！」

「はっ、目標、敵歩兵群、距離800、方位、仰角よし」

「撃てえ！」

38式野砲から砲弾が放たれ、歩兵の真ん中に命中する。炸裂した破片は敵兵士の腹に食い込み、兵士は絶命する。

「小銃隊！前へ！」

モイジの号令により小銃隊が塹壕に身を隠し狙いを定める。モイジが日本の本から学んだ戦法だ。

ワイバーンがいない今、塹壕は体を隠しながら敵の槍や矢を防げる。

「目標！正面の敵歩兵！」

「撃てえ！」

80年振りに小銃が咆哮する。ダアンという軽快な音と共に九九式普通実包の7.7mm弾が発射され、ロウリア兵の命を刈り取る。

「排莢！続いて撃て！」

小銃により、歩兵が次々に斃れる。ロウリア兵は初めて見る銃の威力に驚くも、仲間の死体を踏み越える。

だが、96式軽機関銃や92式重機関銃などの射撃によって一気に葬られる。ロウリア先遣隊副将アデムはそれを激怒しながら見ていた。

「おのれえ、我が国も導入してない銃を使うなど…」

「一体何処から密輸入した！ムーか!? パーパルディアか!？」

「ええい、まどろっこしい。重装歩兵を盾にし前進！物量で押し通せ！」

「敵重装歩兵群来ます」

クワ・トイネ側は弾薬が少なくなり、第一塹壕が突破され、野砲も5門のうち3門が破壊されていた。

機関銃も飛龍のブレスで溶け、人員も動けないものが多くなってきた。

「遂にか…これほど損害を与えたのなら良い…」

「機関銃は敵騎兵に対し全弾薬を使い応戦！機関銃の弾が尽きたら騎士隊は突撃せよ

！」

それからは悲惨な戦いであった。96式軽機関銃の弾が騎兵を貫き、92式重機関銃が歩兵を一網打尽にする。

逆にロウリア兵の剣がM3サブマシンガンを撃つ兵士の喉を刺し、槍が26年式拳銃で応戦しようとした将校を刺し放つ。

だが物量の差には持ち堪えられず、ギムは陥落した。



7時間後――

《クワトイネ公国西部 国境から20km 都市ギム》

西部方面騎士団団長モイジは、後ろに縄をかけられ、捕虜となっていた。ギムは既にロウリア先遣隊により占領されている。アデムは、激怒しながら見下げる。

「チツ！この俺の経歴に傷をつけやがって！」

「はっ、お前のその顔を拝めただけ生きる意義があつたもんだ」

「傑作だn「黙れえ!!」ゴブツ」

アダムの剣がモイジの喉に突き刺さる。

「クソが!!で、戦利品は?」

「はっ。そ、それが、市民は誰一人としておりません。おそらくモイジが逃したのだと
…」

「なっ!!この俺に1度ではなく2度も恥をかかせるなど!!」

アダムはモイジの遺体を切り裂き、恍惚とした表情を浮かべる。

「ああ、スッキリした。生き残ってる奴や鹵獲品は?」

「生き残ってる者は80人ほど、そのほとんどが重症です。鹵獲した物は使い方が分かりません」

「そうか、認めるのは悔しいが強力なものだったからな、持ち帰りがかったが、仕方ない」
「そして、生き残っている者はいるのだな」

「はい」

「よし、なら串に突き刺し殺せ。それを都市の周りに立てよ。」

「なっ、なんですと！」

部下はアデムの言葉に驚愕する。部下は騎士として騎士道精神に則り戦ってきた。だが、アデムにそんなものは無い

「ん？聞こえなかったのか？早くやれ」

「はっ、はい」

「(なんてことをするんだ。こいつには騎士道精神などないのか?)」



2時間前——

《クワ・トイネ公国 ダイタル平野 ダイタル基地》

クワ・トイネ側に許可をもらい、昼夜問わず大規模な設営作業が取られているダイタル基地。

その2番目に完成した司令部施設では、陸上自衛隊クワ・トイネ派遣軍司令官兼第7機甲師団長を務める『大内田 和樹』陸将が衛星の画像を見ていた。

「くそっ！思ったよりも侵攻が早いな。現在投入可能な兵力は？」

「第5騎兵師団が1時間前に出発しましたが、ギム占領までには間に合わないかと…」
「くっ…見殺しか……すまん」

第7機甲師団は北京で空自の輸送機に戦車などを積載している最中、大内田ら第7機甲師団幹部は先に輸送機で到着していたが、戦車無しの機甲師団では戦えない。

「すまん…」

大内田は、ギムを防衛する兵士らに申し訳なく思った。

第5話　ロデニウス沖大海戦

中央歴1639年7月25日――

《クワ・トイネ公国　都市マイハーク　マイハーク港》

「壮観な風景だな」

クワ・トイネ公国海軍第二艦隊第一部隊提督『パンカーレ』は、海を眺めながらそう囁いた。

目の前には50隻の船があつた。

兵士達がバリスタの矢を詰め込み、出撃の準備を整える。

普段であれば感嘆する風景であつたが、今回は違う。

戦う相手は、4,400隻のロウリア海軍。たった50隻の船相手では立ち向かえないだろう。

「……彼らは何人生き残る事ができるだろうか」

「提督。海軍本部から魔信が届いています」

その時、側近であり第二艦隊の若き幹部『ブルーアイ』が報告に来た。彼は紙に書かれた魔信の内容を見ていた。

「読め」

「はっ！『本日夕刻、日本国の第5艦隊第8護衛隊群の戦艦1隻、ヘリ空母1隻、巡洋艦1隻、駆逐艦7隻の計10隻が援軍として、マイハーク沖合いに到着する。彼らは、我が軍より先にロウリア艦隊に攻撃を行うため、観戦武官1名を彼らの旗艦に搭乗させるように指令する』…との事です」

その報告に、パンカーレは憤慨する。たったの10隻。相手が4,400隻であつてもなくても、たった10隻で海戦に挑むなど、正気の沙汰ではない。

「何!?! たったの10隻だと!?!? 100隻の間違いではないのか?」

「間違いではありません。10隻です」

「やる気はあるのか、彼らは…公国の空を引つ掻き回したと思つたら国交を結び、実際の

戦争には10隻しか援軍を送らないとはなんて国だ!!」

「しかも観戦武官だと!! 440倍の相手と戦う部隊に誰がそうやすやすと部下を送れるか!!」

司令部の誰もが思った。そして誰も行きたがらない。当たり前である、誰が志願して死地に行かなければならない。

その時、ブルーアイが手を上げた。

「私が行きましょう」

「ブルーアイ! お前!」

「私は剣術ではこの部隊一だと思っています。白兵戦ならそう用意に殺されはしません」

「すまん…頼むぞ」

「はっはっは!」



当日午後――

《クワ・トイネ公国 都市マイハーク マイハーク港》

日本国艦隊が現れるという時間。その時、うっすらと遠くの海に小島が現れたと皆が思った。

だが、少しずつ動いている。それが日本艦隊と分かったのは旗が見えた時だ。

「なんなんだ！小島が動いている!？」

「いや!!あれは船だ!!」

海上自衛隊のクワ・トイネ派遣軍先遣艦隊、第7護衛隊群であった。

【日本国海上自衛隊 クワ・トイネ派遣軍先遣艦隊第7護衛隊群編成】

○司令官：『加藤和彦』下級海将

○主席幕僚：『小林浩一』1等海佐

司令部直属 ○BB-42 きい

○DDH-183 いくしま

第14護衛隊 ○CG-64 いすず

○DD-101 むらさめ

第21護衛隊

○DD—115 かげろう
 ○DD—126 ゆうぐも
 ○DDG—152 うすぐも
 ○DDG—155 やまなみ
 ○DD—138 てるづき
 ○DD—140 ふゆつき

「うおっ！なんだあれは……」

皆が思い思いに艦隊に見惚れていた時、2番目に大きい艦から羽虫のようなものが飛んできた。

よく見ると羽の両側に高速で回る風車のプロペラのようなものがある。

「何っ!!!」

羽虫が上空に来た時、なんと羽が45度回転し変形した。そのまま羽虫はブルーアイの近くに着陸した。羽はそのまま強く回っており、気を抜くと吹き飛ばされそうだ。着

陸後、羽虫の尻が開く。

「日本国海上自衛隊です!! 観戦武官1名様ですね!!」

羽虫の中には人が乗っており、大声で話しかけてくる。手には魔道具のようなものがある。

「どうやらこの羽虫で沖合の艦に連れて行くようだ。」

「私が観戦武官のブルーアイです! 日本国の方々かな?」

「はい! 本日はよろしくお願いします! こちらにお乗りください!!」

中に入るとシートがふわふわしており、気持ちが良い。周りを見ると格納されているシートがあり、かなりの人数を乗せることができそうだ。

窓から見ると艦隊がよく見える。一層大きい艦は中央に城があり、前方と後方に四角いものから棒が出ている。

よく分からないが何故かブルーアイの中ではその艦に『カッコいい』と迷ってしまっ

「平たい艦から出てきましたが、その艦に行くのですか？」

日本海軍の軍人に話しかける。

「いいえ、今回ブルーアイさんにご搭乗いただくのはいつくしまではなくあの大きい艦——きいです。」

どうやら一番大きい艦は『きい』、平たい艦は『いつくしま』と言うようだ。

その後羽虫は静かにきいに着艦した。

着艦し外に出ると白い綺麗な服を着た将校がおり、又その前には青い服を着た集団がいた。銃を持っていたので一瞬警戒したが、どうやら儀式のようだった。『荣誉礼』と言うようだ。

本来であれば、ブルーアイは将校でないの、荣誉礼の対象ではないが、護衛隊群司令部が初めて日本の船に乗る異世界人ということから、特別に執行した。

そのようなことを知らないブルーアイは、儀仗隊の練度の高さに感嘆していた。儀式が終わると将校が挨拶をしてきた。

「第7護衛隊群司令加藤和彦です」

「同じく第7護衛隊群首席幕領小林浩一と申します」

「本艦の艦長を務めさせていただきます、久村蓮、階級は1等海佐です。よろしくお願ひします」

「クワ・トイネ公国第二海軍観戦武官のブルーアイです。援軍感謝いたします」
「いいえ、友好国の身を守るのは当然です」

そう言うと、加藤は一旦息をついてブルーアイに話し始める。

「早速ですが、今回の作戦概要について説明させて頂きますので、中にお入りください」

ブルーアイは先導されて中に入る。艦内に入ると彼は目を疑う。

「なんで明るい！光の妖精でも使役させているのか!?!」

「(しかもやはり鉄か！鉄でできている!?!なんで浮いているんだ!?!)」

「これならば矢を防げる…なるほどそう言うことか…」

ブルーアイは廊下を歩きながら考えていると、小林が話しかけてきた。

「エレベーターで行きますので、着いてきてください」

「はっはい！(、えれべーたー、ってなんだ?)」

そうすると、目の前の扉が開き小部屋が出てくる。ブルーアイは恐る恐る乗り込む。扉が閉まり、浮遊しているような感覚になる。

「うおおおおおお」

「ははは…エレベーターは慣れるのに時間がかかりますからね。此方です」

ドアが開き、目の前に部屋が見えた。

ブルーアイと護衛隊群幹部は、司令部作戦室^Fに入っていた。

「では対ロウリア海軍の作戦概要について説明させていただきます」

「現在の状況を説明致しましょう。貴国はロウリア王国によって2方面からの脅威に晒

「されています」

「もし制海権が取られて仕舞えば、何処であつてもロウリアは上陸できません」

「また、我が国もマイハークからの食糧が届かなくなり、亡国の危機に陥ります。それはなんと少しでも避けたい」

「なので、マイハークの防御。それが第一となります」

小林は次のスライドに変える。中央のモニターに画像が映し出され、ブルーアイはこの日何度目かの驚愕をする。

「あ、あのお……これは？……」

「ああ、これは衛星によつて空撮されたロウリア海軍です」

「えいせい……とは？」

「衛星つて言うのは、空のさらに上の宇宙空間にある衛星のことです。そこから写真を撮り、此処に送られてきました」

ブルーアイは頭の中が真っ白になった。つまり日本国は空のまたさらに上から全てを観れると言うこと。カンニング同然の事だ。しかも、衛星と言うのは聞く限り、『古の

魔法帝国』の『僕の星』と殆ど同じである。

ブルーアイは再起動し、小林の話を聞く。

「では…現在、ロウリア海軍船団4, 400隻はクワ・トイネ西方海域、マイハークから西北西500kmの海域を5ノットの低速で航行しています」

スクリーン上の映像にはロデニウス大陸北部の精巧な地図とロウリア海軍を示す赤い五角形のアイコンが表示されている。

「前述の通り、我が司令部は敵の上陸予想地点をマイハークと断定、我々でこれを撃滅します」

「空母からの支援は艦載機の航続距離が届かないので、基本的に艦砲による対水上目標攻撃で攻撃する予定です」

「また、ワイバーンによる攻撃も想定されますが、それはSM-2かESSMにて対処する予定です」

「すいません。失礼を承知でお尋ねしますが、ロウリア海軍の船数は4, 400隻。それをたった10隻で対処する予定なのですか？」

「ええ、勿論。何世紀も前の木属船程度、10隻で大丈夫です。マイハークも貴方も守ります。ご安心ください」

ブルーアイは驚く。彼らは自分たちだけで、クワトイネ海軍の協力を得ずに、大艦隊に挑むつもりなのだ。

たった10隻で止められると言う自信。彼は不思議に思った。



中央暦1639年7月26日早朝――

《海上自衛隊クワ・トイネ派遣軍先遣艦隊第7護衛隊群司令部直属 戦艦『きい』艦橋》

「(バカな!?)我が主力船より早い!鉄だから遅い筈ではないのか!?)」

ブルーアイはまたもや驚愕していた。これほどの大きさであり、しかも鉄で出来ていると思われる。

だからクワ・トイネ海軍の船より遅い筈だが、我が主力船の最高速度を大幅に上回る速度である。

「司令、間も無くで空自の航空支援が始まります」

「了解、空自航空隊に連絡、幸運を祈る」

一方、その空自の攻撃隊長『天野達央』3等空尉は、『B/P-1』爆撃機のコックピットで空を見ていた。

青空は、地球よりも綺麗である。大気汚染物質が少なく、彼もダイタル基地で初めて息を吸った時、あまりの綺麗さに困惑した程だ。

今、彼は『B/P-1』8機、『A-10C』12機の攻撃隊の隊長を務めている。

『B/P-1』は海自の哨戒機の『P-1』を爆撃機にしたものである。

彼が大空を見ていると、航法士が話しかけてくる。

「機長、間も無く投下位置」

「了解」

「管制システム、よし」

「投下まで30秒。カウント入ります」

「30…29…28…27」

投下までの時間がカウントされ、爆弾倉の蓋が開かれる。

「5…4…3…2…1…
Fire.
Ready.
Now Bombs away.
投下、今。爆弾投下。」

ガゴン。という音と共に先ずは両翼のエプロンに3つずつ束ねられたMk. 82爆弾、計24発が投下される。

Mk. 82は無誘導でロウリア艦隊へ向かってゆく。なぜ無誘導なのかと言うと、ロウリア艦隊は4, 400隻の大艦隊であり、船団も大きい。

なので精密誘導で一発ずつ潰すよりは、Mk. 82が海面で爆発した破片と爆風で対処した方が効率が良いと判断されたからだ。

次に、B/P-1胴体に設置された爆弾倉から、回転型弾倉によってMk. 82が同じく24発投下される。

B/P-1、8機によって投下された計384発のMk. 82は、炸薬量87kgの爆発力によって次々とロウリア艦隊の船を撃沈してゆく。

A-10CもAGM-65マーベリックを発射し、無慈悲に正確に着弾する。ロウリア艦隊は、恐怖に包まれた。



5分前――

《ロウリア王国東方征伐海軍 旗艦『ロストニア』将軍『シャーケン』》

「良い景色だ。美しい」

ロウリア王国東方征伐海軍の将軍『シャーケン』は二つの意味で言葉を口にした。

1つ目は青い海に晴れ渡った空。クワ・トイネ海軍を殲滅し、ロウリア海軍と自分の名を世界中に広める日には相応しい景色だ。

2つ目は目の前に広がる4、400隻の大船団。一隻一隻が実力を持つ船であり、クワ・トイネ海軍など1時間もあれば屠れるであろう。

6年を掛けて準備してきた大船団。この船団ならば北の五大列強の一国、『パールディア皇国』も征服できそうである。

「いや、パールディア皇国には、砲艦という船ごと破壊可能な兵器があるらしいな
…」

彼は、いくらこの船団でも痛み分けて終わると考え、目の前の戦闘に集中することにする。

「(ん?)」

その時、高い空に灰色の龍らしき物が見えた。

「飛龍か!」

「いや、羽ばたいて無いな…鉄竜か」

「まあ良い、対空戦闘!バリスタ準備!!」

だが、一向にワイバーンは降りてこない。導力火炎弾などで攻撃するには低空に降りてくるしか無いはずだ。

偵察かと思った時、ワイバーンの腹から黒い物体が落ちてきた。

「なんだ——」

不思議に思った時、付近の海面が爆発し、近くにいた船が木っ端微塵になる。

「ぐおっ!!!」

さらに何十回も海面が噴火し、一気に何隻もバラバラになる。
海面には、木の破片や人間の一部などが散乱する。

「なんだ!? 鉄竜の攻撃かあ!」

「その模様です!!」

「一体どうやって攻撃したあ!!」

「分かりません!」

「くそっ!」

周りを見渡すと、すでに100隻ほどは沈没したり、しかけたりしていた。
兵は怯えて皆縮こまっている。

「見たことのない攻撃…まさか魔導兵器か！」

「飛龍を呼ばねば…通信使、飛龍による航空支援を要請せよ」

「はっ」

「(しかし…いかな…兵が怯えている…)」

そう思ったシャークンは、魔導拡声器を使って船団へ話しかける。

「注目!! いいか! 確かに敵は強い!」

「だが、諦めて良いとは言っていない!」

「既にワイバーン隊に応援を要請した! これでもうあの鉄竜が出て怖くない!」

「いわば! あの鉄竜は我が国へ神々が遣わした試練である!」

「あれを凌げば我がロウリア王国は列強も越えるであろう!」

シャークンの演説により、兵達の戦意が高まる。

「そうと決まれば総員! 突撃せよ!!」

「!!!」
「!!!」
「!!!」
「!!!」
「!!!」
「!!!」

ロウリア艦隊は前進する、神々の試練を乗り切るために。
だが、神々が試練を与えても戦女神がロウリアに微笑むとは限らない。



同時刻――

《ロウリア王国 王都ジンハーク ジンハーク城 飛龍飛行場》

ロウリア王国の王都防衛騎士団の飛龍飛行場。精銳の集まるこの飛行場は、現在慌ただしく人員が動いていた。

「第17竜騎隊前へ!!」

「敵飛龍が魔導兵器を使用したとの事です」

「ほう…ならば竜騎隊250騎全てを上げよ」

「良いのですか？そうすると王都防衛用の飛龍が全て無くなりますが…」

ロウリア王国軍防衛騎士団将軍『パタジン』へ、王宮主席魔導師『ヤミレイ』はそう

告げる。

だが、パタジンは口を緩ませる。

「戦力の逐次投入は避けたい。なに、所詮この王都まで辿り着ける敵など居ない。此処で全てを終わらせるのだ——」

『第17竜騎隊離陸を許可する。離陸を許可する』

「全竜騎隊出撃だ！」



5分後——

《海上自衛隊クワ・トイネ派遣軍先遣艦隊第7護衛隊群司令部直属 戦艦『きい』
戦闘指揮所》

戦艦『きい』は、『いつくしま』から発艦した無人偵察機『87式無人偵察機』^{RQ12}から撮影された映像を戦闘指揮所^{C1}のメインモニターで見ていた。

その時、ブルーアイへの作戦説明後、いつくしまに戻った司令部から一本の通信が入る。

「艦長、司令部より通信。『現時刻を持ってきいは、我が部隊より先行し、ロウリア艦隊を撃沈せよ。10111』」
ヒトマルヒトヒト

「1000隻以上の船団は我々の艦砲射撃の方が処理し易いからな…よし、第四戦速」
「了解、第四戦速」

5分後、ロウリア艦隊でも『きい』の艦影が確認された。

「敵船発見！」

「…300mはあるぞ」

「バケモノめ…」

未知の大きさの艦に数名が怖気付くが、

「怖がるなあ！戦闘用意！」

シャークンの一喝で戦意が高まる。

「やってやろうじゃねえかよ この野郎！」

「馬鹿野郎お前俺は勝つぞお前!!」

「野郎オブクラッシャー!!!」

…若干おかしいが気にしない。

「ワイバーン隊！突撃します！」

上空ではワイバーンが敵超巨大船に攻撃を仕掛けようとした。

「俺たちの分も取っとけよー!!」

「残りは貰うぜ！」

水夫達も応援する。そのままワイバーンが攻撃体制に入る、艦隊の全員が数秒後に敵艦が炎に包まれる姿を想像した。

だが、見えたのは逆の光景であった。

「え」

それは誰が出した声であつたか、
皆、目の前で起こったことを脳が理解しなかつた。

「あ、あああ、ああ」

敵艦が爆発したと思つた瞬間、ワイバーンが弾けたなんて、
信じられない。嘘だ。これは夢なんだ、現実じゃない。

だが、それは現実だ。



5分前——

《海上自衛隊クワ・トイネ派遣軍先遣艦隊第7護衛隊群司令部直屬 戦艦『きい』
戦闘指揮所》《font》《big》

「レーダー探知^{コタクト}。敵味方識別信号^Fに応答無し」

「敵編隊だと推測されます、機数250、相対方位45°、距離約50km」

「右砲戦の前に対空戦闘だな…右砲戦やめ、対空戦闘用意」

「右砲戦やめ、対空戦闘用意」

艦内にジリリリと警報が鳴り響き、乗員は水密扉を閉め、また非番の乗員も補助要員として各々の持ち場に着く。

「編隊250騎接近」

「250騎か…かなり多いな」

「編隊進路変わらず、依然接近！まもなく本艦視認圏です」

「来ました！右舷前方、相対方位45°。目標約200以上を確認！距離45キロ！」

「対空戦闘、相対方位45、距離30kmに備え！左舷1から3番127m速射砲、第

3VLS射撃用意！」

砲術長の命令により、『きい』に6基ある127mm速射砲が起動する。

「目標群 α 低空より接近19、相対方位45、仰角5度！距離25 kmに接近！」
 「目標群 β 高空より接近21、方位30、仰角82度！」
 「目標群 c 距離30 km 110、25、仰角75、旋回中です！」
 「cは様子見か…」

砲術長は。ポツリと呟く。できれば一斉に突撃してほしくは無い。今が好機だ。

「目標攻撃諸元入力完了！」

「…目標群 α に左舷1から3番127 mm単装砲照準！」

「目標群 β に対し第3VLSによりESSM21発照準！発射管制は手動で使用！」

「発射管制手動に変更！」

「目標群 c は放置でいいですね」

「ああ、撤退してくれると願ってな」

「…そうしてくれると嬉しいんですけどね…」



上空――

《ロウリア王国軍 王都防衛竜騎隊 第17竜騎隊》

「デカいな…」

第17竜騎隊隊長である、『デザルーツ』は、そう呟いた。彼の目には、島を丸ごとくり抜いたかのような船が鎮座していた。

「まあ、あれを撃沈すれば俺の戦果だ、昇進間違いなしだぞ」
「第1連隊第1分隊は高空、第2分隊は低空から接近せよ！」

デザルーツは少しのワイバーンで敵を弱らせてから一気に叩く戦法を取る。これまでのロデニウス大陸統一戦争でも頻繁に取った戦法だ。

「第1分隊行くぞ！」

第17竜騎隊第1連隊長兼第1分隊長『フィールズ』は巨船を仕留める機会を作ってくれたことを神に感謝する。

「ん？」

低空では今まさに第2分隊が攻撃しようとしていた。

「一番槍は取られたか……」

「第2分隊に負けるな！ 征くぞ！」

その時、新人竜騎士である『ミドリーレ』が声を上げる。

「た、隊長！ だ、第2分隊が！」

「何！」

目下では敵の火矢によって第2分隊が壊滅していた。

「敵は化け物か！」

自分の経験ではワイバーン20騎を一瞬で撃ち落とすものなど存在しない。

「ええい！撤退「敵船ナニカを発射！」ナニかってなんなんだ！」

敵船を見ると灰色の四角形のものから高速で槍が迫ってきていた。

フィルーズは直感でソレがとてつもなく危険と感じた。

「まずい！散k…」

そこでフィルーズの意識は反転し、2度と戻ることがなかった。

『きい』1番から3番127mm単装砲及び第3VLSから発射された
発展型シースパロー^Mによって第17竜騎隊第3連隊は壊滅した。



同時刻——

《海上自衛隊クワ・トイネ派遣軍先遣艦隊第7護衛隊群司令部直屬 戦艦『きい』
戦闘指揮所》

「敵目標群 アルファ・ベータ $\alpha \cdot \beta$ 計40騎撃墜確認！」

チャリィ
「cは?」

「突撃してきます! 目標数310! 距離25!」

「…発射管制オート全自動に変更! 全武器使用可能!」

「了解! 発射管制は全自動、全武器使用可能」

イージスシステム
神の盾は異世界でも存分にその性能を発揮した。

数分後、ロウリアワイバーン隊はロデニウス沖で姿を消した。



5分後――

《海上自衛隊クワ・トイネ派遣軍先遣艦隊第7護衛隊群司令部直属 戦艦『きい』
戦闘指揮所》

「敵艦隊、動きません」

「了解、右砲戦用意!」

「右砲戦用意！」

「目標ロウリア艦隊、距離3km、弾種榴弾、主砲砲撃射線確保！」

右砲戦用意の号令が上がった時点で艦橋では掌帆長がブルーアイに説明していた。

「ブルーアイさん、耳を塞いで口を開けといて下さい、我々は慣れていますが、貴方は慣れていないと思うので」

「え？どう言う…」

「さあ、早く。危ないですよ」

危ないと言われてすぐさまブルーアイは耳を塞ぎ、口を開け、即席で防音魔法を貼った。

「全照準、射撃管制手動マニユアルして行う！」

「照準…よし！」

「撃ち方あ初め！」

「撃ち方初め！」

「撃てえー!!」

75年前、ドイツ兵に『ミヨルニル』と恐れられた51cm砲が咆哮した。



数分後――

《ロウリア王国東方征伐海軍 旗艦『ロストニア』》

この部隊の司令官である、シャークンは虚な目で艦隊を見つめていた。

一回の砲撃で数十隻がまとめて吹き飛び、我々の攻撃は全く当たらない。

「……………」

「もう終わりだ」

「(私の責任不足で何千人もの死傷者が出るであろう…)」

「(しかし国に帰れば敗戦の責任を負い――自分は将来無能な提督として名が刻まれるだろうな)」

「…神の企てか? 悪魔の意志か? 我々は何と戦っているんだ」

「敵艦! 攻撃開始!」

それからは地獄であった。敵の魔導砲は一回で数十隻ずつやられる一矢報いようと近づくも小さい魔導砲にやられ、近づけない。艦隊は信じられない速度でやられていった。

「…ダメだな」

「(これ以上悪戯に兵を死なせるわけにいかん…)」

「通信士……—全軍退却だ」

「……はっ」

だがその瞬間、ロウリア王国東方征伐海軍旗艦『ロストニア』は『きい』2番127mm単装砲の砲撃により沈没。

指導者を失った艦隊は散り散りになりながら撤退した。



数分後——

《海上自衛隊クワ・トイネ派遣軍先遣艦隊第7護衛隊群司令部直属 戦艦『きい』艦橋》

「司令部へ打電『本艦、敵艦隊を撃破。尚、生存者が多数いるため救助活動を行う。至急応援を求む1426』」

「はっ！『本艦、敵艦隊を撃破。尚、生存者が多数いるため救助活動を行う。至急応援を求む1426』、司令部へ送ります」

「よし、内火艇及びSH—60K発艦準備！衛生員は応急手当での準備を整えろ！忙しくなるぞー！」

「えっと…もう終わったんですか？」

「ええ、我が艦隊は4400隻中4200隻を撃沈しました、我々の勝利です」
「そ…う…ですか…」

ブルーアイはタジタジになりながら、聴きたかったことを尋ねる。

「それでその…被害はどれくらいですか？」

「ありません」

「え？」

「我々に被害はありません。完全勝利です」

「??？」

あり得ない。我が海軍がロウリア海軍4, 200隻を撃沈するのであれば、全滅に等しい被害を喰らうであろう。

「まあ、弾薬代ぐらいですかね被害と言った被害は。ハハハハハ」

「ハハ…ハ…ハ…」

笑えない冗談を聞きながら、ブルーアイは上層部への報告はどうしようかと頭を悩ませた。

第6話 太陽神の使い

中央暦1639年8月9日――

《クワ・トイネ公国 公都クワ・トイネ 政治部会会場 『蓮の庭園』》

「以上が、ロデニウス大陸沖海戦の戦闘結果になります」

蓮が全体的に装飾された庭園で、参考人として招致されたブルーアイが『ロデニウス沖大海戦』の結果を報告していた。

会議参加者の目の前には、日本製のプリンターで印刷されたレジユメが配られている。

「――では、日本国は10隻の内たった1隻で4,200隻を撃沈し、ワイバーン約300騎の空襲を上空掩護も無いのに物ともせず、しかも損害・死傷者無し。我が艦隊の出番が無かったと……」

「いえ、砲弾の金額が痛かったと……ハハハ」

「そんなの被害の内に入らんわ！」

痲癩を起こしそうになるリンスイをカナタが留める。

「落ち着きなさいリンスイ。すまないブルーアイ君、彼は信じられない戦果に気が動転しているのだ」

「しかし、こんなものは神話上でしか無い戦果です。いかに君が見たとしても我々は信じられません」

それを予測していたブルーアイは、海自の隊員から貰ったある物を取り出す。

「ならばこれを見ていただきたいと思います」

ブルーアイは黒い四角い物と銀の円盤を円卓の上に置く。

「なんだね？これは…？」

「えっと、日本では四角いのがノートパソコン、円盤がディスクと言うのです。映像を映

す事が出来ます」

「なっ、映像をこれがか!!」

この四角い物で映像が観れると言うことに一同が驚愕する。

「今回見ていただくのは今海戦の映像、そして日本人から借りた軍の演習の様子です」

ブルーアイはノートパソコンにディスクを入れ、再生した。

◇◆◇

3時間後——

《クワ・トイネ公国 公都クワ・トイネ 政治部会会場『蓮の庭園』》

「「「「……………」」」」

辺りには又もや沈黙が支配していた。

「…ブルーアイ君」

「はっ」

「その、疑ってすまんかったな」

「いいえ、私でも報告されたら信じないと思いますので」

映像を一言で表すなら、驚愕。

海戦の映像ではたった1艦の島のような大きさの船が数十隻の船を吹き飛ばし、陸上自衛隊という陸軍の映像ではとてつもない破壊力の矢が正確に的を撃ち抜き、

海上自衛隊の映像は100m以上の船が400隻も存在し、

航空自衛隊ではワイバーンが虫に見えるくらいの速度の鉄竜が飛んでおり、

海兵隊は夥しい数の兵士達を一斉に上陸させることができた。

そして、最後の映像。『核』と言われる物。あれは古の魔法帝国のコア魔法と同じであつた。

つまり日本国は最低でも古の魔法帝国と同じ戦力があるということ。

参加した人物達は日本国がこちらについてくれたことに安心すると同時に、日本国がこちらに牙を剥くのを恐れていた。(まあ、クワ・トイネは日本の生命線なので亡国したら日本が詰むので牙を剥くことは絶対にならない)

「いずれにせよ、今回の海からの侵攻は防げた。まだ200隻残っているが、たった1隻にここまでやられては、警戒して海からの再侵攻には時間がかかるだろう。陸のほうはどうなっている？軍務卿？」

「はい、現在ロウリア王国は、ギムの周辺陣地の構築を行っております。海からの進撃が失敗に終わったため、ギムの守りを固めてから再度進出してくるものと思われます。我が情報部では、電撃作戦は無くなったと解しております」

軍務卿が続ける。

「また、日本国は大規模な陸軍部隊をマイハークより上陸させており、近頃に反抗作戦を実施する予定であるそうです」

「そうか」

「〔日本国——確かあの国の国旗は白地に赤い丸の模様であった筈〕」

「〔赤い丸は太陽……まさか……〕」

「——太陽神の使いではないのか？」

ボソッとカナタつぶやいた言葉は、誰にも聞かれずに庭園内に薄れていった。



中央暦1639年8月10日――

《日本国 首都東京 首相官邸 総理執務室》

一部おホモの人達だちが大喜びするこの日。執務室では、防衛大臣がロデニウス沖大海戦の結果報告をしていた。

「――して、海上自衛隊はロウリア海軍4、200隻を撃破。この海戦で勝利しました」
「ほくん、完全勝利か。よかったよかった」

部屋の中には真面目に報告する防衛大臣とカキ氷を食いながら聞く総理大臣という不思議な光景が広がっていた。

事実、入ろうとした官房長官と統合幕僚長は、ドアを開けたらこの異質な空間を確認し、ドアをそつと閉めた。

「そーいや陸自と空自と海兵隊のクワ・トイネへの派遣部隊の編成はどうなってるの？」
「まず、陸上自衛隊からは陸上総隊より特殊トクジュウ戦軍セングン団の第1・2特殊作戦群、第1空挺軍が先程エジエイ基地に到着したとの事です」

「また、北部方面隊より第7機甲師団、東北方面隊より第17旅団、東部方面隊より第12機械化師団、中部方面隊より第13自動化師団、西部方面隊より第5騎兵師団、南部方面隊より南部即応機動師団の第17即応機動連隊、中央方面軍より中央方面飛行隊第301戦闘ヘリコプター隊がエジエイに駐留しております」

「海兵隊は、第1、2海兵遠征軍の両師団、第2海兵遠征旅団と第21海兵遠征部隊が出撃準備完了との報告です」

「うむ…作戦は？」

「それは赤城統合参謀長が説明します」

一歩後ろに居た自衛隊統合軍統合参謀長『赤城繁義』高級空将が近寄る。

「作戦概要をご説明させていただきます」

「作戦名は『旭日作戦』です」

「作戦の第一段階は、クワ・トイネの城塞都市『エジエイ』付近に展開する部隊の対処です」

「うん？まだ展開してないんだろ？なんでロウリアの作戦を知ってたんだ？」

「中央国家情報局の諜報活動においてです」

「あいつら仕事はえーな」

内閣直轄の情報機関中央^C国家情報局^Aは、旧世界^{地球}でもアメリカの中央情報局^Cやイギリスの秘密情報部^Mなどに肩を並べる機関であった。この世界でもその諜報力を大いに活用し、ロウリアへ潜入していた。

「エジエイ付近に展開する部隊は、A^{ガン}C^ン—130^{シツ}によって攻撃します」

「MARSによる攻撃も考えましたが、こ^{ガン}つち^{シツ}の方が安上がりで済みます」

日本は転移後の現在、クワ・トイネとクイラの2か国とでしか貿易をしていない。クワ・トイネへの輸出は確かに儲かるが、出来るだけ出費は抑えたい。

「その後、ギムに駐屯しているロウリア陸軍本隊には、F—15Eによる爆撃を想定しています」

「友邦国を爆撃するのは不味くないか？」

「クワ・トイネに確認した所、日本が再建を手伝ってくれれば良いと」

「そうか」

中世程度の家であつたら、政府開発援助^Dで陸自の施設団や国内の住宅メーカーと建築すれば良い。

「次に、反抗作戦に出ます」

「機動力に優れた第7機甲師団と第13自動化師団によってロウリア首都ジン・ハークまで電撃戦を加えます」

「途中の都市などは？」

「戦略爆撃隊によってロウリア軍基地だけ爆撃します。流星に民間人まで殺したらまずいです」

「ロウリアは人口資源が豊富なようなので、反乱が起きたら手に負えないです」

「これで作戦概要の説明を終わります」
「ありがとうございます」

そう言うと、防衛大臣が作戦許可証を机に置く。

「これにサインを」

「ああ」

側にあつた万年筆で、証明書の1番下の欄にサインする。

「許可を頂きましたので、今作戦は中央暦1639年／2019年8月20日に開始します」

「了解した」

防衛大臣が退室した後、総理はフウとため息をついた。



中央暦1639年8月16日――

《クワ・トイネ公国 日本国自衛隊ダイタル基地》

『旭日作戦』開始が決定されてから6日、航空自衛隊の無人偵察機『RQ-4』がクワ・トイネ公国の城塞都市『エジエイ』付近を偵察していた。

偵察目的は作戦時の地理情報入手の為であり、じっくりと偵察していた。その時、操作をするオペレーターがある事に気づく。

「人間？」

「隊長、人間を発見しました。エジエイより25 kmほど東です」

隊長と他のオペレーター達が続々と集まってくる。

「避難民か？」

「エルフだな…クワ・トイネ側にここら辺に逃げ遅れた村などが無いか確認しろ」
「はっ」

その後、クワ・トイネ側に確認すると、此処から比較的近距离に避難し遅れた村がある事を知り、クワ・トイネ公国派遣軍司令官兼第7師団長から第5騎兵師団第51空中機動連隊第1中隊に緊急出動命令が、付近を飛行していた中央方面飛行隊第301戦闘ヘリコプター隊第1飛行隊に偵察命令が出された。



同日――

《クワ・トイネ公国 ギムより東の地点》

「はあ、はあ、はあ」

「頑張れ！もう直ぐだぞー！」

耳が尖った形をしているエルフが草が生える平野を進む。

彼女らの村はある名も無き小さなエルフの村であり、外からの情報伝達が遅かった為に、避難が遅れていた。

ギムの方角より見えた黒煙から戦争が始まったと村の上層部が判断し、村人全員が避難を開始したが既にクワ・トイネ軍の姿は無く、ロウリアの勢力圏からの必死の逃亡が始まった。

新緑の色の腰の高さ程の草が生える草原、小鳥は囀り、野生の牛は美味しそうに草を食っている。

この光景は、素晴らしく戦時でなければ家族と出かけるのも良い場所であったろう。

だが平原は遮蔽物が少なく、逃げ場は無いに等しい。また、視界が良い為に見つけられやすい。

ロウリアの騎馬隊にでも見つかったら、僅かな男しか居ないこの避難民達は無様に殺されるであろう。

総員200名の避難民の中に、一人の男児がいた。彼の名前は『パルン』。幼い頃に母を病気で亡くし、父子家庭であった。

だが、父はロウリア侵攻の兆しのために軍の予備役に収集されたために、彼と妹の『アーシャ』のみの避難であった。

彼は、重い足を動かしながら目的地の『エジエイ』へ向かう。後25km程の東に行けば着くはずだ。喉が乾き、水筒に手を伸ばすも既に妹に与えて無い事に気づき、手を引つ込ませる。

「お兄ちゃん、疲れたよう。休もうよ」

「頑張れ、あの壁が見えるだろう。あれがエジエイだよ」

「本当だ！もうすぐだ!!頑張る！」

無邪気にエジエイを見るアーシャを見ながら、出征する前に聞いた父の言葉を思い出す。

『パルン、良いか。アーシャを頼んだぞ。お兄ちゃんなんだからな』

『わかった。僕がアーシャを守る！』

『ああ、良い子だ。ありがとう』

父は笑って、エジエイに行った。もしかしたらエジエイに居るかもしれない。パルンは、父に会えるかもと希望を膨らませた。

その時、後方の軍の招集から残った者から叫び声が聞こえる。

「ロウリアの騎馬隊だ!!」

「走れ——！逃げろお——!!」

後方を見ると、ロウリアの騎馬隊約100騎が接近してくるのが見えた。



同時刻——

《ロウリア王国クワ・トイネ征伐軍東部諸侯団所属ホーク騎士団第15騎馬隊》

——ホーク騎士団第15騎馬隊

その名を聞いただけでロデニウス大陸の者であれば恐れ慄く部隊である。

ホーク騎士団は、ロウリア王国東部諸侯団所属の中でも精鋭とされ、一騎当千の荒くれ者揃いと言われている。

元々はロウリア王国拡大期に軍に採用された山賊や海賊たちで、戦果により爵位を賜り貴族となった者達であった。

その中でも第15騎馬隊隊長『ジョーヴ・シラストン』は残忍な性格をしており、敵はおろか味方すら気分によって戦死に見せかけて殺す危険人物である。

先天性の病気で目の虹彩が赤い為、『赤目のジョーヴ』として悪名を広めていた。

「おい、見ろ。エルフの疎開民達だ」

「偵察だの地形把握だの面倒くさかったが…良い獲物が居んじやねーか」

「ギムは最高でしたぜ隊長。もつとご褒美をくだせえ」

「二ヒヒヒヒ…仕方ねえ奴らだなあ」

「さてと…狩るか」

「あの亜人どもを、皆殺しにするぞ！突撃!!」

「俺に続け！皆殺しだ!!」

「ひゃっは——!!!」

日本人が聞けばある世紀末漫画を思い浮かべる奇声を発しながら第15騎馬隊が前進する。

騎馬隊の襲撃に、エルフ達は大混乱に陥った。

「荷は捨てろ!! 街道を逸れて!」

「平原に散るんだ!!」

僅かに残った若い男達が避難を促す。パルンはアーシャと一緒に避難しようとしたが、アーシャが途中でつまづいてしまう。

「ごめんなさいお兄ちゃん。もう走れないよお」

「心配するなアーシャ。僕が守ってあげるからな」

パルンは近くにあった木の棒をロウリア騎馬隊の方へ向け、構える。

だが、所詮木だ。すぐ様にやられるであろう。

彼は、死を目前にしながら死ぬ前の母親によく聞かされた昔話を思い出していた。かつて魔王率いる軍がロデニウス大陸に侵攻した際、各種族は種族間連合と呼ばれる連合軍を組織し魔王軍に対抗するが、敗退を繰り返しエルフの聖地『神森』まで追い詰められた。

人類の未来を危うんだエルフの神は創造主である太陽神に祈りを捧げ、太陽神は願いを聞き入れて自らの使者をこの世界に降臨させたと言われる。

「(神様、神様！太陽の神様!!本当にいるのなら、今助けてください！)」

「(自分は生贄になっても良い。どうか：妹を助けたいのです)」

「(神様、僕たちを殺そうとしているロウリア軍の魔の手から、僕たちを救い出して下さい！)」

その瞬間、パルンに接近していたロウリア騎馬隊の一角が吹き飛んだ。馬は肉片と化し、鞍上の人物は灰すら残らなかった。

「なんだ!？」

同時に、騎馬隊の後ろからバラバラという音と強い風が襲った。

パルンの願いは果たされた。ロウリア側に最悪の形であり、クワ・トイネ側で最高な形で。



5分前――

《中央方面飛行隊第301戦闘ヘリコプター隊第1飛行隊》

中央方面飛行隊第301戦闘ヘリコプター隊第1飛行隊長兼1番機パイロットの『久保山渉』2等陸佐は、副操縦士兼機銃手ガンナーの『渡川俊樹』3等陸佐と共に愛機を操縦していた。

愛機は『AH-64E アパッチ・ガーディアン』。『AH-64D アパッチ・ロングボウ』と外見に大きな変化こそないが、新素材の活用で装甲防御力が15%向上し、耐久性と出力を向上したT700-GE-701Dエンジンの搭載や複合製メインローターの採用により機体性能も向上している。

また海上運用にも適合し着上陸阻止や離島防衛、揚陸作戦支援などにも使用可能になった。アビオニクスの面では、ワイドバンド通信機能の装備、電子機器のアップグレード、無人機制御能力、ロングボウ・レーダーの海洋目標モード追加と探知距離延伸、LINK16戦術でデータリンクやセンサー融合技術の導入などを行った最新型攻撃ヘリコプターだ。

第301戦闘ヘリコプター隊第1飛行隊のエンブレムは日本神話に登場する太陽神である天照大神をモチーフとしている。

「ウツヒョー！待ってろよエルフちゃん！俺が駆けつけるぞ！」

「いや、敵に襲われているわけでもありませんし、第一我々は周囲の警戒だけで着陸して保護するのは51空機連第51空中機動連隊の略ですよ」

「…FUCK！」

「ええ…（困惑）」

後部席でエルフに会えるとはしゃいで勝手に自滅したのが久保山2佐である。ただの巨乳エルフ好きの変態である。どこぞの総理と友達になれそうだ。

『ボイヤヤーよりジークフリートー！へ、どうぞ』

「此方ジークフリートー！。どうかしたか？」

『エルフの避難民の近くにロウリア軍の騎兵隊が確認できた。襲撃される可能性も高い。至急急行せよ』

「了解、ジークフリートー！よりジークフリートスコードロンSQへ。敵騎兵がエルフの疎開民を攻撃しようとしている。我々で対処するぞ！」

『『『了解』』』』

計12機のAH-64Eは、一斉にエルフ避難民の方角に向けて急行した。数分ほどすると、目標捕捉・指示照準装置TADSによって襲撃されるエルフ達が見えた。

「ちっ！間に合わなかったか！ハイドラでやる。
You have a control」

「了解、I have a control《操縦権を譲られた》」

ハイドラや対戦車ロケットガンナーは機銃手ではなくパイロットが撃つ。そのため久保山は渡川に操縦権を譲る。

「発射！」

胴体両測面のスタブウイングに設置された内側兵装パイロンに設置されたM261ロケット弾ポッドから、M151ハイドラ70ロケット弾が撃ち出される。

機関砲よりは遅く、それでいてワイバーンやヘリなんかよりはよっぽど早い速度でロケット弾は飛翔し、着弾するとM440着発信管が作動する。1kgの高性能爆

薬が爆発し、あたりに外殻の破片や仕込まれていた金属片をまき散らし周囲にいた騎

兵を殺傷する。

他の機も各自で攻撃し、地面は破壊の嵐に飲み込まれる。久保山の機もハイドラを全部撃ち切ってしまった。

「ハイドラ撃ち切り！30mmで攻撃しろ！」

「了解しました、You have a control」

「I have」

機体前部下部に設置されたM230 30mmチェンガンが、IHADSに映されたAN/ASQ-170目標補足・指示照準装置によって照準される。

「30mm発射！」

ドドドドという音と共に30mm機関砲弾が放たれる。現代の主力戦車も撃破可能な30mm砲弾は装甲化されていないロウリア騎兵をいとも簡単に屠る。

ホーク騎士団第15騎馬隊にとっての悪夢は始まったばかりであった。



同時刻――

《クワ・トイネ公国 ギムより東の地点》

大地が轟く。轟音が周りを支配し、パルンは咄嗟に目を瞑り、アーシヤを守る。目を開けると、悲惨な死体が目に入った。ロウリアの騎馬隊だ。

空を見ると、方舟に風車の羽根がぐるぐると回っているのが確認できた。空の方舟は自分達の方を一瞥すると、残っているロウリア騎兵隊に光の弾を浴びせる。

「逃げろ!!逃げろ!!」

「くそっ!なんだあれwグワっ!!」

あのロウリア騎兵隊が手を出せずに一方的に殺戮される光景。それを見て、避難民のエルフの一人がボソリと呟いた。

「――バケモノ……」

瞬間、空の方舟はパルンの前を通り過ぎる。その時、方舟の側面に書かれている紋章

を見た。白い旗に赤い丸。その旗はまるで――

「！太陽！！太陽のシンボルが書いてある！！太陽神の使いが本当に来てくれたんだ！！」



同時刻――

「はあ、はあ、はあ」

ホーク騎士団第15騎馬隊の一員である、『フローレス』は逃走していた。既に隊長のジョーブは戦死しており、混乱もあるために逃走は容易であった。

「クソ！クソ！クソ！」

彼は悪態を突きながら、騎馬隊を一瞬で崩壊させた奇妙な物体について考える。

「鋼鉄の天馬!? 何なんだあれは!？」

「人には抗えない絶対的な暴力!! 全てを叩きつける力!!」

「(誇りも! 名誉も! 全てを否定する!!)」

「(これは女神の蔑みなのか!? 人はなんて虚弱で! 無価値で! 無意味なのか!?)」

その時、ふと前方から風を感じ、前方を見る。前方の空にはあの鋼鉄の天馬が現れていた。

「ひっ! やめr」

瞬間、体が空中に浮遊し、そこで彼の意識はなくなった。ホーク騎士団第15騎馬隊は、陸上自衛隊中央方面飛行隊第301戦闘ヘリコプター隊第1飛行隊のAH-64Eによって全滅させられたのであった。



5分後——

《陸上自衛隊クワ・トイネ派遣軍第5騎兵師団第51空中機動連隊第1中隊》

第5騎兵師団第51空中機動連隊第1中隊は、2機の『CH-47JF』、5機の『U

H―2』と『UH―60JM』、そして護衛の『MH―6H』で構成される空中機動部隊である。

その隊長、『中村淳』3等陸佐は 89式小銃を持ちながら、CH―47JF内で副中隊長と話していた。

「第301戦闘ヘリコプター隊第1飛行隊から連絡、ロウリア騎兵は全員撃破との報告です」

「了解した。行くぞ」

CH―47JFが着陸し、後部のランプドアが開かれる。サングラスなどをつけた隊員達が降り、辺りを警戒する。

「第1・第2小隊は避難民の誘導、第3・4小隊はロウリア騎兵の死亡確認と負傷者の救助に回れ」

「了解」

一斉に隊員達が動き出し、避難民達はそれに怯えている。

「まあ…無理もないか」

異形の者達が敵対していた部隊を一瞬で壊滅させ、何かわからない物体で降りてきたのだから怯えるのは当然だ。中村は落ち着けさせるように拡声器を使って話しかける。

「お怪我がある方はいらっしやいませんか!？」

だが、エルフ達は更に恐慌する。エルフにとっては人間とは思えないほどの声で話しかけられるのだから当然だ。その時、1人の少年が中村の前に出てきた。

「助けてくれてありがとうございます。おじさん達は太陽神の使いですか?」

「(太陽神の使い? 我々の国章が白字に赤丸だから何か勘違いしているのか?)」

CH-47JFには取り付けられていないが、野戦用迷彩服の迷彩服二型には胸元と腕の2箇所日本国旗が縫い付けられている。

「まあ、子供の言うことだし乗っかった方が良いかな」

「ああ、そうだよ。君たちを助けるために遣わされたんだ」

「「「「!!!」」」」

場がどよめく。エルフ達はある伝承を思い浮かべていた。

「太陽神の御使いだと!?!」

「言われてみれば、空を飛ぶ舟、大地を焼く魔法」

「太陽の印…どれも伝承通りだ!」

「太陽神と緑の神の言い伝えは真であった」

突如平伏す避難民に自衛隊は面を喰らう。

「おいおいおい、不味いな。誤解させてしまったか?」

「まあ、誤解は帰還してから解くとして、まずはCH₄—4₇に乘坐しましょう」

「そうだな」

「さあ皆さん。彼方の乗り物に搭乗頂きたい」

「とんでもない！太陽神の御使い様の空を飛ぶ舟に乗るなど！」

「さあさあ」

「いえいえいえ」

「どうぞどうぞ」

「いやいやいや」

避難民との押し問答に、自衛隊員たちは時間を要する事となった。

第7話 黒い死神

中央暦1639年7月18日——

《クワ・トイネ公国 城塞都市『エジエイ』》

——城塞都市エジエイ。

来たるロウリア王国との全面戦争に備え、首都『クワ・トイネ』への街道上の途中に建設された都市である。

街そのものが25mもの高い城壁に守られており、それが突破された場合でも侵攻を防ぐ機構がそこかしこに存在する。また、平時から水源や食料を大量に確保しているため、長い籠城が可能である。

——また、守備部隊として約3万のクワ・トイネ公国陸軍西部方面師団

〔クワ・トイネ公国陸軍西部方面師団編成〕

○西部方面師団長：ノウ・キョーウ中将

○西部方面師団戦闘部隊

——西部方面第1歩兵旅団

——第1歩兵連隊

— 第1歩兵中隊

— 第2歩兵中隊

— 第3歩兵中隊

— 第4歩兵中隊

— 第5歩兵中隊

— 第2歩兵連隊

— 第4歩兵中隊

— 第5歩兵中隊

— 第6歩兵中隊

— 第4歩兵中隊

— 第5歩兵中隊

— 第3歩兵連隊

— 第6歩兵中隊

— 第7歩兵中隊

— 第8歩兵中隊

— 第9歩兵中隊

— 第10歩兵中隊

——第4步兵連隊

——第11步兵中隊

——第12步兵中隊

——第13步兵中隊

——第14步兵中隊

——第15步兵中隊

——第5步兵連隊

——第16步兵中隊

——第17步兵中隊

——第18步兵中隊

——第19步兵中隊

——第20步兵中隊

——西部方面第2步兵旅団

——第1步兵連隊

——第1步兵中隊

——第2步兵中隊

——第3步兵中隊

— 第4歩兵中隊

— 第5歩兵中隊

— 第2歩兵連隊

— 第4歩兵中隊

— 第5歩兵中隊

— 第6歩兵中隊

— 第4歩兵中隊

— 第5歩兵中隊

— 第3歩兵連隊

— 第6歩兵中隊

— 第7歩兵中隊

— 第8歩兵中隊

— 第9歩兵中隊

— 第10歩兵中隊

— 第4歩兵連隊

— 第11歩兵中隊

— 第12歩兵中隊

——第13步兵中隊

——第14步兵中隊

——第15步兵中隊

——第5步兵連隊

——第16步兵中隊

——第17步兵中隊

——第18步兵中隊

——第19步兵中隊

——第20步兵中隊

——西部方面第3步兵旅團

——第1步兵連隊

——第1步兵中隊

——第2步兵中隊

——第3步兵中隊

——第4步兵中隊

——第5步兵中隊

——第2步兵連隊

— 第4歩兵中隊

— 第5歩兵中隊

— 第6歩兵中隊

— 第4歩兵中隊

— 第5歩兵中隊

— 第3歩兵連隊

— 第6歩兵中隊

— 第7歩兵中隊

— 第8歩兵中隊

— 第9歩兵中隊

— 第10歩兵中隊

— 第4歩兵連隊

— 第11歩兵中隊

— 第12歩兵中隊

— 第13歩兵中隊

— 第14歩兵中隊

— 第15歩兵中隊

——第5步兵連隊

——第16步兵中隊

——第17步兵中隊

——第18步兵中隊

——第19步兵中隊

——第20步兵中隊

——西部方面第4步兵旅団

——第1步兵連隊

——第1步兵中隊

——第2步兵中隊

——第3步兵中隊

——第4步兵中隊

——第5步兵中隊

——第2步兵連隊

——第4步兵中隊

——第5步兵中隊

——第6步兵中隊

— 第4歩兵中隊

— 第5歩兵中隊

— 第3歩兵連隊

— 第6歩兵中隊

— 第7歩兵中隊

— 第8歩兵中隊

— 第9歩兵中隊

— 第10歩兵中隊

— 第4歩兵連隊

— 第11歩兵中隊

— 第12歩兵中隊

— 第13歩兵中隊

— 第14歩兵中隊

— 第15歩兵中隊

— 第5歩兵連隊

— 第16歩兵中隊

— 第17歩兵中隊

——第18步兵中隊

——第19步兵中隊

——第20步兵中隊

——西部方面第5步兵旅團

——第1步兵連隊

——第1步兵中隊

——第2步兵中隊

——第3步兵中隊

——第4步兵中隊

——第5步兵中隊

——第2步兵連隊

——第4步兵中隊

——第5步兵中隊

——第6步兵中隊

——第4步兵中隊

——第5步兵中隊

——第3步兵連隊

— 第6歩兵中隊

— 第7歩兵中隊

— 第8歩兵中隊

— 第9歩兵中隊

— 第10歩兵中隊

— 第4歩兵連隊

— 第11歩兵中隊

— 第12歩兵中隊

— 第13歩兵中隊

— 第14歩兵中隊

— 第15歩兵中隊

— 第5歩兵連隊

— 第16歩兵中隊

— 第17歩兵中隊

— 第18歩兵中隊

— 第19歩兵中隊

— 第20歩兵中隊

——西部方面第1弓兵旅団

——第1弓兵連隊 1000人

——第1弓兵中隊

——第2弓兵中隊

——第3弓兵中隊

——第4弓兵中隊

——第5弓兵中隊

——第2弓兵連隊

——第4弓兵中隊

——第5弓兵中隊

——第6弓兵中隊

——第4弓兵中隊

——第5弓兵中隊

——第3弓兵連隊

——第6弓兵中隊

——第7弓兵中隊

——第8弓兵中隊

——第9弓兵中隊

——第10弓兵中隊

——第4弓兵連隊

——第11弓兵中隊

——第12弓兵中隊

——第13弓兵中隊

——第14弓兵中隊

——第15弓兵中隊

——西部方面第2弓兵旅団

——第5弓兵連隊

——第1弓兵中隊

——第2弓兵中隊

——第3弓兵中隊

——第4弓兵中隊

——第5弓兵中隊

——第6弓兵連隊

——第6弓兵中隊

——第7弓兵中隊

——第8弓兵中隊

——第9弓兵中隊

——第10弓兵中隊

——第7弓兵連隊

——第11弓兵中隊

——第12弓兵中隊

——第13弓兵中隊

——第14弓兵中隊

——第15弓兵中隊

——西部方面騎兵旅団

——第1騎兵連隊

——第1騎兵中隊

——第2騎兵中隊

——第3騎兵中隊

——第4騎兵中隊

——第5騎兵中隊

— 第2騎兵連隊

— 第6騎兵中隊

— 第7騎兵中隊

— 第5騎兵中隊

— 第9騎兵中隊

— 第10騎兵中隊

— 第3騎兵連隊

— 第11騎兵中隊

— 第12騎兵中隊

— 第13騎兵中隊

— 第14騎兵中隊

— 第15騎兵中隊

— 西部方面竜騎士団

— 第32飛龍隊

— 第33飛龍隊

— 第34飛龍隊

— 第35飛龍隊

——第36飛龍隊

○西部方面後方支援隊

——西部方面後方支援師団

——第1後方支援連隊

——第1後方支援中隊

——第2後方支援中隊

——第3後方支援中隊

——第4後方支援中隊

——第5後方支援中隊

が駐屯している。

クワ・トイネ公国全体の兵力が予備を含めて5万であることを考えると、いかに重要な拠点である事が分かる。

この大部隊を指揮する『ノウ・キョーウ』公国陸軍中將は、ロウリア軍の十百万もを耐えられるほど堅牢なこの城塞都市を見て、感嘆とじていた。

「ふむ…実に豪勢な軍勢だ」

「この都市であれば、ロウリアなの軍勢など鎧袖一触で撃破できましょう」
「うむ。そうだな」

参謀長である『クワタ・タウエル』大佐の言葉に、ノウは同調する。その時、伝令兵が司令室に入室してくる。

「司令、日本国陸上自衛隊クワ・トイネ派遣軍司令官の方が対ロウリアでの対応を協議するためいらつしやいました」

「ふむ、少々待たせておけ」

「なっ！しかし、外交問題に発展する恐れも…」

「司令室の装束に手間がかかったと言っておけ」

「は、はっ…」

伝令兵が退室した後、クワタがノウに話しかける。

「良いのですか？」

「ああ、陸軍は海軍の様に舐められてはいかん」

「それに陸戦では数が勝敗に直結する。日本の軍勢は数が少ないだろう？我々の後詰めにしかならんよ」

「…そうですか」

少しした後、コンコンとドアがノックされる。

「どうぞ」

「失礼します」

そうすると、4人の緑のマダラ模様の服を着た男女が入ってくる。

「日本国陸上自衛隊クワ・トイネ派遣軍最高司令官兼第7機甲師団長『大内田 和樹』です」

「同じくクワ・トイネ派遣軍幕僚長兼第7機甲師団幕僚長『黒田 哲平』と言います」

「陸上自衛隊クワ・トイネ派遣軍所属第13自動化師団長『姫野 梓』です。よろしくお願いたします」

「第13自動化師団幕僚長を務めさせていただきます『佐藤 勇翔』、階級は1等陸佐です」

「クワ・トイネ公国陸軍西部方面師団長『ノウ・キョーウ』だ」

何という醜い服装。ノウが纏っている煌びやかな装飾のある服と違い、泥の様な色の服である。また、師団長という階級なのにも関わらず、女がいることが許せなかった。

「見ろ、何だあの見窄らしい服装は。それに女が師団長だと？そんなに人数が足りんのか」

「將軍、おやめください。聞こえてしますます」

「ほう？確かに私は女性ですが腕っ節は男性に負けないと思えますよ。上で踏ん返り返っている野郎よりは」

「何！」

ノウの言葉に苛立った姫野が反論し、ノウがそれに青筋を立てる。一触即発のこの状況。その時、大内田が仲裁に入る。

「すいませんノウ將軍。彼女は女とみくびられるのが一番嫌いでして…姫野、落ち着け」
「申し訳ありませんでした」

「…私もすまなかったな」

一旦和解した後、ノウが4人に話しかける。

「貴公らも武人であれば見るだけでわかるであろうが、このエジエイは公国最強の城塞都市である」

「我が南部方面師団の誇りに欠けてロウリア軍を殲滅させてみよう」

「援軍の派遣には感謝すが、貴公らは駐屯地から一步も出なくても良いぞ」

「ああ…まずいぞ言ってしまった」

「外交問題だぞ、どうする?」

クワ・トイネ側の部下が困る中、大内田は淡々とノウに話す。

「了解です。貴方がそう仰るのであれば後方支援に徹しましょう」

「ですが、我々も本国に状況を報告しなければいけないので観測要員と通信機材、それと

エジエイ上空の無人偵察機の飛行許可をお願いしたい」

「ふむ…観測要員と通信機材であれば良からう。で、無人偵察機とは？」

「ああ…鉄竜ですね」

「良いだろう。好きにせよ」



15分後――

《クワ・トイネ公国 日本国自衛隊ダイタル統合基地》

クワ・トイネと交渉して使用できる事となったダイタル統合基地。陸上自衛隊・航空自衛隊・海兵隊が使用するこの大規模基地の司令室で、第13自動化師団長である姫野陸将は、怒りを露にしていた。

「ああ…!!大内田さん!聞きましたかあのおっさん!自分達が殲滅するからこちらは後方で籠もってろって!」

「中世の騎士3万程度で勝てるかって話なんですよバーカ!!」

大暴れする姫野を他所に、大内田は淡々と答える。

「まあ：我々は援軍であるのだから相手から要請が来ない限りはここで待機だ」
 「演習でもして時間を潰そう」

そう大内田は言うのと、近くに控えていた航空自衛隊の参謀に話しかける。

「敵軍は現在何処ら辺に？」

「はっ、主力現在はギム郊外に駐屯しています。ですが本隊から分離した約2万の軍勢がエジエイ付近に展開し始めています」

「恐らく明日にはエジエイ周辺に到着するかと」

「ふむ：一旦は待機。要請があつたらガンシップで攻撃しよう」

「二応バックアップの為に第1特科師団にMLRS多連装ロケットシステムとHMLRS高機動ロケットシステムの展開を命令して

くれ」

「はっ！」



翌日――

《クワ・トイネ公国 城塞都市エジエイ近郊》

「ノウ將軍、敵兵2万がエジエイ西5kmの地点に野営地点を築いております」
「2万か…少ないな。恐らく本隊と合流するであろう」

第8話 第4世代戦闘機 V S. ワイバーン

中央暦1639年8月30日 19:00

クワ・トイネ派遣軍基地 作戦本部簡易テント内――

「これより、ロウリアの首都ジン・ハークで実施予定のロウリア王捕獲作戦の会議を開催します」

「ロウリア王の捕獲についてですが、国民への大義名分が必要なのでロウリア王に殺人罪を適用し逮捕します」

「そのため、最後は警察官が逮捕行為を担当するので、ヘリによる降下には警視庁のSATも参加します」

「最初にSAT隊長の青木さん、ご挨拶をお願いします」

青木と紹介された警察官が敬礼し、立ち上がる。

「初めまして、警視庁警備部警備課第1課の特殊強襲部隊小隊長の青木と申します」

「本作戦で陸上自衛隊の方々のへりに同乗させて頂くことになりました、よろしくお願
いします」

青木が頭を下げると、参加者も返礼する。

「ロウリア王国の王、ハーク・ロウリア34世には外国人を多数殺害した罪で逮捕状が出
ています」

「今回は戦場なので、検察官では不可能。また通常の警察官では捜査の目的を達成する
ことが難しいと判断されたため、我々特殊急襲部隊が派遣されることになりました」

挨拶が終わり、青木が下がる。

テントの電気が消され、プロジェクトからスクリーンに映像が映し出される。

「今回の目標は、ロウリア王の身柄を拘束する事にあります。よって、ロウリア王の身柄
を確保次第、すぐに急襲部隊は撤退しなければなりません」

「長期戦になるからな」

長期戦になるとクイラ王国に攻め込まれ資源の確保が困難になる。

また、中央国家情報庁と防衛省の国家情報安全保障局によってロウリアの背景に列強、パーパルディア王国が関与しているとの情報があり、

パーパルディアの兵力は大したことはないが、属国を多数従えており、数で来られると防衛が厳しくなる。

そのため政府は一気にロウリア王国を滅亡させようとしていた。

「当初、ヘリボン作戦のみで王城を奇襲し、ロウリア王の身柄を確保して指揮系統が崩壊したところで機甲部隊による殲滅を行う作戦が挙げられましたが、時間が経つにつれて王城内に大量の兵士が雪崩れ込み、王の発見に時間が掛かった場合、脱出が困難になることはもちろん、最悪隊員の生死に関わると指摘されました」

「そこで、空自戦略爆撃隊、海自空母打撃群による爆撃によってロウリア軍を分断し、第7機甲師団、第42師団を突入させる作戦を採用しました」

「まず、海上自衛隊第4空母打撃群艦載機による空襲及び第1艦隊第3護衛隊群第32護衛隊に所属する戦艦『とさ』による艦砲射撃によってジン・ハーク北側の港に大量に停泊している木造艦船を破壊し、海上作戦能力を奪います」

「次に、空自のB-52H、B-1B、B-2、B/P-1による戦略爆撃を各諸侯の拠

点、オウラ、スフール、メアリ、アエゴジス、ヴァクーに実施します」

「各諸侯の王への忠誠心は低いようですが、戦後処理時に戦力を見せつけて内戦を無くしたいので」

「政府はアメリカとかに統治させたいらしいな」

転移時、各国大使館は母国がなくなつたとわかつた瞬間外務省に駆け込み、それなりの対価と引き換えに異世界でも国土を持ちたいと要求してきた。

「特にイギリスが強く要望したと…。」

「「あつ（察し）」」

特にイギリスは相手の文明力がわからない時は日本国に賠償金を求めたが、一転異世界の文明力が中世レベルだと分かると『一緒に転移したイギリス軍、自衛隊に編入してもいいから国土と利益頂戴』と言つてきた。

（勿論、日本政府は今までの地球の歴史を知っていたため、お前自国の歴史見て言ってるの？丁寧にお断りした。

「えゝ再開します。空爆完了後、陸上自衛隊第7機甲師団、第42師団は国境から王都ま

で進軍し、一気に王都前の大平原に一夜で展開、王都からの目視範囲に部隊を配置します」

「これにより王都内の兵力を陸自に釘付けさせ、兵の注意を引きます」

「この時、適時攻撃を加えて適度な損害緊張を与え、ヘリボーン部隊が行われる寸前に強めの攻撃を加え、王都本格侵攻であると誤認させます」

「また、王都防衛用のワイバーン約150体への対処ですが、王都は海から約43km離れているのでSM-2により、エアカバーを行います」

「戦闘機は出さないのか？」

「はい。検討したのですが、戦闘機を出すと空に注意を向けられ、ヘリボーンも失敗する確率が低くなるため、中止されました」

「ロウリア王国軍の注意が揺動部隊に向いたら、王城の広間にヘリボーンを実施し、陸自衛隊特殊作戦軍団第1特殊作戦部隊零作戦分遣隊とSATを降下させます」

「この時、衛兵と戦闘になると思いますので排除し、非戦闘員はゼロフォースが持っているレーザーガンで拘束します」

「その後、おそらく王の間奥の緊急控室にいる王の身柄を拘束、全部隊撤収します」

「城壁外に展開した兵が戻る前に王をへりに収容させる必要があるため降下後およそ15分以内に身柄確保、できない場合は作戦失敗とみなし一度撤退します」

「何か質問がある方は？」

若手幹部が手を挙げる。

「同見取り図に関してですが、信頼できる物なのででしょうか？入手経路を教えてください」

「王城の図面は中央国家情報庁のスパイによるものです。黒塗りの部分はスパイが入れなかった場所です」

「確認します。全隊落下傘を使用して王城に降下するのですか？」

「いえ、落下傘を使用しての降下は目立つ上に狙い打ちされるリスクも高いのでヘリボーンになります」

「王城突入時刻は昼に遂行する予定でしょうか？」

「いえ。第7機甲師団、第41自動化師団が朝から敵の注意を引き、薄暮期にある程度攻撃を強めていただきます」

「なので降下する際は夜間です。各部隊GPNVG—18夜間暗視装置を付けていただきます」



中央暦1639年8月31日

ロウリア王国 王都ジン・ハークより北北東の海上約180kmの地点

第3空母打撃群『あまぎ』——

海上自衛隊第1艦隊第3護衛隊群第3空母打撃群は護衛の第32護衛隊を率いてジン・ハーク北側港を空襲しようと準備していた。

「異世界初の任務だ！スコアを上げるチャンスだぞ！」

「そうですね！俺たちに喧嘩売ったこと地獄で後悔さしてやりましょう」

飛行甲板上では第3空母航空団第302攻撃飛行隊第1飛行隊の阿部直樹3等空佐と中村大樹2等空尉のペアが軽口を叩いていた。

「やあ、林ペア。機体の調子は絶好調だよ」

「ありがとう、不調がないように頼むよ」

阿部3等空佐と中村2等空尉のペアは二人とも樹（木）が入っているため木と木で林ペアと呼ばれていた。

「ロウリアには最悪の日になりますね」

「そうだな！よし、発艦だ！」

二人はヘルメットを被り、F/A-18FJに乗り込む。

「風防を閉めてくれ」

「了解、閉めます」

中村2等空尉が風防を閉める。

『ランサー4-6、2番目に離陸しろ』

『ランサー4-6、了解。2番目に発艦する』

『では、ブレーキ、フラップ、スロットの確認を行え』

『聞こえたか、中村？左翼のフラップとスラットだ』

「よし、問題ありません」

「了解、右翼は？」

「こちら問題無しです」

どうやら整備員の言っていた絶好調の言葉は間違いでは無かったようだ。

「兵装システムを起動。HMDバイザーを起動しろ」

「起動よし！」

「グリーンライト確認、機関砲に切り替えろ」

「機関砲スピンアップ」

「いいぞ、次はミサイルだ」

「ミサイルシステムのトラッキングよし」

「武装とフレアのチェック、よし、兵装及びカウンターメジャー異常なし」

「ラダー、フラップ、スラット、計器全て異常無し、其方の準備はいいか？」

「問題無し、いつでも行けます」

「行くぞ」

「やってやりましょう」

「いやー、マジであのシーンは感動しました」

『それな、あの場面は作画最高だったわ』

『今回の作戦終わったら見に行こうかな?』

「やはり u f O t a b l e は最高だな…あと30秒で目標視認圏内」

「レーダーに機影無し、迎撃ありません」

「奇襲成功。こちらランサー4-6隊よりランサー4-1へ、攻撃準備よしいつでも行ける」

『こちらランサー4-1了解、攻撃始め』

「こちらランサー4-6、攻撃開始」

「了解、安全装置解除」

「投下、drop, now今」

F/A-18FJからMk. 83爆弾10発が投下された。

『あまぎ』から発艦した第3空母航空団第302攻撃飛行隊はMk. 83爆弾60発を投下した。





同時刻

ロウリア王国 王都ジン・ハーク 北側港

海将ホエイルは、港を眺める。

200隻の軍船が並ぶ姿は、常々艦隊を指揮している彼の目から見てもため息が出るほど壮観だった。

「(しかし…)」

彼はロデニウス沖海戦のことを思い出す。

「(あれは海戦ではない、たった1隻による殺戮だった…)」

自分達の攻撃が全く届かない距離から、とてつもなく巨大な1隻によつて撃破される屈辱。

まるで鍛えられた大人と生まれたばかりの赤子が戦ったのような、あまりに無残な戦いだった。

海戦によつて彼と上司、シャークンが戦死したため（実際は海自に救出され生きている）権利移譲となつて新海将になつたホエイルは、200隻の軍船と7万人余りという巨大な力にも関わらず、どう展開しようとしても日本国と戦つて勝てる気がしなかつた。

「どうすればあの化け物に勝てる？」

彼は思考を巡らす。

そんな中、ふと頭が冴えたホエイルは、足元の水面から頭を上げた、嫌な予感がするーいや、嫌な予感しかしない。

「なんだ？」

その時、上空から風切り音が近づいてきた。部下たちも気づいている様で何か確認させようとした時、

港に並んでいた軍船数隻が突然木片を散らして木つ端微塵になり、猛烈な音と閃光を散らして爆発、炎上する。

たった1度の爆発で軍船数隻が使用不能になる威力があるというのに、その爆発は続け様に港中を襲う。

「一体何が起こっている!!」

ホエイルは溜まらず叫んだ。

F/A—18 F J 攻撃機から投下された60発のMk. 83爆弾は軍船に的確に着弾し、次々に破壊を生む。

ある者は肩に拳大の木片が突き刺さり、その余の激痛に呻き声を上げる。

「ぐああああ…痛え、肩がいてえよおおお…」

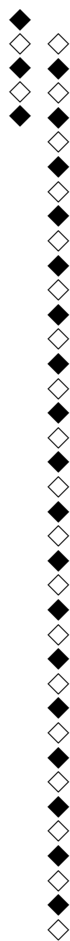
「逃げろお!!」

ある者は続発する被害に狼狽する。

「ににに、日本が攻めてきたのかあ!!!」

次の瞬間、高空を何かが猛烈な速度で通過したのが見えた。

襲撃を知らせる鐘が鳴り響き、水夫たちが無事な船や設備を守るべく、慌ただしく動き回る。



10分後――

F/A―18FJから遅れること30分、『あまぎ』から発艦した第3空母航空団第301戦闘飛行隊第1中隊F―14E12機は、ロウリア王国王都上空に向かって飛行していた。

彼等の目標は、ロウリア海軍の港を攻撃したことでおそらく出撃してくるであろう迎撃機を排除し、ロウリア王国上空の制空権を確保すること、並びに敵戦闘機を撃滅することである。

各機の下部には中距離用の9^A9^A式空^M対空誘導⁴弾と9^A0^A式空^M対空誘導³弾が4発ずつ、計8発装備されている。

F―14Eの編隊は、既にロウリア王国上空とその少しだけ先の港上空に展開する多数の敵航空機を探知していた。

パイロット達は、各々の経験に基づき、迅速的確な攻撃準備を行う。

「敵戦闘機コンタクト、 $F O X | 4$ 射程圏内」

「攻撃目標、敵迎撃機」

「攻撃開始、攻撃開始」

「 $F O X | 3$ ！」

12機のF-14Eに装備されたミサイルに固体燃料に火が灯る。

射程100km以上という99式空対空誘導弾は、胴体下から分離後、マッハ4以上の速度で空を駆ける。

ロウリア王国上空を飛行中のワイバーン達を撃滅するため、轟音と共に飛び去って行った。



4分後

ロウリア王国 王都ジン・ハーク上空

第2、第3竜騎士団は王都上空を警戒するため、巡回していた。

100騎ものワイバーン達の姿は壯観で、王都の民たちは雄姿を一目見ようと町に溢れていた。

ロウリア王国新人竜騎士『ターナケイン』も、先輩達に混じって王都上空の警戒に当たっていた。

「ん？」

一瞬何かが見えた様な気がした。視線を動かした直後、右前を飛行していた先輩のワイバーンが消し飛んだ。

飛竜と人だった者はバラバラとなり、重力に従って墜落してゆく。

「なっ！」

ターナケインは驚愕の声を上げる。驚きはそれだけでは終わらなかった。

「お……お……」

突然、彼の乗るワイバーンが急降下を開始したのである。

「おい!!おい!!勝手に動くな!」

「くっ…!!空の王者ともあろうお前が怯えているのか!」

ターナケインの叱咤もお構いなしに、王都外周にある三重防壁の影に転がりながら無様に着地した。

「グエツ!!」

命綱が千切れたターナケインも、飛竜から落ちて地面を転がる。

口や目に砂埃が入った。

「痛たた…ち、畜生!相棒!、何を勝手に…」

相棒に詰め寄るが、相棒のワイバーンは上空を見ながらカタカタと震えていた。

ターナケインも上空を見上げると、凄惨な光景が目に入る。

「な………何っ!!」

彼等の目線の先には、何らかの攻撃により次々と爆散する仲間達の姿があった。

100騎いたワイバーンはその数を一気に減らし、既に残り3騎になっていた。

爆発、炸裂、そして血と肉の飛散。明らかな異常事態が上空で繰り広げられ、不気味な断末魔の叫びが王都ジン・ハークに木霊する。

王都に住まう人々は、一瞬何が起こったのかさっぱり分からず、誰しもが我が目を疑っていた。

炸裂音が響いた瞬間、見上げていた上空から、赤黒い雨が降り注ぐ。

「うわああああ!!何だ!!何が起こっている!!」

「いやああああ!!」

血をまともに浴びて狼狽する商人達、凄惨な光景に耐えられず、金切り声を上げる女性。

王都全体が大混乱となり、防衛騎士団か。異変を察知するまで、そう時間は掛からなかった。



3分後

第3空母航空団第301戦闘飛行隊第1中隊——

「全96発のAAM—4、AAM—3の命中を確認、残存機3機」

「3機？残りはどうなった？」

「ミサイルが2機まとめて葬ったか、動揺して墜落したのでは？AWACSがないのでよくわかりませんが」

「残り3機か：第2、3分隊！降下してバルカンで仕留めろ！しくじるなよ！」

「了解！残存機の撃墜任務、任せました！」

第2、3分隊は太陽を背に急降下し、HMDバイザーを敵に合わせる。

そうすると敵の未来進路が表され、照準を合わせやすくなる。

「くたばれ！FOX—4！」

4機のF—14E搭載のM61バルカンから20mm弾が発射され、残ったワイバーン3機を撃墜した。

また、同時刻頃、日本国海上自衛隊第1艦隊第3護衛隊群第32護衛隊に所属する戦艦『とさ』の46cm3連装砲4基12門による艦砲射撃により、ロウリア王国の港湾施設は灰燼に化した。

こうしてロウリア王国海軍は完全に消滅した。

第9話 成層圏の要塞

中央暦1639年8月31日 午前12時——

ダイタル高原 クワ・トイネ派遣軍基地 ダイタル飛行場

「こちらオウラ特急便1号、ダイタルグラウンドへ。滑走路への進入の許可をリクエストする」

『こちらダイタルグラウンド 滑走路21Rへの進入を許可する、進入後滑走路で停止せよ』

「了解、オウラ特急便1号、滑走路への進入を開始する」

ダークグレー色のB—52Hの巨体がゆっくりと誘導路から滑走路へと進入する。

そしてその後ろにもB—2、BP—1、B—1Bが列を成している。

最初の一機が滑走路の端に到達し完全に停止した。

「こちらオウラ特急便1号、滑走路上で停止した。離陸許可をリクエストする」

『こちらダイタルグラウンド、Cleared for Takeoff、離陸を許可する』

「ラジャー、これより離陸を開始する」

機長がコックピットの中心にあるエンジンスロットに手を掛け、少しずつ100%に上げてゆく。

スロットルを上げるとエンジンの唸る音が大きくなり機体が軋む音がする。

「Eighty!」

「Check!」

「V1!」

副操縦士が速度を読み上げていく。

それに比例して窓の外の景色が速く流れていく。

「VR!」

「ローテート」

機首引き起こし速度に到達し、操縦桿を引いて機体を空に向ける。
B-52Hの巨体が陸から離れ浮き上がる。

「V2!」

「Positive!」

「Gear up!」

副操縦士がランディングギアのスイッチを下げると、ランディングギアを格納する音がコックピットの下から聞こえ格納されたことがわかる。

『こちらダイタルグラウンド、無線周波数をクワ・トイネ管制に変更せよ』

「ラジャー、こちらオウラ特急便1号、周波数をクワ・トイネ管制に変更します。こちらオウラ特急便1号、クワ・トイネ管制へ」

『こちらクワ・トイネ管制、オウラ特急便1号へ 高度6000フィートまで上昇、方位268に機首を向けよ』

「オウラ特急便 了解」

『その後ポイントαにて高度12000フィートまで上昇しオウラ特急便 2、3、4、5、6、7、8号、護衛機のラプターオウラ急行便1、2、3、4、5、6、7、8号と合流せよ』

「こちらオウラ特急便1号、了解」

『こちらクワ・トイネ管制、当該空域には現在、貴隊を除き航空機は皆無である。ポイントα通過以後、任意のルートで飛行せよ。貴隊の作戦成功を祈る。幸運を。』

「こちらオウラ特急便、了解。誘導感謝する。オーバー」

オウラ特急便1号以下 護衛機のF-22Jを含めた16機はロウリア王国中部有力諸侯本部、オウラに向かって飛行して行った。



1時間後——

「機長、そろそろ沖の駆逐艦が敵航空戦力に向け、巡行ミサイルを発射する時刻です」

「そうか、そろそろ高度を落とすぞ。高度12000フィートから6000フィートま

で下降」

「了解」

「こちらオウラ特急便1号より攻撃チーム各機へ、衛星写真で敵は長方形に密集して野営地を気づいていることが判明。特急便2、3、4、5、6、7、8号は我に続き一列に編隊を組め。護衛機の急行便は先行して巡行ミサイルの爆撃判定と露払いを頼む」

『ラジャー、急行便1号、2号は先行してBDAと生き残りのワイバーンの始末を行う』
投下予定地点まであと10分となった。

「レーダーに感多数、トマホークが本機直下を通過します」

レーダーナビゲーターが淡々と報告する。

洋上のふぶき型駆逐艦群が地上で翼を休めている竜騎兵团たちに向かって放った物だ。

「こちら、オウラ特急便1号、巡行ミサイルの通過を確認、着弾まで30秒」

コックピットの中は緊張が張り詰めた。

レーダーナビゲーターが巡行ミサイルの着弾のカウントを始める。

「トマホーク着弾まで、5、4、3、2、1 今っ！」

それまで暗闇だった地平線の先に幾つもの閃光が現れた。

「Nice shot！」

「こちらオウラ特急便1号、現在目標地点上空を飛行中。巡行ミサイル全弾の着弾を確認。BDA良好、BDA良好。敵航空戦力全滅判定。敵航空戦力に動き無し完全に沈黙！」

トマホークによる敵航空戦力の殲滅は成功した。次は戦略爆撃機による通常戦力の殲滅である。

「こちらオウラ特急便1号、敵航空戦力の殲滅は成功し、制空権を確保した。予定通り、投下を開始する。各機準備に入れ」

「投下用意、爆弾倉開け」

胴体中央にある爆弾倉が低い機械音を響かせながらゆっくりと開いていく。

「爆撃管制システムスタート！」

「進入コースよし」

着々と機内では投下の準備が行われている。

「投下1分前」

「目標コンタクト！」

「管制システムオールグリーン」

「投下カウント、秒刻みに入ります」

「30、29……5、4、3、2、1 投下開始」

ガコンッ

まずはパイロンに搭載された18発のMk82通常爆弾が次々と投下されていく。

幾つもの不気味な風切り音を立てながら、地上でトマホークの攻撃で混乱の真つ只中の軍団に向かって無慈悲に振り注ぐ。

そして、1発が着弾する度に半径400メートルの範囲に熱と爆風の絶対的な暴力を撒き散らす。

それが連続して幾つも起こる。後続の機も同様に投下しているため無数の閃光が地上に確認できる。

「続いて、胴内ドラムマガジン投下開始」

胴体内に納められた27発が縦一列に小刻みに投下される。

再び、幾つもの風切り音を立てながら殺到する。

そして、後続のB-52Hも同様に通常爆弾をばら撒く。

当たり一面の地形を変える程の圧倒的威力の絨毯爆撃である。

もちろん野営を張っていた諸侯の20万名は上陸戦同様密集していたため効率よく刈られていく。地上では阿鼻叫喚の光景が再び作り出された。

一方、上空のB-52Hのコックピットに彼らの恐怖に慄く表情も絶叫する声も届かない。

ただ、白と黒のモノトーンで彼らが吹き飛ばされるのが映し出されるだけだ。

遮るものが全くない平野、死んだ者は自分が死んだ事も自覚せずに逝き、生き残った者の多くが手足を吹き飛ばされたりしていた。

ものの数分で、20万もの威容を誇っていた諸侯は消し飛ばされ、地上から姿を消した。

「全弾投下完了。BDA良好。敵地上主力部隊 壊滅判定」

「HQ、HQ こちらオウラ特急便1号ミッションコンプリート。敵地上主力部隊の壊滅を確認。こちら被害無し」

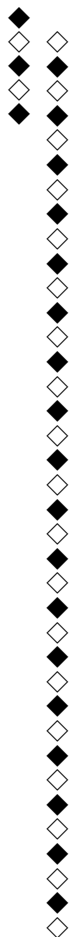
『こちらダイタル基地統合戦司令部 ミッションコンプリートを確認 ご苦労。基地へ帰投せよ』

「ラジャー、オウラ特急便RTB！基地へ帰投する」

B-52HとF-22Jの編隊は機体を傾け何事も無かったかのように、元の巣へと戻っていった。

また、スフール、メアリ、アエゴジス、ヴァークーの各諸侯本部にも同じような爆撃がなされ、ロウリア諸侯軍は自分が戦う軍も見ず壊滅した。

護衛についていた戦闘機からピラが撒かれ、日本国の仕業だと知った生き残った諸侯は日本国と戦わないことを決めた。



中央暦1639年8月31日 午前2時

ロウリア王国 王都ジン・ハーク王城 軍部緊急会議——

「先日の竜騎士団の壊滅に加え、各諸侯が壊滅するとは一体どういふことだ！」

王都防衛騎士団将軍。パタジンは吠える。

「返す言葉も御座いません…」

竜騎士団大隊長は、力無く項垂れる。

「日本国が参戦してから、敗退に敗退を繰り返している！このままでは、奴らはやがて王

都まで来るぞー！」

「航空戦力を全く持たずに、空からあれほどの攻撃をできる相手に一体どうやって戦うのだ！」

緊急会議の場を沈黙が満たす。作戦最高指揮官の怒りに応えられる者はいない。

「日本国に關してですが……」

時間だけが無駄に過ぎていくのは避けなければと、若手の幹部が話し始めた。

「未だ陸軍を見たものがおりませぬ、空からの猛烈な攻撃、そして海の魔神が如き巨船。これらを見た者はおりますが、未だ陸軍は確認していません」

「王都に来る前に南東の工業都市ビーズルを必ず落とすに來るでしょう。そこで日本国陸軍の強さを図り、王都防衛に役立てるしかありません」

「陸軍が弱ければ、付け入る隙もあるかと」

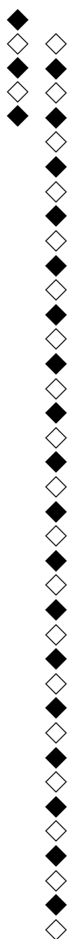
空からの攻撃のみでは、決して王都は落ちない。

街を陥落させるには、必ず陸の兵士による力が必要である。

若手幹部はビーズルに自ら足を運び、日本軍の弱点を見出すことを決意した。

いくらか意見が出て頭を冷やしたパタジンは、ひとまず継戦を宣言する。

ロウリア王国王都ジン・ハーク東側の工業都市ビーズルにおいて日本国陸軍を迎え撃ち、そこで陸軍の強さを図り、王都防衛に役立てるといふ事だけは結論に至った。



中央暦1639年9月1日

ロウリア王国 王都ジン・ハーク 早朝――

ロウリア王国王都防衛騎士団の管轄である城壁監視塔は現在、24時間体制で監視員を増員中だ。

監視員マルパネウスは交替の時間が来たため、仮眠室を出て王都の最も外側にある城壁の、北側にある塔に向かっていた。

「あゝ眠いな」

東の地平線が白み始め、建物が濃い影を作る時間。鳥が起きるにはまだ早い。

周囲を見渡すと、丘にある街並みは見えるが、平地に近い城壁の部分は白い霧に包まれている。

「今日は視界が悪いな」

監視する身としては、霧の発生は視界が遮られていて最悪である。

マルパネウスは少し嫌な予感がした。

「おっと…交代が近いな、早く行かないと。先輩に怒られる」

彼は小走りで塔の上に急ぐ。

塔の上について先輩と交代すると、平原をぐるりと見渡した。

監視員は目の良い者から採用されるため、視力には自信がある。

特に東側と北側は敵部隊の接近が予想されるため、マルパネウスも気が抜けない。

「…ん？」

一瞬だけ見えた緑色の何か。平原の色に混じって見えづらいが、確かなんらかの違和を感じた彼は、その方向に意識を集中する。

距離は4 kmくらい離れているだろうか。異形の何かが視界に出現した。

角張った体を持ち、角を生やしているものや、馬のいない荷馬車のような物が多数、王都の方向を向いて整然と並ぶ。

「ま……まさかー！まさかー！」

クワ・トイネ公国に攻め込んだ東部諸侯団の敗北。そして先日は港と王都上空、有力諸侯本部を襲い、海軍と王都防衛竜騎士団と諸侯に甚大な被害を与えた、正体不明の存在が彼の脳裏に浮かぶ。

マルパネウスは魔信のスイッチを力一杯に押し込み、送話口に向かって吠える。

『第17監視塔より王都防衛本部！北側第1城壁から約4 km地点の平野部に、正体不明の物体を多数確認！繰り返し返す——』

報告を受けた王都防衛本部の通信使は報告を受け、眠い頭が一斉に冴え渡る。通信使は仮眠中の当直指令を叩き起こし、兵舎全体に出動準備指令をかけた。



同時刻——

陸上自衛隊第7機甲師団と中央方面軍第42自動化師団は特科連隊を除き、ロウリア王国北側城壁から約4 kmの位置に展開していた。

「揺動作戦で敵から見える位置まで近づく必要があるとはいえ、距離4 kmはやはり近過ぎてストレスが溜まるな」

「はい。イラクの感覚からすると、近過ぎて距離が耐えませんか」

「迫撃砲なら余裕で届いてしまうからな……ところでこちらに完全に注意を引き付けるとしたら、あそこの塔を破壊するか」

「石材の強度が不明です、射線軸からして戦車砲で今この角度で撃つと、撃ち抜いた挙句城壁を破壊して市街地に被害を与える可能性があります」

「市民の反発を招いて75年前の爺さんやイラクの時みたいなことをするのは勘弁だぞ」

…

「なので特科の榴弾砲を使い、塔だけをピンポイントで撃ち抜くことは可能です」
 「そうするか」

「司令部より連絡、城壁から出た塔を攻撃してほしいと」

「了解、撃ち方用意」

特科連隊長は一台の99式自走155mm榴弾砲に指示を出す。

「初めっ!!」

ビルを一撃で粉碎する52口径155mm榴弾砲が火を吹いた。



同時刻——

99式自走155mm榴弾砲が放った弾は第17監視塔を直撃、マルパネウスは絶命

した。

砲撃着弾の轟音は王都全域に響き渡り、王都に住まう者たちは、命の危機を感じて飛び起きた。

緊急事態を知らせる鐘が遅れて鳴り響き、町中に人々が溢れ、瞬く間に喧騒に包まれる。

「何だ！何が起こっている！」

王都防衛騎士団将軍パタジンは爆発音を聞くなり一瞬で覚醒し、寝巻き着のまま廊下に飛び出した。

マルパネウスの報告はまだ彼に伝わってなかった。

就寝している将軍、副将軍を起こしてまで報告する事態か、大隊長以下が判断しかねていたためである。

何も情報が見られていないパタジンは、音のした方向の北側廊下へ走り、バルコニーからその光景を見て愕然とする。

「なっ！」

最も外側に位置する城壁の一部から煙が上がっていた。

「王都奇襲だと！馬鹿な！ビーズルを無視してきたというのか！」

実際は陸上自衛隊特殊作戦軍団第1特殊作戦部隊がビーズルを奇襲していたのだが、彼にそれを知る術はない。

防衛騎士団が戦闘体制に入ったことを告げる鐘の音が王城まで届く。

パタジンは急いで軍服に身を包み、王より授かった黄金の鎧を身に纏って、彼は準備を整える。

そのまま彼は緊急時の作戦室へ向かった。

第10話 オペレーション・ホールインワン

中央暦 1639年9月1日

ロウリア王国 王都 ジン・ハーク緊急時作戦室――

パタジンが作戦室に駆け込むと部下が状況を説明していた。

「將軍、敵襲です！正門の塔が魔導攻撃で破壊されました。敵は正門から4キロ地点に待機しています！」

「直ちに騎兵隊を迎撃に出せ！」

「それが、先程の攻撃直後から各部隊の魔信機の機能が麻痺してしまい、命令伝達が上手くいかないのです」

空自のEC-3電子戦機がジン・ハーク上空で電波妨害をしており、その中にはクワ・トイネから入手した魔信を使った妨害装置もあった。

「何だと！原因は？」

「分かりませんが、敵が攻撃してきたと同時に起きたので偶然では無いかと。おそらく何らかの方法を使って魔信が無力化されたものかと」

「ならば伝令を出せ！騎兵隊には敵の攻撃方法と力を探ったら直ぐに下がるよう伝えよ！」

「はっ！」

パタジンの命令は伝令兵によって直ちに騎兵隊に伝達され、約400騎の騎兵隊が正門より偵察を兼ねた迎撃戦闘に出た。



同時刻

10式戦車B型車内——

第7機甲師団第75戦車連隊第3中隊に属する鈴木の愛車と愉快な仲間たちは左翼に展開していた。

「あくあ、暇だな。マウスみたいのが出てきてくれねえかなあ」

車長を務める鈴木はモニターを見ながら言った。

モニターには王都の映像が流れているが、ここんところ一才変化が見られなかった。

「仕方ないですよ、中世が相手なんだから。もしかしたら僕たちが戦うのは投石機かワ
イバーンですよ」

砲手の中村がそれに応える。

「まあ、仕事が多いのは俺ですかね」

「俺と変われよ、俺ずっと操縦してるんだぜ」

「やなことだ」

10式戦車B型独自のRWS手兼副装填手の河村と操縦士の近藤が軽口を叩く。

RWS手兼副装填手とは砲塔上部に付けられた10式RWSを動かし、時には切替式装填装置を動かし、弾を装填する一番忙しい仕事である。

そのまま雑談していると外からコンコン、と車体が叩かれた。

「ん？何かなつと」

「今日は、ご飯を届けにきました」

「ありがと、でもまだ早くないか？」

「師団長が食べるうちにとつとと食つとけつて」

「成程、それじゃあいただくとするか」

包みを開けると美味しそうな握り飯が入っていた。

「美味そうだな」

「そうだな、食べよう」

そのまま皆飯を食べ始めた。その時、ふと車長は外を見た。

「ん？」

彼の目には1000以上はいる騎兵を目撃していた。

同時刻——

『全戦車連隊へ、こちら司令部。機銃にて応戦せよ、主砲弾は使用するな、オクレ』
「機銃だけか、即応弾が切れるのを恐れたかな」

車長の鈴木も文句を言いながら砲塔上部にあるM2ブローニング12.7mm重機
関銃を操作する。

右側の弾倉から12.7mm弾の弾帯を取り出し、銃本体のフィードカバーを前方へ
押し上げ、

弾帯の第1弾を給弾口に差し入れた後、フィードカバーを閉じ、機関部側面にある
コッキングレバーを後方へ引く。

「指示あるまで発砲控え」

『司令部より全戦車に次ぐ、攻撃開始、攻撃開始！』

「よおし！撃てえ！」

司令部より攻撃命令が降ると各戦車は一斉に機銃を撃ち始める。

鈴木も後部の押金式のトリガーを押し、射撃を開始する。
銃口から重厚な音が流れて、12.7mm弾が発射される。



数分前――

王都防衛第32騎士団400名は、出陣の準備を整えていた。

第32騎士団は全員が騎兵で構成されており、馬の機動力を用いた錯乱を得意としていた。

第32騎士団団長ヒージは今日当直であったことを嘆きつつも、団員に喝を入れる。

「我ら第32騎士団は、敵への初撃を与える栄誉を授かった！目的は敵の強さの把握だけだ！ある程度引つ掻き回したら引き上げるぞ！」

「突撃イイイイイイイイ！」

「ウオオオオオオオオオオオオ!!」

団員達がヒージの喝に応え、軍馬が嘶き、第1城壁の北東城門が開かれる。馬の蹄が土埃を巻き上げ、全速力で進軍を開始する。

敵との距離は4 km、まずは進行しながら騎射で相手の出方を伺う。

全騎、背中にある弓を手取る。

4 kmの距離であれば、5分〜6分で敵陣に到着する。ヒージは監視塔を破壊した遠距離魔導投射を警戒しながらジグザグに進行し、2 kmの地点でさらに速度を上げる。

「ん？」

約2 km先の箱型の物体から、突如光の弾が多数、騎兵に飛んできた。

前陣から中腹にかけて光弾が当たり、騎士達は馬と共にバラバラに引き裂かれる。

ヒージはなんとか回避したが、20年以上共にいた隣の騎士がやられ、貫通した光弾が後ろの騎士も肉塊に変える。

次々と飛来した光弾は戦場に赤い糸を張り巡らせ、地面や第1城壁に当たり、土や粉砕した石の噴煙を上げた。

「な、なんて威力だ!!」

それが彼の最後の光景であつた。

第32騎士団は第7機甲師団へ突撃を敢行。

『90式戦車』及び『10式戦車B型』から放たれた12.7mm弾と7.62mm弾により部隊が壊滅。

指揮官を失つた数少ない生き残つた者達は、撤退した。



生き残つた騎士団の内、階級が一番上の者がパタジンに報告する。

「將軍、敵は少数ですが、光弾を信じられない速度で放つてきました：我が隊は7割がやられました」

「そうか、ご苦労。直ちに手当てを受けるのだ」

パタジンは彼を下がらせて、次の策を講じる。

「敵の光弾の貫通力が高い。ならば次は防御力重視の重装歩兵を向かわせる」
 「了解、重装歩兵を出撃させます」



1時間後――

『これより諸君らには、王都に攻撃を与えてきた敵に対し、総攻撃を加えてもらう』
 『もう知っている者もいるだろうが――敵は強い!』

『しかし。我々は負けない! 諸君らの後ろには愛する家族が! まだ未来ある子供達がいることを忘れないでほしい!』

『敵に我らの家族を蹂躪させないために! 我々は未来のために戦おう! 出陣!!』

「「ウオオオオオオオオオオオオ!」」

「「突撃いいいいいい!!!」」

兵達の咆哮が王都に木霊する。

重装歩兵大隊が先頭に立ち、密集陣形を作る。

正面から重装歩兵大隊が、密集陣形でゆっくりと出陣して行く。

重い鎧を纏い、重い盾と長槍を持った彼らは蒸し暑い鎧の中で汗を掻きながら、日々

鍛えた屈強な筋肉を駆使して進む。

敵までの距離は4 km、通常の兵士ならこの装備を持つて進めば、たどり着く前に体力が持たないであろう。

しかし。彼らは重装歩兵の精鋭。誇りがあり、守らなければならぬ者がいる。

2 kmほどを通過した時、敵の魔獣が唸りを上げ、動きを見せた。

「攻撃が来るぞおおおおおおお
!!!!!!!」

大隊長が吠えた。盾の強度を信じ、構える腕に力を込めて体を密着させ、被弾に備える。

敵から放たれた猛烈な勢いの光弾が、重装歩兵に着弾した。

「グアバ！」

「ギャツ！」

彼らの鎧は呆気なく貫通され次々と倒されていく。

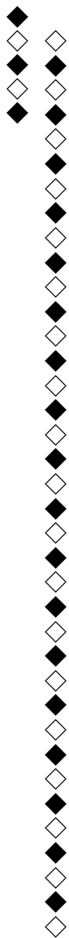
「な、何だアイツは！」

その中で一人だけ、重厚な盾を構えた一人の重装歩兵が立っていた。

その盾は機銃弾を悉く弾き飛ばし、地面に根を生やしたかのように動かない。

「うおおおお!! 彼に負けるなあ! 突撃いいいいいい!」

その重装歩兵を目撃した襲撃部隊が、勇気付けられたのか、連隊の左右から突撃を仕掛けてくる。



戦車長鈴木は目を疑っていた。

「ええ…12.7mmを防いでいるぞ」

彼の前にはたった一人だけ生き残り、その大盾で12.7mmや7.62mmを防い

でいる兵士がいた。

「7. 62mmはまだしも、12. 7mmを防ぐとは…。一次大戦の戦車より硬いかも
しれませんよ」

「そうだな…河村！40mmを打ち込め！」

「了解！」

RWSを撃っていた河村がM240の横につけられた96式40mm自動てき弾銃
か動き、兵士に照準を合わせる。

バン、という音と共に40mm対人対戦装甲てき弾が打ち出され、兵士の近くに着弾
する。

土埃が舞い、兵士の姿が見えなくなった。

「やったか？」

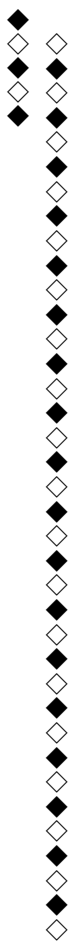
「ちよ、おまつ、それフラグっ！」

土埃が晴れるとまだ健在な兵士の姿があった。

「(☒ω☒) ファツ!? 40mmを食らって生きてるなんて…あいつ人間じゃねえな(確信)」

「魔法でも貼ったか? 12.7mmを撃ち込んでも防御力が下がったようには見えないし…」

「司令部、こちら第75戦車連隊第32号車! 敵兵士に40mm撃ち込んでも効果無し! 指示を請う!」



司令部——

司令部では敵兵士に対して驚嘆の声を上げていた。

「うおっ! ほんとに防いでる」

「避弾経始をしていますますが最新の盾でも12.7mmを防ぐなんて聞いたことありませんね…」

「他の兵が全滅していることから察するに、あの盾のみが特別だと思われます」

「あれを倒すなら口径を上げ戦車砲を撃ち込めば済みますけど……どうしますか？」

「そうだなあ……ん？ 敵兵が出てきたな？ 本隊か？」

「これは……散開してこちらに向かってきていますね。戦車に張り付いて各個撃破する作戦に切り替えたのでしょうか……」

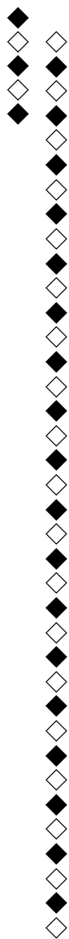
「少し数が多いですな、『まつしま』にて待機中の攻撃ヘリ、及びダイタル基地に待機中のAT-4に支援要請を行いたいと思います。宜しいでしょうか？」

「うむ、許可する」

現場指揮官の指示により、北部の沖合に待機中であつた海上自衛隊のヘリコプター搭載型航空母艦『まつしま』から、

陸上自衛隊の攻撃ヘリ『AH-64E アパッチ・ガーディアン』12機が、航空支援のために離陸を開始し、

ダイタル基地に駐機中の航空自衛隊の攻撃機『AT-4』も近接航空支援^Aのために離陸した。



ロウリア王国 北部航空基地——

「北の方角より敵の飛行物体が向かってきています！」

「迎撃は？」

「駄目です。我々にもう航空戦力は残されていません。迎撃は不可能かと」

防空司令部では誰もが意気消沈するが、それを打ち砕くかのように一人の竜騎士がやってきた。

「君は？」

「第2竜騎士団所属のターケナインです。私に行かせてください」

「行かせろと言われても、敵の飛行物体は10騎以上は居るぞ」

「大丈夫です。敵は既に我々が航空戦力を失ったと思っっています。その油断につけ込み、奇襲を仕掛ければ、撤退に追い込めるかと」

「ふむ………分かった！やってみてくれ！」

「はっ！」

ターケナインは愛騎を操り出撃した。

彼は、航空自衛隊のイーグルの時のように、ミサイル攻撃を警戒し、敵の攻撃が遠距離から目標を探知して攻撃してくると考え、死角となる超低空飛行で相手の真下から仕掛ける作戦を取る。

「来たー！」

地面スレスレで待機していたターケナインは編隊を目視で捉えると、手綱を使って相棒を真上に向けて一気に上昇させた。

「あのデカイ奴を狙うー！」

ターケナインは編隊の真ん中を飛んでいたAH-64Eに狙いをつける。愛騎は口内に炎を貯めて、導力火炎弾の発射態勢に入った。

「落ちろー！」

合図と共に、導力火炎弾が放たれた。

「やった！」

導力火炎弾は当たるコースを辿っていた。

「何っ!？」

だがアパッチは、寸前でレフトターンしてギリギリで避けた。



数分前——

「テレレレン——←！テレレレン——→！テレレレン——←！テレレレン——

→！」

「……」

階級は違うが、小さい頃からの幼馴染のため公の場以外は敬語を使わずに話していた。

「でも…暇だし…」

「周囲の警戒でもしとけ。全く…」

橋本2曹はそのまま機関砲のチエックを始めた。

その時バイザーの端に何か映った。

「ん？なんだ？」

機関砲を向け、確認するとこちらに火炎弾を発射しようとしているワイバーンが目に入った。

「つ！3時の方向！下方100m！敵ワイバーン！攻撃体制！」

「何！」

村田1尉が視線を向けるとワイバーンが火炎弾を放っていた。

「うおおおおおおおおお！」

村田は間一髪で操縦桿を動かし、火炎弾を交わした。

「どうする？あんなの食らったら、AH—64Eの装甲は耐えられるかもしれないがエンジンが焼けるぞ」

「そうだな……………隊長、こちらフェルグス。奴は自分らが引き受けます。行ってください」

『フェルグス！単独じゃ危険だ！数で掛ければ確実に落とせるぞ』

「いえ。第7機甲師団の応援には1機でも多い方が良いでしょう。隊長達は先に行ってください」

『……………すまない。頼む』

「了解！」

村田は隊から離れ、ターケナインの注意を引き付ける。

「さあ！インディアンとワイバーンとの一騎討ちと行こうぜ！」



「クソ！すばしっこい！」

アパッチとの空中戦に突入したターケナインは、アパッチの飛行性能に驚きを隠せないでいた。

「お？奴さん、良い腕してるな」

村田も操縦桿やスロットルレバーを巧みにコントロールしながらターケナインの腕前に感心する。

「新人だと厳しいかな」

「俺たちがやって正解でしたね」

村田・橋本ペアはイラク戦争で活躍しており、MIG-19戦闘機を落としたこともあった。

「じゃあ奴さんを驚かせてやろう！橋本！30mmスタンバイ！」

「了解、準備よし」

橋本はトリガーに指を掛ける。

「行くぞー！」

村田は3秒数えて、機体を一気に左に向けてターンさせ、機首を後ろに向ける。

「何っ!?!」

ターケナインは、突然後ろを向いたアパッチの機動に驚く。

「撃て！」

「了解、撃ちます！」

短い音と共にアパッチの下部から30m弾が放たれる。

ターケナインはギリギリで回避したが、相棒の尻尾に数発当たり、悲鳴をあげる。

「相棒、耐えるんだ！まだ勝機はあるぞ！」

ターケナインは愛騎をそう励ます。それに応えるように愛騎も痛いのを我慢して叫ぶのを止め、態勢を建て直す。

「ちっ、外れた！」

「だが背後をとれた！AIM-9Lをぶち込むぞ！」

HUDでワイバーンをロックオンする。

「ワイバーンにフレアは無い！捉えた！」

「FOX—2！」

操縦桿の発射ボタンを押し、右翼スタブ・ウイング末端からAIM—9Lが発射される。

ターナケインは発射されたそれがこの前先輩達を撃墜した矢だと確信した。

「(ここで！ここで！終わるのか!?!いや、違う！俺は竜騎士！ロウリアの民を守る)」

だが、向かってくる矢に対しての攻撃手段はない。

「(すまん、先輩方、ロウリアの民達)」

そう思った瞬間、相棒が突如翼を翻し、導力火炎弾を撃つ姿勢になった。

「なっ！相棒！何を！」

ターナケインが聞く暇もなく、相棒から導力火炎弾が放たれた。

導力火炎弾はピンポイントでAIM-9Lを直撃、炎の威力で信管が作動した。

「や、やったぞ相棒！光の矢を撃ち落とした！」

ターナケインと相棒が光の矢を撃墜したことを喜ぶ。

一方、村田のAH-64E内では驚愕が支配していた。

「え…AIM-9を撃ち落とした？」

「火炎放射で信管が作動したな…」

「まあいい、30mmで攻撃続行！」

村田はターケナインの後ろを取り、追撃を続ける。

橋本はIHADSSのレクティルにターケナインが合わさる瞬間を狙ってチェーンガンを撃つが、

ターケナインは攻撃を受けないよう、愛騎を左右に向けて振り続ける。

「空の王者を舐めるな！」

そう叫ぶと、彼はその場で手綱を思い切り手前に引き、愛騎を太陽に向けて上昇させる。

「くそ！眩しい！」

「しまった！逆光だ！」

太陽光に目がくらみ、2人はターケナインを見失った。

「敵機ロスト！、何処だ！」

「後ろだ！」

ターケナインはアパッチの後ろに取りつき、導力火炎弾の発射態勢に入った。

「この距離なら！」

愛騎から放たれた渾身の導力火炎弾は直撃するコースであったが、またもや回避される。

「なっ！」

村田の高度な操縦技術により、難を逃れたのだ。

「次は俺たちの番だ！」

橋本がそういうと、30mmを連射する。

ターナケインか必死に避けるが、何発か当たり、相棒の体に傷が増える。

もはやこれまでと覚悟したターナケインと相棒は突撃を敢行した。

だか、

「それを待つてたんだ！今度は外さん！FOX-2！」

今度は左翼のスタブ・ウィングからAIM-9が放たれる。

今度はターナケインも避けるすべなく、近接信管が作動し、黒煙が上がる。

「ターゲットスプラッシュ！撃墜確実っ
!?!?!?!」

撃墜を確信した二人は驚愕した。

破片が刺さり、血まみれになるながらまだターナケインと相棒は突撃をしていた。

「これが最後だ!!!」

相棒が正真正銘の最後の力を振り絞り、導力火炎弾を発射した。

愛騎から放たれた渾身の導力火炎弾は至近距離から放たれたため、回避が間に合わず、火の塊が機体に直撃した。

「相打ちか…」

地面へ落下しながらターナケインはつぶやいた。

だか、次の光景を見て目を疑った。

敵騎は黒煙も上げず、上空を飛んでおり、そのまま王都の方へ向かっていった。

「そんな…」

ターナケインと相棒が放った渾身の一撃はAH-64Eの操縦室付近の装甲に阻まれ、機体に傷をつけることはなかった。

「今度こそターゲットスプラッシュ、撃墜確実。こちらフェルグス。敵騎撃墜、我攻撃を喰らうも損傷無し。合流する」

『了解、合流せよ。座標…』



中央暦1639年9月1日

陸上自衛隊第7機甲師団82式指揮通信車内――

指揮車内に居た大内田は、作戦の最終段階の執行時間を確認し、全部隊に向けて作戦

実行の指示を出した。

「これより、作戦第3段階に移る！」

待機していた戦車連隊は再び前進を開始し、各戦車は正門に向けて砲を向ける。

「目標、敵正門！対榴、撃て！」

10式戦車6両から同時にHEAT-MPが発射され、ジン・ハークの正門を破壊した。

爆発音に驚いたロウリア兵とパタジンは正門の様子を確認する。

「奴らめ、今夜に決着をつけるつもりだな。直ちに正面に兵を向かわせろ！敵の突破を許すな！」

パタジンは正面に兵力を集中させ、敵を迎え撃つ準備を始めるよう指示し、同時に魔信を城内に居る近衛隊長ランドに繋げる。

「(ランド、聞こえるか?)」

呼び掛けてみるが、自衛隊による電子妨害により魔信は使い物にならず、応答はなかった。

「ランドなら心配ないだろうが………伝令兵!」

「はっ!」

「ランドに、何としても国王を守るように伝えろ!」

「了解!」

伝令兵にそう伝え、パタジンは戦闘の指揮を取り始める。



同時刻

MH-47 特殊作戦ヘリコプター機内――

第1特殊作戦部隊零作戦分遣隊とSATは特殊作戦ヘリコプターMH-47の機内に静かに座っていた。

「襲撃5分前」

分遣隊長が襲撃時刻を知らせると分遣隊員達は一齐にサイトやレーザーサイトが付けられた10式小銃のマガジンを抜き、弾が装填されていることを確かめると、マガジンを戻し、コッキングレバーを引いて薬室内に5.56mm NATO弾を装填する。

その後、チェンバーチエックを行うと、右足に付けられたポーチから10式拳銃を出し、また確認する。

ここまで1分もかかっておらず、SAT隊員達は感嘆していた。

「呆けている場合では無いぞ、安全確認」

SAT隊長の青木が声をかけると分遣隊には及ばないにしても一般隊員からしたら早い速度でチエックを始める。

青木がチエックを終えると、分遣隊隊長の西川が話しかけてきた。

「作戦通り、敵は第7機甲師団に釘付けですね」

「ええ。しかし敵側の兵力も凄いですね」

「作戦成功を祈ってますよ」

「ええ、S A Tの名にかけて、必ず逮捕します」

青木は自信をかけてそう言った。

「間も無く降下地点です！」

「よし！各員、降下用意！」

機内に居た隊員達は席から立ち上がる。同時に機体後方のランプドアが開き、外からの外気と風が入ってくる。

全員が虫のようなG P N V G—18夜間暗視装置をしており、近未来のような感じだ。

「降下目標の中庭、敵兵確認！排除せよ！」

「はっ！」

西川の命令によりヘリコプター全部にあるM240ドアガンが唸り、敵兵をミンチにする。

「降下地点クリア!! 『オペレーション・ホールインワン』開始！」

機体後部のランブドアからエクストラクションロープが垂らされる。

「降下ッ！降下ッ！降下ッ！」

降下の命令が下り、ファストロープ降下を始める。

着地すると小隊ごとに移動する。第6小隊（セイバー6）はSATと共に降下した。

「セイバー6は裏庭に移動する」

『セイバー6、アーチャー2だ。西の通路に入る』

「こちらセイバー6、了解」

第6小隊長の清野は折りたたみ式の梯子を背中から取り出すと、2階の窓へ掛ける。

「セイバー6は中に入る」

そう言うと彼はホルスターからレーザーサイトをつけた10式拳銃を取り出し、梯子を登る。

彼は一番上の窓際まで行くと、拳銃の銃口を左右に振りクリアリングをする。

登り切り、10式小銃に切り替え安全を確認すると、梯子を登り切らずに10式拳銃で周囲の警戒をしていた斎藤にハンドサインを出す。

そのまま第6小隊とSATは2階に侵入した。

廊下に出てクリアリングをしていると、話し声が聞こえてきた。

第6小隊は話し声のするドアへ近づく。

「何か物音がしないか？」

「そうだな…おい！そのメイド！様子を見て来い！」

「は、はい。わかりました」

メイドがドアを開け、閉めると同時に悲鳴を上げぬように市川が口を押さえて、テーザーガンを撃ち込み、拘束する。

斎藤がドアにミラーガンを差し込み、中の様子を確認する。

「敵兵、20。雑談中。武器携行」

「了」

ドアノブを見ていた佐野が手を押す動作をする。押し式のドアのようだ。

斎藤がドアノブをゆっくり回し、横にいる飯塚がフラッシュバンの安全装置を抜き、いつでも投げ入れるようにする。

清野が手を前へやると、斎藤がドアを少し開け、飯塚がフラッシュバンを投げ込む。

「ぐあっ！」

「何nゴブオ」

フラッシュバンにより平衡感覚や視界がなくなつたと同時に第6小隊が流れ込む。

頭を狙った正確な射撃により、30秒もかからず殲滅された。

「こちらセイバー6、ルーム1クリア」

『こちらランサー1、ルーム2クリア。これより2階退路確保に着く』

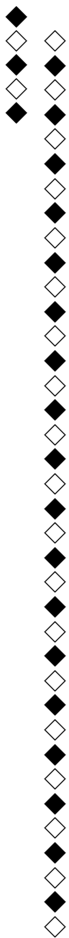
『キヤスター4、ルーム3クリア、2階制圧確認』

『キヤスター4へ、アーチャー2。バーサーカー5と共に1階制圧。ラペリングにより4階へ向かう』

「セイバー6は、3階へ移動する」

3階へ移動すると敵兵が彷徨っていたのですぐさま対処する。

3階も制圧し、4階も制圧されていたので最上階の5階へ向かう。



ロウリア王国近衛隊大隊長ランドは魔信を聞いていた。

『4階が突破されるぞ！急げ！敵襲！敵襲！武器を持つグフオ！』

『ランド隊長！こちら第3近衛隊！敵は『魔杖』のようなものを装備ツ！3階は制圧され

…ガッ!」

『第7近衛隊!第4通路突破された!敵は5階へ侵入!不可視の魔術を撃ち込んでくる!ウワアアア!』

「ランド隊長、敵の狙いは少数精鋭の魔法戦士による大王様暗殺かと…」

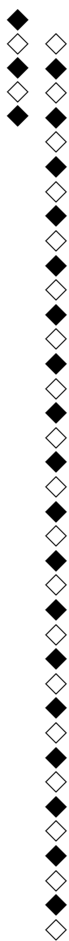
「おそらくな…しかし…強力な武力を誇示しときながら回りくどい作戦だな」

「バタジン応答せよ、バタジン…だめだ遠すぎる」

「通信士!バタジン將軍へ伝えよ『敵魔法剣士が王城に侵入した。魔導師を伴い戻ってくれ』と」

「はっ」

「(バタジンが来れば挟撃できる、それまでの時間が欲しい…)」



5分後

第1特殊作戦部隊零作戦分遣隊第6小隊——

「この先が王座の間だ…セイバー6、これより王座の間に突入する」

王座の間に入るための木製の重厚な扉を、M870MCSマスターキーを装備した杉山が扉の蝶番を吹き飛ばす。

支えを失った扉を蹴り倒し、いよいよ王座の間へと入った。

「広いな」

「こちらセイバー6、王座の間へ突入。今より大階段を登る」

「よし、ここを登ったら謁見の場だ」

「会敵に備え」

「了」

奇襲に備えて全方向を警戒しながら階段をゆっくりと登る。

階段を登り切るとそこには2人のメイドと思われる女性が怯えたような表情で立っていた。

直ぐに斎藤がテザーガンを取り出し、二人を気絶させる。

「ほう……やはり殺さぬか」

そこへ、柱の間からランドが薄ら笑いを浮かべながら現れた。

「今までの戦いを見ると、やはりお前達は民間人に危害が及ぶ事を避けてるようだ。お前達は騎士道精神か、あるいは何かの法や教えに縛られてるとmグアツ！」

武器を携行しておらず、降伏するのを見ていたが、降伏する様子がないので足に5.56mmを撃つ。

相手が一般兵士であつたらすぐに殺していたが、隊員は服装的に将官と判断し、尋問しようと生かした。

飯塚がランドの頭にサプレッサーを付けた10式拳銃を擦り付け、杉山が尋問する。

「吐け、ロウリア王はどこだ」

「…」

「やれ」

飯塚が注射器でランドに自白剤を打つ。

「ぐ……おっ……」

「ロウリア王はどこだ、吐けば楽になる。応えろ」

その時、ランドが見た視線を杉山は見逃さなかった。

「目標はあの扉の先です」

「了、S A Tの皆さん。ここは我々に任せて行ってください」

清野が青木に向かってそう言うと、ランドが口を開いた。

「君のような感の良い奴は嫌いだよ」

その言葉の合図だったかのように、左右の壁が回転し、その奥から20人程の騎士が姿を現した。

それに慌てる様子を見せず、第6分隊は対応する。ランドが余計なことをしそうだったので杉山が銃底で殴り、気絶させる。

「ちつ、面倒臭いな…斉藤！擲弾ぶち込んでやれ」
「了解！」

斎藤が背負っていた10式擲弾発射器を操作し、擲弾を敵に発射する。
発射された擲弾は爆発し、一気に敵を葬り去った。

「敵排除確認。セイバー6、これより捕獲対象がいる謁見の場へ入る」

「扉、ロック確認」

「C4で吹き飛ばせ」

飯塚がC4を扉へ貼り、壁に張り付き、爆風に備える。

「馬鹿でかい穴が開くぞ」
Fire in the hole!
「爆発する！」

C4が起爆し、木製の扉が吹き飛ぶ。

吹き飛んだ瞬間、第6小隊が突入し、一步遅れてSATが突入する。

部屋の奥にある椅子に、ハーク・ロウリア34世は清野達を待っていたかのように、どっしりと、恐れる様子を見せる事なく堂々と座っていた。

「(コイツがハーク・ロウリアか)」

青木は被っていたヘルメットのバイザーを上げて、懐からハーク・ロウリア34世の顔写真を見て本人か確認しながら、近寄っていく。

「ロウリア王国国王、ハーク・ロウリアだな」

「ああ」

「日本国警視庁警備部第1課特殊強襲部隊の青木だ、貴方をクワ・トイネ公国に対する破壊行為指示と殺人を指示した破壊活動防止法違反・殺人教唆の罪で逮捕する」

青木は日本語と大陸共通語で書かれた逮捕状を見せる。

「好きにするがいい。覚悟は出来ている」

「では0115。ハーク・ロウリア34世逮捕！」

両手に手錠が掛けられ、遂にハーク・ロウリア34世は逮捕された。

「こちらセイバー6、ロウリア王確保。任務完了」

『こちらランサー1了解。各小隊に次ぐ。撤収』

ハーク・ロウリアの身柄を確保した自衛隊・警察合同部隊は足早に城を離れた。

『オペレーション・ホールインワン』は成功した。

この数時間後、ロウリア軍は自衛隊から国王が逮捕・拘束した事を伝えられた。パタジンはこれ以上の戦闘は無用と判断し、陸上自衛隊第7機甲師団・第41自動化師団に対して降伏した。

こうしてロデニウス大陸戦争は僅かな期間で終結した。

問話 異世界のモグラ叩き

中央暦1639年9月2日

総理大臣官邸――

総理官邸では日本と一緒に転移した各国大使の内、G7と呼ばれる先進国の大使が集まっていた。

在日アメリカ大使のクリス・ウィリアムズが入ると在日イギリス大使のエドワード・リー・マーシャルが話しかけてきた。

「おや、エドワード大使、こんにちは」

「クリス大使、久しぶりですな」

「転移の影響で仕事が増えましたな」

「私もです。全く紳士としての流儀を持っていない奴らが多すぎる」

「ははっ、全くですな」

クリス大使は知らないがエドワード大使は外務省に結構ヤバいことをやっている。

(8話参照)

「とゆうか、G7大使が見事に集まっていますね」

「そうですね、何かが起こったのでしょうか。まあ十中八九ロウリアの事ですが……」

「やはり、そちら関連……」総理、入られます」おっと、Prime Ministerの
ご登場だ」

姿勢を正すと、奥のドアから阿部野真三内閣総理大臣が現れた。

大使らが座っているソファの前に座ると、独特な喋り方で話し始める。

「皆様、大変な時期にお集まりいただきありがとうございます」

「いえいえ、何か大事なことがあるのでしよう」

この中で一番在日経験が長いアルベルト・デ・サヴォイア在日イタリア大使が話す。

「流石アルベルト大使。もう知っておられる方も多いと思いますが、先日我が国はロウリア王国を占領いたしました」

それは皆知っている。ニュースで朝から流れているのだ。いやでも耳に入る。

「実は戦後処理の関係なのですが、ロウリアはソ連のようにいくつかの諸侯が集まってきたています」

「自衛隊は戦後処理の関係で有力諸侯の本部を空爆したため、多くの領地が我が国に降りました」

「ですが、我が国一か国だけでは本土の数倍もある領地は統治できません」

「なので、転移直後から外務省に皆様がおっしゃっていたあの案を…」

「ぼ…母国を作れるのですか！」

一際転移時にショックを受けていたダニエル・ジュー・クローズ在日カナダ大使が歓喜の声を上げる。

「ええ、今のところ米国、英国、カナダ、仏国、独国、伊国を建国したいと思います」

「！！！！！！」

「ですがびとつだけお願いが…」

「なんでしよう、できる限りのことはなんでもしますぞ」

「実はロウリア国内にいくつかスパイがいるようなのです」

「スパイですか…まさか」

「ええ、あなたの方が演習のために入国している特殊部隊。それを投入したいのです」

「いかんせん数が多く…特殊作戦軍では対処できないのです」

「成程、それでしたら我が米国は投入できませんぞ」

「英国ももちろん」

「ドイツも…」

「皆様がた、ありがとうございます。詳しい日程は…」



中央暦1639年9月8日

ロウリア共和国首都ジン・ハーク 陸上自衛隊ジン・ハーク駐屯地ー

ロウリア王国が降伏し、新生ロウリア共和国が建国され、自衛隊による進駐が始まってからちょうど2週間がたったところ、陸上自衛隊ジン・ハーク駐屯地の一角に、第1特殊作戦部隊ゼロ作戦分遣隊や第1特殊作戦群、中央国家憲兵団、他にも各国のネイビー

シールズやSAS、JTF-2、GIGN、KSK、フォルゴレ空挺旅団の隊員らが集まっていた。

会議室に、黒髪の女性と屈強な男性が現れる。男性の胸元には輝かしくレンジャー徽章と特殊作戦徽章がある。

「総員傾注！」

第1特殊作戦部隊ゼロ作戦分遣隊長の『平井幸太郎』一等陸佐の声が会議室に響く。声が響くと隊員達は談笑をやめ、屈強な兵士の顔になる。平井は隊員達の顔を見渡し、話し始める。

「全員いるな。初めて見る奴もいると思うから紹介する、こちらはの国家統合情報局^{N I J A}田情報官だ。今回の作戦の発案者でもあり、協力してください」

「初めまして。N I J Aの松田よ、よろしく」

松田は各国特殊部隊を満足そうに見渡した後、端の演説台に行く。リモコンで天井のプロジェクトクターを起動する。

「今回の作戦の概要を説明するわ。今回の作戦はジン・ハーク市内で確認された謎の電波の情報収集よ」

天井から垂らされたプロジェクターシートには、ジン・ハークの地図が映し出されており、所々に赤い点がマークされている。

「この謎の電波——此処から『モグラ』と呼ぶわ、中央^C国家^N情報局^Iや私たち、後、国家^N安全^I保障局^Sのクソ野郎共の諜報員が調べた所、電波の周波数から通信電波と考えられるわ」

「発信先は『グラ・バルカス帝国』——我々と同じく文明圏外にある国家ですが、第2次世界大戦レベルの文明レベルを持っているわ。この世界で一番我々が脅威と考えられている国よ」

一般的に国家^N安全^I保障局^Sと国家^N統合^I情報局^Jは同じ防衛省（国家^N統合^I情報局^Jは統合軍だが）所属のため、仲が悪い。

「現在は電波は全て解析中、少しだけ解析が終わった文通信を見ると我々の軍の戦力が送られているのが分かったわ。つまり電波の発信先のモグラは諜報員つてことよ。現在は空自の電子戦機で妨害しているから遅れないけどね」

その時、ひとりの隊員から手が上げられ、松田は話をやめてその隊員の発言を許可する。

「JTF-2のピーター少尉です。説明通りならば、赤い点はその発信源ですか？」

松田は質問に満足そうに頷く。

「その通り。諜報員によると敵は平均で五人ずつ。洗濯竿に通信アンテナが偽装されているわ」

松田はスクリーンにその家屋を映し出す。

ロウリアでは一般的な家屋に見えるが、洗濯物の数が不自然に多い。どうやら諜報員の潜入先で間違いなさそうだ。

「ここまで聞いたならば分かっているでしょうけど、今回の作戦はモグラ達を退治して欲しいの。可能なら忍者屋敷に招待してほしいわ」

「モグラがこちらを襲ってきたら？」

「その時は、モグラパニックでも吹っかけて退治して頂戴。最悪、証拠物品のみを回収できれば問題ないわ」

「他に質問ないわね？担当地点はこの資料に書いてあるわ。リーダーに家屋の見取り図を渡しとくから穴が開くぐらいよく見ておきなさい」

松田は、彼女の部下に命じて地図や家の設計図などの資料を配らせる。

「作戦開始は2日後の05:00、作戦名は『オペレーション・モグラ叩き』よ。しっかりと準備して頂戴」

「よし。各部隊は準備をぬかりなくしておけ。では解散！」

松田の説明が終わると、脇に控えていた平井がそう言って、松田らとともにミーティングルームを後にする。

こうして『オペレーション・モグラ叩き』はまもなく開始されようとしていた。

「日本って作戦名つけるの下手だよな」

アメリカ
「お前らの影響だと思っぞ」



中央暦1639年9月10日

『オペレーション・モグラ叩き』決行日 ジン・ハーク某所——

ロウリアの住宅街の裏道。後汚い裏路地の貸家。ベランダには数多い洗濯物が並んでいる。

前々からこの家は五人ぐらい住んでいる以外の情報がなく、周囲の住民にも避けられていた。

「くそっ！まだ無線はつながらないのか！」

「はっ、未だノイズが酷く…」

「畜生！」

一室では男が無線機と睨み合っている男に言葉を投げかけていた。男は痲癩を上げながら、窓の外を見る。

現在、ジン・ハークは進駐してきた陸上自衛隊第3師団、日本国海兵隊第1海兵師団並びに遅れてきた在日アメリカ軍第3海兵遠征軍の管理下であり、町のいたるところに迷彩服とボディアーマーに身を包みアサルトライフルを持った兵士が立っていた。中には装甲車が巡回している時もある。

「この情報は何としても本国に伝えなければならん……」

男が触れる先にはテーブルに無造作にばら撒かれた白黒写真があった。

陸上自衛隊が有する10式戦車や89式機動戦闘車、遠くから撮られた護衛艦や戦艦『きい』、AH-64D/E、F-15Eなどが映った写真が置かれている。

奥の部屋からコップとコーヒーを持った男が出てくる。

「不自然です……本国に何かあったのでしょうか？」

「分からん…：しかし…：通信機の不調と言い、なんだこの不気味な感覚は…：」

彼は出されたコーヒーを呷るように飲み干すと、素晴らしい捨てるように言った。

2人以外にもこの部屋には1人の女と2人の男がおり、その3人とも通信機に張り付いてどうにか通信をつなげようとしていた。

「すいません」

その時、ふいにコンコンと部屋の扉がノックされ、声が聞こえるた。5人の顔が強張り、服の中から94式拳銃のような見た目をした銃を取り出す。

男は部屋の扉に近づき、チェーンをかけたまま、扉を少しだけ開けて様子をうかがう。すぐにでも撃てるように室内の人員は構えている。

「はい…：どうかされましたか？」

「近所の者ですか…：これ、貴方の洗濯物ですか？落ちてたもので」

偽装用の洗濯竿を見ると何個か落ちていた。

「あつはい、ちよつと待つててください。部屋を綺麗にするので」

五人は安心し、銃を机へ置いた。

「なんだよ、洗濯物かよ」

「軍人ほかった？」

「いや、ただの禿のおっさんだよ」

「やだ、落ちたの女性用の下着じゃない」

「とんだ変態親父だな…」

写真などを隠すと、男がドアを開ける。

「すみません。お待たせして」

「いいえ、大丈夫です。これが洗濯物です」

「ありがとうございます」

男が洗濯物を貰い、ドアを閉めようとするのと声をかけてきた。

「ああ、後…」

「え、何か他に？」

「よくも禿だと馬鹿にしてくれたな」

そういうと、近所の人、もといK S Kの分隊長はM 8 7 0 M C Sコンパクトを取り出し、男の顔を挽肉にする。

「!!!クソが!!!」

室内にいた仲間が銃を発砲するが、すぐに避けられる。

一方、外のK S K達は分隊長の愚痴に付き合っていた。

「S c h e i s s e ! !これは禿じゃねえ！スキンヘッドだ、つて何回言ったらわかるんだ！お前達はわかるよな！」

「ええ（禿だろ）」

「え、はい（禿じゃね？）」

「あ、そうです（バリバリ禿だな）」

「禿げてませんよ（ちくわ大明神）」

「スキンヘッドですね（誰だ今の）」

皆心の中では禿だと言っているが、口に出したら基地で制裁されるので言わない。

ふざけながらも互いにカバーできる位置にいるのは彼らの練度を表す。

一方、室内では男の死体を片付ける暇もなく、写真や通信機器を破壊したりしていた。

「脱出の準備を……」

すると、その隙間から突然、円筒状の何かが放り込まれた。その正体は何なのか理解した彼らは戦慄した。

「まずい！グレネードだ！伏せr!!!」

警告が最後まで続くことはなかった。その瞬間、強い光と大きな音が彼らを襲ったか

らだ。

「L o s L o s L o s
!!!」

K S Kの隊員達がH K 4 1 6やM P 7 A Iを持ち突入する。

中にいた4人はヘルメットなどもしていなかったため、強烈な音響を食らって平衡感覚などを失って立ち眩みを起こしている。

そんな彼らに、K S Kの隊員らは腕などに銃弾を撃ち込んで反撃能力を削ぐ。

「k l a r r !」

「こちらK S K 3 !モグラ7を処理。憲兵団の派遣を要請する」

「了解。陸上自衛隊警務部憲兵団第4憲兵中隊が向かう」

それを横目に、ほかの隊員らは部屋の中にあつた写真や資料をかたつぱしから回収していく。

ものの10分ほどで、部屋の中のものをおろした回収し、元の部屋の主らも人目につかないように段ボールに詰め込む。

5分経った頃、緑色の制服を着た陸上自衛隊警務部憲兵団第4憲兵中隊が姿を表し、スパイに手錠をはめ、73式大型トラックに押し込んだ。

この日、ジン・ハークのいたるところで同じような光景が繰り返された。こうしてNINGA主導の『オペレーション・モグラ叩き』は成功という形で幕を下ろした。

第2章 太陽に滅ぼされる栄光

第1話 軍祭、奇襲、対応

中央暦1639年9月23日

フェン王国 某所――

フィルアデス大陸の東に位置する、勾玉を逆さにしたような陸地を持つ『フェン王国』
と言う国がある。

フェン王国、この国に魔法は無い。国民全員が教育として剣を学ぶ。

王宮騎士団の十士長アインは今日も剣を振っていた。彼は国に10人しかいない剣
豪の称号を持っている。

「アイン、ちょっと来てくれ」

アインの上司である、騎士長マグレブが話しかける。

「何ですか？」

「劍王シハンがお呼びだ」

劍王シハンとはフェン王国の国王である

「え？私をですか？」

十士長じゅうしちやうごときが劍王に呼ばれるなんて・・・考えられない事だった。

「いや、私もだ。全騎士団の十士長以上の者が対象だ、どうやら国の一大事らしい」

彼は王宮へ向かった。



1時間後

フェン王国首都アマノキ 王城——

日本人が見たら時代劇のセットかと疑うほど戦国く安土桃山のような城の大部屋に

20人ほどが集まっていた。

「パーパルディア皇国と紛争になるかもしれない」

「「「「「」」」」」」

全員に衝撃が走る。

戦力差は絶望的であり、さらに敵は列強だ。兵士の装備も全く違うので、数値以上の差がある。

敵が文明圏というだけでも避けるべきである。にも関わらず、よりによって列強……場は静まりかえる。

「とにかく、各人戦の準備をしておいてくれ」

張り詰めた空気が流れた。

隣国のガハラ神王国への親書作成や、外交ルートでの交渉に関する話し合いが行われた後に、次の議題へと移る。

「劍王、日本と言う国が我が国との国交開設のための交渉を行いたいと言う件についてですが。」

「ガハラ神王国の使者からの情報のやつだな。ガハラの東側にあると聞くが、あそこには小さな島々しかない筈だが……それが集まってできた新興国なのか？」

「各国からの情報によると、人口は3億人を越え、国土は5つの大きな島と無数の小島から成り立ち、列強国を越える科学力を持つていたとの事です」

「さ……3億人!?ワハハハハ、ホラもここまですれば大したものだ」

「それに……」

側近の言葉が詰まる。

「どうしたんだ？」

「これは未確認情報なのですが、日本にはたった1隻でロウリア王国艦隊約4000隻を壊滅に近い損害を負わせた『戦艦』と呼ばれる軍船を保有しているそうなんです。」

「戦艦……日本は列強国が持つてるような戦列艦をそう呼ぶのか？で、その戦艦とやらの詳しい情報は？」

「それが、どれもこれも荒唐無稽なものばかりで、信用に足る情報はまだ……」

「うむ。それについても確かめる必要がありそうだ。よし！直ちに日本の使者を連れて参れ！くれぐれも粗相の無いように！」

「御意」



1時間後——

「何か……こう、気が引き締まりますな。」

「ええ。まさか戦国時代の日本と同じ文化を持つ国があつて、町中の建物や城までも日本式建築と同じとは。」

フエン王国に外交交渉にやってきた、日本の外務省職員の島田耕一と随行員の浜本康則の二人は、フエン王国の第1印象が日本の文化に通じるものがあつた事に興奮していた。

「剣王が入られます！」

声があがり、部屋の扉が開かれるとシハンが入ってくると、二人はその場で立ち上り一礼する。

「そなた達が、日本国の使者か」

相手は達人の域を大きく超えている。外務省職員で剣道7段の島田は、剣王の動きを見て感じ取る。

「(並の人間の闘気ではないな…まるで戦国時代の武将を見ているかのようだ…)」

「(すごいオーラ…ス○ンド使いか?)」

「はい。日本の外務省より遣わされました島田と申します。こちらは随行員の浜本です。」

「貴国と国交を開設したく思い、参りました。ご挨拶として、我が国の品をご覧下さい」

島田は、ジュラルミンの大きなアタッシユケースを机の上に置いて蓋を開ける。

剣王の前には、様々な日本の「物」が並ぶ。

日本刀、着物、真珠のネックレス、扇、運動靴・・・。

シハンと側近らはそれらを手に取り驚きと興奮の目で品々を観察する。

剣王は日本刀を手に取り、引き抜く。

「(なんだこの剣は……細くて叩いたら折れそうに見えるが、この刃の薄さ、手に馴染むような握り心地、そしてこの構えやすさ………これ程の剣を作ろうとすれば相当の間と時間が掛かるだろう。)」

「ほう……これは良い剣だ。我々は貴国のことを見くびっていたようだ」

シハンは刀を鞘に戻し机に置くと、島田に向き直る。

「これ程の物を仕上げるには相当の時間と時間、そして長い間に積み重ねられた技術が必要となるのは間違いない。私は貴国に興味を湧いた。」

「では……」

「うむ。」

事前に聞いた、日本からの提示条件と、日本からの書類に間違い無いか確認する。

「失礼ながら、私はあなた方の国、日本を良く知らない」

話が続く

「日本からの提案、これはあなた方の言う事が本当ならば、すさまじい国力を持つ国と対等な関係が築けるし、夢としか思えない技術も手に入る。我が国としては、申し分ない」

「島田殿、濟まないが確かめたい事があるのだが。」

「何でしょう?」

「実は、ある噂なんだが、貴国にはロウリア王国の艦隊を退けた『戦艦』と呼ばれる軍船があると聞く。」

「戦艦……それは恐らく我が国の『きい』の事でしょう。」

「やはり本当であったか。いや、実は我が国は貴国の事はあまりよく知らない。特に貴国がロウリアに勝利したと言う話については荒唐無稽な物が多い。」

「はあ……」

島田はシハンの次の言葉に驚くこととなる。

「私は貴国の力をこの目で見てみたい。確か貴国には海上自衛隊と呼ばれる水軍があると聞く。親善訪問を兼ねてその“キイ”と呼ばれる軍船の力と貴国の水軍の力を見てみたい。」

二人は驚愕の視線をシハンに送った。

まだ国交が開かれていないのに、武装した艦船を派遣するのは戦争行為にも匹敵するものである。

普通の護衛艦なら火砲となるものは少なく（その分内に秘めた能力は凄いが）、あまり威圧感はないが、『きい』型などの戦艦は全長が300mを超え、白城のような艦橋も持つっており、威圧感が凄まじい。

「（せっかく開きかけていた外交交渉をわざわざ閉めてしまうのは流石に外務省や日本にとつては大きな痛手になる。戦艦1隻見せるだけで国交が開けるなら背に腹は代えられんか…）」

異世界で、しかも武の国だから、そんな事もあるのかな？と思ひ、本国に報告した。

フエン王国からの要請により、戦艦『ひぜん』を含む海上自衛隊第2艦隊第7空母打撃群が派遣されることとなる。



中央暦1639年9月25日

フエン王国 首都アマノキー

「あれが日本の軍船か……まるで城のようだ」

「城と言うよりは、島だな」

アマノキの港から沖に見える、巨大な船を見てシハン達が素直な感想を漏らす。今アマノキの沖に停泊しているのは、『きい』と殆ど全く見た目が同じである、姉妹艦の『ひぜん』だった。

『きい』は砲弾を撃ちすぎたため、砲の消耗が激しく、換装をしており、準同型艦の『とさ』も旧ロウリア王国首都ジン・ハーク砲撃後に長年動かしてなかったせいかエンジンの不調によりドック入りしたので『ひぜん』が派遣されることになった。

軍祭に参加する海上自衛隊第2艦隊第7空母打撃群の編成は以下の通り。

BB—43 ひぜん

CVN—73 しょうほう

CG—79 かも

DDH—179 ふそう

DDG—175 みようこう

DDG—127 あずま

DD—136 さとぐも

DD—144 よいづき

「私は何度かパーパルディアに行き彼らが保有している戦列艦を見ましたが、アレの前では……」

「確かに、パーパルディアの戦列艦など小舟……いや、玩具だな」

騎士長のマグレブとシハンは笑いながら『ひぜん』とパーパルディアの戦列艦をそう例えた。

海上自衛隊戦艦『ひぜん』C I C内――

C I Cでは『ひぜん』艦長坂本隆士1等海佐と第7空母打撃群司令官村上圭太准海将は驚愕していた。

「うゝむ、信じられんな」

「しかし、間違いありません」

「ステルス戦闘機が必要だな……ステルス艦もいるか？」

上空に飛んでいる『風竜』と呼ばれる生物から、レーダー波に酷似した電波が照射されている。

このレーダー波は、航空機の物として見れば、それなりに出力が高く、ルックダウン能力はあるかどうか分らないが、十分脅威になる。

文明圏から外れた国で、レーダーを持つ飛行物体が確認された。つまり、文明圏には、

これを大量に運用出来る部隊がある可能性もある。

この発見により、異世界に転移してから高額なため生産が見送られていた『F-3』
『F-5』『F-35』の生産開始、また超高額なため生産停止中の『F-22』も生産
停止が解除されることとなる。

「艦長。そろそろ時間です。」

「ああ、教練対水上戦闘用意!!」

坂本の指示で、乗員達は各々の部署に就く。

「主砲右砲戦用意!! 弾種HE、目標、右舷標的!」

「弾種HE! 目標、右舷標的!」

命令を受け取った砲術長は、CICのトリガーを操作すると、自動で測距儀が旋回し、
右に見えるフェンが用意した10隻の標的船に照準を合わせ各砲塔に情報が伝達され
ると、4基の主砲塔が動き始める。

「おお……あの巨砲が動いたぞ」

シハンは天守閣から見える『ひぜん』の各主砲搭の動きを見ながら、これから起こる事に内心ワクワクする。

「砲術長、外すなよ！」

「あんな近似的、外す方が難しいです！」

坂本の指示に砲術長は気合いを入れて、トリガーに指をかける。

3回程警報が鳴り響き、乗員は艦内に待避した。

「撃て！」

その時、アマノキ全体に雷鳴のような爆音が響き、市民達は何かと沖合に視線を向ける。アマノキ全体が見渡せる天守閣に居たシハン達は耳を塞ぎ後ずさる。

各国武官達も目を白黒させる。

「うおっ!!」

「なんだあ!!」

爆音が響いた直後、10隻の標的船を取り囲むように8本の巨大な水柱が上がり、標的船は水柱の中に消えて見えなくなった。

30秒して水柱が無くなると、さっきまで見えていた筈の標的船は姿を消し、海面には標的船の残骸が浮かんでいた。

標的船10隻は、爆散、轟沈した。

「なんと……………」

シハンは言葉が出なかった。

「…………途轍もない威力の砲を…12門も載せるとは…」

「我が水軍が戦ったとしても…砲が発射された時点で終わりでしょうな…」

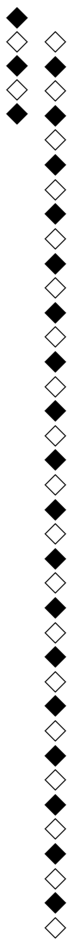
剣王シハン以下フェン王国の中枢は、想像を遥かに絶する日本国の戦艦の戦闘力に瞠

目する。

1隻からの攻撃で、10隻をあつさり沈める。しかも、とてつもない威力の攻撃で沈めた。列強。パーパルディア皇国でも、そんな芸当は出来ない事をここにいる誰もが理解している。

「すぐにでも、日本と国交を開設する準備に取り掛かろう、不可侵条約はもちろん、出来れば安全保障条約も取り付けたいな…」

「日本が覇権主義ではなく助かりました。まさに剣神のお陰でありましょう」
「そうだな。はっはっはっはっはっはっ！」



数分後

海上自衛隊戦艦『ひぜん』CIC内——

「間違いないな」

「はい、レーダーに感あり！西の方角、目標数20機！時速188ノットで接近してきま

す。あと数分でこの場に到達すると予想されます。』

「西は、パーパルディア皇国という国があったな」

「はい」

「フェン王国の軍祭に招かれているのではないのか？」

「とは思いますが…一応確認をします」

「……対空戦闘用意」

「戦闘配置ですか」

「ああ、攻撃してこないと限らないからな。この異世界じゃあ余計に」

「了解です、対空戦闘！」

「対潜警戒も厳となせ！相手は列強だ。潜水艦もいるかもしれんぞ！」

艦内に警報が鳴り響き、乗員達は突然に発令された対空戦闘用意の号令に驚きつつも、訓練通り各々の配置に就く。

「そのまま待機。突発事態に備えよ」

その飛行物体はフェン王国首都アモノキ上空に至ったが、王国からの返答は無かつ

た。



数分後

パーパルディア皇国 皇国監査軍東洋艦隊所属のワイバーンロード部隊――

『ひぜん』が補足したのは、フェン王国に懲罰的攻撃を加えるためにパーパルディア皇国を出撃したパーパルディア皇国 皇国監査軍東洋艦隊所属のワイバーンロード部隊20騎である。

軍祭には文明圏外の各国武官がいる。その目前で、我が国の圧倒的な軍事力、皇国に逆らった国がどんな末路を辿るかを見せつける。

パーパルディア皇国はよく逆らった蛮族の民達を各国の派遣武官を前で処刑し、『恐怖』を第3文明圏に広げていた。

ガハラ神国の風竜3騎も首都上空を飛行している。

風竜が皇国ワイバーンロードを見ると、ワイバーンロードは、階段で不良に当たってしまったって絡まれている気の弱い男を見てしまったかのように、風竜から目を逸らす。

同時刻

海上自衛隊戦艦『ひぜん』CIC——

「巡視艇いなさにワイバーン10騎が急降下中!!!」
「なっ!」

CICで悲鳴に似た報告があがる。

「『いなさ』は応戦しているか!」

「いいえ!回避行動中です!」

「くそっ!避けられるか!」

次の瞬間、パーパルディア皇国の皇国監査軍東洋艦隊所属のワイバーンロード5騎は、直下約500m付近に停泊中の海上保安庁の巡視艇『いなさ』に向かい、導力火炎弾を放出した。





同時刻

巡視艇いなさ艦橋——

軍祭に、事前情報の無い未確認機が多数接近中との自衛隊からの事前連絡を受けていた巡視艇『いなさ』は、エンジンを始動し、上空の監視を怠つてはいなかった。

機関室で4サイクル高速ディーゼルエンジン3基が唸り、必死とワイバーンロードの攻撃を避けようとする。

「未確認機が我が方へ発砲!!!!!!」

「エンジン出力最大!回避せよ!!!」

『いなさ』は、出力を最大にし、移動を始める。降り注ぐ火炎弾を次々と回避する。艦後方で、海上に火炎弾が着弾する。

だが、一つの火炎弾が船体後部に直撃する。

「!船体後部に被弾!火炎発生!!!!!!」

「消火活動を実施しつつ、最大船速へ!!! 上空の監視を厳とせよ」
「了解！航海科第2分隊応急処置班！消火急げ！」

上空では火炎弾を交わされた竜騎士が驚愕していた。

「何!!あのタイミングで、ほとんどかわされただとお!!?」

「敵船は速度が桁違いに速いぞ！気をつけろ！」

「(とてつもないスピードで航行する白い船に巨大船？同じ旗を掲げているが見たことないな...)」

急降下から、水平飛行に移行したワイバーンロード5騎は、必中タイミングで撃つたにもかかわらず、そのほとんどをかわされた事に安心していった。

「くつつつなかなか消えないな…」

「艦橋へ、こちら第2分隊応急処置班！火は粘性があり消火困難！増援を求む！」

『こちら艦橋、了解。第3分隊も向かわせる！』

導力火炎弾が命中したことによる火災は、炎が粘性を持つているらしく、消火活動に手間取る。

「正当防衛射撃を実施せよ!!!」

いなさの対不審船用の20m機銃が上空を向く。この機銃は対艦用であり、対空用には設計されていない。しかし、自己の生命を守るため、『いなさ』は、持てる武器を上空へ向けた。

「了解、正当防衛射撃！撃てえ!!」

画像により、上空を飛ぶワイバーンにしっかりと照準を合わせ、発射する。曳光弾を交えて上空に弾は発射される。

『いなさ』の放った弾は、5騎中1騎に着弾し、血飛沫をあげ、ワイバーンロードは、上空でのたうちまわる。竜騎士は振り落とされ、海中へ落下した。





『いなさ』被弾後

戦艦『ひぜん』C I C O O O

「『いなさ』被弾！火災発生！」

「被害は？」

「見たところありません」

「よし…クソが、どこの国かは知らんがよくもやつてくれたな…」

坂本はドス黒い声を上げる。どうやら前職は『ヤ』のつく自営業の噂は本当のようだ。『ひぜん』へと向かってきていたワイバーン部隊は、『ひぜん』のほぼ直上から急降下を仕掛ける。

「なんてデカさだ……………」

「あのような船を蛮族どもが…？」

「島みたいだ」

騎士達は距離が縮まる度に、『ひぜん』の巨体に恐れおのく。

「あんなものはハリボテだ！ 怯むな！ 攻撃用意！」

指揮官らしき騎士は部下達にそう言い聞かせ攻撃準備を指示する。

「本艦直上、急降下！ 攻撃態勢に入った模様！」

『ひぜん』の第1艦橋上の見張所に居る見張員が、慌てて報告を入れる。

「艦長！」

「ちつ、対空戦闘！ CIWS射撃用意！」

「だめです！ CIWS射程外！」

ワイバーンはCIWSのちょうど死角に入っていた。

「くつ！ 総員衝撃に備え！」

艦橋では全員が対ショック体制を取る。

ワイバーンロード部隊は火炎弾を発射する姿勢を取る。

「喰らえ蛮族！」

その直後に、『ひぜん』に向かってきたワイバーン5騎から同時に放たれた火炎攻撃が降り注いだ。

全弾が見事に命中し、第2砲塔の左舷側が炎上し、黒煙が上がる。

「被害知らせ！」

「前部第2砲塔左舷側にて火災発生！」

「消火急げ！」

「了解、自動消火装置作動！」

甲板上にある蓋が横に開き、中から穴の空いた先が丸い円柱上の物体が現れる。自動消火装置である。

自動消火装置は自動的に火災を探知し、穴から泡状の消化剤を出し、消火する。

「消火完了!」

「了解! 右舷副砲! 攻撃始め!!」

各副砲ごとの的が重ならないように、振り分けられる。FCSシステムにより、敵との相対速度が計算され、飛行する敵の未来位置で迎撃できるよう、副砲の砲身が上空を向く。

沈黙していた片舷5基の127mm単装砲と5インチ単装砲が起動し、自動制御で逃げようとするワイバーン部隊を追尾する。

「どういう事だ!?!あの数の火炎弾を喰らって平気なのか!」

水平飛行で待避行動を取っていたワイバーン10騎は、渾身の一撃が効いていない事と摂氏何百度もある炎が瞬間に消え去っていく様子に啞然としていた。

しかし戸惑っているうちに副砲が完全自動制御により5騎のワイバーンを瞬く間に撃墜。残りのワイバーンロード部隊5騎も海上自衛隊の各艦から発射されたCIWS

や砲撃によってこの世界から姿を消した。

海上自衛隊第2艦隊第7空母打撃群に攻撃を仕掛けてきたワイバーン部隊は3分も
しないうちに全滅した。

「……………」

剣王シハン及びその側近たちは、開いた口が塞がらなかった。ワイバーンロードは、
間違いなくパーパルディア皇国のものだろう。

我が国が、ワイバーンロードを追い払おうと思つたら、至難の技だ。1騎に対して一
個武士団でも不可能だ。そもそも、奴らは鱗が硬く、弓を通さない。

文明圏外の国で、1騎でもワイバーンロードを落とすことが出来れば、国として世界
に誇れる。『我が国は、ワイバーンロードを叩き落すことが出来るほど精強である』と：
それを、日本の奴らは、いともあっさりと、怪我をして動けなくなつたハエを踏み潰
すかのように、自分はほとんど怪我を負わず、列強の精鋭、ワイバーンロード竜騎士隊
を20騎も叩き落してしまった。

しかも、日本の白い船は、軍ではなく、警察的な役割を果たす船らしい。

日本は、文明圏外の武官が集まっている軍祭で、各国武官の目の前で、各国が恐れる

列強、パーパルディア皇国の精鋭ワイバーンロード部隊を赤子の手をひねるように、叩き落とした。

歴史が動く、世界が変わる予感がする。ワイバーンロードは、おそらく自分たち、フェン王国への懲罰的攻撃に来ていたのだろう。

日本をこの紛争に巻き込めたのは、天運であろう。剣王シハンは、笑いながら燃え盛る自分の城を眺めていた。

勿論、その様子は上空を飛んでいたガハラ神王国の騎士『スサノウ』と相棒の風竜は、『ひぜん』の高い対空戦闘能力に驚嘆する。

『すごいものだな……あの船は……』

風竜は感嘆の声をあげる。

『あの船から、トカゲどもに、人間にとっては不可視の光を浴びせ、船の砲はそこから反射する光の方向を向き、トカゲどもの飛行する未来位置に向かって撃っている……あの船は、見た目以上の技術の塊だな』

「そ……そうなのか？ そんなにすごいのか!？」

『うむ、大きいだけかと思つたら違うようだ。古の魔法帝国の伝承にある、対空魔船みたいなものだろう』

「へえ…そんなにすごいのか…帰つたら報告書が大変だな」



1時間後

フェン王国 首都アマノキの沖500kmの海上ー

パーパルディア王国監査軍東方艦隊司令官ボクトアールは、懲罰攻撃に向かったワイバーン部隊からの通信途絶の報告を受けていた。

「竜騎士隊との通信が途絶しました」

「「「「」」」」

!!!!

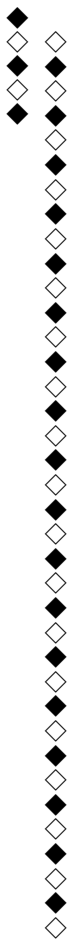
旗艦の艦橋に驚愕と静寂が現れる。

「いったい何があった……」

「フェンにワイバーンロードを撃墜できる力はあるまい」
 「我々に抵抗できる国……ムーかミリシアルか？今のところ我が国が宣戦布告を受けたと言う情報は入ってきていない。だとしたらムーとミリシアル以外の勢力なのかもしれない。」

ポクトアールは嘆きなくなった。いやな予感がする……しかし、これは第3外務局長カイオスの命である。

皇国監査軍東洋艦隊22隻は、フェン王国へ懲罰を加え、今回ワイバーンロードを倒した皇国に盾突く者に対し、各国武官の前で滅するため、風神の涙を使用し、帆をいっぱい張り、東へ向かった。



更に1時間後——

「なんてことだ……」

「やってしまった……」

外務省職員の島田は、海上自衛隊及び海上保安庁がフェン王国に攻撃に現れた正体不

明の部隊を見事に殲滅する様子を見て、多少混乱する。

国と国との争いに巻き込まれてしまった：運が悪すぎるとしか言いようがない。

しかし、今回、国籍不明の部隊は、明らかに海上保安庁の巡視艇に先制攻撃を加えており、現に船体後部に着弾し、火災も発生した。どう見ても正当防衛射撃であり、海上保安庁を責める訳にはいかない。

国籍不明部隊の数は多く、海上自衛隊が参戦しなければ、撃退は難しく、王城近くにいた島田自身や一般人にも死の危険があった。もちろん海上自衛隊を責める訳にはいかない

「運が悪いですね……」

「ああ、疫病神でも俺に憑いているのか……」

このタイミングでこんなことが起こるなんて、本当についていない……。島田は自分の運命を呪った。

巡視艇『いなさ』はアマノキの港に停泊し、エンジンを切り、錨を降ろし、外務省の一団が来るのを待っていた。

港では、人々が目を輝かせ、こちらに手を振っている。

「お父さん、あの白い舟がワイバーンをやっつけたんだよね！」

「そうさ！あの光弾の嵐、すごかっただろう!!」

「うん！すごかった！」

「おーい!!」

「ありがとう！」

満面の笑みでこちらに手をふるフェン王国の人々、海上保安庁の職員は少し固まった笑顔で手を振る。海上保安庁は海上自衛隊と比べると圧倒的に人気が無い。これほどまでに好意的な視線を受けたのは、初めての経験だった。

「お…外務省のお偉いさんが来たぞ」

焦りの顔を浮かべ、島田達が港へ真っ直ぐとこちらに向かってくる。

「エンジン始動!!」

エンジンをかけるが、音がして動かない。

「……」

「……」

「どうした！エンジン始動だ!!」

プスっ……という音が鳴るばかりでエンジンがかからない。

「……エンジンがかかりません」

「なっ……」

『いなさ』は、パーパルディア王国、ワイバーンロード竜騎士隊の導力火炎弾の直撃を受けた影響で、エンジンが壊れてしまった。

「原因は何だ!!何処が故障している!!」

「……不明です」

業者でなければどうしようもない。外務省の一団が到着する。

「嘘でしょ……」

「う……動かない!!?」

「はい、さっきの戦闘の影響かと思えます。」

「自衛隊に曳航してもらおう事は?」

「港が浅くて出来ません。錨も上がりません」

「自衛隊に、ボートで迎えにきてもらって、船だけ残していけば……」

「新世代技術流出防止法にかかります」

「では、いなさを撃沈してしまえば……」

「他国の首都の港で、そんなこと許される訳無いだろう!!」

議論は続くが、いなさが動かない事実に変わりはない。

「島田さん……なんか変だと思いませんか?」

「ん?……どうかしたのか?」

「可笑しくはありませんか? フェンからあの武装勢力の正体についての解答があったのは、襲撃から一段落したつい先程です。向こう側からの説明の時に最初から武装勢力の

正体を知つてたかのような口振りでした」

「……つまりお前が言いたいのは、フェンはわざと我が国を紛争に巻き込むために行った謀略だと……」

「状況証拠だけで確証はありませんが、その可能性は高いかと」

浜本の推測に島田は更に頭を抱える。

「だとすればフェンは何のために我々を争いに巻き込む必要があつたと考える？」

「『ひぜん』の砲撃演習を目の当たりにしたフェンは、自国では対抗できない争いを日本に肩代わりさせるためだと思われれます」

「じゃあ、『いなさ』は？」

「魔法でも何か使つたのでしょうか。衛星からの情報で機械文明があることを確認しています。対機械文明用にそういう魔法を持ってても可笑しくはないかと……」

「だとしたらあのシハンて男は、相当なキツネだぞ」

島田は転移前外交最強紅茶脳三枚舌飯マス野郎担当で策略には鋭い。

取り合えず、今後の事についての指示を仰ぐため外務省に連絡を取り指示を仰いだ後

に、再びフェン王国側との実務者協議に入る。

事態は切迫していた。夕方に、フェン王国側との会議が予定されていたが、外務省は急遽フェン王国外交部署に連絡を求める。フェン王国側は、即時会談に応じた。



30分後――

日本国外務省の一団は、来賓室で待っていた。フェン王国は貧しい国ではあるが、外交のための来賓室は、豪華さは無いが、おくゆかしさ、趣のある部屋であり、非常に質が高い。

フェン王国騎士長マグレブが現れた。

「日本のみなさま、今回フェン王国を不意打ちしてきた者たちを、真に見事な武技で退治していただいたことに、まずは謝意を申し上げます」

騎士長は深々と頭を下げる。

「いえ、我々は、貴国への攻撃を追い払ったものではありません。我々に攻撃が及んだの

で、振り払っただけであります」

「さつそく、国交開設の事前協議を…実務者協議の準備をしたいのですが…」

「……今回の件について我が国からの正式な回答をお伝えします。我が国と貴国との国交開設のための本格的な協議を安全に尚且つスムーズに行うため、我々はこの場に留まりたいのです。我が国の艦船につきましては我々の警護を兼ねて引き続き停泊許可をお願いしたい」

日本政府からの正式な回答を聞いたシハン達は僅かに安堵の表情を浮かべるが、島田は更に続ける。

「貴国は、もう戦争状態にあるのではないですか？我が国は戦争に巻き込まれた形であつて宣戦布告を受けていません」

「事実、死傷者も出ていませんし、我々は攻撃を受けても参戦する意欲はありません。戦争はコストが掛かりますしね」

「しかし、そんな事が通じる程、パーパルディア皇国は甘くありませんぞ。」

「ただ一つ、これだけは、心に留めおいて下さい。あなた方があつさりとは片付けた部隊は、第3文明圏の国、しかも列強パーパルディア皇国です。我が国は、パーパルディア

から土地の献上という一方的な要求をされ、それを拒否しました。それだけで襲つて来たような国です」

「過去に、我々のようにパーパルディアに懲罰的攻撃を加えられた国がありました。その国は、敵のワイバーンロードに対し、不意打ちで竜騎士を狙い、殺しました」

「かの国は、パーパルディア皇国に攻め滅ぼされ、国民は、反抗的な者はすべて処刑し、その他の全ての国民は奴隸として、各国に売られていきました」

「王族は、親戚縁者すべて皆殺しとなり、王城前に串刺しでさらされました」

「パーパルディア皇国、列強というのは、強いプライドを持った国というのを、お忘れなさらぬようお願いいたします」

シハンからの説明を聞いた二人は心底呆れ返ると同時に、パーパルディア皇国の実情に言葉がでない。

「成程、ご忠告感謝します」

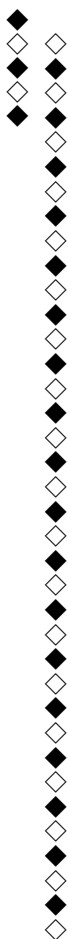
「では我々は一度船に戻り、現状の説明を行いますので失礼します。」

二人は、問いただしかつた一連の出来事について、何とか喉の奥に留めて、いなさへと戻った。

政府に問いあわせた所、日本国政府の決定は、フェン王国西側沖への護衛艦の派遣だった。

パーパルディア皇国艦隊と、フェン王国が衝突する前に、話し合いが出来ないかを試す。何とか戦闘を回避したい。

戦闘は回避したいが、新世界においては、ある程度の積極的外交も必要との判断から、今回の行動の命は下された。



5時間後——

「フェン水軍13隻、出港しました！」

「そうか」

部下からの報告を受けた坂本は双眼鏡で、13隻のフェン水軍がアマノキから出港し

ていくのを見る。

2時間前に『しようほう』から発艦したF/A-18Eから、西から接近してくる艦隊を確認したと言う報告が入り、その情報をフェンに伝えた結果、接近してくるのはパーパルディア皇国の艦隊であると判断された。

フェンは直ぐに水軍に出撃命令を下し、パーパルディア皇国艦隊を迎え撃つ態勢を整え出撃していく。

「司令、時間です」

「うむ、出港準備！」

「了解、出港準備！」

フェン水軍に遅れるように、村上は出港準備を出し、いなさを除く『ひぜん』以下第7空母打撃群は出港準備を整えて、先に出撃したフェン水軍の後を追うようにアマノキを経つ。

「坂本君…彼らは大丈夫だろうか？」

「難しいと思います。パーパルディアはこの世界で5カ国しか無い実力を持つ国。恐らく相当な数の戦力を投入しているでしょう」

『『しようほう』偵察機の情報では敵は19世紀の英国を越えるほどの戦力を保有しているようです』

「一方、フェンは良くて戦国時代の海軍力：勝つのはかなり難しいと思います」

「…そうか…もし彼らが壊滅したら、我々がパーパルディアの相手をする事になるだろうが、我々は勝てるかね？」

「勝てるではなく勝たなければなりません。もし我々が負ければ、一般市民と使節団が危機に晒されるでしょう」

「それだけは何とかして防がないといけないな。まあ、『ひぜん』が負けることはあり得んが…」

坂本と村上是『ひぜん』の全能力を以てしても、アマノキに居る使節団と一般市民にパーパルディア艦隊を近付けないよう誓いを新たにす。

「フェン水軍とパーパルディア艦隊の様子はどうか？」

「偵察機からの報告では、両軍は戦闘に入っている模様です」

「どっちが優勢だ？」

「フェンが圧倒的に劣勢です。距離が縮まる度にフェン水軍の数が減っていきます」

「いよいよ我々の番かな？」

「そうですね、対艦戦闘準備！」



同時刻

旗艦『剣神』以下フェン王国海軍――

「何と言う事だ……」

「一方的な虐殺だぞ……」

パーパルディア艦隊と接敵したフェン水軍は、船の数と性能で勝るパーパルディア艦隊の前に劣勢に立たされていた。

フェン王国水軍長クシラが乗り込む剣神の回りを航行していた軍船は、パーパルディア艦隊の戦列艦の砲撃の前に全くの無力で、時間が経過する度に味方の数は減っていく。

厳しい訓練を重ねてきたフェン水軍の軍船の甲板では、負傷した水兵がのた打ち回

り、砲撃が命中し積んであつた油に引火した船からは炎が上がっている。

「これが列強の力なのか……」

砲艦の数、1艦あたりの砲数の差、砲の射程距離及び威力、そして艦の船速、どれも桁違いであり、クシラは、力の差を思い知る。

これほどの差とは思わなかつた。列強とは、文明圏内での規模のみの差で、「列強」と名乗っていると思つていた。

しかし、現実は違つた。「質」、「技術」においても列強は文明圏を遥かに凌駕して、これでは、敵が1艦だつたとしても勝てない。

これでは勝てない……

だが、クシラの脳裏には、まだ希望はあつた。

「日本は………日本のあの軍船はまだ来てくれないのか！」

クシラも『ひぜん』の力をこの目で目撃しており、あの艦が来てくれればフェンは勝てるという希望だけが残つていた。

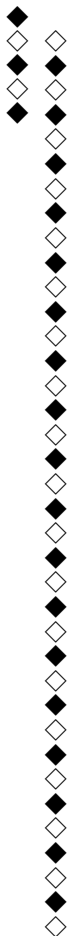
「水軍長！後方の水平線を！」

部下からの報告にクシラは後ろを振り返る。

水平上に、一際存在感のある島のような巨船が姿を表す。

「おおおおお!!!来てくれた!!日本が来てくれたぞおお!!」

僅かな希望が叶ったクシラの気分は高揚し、思わず叫んでしまう。



同時刻

戦艦『ひぜん』CIC内——

「ギリギリ間に合ったな……」

「フェン王国水軍残存艦艇数3隻です。パーパルディア艦隊、依然船速を緩めることな

く接近中です」

「よし、上空のへりに通達。『予定通りパーパルディア艦隊に向けて警告を送れ。戦闘状態に陥った場合、直ぐに退避し、『しようほう』に着艦せよ』」

「了解、『予定通りパーパルディア艦隊に向けて警告を送れ。戦闘状態に陥った場合、直ぐに退避し、『しようほう』に着艦せよ』へりに送信します」

直ぐに、『ひぜん』所属のシーホークが前に出ると、フェン水軍の真上を通り抜け、パーパルディア艦隊の5 km手前でホバリングし音声で警告を送り始める。

一通り警告を送るが、パーパルディア艦隊は速度と針路を変える事なく、まっすぐ直進してくる。

「パーパルディア艦隊、針路、速度共に変化なし！」

「引かないか……よし、右砲戦用意！機関前進全速、取舵一杯！」

「了解！右砲戦用意、前進全速！取りかゝじ一杯！」

坂本の命令により、艦が左に旋回し、4つの砲塔がパーパルディア艦隊に向く。

「弾種榴弾、目標パールディア艦隊！」

「照準良し！砲撃準備完了！」

「撃ちく方始め！」

「了解、撃ちく方始め！てえ！」



同時刻

パールディア艦隊旗艦——

4基の主砲から放たれた12発の砲弾は、弧を描くようにパールディア艦隊の中心部に着弾した。

「何だ!？」

ポクトアールは中心に着弾した弾による爆発と衝撃で揺れた艦橋で尻餅をつく。

「砲撃です！敵艦からの砲撃です！戦列艦『オルジェル』『トレツリ』『ユリツチ』『フランキ』轟沈！」

「何！砲撃だと!?馬鹿な！この距離で撃って届く大砲があるのか!？」

先程現れた『日本国』と名乗る者が現れてから、状況が一変してしまった。

不思議な羽音を響かせる羽虫が警告を送ってきたが、それを無視して艦隊を前進させた途端にこの砲撃。しかも、爆発の衝撃と水柱の大きさから我々が保有するどの火砲よりも遥かに強力なのが分かる。

「見張り！敵艦との距離は分かるか！」

「ええと……………馬鹿な!!?30 km近く離れています！」

「何だと!!見た所10キロくらいの距離に居る筈だ！」

「角度と太陽の位置を確認しました！確かに敵艦は30 km近くは離れています！」

「まさか……………敵は我々の想像を遥かに越える程の巨艦だとも言うのか……………」

ポクトアールは『ひぜん』の大きさから『ひぜん』が近距離にいると錯覚を起こしていた。

次の瞬間、敵艦から火が吹いた。

ポクトアールの直感が警報を鳴らし、即座に命令を出していた。

「全艦回避行動!!急げ!」

その直後、艦隊のど真ん中で爆発が起き、巨大な水柱が12本上がると、側にいた艦が衝撃で海面から一瞬だけ浮き上がり、着水と同時に衝撃でバラバラとなる。

「…戦列艦『デュランベルジェ』『スタンフィールド』『ラフィット』『ボツビオ・アンドラーシユ』『メンゲルベルフ』『リード』『ブラウンスマ』『カルリエ』『ペドリーニ』『ミシユラン』消滅!」

「何!」

新旧10隻の戦列艦が一度の砲撃で消滅するなど、ポクトアールの常識から考えるとあり得なかった。

「……」

横の海では撃沈された戦列艦の残骸と、僅かながら乗員の姿もある。

「まさか……竜騎士隊はあの艦に撃墜されたのか……」

ポクトアールはワイバーンロードと戦列艦を消滅させるほどの戦力を持った船に恐怖していた。

「あの艦の情報を本国に持ち帰らなければ！ 本国はおそらく我が艦隊が撃沈されて怒り狂い、『日本国』に宣戦布告するであろう！ あの船が一隻だけとは限らん、最悪の展開になるかもしれない！」

ポクトアールの脳内には敵艦からの砲撃により灰燼と化する本国の姿があった。

「反転！ 直ちにこの海域から脱出だ！」

そう命令すると、水兵らは急いで艦を回頭させようとする。

だが、

「ウワアアア!!!」

突然ポクトアールの乗る艦が大きく揺れたかと思つた直後、彼は押し寄せる海水に呑み込まれ、自分に何が起きたのかを正確に把握する事なく海中に吸い込まれた。

ポクトアールを失つた東方艦隊は戦意を喪失し、向かってきた『ひぜん』と第7空母打撃群に大人しく降伏した。

だが、3隻が被害を受けることなくパールディアに帰港し、それを海自は弾代の無駄ということから攻撃しなかった。



2時間後——

フェン王国 首都アマノキ

フェン王国首都アマノキの港ではパールディア艦隊の降伏した戦列艦が並んでいた。

パーパルディア皇国のワイバーンロード部隊をあつさりと片付けた海上自衛隊と海上保安庁、その活躍を見て、文明圏に属さず、軍祭に参加した各国武官は放心状態となっていた。

「な．．．なんだ!!!あの凄まじい魔導船は!!!」

「なんとという恐ろしい力だ!!常軌を逸しているぞ!!」

「あの列強ワイバーンロードをあつかりと叩き落とした!!いったい．．．何なのだ!あの船たちは!!」

「日本という新興国家らしいぞ．．．」

「まさか．．．古の魔帝の流れを汲む者たちでは!?!」

「いや、あの旗を見てみる．．．白い下地に赤い丸．．．まさか!」

「．．．太陽神の使者!!」

「!!!」

「いや!!そんな筈がなからう。あれは御伽噺で．．．」

「だか、クワ・トイネ公国の森に太陽神の使者の方舟が保管してあると聞いたぞ」

「方舟って、あれか?」

そう武官が指す先には『しようほう』搭載のF-14Eがあった。

「なっ！あれが方舟か？」

「いや、分らん。見たことないからな……」

「とにかく、日本国の技術がパールディアより隔絶したことがわかった……国交を結び、できれば安全保障も……」

「なっ！我が国が一番初めに日本国に目を付けていたのだ！私が一番に国交を結ぶぞ！」

「いや！俺達だね！」

海岸から海を眺めていた文明圏外の国々の武官たちは、自分たちの常識とかけ離れた力を持つ灰色の巨大船に恐怖を覚えると共に、味方に引き入れる事は出来ないかを考え始めていた。

パールディア皇国を遥かに超える力を……もしかしたら、日本国は持っているのかもしれない。フェン王国の軍祭に来たのであれば、フェンとは友好関係にあるという事だ。

フェン王国と良好な関係を築き、あの船の国と仲良くなれば、もしかしたらパール

ディア皇国の属国化を防げるかもしれない。

奴隷としての国民の差出や、領土の献上等、もしかしたら：

フエン王国がパールディアの領土租借案を蹴った時は、フエンが焼き尽くされるのではないかとも思ったが、あの船の国と友好関係にあるのであれば、フエンが強気に出るのも理解できる。

後にフエン沖海戦と言われた海戦後、日本は急激に多数の国と国交を結ぶ事となる。



中央暦1639年9月27日午前

パールディア皇国 第3外務局ー

局長カイオスは、その報告を聞き、脳の血管が切れるのではないかと思われるほど激怒していた。

事の始まりは、フエン王国が皇国の領土献上案を拒否した事からはじまる。498年間の租借案という皇帝陛下の偉大なる「慈悲」も、双方に利があるにも関わらず、拒否される。

「フエン王国は、皇国をなめている」

このような意見が第3外務局内で主流になった。

数多の国々が存在するこの世界において、文明圏5カ国、文明圏外67カ国、国の大小はあるが、計72カ国もの属国を持つ列強。パーパルディア皇国にとつて、文明圏外の蛮国からなめられた態度をとられる事は、とても許容出来るものではない。

他の国々の恐怖の楔が外れては困る。このような事情もあつて、パーパルディア皇国第3外務局所属の皇国監査軍東洋艦隊22隻と、2個ワイバーンロード部隊が派遣されたのであつた。

ワイバーンロード部隊により、フエン王国首都に攻撃を行い、フエン人に恐怖を植え付け、軍祭に参加している文明圏外の蛮国武官に力を見せつける。

そして、艦隊による無慈悲な攻撃により、フエン王国首都 アマノキ を焼き払い、パーパルディア皇国に逆らつたらどうなるのかを他国に見せつける……という計画だつた。

しかし、結果は惨憺たるものだつた。空襲に向かつたワイバーンロード部隊は魔信を入れる間も無く、消息を絶つた。どうやったのかは不明だが、おそらく全滅したものと思われる。

これについては、当初ガハラ神国風竜騎士団が参戦したのではないかと疑われた。しかし、風竜は確かに強いが数が少なく、通信する間も無く全滅するのは考えにくい。その後に入ってきた情報、

『フェン王国水軍と、東洋艦隊が会敵し、敵水軍を一方的に殲滅中！我が方に損傷なし』
これは良い。蛮族相手なら当然の結果だ。そして、問題は次に入った情報だ。

『皇国監査軍東洋艦隊 敗北』

第3外務局に激震が走った。しかも、船団はたったの3隻しか帰らず、3隻の艦長は海戦の恐怖で頭がおかしくなったらしく、たったの1隻にやられたと、ありえない報告をしている。

艦長達の言い分によれば、

○灰色の超巨大船と会敵する。

○敵巨大船は速く、1度もこちらの射程距離にとらえることが出来なかった。

ここまでの報告でも、おかしい所は多々ある。まず、船が我方よりも大きいのに速いという部分。船が大きいと、当然水の抵抗は強くなる。パーパルディア皇国の使用している風神の涙は、はつきり言って世界一であり、『神聖ミリシアル帝国』でも、これほどの風神の涙は作れない。

我が国は、高純度の魔石が取れる鉱山もあり、精製も一流だ。つまり、超巨大船で我方よりも速い速度が出る訳がないのだ。

そして、艦長達の頭が壊れたと判断される決定的な報告内容、

た ○敵船は我々の大砲より大きい巨大砲を持ち、約3.5 kmの地点から砲撃を開始した

○敵船は巨大砲により10隻の戦列艦をまとめて殲滅させた

3. 5 kmもの距離を置いての射撃。文明圏の列強でさえ、現在は2 km飛翔する砲弾しか造れない。それを遥かに超える射程距離など、しかも文明圏外で、ありえるはずが無い。

もし、報告書が本当だとしたら、そのような距離から砲撃したとしたら砲自体が大きい

くなる。『巨大砲』と書かれているが、3.5 kmから砲撃する巨大砲、そんなの機械文明最強の『ムー』や世界最強の『神聖ミリシアル帝国』でも作られたという報告はない。しかも：いや、もうやめよう。これらの報告は、完全に負けた言い訳だ。文明圏外の蛮国がそんな超高度な兵器を持っている訳が無い。艦長以下の兵士たちは、口を噤んでいるという。

艦長に脅されているのかもしれないため、今後どんな敵で何隻いたのか、詳細な調査が待たれるところである。

皇国に泥を塗った敵がいるのは事実であり、ふざけた敵を殲滅する必要がある。しかし、敵が誰か知らなければ、攻めようが無い。

今回は負けている。皇帝の耳にも入るだろう。次は、監査軍ではなく、最新鋭の本国艦隊が動くこととなる。どこかの列強がバックについている可能性も高い。

第3外務局は「敵」を知るため、情報収集を開始した。



中央暦1639年9月27日午後

パールディア皇国第3外務局 窓口――

「申し訳ありませんが、本日課長と会う事は出来ません。」

日本国外務省の職員は、約束したパーパルディア皇国外務局の課長と会議のためやってきたが、窓口で再度足止めをくらう。

「何故ですか？約束したではないですか!!」

「ちよつと込み入った事情が発生いたしました。申し訳ありませんが、文明圏外の新興国と会議をしている状況ではないのです。予定は未定です。また1ヶ月以上後に連絡を下さい」

外務官は連絡がなかった為知る由もないが、日本が原因で第3外務局は忙しくなっていたため、この日も重要人物とは面会できず、日本国外務省の職員は、この日もトボトボ帰っていった。

フエン王国の軍祭の後、日本は文明圏に属さない国々と、次々と国交を結んでいった。今までは、日本から出て行き、調査して国交を申し込んでいたが、フエン沖海戦の後

はレトロな船にのつて次々とやってくる国が増えた。

海上保安庁は忙しくなったが、日本と国交を結んだ国は22カ国に増え、通商が始まった。

第2話 空想上の国

ある日

神聖ミリシアル帝国港町 カルトアルパス とある酒場――

中央世界にある誰もが認める世界最強の国、『神聖ミリシアル帝国』その交易の流通拠点となっている町、港町『カルトアルパス』。

ここは、各国の商人たちが集う町であり、商人たちの生の声は、各国の事情を現す生の声として、情報源としても、非常に価値があるため、商人の姿に紛れ、各国のスパイたちの集まる町でもある。

とある酒場では、酔っ払った商人たちが、自分たちの情報を交換していた。白い髭を生やした男が豪快に話し始める。

「しかし、最近の衝撃的なニュースはやはり第2文明圏の列強レイフォルが、新興国の第八帝国とやりに敗れたニュースだよな。誰か、第八帝国について知っている者いないか？」

その問いにフードを被った男が答えたが、彼は200m巨大船が攻撃してきたなどホラみたいなお話を吹いていたので酒場の人々は嘘と思つて聞いた。

酔つ払いどもの話は続く。

「そういえば、ロウリア王国つてあつただろ?」

「東の蛮国か?あの、人口だけは超列強な国だろう?」

「ああ、俺が交易にいつた時期に、隣のクワ・トイネ公国に喧嘩を売つたんだよ。亜人の殲滅を訴えてな」

「亜人の殲滅?無理に決まつてるだろう。さすが蛮族の国!」

「で、日本つていう国が参戦して、負けたよ。圧倒的に強かつたらしい。ロウリア王国は日本の兵を1人も倒すことが出来なかつたし、4400隻の大艦隊も、日本のたつたの1隻に大損害を与えられた。しかもその1隻は300mを超えるとか!日本も今後、世界に名を轟かせる国になるぞ!」

「兵を1人も倒せない、たつた1隻に4400隻が退けられた、300mの船とか、どう考えても情報操作だろう。ありえなさすぎる」

「ロウリア王国が負けた?列強や、文明圏なら理解できるが、文明圏外の蛮族に!?信じられんな」

「まあ、グラ・バルカス帝国や日本がいくら強かろうと、神聖ミリシアル帝国とは、格が違う。絶対に勝てないよ。結局、中央世界はいつまでたっても安泰さ！古の魔帝が復活でもしない限りな」

酔っ払いどもの楽しい夜は更けていった。



中央暦1639年10月5日

ムー国東側海域 第12空母打撃群所属『りゅうじょう』CDCー

日本国海上自衛隊第7艦隊第12空母打撃群は列強『ムー』との外交のため、ムーの東側の海に展開していた。

第12空母打撃群は元々日本北米軍の在米自衛隊の所属であったが、天皇陛下即位観艦式のため帰国、その際に転移した。

元々の配属場所であったアメリカが無くなったため、暇を持て余していた。そこに防衛省に外務省からムーとの国交樹立で海自の船を使いたいと頼まれ、ちようど防衛省に第12空母打撃群の司令官がいたため、速攻決定したのだ。

そんな運の悪い第12空母打撃群司令官『長谷川誠』准海将はCDCで『りゆうじょう』艦長『佐藤真一』一等海佐の報告を聞いていた。

「本当か？時速380km…『ワイバーン』は235km、最近確認された『ワイバーンロード』でも350kmだから…」

「飛行機機ですな、それも複葉機です」

「哨戒かな？発見して海軍に通報して貰えば良いんだが…」

「未確認機、^{アンノウン}まもなく本艦視認圏内です」

「そうか」

長谷川は艦橋に上がり、見張り場に行き、見張員と一緒に双眼鏡を除いて確認する。

「何処だ？何処だ？」

「あそこです！2時方向！」

見張員からの報告で皆一斉に報告があつた方向に向く。

「おお…本当に複葉機だ…」

「中華地方の航空祭を見てみたいだな」

「地球だと何に似てるんだ？」

「ソードフィッシュあたりか？」

そこには地球世界ではまず見ることのない複葉機が飛んでいた。

横切ると同時に見張員の一部が手を振る。攻撃目的ではないとアピールするためだ。複葉機の機体の横を見ると、クワ・トイネから教えてもらったムーの国章が目に入る。

「国章確認！ムーの航空機で間違いありません」

「ムーの国力は一次戦前後ぐらいか…衛星の写真でわかっていたが、実物を見るとなんだか不思議な気持ちになるな…」

「現在では複葉機は中華地方の田舎でも見れないですからね…」

「…!?ムー国機着艦体制！」

なんと複葉機は、着艦の姿勢に入っていた。

「ち、着艦するのか！」

「不味い！航空作業員、甲板から退避！応急作業員は待機！非常用に滑走制止装置の展開を急げ！」

空母航空管制室
「CATCC！万が一に備えよ！」

飛行甲板はてんやわんやになり、網のような滑走制止装置が貼られる。



数分前

ムー東側海域 ムー国空軍東側哨戒部隊第3哨戒班

ムー国空軍東側哨戒部隊第3哨戒班所属の『トーマス・ジェフリー』中尉は『マリン』戦闘機を操縦し、ムー国東側海域を哨戒していた。

東側海域はムーと国交を結ぶ船が多く来航するので大変な仕事である。だが、トーマスは他国の戦列艦が好きであり、天職と考えていた。

今日は何隻の船を発見するかな？など考え、哨戒していると視界の端に何やら船団が見えた気がした。

「(早速1船目かな?)」

そう思つて近づくと自分の目を疑う大艦隊が現れた。トーマスは反射的に無線のスイツチを押す。

「こちらトーマス!座標3—6—7地点に大艦隊発見!どの艦も我が海軍の大きさを驚愕し、空母と見られる一隻は300m以上!至急海軍の応援を要請する!」

「こちら司令部、300m以上の船など御伽噺か?」

「違う!本当だ!」

トーマスの物も言わぬ剣幕に司令部は真剣だと判断し、海軍に臨検命令を出す。

「こちら司令部了解、只今海軍に臨検命令を出した:未確認艦隊とコンタクトは取れるか?」

トーマスは機上用のサーチライトを取り出し、ボタンを押し込むが何も光らない。

「こちらトーマス、サーチライト使用不能、今より我が機が着艦しコンタクトを取る！」
『な！危険だぞ！もし相手が攻撃してきたらどうする！』

「司令部！300m以上の艦を作れる国家がそのまま進んできてオタハイトをやられたら、レイフオルの二の舞です！」

「私から10分以内に無線が繋がらなければ海軍に撃沈するよう命令してください！」
『…了解。死ぬなよ』

無線を切り、スロットルを上げて空母の後方に行く。

近づくとその大きさがよくわかる。

「（飛行甲板が斜めになっている…もしかして発艦と着艦で分けているのか？でもあの甲板の距離で発艦できないと思うし…よく分からないな…）」

トーマスは半年前まで海軍の航空艦隊所属であったために着艦のやり方を知っていた。

「ん？煙突がない?!?! どうやって動いているんだ?!?!?!」

よく見ると煙突がどこにもない。はつきり見える距離まで行くと艦橋から人が手を振っていた。

「こちらトーマス、巨大艦の乗組員はこちらに手を振っている…少なくとも敵対意識は無いようだ」

『了解、海軍が急いでいる。無茶なことはするなよ』

無線を切り、旋回して着艦姿勢に入る。巨大艦の方を見ると甲板の作業員が大慌てで退避している。

「そりやそうか、いきなり着艦しようとしたらそりやビビるしな」

ふと、飛行甲板の端を見ると『マリン』よりも大きい何かがあった。どうやら飛行機械のようだが、プロペラがない。

「(航空機が?しかしプロペラが無い、どうやって飛ぶんだ?)」

そう考えながら最終着艦姿勢になる。艦尾を見るとムー式の着艦誘導装置が見える。

「着艦誘導装置はムー式か…しかしマストの旗は見たことないし…一体どの国だ?」

空母を運用している『ムー』と『神聖ミリシアル帝国』とでは空母の着艦誘導装置が違い、

手旗手が見て高度を合わせるミリシアル式とランプを点灯して高度を調整するムー式があり、ムーの方が優れている。

ムーが誇る技術の一つのため、製作方法は公開されていないはずだが、こと巨大艦は実用化している。

内部から流出したかもしれない…そう思いながらスロットルを上げる。これは着艦に失敗したらいつでもタッチアンドゴーするためだ。

星形9気筒600馬力のエンジンがうねる。海軍の空母着艦用のフックがない空軍型マリンドが、飛行甲板が大きいため、ブレーキを掛ければ止まれそうだ。

そして前輪が着地した後、後輪が接地し、ブレーキをかける。20m滑走した後、無

事に着艦した。

「ふう…」

無事着艦したので安堵し、ゴーグルを上げ、パイロットキャップを取る。

そうすると艦橋から青い服をした者たちが駆け寄ってくる。

万が一のため、右足のポーチのリボルバーを握る。

だが、掛かってきた言葉は彼を安心させる言葉であつた。

「ムー国の人ですか？」

「え？あつはい。ムー国空軍東側哨戒部隊第3哨戒班のトーマスです」

「そうですか！私は日本国外務省の御園と申します、彼は私の補佐官の佐伯です」

「(ニホンコク？何処だ？)」

「初めまして。佐伯と言います」

「どうも…」

機体から降りて、二人から差し出された紙をまじまじと見ていると、彼は本来の目的

を思い出す。

「えーオホン！貴艦隊は間もなくムーの領海に入る。国交を開通することが目的なら今から通信するが…」

「！はい！是非！」

「は…はあ…」

その後彼は無線で日本国に敵意がないことを通信し、海軍の臨検を受けた。

臨検中、『りゆうじょう』見張り場では第12空母打撃群司令官『長谷川誠』准海将と艦長『佐藤真一』一等海佐と臨検に来たムー国海軍の巡洋艦（トーマスが言うには『ラ・ウォークスター』と言うらしい）を見ながら呟いた。

「ムーはこの世界でも穏健とは聞いても初めて交流するときにはドキドキしますね」「全くだ。ところであの複葉機、どうやって発艦するんだ？」

長谷川が指差す先にはトーマスが乗ってきた『マリノ』があつた。

ちなみに乗ってきた本人は食堂で臨検に来た海軍の人達や臨検艦隊指揮官・『ラ・

ウオークスター』艦長と一緒に海自のカレーに舌鼓を打っている。

「…カタパルトで…」

「いや、カタパルトだと発艦した瞬間吹き飛ぶだろ」

「…どうでしょう」

彼等の不安はトーマスが見事な技で発艦するまで彼等を悩ませることになった。



中央暦1639年10月6日

第2文明圏列強国 ムー国——

技術士官マイラスは軍を通じて伝えられた外務省からの急な呼び出しに困惑していた。外務省からの呼び出しは、空軍のアイランク空港だった。

列強ムーには、民間空港が存在する。まだ富裕層でしか飛行機の使用は無く、晴天の昼間しか飛ぶ事は出来ないが、民間航空会社が成り立っている。

民間の航空輸送は私の知りうる限り、神聖ミリシアル帝国とムーでのみ成り立つ列強

上位国の証である。

機械超文明ムーの発明した『車』と呼ばれる内燃機関に乗り、技術士官マイラスは空軍基地アイナンク空港に到着した。しかし、わざわざ急遽空軍基地に呼び出すとは、いったい何だろうか？

彼が着くと、軍人などがいた。

「今回君を呼び出したのは、正体不明の国の技術レベルを探してほしいのだよ」

マイラスは先程調べていた第8帝国のものだと思い、

「グラ・バルカス帝国の事ですか？」

「いや、違う。新興国家だ。本日ムーの東側海上に300mを超える空母を要する艦隊が現れた」

「空軍の哨戒機が着艦し、確認すると、『日本国』と言う国の特使がおり、我が国と新たに国交を開きたいと言ってきたのだ」

「（日本国！『キイ』を要する国だ！）」

彼は先程、グラ・バルカス帝国の『グレード・アトラスター』と日本国の『きい』という二つの戦艦を比べ、ムーの最新鋭戦艦『ラ・カサミ』と比較して危機感を募らせていた。

「我が国と国交を開きたいと言ってくる国は珍しい事では無いが、問題は、彼らの載ってきた乗物だ……全艦、帆船では無いのだよ。」

「まさか……」

「そして魔力感知器にも反応が無いので、魔導船でもない。機械による動力船であると思われる」

「やはり、そうですか……」

「そして、さらに問題なのが、我が国の技術的優位を見せるために、会談場所をアイナック空港に指定したら、飛行許可を願い出て来たのだよ」

「当初は、外交官がワイバーンで来るのか、なんて現場主義な国かと話題になった。飛行許可を出してみたら、飛行機械を使用して飛んで来る様なのだよ」

「!!!」

「ぞ、それでその飛行機械はいつ頃到着ですかな?」

「間もなく到着予定だ、どうやら日本国はグラ・バルカス帝国を警戒しているらしい」

「我が国の防空体制は完璧なのに……何故？」

「さあ？とりあえず空母艦載機が来るなら日本国の軍事力を図りたい。そのために君が呼ばれたのだよ」

「了解しました」

一向は滑走路近くの駐機場で日本国の飛行機械を待った。

その時、先導する空軍機から無線が入った。

『に、日本国の飛行機械は『マリリン』の速度よりも早い！護衛機はもつとだ！』

「！！！！」

「そ、速度はわかりますか？」

マイラスが訪ねる。

『飛行機械はおよそ550kmぐらい！護衛機は計り知れない！音もなく通り過ぎていった！』

「！！」

マリラスが驚愕する、音もないと言うことは音より早いと言うこと。つまり日本国はわが国を大幅に超える技術力を有すると言うことだ。

「(クソ！『キイ』が我が国より優れているなら空軍力も優れていると思うべきだった！」

「!!?!ナニカ！近づいてきます！」

ナニカが常識を超えた速度で近づいてくる。ソレは自分達の真上を通過した後旋回する。

その後何かが起こした行動にマイラスはまたもや驚愕する。

「な！な！な！なにに！！」

なんと飛行機は垂直に着陸したのである。マリンでもその様に垂直着陸などできるはずもない。

皆が驚愕しているとおそらく使節団を乗せた航空機がやってきた。

また、垂直着陸するのか、などの思っていたら今度はプロペラが45度回転して、そのまま着陸した。

「……………」

マイラスは言葉を失っていた。垂直着陸航空機など、我が国やおそらく神聖ミリシアルでも真似できないであろう。

日本国に興味を持った時、最後に着陸した飛行機の後ろが開き、中から人が降りてきた。

「！あれは輸送機か！成程、あれなら滑走路が無くても人員などを運べる！あの技術を知ることができたなら世界の戦術が変わるぞ！」

「日本国の外務省所属、御園です。こちらにいるのが、補佐の佐伯です」

「よ、ようこそ日本国の皆さん。私は皆様のご案内をさせていただくマイラスと言います……ところであの飛行機械はなんと言うのでしょうか？」

マイラスは御園が乗ってきた飛行機を指す。

「ああ、あれはV-22オスプレイと言います。我が国の輸送機です」

「そうですか…垂直着陸を2機ともするなど貴国は山が多いんですか？」

「ええ、国土の多くが山脈地帯で…あれやヘリコプターが多く重宝されています」

「（ヘリコプター？なんだソレは？）へ、へえ、あの戦闘機も興味深いですね」

マイラスの一言に佐伯が目を光らせる。

「お目が高いですね！あれはF-35B型と言って、ああ、A、B、C型があり！それぞれ違うのですよ！B型は垂直着陸型で、これまでの海兵隊主力戦闘機AV-8ハリアーIIよりステルス性が高まり戦闘力のアップが…それとAV-8はすぐくてですね！原型のホーカー・シドレーハリアーの発展型でなんとホーカー・シドレーハリアーは1960年、今から60年前の飛行機なんです！長生きの飛行機と言えばあと…」

「佐伯君、佐伯君。ムーの方達が困っているよ」

佐伯が目をやるとムーの人たちは佐伯の言葉に圧倒されていた。

「は、ははっ、飛行機が好きなんです。では私がムーをご案内しましょう」
「では、具体的にのご案内するのは、明日からとします。長旅でお疲れでしょうから、今日はこの空港のご案内の後に、都内のホテルにお連れします」

マイラスは、空港出口へ行く前に、空港格納庫内に使者を連れて行く。格納庫に入ると、白く塗られた機体に青のストライプが入り、前部にプロペラが付き、その横に機銃が2機配置され、車輪は固定式であるが、空気抵抗を減らすためにカバーが付いている複葉機が1機、駐機してあった。ピカピカに磨かれており、整備が行き届いた機体だと推測される。

マイラスは説明を始める。

「この鉄龍は、我が国では航空機と呼んでいる飛行機械です。これは我が国最新鋭戦闘機「マリン」です。最大速度は、ワイバーンロードよりも速い380 km/h、前部に機銃を付け1人で操縦出来ます。メリットとしては、ワイバーンロードみたいに、ストレスで飛べなくなる事も無く、大量の糞の処理や未稼働時に食料をとらせ続ける必要もありません。空戦能力もワイバーンロードよりも上です。」

本来なら自信満々で説明できるのだが、あの日本国の戦闘機を見たからにはそう説明できない。

「は……複葉機なのですね」

御園とかいう外交官が驚いて見ている。

「レシプロエンジンを積んでますねー。この感じが良いですね」

佐伯とかいう人間は、『マリリン』を懐かしそうに見ている。

「そういえば、貴方達の護衛機は何で動いているんですか？プロペラがなさそうですか？」

マイラスの疑問に、佐伯という人間が答える。

「F-35はジェットエンジンと呼ばれる航空機に適した小型高出力エンジンで動いて

います……もちろん、レシプロエンジンもありますよ」

!!やはり日本は、高性能エンジンを所有しているようだ。探りを入れた甲斐があった。

「ほう…日本にも航空機に適したエンジンがあるのですね。是非構造を教えてください」

「簡単な設計図や原理であれば、日本と国交を結んでいただけたら、書店でいくらでも購入できます。あと、日本と敵対しないことなら古い戦闘機を譲渡できます」

な、なんと！日本は戦闘機を売ってくれるのか！是非分解してみたい！

「旧式の戦闘機ですか…それは面白い。個人的には是非日本と国交を結べる事を願いますよ」

やはり、あの戦闘機のように日本は航空機技術について我が国を凌駕している。マイラスは、確認のため、探りを入れる。

「さっきの護衛機はどのくらいの速度が出ていますか？音が遅れて聞こえてくると言うことは音速を突破していると言うことですが…」

航空機は速度が重要だ。速度が上がれば、一撃離脱戦法により、速い方が圧倒的に有利である。

御園と佐伯は目を合わせる。ヒソヒソとマイラスに聞こえないように話し始める。

「どうしますか？音速を超えているのはバレていますが…」ヒソヒソ

「ま……まあ現代戦の速度は戦闘性能にあまり関係ないし、国内の市販本には色々F-15やF-22等の性能も記載してあるから、国交が結ばれたら判明するから隠すこともないか…」ヒソヒソ

「戦闘機であれば、我が軍の主力戦闘機であるF-15J改が最高速度マッハ2.5くらいです、時速2,421km。音速の2.5倍程度ですね」

「今回の護衛機のF-35Bの速度はマッハ1.6、時速1,931kmです」

「我が国最速の偵察機、SR-71はマッハ3、時速3,529kmです。これは音速の3倍の速さになります」

「!!!」
絶句…

音速越えだと思っていたが、これほど早いとは思っていなかった。

「そ、そうですか…では此方へ…」

マイラスは、日本の使者を、空港外へ案内する。ムーの誇る自動車に乗せてホテルへ向かおうとしたが、もう嫌な予感しかしなない。

空港外には、日本の使者を乗せる車が待機していた。馬を使わず、油を使用した内燃機関を車に積むまでに小型化した列強ムーの技術の結晶。

日本の使者は、驚く事無く車に乗車する。車は出発し、動き始める。特に驚いた様子はない。やはりそうか…

「日本にも、車は存在するのですか？」

マイラスは尋ねる。

「はい、乗用車であれば、3年前のデータですが、日本で約5942万台が走っています」
「そ…そんなに走っていると、道が車で一杯になってしまいますね…」

「我が国は、前世界においても、信号システムが世界一進んでいましたので…国交が樹立出来れば、是非信号システムについても輸出したいものです」

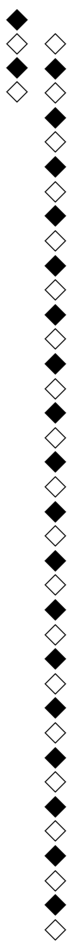
マイラスは精神的に疲れてきた。

この仕事が終わったらムー国内一番のアトラクションパーク『オタハイトマウスリゾート&パーク』に行くことを決意する。整地された道をホテルへ向かう。

やがて、高級ホテルが見えてきた。車はホテルに横付けされ、皆はホテルへ入る。

「明日は、我が国の歴史と、我が国の海軍の一部をご案内いたします。今日のごゆっくりとお休み下さい」

マイラスは、日本の使者にこう伝え、ホテルを後にした。



翌日

日本の使者は、ムー歴史資料館にいた。簡単にマイラスは説明を始める。

「では、我々の歴史について簡単に説明いたします。まず、各国にはなかなか信じてもらえませんが、我々のご先祖様は、この星の住人ではありません」

「え!?!」

日本の使者は驚きのあまりポカーンとした顔をしている。

マイラスは話を続ける。

「時は1万2千年前、大陸大転移と呼ばれる現象が起こりました。これにより、ムー大陸のほとんどはこの世界へ転移してしまいました。これは、当時王政だったムーの正式な記録によって残されています。これが前世世界の惑星になります」

マイラスは、地球儀を取り出す。外務省の御園は、見覚えのある地理配置に驚愕する。

「な……な……な……これ!!」

ふふん、日本人め、前世世界が丸い事に驚いているな。やっとな日本人を驚かせることが出来たぞ!

「前世界は丸かったのです。この世界も、水平線の位置からして前世界の2倍強はありますが、丸いはずですよ」

「地球だ!!!」

「はい？」

「これは…地軸の位置が少し違うのか？しかし、この配置は紛れも無く地球だ。む？南極大陸がこの位置にあるということは、氷に覆われてはいなかったということか…」

「なんだか、日本人が大陸を指差して驚いている。説明してやるか。マイラスは、南極大陸を指示し、説明を始める。」

「ちなみに、この大陸はアトランティスといひまして、全世界では、ムーと共に、世界を二分するほどの力を持った国家でした。ムーがいなくなつた今、おそらく世界を支配しているでしょうね」

「ちなみに…」

マイラスはユーラシア大陸の横にある4つの大きな島が集まっている場所を指示す

る。

「この国は、ヤムートといって、我が国一の友好国だったそうです。しかし、転移で引き裂かれたため、おそらく今はアトランティスに飲み込まれているでしょうけど…」

「ちよつとよろしいですか？」

御園がマイラスの発言に割って入る。

「どうぞ」

「日本を説明するのに、一番良い方法が出来ました」

「はい？」

「日本も転移国家です。同一次元にあった星かは不明ですが、おそらくあなた方の昔いた星から転移してきたとおもいます。あなたが指差したこの4つの島が我が国です。そして…」

御園はバッグから地図を出す。

「これが現在の日本地図、そしてこれが私たちの過去にいた世界の地図です」

日本地図、そしてメルカトル図法を使用した世界地図がマイラスに見せられる。その地図には、たしかにムーのいた、ムー大陸の存在しない前世界地図があった。

衝撃……御園が言葉が続ける。

「我々の元いた世界にも、1万2千年前に、突如として海に沈んだ大陸があると、言い伝え程度ですが残っています。あなたが今アトランティスと呼んだ大陸は、南極になってしまっているようですね。もしかしたら、地軸がずれたのかな？」

「ははは……まさかの歴史的発見ですね。あなた方日本とは、個人的には友好国となってほしいものです。まさか……そんな事が……後で、すぐに上に報告いたします」

その後、マイラスは簡単に歴史を伝えた。一通り説明が終わり、日本の使者を海軍基地へ案内する。

だが、魔写で撮られた日本の『キイ』を思い出す。あれは『ラ・カサミ』の何倍もある艦だ。

これから説明するのが不安でしか無い。

ここには、ムー国海軍の最新鋭戦艦『ラ・カサミ』が停泊していた。

「御園さん、見てください。戦艦ですよ、戦艦!!!やはり戦艦は男のロマンですね」

佐伯という名の人物がはしやぎ始める。やはり戦艦を知っているか…

「佐伯君、ちよつとはしやぎすぎですよ。しかし、記念艦の三笠にそっくりですね」

記念艦…もしかして日本には『キイ』以外の戦艦もあるのか!?

マイラスは『キイ』を知らないふりをして探りを入れる。

「日本にも戦艦があるのですか?」

「あ、はい。我が国には『きい型戦艦』2隻と『とさ型戦艦』1隻がいます」

!!やはり、日本は戦艦を3隻持っているようだ。

「その戦艦の主砲の口径は何cmですか?『ラ・カサミ』は30cmですが…」

「とさ型は46cm、きい型は51cmですね」

5、51cm!!なんて大ききさだ!

「!!!!!!」
 「そうですねか……ところで、先ほど日本の艦に似ているとおっしゃっていましたが、日本にも似た艦があるのですか?」

「あ、はい。日本では三笠と呼ばれる戦艦がありました。約110年前に日本が大日本帝国と呼ばれていた時代に存在した連合艦隊の旗艦です。この艦があそこに停泊している戦艦にそっくりに見えましたので……」

「ほう……110年も前の艦ですか……」

日進月歩の機械動力戦艦で、110年もの歳月をかければ、劇的な進化を起こす。日本は認めたくないが、どうやらムーよりも機械文明が遥かに進んでいるらしい。

51cmの砲を作り、音速を遥かに超える飛行機を作る国……できれば第8帝国のためにも仲良くしておきたい……

技術士官マイラスの案内が一通り終わり、ムー首脳陣に報告が上がる。受け入れられないような内容の報告書であったが、敵対してくる訳でもなく、高技術が手に入るかもしれない国、グラ・バルカス帝国の脅威が存在するこの状況下にあつて、友好的な態度

をとる日本国を拒否する理由は無く、ムーは日本との国交を結ぶ事になる。



パーパルディア王国 皇都エストシラントロー

第1外務局は混乱の極みにあつた。原因は皇国よりも西の中央世界、そしてそれより更に西の第2文明圏に2つ存在する列強国、その一つ『レイフォル』が、正体不明の国家『グラ・バルカス帝国』に敗れた事にある。

列強レイフォルとパーパルディア皇国は、規模で言えば皇国の方が遥かに上だが、海軍の武器の性能は良く似ていた。しかも信じられない事に、列強レイフォルは、グラ・バルカス帝国の『グレードアトラスター』と呼ばれる超巨大戦艦たった1隻に艦隊を全滅させられ、ワイバーンロードの波状攻撃を防がれ、さらに首都レイフォリアを攻撃され、首都は灰燼に帰したという。

超列強国が西の果てに突如として現れた。第1外務局長『エルト』の脳裏に嫌な予感が駆け巡る。第3外務局所属の皇国監査軍が東のフェン王国に対し、懲罰的行為を行った際、敗戦している。

もしも…グラ・バルカス帝国の息がかかっていればとんでもない事に…

「とにかく情報を集めよ!!」

彼女は部下に強く指示するのだった。そんな中、一つの情報が彼女の元に入る。

「これは…?」

手元に置かれた簡易報告書、その内容にエルトは大きい目をさらに大きくする。

パーパルディア皇国国家戦略局でロウリア王国と日本のロデニウス沖大海戦に参加していた観戦武官の『ヴァルハル』なる人物から、外務局宛に当てられた文章。

【監査軍敗北の直接的原因は日本という国家にある】

彼の文章は、ロデニウス沖大海戦の戦果報告が偽りの無いものであるにも関わらず、その戦果が全く国家戦略局に信じてもらえない事が必死に記されていた。

「日本という国についてもっと調べろ!!」

パーパルディア皇国はついに、日本国について本格的に調べ始めた。

第3話 憤慨する日出ずる国

パーパルディア王国 皇都エストシラント 第1外務局――

日本国に注目してから数日後、第1外務局長エルトの指示により、日本の情報がかなり集まってきた。

まず、グラ・バルカス帝国とは関係が無く、国旗は白地に赤の丸であること。これにより皇国監査軍を退けたのはほぼ日本であることに間違いは無いと思われる。

監査軍のワイバーンロード部隊が全て未帰還となっているが、どうやったのかは不明である。

ロウリア王国と、日本の対戦について、『ヴァルハル』なる人物が荒唐無稽な報告書を挙げてきているが、彼を医師に診断させたところ、精神病を患っていたとのことであり、この報告書は信用に値しない。

日本については、第3国経由でおもしろい情報を入手した。日本国は、軍備に現時点で国内総生産の3%程度しかかけていないらしい。

これでは、多少装備の質がよかろうが、いかなる大国だろうと、数がそろわないため、軍としてはたかがしれている。

○舐めてはいけないが、恐れるほどの国ではない。

○日本が軍備を拡張する前の現時点で叩いておくのが良策である。

第1外務局は『日本国』についてこのように結論付けた。



パーパルディア王国 皇都エストシラント 皇城――

国の重臣たちが平伏し、緊張が場を占める。

パーパルディア王国の皇帝『ルディアス』が出席する最高会議が始まろうとしていた。

「それでは、これより帝前会議を始めます」

議長があいさつし、その後皇帝が話し始める。

「アルタラス王国は完全に掌握したな？」

皇帝ルディアスに突然問いかけられた軍の最高司令官アルデが返答する。

「はい、アルタラス王国内は完全制圧できました。現在本軍は撤収の準備にかかっています」

アルタラス王国は、皇国から国内最大の魔石産出量を誇るシルウトラス鉱山の献上と王女の奴隷化という理不尽な要求を突き付けられ、開戦を決意。

王も国民も勝てるとは思っていなかった様だが、予想を上回る戦力差のため、戦闘開始から僅か3日で占領されることになった。王族も脱出した『ルミエス』王女を除き、皆殺しにされた。

「次の軍の使用法だが…第2外務局長『リウス』、どう考えるか？」

「はっ!! 北方の蛮族を滅し、新たな資源獲得を……」

「却下だ」

話を遮り、皇帝はリウスの案を一蹴する。

「は……はいつ!!!」

皇帝の気を悪くさせたら、皇国での死を意味する。

リウスは冷や汗を掻きながら、皇帝の言葉を待つ。

ゆつくりと、皇帝は話始める。

「余は……怒っているのだ」

リウスはその言葉に顔を青くする。誰も何も言えない空気が流れる。

「監査軍を1度退け、調子に乗っている蛮国が東にいるな……」

「「……………」」

「日本国……とかいったな？」

「ふん……まずは日本と友好関係にあるフェン王国を滅せよ。昔から生意気な国だしな。日本と友好的な国はどうなるのかを世界に知らしめるのだ」

皇帝の話は続く

「地理的にも、フェン王国の方が我が国に近く、日本を先に攻めるのは得策ではないしな
…異論のある者は？」

誰も何も言わない。

皇帝ルディアスは軍の最高指揮官『アルデ』に顔を向ける。

「出来るか？アルデ」

「はい、もちろんであります」

「監査軍を退けた日本も出てくるかもしれないぞ？」

「当然撃破いたします」

「栄えある皇国に、旧式装備の弱軍とはいえ、文明圏外国家に敗北するとは…第3外務局
と監査軍は皇国の恥であります」

「くっつっ!!!」

第3外務局長カイオスの顔が苦痛に歪む。アルデは話を続ける。

「陛下、フェン王国の東に隣接するガハラ神国についてはいかがされますか？」

「ガハラの民には構うな。あの国はまだ謎が多すぎるし、風龍相手だと『ワイバーンオーバード』も武が悪い。1戦で2国を相手にするのは、あつさりと勝てるだろうが、原則として避けたい」

「私の代で例外は作りたくないな…それに…ガハラ神国には皇国初代皇帝が世話になったからな……」

「戦略や細かい所はお任せしていただいてよろしいでしょうか？」

「うむ、お前の好きにしてよい。そうだな…フェン王国については、戦後の国土や民の扱いまでも好きにして良い。あそこには何も無いしな」

「「な!!!」」

一同に衝撃が走る。

1国の領土と民をたかが1機関が好きにして良いとの皇帝陛下からの暖かいお言葉、アルデは考える。軍人にある程度振り分けたとしたら、軍の士気はとてつもなく上がる事だろう。

たった一国の蛮族を滅ぼしただけで、我が一族の栄光は長年続くであろう。

この件で、皇帝は激怒したという。

「ああ……もう!!なんで私だけこんな貧乏くじを引かなければならないのよ!!」

その後は報告書の嵐であった。彼女は、今までは出世願望があつたが、今回の一件で消し飛んでしまった。

彼女が落ち込んでいるとその時、

「こんにちは、日本国の外務省の者です。何度も申し訳ありませんが、課長様のご予定はその後どうなりましたでしょうか?」

ライタが顔を上げると、そこには自分の出世の道を断つた日本という国の使者が立っていた。

「(ああ、最悪!……何で私の窓口に来るのよ!!こいつらは!!隣の窓口も空いているでしょう!?!こんな時に私の窓口に来て!私を報告書の嵐で殺す気なの?過労死させる気!?)」

彼女は叫びたくなかったが、ぐつと声を飲み込む。相手が相手だけに、今回はすぐに上司に報告することにした。

「しばらくお待ち下さい…確認してまいります」

第3外務局の皇帝陛下からの信頼を地に落とした相手だけに、上司はその上司へ、課長は部長へ、そしてその上へ迅速な報告が行われた。

一時してー

「お待たせしました。第3外務局長カイオスが対応いたします。どうぞこちらへ」

外務省職員は顔を見合わせる。いきなり局長との会談、完全に想定外だ。

他の国々の使者で、今の声が聞こえた者たちは驚愕の表情で日本の使者を見つめる。普通は絶対にありえない措置だった。

日本の外務省職員は、窓口のある建物とは別館に案内される。外務省職員は待合室で雑談する。

「なんだか、ルネサンス期の建造物みたいですね」

「ええ、イタリアに旅行に行った時の城の待合室に似ています」

雑談をしていると、ドアがノックされ、先の窓口勤務員のライタが入ってくる。

「局長カイオスの準備が整いました、どうぞこちらへ」

ライタについて廊下を歩く。何度か曲がり、やがて重厚な扉の前に着く。

戸を優しくノックする。

「どうぞ」

「失礼します」

中から声が聞こえると、ライタが先に入る。

「どうぞ、こちらへ」

日本の使者がライタに続いて入室する。中に入ると、数人の男がテーブルに座っていた。

ライタが日本国外務省職員に話しかける。

「ここで自己紹介をして下さい」

「そうですか…」

日本国の外務省職員は、ライタに言われるがまま、自己紹介を始めた。

「日本国、外務省職員の朝田です。こちらは私を補佐する篠原です」

「どうぞかけて下さい」

最奥の男が声をかけ、朝田、篠原は席につく。

「(なんだか、会談というよりも面接みたいだな…)」

「(列強だから上から目線なのか…少し厄介な事になりそうだな)」

パーパルディア皇国の面子も自己紹介を始める。どうやら、外交担当でも相当権力を持った者たちのようだ。

朝田の手に力が入る。パーパルディア皇国の出席者は

○第3外務局長

○東部担当部長

○東部島国担当課長

○北東部島国担当係長

○群島担当主任

第3外務局長カイオスが口を開く。

「貴方たちが日本国の使者か…最近貴国は色々と有名ですな。して…：…今回は何用得皇国に来られたのだ？」

「はい、私たちは、不幸な行き違いから衝突してしまいました。よって、その関係修復と国交樹立の可能性の模索に参りました」

いきなり、東部島国担当課長が立ち上がる

「なんだとっ!!! 不幸な行き違いだあ!! 監査軍に攻撃を仕掛けておいて、何事も無かったかのようなその言動! タダで済むと思っっているのか!!」

課長はいつも文明圏外国家の使者に対して行うのと同じ口調で日本人に活を飛ばす。『(地球での外交で序列が一番上だったから珍しいな…)』と思いながらも朝田は怯まな
い。

「いいえ、先に攻撃してきたのはあなた方です。我々は、降りかかる火の粉を払ったに過ぎません」

「栄えある皇国監査軍を火の粉だとおっ!!!」

課長の目は血走っている。局長カイオスが、課長を手で制し、座らせる。

「なるほど…関係修復ですか…」

局長カイオスは考え込む

「うむ…私はもとより、このパールディア皇国の者は、誰も貴方たち日本の事は良く知らない」

「まずは貴方たちの国がどういった国なのか、教えていただきたい。我々と国交を結ぶに値する国なのか、私は知りたいですな」

外交官達はバックから資料を取り出す。

「ペーパーしかありませんが、写真付きです。我が国を紹介するための資料です」

篠原はパールディア皇国の各人に資料を配布する。

パールディア皇国の面々は、その資料を見る。フィルアデス大陸共通語で書かれており、文はしっかりと読める。

「な……………」

東部担当部長が顔を上げる。

国土面積は大した事無く、中規模国家程度である。しかし、人口が3億2千万人と、皇国の7千万人よりも多い。

文明圏外国家でも、ロウリア王国のように、人口だけが多い国もあるので、この人口に対して特別に驚いた訳では無いが、こんなにも人口の多い国がこれほどまでに近くにあったのに、今までの歴史上1度も気がつかなかったのがおかしい。

さらに資料を読み進める。

「国」と転移だど!」

ロウリア王国とクワ・トイネ公国との戦争の少し前、中央歴1639年に国ごとこの世界に転移してきたと記載してある。

突然の転移であれば、皇国がこれまでの歴史上1度も認知していなかった事実についてまが合う。

だが、ムーの神話や、古の魔帝の未来への国家転移の神話以外に、国ごとこの転移など聞いたことが無い。

第3外務局からすると、彼らがたわごとを言っているようにしか聞こえない。

「馬鹿馬鹿しい!!そんな、国ごと転移などあるわけがない!!おまえたちは皇国をからかっているのか?」

東部担当課長が声を荒げる。

「転移については、我が国でも、原因がまだ解っておりません。全力で調査中ではありませんが……」

日本側の説明が一通り終わる。

「最後に……特使を一度日本に派遣していただきたいと思えます。パーパルディア皇国大使の目で現実の日本を感じていただきたいのです」

東部担当部長が話し始める

「はっはっは!!第3文明圏最強の国であり、世界5列強に名を連ねるパーパルディア皇国が、文明圏外の蛮族に使者を送るだ?!少し質の高い軍を持っているようだが、お前たちが戦ったのは旧式兵器を持った軍だ!!本軍の装備と規模であれば、こうはいかんど?!」

局長カイオスは、東部担当部長を睨みつける。

「おい、言い過ぎだ。日本との関係は、皇帝の御意思も入っている事を忘れるな」

「は……はっ!!」

東部担当課長は着席する。

「ところで、日本の方々よ、我が国には文明圏内に5カ国、文明圏外に67国、大小の差はあるが、計72カ国おっと、最近アルタラス王国が加えられたので、計73カ国の属国があるが、日本は何カ国属国をお持ちか？」

「属国…勢力圏であれば前の世界では友好国と世界を二分する勢力圏を持つてましたが…この世界では属国はなく、勢力圏もロデニウス大陸のみです」

「ほほほほ…」

「はっはっはっは…」

「ぬるっふっふっふ…」

パーパルディア皇国の面子が笑い始める。

「ここから、日本の方々に失礼だぞ。属国を1カ国も持っていないからといって、そんなに笑うものではない。ここは外交交渉の場ぞ」

カイオスが皆をたしなめる。

「失礼……ところで、皇国から日本への人員派遣については、2ヶ月ほど待っていただけですか？こちらの色々と内部事情がありますので……2ヶ月後にまた第3外務局へ来ていただけますか？宿はこちらで手配しましょう」

「はい、解りました」

「ふ……では、2カ月後が楽しみですね」

カイオスは不気味に笑う。日本のパーパルディア皇国との最初の会談は終了した。

——会談後

「カイオス様、何故あのような穏便な事を？皇帝陛下の命では、『日本にきつちりと教育を行え』だったはず。つまり、日本なぞに遠慮すること無く、かの国の外交官に皇帝の意思を伝えた方が良かったかと思いませんが……」

「ふふふ……まあ良いではないか。日本への外交担当のトップは私だ。わずかな可能性だが、私にも少し考えがあつてな」

「お考えとは？」

「まあ良い、余計な詮索をするでない」

「ははっ!! 申し訳ありませんでした」

「日本か……我が期待にこたえるだけの国力がある国だと良いのだがな。まあ、ただの蛮族ならば、このまま滅されるのみだ」

カイオスは不気味な笑いを浮かべるのだった。



2週間後

フェン王国西側約200km先洋上——

見る者に圧倒的な恐怖をもたらす艦隊が東へ向かっていた。

第3文明圏最強軍の『パールディア皇国軍』である。

100門級戦列艦を含む砲艦211隻、竜母12隻、揚陸艦101隻、合計324隻。

向かう先はフェン王国。

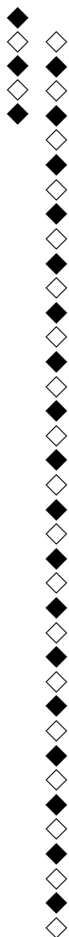
皇国からの領土献上案を蹴り、監査軍を日本国支援の元、退けた。

皇軍は、フェン王国に対し、懲罰的攻撃を行うのでは無く、滅すために東へ向かう。今回は監査軍が事前に敗北しているため、将軍シウスの肩に力が入る。

「警戒を厳とせよ」

「了解！」

皇軍は、アルタラス王国に続き、フェン王国を滅すために東へ向かった。



同時刻——

日本国 首都 東京 内閣総理大臣官邸

慌しく動き回る職員、閣僚が真剣な面持ちで報告を受ける。

防衛省からの情報により、パールディア皇国軍が大艦隊で東へ向かったと判明した。

他国を通じて得た情報等総合的に判断すると、艦隊はフェン王国へ向かったと思われる。

「どうするっ?」

総理が大臣達に尋ねる。

「フエンには国交がありますが…日本人は外交官が大使館にいるのみです」

「幸いにも巡視艇がアマノキに入港しているので、それで避難させれば良いかと…」

「フエンに武器を給与中ですが、旧式なので列強レベルであると実用化されてるものぐらいです」

「そうか…なら自衛隊が動くことは無いな」

総理が一安心したとき、扉が勢いよく開かれ、男が外務大臣に耳打ちする。

男の言葉を外務大臣が聞くと、彼は顔を青くした。

「総理、緊急事態です。日本人の団体ツアーの旅行客がフエンにいるようです」

「!!!」

「に、人数は!」

「お、およそ80人ほど…」

総理は立ちくらみを起こす。

「なぜだ！フェンへは外務省から渡航禁止令が出てたぞ！」

「それが…新ロウリア共和国から渡航したと…」

団体は戦国時代や江戸時代の町並みが揃っていると耳にし、裏ウェブサイトで旅行者を集め、ロウリア共和国から極秘にフェンへ入国していた。

「直ちに旅行代理店に確認を取れ！」

「はっ！」

「防衛大臣、フェンに一番近い自衛隊の部隊は」

「北京基地の空自輸送部隊が一番手っ取り早く行けますが、フェンには大規模空港がないので無理です」

「香港港に停泊中の第8艦隊第82揚陸隊の揚陸艦に海兵隊の第13海兵隊遠征隊が即応展開部隊で一番早く行けます…」

「ですが…最低でも6時間以上はかかります」

「できる限りのことはなんでもやってくれ、金がかかっても構わん」

『最悪の場合』…パーパルディア皇国に宣戦布告する…」

「…最善を尽くします」

防衛大臣は部屋を出て、走りながら考える。

「（確実に間に合わない…一人でも良いから救う。『最悪の場合』は候補の一つだ…）」



パーパルディア皇国 皇都エストシラント 第1外務局

第3外務局長のカイオスは第1外務局に呼び出されていた。

本来ならば、外務局間で人事交流はあるとはいえ、公的機関同士の外務局間で、しかも局長クラスを呼び出すなどありえない事だった。

しかし今回は『皇帝の命令書』を携えて第1外務局の担当がカイオスの元にやってきたため、局長クラスが第1外務局に出頭していた。

第3外務局長カイオスは、第1外務局長室の前に立つ。装飾品で飾られた重厚な扉、何度見ても嫌になる。

第1外務局員が扉を開き、中へ案内される。

部屋の中には、第1外務局長『エルト』、次長『ハンス』、下位列強担当部長『シラン』、そして見たことの無い20代後半の美しい女性が1人座っていた。

カイオスは面々に1礼する。

「皇帝陛下命での、第1外務局からの呼び出しとは…どういった御用件ですか？」「解らぬのか？身に覚えが無い訳ではなからう」

座っていた美しい女性がトゲのある言葉を発す。

「失礼ですが…どちら様ですか？」

カイオスが問う。

「外務局監査室のレミールだ」

外務局監査室、各外務局の不正や国への対応がまずい状況になった場合を考慮し設置された組織であり、同監査室によって監査を行い、場合によっては担当者を処分もしくは同外交案件について、同部署が担当する場合もある。

なお、エリート集団である外務局を監査するため、監査室の構成員はすべて皇族である。

つまり、眼前のレミールと名乗る女性は皇族という事になる。カイオスはレミールに頭を下げる。

「して、いったい何の事でしようか」

カイオスはゆっくりと問う。

「日本の件だ。確かに、文明圏外国の担当は第3外務局で間違いは無く、局長はカイオス、お前だ。しかし、皇帝陛下は『日本にきっちりと教育を行え』と御発言された」

「日本との初会議録を見たぞ。なんだ？あの国賓のような対応は？」

「蛮族のたかが1担当者にあるうことか局長その他重役が首をそろえ、対応し、しかもその内容が弱腰外交、いや、平伏外交というほかない」

「列強たる皇国の担当が、こんな…陛下のご意思も読み取れぬとは…なさけないな。カイオスよ」

カイオスは額に汗を浮かべる。レミールは続ける。

「カイオスよ、今後日本との外交は、第3外務局ではなく、第1外務局が行う事とする。外務局監査室から私が第1外務局へ出向するという形をとり、今後日本国への外交担当は私が行う事とする」

「カイオスよ…皇帝陛下のご意思が読み取れぬ愚か者は皇国にはいらぬ。今回処分されなかっただけでも、ありがたく思え」

「今後、せいぜい気をつけるんだな」

「(小娘が…偉そうに!!!)」

カイオスの拳に力が入る。

「は…承知いたしました」

第1外務局の重役の前での屈辱的なこの仕打ち、まるで晒し者だ。第1外務局長エル

ト以外は僅かに笑みを浮かべている。

こうして、パーパルディア皇国の日本に対する外交担当は、第3外務局から第1外務局へ権限委譲され、実質的に皇族であるレミールが担当となった。



フエン王国 西部 ニシノミヤコー

フエン王国西部に位置するニシノミヤコ、パーパルディア皇国と戦争になった場合、そこは最前線となるであろう場所のため、武人が約2千人常時配備されている。

ニシノミヤコの約3km西側には人の住めない小島がある。この小島はパーパルディア皇国が侵攻してきた場合の監視塔としての役割を与えられた武人が2名常駐していた。

良く晴れたその日、波は穏やかだった。

機械音がないため、音といえば波と風、そして虫と鳥の鳴き声くらいのものだ。

見張り員の目に粒のような小さな黒い点が多数見える。小さなけし粒は徐々にその姿を大きくし、それは自分たちに絶望を与えるものだと理解する。

「つ……つ……ついに来たぞ!!! パーパルディア皇国軍だ!!! 狼煙をあげろ!!!」

日本であるとデフコンーに相当する最上級の警戒色、赤い狼煙が島からあがる。

「あ……あれは!!! つ……太鼓を鳴らせ!!!」

赤い狼煙を見たニシノミヤコの監視員は即座に通信用の太鼓を鳴らす。」

その笛を聴いた武人たちは、さらに伝播のために太鼓を鳴らす。

ニシノミヤコの町全体に太鼓の音は鳴り響き、フェン王国の人々は何が起こったのかを理解する。

ニシノミヤコの港から内陸方向に約5 km地点にある西城では、すぐに戦の準備が始まる。ニシノミヤコの港付近にある兵の詰め所でも武人たちが戦いの準備を進めていた。

ついに、覚悟はしていたが、列強パーパルディア皇国軍がやってきた。彼らがとてもなく強いのは理解している。

しかし……タダでは負けない! こちらには日本の武器とある戦法があるのだ!

フェン王国軍は覚悟を決めるのだった。



パーパルディア皇国軍——

將軍『シウス』は部下からの報告を受ける。すでに竜母のワイバーンロードがニシノミヤコ上空に達しており、偵察を開始している。

ニシノミヤコでは大軍はおらず、目立ったものといえば、少し内陸に入った所にある西城と、港近くの兵の詰所である。

皇軍は出港から現在まで敵に遭遇しておらず、監査軍がフェン王国水軍を滅したとの報告からも、もうフェン王国には水軍は残っていないのだろう。

「まずは海岸堡を確保したいな……」

大軍を陸に上げるため、橋頭堡を確保したいが、いきなり港に船をつけさせてくれるほど甘くは無いだろう。

ニシノミヤコには一箇所だけ広大な海岸があるため、そこに上陸することを決める。上空からの偵察情報によれば、海岸には貧相な木製の防壁が設置されているようだ。

「まずは、港近くの敵兵の詰所に艦砲射撃を行い、これを破壊する。続いて海岸に設置された木製の防壁を砲で破壊する」

「破壊後に、第一次上陸部隊として1000人の歩兵を上陸させ、海岸堡を確保し、その後地竜や主力軍の陸戦兵器の揚陸を行う」

「はっ!!」

シウスの命令は下された。



数刻後――

数時間前には平和であった国に厄災が訪れる。

100門級戦列艦を含む皇軍の一斉射撃により、パールディア皇国とフェン王国の戦いは始まった。

静かだった町は燃え始め地獄のような世界が展開する。

港にあった兵の詰所は6発もの砲弾の着弾により、あっさりと崩れ落ちる。

町の所々から火の手と煙が上がる。

「助けてー！！！！」

「だれがー！！！！」

「血が…血が…」

逃げ惑い、パニックになる人々。その上から容赦なく砲弾の雨が降り注ぐ。

パーパルディア皇国軍の艦砲射撃は『強烈・熾烈』の一言であり、港の兵の詰所と海岸の木製の防壁は粉碎された。

海から海岸を見る限り、海岸にある構造物は粉碎された木のみである。

パーパルディア皇国陸軍歩兵第1軍第3小隊第4分隊長である『アルマ』は、上陸用の小船の上から海岸を眺めていた。

表情には余裕が見られる。上陸用の小船は総数100艇、人員にして約1000人が海岸に海岸堡を確保するために徐々に近づく。

フエン王国という文明圏外に属する蛮族を滅すために、我々はその先頭に立つ。アルタラス王国を滅した時には、地竜の脇を抜けてきた敵騎兵をマスケット銃で撃つて倒した。

何事にも変えがたい高揚感だった。今回も、指を動かすだけで、敵を一撃で倒せる威力のある、皇帝陛下から皇国臣民へ頂いた銃がある。

今回も楽に勝てるだろう。

現に、海岸にはすでに木の残骸が散らばるのみであり、弓ではその先の森からは届くまい。大型投石機があつた兵の詰所はすでに魔道砲により粉碎された。

「楽な仕事だなあ」

皇国全体が『必ず勝つ、しかも被害はほとんど無しで勝つ』と思つている。小船は海岸に接岸し、上陸を開始する。

約1000人の全てが海岸に到着した。反撃は全く無い。少し散開し、辺りを見回す。

「やけに静かだな…」

「…俺たちに恐れを成したかな…?!?!?!」

そういった途端、夥しい数の銃弾が森から撃たれる。不意をつかれた何十人が砂浜に斃れる。

「な！なんだ！」

「なんて連射力だ！」

「ええい！撃ち返せ！」

「弾幕が凄くて顔を出せません！」

パーパルディア国軍はその弾幕に圧倒される。

その時、一時的に弾幕が止む。

「!!はっ！弾切れか！蛮族らしいな！陣形を組め！」

生き残ったパーパルディア兵は急いで陣形を組む。

「よし！突撃？」

「なんだ？この音は？」

上空から風切り音が聞こえる。

次の瞬間、

「な！な！なんだあつ！」

「砲撃だ！伏せろお!!」

砲撃（擲弾筒の攻撃）によつて兵達が爆発四散する。

一時的に凌ぎ、また陣形を組もうと森の方に目をやると、煙が充満していた。

「？煙幕う？」

「好都合だ！行くぞ！」

アルマは前進を開始する。

「（よくもやってくれたな…畜族め!）」

そう思つて煙の中に前進すると、横から絶命音が聞こえる。

「グアッ！」

「け、けむりのガツ！」

「どうした！返事をしろ！」

周りから声が聞こえなくなり、不安になったアルマは走る。

「(なんだ！この煙は！何が！)」

煙を抜けるとそこには、剣を持ったフェン王国兵がいた。

「!!!フェン王国兵!!!」

アルマは銃を向けようとするが、至近距離のため、銃を向けるのに時間がかかる。距離が近すぎる!!!

「チエストオオオオオオオオオオ!!!」

かん高い気迫の籠った声をあげながら、フェン王国兵はアルマに向かってくる。

「ちくしょう!!!」

銃を放り投げ、腰にある剣を抜く。

「ウオオオオオオオツ!!!」

フェン王国兵は上段から剣を振り下ろす。

カキン!と音が鳴り、火花が散りアルマの剣とフェン王国兵の刀がぶつかる。

「なっ!!!」

剣を防ぐ事に必死だったアルマの注意は上に向く。

すぐに左斜め下から上に向かい、刀が向かってくる。剣速が速い
!!!!!!

「な……か……か……ぐ……そっ!!」

フェン王国兵の刀は体に埋まり、アルマは血飛沫をあげながら崩れ落ちる。

煙幕の外にいるフェン王国兵は200名にも及び、敵味方が入り乱れ、銃の使えない

至近距離での戦いが始まった。

フェン王国軍の小隊長は日本の本を読みあさっており、パーパルディア皇国軍の艦砲射撃を有効に回避し銃に剣が勝つには、塹壕を掘り、煙幕で攪乱し、銃が苦手な近距離に持ち込んだ。

パーパルディア皇国軍は過去にこのような戦法をとられたことは無く、混乱する。

結果的にフェン王国兵は全滅するし、海岸堡の確保には成功するが。パーパルディア皇国の歩兵は890名も戦死することになる。

陸上兵器を揚陸するには第二次上陸隊から何人か上陸させなければならなくなり、時間が遅れることになる。



パーパルディア皇国軍上陸後——

日本人観光客はフェン王国西側の町、『ワオリ』に来ていた。政府から海兵隊がそこに来ると連絡を受けたためである。

「来たー！」

上空を見ると海兵隊のCH-47FJが飛んできた。団体の前に着陸し、後部ランプドアが開く。

ドアの近くには90式車載7.62mm機関銃が設置してあった。

「皆さん！早く！乗ってください！」

「ありがとうございます！ありがとうございます！」

観光客は涙ながらに機内へ行く。

「これで全員ですか？」

「ええ、あつ！野村さん達と田中さん家がないわ！」

「なんですと！」

「誰かどこ行つたか知ってる人はいない!？」

「俺知ってるぞ！野村さん達は宿に荷物忘れたって戻って、田中さんちは真希ちゃんが迷子になったって探してたぞ！」

「不味い…探しに…」

そうであろうとすると奥の家の奥から人影が現れる。

「！人だ！撃てっ！」

パーパルディア兵である。彼らはパーパルディア皇国軍主力武器のマスケット銃を撃つ。

「キヤア！！」

「撃てっ！！」

観光客が悲鳴を上げる中、海兵隊員は90式機関銃を操作し、パーパルディア兵に向けて撃つ。

現代兵器に勝てるはずもなく、パーパルディア兵の何人かは斃れる。

だが、人数が多く、このままでは万が一ローターに弾が当たると離陸できなくなる。せつかく救出した観光客を無化にできないと思った指揮官は撤退を命じる。

『のと』まで行け！早く離陸しろ！」

「残った人はどうするんですか！」

「今は生き残った者の命だけを考えろ！」

「ツ!!(すまん……)」

CH-47FJは洋上の揚陸艦『のと』に着艦した。



パーパルディア皇国 皇都エストシラント 第1外務局――

実質的に日本国担当かつ全権大使となり、外務局監察室から第1外務局所属となった皇族のレミールは、この日、日本国の外務省の担当者に対し、『すぐに来るように』との内容で命令書を出した。

命令書は第3外務局を通さずに、直接日本国外務担当者のいるホテルへ届けられる。

「……フェンのことか……」

「名目上は説明文のとおり、皇国の外交担当組織が変わったからでしょう……しかし、実際

はフエンのことだと私は思います」

外務省の朝田と篠原は不安を抱きつつ、ホテルを出る。皇軍の準備していた馬車に乗ると、馬車は静かに出発した。

何分か後、馬車は皇帝の住まう皇宮の門へ到着した。

第3外務局の時は、皇宮の外の建物に入っていったが、今回は皇宮の内部に担当部署があるようだ。門を抜け、皇宮の敷地内に入る。

白を基として、美しい建造物が並び、庭は完璧に整備されている。

やがて、一角にある建物の前に馬車は到着した。皇国の使者の招きにより、馬車を降車し、建物に入る。

優雅な庭、廊下を通過し、一行は重厚な黒色で出来た扉の前に至る。皇国の使者が扉の中を確認してくる。

「どうぞ、お入り下さい」

使者の招きにより室内に入る。その先には、豪勢な椅子に腰掛けた20代後半くらいの美しい銀髪の女性が座っていた。

細い体系をしており、頭には金の環をかぶっている。朝田らは、彼女の鋭い眼光に

よって睨みつけられたが、元世界一の国力を持った国の外交官だ。動じない。

日本国外務省の一行は皇国の使者から促され、椅子に着席する。女性が話し始める。

「パーパルディア皇国、第1外務局のレミールだ。貴様ら日本にたいしての外交担当だと思つて良い」

「日本国外務省の朝田です。こちらは篠原といいます。急な用件との事ですが、どのようなご用件でしょうか？」

今にでもフェンのことで問い詰めたいが、沈黙する。

「いや、今日はお前たちに面白いものを見せようと思つてな…皇帝のご意思でもある」

高圧的な声でレミールは語りかける。

「それはそれは、いったい何を見せていただけなのでしょうんか？」

レミールは使いの者に目を走らせる。ドアが開き、1m四方の立方体の水晶のような

ものが現れる。

「これは、魔導通信を進化させたものだ。この映像付き魔導通信を実用化しているのは神聖ミリシアル帝国と我が国くらいのものだ」

「そうですか」

「デカイテレビ電話のようなものだろう。いったい何が始まるのか。国力を見せ付けたいだけなのだろうか。」

「これを起動する前に、お前たちにチャンスをやろう」

日本人からすると、少し質の悪い紙が配布される。

「フィルアデス大陸共通言語で書かれたその紙には、要約すると以下の事が記載してあった。」

【パーパルディア皇国皇帝ルディアスから日本国へ注ぐ】

○日本国の王は、皇国人とし、皇国から派遣された者を置くこと。

○日本国内の法を皇国が監査し、皇国が必要に応じ、改正できるものとする。

○日本国軍は皇国の求めに応じ、必要数を指定箇所に入投できることとする。

○日本国は皇国の求めに応じ、毎年指定数の奴隷を差し出すこと。

○日本国は今後外交において、皇国の許可無くしてあたらな国と国交を結ぶことを禁ず。

○日本国は現在把握している資源の全てを皇国に開示し、皇国の求めに応じてその資源を差し出すこと。

○日本国は現在知りえている魔法技術のすべてを皇国に開示すること。

○パーパルディア皇国の民は皇帝陛下の名において、日本国民の生殺与奪権利を有する事とする。

○日本国民は………

「な!!!なんだ!これは!」

拳を強く握り締め、朝田は外交の場であるのにもかかわらず、敬語を無くす。この内容では、属国以下であり、最悪な植民地状態である。飲める訳が無い。

「皇国の国力を知らぬ者が行う愚かな抗議だな。おまえたちの国は比較的皇国の近くに
あるにも関わらず、皇国の事を知らなさ過ぎる……」

「当初いきがっていた蛮族も、普通なら皇都に来れば意見が変わる。態度も条件も軟化
する」

「しかし、おまえたち日本はこともあろうか、当初から治外法権を認めないだの、通常の
文明圏国家ですら行わないような……そう、まるで列強のような要求だ」

「お前たちは皇国の国力を認識できていない。もしくは外交の意見が実質的に本国に
通っていない。通っていても、それを認識する能力が無い」

話は続く

「お前たちは皇国監査軍を押し返した。しかし、部内的な問題だが、当時の艦長らは精神
が病んでいたにすぎない。現に、艦長らは医師に精神病を勧告されている。これはつま
り、監査軍におまえたちが勝ったのではない。我が国の部内的な問題だ」

一時の沈黙が流れる。

「では問おう。日本の外交担当者よ。その命令書に従うのか、それとも国滅びるのか」

命令書の内容に従える訳も無いが、いきなり列強と戦争をしても良いといった指示も受けていない。

「断る。貴様らがやっつてゐることは列強では無い。ただの未開人だ」

銀髪の女、『レミール』は、顔を怒りに任せる。

「我が偉大なるパーパルディア王国を蛮族だど!!……………やはり蛮族には教育が必要なようだな。皇帝陛下のおっしゃるとおりだ」

レミールは続ける。

「哀れな蛮族、日本国民よ。お前たちは皇帝陛下に目を付けられた。しかし、陛下は寛大なお方だ。お前たちが更生の余地があるか…教育の余地を与えてくださった」

目の前の女は何が言いたいのか。真意を計りかねる。

「ホッホッホ……これを見るがいい！！！！」

レミールが指を鳴らすと、眼前の水晶体に質の悪い映像が映し出される。朝田はその映像を見て絶句する。

「なっ！」

「フェン王国のニシノミヤコを攻め落としたが、こやつらは、我が国に対する破壊活動をする可能性があるのでは……スパイ容疑で拘束している」

首に縄をつけられ、各人が縄で繋がり、1列に並べられている人々が7人。着ている服から日本人だと分かる。

「に……日本人!!……彼らはフェン王国に観光に来てただけで、何の罪も無い人々だ。あの人らに危害を加えるならば我々は容赦しないぞ！即時解放を要求する！」

沈黙……

「要求する？ 蛮族が皇国に要求するだど!? 立場をわきまえぬ愚か者め」

レミールは通信用魔法具を取り出す。

「処刑しろ」

「なっ!!!」

剣が一行に並べられた一番左の男の首にめり込み、鮮血がほとぼしる。

『あなたああああ!!!………いやあああああ』

女性の悲鳴が聞こえる。

『ひい! やめつやめつてつ!!!』

叫んでいた女性の首に剣がめり込む。

『おかあさああああん……うわああああえ! 嫌だ!! やめてえええ』

小さな子供も処刑される。悲鳴…絶叫…地獄絵図。

「貴様らあ!!!今すぐやめさせるんだ!!!」

朝田は絶叫していた。

「お前たちは、自分が何をしているのか解っているのか?!!」

「お前たちだと…蛮族風情が皇国に向かってお前たちだと!!?!」

「蛮族蛮族と偉そうにしているがな、あなた方こそ、我が国の国力を見抜けない。いや、見ようとしてもしない。盲目的に目を瞑る…愚か者だよ!!!」

「…皇帝陛下は何故このような愚か者たちに教育の猶予といった御慈悲を与えるのか…」

「まあいい。そんな大口を叩けるのも、いつまでかな?止めることが出来ない自分たちの国力の無さを痛感するが良い。そして、本国が消滅の危機にさらされているということを学ぶがよい」

「アマノキが落ちるまでに、日本が我が国の要求を飲むか飲まないかを決めるがいい。

そこで、日本国本国の運命も決するであろう」

既に、水晶体の中に映る日本人はすべて動かなくなつた。

「私は日本国の全権大使ではないが、これだけは言わせてもらおう」

朝田は怒りに震える。

「貴様らの行為は、日本国政府は元より、3億2000万人の日本人全てが猛烈に怒ることだろう」

「彼らは確かに違法的に入国したが、それでも日本人に変わりはない。ただ平和に暮らしていた人を一方的に虐殺する行為は、あなた方は理解できないかもしれないが、日本人の目には、とても野蛮な行為であり、そのような野蛮な国は、すぐにでもなくなつて欲しいと日本人は願うだろう」

「今回の行為に関して、日本国は、決して見てみぬふりはしない。行為の主犯者には必ず償いを受けてもらう」

「日本国の本当の国力をあなた方が知つたときのあなたの顔が今からでも思い浮かぶよ……滑稽だな」

「今回の行為は、地球で恐れられた我が軍の本当の力を解放させるであろう…次に来た時には精々この辺が核に汚染されていないことを願うんだな」

「貴様らは眠れる獅子を叩き起こすどころが銃で撃った…覚悟しとけ」

こうして、会談は終了した。

観光客93人を救うも、7人の日本人が殺された。この事実は激震となつて日本中を駆け回つた。中には『不法入国したんだから当然だろ』という声もあつたが、その発信元は何日か後になくなつていた

最早日本国民の脳内からは彼らが不法入国したことなど消え去つていた。それ程日本人が惨めに殺されたのが効いたのだ。

そしてテレビで放送された内容が日本人の奥底にある何がの精神アメリカンスピリッツに反応した。『日本人が殺された。我々は同胞を殺した敵に正義のため、征伐しなければならない』

このマスコミの内容によって世間は参戦へと傾いた。



2時間後——

「間もなく首相の記者会見が開かれます」

日本人に対するフェン王国での大虐殺は、全ての国民の知るところとなった。パーパルディア皇国の蛮行は、日本のみでは無く、日本と国交を有する全ての国にも知れ渡った。

通常の国が相手なら戦争になるだろう。

しかし、相手はパーパルディア皇国である。多くの文明圏外国家であれば、列強の国力の強大さから、国民7名もの少人数であれば、目を瞑るだろう。

しかし、今回の当事者は日本である。皇国はその国力の強大さから、日本がどういう国か判断を誤ったのだろう。

日本と外交関係にある各国の外務担当は、日本国内において、テレビを食い入るように見つめる。

シャッター音が鳴り、安倍野首相がスーツ姿で現れる。顔は険しく、いつも記者と軽口を叩き合う笑顔など微塵もない。

演題に首相が立つと、ざわついた空気が静まり返る。首相はゆっくりと話始める。

「皆様、知つてのとおり、フェン王国のニシノミヤコがパールディア皇国の攻撃により陥落しました。ここにおいて、逃げ遅れた何の罪もない日本人が捕らえられました」

「外務省がパールディア皇国に観光客であるため、すぐに釈放するように要求しましたが、彼らは……信じられないことに、非道なやり方で日本人を虐殺しました」

「……私達は、この蛮行に目を瞑つてはいけません!! 今回の虐殺の首謀者には、必ず捕まえ、罪を償つてもらいます!!」

「このままパールディア皇国を放置すれば、彼らは調子に乗り、中華地方・本土まで押し寄せることでしょう」

「日本政府は日本を、日本人の命を守るという事に責任があります。そして、我が国の同盟国であるフェン王国、他国だからといって、一方的な侵略を受けていいというものではありません」

「正義は此方にあるのです! 傍若無人なパールディア皇国を絶対に許さない!」

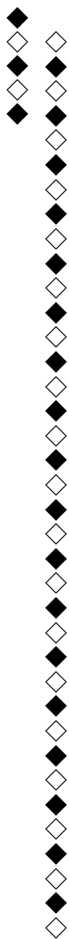
「話の通じない侵略者に対しては、断固とした態度で対応し、彼らを追い払わなければいけない!」

「我が国と同盟国たるフェン王国は、お互い協力しあい、日本人を守るために侵略者をフェン王国からたたき出す事で意見が一致いたしました」

「私は首相として、全自衛隊に対し、日本を守るためにフェン王国を奪還するよう命令し

ました」

シャッター音が鳴り響く。様々な質問が行われ、首相会見は終了した。



トーパー王国 城塞都市トルメスー

「号外!!号外!!!」

情報屋が新聞を配っている。その見出しにトーパー王国の人々は目を丸くする。

《日本国と列強パーパルディア皇国がついに衝突へ!!!》

「おい、どつちが勝つと思う?」

「そりゃあ日本だろ?魔王ノスグーラを倒したあの鉄龍を見ただろう?あんな常識外れなとんでもない兵器をもってるなら、日本が勝つに決まってるだろう?」

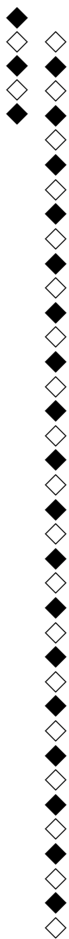
「しかし、相手は世界の上位列強国だからなあ。パーパルディア皇国がアルタラス王国を攻めた時も、ほとんど兵に被害が無かったらしい」

「全面戦争ならパーパルディア皇国有利と見るぞ」

「だが、あんな地龍、パーパルディアも作れない！日本が優勢だぞ！」

「そうだな、日本が勝つき」

日本の国力を一部でも知るトーパ王国では、日本が勝利するといった意見が優勢になった。



アルタラス王国 王都ル・ブリアス 地下組織——

パーパルディア皇国に攻め滅ぼされ、実質的に属国となったアルタラス王国、しかし、皇国は全て掌握できておらず、対皇国の地下組織も僅かではあるが存在する。

そんな地下組織に第3国経由で魔通信が届く。

「軍長、面白い通信が届きました」

軍長は紙に目を通す。

「文明圏外の2カ国連合が皇国と戦争をするようですね。軍長はどっちが勝つと思えますか？」

「ふう…文明圏外の2カ国程度なら、皇国の圧勝だろう？我が国は文明圏外だったが、装備のレベルは文明圏国家と同レベルだった。それでも皇国には手も足も出なかった」

「まあ、少しでもダメージを与えてくれれば良いが、現実には領土が広がって、国力が増すだけだろうが…」

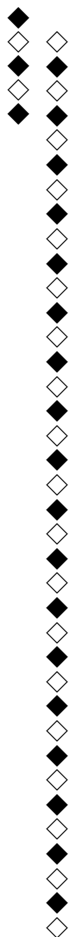
「日本という国を知りませんか？」

「知らない」

「私はこの戦い、面白くなると思います。日本はクワ・トイネ公国をロウリア王国の侵攻から救った実績があります」

「うむ、ロウリアを破ったなら確かにすごいが、皇国は別格だぞ？まあ無理だろうな」

彼らはルミエス王女が日本に救助されたと知らなかったため、アルタラス王国地下組織では、この情報に希望を抱く者はほとんどいなかった。



第2文明圏 列強国ムー

パーパルディアア皇国、日本国の2カ国と国交を有するこの国は、どちらに観戦武官を派遣するのか会議を行っていた。

負ける側に武官を派遣すると、戦闘に巻き込まれ、死亡する可能性が高くなるため、派遣先は十分に見極める必要性があった。

両国共に、ムーが観戦武官の派遣を要請すれば、受け入れるだろう。

「以上の報告から勘案するに、日本国は極めて高い機械文明を有しており、部分的にはムーをも上回る技術があります。観戦武官は日本国に派遣したいと思うがよろしいか」

ムーの軍人が手を挙げる。

「報告書には何度も目を通した。しかし、私が気になるのは報告書の真意だ。本当なのか？我が国を上回る技術というが、実物を見たのか？そして、戦力としてパーパルディア皇国を上回る武力の投入が可能なのか？」

「国力については間違いない。国交樹立の際、対応した哨戒機の操縦士、臨検した艦隊の

「たら国力は落ちる。世界の主導権でも握りたいのか？」

「しかし、その2カ国も勇敢だな。国民のほとんどが不幸になると解っていて従属しないとは」

「剣の国、フェンと新興国日本だ」

「日本？あの日本か??これは、皇国も珍しくダメージを負うかもな」

酒場では、皇国圧勝という意見が大半を占めた。



日本国 鹿児島県 種子島宇宙センター 第2射点ローリー

ロケットの発射台にそれは置かれていた。

全長63.6m、重量574t。地球であれば静止衛星軌道上に6.5tもの打ち上げ能力を有する日本の技術の結晶、H3ロケット。

内部には、自衛隊の索敵に使う偵察衛星が収容されていた。カウンタダウンが進む。

「フライトモードオン [Flight mode on]、12. 駆動用電池起動 [Start the drive battery]、11. 10. 9. 8. 全システム準備完了 [All systems ready]、7. 6. 5. 4. 3. メインエンジン

フエン王国は救われた。
剣王は日本国へ全面的に協力するよう部下に下命した。

第4話 開戦

中央暦1640年1月下旬

パーパルディア皇国 皇都エストシラント 皇帝ルディアスの私室――

第3文明圏最強・最大の都市であり、あらゆる富が集まる場所、皇都『エストシラント』。

その国力の象徴とも言える皇城に住まうのはパーパルディア皇国第13代皇帝『ルディアス』。彼の私室には1人の銀髪の女性がいた。

「レミール、この世界のあり方について、そしてこのパーパルディア皇国について、お前は どう思う?」

ルディアスの質問に銀髪の女性『レミール』が応える。

「はい、陛下、多くの国がひしめく中、皇国は第3文明圏の頂点に立っています」

「多数の国を束ねる方法として、我が国では恐怖を用いています、これは非常に有効的

であると思います」

「そう、恐怖による支配こそ、国力増大のためには必要だ。神聖ミリシアル帝国や、ムーは近接国と融和政策をとっている。そんな軟弱な国よりも我が国が下に見られている事自体が我慢ならない」

「我が国は、第3文明圏を統一し、大国、いや、超大国として君臨する」

「何は第1文明圏、第2文明圏を配下に置き、パーパルディアによる世界統一により、世界から永遠に戦争を無くし、真の平和が訪れる」

「それこそが、世界の国々の人のため…そうは思わぬか？レミールよ」

レミールは感動に震える。

「へ…陛下はなんとという器の大きいお人なのだろうか!!」

「…陛下がそれほどまでに世界の民のことをお考えだとは…レミール感動でございませす」

レミールは、感動のあまり、目に涙を浮かべている。

ルディアスは続ける。

「そのためには、多くの血も流れるだろうが、それは大事を成し遂げるための小事、やむを得ない犠牲だ」

「そして、皇国の障害となる者たちは排除していかねばならない」

「はい!!!」

「そういえばレミール、フェン王国と日本についてはどうなっている？そなたの口からも聞きたい」

「はい、皇軍については、フェン王国のニシノミヤコを落としました。その時に、7名ほどの日本人を捕らえ、日本との会談に役立てました」

話は続く。

「我が国の要求を伝えたところ、日本は我が国を侮辱するような返事をしたため、捕らえた日本人全員を魔画通信で中継しながら殺処分いたしました」

皇帝は薄ら笑いを浮かべる。

「ほう……7名はちと少ないが、それはさぞかし慌てた事だろう。私の言ったとおり、教育の機会を与えたのだな……して、「反応は？」」

「蛮族らしく、大声をあげていました。陛下、あのような民は滅ぼした方が良い思おうのですが、何故あのような者たちにも教育の機会が必要なのでしょうか？」

「……私はどんな蛮族でも等しく滅びから回避する機会を与えなければならぬと思つてゐる。それでも気付かぬ愚か者たちであれば、滅してしまえばよい」

「解りました。陛下、日本とはフェン王国の首都アマノキを落とし、我が軍の強さを見せつけて再度会談をいたします」

「そこで、我が国の要求を拒否すれば本格的な殲滅戦に突入するのか、陛下の判断を仰ぎたいと思つております」

「そうだな、承知した」

レミールの左上に装着してあるブレスレットが光り始める。怪訝な顔をするレミール。

「公務だろうか？……今は公式な場では無い。私的に話をしていただけだ。その魔信を使つて良いぞ」

レミールは皇帝に一礼し、私室の魔信を使用する。

「何事だ」

『日本の外交官が急遽話をしたいと申し出ておりますが、いかがされますか？』
「解った。行くので待たせておけ」

レミールは魔信を切る。

「陛下、今話していた日本が急遽会談をしたいと申し出てまいりました。教育の成果、陛下の御慈悲に答えるのかもしれませんが。行ってまいります」

「蛮族とはいえ、国の存亡がかかっており、必死なのだろうな。予約無しでの会談については、許してやるがよい」

レミールは部屋を出ようとするが、はつとした表情で振り返る。

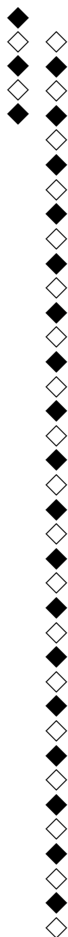
「陛下、今日は他にどこも予定がありませんか？」

「いや、無い」

「では、公務終了後に戻ってまいってもよろしいでしょうか？」

「うむ、良いぞ」

レミールは満面の笑みで部屋を出て行った。



第2文明圏列強 ムー国 ーーー

技術士官のマイラスは、軍の上層部に呼ばれていた。

「と、いう訳で、技術士官『マイラス』、戦術士官『ラツサン』の2名は本日付けをもって、観戦武官として日本国への派遣を命じる」

申告が終わり、具体的説明に移る。

○ムーと日本は2万1千km離れている。それだけ広大な距離であるため、航空機の航続距離は不足している。

○よつて、1番航続距離の長いレシプロ旅客機『ラ・カオス』（巡航速度280km/h、航続距離7000km）を使用し、同盟国連絡用のムー専用空港を使用、3回の中継地を経て日本に向かう。

○中継地では迅速な給油を行い、すぐに飛び立つが日本までは5日かかる。

○日本にはすでに連絡してあるが、日本の領空近くになると、日本の戦闘機の護衛を伴い、西側の都市香港市の空港へ着陸する。

○日本からは、ムーの観戦武官の到着を前にして、フェン王国奪還の可能性がある旨説明を受けており、我が国もそれを了承している。

以上の事から、戦闘途中からの観戦になる可能性が高い。

説明が終わり、マイラス、ラッサンの二人はすぐに準備に取り掛かる。

3時間後、マイラス、ラッサンと食料等を乗せたムーの誇る最新鋭旅客機ラ・カオスは遙か彼方の日本国に向け、飛び立った。

長い飛行だった。ワイバーンでは絶対に出来ない航程だ。

ムーを飛び立って5日目の朝、レシプロ旅客機『ラ・カオス』は日本に接近してきていた。

間もなく日本の防空識別圏と呼ばれる飛行圏内に突入し日本の戦闘機の護衛が来るはずだ。

「どんな戦闘機が来るんだろう?」

接触時に日本の戦闘機を見た技術士官のマイラスはワクワクしながらそれを待つ。マイラスとは裏腹に、戦術士官のラッサンは冷めている。

「文明圏外だ、どうせ大した事は無い」

「いや、俺が対応した時は凄かったぞ」

「我が国と国交を結ぶために特別に『神聖ミリシアル帝国』に頼んだんだろ」

そういった話をしていた時、機内においても解るほどの雷鳴の轟きが2回聞こえる。条件反射的に首を窓に向ける。

矢じりのような形をしたプロペラが付いていない戦闘機とすれ違う。その機はすぐ

さま旋回し、速度を合わせて旅客機と並ぶ。

「は…速い!!!」

二人は啞然とする。

「プロペラが無いぞ!!!」

ラッサンは戦慄する。

ムーの旅客機は日本の戦闘機『F-22』の先導により、日本へ近づく。

やがて日本の領土の上空に入り、香港空港が近くなる。空から見る初めての日本。眼下には人口750万人の先進的な都市が見える。

やがて、見たことも無いような立派な滑走路に着陸する。

自分たちの乗ってきた旅客機が…列強ムーの技術の結晶である最新鋭機がおもちゃに見えるほどの、巨大で美しい機体が空港の駐機場には多数並んでいる。

「とんでもない国に来たな…」

マイラスは自分の任務の重要性に身震いするのだった。



パーパルディア王国 皇都エストシラント 第1外務局101

日本国外務省の朝田と篠原は、パーパルディア王国の第1外務局を訪ねてきていた。レミールが応対する。

性悪な笑みを浮かべ、レミールは尋ねる。

「急な来訪だな。まあ、国の存続がかかっているのだ。その気持ち、無理も無いな」

「皇国は寛大だ。アポ無しではあるが、国の存続がかかっている者たちだ。今回は許して使わそう」

話は続く。

「して…前回皇国が提示した条件、検討結果を聞かせてもらおうか」

朝田はゆつくりと発言する。

「今からお伝えする事は、日本国政府の正式な決定事項です」

「ほう、やつと皇国の力を理解したのか」

「(譲歩を引き出すために交渉に来たか…小賢しいな)」

「ではまずあなた方、パーパルディア皇国のために下記の提案をいたします」

朝田は公文書をレミールに手渡す。

○現在フエン王国に展開する全ての軍を即時撤退させること。

○フエン王国に対し、被害を与えたため、公式に謝罪し、賠償を行うこと。なお、賠償については建物に与えた実被害額の20倍を支払うこと。

○日本人の虐殺に関し、公式に謝罪し賠償を行う事。賠償額に関しては被害者遺族に一人当たり1000000000パソ(皇国通貨)分を、金に代え、支払うこと。

○今回の日本人虐殺に関し、日本の刑法に基づき、処罰を行うため事件に関係した者の身柄をすべて日本に引き渡すこと。

「!!!何だ…これは!!!」

「上記が確約されなければ、日本国は、実力でフエン王国から皇軍を排除いたします。もちろん、排除しただけでは終わりません」

「なお、犯罪者には貴女も当然入っており、パーパルディア皇帝も虐殺の嫌疑がかけられている重要参考人ですので、身柄を引き渡していただきます」

「…やはり蛮族だな。皇帝陛下の御慈悲が解らぬとは…戦争により自国の民を滅したいのか？」

「いえ、あなた方の旧式な兵器で我が国の本土など1mmも侵攻できませんよ」

「…蛮族が!!…無礼な!!…」

「この犯罪者の引き渡しは、皇国民のためなのです。このままでは、我が国は無差別爆撃をしなければなりません。それ程まで日本国民は怒っているのです」

「ですが、我々は、皇国の一般市民が攻撃に巻き込まれて死者が出ることをあまり良しとしません」

「…馬鹿だな。お前たちの国は、文明圏外国家の中では自信があるのだろうか、列強と文明圏外国家の根本的な国力差が全く理解できていない」

「まあ良い。まだ教育が必要なようだ。フエンのアマノキを落とした後、我が軍の実力を知るが良い」

「そこで、止められない自らの力を思い知る事になるだろう。その後の会談が楽しみだ

な」

「お前たちは皇帝陛下の寛大な御心により、生かされているという事を忘れるな。皇帝陛下がその気になれば、殲滅戦になるぞ?」

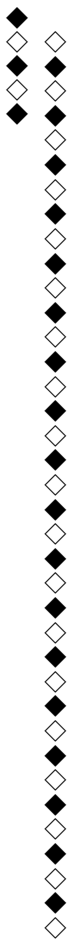
「すべての国民が処分されるということが現実になる事を理解しろ」

「では、私どもも通告します。日本国は報復の為、実力をもってフェン王国よりパーパルディア皇国軍を排除いたします。排除後に、再度会談をいたしましょう」

「犯罪者の引渡しは日本国政府の絶対に譲れない条件です。日本の意思は強いとご理解いただきたい」

「あと一点、日本国に降伏する場合は、白旗を振ってください」

会談は日本の攻撃の意思を明確に示し、終了した。



パーパルディア皇国 皇都エスとシラント 第1外務局執務室――

レミールは書記に作らせた報告書に目を通していた。横には局長エルトも同席し、書面に目を通す。

「蛮族が…滅亡に向かって突き進む…か」

彼女は続ける。

「トップが馬鹿だと大変ですな。日本はすべての民が消滅の危機にさらされているという事が全く理解出来ていない」

哀れみすら感じる。皇国は多くの国を滅してきた。

今回もその一部になるだろう。坦々と処刑される蛮族の姿が頭に浮かぶ。

次の瞬間、ドアがノックされる。

「入れ」

次長『ハンス』が決裁書類を持って駆け込んでくる。その顔色は悪く、酷く緊張している。

「どうした？」

エルトは尋ねる。

「今回のフェン王国の戦いに関し、観戦武官の派遣の有無を列強に調査いたしました」
「神聖ミリシアル帝国については、今回も派遣をしないとの回答でした」
「うむ、いつもの事だな。で、ムーは何時派遣してくるのだ？」

ハンスの顔が緊張に包まれる。

「その…ムーは皇国へ観戦武官の派遣はしない旨回答してきました」
「ほう、珍しいな。ムーが派遣をして来ないとは。戦闘の収集癖が無くなったのか？」
「……………」

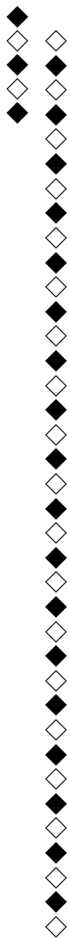
ハンスは言葉を選ぶ。

「ん？どうした??」

「ムーは…日本に観戦武官を派遣した事が判明いたしました」

「…え!!!?!」

「!!!!!!」



中央暦1640年1月28日

ガハラ神国南東側海域――

海上自衛隊第2艦隊第8護衛隊群所属の第10空母打撃群はガハラ神国南東300kmの地点に展開していた。

彼らの目的はフェン王国『ニシノミヤコ』の西方約30kmの位置に展開する敵竜母艦隊の撃滅である。

第10空母打撃群旗艦ずいかく型航空母艦5番艦『たいほう』の飛行甲板上の4基のカタパルトには、未だ『ひりゆう』と『たいほう』にしか配備されていない『F-2』の艦載機型『F-2E』が出撃と今か今かと待ち侘びていた。

彼らは日本人を殺戮したパーパルディア皇国に強い憎しみを持っていた。

数分後、空母航空管制室CATCCより、発艦命令が出され、各カタパルトのカタパルト・ステーションにいる管制員がボタンを押し、カタパルトを起動させる。

瞬間、全長15.52m、重量22,100kgを誇る『F-2E』4機が、時速296kmで射出される。

彼らは上空で合流して、ニシノミヤコへ進路を取った。

発艦してから何分か後、『F-2E』は海面スレスレを飛行していた。

海に溶け込むように青く塗られた機体が12機、上空から見たら見失うだろう。

一個飛行隊の『F-2E』は海面から20m程度の超低空を超音速巡行状態のマツハ

1. 2で飛行していた。

各々の機体のハードポイントには各機4発の93式空対艦誘導弾^A_S対艦ミサイル^M₁を搭載している。

12機の『F-2E』のミサイルの数は計48発にも及び、数が多すぎて明らかにオーバーキルであるが、竜母艦隊に確実にダメージを与えるため、多めに機が割り当てられる。

後方上空にはE-2Dアドバンスドホークアイ早期警戒機^A_Eが飛行しておりすでに艦隊上空に12機程度の敵機がいる事も確認されている。

敵機は、第2分隊12機の翼端に装備されている04式空対空誘導弾^A_M5で対応する予定である。

『F-2E』は音速で海面スレスレを進む。敵艦との距離はどんどん縮まり、すでにミサイルの射程距離に入っている。

敵艦との距離が100kmに迫った時、飛行隊長の機に司令部から無線が入る。

『こちら司令部、攻撃を開始せよ、繰り返す、攻撃を開始せよ』

「全飛行隊機に次ぐ、攻撃開始！」

12機の編隊から、計48発の空対艦誘導弾がパールディア皇国軍竜母艦隊に向かい、飛翔していった。



同時刻——

フエン王国 ニシノミヤコ沖合い約30km先海上

パールディア皇国皇軍海上竜母艦隊は隊列を組み、整然と並んでいた。

竜母はワイバーンロードの発着を行うため、他の戦列艦に比べ、2回り大きい。

他国とは隔絶した圧倒的な造船技術があるからこそ、この船は造る事が出来る。

その見る者に圧倒的な存在感と恐怖をもたらす竜母艦隊を眺め、艦隊副司令の『アルモス』は満足そうに頷く。

「竜騎士長!!」

すぐ横に立つ竜騎士長に話しかける。

「はっ!!」

「皇軍は強い!!!」

「存じております。」

「何故強いと思う?」

「総合力です。」

「そうだ!!だが、圧倒的な強さを誇るのは戦列艦もさることながら、この中核たる竜母艦隊がいるから強いのだ!」

「どんな戦列艦の大砲よりも、この竜母があればアウトレンジから攻撃できる!騎士長、制空権を制する者が結局制海権、制地権を制する。私はそう思うのだ。」

「はっ!!先進的な考え方であります!!」

「パーパルディア皇軍が、今までの海戦で無敵を誇ったのはこの竜母艦隊があつてこそ、この艦隊がある限り、皇軍は覇王の道突き進むであろう!!」

「そして見よ!!この竜母艦隊の中でも、最新鋭の旗艦『ミール』を!!……すばらしい。艦は大きく、機能美に満ちている!!」

通常の竜母に比べ、砲弾への耐性を持たせるため、対魔弾鉄鋼式装甲をふんだんに使った美しく、強く、そして大きな竜母がそこにあった。

だが、前方の護衛戦列艦から警戒音が上がり、話が中断される。アルモスは前方を注視する。

「!?何だ?!?!」

非常に見えにくいのが、青く塗られた2本の大きな矢が、超高速で『ミール』に向かっていく。

「は……速い!!!」

海上スレスレを飛んで来た『それ』は艦の前方で1度大きく上昇し、斜め上方から旗艦ミールに突入した。

『F-2E』から放たれた93式^A空対艦^Sミサイル^Mのうちの2発は、時速1150kmで、パーパルディア皇国皇軍海上竜母艦隊、『ミール』に命中した。

猛烈な閃光が周囲を照らす。『ミール』は光に包まれる。

巨大な『ミール』の船体よりも大きな爆煙が轟音と共に『ミール』を包み込む。

巡洋艦を1発で大破させられるほどの威力を持つ対艦ミサイルの直撃により、『ミール』は内部の人員、ワイバーンロードと共に、アルモスの眼前で木っ端微塵に粉碎され、跡形も無く消滅した。

海上に爆音が鳴り響く。

「な……………な……………何だ!? 今のは何なのだ!?!?」

狼狽……………。

「飛行物体、多数飛来つ!!!!」

竜母艦隊は隊列を崩し、各々が勝手な動きを始める。

「ああっ!!!!」

閃光……………そして轟音……………。

「『フィシャヌス』轟沈!!!」

皇国の誇る最新鋭の1000門級戦列艦『フィシャヌス』。最新式の対魔弾鉄鋼式装甲を施した皇国自慢の艦が、たったの1発でなす術も無く、木っ端微塵に粉碎される。猛烈な閃光と爆音が連続して発生する。

「竜母『ガナム』消滅!!! 竜母『マサーラ』消滅!!!」

悲劇が報告され続ける。

連続して飛来する謎の物体はただの1発も外す事無く命中した竜母を消滅させる。

「ば……ばかな!!! 最強の皇国竜母艦隊が、こんな……馬鹿なあつ!!!」

アルモスの脳は、自分の経験則から必死で原因を探そうとフル稼働する。今までの戦闘の知識、経験では考えられない現実が眼前にあった。

「ま……まさか、これは古の魔帝の誘導魔光弾か!?!」

「この艦に向かって来るぞ!!!」

見張り員が絶叫する。

「うわあああああ!!!」

皆が絶叫する。

アルモスの考察は途中で強制的に切断された。

日本国海上自衛隊第10空母打撃群艦載機による『F-2E』を使用した対艦ミサイルの波状攻撃はパールディア皇国海上竜母艦隊とその護衛の砲艦、計20隻を全艦撃沈するに至った。



数時間後――

フェン王国『ニシノミヤコ』の沖合いに展開しているパールディア皇国大艦隊。

その大艦隊の旗艦、パールディア皇国の技術のすべてをつぎ込んだ最強の120門級超F級戦列艦『パール』（超F級とは、超フィシャヌス級の意味であり、今世界でドレットノート級を超える戦艦を超弩級戦艦と呼ぶのと同様）、その艦上にいた皇軍の将『シウ

ス』は西を眺めていた。

この世界は地球に比べ、大きいため、水平線は地球よりもはるかに先にある。シウスは西を見たまま動けずにいた。その額はびっしりと汗に濡れている。

西の方角で猛烈な爆発が連続してあった。その後、皇国竜母艦隊、計20隻と全く連絡が取れなくなっている。

すべての艦が魔通信に応答せず、そして信じられない事に、全ての艦の魔力反応が消えている。

非常に短期間で20隻もの列強艦隊が本部に通信を発する暇も無く沈む原因は、シウスには想像できなかつた。

艦隊はすでに戦闘態勢に入っており、確認のために砲艦4隻が現場海域に向かい始めている。

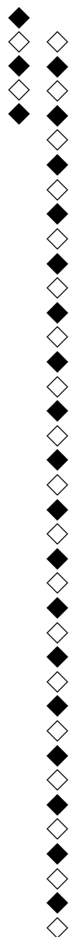
「(もしも竜母艦隊が消滅していたら……)」

シウスの脳裏に最悪なシナリオが浮かぶ。

既にニシノミヤコには基地が造られ、陸戦隊主力は、首都アモノキに向け出陣し、支援攻撃のために砲艦20隻も出発した。もう戦いは後に引けない。

この戦いは皇帝陛下の関心も高く、例え、敵が強かったとしても、撤退や敗北の2文字は許されない。

一笑に付した監査軍の報告書が思い出される。シウスの思考は駆け巡る。



同時刻——

竜騎士小隊長『バルオス』は眼下の惨状を見て、言葉が出なかった。突然竜母が連続して大爆発を起こした。そのようにしか見えなかった。

彼は配下の12騎を引き連れ、ニシノミヤコに着陸する事を決める。

「前方に未確認物体!!真っ直ぐこちらへ飛んで来ます!!」

一番目の良い部下が報告してくる。バルオスは目を細める。

「なんだ!？」

何か矢のような物が超高速で突進してくる。

すれ違う気配。

彼の後方の空に黒い花が咲く。

「え!!!」

精鋭のワイバーンロード竜騎士隊8機がズタズタに引き裂かれて落ちていく。前方に何かが2つ見える。

「は……速い!!!」

考える暇もなくそれは上空を通過し、『それ』が通過した後、音が遅れてやってくる。『それ』からは、2本の赤い炎が後ろに噴射されている。

「は……速すぎる!!!」

竜騎士団は飛行物体を追おうと機首を未確認飛行物体に向ける。

全く追いつけない。

「っ!!なんなんだ!!あいつは!」

飛行物体は常識では考えられないほど急激な上昇を行い、天に消える。
 天空の破壊神はすぐさま機首をこちらに向け、戻ってくる。

「!何か発射したぞ!!導力火炎弾か!!?」

ワイバーンロード竜騎士隊は回避し始める。

『F-2E』の発射した04式空対空誘導^A弾^Sは超高速でバルオスの乗騎するワイバーン
 ロードを襲う。

回避の暇は無く、彼とその部下は空対空ミサイルが着弾し、地上に落ちていった。



日本国広東県捕虜収容所——

パーパルディア王国との戦争を想定し、刑務所を改装した捕虜収容所、ここに輸送されてきた皇国監査軍東洋艦隊の特A竜騎士『レクマイア』、彼はフィリアデス大陸共通言語と日本語を解するための辞書を片手に日本で発行されている新聞を読む。

一言ずつ訳しながら、読み進めていく。彼の指先は徐々に汗に濡れる。

やがて、脂汗は全身に広がり、背中を濡らし、指先は震えはじめる。

新聞の見出しにはこうある。

『パーパルディア皇国、日本人観光客を虐殺!! 日本国政府『絶対に許すことは出来ない!!』政府は陸、海、空、海兵4自衛隊に対し、フェン王国からパーパルディア皇国軍を排除するよう指示!!』

先日パーパルディア皇国に日本人観光客が虐殺された事件につき、政府は自衛隊に対し、フェン王国からパーパルディア皇国軍を排除するよう指示した事を明らかにした。

当社記者が戦闘の可能性を質問したところ、「新たな日本人の犠牲者を出さない。決して出させない。そのための軍事行動だ!!」と強く発言、パーパルディア皇国軍が退かない限り、戦闘は避けられない状況となった。

日本の本格的な軍事行動は戦後初、実に70年ぶりであり、自衛隊創設以来初めての

事となる。

政府は決してこれ以上、フエン王国に取り残された日本人観光客に被害を出さない事が求められる。(記者 田所浩二) (関連記事3面)

「や……やってしまった。」

ついに祖国がいつもの脅迫外交の手段に出てしまった。

組織が巨大すぎる場合、報告は上に行くほど簡素化され、情報は上の都合の良い様にねじ曲げられる。

日本が危険であるという兆候はすでにあつたはずだが、超大国列強の悪い癖が出た形となつてしまった。

もう日本との戦争は避けられないだろう。

「(……勝てるか?)」

レクマイアは考える。

日本の国力は自身が日本人の管理下にあつても身にしてみた。しかし、所詮島国、もし

も総力戦になればどうなるか。……いや、転移直後の日本であれば、もしかすると、何とかなったかもしれない。

しかし、資源国クイラと、農業立国クワ・トイネ公国により、日本は補給が可能となつてしまっている。

少なくともフェンでは負ける。列強たる祖国の基盤を揺るがす事になるかもしれない。

レクマイアは皇国の未来を憂うのだった。



フェン王国首都 アマノキ 東海岸——

首都アマノキの東海岸では、新たに編成された日本国海兵隊フェン王国奪還軍の第1陣、戦闘団1，530名が荷揚げ作業を行っていた。

邦人を虐殺する行為に対し、何の躊躇いも無い敵の脅威があるため、即時戦闘に移行出来るよう新たに編成された戦闘団。

○海兵隊員 1，530名
 【日本国海兵隊 フェン王国奪還軍 第1陣 編成】

- トラック 75台
- 90式戦車B型 12輛
- 74式戦車H型 6輛
- 89式機動戦闘車 3輛
- 89式装甲戦闘車 2輛
- 87式装輪戦闘車 12輛
- 99式自走155mm榴弾砲 5輛
- 10式装甲車 15輛
- 96式装輪装甲車 10輛

となっている。

フエン王国の剣王『シハン』は沖合いを眺める。

視線の先にはしなの型強襲揚陸艦『ちとせ』、つがる型揚陸艦『ねむろ』、いず型輸送揚陸艦『しまばら』の3隻から発出され、海岸と海を往復しているLCC—1級エア・クツション型揚陸艇がある。

同揚陸艇はホバークラフトであり、海上のみではなく、海岸の上まで上がり、日本軍

の車両や人員を排出している。

シハンは傍らに立つ騎士長『マグレブ』に話しかける。

「やはり日本はとんでもない国だな。船が陸まで上がってきておるぞ」

ホバークラフトは厳密に言えば航空機であり、浮いて走行するため、海上のみならず、突起物さえなければ陸上も通行できる。

揚陸艇から陸揚げされる戦車、自走砲……それらのどれもが彼にとって初めて見る物であり、用途、理解に苦しむ。

「本当に驚くべき国にございます。日本が今回の戦闘に参加する事になったのは、劍神の導きがあったとしか思えませぬ」

騎士長マグレブは答える。揚陸作業は続く。

海岸には、パーパルディア皇国 皇国監査軍東洋艦隊のワイバーンロード竜騎士団を葬り去った日本……その陸軍を一目見ようと、フェン王国の人々が集まる。

「日本の魔船が来ると聞いて見に来たが、船が陸を走るなんて、本当に魔船だ!!これでフェン王国は救われる!!!」

「列強も、まさか日本がこれほどまでとは思うまい。今見た自分でさえまだ信じられない。」

「ありがたや、ありがたや。」

フェン王国人の日本に対する期待は高い。第一陣は海岸にて準備を整える。



パーパルディア皇国皇軍陸戦隊——

陸戦隊と陸将『ドルボ』はニシノミヤコを出発し、フェン王国の首都アマノキに向け進軍していた。

その数約3000名。

その進撃の中には、皇国の誇る陸戦の主力、『地竜』32頭と、『偵察用ワイバーンロード』12騎を含む。

ワイバーンロードは地竜にけん引された台車に乗り、地上を進んでいたため、『F-2

』の攻撃から洩れていた。

現在陸戦隊は山岳を迂回中であり、ニシノミヤコの旗艦艦隊からの魔信不感地帯で一
時休憩に入っている。

自らの進軍進路で、敵の隠れる可能性のある場所は事前にワイバーンロード3騎体制
で索敵し、敵がいた場合、上空からの導力火炎弾でダメージを与え、歩兵のマスクェト
銃により殲滅する。

すでに3回、フェン王国の小隊を滅した。

「コウテ平野に出れば、この戦争は勝つ!!」

ドルボは陸戦策士『ヨウシ』に話しかける。

「はい……コウテ平野に出れば我が陸戦隊の本領が発揮出来ます。得意な布陣になった
我が陸戦隊は組織されてから今まで、一度も負けた事はありません」

「それに……今回は支援攻撃として砲艦20隻が加わります。アルタラス王国では7倍
弱の兵力差を覆し、我が国が圧勝いたしました」

「アルタラスは文明圏外国家としては突出して強かった、が……我が国が圧勝しました。
フェン王国程度……いや、もしかしたら日本国が参戦してくるかもしれません、その

程度、アルタラスには及びますまい」

ドルボの脳裏に日本人の腕時計が浮かぶ。

將軍ドルボは日本人が身に付けていたあるものを眺め、不安になる。

彼が処刑された日本人を見ていた時、自動巻きの腕時計を見た。

パーパルディア皇国にも時計はあるが、基本は壁掛けタイプであり、非常に大きい。

金持ちの友人から、列強ムーのお土産としてもらった『ねじ巻き式』の腕時計を見た時は驚いたものだった。さすが列強たる世界一の機械文明のムーだと感心した。

『しかし、眼前にある物はなんだ!?!』

ムーの時計よりも遥かに精巧に作られており、軽く、デザイン、そして質感が高い。このような時計を持っていたのは1人や2人ではない。

7名中5名も着けていた。

しかも、そのうち半数以上の時計が：秒針が同時に動いていたのだ。

考えるだけで戦慄が走る。微かな不安……

彼は言葉を飲み込む。今更作戦は止まらない。日本人はどんな武器を使用するか、全く不明であり、強いかもしれないし弱いかもしれない。

未知数である。

「しかし!! 皇国は強い!!」

これはまぎれも無い事実である。ドルボは不安を押し殺す。

陸戦隊は進路途中にある集落を襲い、略奪を繰り返しながら侵攻してきた。今後、休憩を挟み、平野部へ向かう予定である。

フェン王国の集落の人及び物は、兵の好きにさせている。蛮族を好きに扱う権利くらい与えなければ、戦争の士気も上がらないだろう。

時折悲鳴が聞こえるが、いつもの事、気にも留めない。

パーパルディア皇国皇軍陸戦隊は後数時間の進軍でコウテ平野に到達する。



同時刻——

日本国海兵隊フェン王国奪還隊で第1陣として派遣された第1戦闘団長の『天野保志』一等海兵佐は部下からの報告を分析していた。

敵、皇国陸軍を叩くにはコウテ平野が付近に民家も無く、最適だ。しかし、後続の部

隊は本戦に間に合いそうにない。

敵の現在地は判明しているが、付近に集落があり、空爆で戦力を削ぐ事が出来ない。現時点投入可能な戦力は、この戦闘団1、530名と、トラック75台、90式戦車B型12輛、74式戦車H型6輛、89式機動戦闘車3輛、89式装甲戦闘車2輛、87式装輪戦闘車12輛、99式自走155mm榴弾砲5輛、10式装甲車15輛、96式装輪装甲車10輛の大部隊。それに海上自衛隊の強襲揚陸艦『ちとせ』に乗せてあるAH-1Zヴァイパー5機、空自に要請したA-10サンダーボルトII3機である。

「コウテ平野で敵を叩くぞ！混戦になれば不可能だが、可能であれば状況により空自に近接航空支援を要請する」

「はっ!!」

フェン王国コウテ平野では、フェン王国の運命を決定付ける陸の戦いが始まろうとしていた。



パーパルディア皇国 皇都エストシラント 第2文明圏列強、ムー大使館――

ムー大使館には、皇国第1外務局の職員『ニソール』が訪れていた。
ムー国駐パーパルディア皇国大使、『ムーゲ』が対応する。

「急な会談とは、いったいどうされました？」

ムーゲはニソールに尋ねる。

「現在我がパーパルディア皇国とフエン王国は戦争状態にある事はご存知と思いますが、日本国も参戦してくる可能性があります」

「はい、存じております。皇国は《日本国民7名の観光客を国家の意思をもって殺した》と聞き及んでいます」

「今回の戦いは、我が国、ムーも非常に関心をもって注視しております。」

「はい、その通りです。そして、今回観戦武官を日本側に派遣したと伺い、その真意を確認に参りました。」

「我が国は日本側に観戦武官を派遣したことは、間違いありません。」

事前情報として解っていたにも関わらず、その事実をムーの大使から告げられ、二ソールは衝撃を受ける。

ニソールは一呼吸置き、尋ねる。

「理由をお伺いしたい」

「私は軍務専門ではありませんので、詳しい事は不明ですが、我が国の軍部が冷静に分析を行った結果、日本に派遣する事が相当と判断したものと思われます」

「貴国は今まで、勝つ側にしか観戦武官を派遣して来なかった。今回日本側に派遣したということとは、まさか我が国が今戦いに負けると分析しての事でしょうか？」

「先ず、ムーはパーパルディア皇国へ敵対する意思は無いということはご理解いただきたい」

「そして…この魔写をご覧ください」

ムーゲは一枚の写真を取り出す。

そこにはミリシアルやムーの飛行機械よりも先進的な戦闘機があった。

「……これは…貴国の新型飛行機ですか？」

「いいえ、これは我が国が日本国から輸入した戦闘機『F-1C』です、ムーでは『スピットファイア』戦闘機と呼んでいます」

「なっ!」

機械文明最強の国、ムーが他国の機械を輸入するなどんでもないことだ…つまり…

「こと戦闘機の色はマツハ1.8、時速だと1,900kmになります」

「…はっ!」

時速1,900km…化け物の部類だ。ミリアルでもそんな速度の航空機は作れない。

「あと一つ、これは大使としてではなく、個人的な発言として申し上げたいのですが、よろしいですか?」

「…は…はい」

「パーパルディア皇国は、日本という国を分析し、勝てるといった結論に至ったからこそ日本人観光客を殺して、日本の逆鱗を叩き割る行為に出たと我が国は考えています」

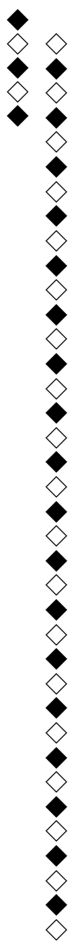
「我が国が分析した結果……ムーはとても同じ事は出来ません。ムーは、日本に敵対できるほどの国力を持ち合わせてはおりません」

「何度も申し上げるように、これはムーの正式意思ではなく、私の個人的な感想なのですが、私は貴国の勇氣に敬意を払いたいと思います」

「な!!!」

第1外務局職員、ニソールの背中から冷や汗が吹き出る。

会談は終了し、彼は早急に帰省、『緊急調査報告書』の作成にとりかかった。



日本国 首都東京 霞ヶ関——

日本に保護されたアルタラス王国の王女『ルミエス』は外務省から話がしたいと呼ばれ、霞ヶ関に来訪していた。

来賓室の扉を開け、中に入る。部屋の中にいた日本国外務省職員、その他が起立し、ルミエスに一礼する。

「どうぞこちらにお座り下さい。」

一同が着席し、話が始まる。

「私にご用件とは、いったいどのような内容でしょうか？」

ルミエスが問う。

「外務省の柳田です。パーパルディア皇国が日本人観光客を虐殺した事件はご存知でしょうか？」

「はい、聞き及んでいます。日本の民の方々のご冥福をお祈りいたします。」

ルミエスは左手を右胸にあて、目を瞑る。第3文明圏の主力宗教の祈りの形だ。

「ここで、日本国政府から提案なのですが、フェン王国からパーパルディア皇国軍を我が国が追い払った後、ルミエス王女を長として、アルタラス王国の正当政府を名乗っていただけませんか？」

「もちろん日本もこれを承認すると共に、現在日本と国交のあるすべての国に承認するよう働きかけます」

ルミエスは驚きの表情を浮かべる。

「そ……それは、私にとつては願つてもなく、ありがたい事なのですが、……その……それをしてしまうと、列強パーパルディア皇国は属領の反乱という自国の基盤を揺るがしかねない事態とみなし、日本に殲滅戦を仕掛けてきます」

「日本国を不幸にしてしまうかもしれない……それでも、本当によろしいのですか？」

アルタラス王国は文明圏外の国家としては突出して強い戦力を有していた。そして、パーパルディア皇国を研究していたにも関わらず、圧倒的な敗北をしている。

王女ルミエスは、日本が強いであろう事は理解していたが、列強の恐怖に心をとらわれていた。

「はい、日本国政府はパーパルディア皇国と全面戦争になる事を恐れませんが、赤子の手を捻るように亡国にできます」

「フェン王国奪還後に考えてもらっても構いません、アルタラス王国開放のためには、自衛隊の派兵を行うつもりです」

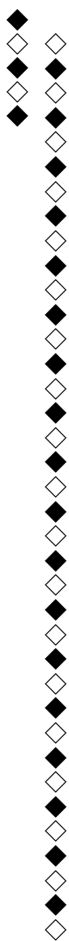
「アルタラス王国の解放は、パーパルディア皇国からの植民地解放のモデルケースになり、皇国解体への第一歩となるでしょう。」

「!!!」

日本は自国の民を殺された怒りから、列強パーパルディア皇国を解体するつもりなのだ。そんな列強解体なんて、考えた事も無かった。

大きな、歴史を動かすような所業が本当に可能なのだろうか？

アルタラス王国 王女ルミエスは熟考する。第一回目の会談は終了した。



フェン王国 コウテ平野

ニシノミヤコから首都アマノキに至る途中にコウテ平野という平野がある。

平野部ではあるが、大地に栄養は無く、作物が育たないばかりか、水の吸収性が良く、雨は大地のはるか下層まで一気に落ちるため、水の確保が出来ない。

よってここは無人の平野であり、木も育たず、短い草の生えるのみの草原となってい

る。

パーパルディア王国陸戦隊の約3000名はこのコウテ平野に至り、布陣を整えていた。この平原を抜けると首都アマノキに至る。

この場所では、フェン王国軍が死に物狂いになって突進してくる事が想定されていた。

陸将『ドルボ』は南側を注視する。南の海上には、支援攻撃のための砲艦20隻が見える。

列強戦列艦の雄姿を見る。絶対の自信。

ドルボはいやらしい笑みを浮かべる。

「フ……これでいかなる戦力が来ようとも、負けるはずがない!!」

一呼吸おいて、彼は命令を下す。

「よし、進軍するぞ!!」

上空にワイバーンロードが12騎天空に舞い上がり、進軍進路上の偵察を開始する。

横1列に並んだ地竜の先頭に、隊は進む。

「首都アマノキを落したら、その人間はやりたいたいようにするよう兵に伝えろ!!」
「ウオオオオ!!」

兵たちは、様々な想像をし、士気も上がる。

「今回も……皇国が勝つ!!」

気合が入る。

「(……ん??)」

嫌な予感。

その瞬間、突如としてはじけるような炸裂音が鳴り響く。

「何の音だ!!!」

音のする方向を見る。

上空を見ると、偵察に向かっていたワイバーンロード12騎がバラバラに粉碎され、肉片が雨のように落ちてくる。

「!!な!!何だ!?!?!」
「!!!」

ドルボは海を見る。

「!!」

陸将ドルボの目に、見たことも無いような巨大な艦が1隻映る。当初は自分の遠近感がおかしいのかとも思ったが、そうでは無いらしい。

その艦を望遠鏡で覗く。

巨大艦の上には太陽が輝く旗がはためく。

「!?!日本の艦?」

突如、巨大な艦から連続して煙が上がる。

「まさか、魔道砲の発射炎か？」

凄まじく装填が速い!!!轟音が連続して聞こえる。

「!!!!!!」

信じられないものが目に映る。

味方が……味方の精強な戦列艦がなす術も無く連続して爆発する。

「そんな……そんな馬鹿な!!」

信じられない事に、音の数だけ味方の戦列艦が連続して爆発し、撃沈される。

「わ……我が方の魔道砲の射程距離を遥かに凌駕している!!!しかも……まさか……全弾命中だとお!!」

短時間の敵の砲撃で、自分たちを支援するはずの戦列艦は海の藻屑となった。

洋上では、ムーの技術士官『マイラス』と戦術士官『ラツサン』はゆうぐも型護衛艦 8 番艦『かざぐも』に乗船し、それを眺めていた。

先進的なデザインではあるが、ムーの誇る戦艦『ラ・カサミ』に比べ、船長は長いが船幅は小さい。砲の数も一門しか無く、やはり頼りない。

機械動力艦であるため、パールディア皇国の帆船に射程距離まで近づかれる事は無
いだろうと思いたいが、こんなに弱々しい艦であれば、もしかしたら戦列艦隊に捕らえ
られて被害を受けるかもしれない。

そう思っていた。

しかし、日本の軍船はたったの1隻で列強パールディア皇国の20隻もの艦隊に戦
いを挑み、一方的に撃破してしまった。

砲の射程距離は長く、常識では考えられない速さで連射できる。

そして何よりも驚くべきことは、敵も自分も海も動いているにも関わらず、百発百中
の射撃精度。

自分たちの戦術の常識がガラガラと音をたてて崩れ落ちる。これほど砲が当たるの
であれば、確かに一門でも目的を達するのだろう。

マイラスは技術的考察に耽るのだった。

任務を完了させた『かざぐも』は、戦場を離脱していった。



同時刻——

パーパルディア皇国陸戦隊は、眼前で偵察用のワイバーンロードが撃墜され、目視範囲にいた第3文明圏最強の皇軍戦列艦が連続して爆発し、轟沈するのを目の当たりにし、士気が低下する。

「!!何かが18騎向かってきます!」

目の良い者が叫ぶ。ドルボは地平線を見る。

遠くの方から土煙をあげ、角の付いた異物が18騎、こちらに向かってくる。

「(速い!!)」

「何だ!?!」

ドルボは物体のことを良く理解できない。向かってくる異物を見た地竜のうち何体かは、導力火炎放射の準備にかかる。

地竜の口内に、火球が形成されはじめる。

その時、18騎いた敵の角から爆裂魔法が投射された。

地竜に向けて発射された90式戦車A型の120mm滑腔砲と74式戦車H型の105mm滑腔砲は、全弾それぞれ狙った地竜に命中、竜の内部を引き裂き、砲の飛び出し口に大きな穴を開ける。

弾は貫通し、その後方の歩兵密集地で爆発した。

爆音があたりに木霊する。命中した部分の歩兵は30人単位でなぎ倒され、中途半端に生き残った者たちはさながら地獄のようなうめき声を上げる。

「チツ!!爆裂魔法?!いや、魔導砲か!」

敵の鉄竜はさらに距離を詰める。

「牽引式魔導砲であの化け物を仕留めろ!!」

皇軍兵は騎兵に牽引させてきた魔導砲で化け物、鉄竜に狙いをつける。大きな炸裂音と共に、鉄竜が再び発砲する。

地竜が耳を塞ぎたくなるほどの断末魔をあげ、即死する。

「装填が早い!!なんとという射撃精度だ!!!」

「一番近い敵に集中砲火!!!」

パールディア皇国、皇軍陸戦隊から一番近くにいた90式戦車A型に向け、皇国の移動式魔導砲が発射された。

複数の魔導砲の弾が最前にいた90式戦車に降り注ぐ。

大地が削れる。

奇跡的に、複数の魔導砲のうち2発が90式戦車に命中、戦車は煙に包まれる。

「敵、鉄竜に2発命中!!!」

「フハハハハ!!調子に乗りおって!!他の鉄竜も片付けるぞ!」

魔導砲着弾の爆炎の中から命中したはずの鉄竜が何事も無かったかのように現れ、止

まる。

「ま……まさか、全く効いていないのか!!?」

「そんな……そんな馬鹿な!!」

鉄竜から再度、雷鳴の轟きと共に大地を裂く強大な爆裂魔法が放たれる。

パーパルディア皇国陸戦隊の地竜32頭は日本国海兵隊の90式戦車A型と74式戦車H型の射撃により全滅した。

「鉄竜、後退していきます!!」

地竜を葬り去った90式戦車は前面を皇国陸戦隊に向けたまま後進してゆく。

皇国陸戦隊の中には自分たちの魔導砲が鉄竜を追い払ったと勘違いした者たちが歓喜の声をあげる。

「地竜、全滅!!」

報告があがる。やつらは地竜だけを狙い、目標を撃破したからこそ退いたのだ。
「ええい！次は何が来る！」

ドルボは恐怖に支配されていた。

城門すら1撃で吹き飛ばす皇国の切り札、陸戦兵器のけん引式魔導砲、これが着弾しても壊れない物体を彼は知らなかった。

日本の兵器……魔導砲が確実に命中したのに、何事も無かったかのように動き続け、攻撃をしていた。

現在の自分たちにあの鉄竜を破る術はない。

「どうする……」

脳裏に降伏の2文字が浮かぶ。

「いや、それは出来ない……」

皇帝陛下の関心が高いこの戦いで降伏すると、一族がどんな目にあうか解らない。

ドルボは戦う事を決意する。

敵の鉄竜は、陸戦隊から約3kmはなれて停車し、角をこちらに向ける。

「いったいどうするつもりだ？」

「後方に未確認飛行騎!!数は3騎!!」

ドルボは後ろを振り向く。

「!あれは何だ!？」

我が軍のはるか先、微かに見える位置に灰色の飛行騎が3騎、編隊を組み飛行していた。

耳を澄ますと、ゴオオオオという音が聞こえる。それはワイバーンオーバードよりも早かった。

「なんだ?!?!」

敵騎が咆哮し。下部からブオオオオオオオオオオ、という濃厚な音が流れる。

それは重低音だけを撒き散らすのではなく、白い煙を上げながら、連続して陸戦隊に向かい、光の槍が猛烈な速さで飛んでくる。

声を発する暇も無くそれは着弾、巨大な爆発と共に、歩兵が被害を受ける。後方の隊は恐怖に駆られ、前方の中心部に逃げる。

しかし、隊の最前列は停止しているため、密集体系となる。

敵騎は上空に飛来する。マスケット銃を撃つも当たり前だが当たらない。

それどころか、敵機はギュオオオオオオオオオオという声と、ゴオオオオオオという音を出す。

「ひいつつつつつつ！」

「し、神龍かあ!?!」

兵士は怯える。その間にも敵騎は旋回し、また陸戦隊を正面に見据える。

「くそ!!あの飛竜も倒せないのか!!!」

ドルボは吐き捨てる。

味方は既に脅えきっており、主力の地竜も全滅、敵については空の鉄竜、鉄の地竜を

倒す術も見つからない。

「ドルボ様、ドルボ様っ!!!」

陸戦策士のヨウシはドルボに必死に語りかける。

「何だ!!!」

「早急に降伏を進言いたします!!我々は追い込まれています!!!」

「何!」

「我々は追い込まれているのです!兵が無意識のうちに密集、中心部に追い込まれています!!敵は止めを刺すつもりです!!!地竜も、ワイバーンロードも、支援攻撃の砲艦も失いました」

「もう勝つ術はありません…全滅する前に降伏を!!!」

そうする間にも敵騎…『A—10』は近づいてくる。

「しかし……我々は、日本人を殺した部隊だぞ。降伏してもなぶり殺しに遭うだけだ。」

「ですが!!このままでは全員死にます。全員死ぬよりも、僅かでも生き残る手段を!!!」
 「……解った。」

「降伏の旗をk「敵騎何かを投下!」なんだ!!」

その時、『A-110』からMk. 77爆弾が投下される。

ナパーム弾の後継とされるその爆弾は効果を発揮し、陸戦隊を壊滅に追い込んだ。

パーパルディア皇国皇軍陸戦隊は、フェン王国コウテ平野において、日本国海兵隊フェン王国奪還軍第1戦闘団との戦いに敗れ、全滅した。



パーパルディア皇国 皇軍——

超F級戦列艦『パール』の艦上で、将軍『シウス』は悩んでいた。

フェン王国を支配せんがために派遣された皇軍、当初の戦力であればあっさりとフェン王国を支配できていたはずだった。

現にニシノミヤコはあっさりと落ちた。

だが、第1外務局の皇族レミールの命令により、日本人観光客を処刑してから何かが変わり始めた。

先ほど竜母艦隊のあった所に偵察に行った砲艦4隻から竜母艦隊壊滅の報が来た。壊滅的被害ではなく、壊滅である。

上空を飛んでいたワイバーンよりも圧倒的な速さを誇るワイバーンロードの12騎も超高速で飛翔する鉄竜により、あっさりとなす術も無く撃墜されている。

そして、何よりも懸念すべきことは、そろそろ魔信不感地帯から出るはずの陸戦隊とも、支援攻撃のための戦列艦とも連絡が取れない。

「まさか……全滅か!？」

いや、そんなハズは無いと否定したい自分もいるが、現に竜母は壊滅し、ワイバーンロードを落した鉄竜は常識を遥かに超える速さだった。

「南西方に未確認艦16!!」

見張り員から報告があがる。

「来やがったか!!!」

將軍シウスは皇軍に戦鬪を指示する。

「(まだ、数において、圧倒的に我が軍が有利だ!!!)」

後に、フェン王国の戦いと、歴史上では一括りにされた海戦が始まろうとしていた。



フェン王国 ニシノミヤコ沖合いー

パールディア皇国、皇軍の戦列艦183隻を含む284隻の大艦隊は向かい来る日本軍16隻を撃つため、戦鬪態勢に移行していた。

列強たる皇国の技術とプライドの結晶たる100門級戦列艦隊が前に出る。

パールディア皇国最大・最強であり、大艦隊の指揮をとる超F級戦列艦『パール』に

乗艦する将軍『シウス』は日本軍を眺める。
旗艦は艦隊中央部に位置し、指揮をとる。

「ダルダ君、君は勝てると思うか？」

隣に立つパール艦長『ダルダ』に尋ねる。

「これほどの大艦隊と、最新の戦列艦をもつてすれば、神聖ミリシアル帝国の有名な第零魔道艦隊を相手にしても負けずまい」

「海戦の強さを決するのは、戦列艦の質と量です。第3文明圏最高の質と、戦列艦183隻の量を超える者など、ここには存在しません」

話は続く。

「もし仮に、日本軍の艦の性能が我が方を凌駕していたとしても、砲も少数、そしてたったの16隻ではどうにもなりません」

ダルダは絶対の自信を見せる。

戦列艦隊は魔力を出力最大にした風神の涙を使用し、帆いっぱい風を受け、波を裂きながら進む。

シウスは日本軍を注視する。

日本の艦は見たことが無いほど大きい。砲は1門か2門、艦前部に設置されているのみである。

砲の大きさから見て、第2文明圏の列強ムーの戦艦『ラ・カサミ』の回転砲塔に近いものなのだろう。

日本の艦も、過去に魔写で見たことのある『ラ・カサミ』と同様に帆が無い。

「……いやな予感がする」

1発あたりの威力は、我が方の100門級戦列艦よりも大きそうだ。

「速いな」

敵艦の速度が自分の知る船の常識からかけ離れている。これほど速いなら、魔導砲を

当てるのも大変だろう。

「まあ、それは敵も同じ事か…」

日本軍との距離は、近い所で10kmを切っている。緊張が走る。

「ん!?!?」

日本軍の最前列にいる艦の砲口が光、煙が発生する。

「敵艦発砲!!」

「まだ10km近く離れているぞ。何の儀式だ?」

「何か、威嚇のつもりでしょうか?」

決して砲弾が届くはずのない距離からの発砲。シウスとダルダは日本軍の意図を計りかねる。

突如として皇軍の最前を進んでいた100門級戦列艦に光が走る。

ヘリコプター搭載型ミサイル巡洋艦『やましる』の127mm単装速射砲から発射された砲弾は、正確にパーパルディア皇国、皇軍の100門級戦列艦に着弾し、対魔弾鉄鋼式装甲をあつさり貫通、弾薬庫で爆発した。

爆圧は内部から外部に向かい、木造部分を粉碎しながら上部に突き抜ける。艦は上部に壮大な火柱を上げ、真つ二つに折れて沈んでゆく。

「せ……………戦列艦『ロプーレ』轟沈!!!」

「……………」

「な……………ど……………どういう事だ!?!」

シウスとダルダは眼前の現実の理解に苦しむ。

その時…

「敵艦連続発砲!!!」

「な……………なんとという装填の速さだ!!!」

艦隊の前方に連続して火柱が上がる。

「戦列艦『ミシユラ』、『レシオン』、『クシヨン』、『パーズ』轟沈!!!」

沈み行く船が多すぎて、報告が間に合わない。敵船は未だ我が方の射程距離のはるか先にいる。

「敵艦、進路を変えます!!」

砲を放ち続け、敵艦は我が艦隊に腹を向ける。その距離約6 km。敵は後続の艦も攻撃に加わり、射撃密度が増加する。

全弾命中し、発砲音の数だけ沈み行く味方の船。

「全弾当たるとは、どんな魔法だ!!!」

「じ…上空に敵騎多数!!!」

「!!!」

敵騎には竜母隊が壊滅している為、攻撃できない。

上空から戦列艦隊を殲滅している第15護衛艦隊の100km後方の第6艦隊第3軽空母打撃群所属『いぶき』から発艦したAV-8B ハリアー II 5機が急降下する。

ハリアーIIの主翼のハードポイントからCBU-87/Bクラスター爆弾が投下される。

CBU-87/Bは約200個の子爆弾を放出する。小爆弾は対魔弾鉄鋼式装甲を薄紙のように貫通し、穴を上げて水を浸水させる。

シウスは運良くCBU-87/Bの直撃を喰らわなかったが、艦隊の殆どが航行不能か沈没していた。

「こんな……こんな現実があつてたまるかああああ!!!」

シウスは閃光と共に、強烈な揺れと衝撃に見舞われ、壁に叩きつけられる。

「左舷に被弾!!!」

「逃げろおおお!」

120門級戦列艦『パール』の左腹に大きな穴が開く。

海水が艦内に流れ込み、バランスを崩した『パール』は、徐々にその巨体が傾き始め、やがて転覆、装甲の重みでゆっくりと沈んでいった。

シウスは海を漂う。流れてきた木材に掴まり、海上から皇軍を見る。

信じられないほどの短時間で、第3文明圏最強の国、列強パーパルディア皇国の大艦隊は1隻も残らず、海の藻屑と消えた。

パーパルディア皇国皇軍284隻は日本国海上自衛隊第9艦隊第18護衛隊群16隻と交戦、284隻全てを失い全滅した。

その数時間後、ニシノミヤコに残存していた皇軍はその主力を失ったため、ニシノミヤコを奪還に来たフェン王国軍に降伏、列強と2カ国連合軍の戦いは、2カ国連合の圧勝に終わった。

フェン王国のニシノミヤコでは、この日を記念し、船の形に組んだ木を焼く火柱祭りが毎年開催されることとなる。

第5話 殲滅される異世界軍

パーパルディア王国 皇都エストシラント 第1外務局――

第1外務局長室では、今後の日本に対する措置について、パーパルディア皇国軍最高指揮官『アルデ』を交えて話し合いが行われていた。

通常であれば、文明圏外の蛮国1国程度に軍の最高指揮官や、皇族が介入するはずもないが、本件は皇帝陛下の関心が高く、失敗は許されないため、皇国幹部の関心も高くなっている。

第1外務局長『エルト』が発言する。

「間もなく皇国陸戦隊がフェン王国の首都アマノキを落とす頃ですね」

「で、その後の事だが……」

その時、ドアがノックされ、話が中断する。

「入れ!!!」

第1外務局次長『ハンス』が汗をかきながら入室してくる。

「本会合に関係ある内容でしたので、失礼とは思いましたが、文書をお持ちしました。」

顔色が優れない。ハンスは局長エルトに対し、文書を差し出す。

【緊急調査報告書】

そう書かれていた5枚程度の簡単な報告書が机上に置かれる。ハンスは報告書の概要を口頭で説明する。

「第2文明圏列強ムーがフェン王国での戦いに関し、日本側へ観戦武官を派遣した事案につき、ムー大使に事実確認とその意図を調査した結果の報告書になります」

「うむ」

ムーが観戦武官を日本側へ派遣した事を知っていた第1外務局は、ムーの意図を計り

かねていた。

もしかすると日本はムーが注目するほどの新魔法を持っているのではないかといった説も出た。

よって、観戦武官の戦死を覚悟してまでも日本に派遣したと……

しかし、であるならば皇国側に派遣してこなかったのが不思議であったため、確認を行っていた。

「結論から申し上げますと、ムーはフェン王国での戦いは日本が勝つと判断しています」
「何っ!!!」

エルト、レミール、アルデの3人は同時に発言する。

「ハンス! どういう事だ!?!」

「ムーは、自らが入手した情報を分析した結果、今回の戦いは日本が勝つと思っているのです」

「どうやら日本の戦闘機をムーは輸入しており、その速度は音の速度を超えると……」

沈黙……。

「まさか……」

軍の最高指揮官アルデは話し始める。

「もしかすると、これは仮説ですが、日本は元々皇国と全面戦争をするつもりだったので、は？そして、準備はすでに相当に進んでいた」

「そこで、皇軍がフェン王国に向かう事を察知し、艦船数千隻、そして10万を越える陸軍を送り込んだのかもしれない。我が軍では、日本には砲艦があると分析されています」

「技術レベルは通常文明圏弱と思われ、文明圏外国家としては突出して高いと分析しています。我が国に劣るとはいえ、数千隻の砲艦が相手では、ちと今回の派遣軍だけでは荷が重いかもかもしれません」

「何より、砲弾が不足してしまう。陸戦隊も3千のみであるため、敵の陸軍が5万を超えたら荷が重い」

「いずれにせよ、シウス将軍が派遣されている。援軍が必要であれば、要請してくるでしょう。要請があれば、西部艦隊も差し向けます」

「しかし……ムーは、何か情報を掴んでいたな……」
「もしそうだとすると、皇軍は敗れるのか？」

エルトが問う。アルデは、笑みを浮かべ、答える。

「エルト様、ご安心下さい。このまま継続して戦うと砲弾が不足するかもしれないといった心配であり、数千隻の船が電撃作戦を行うのは不可能でございます」

「我が方が被害を受けることはございません。なにより、我が国の風神の涙の質は世界一でございます」

「船速が違うので、艦隊が被害を受けることもございません。仮説が正しければ多少フエンを落とすのに予定よりも時間を要するかもしれませんが、後でシウス將軍には確認し、必要があれば援軍を差し向けます」

「フエン王国は皇国から近いため、敵が一気に攻めてきていたとしても、弾薬が尽きる前に援軍を到着させられるでしょう」

安心した空気が漂う。

「もしそうだとすると……日本か……蛮族め!!!」

レミールが吐き捨てるように言う。

「またもや戸がノックされる。」

「失礼します!!!!」

汗にまみれの第1外務局の若手幹部が入室してくる。

「何だ!!!!」

「フェン王国に派遣していた皇軍は、戦列艦隊、揚陸艦隊、補給艦隊、竜母艦隊、陸戦隊、すべて全滅、残ったニシノミヤコ守備隊は、日本国とフェン王国の連合軍に降伏しました」

「!!!!!!」

「な……何だと!?!」

エルトは狼狽する。

「ば……馬鹿な!!何かの間違いではないのか?」

アルデは、誤報ではないかと指摘する。

皆が狼狽している時、食器の割れる音がする。室内にいた者は、その音源に注目する。そこには鬼の形相をした女性が立っている。

「な……何だと!!?蛮族ごときに、局地戦とはいえ、この皇国が敗れただとお!!!アルデ!!奢ったな!!!戦で相手の戦力を分析し損ねるとはっ!!」

パーパルディア王国軍は、フェン王国を落とすために十二分な戦力を整えていた。日本さえないなければフェン王国を落として余りある戦力だった。

「も……申し訳ございません!!軍を再編成して、万全を期します。もう皇国が負ける事はございません!!!では、すぐに準備に取り掛かります!!!」

アルデは逃げるように退室した。

「お……おのれえ!! 蛮族めえええ!!!!」

レミールの目は血走っている。フエン王国で、皇国が敗れた事はすぐに各国に広まるだろう。

73カ国の属国を抱える列強パーパルディア皇国が文明圏外国家に対し、局地戦とはいえ敗れることの意味、そして危険性をレミールは十分理解していた。

恐怖支配をしている属国に対し、宗主国が弱い姿を見せるとろくな事にはならない。恐怖支配の脆弱性である。

「殲滅だ!! 列強たるパーパルディア皇国がここまでコケにされた事を許すわけにはいかない!!! 日本国を殲滅するしかない!!! エルト!!」

「はい!!」

「陛下に許可をもらいに行く。殲滅戦の準備をしておけ!!! アルデにも伝えろ!!!」

「ははっ!!!」

レミールは退室した。



旧アルタラス王国 王都 ル・ブリアス 地下組織――

パーパルディア王国の支配下にあるアルタラス王国の地下組織は活動を続けていた。しかし、列強との力の差は絶望的なほど開いており、万が一、国内にいる皇軍を駆逐したとしても、本国から再びあまりにも強い軍隊がやってくる。

地下組織は勝ち目の無い戦いに突入していた。しかし、辞める訳にはいかない。

軍長『ライアル』はいつものように、皇国の動きを把握する。せめて、王族の誰かが生きていたら、その方を長として動けば国民も賛同するだろう。

しかし、王は戦死し、王族のほとんどは皇国に虐殺されたか、戦闘中に行方不明となっている。

「ちくしょう!!」

ライアルは、未来を考え、ストレスがたまる。

「軍長！軍長!!!」

突然部屋のドアが開かれ、各国の魔信を傍受していた通信員が駆け込んでくる。

「（ノックもしないとは、非礼な奴だ）」

「軍長!!すぐに通信室に来てください!!」

「いったい何だ!？」

「いいから、早く!!早く!!!」

通信員はライアルの手を取り、部屋へ引つ張っていく。

部屋に入ると、並べられた魔導通信具の中の受信具がほのかに緑色に光る。

「第三文明圏内国家の『マーズ王国』経由の通信です!!これはマーズの魔信ニュースです!!!」

受信具に注目する。

ガ……ガガーガ……と受信具が鳴る。決して通信状態は良好ではない。

『唄……ガガガガ……みなさん、私はアルタラス王国の王女ルミエスです』

!!!
!!!

ライアルは全身に打たれたかのような衝撃が走り、目尻に涙が溜まる。

「ル……ルミエス様、生きておられたのか!!!」

「しーっ!!しーっ!!!聞こえない!!!」

ライアルは注意を受け、沈黙する。

『……であり、現在我が国はパーパルディア皇国によって、不法に占拠されています。よって、同時刻を持ち、アルタラス王国は日本国内において、臨時政府を置き、私『ルミエス』を長として、ここにアルタラス王国の正統政府を宣言いたします』

『現在我が国アルタラス王国と日本国は、安全保障条約の締結に向け、話し合いを進めています』

『パーパルディア皇国は、直ちにアルタラス王国から撤退しなさい。さすれば、無益な殺

生はいたしません』

そこで声は止められ、息を吸う音が聞こえる。

『アルタラスの民よ！私の声が聞こえているなら、《その刻》に向かい準備をしなさい！！我が国の民なら誰でも解る方法で《その刻》を知らせましょう！！』

『現在パーパルディア皇国の支配により、苦しんでいる国の人々よ！！本日、フェン王国を攻めていたパーパルディア皇国軍は、日本とフェン王国の2カ国連合に敗れています！！』

『列強パーパルディア皇国軍は確かに強い。しかし、最強ではありません！！負けられない訳ではないのです！！』

『時期がくれば、あなた方の《力》が必要となるでしょう。今は準備をしていたいただきたい！！』

『アルタラス王国王女ルミエス氏はこのように述べ、アルタラス王国の正統政府の樹立を宣言いたしました。これに対し、日本国政府は同王女を正統政府と認め、安全保障条約締結に向け、話し合いをしていく旨発表し、各国にも正統政府と認めるよう働きかけ

ていく方針を示しました』

『……えー、今新しいニュースが入りました。先ほどのルミエス王女の発言にあった、パーパルディア王国がフェン王国での戦いに敗れたといった内容に関するニュースです』

『本日未明、フェン王国を攻めていた列強パーパルディア王国軍は、フェン王国と日本国の2カ国連合軍に敗れています。え?!……編集さん、この数値は本当ですか?』

『……失礼しました。同戦いで、パーパルディア王国軍は300隻以上の艦船を失っています。これは……全滅に近い、海上戦力に関し、全滅したようです』

『ボソボソボソ……えー、パーパルディア王国軍はその主力ともいえる竜母艦隊、竜母艦隊、これも失っている模様です。ちよつと……原稿を読んで、信じられません』

『変わって、次のニュースです。魔導師キャンディー氏は、美肌に関する魔法を同じく日本国の三浦氏と中村……』

通信が切られる。沈黙。

皆、顔が笑った状態で震えている。

「パーパルディア王国が、フェン王国で、完膚なきまでに叩き潰されて負けているぞ!!!」

「ルミエス様が生きていたんだ!!!」

「よし、時が来るまで全力で頑張るぞ!!!」

地下組織の士気は上がっていく。



パーパルディア皇国 皇都エストシラント 第1外務局――

「何だ!!今の魔信は!!!」

日本から各国に向けて発せられた魔信は、皇国でも傍受されていた。局内に怒号が飛び交う。

属国が独立宣言を行った。しかも、他の国にも決起を呼びかけているのではないかととれる発言をしている。

皇国の基盤を揺るがしかねない事態。

「これは……レミール様の、皇帝陛下への殲滅許可については、結果を聞くまでもないだ

力としては全てが壊滅したに等しい。

この情報もたらされた事により、彼の頭の中は混乱の極みとなる。

仮に文明圏内の国家が戦列艦数千隻を使用し、今回の派遣部隊に襲い掛かったとしても、僅かな被害と作戦の遅延が予想されるのみであり、決して全滅にはならない。

ロウリア王国と日本国の海戦経緯から、日本国の戦力を算出していたが、どこかの情報が根本的に間違っているのかもしれない。

「一度日本に関するすべての情報を洗いなおせ!!情報源まで特定しろ!!!」

「ムーは……いったい何を掴んでいるのだ!!!まさか!!?」

アルデの脳裏に最悪のシナリオが思い浮かぶ。まさか……、ムーは今まで決まっていた行つてこなかった、自国の機械科学兵器の輸出を開始したのかもしれない。

自国のある第2文明圏から最果ての地である日本に輸出すれば、自国が被害を受ける可能性も無く、そして我が国への攻撃にもなる。

万が一第3文明圏が日本の手に落ちたとしても、間には第1文明圏があり、神聖ミリシアル帝国を挟んで牽制できる。

文明圏外国家であれば、文明差がありすぎて複製も出来ないだろう。

ムーにとっては自国の兵器が他の列強にどれだけ効果があるのか測定でき、輸出費も儲け、そしてパーパルディア皇国への牽制も出来るため、一石二鳥ならぬ一石三鳥である。

「もしそうだとすると……マズイ!!マズすぎる!!!」

アルデは、日本国に関して再調査するよう部下に下命した。



第1文明圏 列強 神聖ミリシアル帝国 港町カルトアルパス とある酒場――

酒場では、平面水晶体に酔っ払いどもが注目する。

最上位列強国、神聖ミリシアル帝国ではカラー映像の魔信ニュースが送信され、平面水晶体の受信機で見ることが出来る。

方式は違えど、映像付きのニュースが流れるのは、神聖ミリシアル帝国と、第2文明圏の列強ムーのみだろう。そして、カラーで見ることが出来るのはこの世界最強の国、神聖ミリシアル帝国のみである。

平面水晶体には、週1回流される、世界のニュースが映し出される予定だ。貿易で働

く者たちにとって、このニュースはとても価値のあるものだった。

「始まるぞ!!」

音楽が流れはじめ、ニュースが始まる。

『こんにちは、世界のニュースの時間です。今日は皆様に信じられないニュースをお届けします』

『それでは、最初のニュースです。覇を唱え、周辺国に対し、繰り返し侵略を行ってきた第3文明圏の列強【パーパルディア皇国】が、【フェン王国】の攻略に失敗し、派遣軍は事実上全滅いたしました』

『今回の全滅により、パーパルディア皇国は、海上総戦力の全てを失った模様です。パーパルディア皇国を退けたのは、東の果てにある文明圏外国家、【フェン王国】と【日本国】の2カ国連合です』

『どのような兵器を使用したかは不明ですが、今回のパーパルディア皇国の敗戦は、第3文明圏のあり方に、大きな影響を与えると考えられています』

『変わって次のニュースです。【グラ・バルカス帝国】、通称【第8帝国】は【神聖ミリシアル帝国】に対し、2年に1度我が国が主体となって開催される会議、先進11カ国会議に参加させるよう、要求をしてきました』

『政府はこの申し出に対し、検討する旨を回答している模様です。【グラ・バルカス帝国】は列強【レイフォル】との戦争に圧勝しており、列強の自覚があるため、今回このような要求をしてきたものと思われまます』

ニュースが終わる。

「おいおい!!聞いたか!?!」

今日の酔っ払いたちの話題は1つだった。

「聞いたぜ!!第3文明圏列強。パールディア皇国が、フェン王国に攻め入って、文明圏外の2カ国連合と戦い、返り討ちにあつたらしいな!!」

「列強が、文明圏外国家にやられるとは、信じられねえ」

「またあれか!新興国の日本とかいう国が絡んでいるな!!ロウリア王国の侵攻からク

ワ・トイネ公国を救った国だ」

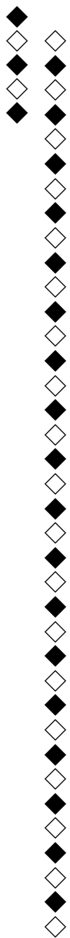
「そういえば、日本は第3文明圏の神話に出てくる魔王ノスグーラが復活したとき、小隊を送って魔王を倒してしまつたらしいぞ」

「魔王つて、大層な名前だが、どの程度のものなのだろうな。しかし最近レイフォルが崩壊したり、局地戦で列強が敗れたり、話題に事欠かないな」

「まあ、しかし、日本がどれだけ凄かろうが、中央世界は安泰だよ。神聖ミリシアル帝国は格が違いすぎる」

「はっはっは、そうだな!!!」

酔っ払いどもの話は続く。



パールディア皇国 皇都エストシラント 皇宮——

皇族『レミール』は、日本に対する殲滅許可をもらうため、皇帝『ルディアス』の下を訪れていた。

「もう報告書は読まれたと思いますが……。」

レミールは概要を説明する。

「……結果、皇軍はフェン王国の攻略に失敗しました。そして、日本国内からアルタラス王国王女、ルミエスが臨時政府の樹立を宣言いたしました」

「他の属領もわき立っております。このまま日本国をのさばらせておくと、皇国の癌になりかねません」

「よって、日本国に対する正式な宣戦布告と、同国国民に対する殲滅戦の許可をいただきに参りました」

皇帝ルディアスはゆっくりと話始める。

「今回の失敗、アルデは驕ったか……。奴の処遇についても考えねばならんな」

「しかし、たかが文明圏外の蛮族どもに……列強たる皇国がこれほどまでに、なめられるとはな……私は不愉快だよ」

「レミール、流石だな。最初からおまえの言うとおりであった。私が甘かったようだ」

「やはり、このような蛮族は殲滅し、皇国に逆らった愚か者はどうなるか、世界に知らしめなければならぬ」

「……今、ここにパーパルディア皇帝ルディアスの名において、日本に対する宣戦布告及び殲滅戦を許可する!!!」

第3文明圏列強パーパルディア皇国は、日本国に対し、民族浄化を原則とした戦争を行うことを決意した。

それが眠りから起きた龍を本気にすると知らずに：



数時間後――

レミールは、第1外務局の会議室に向かっていた。本来なら「敵」となった日本のために出向く事は考えられないが、『フェン王国での戦いの後に会談をする』とレミール自身が日本側に伝えており、日本国外務省の担当もこれを了承していた。

局地戦とはいえ、決して負けるとは思っていなかったため、会議室へ向かうレミールの足取りは重い。今回は、つけ上がった日本が前回よりもさらに高飛車な態度に出てくる事が予想された。

「……小賢しいな」

しかし、考え方によつては、日本に早急に宣戦布告を伝える事が出来るため、組織としての事務手続きは楽になる。

そして、日本国の外交官の口から蛮族の国民どもに、列強たるパーパルディア皇国が本気で殲滅戦をしかけてくる事が伝えられ、日本国民は恐怖のどん底に叩き落されることだろう。

「まあそれも良いか……」

レミールは会議室のドアを開ける。中には見慣れた顔が2人、朝田大使と補佐の篠原である。

会議が始まる。

「……フェン王国での戦いの結果は知つてのとおりと思いますが……パーパルディア皇国の民のためにも、前回提示した日本国からの要求、考えていただけましたか？」

日本国からの要求は、大まかに言えば重要参考人（皇帝）を含む、日本人虐殺に関与した被疑者の引渡し、そして被害日本人への賠償及びフエン王国への謝罪と賠償であった。なお、被疑者にはレミール自身も含まれる。

「フ……解りきつた事を聞くのだな。断る」

「そうですか、では日本国としては……」

「こちらから伝える事がある」

レミールは朝田の発言を遮るように話し始める。

「おまえたちは、我が国の属国の独立を促す者を保護する等、皇帝陛下の怒りを買すぎた。自分たちが何をしているのか、全く理解できていない蛮族はこの世には要らぬ」

話は続く。

「お前たちは列強の力をなめ過ぎている。そして、お前たちの国の意思決定を行う者たちは、自分たちだけは安全だと思っているのではないか？ 甘いな」

「その愚かな考え方が、自分たちを滅ぼすことになる。その考え方が……皇帝陛下の猛烈な怒りを買う事になり、自らを滅ぼすことになってしまふのだ」

「哀れな日本国民よ、我が国、パーパルディア皇国は日本国に対し宣戦を布告、全国民を抹殺する事を決定した。」

朝田は驚愕の表情を浮かべる。

「ほう……民族浄化ですか……皇帝陛下はヒトラーにでもなつたつもりですかな？」

「(ヒトラー？ 誰だそれは?) ……お前たち2人も、国に帰つた後、侵攻してきた我が国の兵により殺されるだろう。今殺さないのは、私からの慈悲だ」

「……呆れるな……」

「自分たちの置かれている状況が見えないばかりか、虐殺を良しとするとは、あなた方ほどの愚か者と交渉したのは初めてだよ」

「蛮族、蛮族と相手を見下し、戦う相手の手の内を見ないとどうなるか……この戦いで学ぶと……いや、国が滅ぶのだから学べないな。これは失礼失礼」

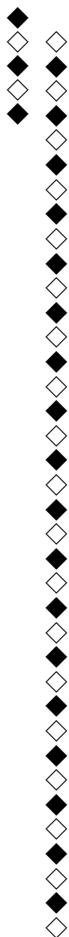
「あなたが言つた言葉丸々貴国にお返しする。我が国が本気を出すとどうなるか見るが
良い」

朝田、篠原は席を立つ。

「この世界、列強と虚勢を張っていてもこの程度ですか……あなた方のような蛮族どもとは、個人的には2度と交渉したくないものです」

「ふん、その言葉、死に行く者の戯言として受け取ろう」

日本国外務省のパーパルディア皇国交渉担当の朝田と篠原は退室した。



数分後——

日本国外務省の朝田と篠原は、第1外務局を出た後、荷物を取りにホテルに向かっていった。

途中、急に馬車が停車する。

「！何だ!?!」

すぐに従者に偽装した国家憲兵隊治安介入部隊の隊員2人が立ち塞がる。黒い服を着た男が1名、馬車の前に立つ。

男は馬車に近づき、朝田に話し始める。

「少し話しがしたいのだが、その先に私の屋敷がある。そこで話は出来ないか？」

話しかけてきた男に、朝田と篠原は見覚えが……パーパルディア皇国第3外務局局长『カイオス』の姿がそこにはあった。

「カイオス殿!?!…日本国と貴国は戦争状態に突入した。もう申し上げる事は何も無い、失礼」

朝田らは立ち去ろうとする。

「待ってくれ!!今後戦争がどのように推移するにせよ、双方に全く話し合いの窓口が無いのは不幸な事だ。せめて私と貴国だけでも連絡手段を確保しておきたい」

「魔信を渡そうとも思ったが、信用出来ないようであれば貴国の準備する通信機器を私の屋敷に置くといった方法をとっても構わない」

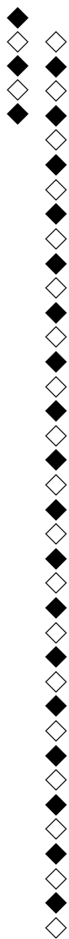
「正気ですか？ 貴国の事だ。内容が上に知れたら、貴方もタダではすまないのではないですか？」

「ああ、タダではすまないな。しかし、貴国も唯一の窓口である通信機が置いてある場所には『戦略爆撃隊』で『空爆』はしないだろう？」

「皇族の近衛隊には、私の息がかかっている者が何人もいる。通信機を設置するだけだ、貴国にとつても悪い取引ではないと思うが」

「『空爆』……貴方は我が国について、少しは調べたようですね。解りました。その話、本日中に上に報告しましょう。」

カイオスの屋敷は海に面しており、敷地も広大であったため、後日秘密裏に通信機と発電機が設置された。



日本国首都 東京 とあるホテルの一室——

ムーの技術士官『マイラス』と、戦術士官『ラッサン』は、話し合いをしていた。

『ゆうぐも型護衛艦』に乗り、観戦武官としての使命、日本の力を計る事は彼らにかつて無い衝撃をもたらしていた。

まず驚いた事は、大砲の連射性と、その命中率であった。船は動き、海にも波があり、そして相手も動く。

そんな中、目視していた限りでは、実に100パーセントというとてもない命中率を、日本の艦船はたたき出している。

日本で買った本を解読したところ、これは砲を安定させる技術と、『FCS』と呼ばれる相手との相対速度を瞬時に算出し、そして砲弾の飛翔速度をも計算、敵の未来位置に向かい、砲を撃っているらしい。

こんな情報が一般市街の本屋に売ってて大丈夫か!?!と近くにいた中央国家情報庁の職員に聞いたところ中核技術ブラックボックスでなければいくらでも見て良いらしい。中核技術ブラックボックスも日本政府が許可したものなら分解してライセンス生産しても良いらしい。

ちなみに興味本位で『もし、許可を得ずに中核技術ブラックボックスを奪ったらどうするんですか?』と聞いたたらその職員は笑いながら、

— 『その時は我々が死なない程度に痛めつけて雇い先を追い詰めて色々制裁します《具体的には、口にマーマイトとハギスを突っ込んで、『鬱アニメ12時間連続視聴休憩は無しだよ♡』上映会をやる』と云っていたので彼らは日本国、中でも情報機関に喧嘩を売らないことを誓った。

…閑話休題。このシステムにより、信じられない事であるが、大砲で空を飛ぶ目標を

も撃墜できるとの事であった。そして、その本には今回見る事が出来なかつた脅威の兵器が記載されている。

『潜水艦』と呼ばれる海に潜る事が出来る船、『誘導弾』と呼ばれる射程距離が100kmを超える兵器、そして海中を進む『魚雷』と呼ばれる兵器：そんな兵器は考えたことが無かつた。

そして極め付けの本のラストに書いてあつた『核』と『ICBM』：概要を読んだかこれは『禁忌』だ。古の魔法帝国の『コア魔法』と同様の物だ。

どれもが現時点のムーの技術力の総力を結集しても造れるものでは無く、今回我が国が見た日本国の圧倒的な力は、まだまだ日本の極一部の力にすぎず、技術的優位性は全く無いという事に気付かされる。

2人は日本の底力を脅威に思うと同時に、友好国となつた事に安堵する。これほどの力、そして技術力を我が方に輸入出来ればグラ・バルカス帝国にも対応する事が出来る。

「マイラス、日本をどう見る？」

「どうもこうも、技術が我々よりも進みすぎていて、良く理解できない事が多すぎる。特に、LSIとかいう集積回路や、コンピュータと呼ばれる高性能演算装置の原理が良

く理解できない」

『スピッドファイア』戦闘機の時点で少しは知っていたが…はつきり言われるとキツイな…」

「そうか、俺は戦術が根本的に異なる事に驚いている。はつきり言って、我が国の艦隊はパーパルディア皇国なら蹴散らす事が出来るが、日本を相手にした場合、今回のパーパルディア皇国艦隊と全く同じ運命をたどるだろう」

「日本に高い兵器を使わして、より金を使わせる事くらいしか出来そうに無い」

「はあ…」

2人は溜め息をつく。重い空気が流れる。

「ラッサン、しかし収穫ならあるぞ」

「何だ？」

「兵器の概念、進むべき方向性が見えた。考えた事も無かった『誘導弾』という兵器、おそらく、日本のそれに比べれば速度は遥かに遅いが、初歩的なものであれば我が国でも作れるかもしれない」

「日本と外交する事で、我が国は長期的に見て神聖ミリシアル帝国を超える事が出来る

だろう」

「ほう、ちなみにグラ・バルカス帝国はどうだ？」

「解らない。だが、日本側に伝えたところ、日本も『グラ・バルカス帝国』を脅威に思っているらしい」

「どうやら対グ帝用に日本は『第1〜2世代主力戦車』や旧式の『第2〜3戦闘機』や退役した護衛艦をそのままくれる様だぞ！」

「そうか！だが、我が国でも主力戦車やジェット戦闘機を作りたいな……」

ムーの観戦武官たちの考察は続く。

「……ん？、これは!? 『ドイツ第三帝国の戦車全解説編！設計図もあるよ♡』だど!!」

「なんだそのエ○漫画みたいの」

「ちなみに私は熟女モノが好きです」

「誰も聞いてねえよ」

作者はド○チエフ氏やチ○チ○亭氏みたいなムチムチ系が好きです。





日本国 首都 東京——

外務省の柳田は、ムー大使館を尋ねていた。

「ムー大使のユウヒです。本日はどのようなご用件でしょうか？」

少し緊張した顔で大使は話す。その表情から、多少の狼狽が見て取れる。

「実は、日本国政府から貴国に対しての要望があります」

ユウヒの顔はさらに緊張する。

「何でしょうか？」

「実は……」

柳田はカバンの中からA3サイズの写真を取り出す。

「ムーは、各国の地に外交連絡用の空港を造っていると聞いています」

柳田は写真の一箇所を指差す。

「アルタラス王国にあるこの空港の使用許可と、この空港がどの程度の加重に耐えられるのか、設計の詳細が知りたいのです」

「な!!!」……これは!?なんと精巧な!!航空写真ですか?」

「いえ、宇宙空間にある我が国が打ち上げた人工衛星が撮影した写真です。」

「!!……いやはや、貴国の本で読んで、事前の知識はありましたが、自分の前に写真が広げられると、貴国の技術を実感いたします。」

ユウヒは一呼吸おく。緊張の顔は既に解かれている。

「確かに、その空港は我が国が造りました。細かい仕様はすぐには分かりませんが、本国に問い合わせ、判明すればすぐにお伝えいたします」

「アルタラス王国は、大規模魔石鉱山があるため、将来的に大型輸送機の開発及び輸送も考えられていたため、相当強く造っていたはずですよ」

「ただ、我が国が飛行場を造る場合、土地の使用及び飛行場の建設許可をもらった後、建設いたしますが、その所有権はあくまで空港のある国に属します」

「つまり、アルタラス王国であれば、アルタラス王国の所有物となります」

「現在はパーパルディア皇国が支配していますので、パーパルディア皇国の所有物ですね」

「皇国がアルタラス王国を攻める時、ムーにも事前通告があり、アルタラス王国内に現在ムーの人員はおりません」

「つまり、飛行場を利用したい場合は、ムーではなく、現在所有している国に許可を取る必要があります」

「所有権を有する国が良いという事であれば、ムーは空港を日本国が使用する事に口は出しません」

「アルタラス王国に関しては、皇国の支配により、現在はずでに使用出来ない状態となっているため、基地として使用いただいても、改造してもらっても構いません」

柳田の顔は明るくなる。

「ありがとうございます。その言葉だけでも十分です!!!」

そう言われた直後、けたたましいフラッシュが生じる。

なんと全ての国会議員が起立していた。第1野党党首も、左派最大勢力の党首も全員が起立していた。

若い議員の中には目尻に涙を浮かべる人もいる。

「過半数と認めます。よって、本案は可決されました」

「宣戦布告案は7日前の衆議院での可決と今会の可決により、宣戦布告は認められました」

「宣戦布告案可決の為、日本国憲法第四章第六五条に則り、内閣総理大臣『安倍野三晋』君に演説を求めます」

記者たちのフラッシュが焚かれ、安倍野総理が壇上に向かって歩く。

総理が手を上げ、ザワついた空気が静まりかえる。『日本国内閣総理大臣』はゆっくりと話し始める。

「みなさん、我々の外交交渉も虚しく……皆さん知つてのとおり、パールディア皇国は

我が国、日本国に対し、宣戦を布告いたしました」

「さて、パーパルディア皇国は今回、日本国民の全てを虐殺し、民族浄化を行うと伝えてまいりました」

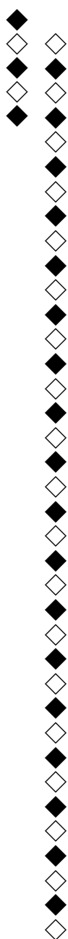
「日本国政府は、皆様の前ではつきりと宣言いたします」

「日本国政府は、その持てる力の全てをかけて、日本国民の皆様を守ります!!絶対に!!!絶対に守り抜きます!!!」

「私は、パーパルディア皇国の宣戦布告に対し、日本国憲法第五章第七三条の自衛隊の最高指揮権に基づき、自衛隊全隊にパーパルディア皇国を滅亡させる様命令しました!!」

「日本国政府は、必ず皆様を、パーパルディア皇国の民族浄化から守り抜きます!!!」

「本日、2020年1月30日午後3時30分を持ちまして、日本国はパーパルディア皇国に対して宣戦布告をします!!!」



日本国 外務省ーーー

アルタラス王国の王女ルミエスは、またもや日本国外務省を訪れていた。

あいさつが行われ、会議に入る。

「外務省の柳田です。日本国政府からの言葉をお伝えします」

「アルタラス王国との安全保障条約ですが、政府は条約を結ぶ用意があると言うことです」

ルミエス王女の顔が喜びに溢れる。柳田は心の中で『(結婚したい)』と思いながらも、話を続ける。

「そして、条約によって、アルタラス王国内のパーパルディア皇国軍基地を潰そうかと思えます」

「皇国軍の大半を日本が潰しますので、アルタラス王国が独立した後、王国内にあるムーの造った飛行場と周辺の土地を基地として使用させていただきたい」

「もちろん追加工事はこちらで行います。それが出来れば、パーパルディア皇国の皇都エストシラントまでの自衛隊と新世界^N条約^T機構^O軍の本拠地として利用したいのです」

アルタラス王国の空港を使用する事が出来れば、日本側を含めて、2方面での上陸作戦を行える。

ルミエスは短時間考えた後にこう回答した。

「我が国と貴国が安全保障条約を結び、再び独立する事が出来るのであれば、日本国が国内の空港を使用する事を許可いたします。基地を造っていただいても構いません」

会談は早期にまとめ、アルタラス王国に進駐するパーパルディア皇国軍を攻撃する事が決定された。



神聖ミリシアル帝国 帝都ルーンポリスー

神聖ミリシアル帝国情報局はかつて無いほどの忙しさに見舞われていた。

神聖ミリシアル帝国は、『情報』の重要性を良く理解し、情報を制する者は世界を制するといった考えの下、情報分析に力を入れている。

しかし良く理解できない事象が2つあった。

1つ目は、近年西方海上に出現した『グラ・バルカス帝国』、彼らは歴史の表舞台に突然現れた。

文明国に属する国家と、文明圏外に属する国家では超えられないと言えるほどの壁が

存在する。

ゆえに、文明圏外国家は、文明圏に入ろうとする場合が多いが、文明圏の各国とも、文明圏外国家を見下しており、かつ文明圏外の国の国力が万が一にでも文明圏を超えないために、技術流出に対しても相当の制限がかけられている。

そしてその国力差をもって、文明圏内の国は文明圏外国家から、様々な物を吸い上げる。技術差を利用した文明力の差による既得権がそこには存在している。

歴史上、文明圏外国家の国々が連携をとり、文明圏に攻め入る事象はいくらでもあった。しかし、それは1度も成功する事は無かった。

『グラ・バルカス帝国』なる文明圏外国が、周辺の国々、文明圏外の蛮国を瞬く間に制圧し、第2文明圏に対し、最初に交渉してきた時、第2文明圏の『パルス王国』は、列強『レイフォル』を窓口にしてくれと伝えている。

レイフォルの性格からして、それは正しい判断だったと言えよう。

しかし、レイフォルに、彼らが交渉に向いた際には、文明圏外国家はまず『パガンダ王国』を通せと言われ、窓口で追い返されている。

そして第2文明圏のレイフォルの保護国、『パガンダ王国』に彼らはやってきた。その時、交渉したのはパガンダ王国の王族だった。

パガンダ王国は、グラ・バルカス帝国が王国を通さずにレイフォルに直接交渉に行つ

た事に対し、礼を知らない文明圏外の蛮族と罵しり、さらに莫大な賄賂を要求したようだ。

グラ・バルカス帝国の交渉担当も皇族だったという情報もあり、パガンダとの交渉の際に。

『我が帝国が、貴様らごときの低文明でかつ小国に対し下手に出てやっているのに、その言いつは何だ!!!』

と激昂したという。

交渉したパガンダの王族は、文明圏外の蛮族のたかが外交担当ごときが、文明圏のレイフォールの保護国たるパガンダ王国の王族に対し、無礼であるとし、不敬罪の名の元に処刑。この出来事により、グラ・バルカス帝国は激昂。第2文明圏に宣戦布告し、パガンダ王国を強襲制圧し、列強レイフォールとの戦争も圧勝している。

情報局長『アルネウス』は、傍らの部下に話しかける。

「グラ・バルカス帝国について、その後新たに情報はあるか？」

「現在、グラ・バルカス帝国は、本国の位置さえ不明です。そして、レイフォールとの戦い

から分析した結果、第8帝国の戦艦グレードアトラスターに関して言えば、我が国の最新鋭戦艦と同等かそれ以上の性能と恐れられます」

「全く信じられない事ですが、分析結果はそうになっています。」

突然の強国の出現に、情報局長は頭を痛める。

そして不可解な事象の2件目、第3文明圏フィルアデス大陸の北東に位置する『トーパー王国』、そこで第3文明圏にある神話に登場する存在、魔王『ノスグーラ』が復活した。その時、日本国と呼ばれる文明圏外の国が小隊をもって、『ノスグーラ』を倒したという。魔王を倒す際に日本が使用した兵器、戦車と呼ばれる兵器は出力の関係上、我が国の魔導機関をもってしても、出力不足で動かないと分析されている。小型にすれば可能らしいが……

そして、信じられない事に、人が持ち運び可能な対空型の誘導魔光弾のような兵器が使用されたとある。誘導魔光弾は、対艦用がまだ開発中であり、対空用にあつては、夢の兵器。

人が持ち運び出来るまで小型化するというのは、夢のまた夢である。

また、日本国は去年同じく文明圏外であるが、人口は超列強の国『ロウリア王国』を滅ぼした。ロウリアはクワ・トイネとクイラという国を滅ぼそうとしたが、日本が参戦

した直後、首都を制圧され降伏したと伝えられている。

迷信の類を信じたが、ロウリアの首都を砲撃した戦艦は300m級だという。

もしもこの報告が本当なら、日本国は神聖ミリシアル帝国の技術を上回ることになる。さすがに、この報告は荒唐無稽であり、情報局内でも信じる者は少なかった。

しかし先日、パーパルディア皇国がフェン王国へ侵攻、日本とフェン王国の連合軍に対し、戦いで全滅の被害を出して敗れた事により、日本国の軍事技術に関する情報を『ウソ』と決め付ける訳にはいなくなった。

「もっと日本に関する情報をかき集めろ!!」

神聖ミリシアル帝国情報局長アルネウスは部下に対し、日本について調べるよう指示した。



日本国 防衛省――

「意外と簡単に落ちるかもな……」

アルタラス王国を撮影した衛星写真を見ながら、担当者は分析する。現在アルタラス王国内のパーパルディア皇国軍は、首都『ル・ブリエス』から少し離れた場所にワイバーンロード用の滑走路を置き、基地を建設している。

それが1点。

2点目として、首都ル・ブリエスの港に戦列艦が20数隻停泊している。

3点目は、首都から北方約40kmの位置に基地のようなものがある。

アルタラス王国内でのパーパルディア皇国軍は、この3箇所に集中しており、幸運な事に、人口密集地に基地は無い。

この3箇所はすべて艦砲の届く位置でもあり、皇国の主力をこの射撃により消滅させれば、アルタラス王国自身の手で王国を取り戻せるのではないか？

「うーん、そんなに甘くは無いかな」

戦争の準備は着々と進んでいた。

第6話 亡国の解放

中央暦1640年5月15日

パーパルディア皇国占領下 旧アルタラス王国首都ル・ブリアスー

旧アルタラス王国の反皇国の地下組織、軍長『ライアル』は私服で重要地点の見回りをしていた。

王女『ルミエス』の言った王国解放のための準備を信じて必死で重要拠点の警備状況を把握する。

今日も、死にそうなほどに親が殴られ、涙を流す娘が連れて行かれる光景を見た。

ライアルは、元王国第1騎師団長といった肩書きを持っており、正義感が非常に強い彼にとって、眼前の光景を見てみぬふりをしなければならぬのは、相当に屈辱的だった。

しかし、自分が捕まれば、王女の言った解放の時に、指揮をまともにとれる者がいなくなってしまう。命をかけて救おうかとも考えた。

しかし、王国の未来を考えると、自分の指揮能力は絶対に必要なもの。

彼の心は泣いていた。

ライアルは、一通り重要拠点を回ると、その時の警備員の配置箇所を忘れないうちに、地下組織に帰宅する。

「ちくしょう!!! 今日胸糞悪いものを見た。皇国の糞ども!! タダではすみませんぞ!!!」

ライアルは、音が漏れないよう、静かに怒る。

「どうしました!?!」

地下組織員が話しかけてくる。

「今日も、統治機構に連れていかれる娘を見た。早くパールディアの糞どもから王国を取り戻したいものだ。ルミエス様は、日本との交渉に成功したのだろうか?」

「その件ですが、ちよつと良いニュースがありますよ」

ライアルは、報告を聞き、興奮する。

先日、ロデニウス大陸の方向から強い魔信が発信された。通常の国がそれを傍受した

場合、何を言っているのか良く解らないだろう。

しかし、アルタラス王国の者たちにとってそれは強烈な意味を持つ内容だった。

「『長い夜にも必ず朝は来る。東方より日はまた昇る。苦しみの期間が長いほど、太陽はより輝く』『良運はタスの日』」

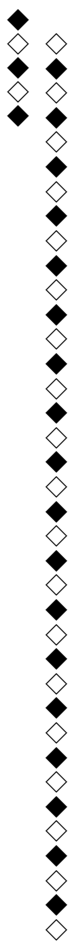
一見何かの詩のようにも見える。

しかし、これを最初に考えた者は、アルタラス王国の歴史の中で『奇跡の勝利』と言われる戦いを行い、侵略軍を退けた救国の英雄が詠んだものである。

そして、『良運はタスの日』これは1週間後だ!!

「各部隊に伝達しておけ、1週間後以降、すぐにでも戦える準備をしておくようにと!」
「はっ!!」

通信員は通信室にこもり、アルタラス王国内に点在する反パールディア組織に対し、秘匿用暗号を使用した魔信伝達を開始した。



中央暦1640年5月22日

旧アルタラス王国首都ル・ブリアス北東上空——

パーパルディア王国、アルタラス王国派遣部隊所属の竜騎士『アビス』は、旧王国北東の哨戒任務に就いていた。

晴れわたった空、澄みきった空、少し肌寒い風を受けながら、彼は愛機の『ワイバーンロード』を飛ばす。

島国だったアルタラスはすでに皇国の支配下となり、目立った反乱も無い。

北に500kmほどで祖国があり、南は海を挟んで文明レベルの低い蛮地、東南東にはロデニウス大陸となっており、旧ロウリア王国のように、覇権主義の国は付近に無い。

アルタラス王国の北東には海上に30門及び50門級戦列艦隊に約5隻の艦がいる。パーパルディア皇国は、他国との戦闘状態である事が多く、基本的には平時時も有事も、軍の動きに大差は無い。

現在は、フェン王国、そして日本国と戦争を行っているようだが、遠くでの出来事であり、いつものように今日の任務も終わる。彼はそう思っていた。

雲の切れ間、眼下に見慣れない物体が見える。彼の視界に写ったのは、皇国の戦列艦よりも遥かに大きく、灰色に塗られた艦隊。

「まっまさか!!」

彼は魔信具に手をかけ、報告しようとする。

だが、視界の端に灰色の物体が見えた気がした瞬間、アビスの意識は消し飛び、彼の報告がパーパルディア皇国軍アルタラス王国派遣部隊に届く事は無かった。

日本国海上自衛隊第1艦隊第5空母打撃群旗艦『ひりゆう』から発艦した『F-35C』は、ワイバーンがパーパルディア皇国の者かの確認の後、04式空対空誘導弾⁵により、ワイバーンロードを撃墜した。

ミサイルの直撃を受けたワイバーンは、それに騎乗した人員と共に、肉片を撒き散らしながら空から降る。

アビスは、後にアルタラスの戦いと呼ばれた戦いの最初の犠牲者になった。



数刻後——

パーパルディア皇国アルタラス王国派遣部隊の戦列艦5隻は付近近海を哨戒活動中

だった。

艦長『ダーズ』は通信員に尋ねる。先ほど哨戒中の竜騎士が、何かを言いかけ、通信が途切れている。

魔力探知レーダーからも反応が消えた。竜騎士の消息を絶った場所は現在の艦の位置から近く、緊張が走る。

「艦影確認!!こちらに向かってくる!!」

水平線に城のような船が見え始める。国籍不明船は、ダーズの常識からかけ離れた船速でこちらに向かってくる。

「総員、戦闘配置に就け!」

パーパルディア皇国の軍船が戦闘態勢に移行する。

「あ……あの旗は、敵船は日本国!敵船は日本国の国旗を掲げている!!」
「なんだ?!奴らの国から遠すぎる……では、至急魔伝で報……」

「敵艦発砲！」

敵艦前方から煙が上がる。

「そんな、遠すぎるぞ!!」

話している間も、敵艦に煙が上がる。その数5発。

ダーズは、乗船する艦が僅かに揺れ動いたように感じた。

次の瞬間、ダーズの乗艦する50門級戦列艦は大きな火柱と共に、海上から消えた。

ミサイル巡洋艦『すずや』の放った5発の砲弾は、パーパルディア皇国戦列艦の対魔弾鉄鋼式装甲をあつさり貫き、弾薬室で爆発、海上の5隻は木っ端微塵に粉碎され、その姿を消した。



パーパルディア皇国 アルタラス王国派遣部隊——

アルタラス王国を攻めていた皇軍は、王国を占領後、東を攻めるために転進した。

武装解除され、時々起こる小規模な反乱を鎮圧、統治するためだけの小規模の軍が残されている。

旧アルタラス王国首都『ル・ブリアス』の軍港には戦列艦20隻、そして少し離れた所に陸軍の基地、人員2千名とワイバーンロード20騎、そして首都から北へ約40kmの位置に人員2千名の陸軍基地がある。

陸軍大将『リージャック』はル・ブリアスを基地から眺めていた。傍らに立つ幹部と話をする。

「東の国、フェン王国に派遣していた我が軍は、全滅に近い被害を出したらしいな。いったい何があつたのだろうか？」

「解りませぬ。皇軍が敗れたなど、今でも信じられません。敵は何千隻もの『数』で攻撃してきたのではないですか？」

「いや、たとえ文明圏の国が何千隻で、今回全滅した派遣軍にかかって行つたとしても、多少の被害と作戦の遅延は予想されるが、全滅はしない。今回の戦い、何かがおかしい」「まさか……」

リージャックの顔が悲壮感に包まれる。

「まさか、ムーか？」

「そ……そんな！」

最悪の状況が脳裏に浮かび、大将幹部は戦慄する。

「いや、まさかな。いずれにせよ、アルタラスは比較的本国からも近く、フェン王国からは遠い。敵がここに来る可能性は低かろう」

2人は基地に設置された建物の上から港を見る。見る者に威圧感を与える皇国の100門級戦列艦が誇らしげに停泊している。

実に計20隻、通常国と比べ、比類なき強さを誇る艦。

「美しいな」

リージャックは、艦に対し、素直な感想を述べる。

「ん!？」

美しく、穏やかな風景、その風景は突如一変する。

眼前の100門級戦列艦『スパール』の艦底が少し動いたように見えた。

次の瞬間、スパールは大きな火柱を上げ、艦を構成する部材と船員を巻き込みながら轟音と共に真つ二つに折れて港の底に沈む。

「何だ? 事故か!？」

スパールの隣に停泊していた80門級戦列艦も、スパールと同じ運命をたどり、彼は理解する。

「て……敵襲!! 敵襲!!!」

港に停泊中の戦列艦は1隻、また1隻と失われていく。

首都近郊の陸軍に敵襲の情報がいきわたり、戦いの準備を始めた頃にはすでに、港の船は全滅していた。

「な……なんとこの事だ!!」

陸軍は末端まで含め、全員が啞然とする。何が起こっているのかが解らない。

しかし、悲劇は彼らだけを見逃してはくれなかった。

基地の中心部が猛烈な火炎に包まれ、少し遅れて衝撃波がリージャックを襲う。

彼は無様に転げまわる。空を見上げる。

爆音と共に、考えられないくらい速度で彼の上空を飛行機械が飛び去っていく。

その機体に描かれた日本の国旗を彼は見る。

「通信兵!!日本の飛行機械に襲撃を受けていると本国に伝えろ!!」

「はっ!!!」

通信兵は魔信器に向かい、走る。

彼がパールディア本国に魔信を送信した次の瞬間、基地にいた者たちは、猛烈な光と共にこの世を去った。

旧アルタラス王国の首都『ル・ブリアス』の港に停泊していたパールディア皇国の戦列艦隊は、日本国海上自衛隊第1艦隊第5空母打撃群構成艦により、全て撃沈された。又、ロデニウス大陸のクワ・トイネ公国より飛び立った『F-15E』と第5空母打撃群旗艦『ひりゆう』艦載機の『F-2C』の空爆により、首都ル・ブリアスの近郊の基地及び、首都から北に40km地点にあったパールディア皇国の基地はほぼ無力化された。

攻撃の開始から20分以内に、アルタラス王国内のパールディア皇国軍は、その機能のほぼ全てを失った。作戦を終えた護衛艦及び航空機は1機の損失も出さず無く、帰路に着いた。



数時間後——

けたたましく鐘が鳴り響き、艦の上では、兵員が慌しく動き回る。

「いったい何だろうな」

ベテラン竜騎士の『デニス』は同僚の竜騎士『ジオ』に話しかける。

彼らは新型竜母の試験航行で、アルタラス王国西側約248km地点の海上にいた。

「全員最上甲板に集まれ!!」

指示が伝達される。

パーパルディア皇国最新型（試験中）竜母『ヴェロニア』。

離陸滑走距離が大幅に伸びた『ワイバーンオーバード』を搭載可能な竜母が存在せず、滑走路延長改修に耐えられる竜母も存在しなかったため、『ヴェロニア』はワイバーンオーバードを搭載すべく骨格から新設計となった。その甲板長は木造船の限界に達していたミールをも超える130mにも達する。

運用コストは劣悪の一言で、風神の涙の稼働数も通常竜母の四倍にも達する。建造費も尋常ではなく通常竜母の三倍の予算が注込まれている。

『ワイバーンオーバード』とは何なのか？それを説明するには背景を説明しなければならぬ。

空の覇者とも言われた『ワイバーン』、それを品種改良し、生殖機能を失ってまで空戦

能力を高めた種、『ワイバーンロード』。

長く空の覇者として君臨し続けていたが、第2文明圏の列強ムーが飛行機と呼ばれる機械を作り、『ワイバーンロード』の優位性が失われつつあった。

そこで、近年ムーが開発した『マリン』と呼ばれる最新鋭戦闘機の登場により、『ワイバーンロード』の空戦能力は劣勢に立たされる。

この状況を打破するため、パーパルディア皇国はその高い魔導技術を使用し、ワイバーンのさらなる品種改良に成功する。

それが『ワイバーンオーバーロード』である。生殖機能と寿命を削ったことにより、ワイバーンロードに比べ、速度、旋回能力及び戦闘行動半径が向上した。

副作用として、離陸滑走距離が長くなるため、竜母を造った場合は、滑走路を長くする必要がある。

『ワイバーンオーバーロード』の最高速度は時速430kmにもほり、列強ムーの最新鋭戦闘機『マリン』に比べても、優位性が確保できると予想されていた。

しかし、速度が速すぎるので、竜騎士の鍛錬だけではとても風圧に耐える事が出来なため、新たな腰掛の開発に苦労していた。

最新鋭空母『ヴェロニア』の最上甲板に彼らは集まり、上司が前に立ち、話し始める。その顔はとても険しい。

「先ほど、本部から連絡があつたが、アルタラス王国の守備隊が攻撃を受けつつある」
「！！！！」
「！！！！」

全ての隊員に緊張が走る。話は続く。

「敵の攻撃には、飛行機械が使用されていた……。この意味が解るな？ 飛行機械が作れるのは、列強『ムー』と同じく列強『神聖ミリシアル帝国』くらいのものだ」

「敵はムーの飛行機械を使用していると思われる。そこで、近海にいた我々に指令が来たのだ」

「今日は、ワイバーンオーバード竜騎士団の初陣だ。現在アルタラス王国首都ル・ブリアス上空に展開中の敵飛行機械に対し、一撃を与える」

「我が方のワイバーンオーバードの性能は、ムーの最新鋭機『マリン』をも凌駕している！！このような第2文明圏からすると遠方に最新鋭機は来ないだろうが、ムーを相手にすると思ひ、決して敵を侮る事無く、そして自信を持って戦え！！」

「では解散！！」

竜騎士隊は、それぞれの準備を始める。

10分後には、錬度の高い兵たちにより、全ての準備は終わっていた。

「出撃!!!」

竜母の上を、ワイバーンオーバードは走り始める。

走るのが苦手な竜が走る様は、少し無様ではあるが、風を掴んだ瞬間、今までの無様な姿からは想像も出来ないほど、軽やかに、優雅に舞い上がる。

濃い青色、遠くには積乱雲のようなものが見える空に向かい、パーパルディア皇国竜母『ヴェロニア』所属の精鋭竜騎士隊の操るワイバーンオーバードは羽ばたいていった。

デニスは歯を食いしばって竜に乗る。ワイバーンや、ワイバーンロードを乗りこなして来たデニス、その彼にとっても、このワイバーンオーバードは速すぎる。

すさまじい上昇力、そして風圧で飛ばされそうになるほどの最高速度、体にかかる重力が数倍になるほどの旋回能力、その全てがワイバーンロードを遥かに凌駕する。

「皇国は恐ろしい兵器を作ったものだ。これほどの兵器を量産できるのなら、ムーも恐

れるに足りんだろう」

竜騎士団は、アルタラス王国上空へ向かった。



数時間後——

「パーパルディア王国ワイバーンオーバーロード竜騎士団は、アルタラス王国上空に達していた。」

付近空域にはすでに敵機は存在しない。

「敵は何処だ!!!」

デニスはジオに語りかける。

「いない……すでに撤退したか……。おい、あれを見ろ!!」

ジオは地上の皇軍基地があつた場所から煙が上がっているのを発見する。

「な！まさか!!」

デニスを確認のため、高度を落とす。遠くから煙が出ていたのは見えていたが、彼が近づくにつれ、その煙の量が尋常ではない量である事に気付く。

高度を落とした彼の目に飛び込んで来たのは、完全に壊滅し、動く者のいない皇軍の基地だった物だった。

「も、もう？は……早すぎる。すでに全滅しているだ!!」

デニスはすぐに通信用魔法具で本国に報告し、他の基地や、港の被害状況を確認する。確認が進むにつれ、胃液が逆流する感覚。第3文明圏で間違いなく最強だったはずのパーパルディア皇国軍、アルタラス王国にいた軍は、規模こそ小規模であったが、付近国家に比べて遥かに精強である。

その軍が全滅していた。

「こんな……こんな短期間で!!そんな馬鹿な!!」

「ん?なんだあれはっ」

!?!?!?

そうジオが言った直後、彼の体が爆発四散し、彼の遺骸とワイバーンオーバーロードの体も地面に落ちる。

「ジ!!!ジオッ!!何があっ?!?!?!」

周りを見ると味方も同じく爆発四散し、最新鋭のワイバーンオーバーロードは一度の戦闘の機会も与えられずに絶命する。

もう、残りのワイバーンオーバーロードはデニス自身だけとなっていた。

「クソツ!敵はどこだっ!!」

怒りに燃え、敵を探す。その時、彼の右隣をナニカが猛烈に過ぎ去って行き、下へ降下していった。

「あーあれがッ！クソっ！何がムーの『マリリン』だ！それよりも速いではないか！」

どう考えても『マリリン』よりも速い。魔信を送ろうとするが、追いかけた方が良いと判断し、必死になり、敵機を追う。

彼の体に重力が掛かり、体が軋む。しかし、追いつけない。どう見ても相手の騎の方が速い。

彼は最強と信じるワイバーンオーバーロードが速度で敗れたことに狼狽する。

「ちくしょう！ん？」

その時、追いつけずにいた敵機から何か白い槍みたいなものが落ちる。

遠く、微かにしか見えないが、それは反転し、自分の方に向かってきている気がする。

「!!!」

デニスとは本能的に避けろと直感した。手綱を操り、回避行動をとる。

とてつもない重力がかかる。だが、追ってきている槍は重力を感じていないと思うば

かりの軌道で追ってきている。

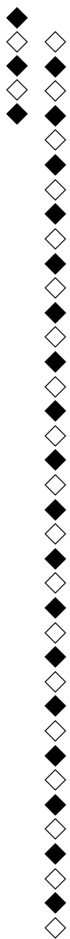
「オレのそばに近寄るなああーッ

!!!!!!」

日本人が見れば『スタンド使いか?』と思うであろう悲鳴を上げながら、デニスは爆散した。

竜母『ヴェロニア』所属のパーパルディア皇国ワイバーンオーバーロード竜騎士団は『F-15E』護衛機の『F-35A』によって全機撃墜された。

だが、デニスの生前最後の報告は、パーパルディア皇国本国にも伝えられ、皇軍内を衝撃を持って駆け巡った。



同時刻——

旧アルタラス王国首都『ル・ブリアス』の地下組織に属する軍長『ライアル』。

彼は民間人の格好をして、塔の上からそれを眺めていたが、何と表現して良いか解らない出来事が眼前にあった。

港に停泊してある第3文明圏最強の戦列艦約20隻、パーパルディアの戦列艦の強さ

「時は来た!!アルタラス王国を取り戻すぞ!!全軍作戦開始!!」

後刻、軍事力のほとんどを失っていたパーパルディア皇国アルタラス統治機構は、一斉蜂起したアルタラス王国地下組織を前に降伏。

アルタラス王国は、その統治権を取り戻した。



パーパルディア皇国 属領クーズー

ハキは、自宅の魔信機で中央世界の文明国が流すテレビの音声のみを聞いていた。

彼はかつてはクーズ王国の名のしれた騎士爵の家の生まれだったが、彼が5歳の頃パーパルディア皇国に併呑され、父はその際戦死、母はその後皇国軍に連れ去られ、それ以降鉦夫として労働させられてきた。

『この人何歳に見えますか?』

『んゝ30歳くらいですか?』

『正解はゝ67歳!!』

『ええー!!』

『魔導師キャンディー氏的美肌魔法液を付ければ、シワシワの貴方もつるんつるん。この魔法液。パツクは……』

その時、ピロリンピロリンと音が流れる。音声が途切れ、突然注意喚起を促すような音が鳴る。

『番組の途中ですが、臨時ニュースをお伝えします。番組の途中ですが、臨時ニュースをお伝えします!!!』

突然の臨時ニュースにハキは聞き耳をたてる。

『第3文明圏の列強国、パーパルディア王国が侵攻し、攻め落としていたアルタラス王国は、独立を宣言いたしました』

『アルタラス王国に進駐していたパーパルディア王国軍は全滅に近い被害を受け、パーパルディア王国アルタラス統治機構はアルタラス王国の組織に降伏しています』

『今回のアルタラス王国の独立、専門家の間では、日本国の関与が指摘されています。繰

り返しお伝えします……』

彼は心の底から衝撃を受ける。パーパルディア皇国の歴史上、一度属領になった場所が再独立した事はない。

アルタラス王国王女ルミエスは、よほど日本に強いパイプを持っているのだろう。しかし、ルミエス王女は過去にこう発言した。

〔パーパルディア皇国は無敵ではない、今属領として苦しんでいる方は、【その時】に向け準備をしてほしい〕

と。

ハキの心の炎がもえる。もしかしたら、この希望も何も無い状況から脱する事が出来るかもしれない。

彼は、自らの国もアルタラスのように独立するため、密かに仲間を集め始める。

【その時】のための準備を開始するのだった。





神聖ミリシアル帝国 港町カルトアルパス とある酒場――

今日も酒場では酔っ払いどもが話しをしていた。

「おいおい、聞いたか？信じられねえ」

「ああ、聞いたぜ！パーパルディア皇国が属領を1つ失ったらしいじゃねえか!!」

「あの皇国が、第3文明圏の覇者が属領を失うとはな……」

「しかも、またあの国が絡んでいるらしいぞ」

「日本国……か」

酔っ払い達が話しをしている時、他の酔っ払いが大声で突然話し始める。

「パーパルディア皇国は、日本に負けるぞ。奴らは喧嘩をふっかける相手を間違えた。俺は日本に行った事がある!!」

衝撃的発言を受け、酔っ払いどもの視線が集中する。注目された者はさらに発言を続

ける。

「日本がロウリア王国を倒した後、俺はこの新興国は今後伸びてくると思い、何か交易は出来ないかと、あまり嵩張らないが各国に高く売れる、ムーの機械式の腕時計をもつて日本に出かけた」

「俺は第3文明圏『ネーツ公国』の出身で、日本とは国交を結んだばかりだったので、公国の許可証で何とか日本に入国出来る事になった」

「日本人は、ムーの機械式時計を見たらさぞかし驚く事だろう、文明圏外国が列強の文明に触れたときの衝撃は相当なものだから、そう思っていたが……」

「日本の玄関口、香港市に私が着いた時、私の考えていた新興国としての日本は、イメージが完全に間違っていた事を思い知らされた」

「空に向かつて伸びる超巨大な建造物、そして街には、神聖ミリシアル帝国の魔導機関の四輪駆動車のようなもので溢れかえっていた」

「道路の交差点も、立体的なものが多数あり、空にはムーの飛行機械をより大きく、速くしたようなものが飛び回っている」

「しかし、そこは首都ではなく、一地方都市に過ぎない。信じられないかもしれないが、日本の国力は、私が感じた限りでは神聖ミリシアル帝国をも凌駕するかもしれない！」

「……ハツハツハ!! そんな訳ないだろう!!」

「おっさん酔いすぎだ!!」

酒場が笑いに包まれる。

「ではこれが!!!」

酔っ払いは大声で話し始める。酒場は突然の大声に静まり返る。

「これが作れる国はあるか!!」

商人は、ムーのそれよりも遥かに洗練されたデザインを持つ腕時計を取り出す。

「これはっ! この腕時計は光をエネルギーに代え、壊れない限り、半永久的に動く!! ムーのねじ巻き式なんて、これに比べたらゴミだ!!」

「しかも、日本国内なら電波と呼ばれる魔信のようなものを受信し、秒針が自動的に補正され、その誤差は10万年に1秒になる!!! これを作れる国はあるか!!!」

酒場内が静粛に包まれる。

「ま……まあ、日本がすごい事は伝わったよ」

酔っ払いたちの話は続く。



トールパ王国 王都 ベルンゲンソー

「ほ……本当か？その報告は、真か？」

ドールパ国王『トールパ16世』は、部下からの報告の真偽を尋ねる。

「真にごさいます。パーパルディア皇国に一時占領されていたアルタラス王国は、日本の攻撃により、在アルタラス皇軍が全滅、統治機構は降伏し、アルタラス王国は、その統治権を奪い返しました」

「しかし、アルタラス王国は、パーパルディア皇国の比較的近くにあったはず。皇国海軍

は、どうなっておるのだ？」

「海軍は健在です」

「では、アルタラスはすぐにやられるのではないのか？」

「その件につきましては、日本の基地がアルタラスに出来るまでの間、日本国の海上自衛隊、実質海軍ですが、それが交代し、アルタラス海域で拠点防衛の警戒任務に就くそうです。日本国によれば、パーパルディア皇国軍に対しては、それだけで十分との事です」「な……なんと、日本にとつては、あの列強パーパルディア皇国軍でさえ、敵では無いというのか」

「さようでございます。」

「ただ一つ、日本国は我が国に要求をしてきています」

「何だ？」

「誤射を防ぐために、戦争が終わるまでの間、付近海域と空域には進入しないでほしいとの事であります」

「空は、解りにくいし、まあ我が国にワイバーンはいないので、空域は大丈夫だな。海域とはどういうことだ？ 国旗を見たら、どの国の船かは解るだろう？」

「まあ、あらぬ誤解を招かぬために、入らぬにこした事は無いが」

「日本には、見えない距離を攻撃する方法があるようです」

「なんと!!うーむ……日本が敵ではなくて、本当に良かったな。よし、全軍に、日本の指定した海域及び空域には入らないように指示しろ!民間船も入らぬよう、商船組合にも伝えておけ!!!」

「はー!」

トーパー16世は、日本が味方だった事に安堵するのだった。



パーパルディア皇国 皇都エストシラントー

美しく、優雅であり、周辺の文明国、そして文明圏外国より搾取された富で潤う街、まさに列強の名にふさわしく、第3文明圏の中でも最高の都、皇都『エストシラント』。皇族レミールは、美しい都を歩く。

浮浪者やこじき等の汚物は存在せず、町の建物は横に広がる限界が来たため、高さが高くなりつつある。レミールは皇帝の言葉を思い出し、つぶやく。

『ゆくゆくは、この美しい都が世界の中心となろう』

皇国の圧倒的国力をもってすれば、簡単な事のように思えてしまう。

「今日も疲れたな……」

レミールは、健康管理も含め、徒歩で邸宅に帰る。後方からは、護衛の者たちが着いてくる。

邸宅についた彼女は、湯浴みを行う。低文明国は、湯浴みの習慣すら無く、水を浴びたり、体を拭くだけの国もあるという。

レミールは、不潔な蛮族が嫌いだった。

湯浴みが終わり、動きやすい服を着てベッドに横になる。

「ふー、今日も疲れたな。まあ良い、時にはこういった忙しい日もある」

気が抜ける。彼女は疲れのあまり、しばし意識が飛ぶ。

レミールが浅い眠りについた時、部屋のドアが激しくノックされる。

「レミール様!!レミール様!!!第1外務局の緊急アラームが鳴っております!!」

睡眠を妨げられたレミールは不機嫌になる。

「まったく、緊急アラームを送るほどの内容ではなかったら許さんぞ」

レミールは、第1外務局へ魔信を行う。

「レミールだ!総務に繋げ!!」

交換は総務に繋ぐ。

「緊急アラームが鳴ったぞ、いったい何だ!!」

「緊急事態が発生しました。内容は……傍受の危険のある魔信で話せる内容ではありません。至急来ていただきたいのですが!!」

「………解った」

レミールは魔信を切る。仕事で疲れ、休もうとした矢先の再びの呼び出し。

「いったい何なのだ!!」

レミールの不機嫌ゲージは振り切れそうになる。彼女が第1外務局へ行くと、すぐに局長室に案内される。

局長室のドアを開く。

中では、第1外務局長『エルト』をはじめ、幹部が顔をそろえ、そしてその全員の顔色が悪い。

レミールは皇族専用の席につく。机上には、紙が数枚置かれていた。

「レミール様、まずは目をお通し下さい」

レミールはレジュメに目を通す。その簡易報告書を読み進む。

そのレジュメを読んだ瞬間、レミールの手は、怒りと衝撃のあまり、震え始める。報告書には彼女が感じたことの無い衝撃的な事実が記されていた。

【アルタラス王国陥落に関する報告書（第1報）】

「いったい……いったいこれはどういう事だ!!」

パーパルディアア皇国の歴史の中で、一度陥落し、統治した国が再独立、もしくは奪還された事は1度も無かった。

「概要を説明いたします」

第1外務局長エルトが説明を始める。

「本日未明、在アルタラス皇軍は、日本国からの攻撃を受け、全滅いたしました」

そして、それに呼応するかのよう、原住民の反乱が発生、皇国のアルタラス統治機構はこれに降伏し、アルタラス王国は独立を宣言、王女ルミエスは皇国の他の属国に独立を呼びかけています」

「何故だ!!何故こうも皇国が文明圏外の蛮国ごときに連敗するのだ!!皇軍は、第3文明圏において無敵ではなかったのか!!」

レミールはカン高い声で叫ぶ。

エルトは、キンキンとしたその声に耳を塞ぎたくなるが、我慢し、返答する。

「第3文明圏で最強であることは間違いありません。ただ……」

「ただ、何だ！」

「今回、アルタラス王国の皇軍に対する攻撃に飛行機械が使用されています」

「飛行機械?! 飛行機械だど!! それでは……」

「はい、飛行機械を作れるのは、列強ムーくらいのもんです。彼の国は、会談の際最新鋭戦闘機の魔写を見せました」

「おそらくは日本から輸入したというのはブラフです。そもそも文明圏外の蛮族が我が国でもまだ空想上の飛行機械など作れるわけがありません」

「ムーは、自国の重要兵器を決して輸出して来ませんでした、十中八九、ムーがワイバーンオーバードに勝てるかどうか、我が国と対立しそうな日本国に輸出したのだと……」

「日本の背後には、ムーがいるのかもしれない」

「代理……戦争か。小癩な！」

「どおりで、日本の外交官が、戦争前に自信があつた訳だ。あの魔写も我が国を欺くため

の欺瞞だな!!」

「真偽を確かめる。ムー大使を召喚しろ!!私に対応する」

「はい!!」

会議は終了した。



パーパルディア皇国軍最高司令官アルデ邸宅——

パーパルディア皇国軍の最高司令官アルデは、自宅のベッドの上で頭を抱えていた。飛行機械の目撃情報により、ムーの関与が確定的となった日本軍。

航空戦力についても、アルタラス上空で最新鋭竜母『ヴェロニア』所属のワイバーンオーバーロードと連絡が取れなくなっている。おそらく全滅したのであろう。

『音速を超える飛行機械』は嘘だと思っていたが、本当ならば、ワイバーンオーバーロードでも敵しいだろう。

問題は海上戦力もだ。戦列艦に搭載できる砲の大きさは限られている。パーパルディア皇国の戦列艦の砲では、ムーの戦艦の装甲を抜けない。

しかし、ムーの戦艦の主砲はあっさりとは皇国船を貫通するだろう。

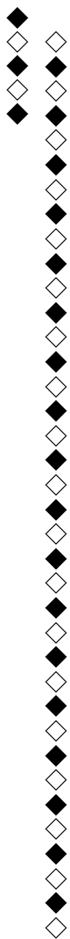
ムーの主砲に耐えうる装甲にした場合、風神の涙を使用した帆船では出力不足であり、重すぎて実用に耐えうる速度が出ない。

日本がどの程度ムーの戦艦を購入しているのかは不明であるが、1隻でも脅威である。

アルデは、先の戦いでムーが観戦武官を日本側に派遣したのはこの事だったのかと考える。

「ちくしょう！ムーめ!!何故日本に……」

アルデはムーの脅威に頭を悩ませる。



第3外務局長カイオス邸——

パーパルディア皇国第3外務局長『カイオス』は、アルタラス陥落の報を受け、恐怖

に震えていた。

局長の傍ら、貿易商との繋がりも強かったカイオスは最初の日本との接触の後、民間を通じて調査に乗り出す。

そこで明らかになったのは、新興国家では考えられないほどの国力だった。

だが、情報元は所詮商人、誇張もかなり入っていると思われたため、自分の政争の道具にでもなれる国力があれば良い程度に思っていた。

しかし、日本に対する外交権は、皇帝陛下の意思もあり、『狂犬』皇族レミールに移管されてしまい、レミールはいつものように、文明圏外国の民、日本国民を殺してしまつた。

日本国は、当然これに激怒した。

カイオスはこの時、フェン王国の戦いで皇国も多少ダメージを負うと分析していたが、あろう事か皇国のフェン王国派遣海軍は全滅し、日本の船の撃沈確認はとれていない。

第3国経由の商人達の情報によれば、日本国軍の被害者数はゼロという信じられない情報を得る。もしも皇国の情報局にこれを伝えても情報元の弱い伝聞として、だれも信じないであろう。

しかし……カイオスは、フェン王国の戦いの後に商人達から渡された1冊の本を見

る。魔写を多量に使用した本。

商人たちは気を利かせ、横には翻訳された紙と、その翻訳の証拠に日本国内で購入した日本語と第3文明圏大陸共通言語の辞書までそろえてある。その本の名はこうある、

『別冊宝大陸、特集！自衛隊対パーパルディア皇国軍が戦えばこうなる!』

その本は、日本国内の出版社が出した兵器比較の本だった。皇国の事も良く書かれており、大砲の作動原理は間違っているが、射程距離や威力等、良く研究されている。

日本国の兵器は、おそらくここに書かれている性能で間違い無いのだろう。カイオスは、それを読んだ時の衝撃を今でもはつきりと思い出す。

『F-15』なる音速を超える飛行機械。『イージス艦』という200の目標を追える神の作った産物でしかないと思われる艦。

『きい』という名の赤子が入りそうな超々々巨大砲を積んだモンスター。『10式戦車』なる大魔道士級の爆裂魔法を使う鉄竜。

『地中貫通型爆弾』『MOAB』『燃料気化爆弾』『クラスター爆弾』とあらゆる破壊の神。

そして極め付けは『核』。これはかの『古の魔法帝国』の『コア魔法』ではないか!!
ということとは我が国は『古の魔法帝国』に匹敵する国を怒らせてしまったことになる。

カイオスの脳内に帝国中に『コア魔法』が使われて、荒廃する将来の国の姿が思い浮かぶ。

読み進めるうちに、指は震え、全身から汗が噴きだす。カイオスはこの時、可能性の1つとして、日本を正確に認識した。

《ムー、いや神聖ミリシアル帝国を遥かに超え、『古の魔法帝国』に匹敵する超科学文明国家》

そして、皇帝陛下は日本に宣戦布告し、殲滅戦を指示してしまった。

カイオスは日本国外務省の朝田大使を、帰国寸前に呼び止め、日本との窓口となる通信機器を自宅に設置させる事に成功し、今に至る。

今回のアルタラス陥落により、自分の日本に対する認識は間違っていないかつたと確信を持つ。

そして彼が立ちくらみしそうなになった新しい週刊誌に書かれていた言葉。

日本はパーパルディア皇国首都『エストシラント』を爆撃するのだ。

爆撃という恐怖を前回の本で知り、朝田大使に『通信機が置いてある【場所】は爆撃しない』と言い、大使もそれを了承したと思つたが、【場所】というのは自分の邸宅の事

ではないか…

もしかしたらこの栄光なる首都『エストシラント』が破壊しつくされるかもしれない。

「このままでは…このままでは!!」

誰もいない自室でカイオスはつぶやく。

「このままでは皇国が……これほどの国力を誇った列強たるパーパルディア皇国が消滅してしまう!!!」

当初、日本を政争道具としか見ていなかった第3外務局長カイオスは、皇国消滅の危機を正しく認識し、命をかけて皇国を救うために動く決意するのだった。

第7話 皇都大空襲

中央暦1640年7月某日

日本国 首都 東京——

防衛省の一室で、日本国内閣総理大臣『安倍野三晋』は、防衛省と外務省合同でのパールディア皇国戦に関する今後の作戦概要について、説明を受けていた。

「それでは説明を開始いたします」

プロジェクターに映像が写され、重要部はレーザーポインターを使用し、説明が進む。日本からは遠いが、アルタラス王国からは近いパールディア皇国、皇都エストシラントとその周辺の地図が画面に表示される。

「航空自衛隊戦略爆撃機隊の準備が整った後の話になります…」

幹部は前置きをして話を進める。

レーザーポインターで、皇都エストシラントから北側に少し離れた部分を指示する。

「この位置に極めて大きな基地が存在します。パーパルディア皇国は幸いな事に、街から少し離れた場所に大規模な要塞や基地を作る性質があるようです」

「武力を集中させすぎるのは、皇国が近代戦を行った事が無いからだと思われれます」

「このような極大サイズの基地は、パーパルディア皇国に3つあり、中央国家情報庁によると皇国内では『三大陸軍基地』と呼ばれ、この部隊は首都防衛の要となっているようです」

話は続く。

「この基地には多数の航空戦力、ワイバーンも確認されています」

「また、エストシラントの南方の港には、数百隻の戦列艦が停泊しており、正に第三文明圏の覇者にふさわしく、19世紀の大英帝国も真っ青になるほどの戦力が存在します」

「8月6日頃に、港の船に対しては、NWT O海軍と海自の合同部隊で対応し、陸軍・海軍基地に対しては『A-110』や『F-115E』『F-2』『A/T-4』及び『B-5

2』『B-1』『B-2』『B/P-1』戦略爆撃機隊を大量に投入、無誘導爆弾を使用した大規模爆撃を行い、これを殲滅します」

「このとき皇国内で唯一連絡の取れる第3外務局長カイオス氏の邸宅周辺は誘導爆弾を使用し、誤爆を防ぎます」

「陸軍・海軍基地殲滅後、パーパルディア軍を強化させないよう、東の工業都市、デユロの北にある陸軍基地に攻撃を行います」

「8月19日には、デユロに航空自衛隊の『MOAB』を使用し、敵を完全に崩壊させます」

「なお、デユロの港に多数いる戦列艦も、1個護衛隊群を投入します」

「皇国周辺の陸軍基地を排除した後、8月23日頃に、まずは属国の『ルーアルス共和国』の『スミッド』と『ホペゲヴ』に陸自とNWT0の空挺部隊を投入し、敵の目を引きま

す」

「この作戦を『トンガ作戦』と呼称します」

「本命の作戦はエストシラントまでを陸上兵力で進行し、早期決着を目指します」

「そうしないとパーパルディア皇国の属領の反乱を先に片付けてしまうかもしれないからです」

「その後、8月25日に、アルタラス基地から自衛隊、NWT0混成上陸軍を皇都エスト

シラントの前の都市『ノルマディン』に上陸させます」

「また、上陸作戦の6時間ほど前にヘリコプター部隊により『ノルマディン』周辺の基地『エンベ基地』『ロデコロイツ基地』を制圧し、援軍を防ぎます」

「このヘリコプターでの制圧作戦を『キルゴア作戦』と呼びます」

「え? え?」

「なにか?」

「いや…なんでもない」

安倍野総理は発言した自衛隊幹部に目を向けるもスツと目を逸らす。

きつとヘリコプター部隊の司令官はワグナーとサーフィンが好きなんだろうなあ
…と思いつつも発言を促す。

「エストシラント解放までの作戦全体の名前は『ニュー・オーヴァーロード作戦』、上陸作戦単体の名前を『ニュー・ノルマンディー作戦』とします」

「パーパルディア皇国解体の作戦名は『オペレーション・フリーダム』です」

「また、皇国民の戦意を削ぐため、作戦中は定期的に皇都エストシラントを爆撃します。もちろん最初の爆撃をする前には退去命令を出します」

「解った」

「これで、作戦の概要説明を終わります。修正をする場合については、外交状況にもよりますので、後日説明いたします」

防衛省と外務省の総理に対する説明は終了した。



中央暦1640年7月下旬

皇都エストシラント 第1外務局――

第1外務局長『エルト』は、その情報を受け、外れてほしかった推察が当たり、落胆していた。

そして肝を据える。

日本国と戦争状態に突入したパーパルディア皇国、その列強たる皇国内に住まうムーの民。

第2文明圏列強ムー政府は自国の民に対し、日本国と本格的戦争状態に突入した事を理由として、パーパルディア皇国に対する渡航制限と、皇国からの避難指示を出した。

これを受け、皇国内に住まうムーの民は、続々と国外に脱出を図っている。

「やはり……そうか!!!」

彼女は執務室でつぶやく。列強たるパーパルディア皇国と文明圏外の蛮族の国、日本国。

この2カ国が戦争状態になったところで、列強の本土が脅かされる事は無い。

まして、皇国本土から自国民に退去を呼びかけるなど、通常であれば狂人の判断だ。しかし、ムーはそれを行った。

考えられる可能性はただ一つ、ムーが本格的に日本を支援し、皇国にけしかけているとしか考えられない。

「まさか……列強同士の間になるとは……何故ムーは、このような措置を取るのだ!!」

ムーの民が国外退去を始めているといった情報は、すでに皇族レミールにも知られている。

間もなく、ムー国大使が皇国の召喚に応じ、出頭してくる。

レミール様がどう動き、ムー大使がどのような言い訳をするのかが楽しみだ。

今回は、レミール様が主体となって外交を行うため、私はその様子をゆつくりと見学させてもらおう。

エルトは、まるで人事のようにそう考える。

レミールは、第1外務局の小会議室で、第2文明圏列強ムーの大使『ムーゲ』を待つていた。

すでに事前情報として、ムー国政府が日本国とパールディア皇国内のムー民に対し、避難指示を出しており、国した事を理由として、パールディア皇国内のムー民に対し、避難指示を出しており、国外へ退去するムーの民が港に長蛇の列を作っている。

ムーは日本に自国の兵器を輸出しているからこそその避難指示と思われる。

でなければ、列強と蛮国の戦争で列強側の国に対して避難指示が出る事は考えられない。

会議室にはレミールの他に、第1外務局長を筆頭とした幹部の面々が顔をそろえる。そろそろムー国大使の到着時間だ。

少し経った時、小会議室のドアがノックされる。

「ムー国大使の方が来られました」

案内の声が聞こえる。

「どうぞ」

重厚な扉を開け、ムー国大使『ムーゲ』と職員3名の計4名が入室する。

「どうぞお座り下さい」

案内に促され、ムー国大使一行は席につく。

ムーゲは思う。

おそらく今日自分たちがパーパルディア皇国に召喚された理由、日本と皇国の戦争により、本国から避難指示が出た件で、何故そんな事をするのか問われるのだろう。

ムーは皇国と敵対している訳でも無く、特に仲が良い訳でも無いが、大切な国交を有する国だ。

皇国も、さすがに日本の技術については気付いているだろうから、説明すれば解つてもらえるはず。

いかに皇国のプライドを傷つける事無く、一時的とはいえ、ムー大使までもが本国に引き上げる事実を説明しなくてはならない。

しかし……

僅かに心に引つかかる事がある。皇国は日本に対し、殲滅戦を宣言してしまっている。

日本の強さ、技術力の高さを上が認識していたら、こんな事を宣言するとは思えない。考えたくも無いが、まさか皇国は日本の強さを認識していない可能性すらある。

「いや、それは流石に無いか……認識が無いならば、皇国が日本に連敗した説明がつくまい」

ムーゲは皇国との会談の前に気を引き締める。

「それでは、会談を始めます」

進行係の言葉により、会議は開始された。

レミールが最初に発言を行う。

「我が国が日本国と戦争状態に突入している事は、知つてのとおりだと思う。今回のムー国の一連の対応について説明を願いたい」

レミールの問いに対し、ムーゲが対応する。

「はい、このたびパールディア皇国と、日本国が戦争状態に突入いたしました」

「今戦争は、激戦となる可能性があります。ムー国政府は、ムーの民の安全を確保するため、貴国からの避難指示を発令するに至りました」

「今回の指示には、大使館の一時引き上げをも含みます。この措置は、皇都にも被害が及ぶとの判断からなされています」

この発言を受け、レミールの表情が曇る。

「いや、上辺は良いのです。調べはついています。本当の事を話してはもらえませぬか

？」

「？」

レミールの発言が理解出来ずに、ムーゲは戸惑う。

「我々が日本国との戦闘の際、飛行機械を目撃しているのです。本当の事を話してください」

「……いったい何がおっしゃりたいのか、理解出来ないのですが……」

ムーゲは困惑するが、レミールの顔は赤く染まる。

「解らぬのか？これは、ムーもとんだ狸を送り込んで来たものだ」

「私は今、飛行機械を日本が使用しているのを目撃したと発言した」

「飛行機械が作れるのは、あなた方ムーくらいのものだ」

「前回の会談の時の魔写の戦闘機、あれは貴国が開発し、何かの対価として日本に輸出したのであろう」

「そして、今回の皇都からの自国民の引き上げ、これが何を意味しているのかは馬鹿でも解るだろう」

「何故日本に兵器を輸出した!!そして何故我々の邪魔をするのだ!!!」

ムーゲは今にも襲い掛かってきそうなレミールの表情に萎縮すると同時にパーパルディア皇国のあまりにも斜め上の推論に戸惑う。

「あなた方は、何か重大な勘違いをしている。我々ムーは、日本に兵器を輸出などしていい」

「彼らは我々よりも機械文明が進んでいるのです」

「文明圏外の蛮国が、第2文明圏の列強よりも、機械文明が進んでいる。そんな話が信じられるか!!」

「彼らは……転移国家という情報は、掴んでおられないのですか?」

レミールは過去に読んだ報告書の片隅に記載されていた文を思い出す。

しかし、彼女は現実主義者であり、そんな物語を本気になど出来なかった。

「転移国家など……貴国はそれを信じているのか?」

「信じます。我が国以外の国では、神話としか思われていないが、我が国もまた転移国家なのです」

「1万2千年前、当時王政でしたが、歴史書にはつきりと記録されています」

「日本について調査した結果、我が国の元いた世界から転移した国家であり、1万2千年前の異世界での友好国です」

「当時の友好国ヤムートは、ヤマトやヤマタイコク等、様々に名を変え、日本となりて現在に至ります」

「これは、日本の戦車と言われる車両の『74式戦車 A 初期生産型型』の写真です」

「戦車というのは貴国の地龍に分厚い装甲を纏わせ、我が国の内燃機関で動かし、砲を積んだものです」

「火力は大魔道士級、速度は時速53km、装甲はガエタン70mm歩兵砲を0mで射撃しても貫通できませんでした」

「我が国にこれを作る技術はありません。構想段階です」

「長い交渉の末、やっとこの戦車を3輦輸出してもらいましたが、それでもスペックは落ちています」

「ですが、これでも驚異的であり、我が軍の士官は『戦場の常識が変わる』とも言っていました」

「そして、これは何と日本では旧式で、45年ほど前のものらしいのです」

「それよりもっと前の戦車は簡単に輸出してもらいましたが、それも驚異的な性能で、1輻で1旅団並みの戦力です」

次に、超高層建築物が立ち並ぶ、見た事が無いほどの栄えた街の写真を取り出す。

「これは、日本の首都、東京の写真です。日本は転移前、地震の多い国だった。これほどの高層建築物の全てが、強い地震が来てもビクともしません」

パーパルディア皇国側の面々の顔色が一気に悪くなっていくのが解る。

ムーゲはさらに話を続ける。最後に、ムーゲは筒状の物体の魔写を取り出した。

「な…何だこれは？」

「これは『ICBM』、『大陸間弾道ミサイル』とも言います」

「弾道…？みさいる…？」

「…我が国も把握しかねていますが…」

ムーゲは途轍もないことを言うような姿勢になる。

「……これは『古の魔法帝国』の『コア魔法』。それそのものです」

「「「!!!」」」

「これまでよりも上の衝撃がパーパルディア側を駆け巡る。

「日本国はそれを実用化しており、また『僕の星』も打ち上げている様です」
「……………」

パーパルディア側は衝撃で声も出ない。

「軍にしても、技術にしても、日本国は我々よりも遥かに強いし、先を進んでいるのです」
「『神聖ミリシアル帝国』よりも上、いや、『古の魔法帝国』と同等かそれ以上と言っても過言ではありません」

「そんな国にあなた方は宣戦を布告し、かつ殲滅戦を宣言してしまいました。殲滅戦を宣言しているということは、相手から殲滅される可能性も当然あります」

「ムー政府は国民を守る義務があり、このままでは皇都エストシラントが灰燼に帰する

可能性もあると判断し、ムー国政府はムーの民に、パーパルディア皇国からの国外退去命令を出したのです」

「我々も間もなく引き上げます。戦いの後、皇国がまだ残っていたら私はまた帰ってくるでしょう」

「あなた方とまた会える事をお祈りいたします」

パーパルディア側は絶句し、全く声が出ない。

皇国側が沈黙する中、ムーゲ達はそそくさと第1外務局を後にし、会議は終了した。会議の後、小会議室に残された第1外務局の者たち。

ムー国大使の言が正しかったとすれば、自分たちは超列強国相手に侮り、挑発し、そしてその国の民を殺してしまった。

さらに、最悪な事に国の意思として殲滅戦を宣言してしまっている。

列強国の大使の言は重く、あまりの衝撃に全員が放心状態となり、具体的な対策は一切思いつかない。

「さて、これからどうするか」

レミールが発言する。

「ムー大使が言っていた事が本当とは限りませぬ。ムーが代理戦争を行うために日本を利用していた場合は、勝機はあります」

「フハハハハ!!」

レミールが突然笑いはじめる。

「最悪の想定が、唯一の望みになるとは!!これほどの喜劇があろうか!!フハハハ!!」
「レ……レミール様!」

エルトは、レミールの精神が壊れたのではないかと心配する。思い返せば、何度も何度も日本の国力に気付く機会があった。

しかし、その全てを無駄にしてしまった。

日本が自ら力を示さなかった事がもどかしい。行った行為は消せず、失った時間は何う戻らない。

パーパルディア皇国外務局、この日の会議は深夜にまで及んだ。



中央暦1640年8月5日

日本国 中華地方 北京府 航空自衛隊北京基地――

日本最大の航空基地、航空自衛隊北京基地。

大量の戦闘機と、集められた『B―52』『B―1』『B―2』『B/P―1』などの戦略爆撃機が駐機する。

戦略爆撃機の爆弾倉と主翼には、対地攻撃用の無誘導爆弾が満載されている。

次々と飛び立つ爆撃機達、空港から少し離れた場所で旋回し、編隊を組む。

日本国とアルタラス王国のNWT0・自衛隊共同基地から飛び立った戦略爆撃機は、合流し、皇国へ進路をとる。

敵にとっての破滅の行軍。

第2次世界大戦以降、見た事が無いほどのジェット戦略爆撃機の大編隊、総数370機にも及ぶ戦略爆撃編隊は、パーパルディア皇国、皇都エストシラント北方に位置する皇国軍の基地を殲滅するために、飛び去って行った。





ある夜

パーパルディア王国 皇都エストシラント 皇族レミールの邸宅――

「う……うう!!やめろ!やめろ!!やめろおおお!!」

レミールは自室で目を覚ます。

息は乱れ、体中の汗腺から汗が噴出している。

ムー国大使との会談の後、何度も見た悪夢、今回も皇国が日本軍によって蹂躪される悪夢を見た。

自分を処刑しようとする日本人の顔、フエン王国で私の命により殺された者たちの顔だった。

「ちっ!!」

レミールは再びベッドに倒れこみ、うつ伏せになる。自分はやってしまった。

皇国のためになると思い、仕事に打ち込み、突き進んできた。

しかし、自分は……結果として皇国の存続さえも危うくなるほどのミスを犯してし

まった。

ムー大使は言った。

○日本はムーより遥かに強い。

○神聖ミリシアル帝国よりも上である。

○古の魔法帝国と同程度かそれ以上

○皇都が灰燼に帰する可能性もある。

○日本の戦闘機は音速を超える。

○日本の鉄竜はムーの砲を持ってしても貫通できない。

信じられない！どう考えても信じられない。

しかし、過去に2度もの日本との戦いでの大敗を見るに、おそらくは……真実。

我が国は、古の魔法帝国……神話の帝国のような装備を持つ国と、現実に戦わなくてはならない。

レミールは戦いを回避するため、思考を廻らす。彼女は独り言をつぶやく。

「属領の献上、いや、領土の割譲……日本は何を望むのか……」

「はっ!!!」

レミールは朝田大使の言を思い出す。

『フェン王国での虐殺について、犯罪者と関係者の身柄引き渡しを要求する。なお、犯罪者には当然貴女も含み、皇帝も重要参考人となっているため、身柄を引き渡してもらおう』
「だめだ！だめだ!!絶対だめだ!!!」

自分は皇族だ。しかも、世界5列強国の皇族、将来は皇帝ルディアス様に嫁ぎ、皇妃となつて、共に世界征服に向かって突き進み、世界の女王となる予定だ!!

こんな事で、たかが文明圏外の民間人を数人処分した程度の事で、あきらめてたまるか!!!

「私は、日本には絶対に捕らえられんぞ!!!」

レミールは最後まで生き残る事を決意する。





皇都エストシラント 皇城――

皇帝ルディアスは、第1外務局長エルトからの報告を受けていた。

「以上、ムー国大使の言によれば、目撃された飛行機械は、日本国自ら開発した事が判明いたしました!!」

「陛下に今後の方針を仰ぎたく、本日御報告にありがとうございました。」

ルディアスは沈黙する。エルトにとっては、なんとも耐え難い時間が流れる。

「エルトよ」

「ははっ!」

「日本を怖がっておるのか?」

「い……いえ、決してそのような!!ただ、私は真実の報告に参ったまででございます」

「エルトよ、おぬしは大事な事を3つ忘れている」

「と、申しますと?」

「1つ目、戦いは攻めるよりも、守るほうがずっと楽に戦えるという事だ」

「過去2回の戦い、1回目は攻める側、そして2回目は、完全な油断からの奇襲だった。皇国が本格的に構えるのだ、もう奇襲も通用しないだろう」

「ははっ!!」

「2つ目、日本は軍備に国内総生産のたった1%前後しか金をかけていないという事実、これではいかなる大国であつても、大した軍は持てまい」

「おそらく日本軍は、兵器に関して質は良くとも、量は少ないだろう」

「そ……それは、お言葉のとおりと思いますが」

それでも我が軍は2回も日本に大敗している!!

彼女は叫びたかったが、言葉をぐつと飲み込む。

「3つ目、今戦は相手がたとえ神聖ミリシアル帝国、いや、古の魔法帝国であつたとしても、超えなければならぬ」

「これは世界を統べるべき皇国に、神が与えた試練だ。日本国と戦つたのは、主に海軍であり、陸軍の大部隊は健在、最新兵器があり、錬度も高い皇国陸軍は無傷ではないか!!」

話は続く。

「アルタラスに打って出るのは海軍主力だ。万が一これが敗れても守りに入った皇国陸軍を倒せる国は、この世には存在しない」

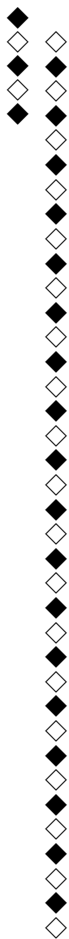
「おお!!」

彼女は皇帝ルディアスの言葉に光明を見る。確かに、主力のほとんどが健在であり、陸軍主力は1度も日本軍と戦っていない。

精銳皇国陸軍が守りに入り、地の利を生かした際の強さは、たとえ神聖ミリシアル帝国を相手にしても、引けをとらないであろう。

「つ!!さすが皇帝陛下にごさいます!!」

エルトは皇帝ルディアスに平伏するのだった。



パーパルディア王国 皇都エストシラント 第3外務局長カイオス邸——

第1外務局と、皇族レミールの動きがおかしい。

ムー国大使との会談後に、変な動きが続いているため、おそらくはムー国から日本の真の姿に関する情報が伝えられたのだろう。

常識的に考えれば当然の事であるが、大きな動きが無い所を見ると、皇帝ルディアスと皇族レミールは、日本に犯罪者として行く気は無いらしい。

「奴らが行けば、皇国臣民の被害は少なくなるというのに!!」

カイオスは自室で苛立つ。

「やはり、早期に動くか?……いや、まだ軍の大半が残っている状態でそれを行っても、臣民の支持は得られまい」

皇国が少し弱らなければ自分の策は使えない。しかし、弱るといふ事は、守るべき皇国臣民の多数が犠牲になるといふこと。

カイオスはその矛盾に、自分の無力さに腹が立つ。そして、彼のもう一つの懸念。

「(もしも、日本が初撃で、皇国が再起不能となるほどのダメージを受けた場合、属国が次々と日本に同調する可能性があり、そうなってしまつてしまうと、皇国は国そのものの維持が出来なくなる可能性もある)」

彼は焦る。

「どうすれば……どうすれば良い!!」

カイオスは思考を廻らす。



アルタラス王国 王都ル・ブリアスー

王城の一室からルミエスは王都を見下ろす。何度思い返しても、奇跡としか言いようの無い事態が彼女には起こった。

彼女は思い帰す。

パーパルディア王国の大使は、自分を奴隷身分まで落とし、大使に献上するよう、王である父に迫ると同時に、王国経済の大黒柱である、魔石鉱山シルウトラスを皇国に譲渡するよう指示を出してきた。

父はこれを拒否し、列強パーパルディア皇国との戦争が始まる。

アルタラス王国海軍は、パーパルディア皇国軍を前に全滅、そして精強な陸軍も、皇軍を前に全滅してしまう。

私は父の采配で、日本の特殊部隊に確保され、私は日本に身を寄せる。

日本は凄かった。

天を貫く高層ビル群、鉄道と呼ばれる大規模流通システム、そして夜も明るい街。御伽噺の中にあるようだった。

しかし、パーパルディア皇国は、東の果てであるこの国にも魔の手を伸ばし、フェン王国で、皇国軍に日本人観光客が殺されてしまう。

ここで、皇国は日本国の逆鱗に触れる。

アルタラス王国を滅ぼしたパーパルディア皇国軍は、日本国の自衛隊と呼ばれる軍を前に全滅、信じられない事に、日本側の被害は一人もいなかったという。

ニュースを聞いたとき、私は神に祈った。日本と同盟を結び、アルタラス王国から皇



中央暦1640年8月6日早朝――

早朝、透き通るような青い空、空気は澄んでおり、涼しい風が吹く。僅かに明るくなり、遠くまで見通せる空。

皇都エストシラント南方約300km上空で、空気を裂き、それは付近を旋回する。飛行機の上には大きな円盤状の物体が取り付けられ、ゆっくりと回転している。

目視ではとても確認できないほどの、遙か遠くを見通せる目、航空自衛隊のE767^A_W早期警戒管制機^A_C^Sは皇都上空を監視していた。

AWACSの上にある円盤状のレーダーは、1分間に6回転し、内部の3次元レーダーは、高度9000mで半径800kmの空域をカバーする。

同機のレーダーには、皇都の南側上空に20機近い飛行物体を捉えており、戦闘空域の情報、リアルタイムで本作戦の参加機に伝えられる。

早期警戒機の北側約100kmの空には、かつてF-22と世界最強を争った航空機、『F-3』戦闘機10機が先行する。

『F-3』の後方約50kmには無誘導の爆弾を満載した『F-2A』と『F-15E』が20機。

また、『F-2A』と『F-15E』隊の右20kmには、洋上の合同任務部隊のアメリカ・日本の空母から発艦した『F/A-18E』とイギリスの空母艦載機の『F-35B』、フランスの空母艦載機『ラファールM』など50機が亜音速で皇都北方の陸軍基地に向かい飛行する。

皇国に初撃を与えるために『F-3』隊は向かう。同機の主翼翼端では、気圧差により主翼下部から上部に空気が回りこみ、白い航跡を引く。

『F-3』各機には、E767^A早期警戒機^Cで得られた戦闘空域の情報が、リアルタイムで伝えられ情報を共有している。

皇都エラストシラント南方上空には、敵航空戦力が20機近く飛び、警戒している。

「(警戒だけで、これほどの量を常に飛ばしているとは……)」

パイロットは、皇国の国力に少し呆れながらも仕事は確実に行う。敵との距離が100kmをきる。

一斉指令の無線が、はつきりと聞こえるように繰り返し流れる。

「攻撃を開始せよ」

10機の『F-3』のウエポン・ベイの扉が開き、16^A式空対空誘導弾⁷が数秒自由落下した後、固体燃料に火が灯る。

射程100km以上にも及ぶミサイルは、マッハ4以上の速度で、皇都南方上空を飛行するワイバーンオーバーロードを滅するため、轟音と共に飛び去っていった。



数分後——

パーパルディア王国 皇都エストシラント 南方空域

パーパルディア皇国軍第10竜騎士団第2中隊のワイバーンオーバーロード20機は、皇都エストシラントの少し南方に位置する空域を、警戒飛行中だった。

中隊長のデリウスは、中隊の中で一番ベテランの騎士、プカレートに魔信で話しかける。

「もう少しあちらの海域も警戒しましょう」

「そうですね」

ワイバーンオーバーロードの編隊は、一糸乱れぬ動きで、錬度の高さが伺える。

「中隊長殿、敵についてなのですが……」

「何でしょうか？」

「数日前の通達文のとおりであれば、日本はムー国の飛行機械で戦いに来るでしょう」

「しかし、それにしても、先の2回の戦いで、我が方の被害が大きすぎるような気がするのです」

「軍の上層部に今の疑問を呈しても、言葉の歯切れが悪くなった後、通達文のとおりとしか言わない」

「中隊長はどうお考えか？」

皇国上層部は、軍の士気的大幅低下を恐れ、一部の幹部を除き、日本に関する情報を遮断していた。

「確かに、今回の戦いについて、上層部は何を聞いても歯切れが悪い」

「何かを隠しているようにも見えたが、何かは解りません。しかし、ムー以上の敵って、

何が考え付きますか？」

『古の魔法帝国』か、『神聖ミリシアル帝国』、まあ無いですな」

「ところで……」

「何だ!!! あれは!!!」

目の良い部下の一言で、会話は途切れる。各竜騎士は、何かを発見した竜騎士の指差す方向を注視する。

透き通るような青い空に、数点の斑点が見える。

綺麗な写真に落とされた汚れのような斑点は、徐々に大きくなり、それが飛行物体である事を認識する。

「は……速い!! 各騎回避せよ!!!」

常軌を逸した速度で竜騎士隊に向かってくる『ソレ』を見たデリウスの本能は危険信号を全力で鳴らす。

散開したワイバーンオーバーロード竜騎士隊、しかし『ソレ』も向きを変え、彼らに迫る。

「そ……そんな!!」

16^A式空対空誘導^M弾⁷は、先端から斜め後方に向かい、衝撃波をまといながら、ワイバーンオーバーロードに向かう。

同衝撃波境界層では、空気が粘性発熱を起こし、高温となる。

日本国航空自衛隊の『F-3』戦闘機から発射された16^A式空対空誘導^M弾⁷20発は、1発も外れる事無く、皇都エストシラント南方空域を警戒中の第18竜騎士団第2中隊のワイバーンオーバーロード20騎に命中した。

大爆発を起こし、声を発する間もなく、絶命する竜騎士。そして列強となった後、1度として本土が戦場となる事は無かったパーパルディア皇国。

パーパルディア皇国 皇都エストシラント全域に、確実に平時とは違う不気味な炸裂音が鳴り響く。

ある者にとっては、恐怖。そしてある者にとっては破滅の目覚まし時計となった、空対空ミサイルの炸裂音、すでに目を覚ましており、上空を見上げた皇国臣民は、信じられない光景を目にする。

列強たるパーパルディア皇国、そしてその中でも最強の皇都防衛軍、その最強なはず

のワイバーンオーバードが雨のように上から降ってくる。

ある者は、ワイバーンの首、胴体、足、羽等のパーツとなり、ある者は胴体から上の無い状態、そして人の原型を留めたもの、多数の肉と血が落ちていく。

「いやあああああああ!!!」

「うわあああああああ!!!」

「キヤヤヤヤヤヤヤヤ!!!」

エストシラントの様々な場所から、その凄惨な光景に耐え切れなくなった人々の悲鳴が上がる。

住民はざわつき、様々な建物の扉や窓が開く。彼らが上空を見上げた時、矢のような形の何かが10機、見た事も無い高速で、上空を通過する。

その物体からは、2本の炎が後方に向かい、噴出している。直後、耳を覆いたくなるような轟音が鳴り響く。

物体の通過した近くの建物では、その衝撃波により、窓ガラスが全て割れる。エストシラントの人々は恐怖に纏われる。

「何だ！何だ！！何が起こっているんだ!!!」

「皇都守備軍！守備軍は何をやってるんだ!!!」

住民が恐怖に怯える中、『F-3』の起こした衝撃波音は、皇都エストシラントに木霊する。



同時刻——

皇都エストシラント北方陸軍基地

装飾が施された豪華な石作りの建物の1階で、女性魔信技術士の『パイ』は、魔力探知レーダーを確認していた。

ワイバーン等の空を飛べる高魔力生物は、その存在そのものから、人間とは比較にならない魔力があふれ出ている。

その魔力を探知出来るように作られたのが、魔力探知レーダーであり、これは対空のみではなく、対地としても有効に機能する。

上空に関して、現在レーダーには友軍の騎影しか表示されておらず、付近上空にも高

魔力生物は確認できない。

「ん？何かしら？」

レーダー画面の変化にパイは気付く。今まで綺麗に隊列を組み、飛行していた友軍のワイバーンの動きが乱れ始める。

彼女が上司に報告しようと思ったその時、レーダー上に写されていた友軍の点20騎が大きく光り、画面から消えた。

その現象が意味する意味はただ一つ……撃墜!!彼女はすぐに隣に置いてある魔信機に向かって叫ぶ。

「緊急事態発生!緊急事態発生!!皇都南方空域を警戒中の第18竜騎士団第2中隊20騎がレーダーから消失!!」

「撃墜された可能性大!!待機中の第3中隊にあつては、緊急離陸を実施し、皇都上空の警戒に当たれ!!」

「なお、レーダーに敵機影は確認出来ず。飛行機械の可能性大!!」

パイが指令した直後、陸軍基地に連続した炸裂音がこだまする。異常事態の発生は、この炸裂音により、すべての者が認識するに至った。

「20騎すべての反応が消えただど!?」

パイの上司が血相を変えて、画面の前に来る。

「はい、短時間に次から次へと、連続して反応が消失しました!!!」

「20騎! 20騎もだぞ!!! 警戒隊としての数は申し分無い量であり、しかも世界最強のワイバーンオーバーロードだぞ!!!」

「そんな短時間でやられてたまるか!!!」

「しかし、事実です! ものの15秒もかからずに消えました!!!」

「故障ではないのか?」

「ありえませんか!!!」

「くっ!! 我々はいったい何と戦っているんだ!!!」

レーダー室でそんな会話がされる中、指令を受けた第3中隊は滑走路から離陸しよう

としていた。

「第2中隊がやられただど!?ちくししょう!!油断した第2中隊を殺ったところで、いい気になるなよ!!!」

翼を広げ、ワイバーンオーバーロードは離陸するために走り出す。今回は緊急のため、縦1列に連続して走る。

「敵接近!!!」

誰かが魔信で叫ぶ。騎士は空を見上げる。

「なっ!!!」

連続した爆発音、『F-3』の放った04^A式空^A対空誘導^M弾⁵は離陸滑走中の竜騎士団に襲いかかった。



同時刻

パーパルディア皇国皇都防衛軍基地——

パーパルディア皇国皇都防衛軍陸将『メイガ』は、不気味な炸裂音がした後、窓の外を眺める。

部下がノックも無く、部屋に転がり込んでくる。

「メイガ様!!第18竜騎士団第2中隊のレーダー上の反応が消えました!!至急作戦室にお願いします!!!」

「!!解った」

メイガは、小走りで隣の作戦室に移動する。移動後、すぐに部下が報告に来る。

「先ほどエストシラント南方空域を警戒中の第2中隊がレーダー上から消えました」

「同レーダーでは、反応が消える直前にレーダー上の光点が大きく光っており、撃墜された可能性が高いため、現在第3中隊を緊急離陸させています」

部下は、窓の外を指差す。指示された先の滑走路では、第3中隊のワイバーンオーバードが離陸するため、滑走を開始していた。

「敵は……どの程度の強さがあるのか……」

メイガはつぶやく。

「あれは何だ!!」

誰かが叫ぶ。

次の瞬間、飛翔してきた多数の光の矢が、離陸滑走中の竜騎士隊に襲い掛かる。光の矢は、ただの1発も外れる事無く、第3中隊の竜騎士に着弾し、彼らはメイガの眼前で爆音と共に、肉片となる。

「!!」

声の出ないほどの驚愕、直後に後方から炎を2本噴出しながら、飛行機械が猛烈な速

度で通過する。

およそ10機の飛行機械は、急上昇をはじめ、信じられない上昇力で空に消える。

その後、基地全体に、緊急時のみ使用が許される最大級の警戒アラームが鳴り響き、基地内の人間は、慌しく動き始める。

「早急に戦闘態勢に移行しろ!!! 竜騎士隊で、上がれる者はすべて上がれ!!!」

メイガは吼える。

その頃、皇都エストシラントでは皇国臣民たちが、先ほどの爆発について、話をしていた。

「今のは何だったんだ?」

「南の方角で、竜騎士がやられているのを見た!! 少なくとも、味方でない何か皇国を攻撃しようとしている!!!」

「いったい何処だ? 戦争中の日本か?」

「馬鹿な!! 文明圏外の蛮国がいくら背伸びをしたところで、列強であり、第3文明圏最強のパーパルディア皇国の、しかも皇都に攻撃など、無理に決まっている!!!」

「では、いったい何処が？」

「他の列強か、……まさかとは思うが、古の魔法帝国だったりしてな」

「そんな馬鹿な事が……」

住民たちの会話は、突如として現れた轟音によつてかき消される。

地上高50m付近といった、超低空を、爆弾を主翼と胴体に抱えた『F-2』『F/A-18E』『F-35B』『ラファールM』が50機、亜音速で通過する。

「なななな……何だ!!!」

「ひいっ!!!」

「何の音だ!!!」

腰を抜かして動けなくなる者、逃げ惑う者、混沌とした状況がそこに生まれる。皇都上空に低空侵入してきた攻撃隊は、上昇に転じ、上昇しながら爆弾を投下する。

放物線を描きながら、Mk^{無誘導}82^{爆弾}爆弾は飛翔する。

ヒュユユユという、かん高い風きり音が多数木霊する。聞いた事の無い音、それを聞いた人間たちの本能は全力で警笛をならす。

爆弾を投下した攻撃隊は、後方から太い炎を1〜2本噴出しながら、雷鳴のような轟きと共に、上空へ消えていった。



同時刻

皇都北側 陸軍基地——

「何だ!!!何の音だ!!!」

ヒュユユユという、聞いた事の無い不気味な音が鳴り響き、メイガは吼える。

音源は1つや2つではなく、多数の音源がある。

メイガは窓の外を見る。次の瞬間、猛烈な光……光の連続……耳を劈く爆音が彼を襲う。

攻撃隊から投射された爆弾は、攻撃目標から誤差数十メートルで、ワイバーン用の滑走路に着弾した。

連続して猛烈な爆発が起こる。メイガの眼前の窓ガラスは、爆発の衝撃で四散し、ガラスの破片が彼の目に突き刺さる。

「ぐああああああ!!!目がー!!!目があー!!!」

彼は目を押さえ、その激痛からその場を転げまわる。メイガは、痛みのあまり、1度は我を失ったが、気力をもって我に帰る。

「状況は!!!状況はどうなっている!!!」

陸将の目からは血が流れ、視力を失っているのが見て取れる。だが、彼は指揮能力を失ってはいなかった。

「今の爆発は、空中から投下された爆弾だと思われます。現在滑走路が爆炎に包まれており、被害状況を視認できません」

ゴホゴホと咳を吐きながら、幹部はメイガの問いに返答する。

「空から爆弾を投下だ?!?なんて威力だ……しかし、とんでもない事を!!!」

パーパルディア王国には、爆弾は存在するが、ワイバーンに搭載出来る爆弾は無い。飛竜は重たい物を持つと、飛べなくなってしまうため、上空から打ち下ろす導力火炎弾といった支援火力はあるが、空から爆撃するといった事例が無く、その場にいた全員が衝撃を受ける。

「煙が晴れます」

そよ風が吹き、煙が晴れてくる。

「なっ!!!こ………これでは!!!」

「どうした!?何が見えている!!!」

彼らの前に、月面のように穴だらけとなり、絶対使用不可能となった滑走路だったものが姿を現す。

「か……滑走路をやられました。これでは他の竜騎士は離陸出来ません!!!」

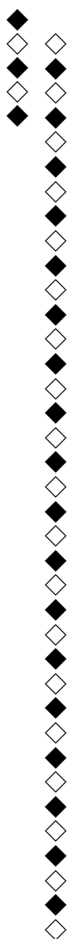
悲鳴のような報告。メイガはそれを聞き、絶望に包まれる。

「そ……それでは!!! 皇都上空はどうする!!! 何か方法は無いのか!?!」

「ありません。ワイバーンオーバードの数はそろっていますが、離陸出来なければ意味がありません」

「少なくとも現時点において、我々は皇都上空の制空権を失いました……」

メイガ他、幹部全員の心を絶望が支配した。



数分後——

皇都エストシラント

「おい！見ろ!!!」

「き……基地がああああ……」

興奮した臣民が北方向を指差す。言われるまでも無く、住民たちは、猛烈な爆発音がした方向をすで見ている。

見た事も無いほどの大きな爆煙が陸軍基地から上がっている。汗が吹き出る……言葉が出ない。

あまりの光景に、泣き出す女性もいる。しかし、彼らに更なる恐怖が聞こえる。

何処からだろうか？ゴゴゴゴゴゴと大地が唸る様な重低音が多数聞こえてくる。

「いったい次は、何なんだ!!!」

「あそこだ！あそこ!!!」

目の良い者が、南の空を指差す。

「なっ!!!」

「いやああああ!!!」

「ひ…ひいつつつつ!!!」

「……」

「はっ…ははははっ…」

先ほどとは、比べ物にならない量、灰色で途轍もなく大きな機体が多数、上空から侵入してくる。

灰色の機体は、後方に白い雲を引き、その機体から発せられているであろう重低音が、皇国臣民の恐怖をかき立てる。

先ほどからとてつもなく速い機体を見た皇国臣民にとって、上空を侵入してくるそれは、ひどくゆっくりに見える。

そのゆっくりにとした行軍、飛行機の大きさ、そして量が皇国臣民にさらなる恐怖をもたらす。

「あれは!!まさか竜か!!!?」

「なんだ!!あの量は!!300騎以上いるぞっ!!!」

『F-15J改』8機の護衛を伴い、戦略爆撃編隊は皇都上空を通過する。総数370機にも及ぶ戦略爆撃編隊の後方からは、1機1機が雲を引き、多数の飛行機雲は皇国上空の空の様子を変える。

パーパルディア皇国に、彼らを防ぐ手段は全く無い。皇国臣民は自らをも破滅に導く

行軍を、なす術も無く見つめる。



同時刻

日本国航空自衛隊第3戦略爆撃隊『B-52H』コックピット内――

『B-52H』のコックピットでは機長と副操縦士が会話する。

「間もなく目標投下地点に達します」

「了解……」

眼下には異世界の地、栄えた都市が見える。覇権主義を抱え、驕り高ぶった文明。

日本に対し、民間人を含む全てを殲滅すると宣言してきた国。ならば自分達も容赦する気は無い。

しかし……異世界最初の接触のAWACSコックピット内でふざけたら、上層部に見つかり、戦略爆撃隊に左遷され、異世界初の爆撃に参加することになるとは思いもしなかつた。

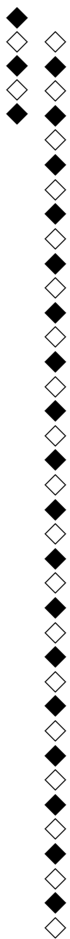
だが、今は目の前の仕事に集中する。

「3. 2. 1. 投下!!!」

drop now!
「投下! 投下!」

日本国航空自衛隊の戦略爆撃編隊は、爆弾の投下地点まで、予定どおりに到着、殲滅目標である皇都北側の陸軍基地に対し、多数のMk^{無誘導}・82^{導爆弾}爆弾を投下した。

「今回はおふさけなしだぜ!」



同時刻——

「敵が!! 敵が侵入してくるぞ!!!」

皇都防衛隊の幹部が叫ぶ。滑走路が破壊され、多数のワイバーンオーバードは地上にいます。

敵の高度まで届く武器は無く、現時点出来る事は無い。

「デカイ飛行機械を送り込んできやがったか!!しかも、量が多いぞ!!」
「奴らは一体何をするつもりなんだ!!」

基地にいる多くの者が上を見上げる。

「ん!!?」

「あっあれは!!!」

「何か黒い物を落としたぞ!!」

先ほど、滑走路を猛烈な爆発で破壊した時に使用された兵器の音がする。だが、先ほどよりも、遥かに音の数が多い。空を見上げる者の目が見開かれる。

何百機もの敵機から、非常に多くの黒い物体が連続して投下される。音の量は加速度的に増え続ける。

「先ほどの高威力爆弾!!!」

「爆弾の雨がくるぞ!!!」

「回避——!!!回避——!!!」

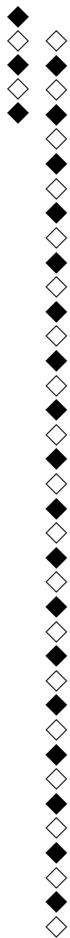
「くそ!!量が多すぎる、何処に逃げろというんだ!!!」

パニック状態となる基地、しかし、爆弾は彼らが避難するまで待つてはくれなかった。

またもや連続する炸裂音。猛烈な光。建物の何十倍もの高さまで吹き上がる爆炎。

基地全体が爆煙に包まれる。しかし、爆発はまだ続く。表面を舐めるように、繰り返し爆炎は吹きすさぶ。

爆弾の投下を終えた戦略爆撃編隊は、上空で旋回し、南方へ飛び去っていった。



上空——

航空自衛隊の偵察機『RF-115J』は、今回の攻撃に関する効果測定のため、皇都北方の陸軍基地上空に向かい、飛行していた。

陸上基地の破壊状況が不足していた場合は、第2次攻撃を要請する。

偵察機は高空から基地の状況を確認する。カメラに写る状況、そこに構造物は無く、

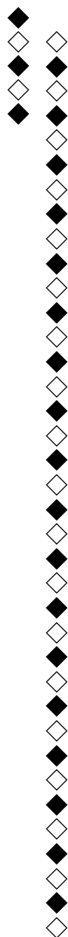
昔基地だった場所には多数のクレーターが存在するのみ、動くものの気配すら微塵もない。

基地だった場所と、その周辺区域ですら構造物は確認できない。

「敵基地の殲滅を確認、第2次攻撃の必要無し」

偵察機は無線で第1報を送り、アルタラス王国の基地へ飛び去った。

パーパルディア皇国、皇都防衛隊の大規模陸軍基地は、日本国航空自衛隊とNWT O 合同任務部隊艦載機により滑走路を破壊され、航空自衛隊戦略爆撃隊の猛爆撃によって、原型を留めずに全滅、この世から姿を消した。



数時間後——

パーパルディア皇国 皇都エストシラント 南方海上

それは、波を裂き、突き進む。2列に並んだ金属で出来た船、総数60隻は、航跡を引きながら北へ向かう。

艦隊の姿は勇ましく、元の世界^{地球}でこの艦隊が国の近くを航行したら、中小国は勿論の

事、大國もビビるであろう。

日本国・NWT Oの第86合同任務部隊の大艦隊は、パールデーア皇国海軍主力を滅するため、皇都エストシラントの南方にある大規模な港へ突き進むのだった。

第8話 エストシラント沖大海戦

中央暦1640年8月6日 午前

パーパルディア王国 パーパルディア皇国皇都エストシラント基地――

皇都防衛隊の魔信技術士パイは無誘導^{Mk.82}爆弾に皇都防衛基地を破壊され、生き埋めにされていた。

「(暗い……全身が痛む……私はいったいどうしてしまったのだろうか?)」

パイは、意識を取り戻す。全身の痛みにしし混乱するが、考えを巡らし、記憶の糸をたどる。

笛のような甲高い連続した音が聞こえた後、私は吹き飛んで来た誰かに当たって意識を無くした。

その後、建物が崩れるような音がした気がする。

日本国は、警戒態勢にある皇都防衛隊基地に攻撃を加えたのだ。爆弾は運悪く、私の

いる建物に当たったのだろう。

「(光!!光だっ!!)」

上を見ると、僅かに光が差し込んでいる。体は痛い、幸い動く。骨まではいってないと思う。

「よし!!」

意を決し、自分の上にある岩に力を入れる。少し動く!!!

「誰か助けて!」

基地にはまだ人が多くいるはず……だから、私の声を聞けば誰かが駆けつけてくれるはず……しかし、誰からも返答は無い。

「……そっか」

おそらく敵の第2次攻撃を警戒し、戦闘態勢を整えるため、皆忙しく動きまわっているのだろう。

「う……ん!!!」

渾身の力を込める。なんとか、隙間から外に出られそうだ。音をたて、レンガと私の服が摩擦し、所々服が破れる。

外に出たら、恥ずかしい視線を受けそうな気もするけど、命には代えられない。

「もう一息……やった!!!」

「(外に出られた!!)」

彼女は辺りを見回す。

「そ、そんな!!」

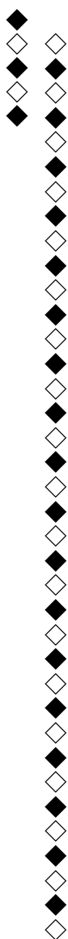
彼女の目に映ったもの、それはすべての建物が原型を留めずに破壊された、元基地の残骸だった。

動いているものは、自分以外誰もいない。

「こんな……こんな事がっ…」

列強たるパールディア王国の中でも最強の陸軍基地、圧倒的な制地能力と、突破力を誇る地竜も、他国を圧倒し続けてきた魔導砲兵団も、制空能力が極めて高いワイバーンオーバードの竜舎も、全てが砕け、破壊されつくしていた。

最強の陸軍基地に、これほどの破壊をもたらす存在を彼女は知らない。魔信技術士パイは、呆然と立ち尽くし、その情景を眺めるのだった。



数分前——

パールディア王国 皇都エストシラント レミール邸宅

皇族レミールは、自室のベッドで仰向けになり、布団を上から被る。彼女は先ほどの出来事を思い返す。

嫌な夢を見て目が覚めた。気分が悪かったため、気分転換しようと思い、自室の窓からバルコニーに出た。

透き通るような青い空、朝の風が少し肌寒く感じ、小鳥たちはさえずる。深呼吸し非常に気持ちいい。

南側の空を見ると、我が国最強の皇都防衛隊のワイバーンオーバーロード竜騎士団が編隊飛行しており、皇都上空の警戒にあたっている。

その姿は力強く、誇り高く、まさしく列強たるパーパルディア皇国主力にふさわしい。

「考えすぎだったか……」

自分はムー国大使の言動を間に受けすぎていたのかもしれない。ワイバーンオーバーロードの空戦能力は申し分無く、ムー国が最新兵器を使用して攻めて来たとしても、撃退出来るだろう。

異世界からの転移国家であろうと、何だろうと、そう簡単にやられるはずが無い。

皇都防衛隊の竜騎士団の姿はレミールにそう思わせるだけの威容と力強さがあった。

「ん？」

突然竜騎士団の隊列が乱れ、各々が勝手に加速し、散開する。

「何かの訓練か？」

散開した竜たちが、突如として煙に包まれる。少し遅れ、連続して轟音が鳴り響く。

「きゃっ!!!」

少女のような悲鳴をあげ、レミールはかがみこみ、上空を見上げる。

彼女の目に飛び込んで来たのは、バラバラに破壊され、雨のように落ちていく竜騎士団の姿。

「まさか日本!!日本の攻撃か!!!」

全身から汗が吹き出る。そして彼女は気付く。

「まさか!!私、この私が震えているだど!?!」

バルコニーの手すりに掴まる手は震え、足は目で見ても解るほど、明らかに震えている。

そして、矢のような形をした何かが凄まじい速度で通過する。その速度は彼女が知れるほどの物体よりも速く、先ほど考えていた。

『竜騎士団が負けるはずが無い』

といった根拠の無い自信はあっさりと崩れ去る。

直後に届く衝撃波音、そしてそれから発せられる光の矢が、陸軍基地へ向かっていく光景。

「まさか、皇都防衛隊が攻撃を受けているのか!!!」

大きな炸裂音の後、陸軍基地から最大級の警戒アラームが鳴る。レミールは皇都が攻撃を受けている事を理解し、すぐに第1外務局に行こうと足を踏み出す、足が震えて

全く動けない。

直後、甲高い音が鳴り、雷鳴の轟きと共に空に消える日本の飛行機械。別の飛行機械が攻撃に來たようだった。

爆音、そして陸軍基地から上がる煙。相当な爆発だった。

かなり被害が出ているだろう。そして……

唸るような重低音、大きな翼をもった飛行機械が……300機を超える量で侵攻してくる。

先ほどの小さい飛行機械ですら、あれほどの威力の爆弾を投下した。

「くっ！何をするつもりだ!!!」

大型の飛行機械は各々から信じられない数の爆弾を投下する。爆弾の雨と言うのが正しいであろう。

恐怖を掻きたてる日本の爆弾投下音、そして陸軍基地から上がる猛烈な爆炎。おそろくともでもない被害が出ているはずだ。

レミールは屈み込み、両膝を抱え込む。震えが止まらない。

自分は責任ある立場、すぐにでも第1外務局に出向かなければならない。しかし、日

本軍による皇国へ向けられた圧倒的な暴力、そしてその原因を作り出したのが自分であるという事実。

「(日本は……日本は血眼になり、怒り狂って私を探している)」

考えが頭を巡り、恐怖で動けない。街は、騒然とした雰囲気に入れられ、所々で人々の怒号が聞こえる。

レミールは這うようにして、ベッドに潜り込み、今に至る。

「レミール様、レミール様!!!」

自室のドアを叩き、呼ばれる音が聞こえる。

「レミール様!!」

こんな姿を家のメイドに見せる訳にはいかない。

「今行く!!!」

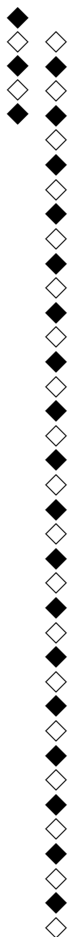
レミールはその精神力をもって立ち上がる。震えながらも彼女は自室のドアの前に向かう。

「何だ!!!」

ドア越しに彼女は尋ねる。

「第1外務局から至急来てほしいとの連絡が入っています」
「解った。着替えてから向かう!!」

全く思いつかない今後の対策、彼女の頭の中を、日本の恐怖が駆け巡る。



数時間後——

皇都エストシラント 南方の港

皇都防衛の要ともいえるエストシラント南方の海軍基地、同基地には戦列艦がひしめき、皇国海軍主力といっても差し支えない。

基地の中には列強パーパルディア皇国の海軍本部も設置され、多数の戦列艦の並ぶその姿は圧倒的の一言であり、見る者にある種の感動を与える。

海将バルスは、海軍本部の自室から外を眺める。

陸軍が攻撃を受けたとの報により、基地の海軍に全力出撃を命じた。有事即応体制にあつた戦列艦たちは、迅速に準備をしている。

すでに主力の3分の1は警戒のために布陣を整えており、万全の体制で敵を迎え撃つ。個艦同士の展開範囲を広くとり、かつ莫大な量をもつて戦うことにより、長射程砲対策を行う。

本作戦に、海将バルスと皇国の頭脳マータルは、自信を見せる。

続々と港を出港する戦列艦、その一隻一隻が、この世界の平均的な戦船に比べ、圧倒的に強く、圧倒的に大きく、そして圧倒的に速い。

第3文明圏最強の海軍、列強パーパルディア皇国主力艦隊は、おそらく来るであろう日本海軍の攻撃に備え、彼らを滅すために出港準備を行うのだった。

数時間後、皇都エストシラント南方海域、海にひしめく大艦隊、そこにはパーパルディ

ア皇国海軍主力の3分の1が展開していた。

各艦の距離は1.0 kmにも及び、とてつもない範囲の「面」に海軍は展開する。

同面内に敵が入ってきた場合は、複数の艦が攻撃に参加する。同質同数の量であれば、各個撃破される布陣であり、決して行わない。

この布陣は、敵よりも被害を受ける事を前提とし、しかし数で圧倒し、長射程砲を敵が持っていたとしても、確実に敵にダメージを与えうる布陣。

第3文明圏において、質においても量においても、他国を凌駕し続けた列強パーパルディア皇国にとって、この布陣は屈辱的でもあった。

しかし、敵は強い。間違いなく侮ってはならない。

第3艦隊提督アルカオンは、皇国に3隻しか存在しない150門級戦列艦『ディオス』に乗船し、前方を見る。

敵はおそらく艦隊を海軍本部に向けて来るだろう。

「報告いたします!!」

通信兵が叫ぶ。あまりの慌てようから、他の幹部も何が起こったのかと彼を見る。

通信兵は続ける。

「本国の皇都防衛隊陸軍基地が、日本国の飛行機械の攻撃を受け、全滅したとの事です」
「また、海軍本部はこれに基づき、展開中の本艦隊に最大級の警戒を指示すると共に、エストシラント港待機中の第1、第2艦隊に出港を命じました」

「な……なんと!!」

「主力艦隊の全力攻撃は歴史上初めてだな」

「しかし……皇都が攻撃を受けるとは!!」

艦橋にいる幹部の面々は、驚嘆の言葉を発する。

「日本軍の艦隊の侵攻も、極めて可能性の高い状態となった。索敵のワイバーンの数を3倍にしろ!!」

「ははっ!!」

「透き通るような青空に向かい、第3艦隊の竜母数隻から次々と飛び立つワイバーンロード。彼らは風を掴み、空に羽ばたく。その姿は、誇り高く、力強い。」

アルカオンは来るであろう日本軍に対し、敵意を燃やすのであった。



同時刻——

パーパルディア王国 皇都エストシラント 南方海域

日本国海上自衛隊とNWT O海軍の『第86合同任務部隊』は、波を裂きながら北進していた。

第86合同任務部隊の陣営は以下の通り

【第86合同任務部隊】

司令官 日本国海上自衛隊『鈴木修一』海将補

参加部隊 海上自衛隊第1艦隊 第2軽空母打撃群

第4艦隊 第8空母打撃群

第14護衛隊群

第15護衛隊群

第5艦隊 第9空母打撃群

第16護衛隊群

第6艦隊 第10空母打撃群

第17護衛隊群

第18護衛隊群

第7艦隊

第11空母打撃群

第19護衛隊群

アメリカ海軍 第7艦隊 第15駆逐戦隊

イギリス海軍 第1空母打撃群 第6駆逐隊

フランス海軍 第1空母航空艦隊 第2駆逐隊群

イタリア海軍 第1航空打撃群 第4駆逐団

すでに敵の大船団は、レーダー上に捉えられ、おそらくは敵の空母と思われる艦隊の位置も把握し、事前の人工衛星からの偵察により、敵海軍本部の位置も判明している。

「すごい布陣と量だな。これほどの近代艦の大艦隊を相手にした海戦は、世界の歴史上初めてになるかもしれない」

「こつちも負けてませんがね」

おおよど型揚陸指揮艦『によど』の旗艦用司令部作戦室^cで部隊司令の鈴木海将補とアメリカ第7艦隊第15駆逐戦隊司令デヴィッド・ブラウン・メイヤー大佐はつばやく。

敵空母艦隊は、第86合同任務部隊戦闘部隊から北東方向約250kmに展開し、すでに空母任務群の艦載機の航続距離に入っている。空母艦隊からは、多数の敵航空戦力が飛び立つ様子がレーダー画面上に映し出される。

「よし！後方の空母任務群へ伝達！『艦載機により敵空母艦隊を撃滅せよ!!!』」



第86合同任務部隊 空母任務群——

『によよど』ら戦闘部隊より南60kmの地点では、日本国海上自衛隊第8・9・10・11空母打撃群の空母、

- CVN—74 『ずいほう』
- CVN—75 『りゆうじょう』
- CVN—76 『りゆうほう』
- CVN—77 『ほうしょう』

の艦載機が出撃準備していた。

各空母の4基あるカタパルトには『F-14E』か『F/A-18E』が設置されている。

『ずいほう』『りゅうじょう』は『F-14E』を発艦させ、制空権を確保し、『りゅうほう』『ほうしょう』は『F/A-18E』に装備された93式空対艦誘導弾^Aで敵空母を攻撃する。

数分後、出撃命令が出され、各艦のカタパルトから『F-14E』『F/A-18E』が発艦する。

傍では、護衛するイタリア艦隊の乗組員が艦載機の編隊を写真を撮ったり、投げキッスをしたり、帽子を振っている。

総勢48機の大編隊はパーパルディア竜母艦隊を撃滅するために、飛行していった。



数分後——

『F/A-18E』を護衛する『F-14E』のレーダーに機影が映る。敵味方識別装置^Fに反応はなく、おそらくパーパルディア竜母艦隊の哨戒機であろう。

隊長はすぐさま部下に撃墜を命令する。

「こちらウルフ1からウルフ4へ、敵機を撃墜せよ。オーバー」
『ウルフ4、了解。撃墜する』

数秒後、『F-14E』の機体下部から99式空対空誘導弾^Aが自由落下した後、燃料に火がつき、大きな加速力を生み出す。

マツハ4で99式空対空誘導弾^Aは敵哨戒機^Mに向け飛行する。



数分後——

パーパルディア王国 海軍主力 第3艦隊所属 竜母艦隊南方約50km空域

ワイバーンロードに騎乗する竜騎士『ラカミ』は哨戒飛行中、海に何らかの違和感を感じ、全神経を集中して海上を見る。

「いったい何だ!? あれは!」

彼は自分へ向かってくる超高速で飛行する矢を発見した。

「索敵隊より艦隊司令! 我、超高速未確認飛行物体に追跡されている!」

「援軍をm」

その時、ラカミの至近距離で9^A9^A式空対空誘導弾^Mが爆発する。

ラカミは絶命し、相棒のワイバーンロードと共に肉片になり、海へと落下する。

ラカミは後に『エストシラント沖大海戦』と呼ばれる海戦で初めての戦没者となった。



数分後——

パーパルディア竜母艦隊 旗艦『フェルネス』

「応答せよ、応答せよ。繰り返す、応答せよ!」

「どうした!」

魔信士が怒鳴り、竜母艦隊司令の『バーン』が魔信士にどうしたかを質問する。

「実は…哨戒中のワイバーンロードと連絡が取れず…」

「『索敵隊より艦隊司令!我、超高速未確認飛行物体に追跡されている!』との言葉を最後に…」

「撃墜されたか…?」

バーンの言葉に竜母艦隊幹部は驚愕する。竜母艦隊の軍師『アモル』はバーンの言葉を否定する。

「バーン様、それはあり得ません」

「ワイバーンロードはワイバーンオーバーロードには劣るも、列強以外の国には脅威」

「それを魔信を打つ暇もなく撃墜するのは困難です」

「…だがアモル、貴様は大事なことを忘れておるぞ」

バーンは喋り出す。

「私たちが戦う国、日本はムーの飛行機械を使っている」

「ムーの最新鋭機『マリリン』を使用したのなら、ワイバーンロードは不意を突かれたら撃墜されるだろう」

「護衛のため、竜騎士団を上らせよう」

「はっ！」

数分後、各竜母では怒声が飛び交っていた。

「上がれる竜は上げれ!!!」

各竜母からは、皇国の航空戦力、ワイバーンロードが続々と飛び立ち、上空で編隊を組む。

竜母20隻からは、各12騎づつ、計240騎がすでに上空に舞い上がり、さらに竜を排出し続ける。

離陸した竜騎士は、周囲を警戒するかのようになり、艦隊上空を飛び交う。

「これほどの竜が、正体不明の物体の迎撃に上がるのは、歴史上初めてだな」

バーンは、飛び立つ竜騎士を見て側近につぶやく。

「そうですね、敵のお手並み拝見といきましょう」

アモルは、自信のある態度をもって、司令のつぶやきに答える。



同時刻

パーパルディア竜母艦隊より南方約45km空域——

第86合同任務部隊空母任務群の第1次攻撃隊長の『山本進』は、F/A-18Eのコックピット内のリーダーに敵竜母艦隊から多数の反応が出たのを見ていた。

彼は直様、全艦載機にミサイルを放つよう命令する。

「こちら隊長機、敵艦載機が発艦した模様、撃墜許可。各隊はミサイルを発射せよ」

「なお、戦闘飛行隊は発射後残りの敵機を仕留めるために上昇、戦闘攻撃隊は空対艦ミサイル^Aサイル^S発射^Mの為、降下せよ」

「攻撃開始!!」

数秒後、『F-14E』は機体下部から、『F/A-18E』は内側から2個目のハイドロポイントより99式空対空誘導弾^Aが^A発射^Mされる。

発射後、2発がシステムの不具合で海に落下したが、残る143発の99式空対空誘導弾^Aはその役割を果たすために、飛行していった。



数分後——

パーパルディア竜母艦隊

数百機にも登るワイバーンロードの大編隊を見ている艦隊参謀のアモルは気分が高揚し、艦隊司令のバーンに話しかける。

「バーン様、ご覧下さい。あの竜騎士の量、凄まじいまでのワイバーンロードの数を!!!」
「……フ、我々はすでに人の領域の戦いを超えています。これは……まさに、神々の領域の戦いだ!!! これほどのワイバーンロードがいれば、ムーの飛行機械も、もう存在しえないでしょう」

「そうだな（何か嫌な予感がするな……）」

パーパルディア竜母艦隊司令バーンは嫌な予感を感じながら竜騎士団を見つめていた。

彼の嫌な予感は的中する。数秒後、上空に展開していたワイバーンロードの何騎かが弾ける。

「なあっ!!!」

「何だ!」

弾けたワイバーンロードと竜騎士は肉片となり、海上へ落ちる。残った竜騎士団は狼狽する。

その時、艦隊で一番目が良いとされている者が何かを発見する。

「何だあれはっ!」

「何処だ!」

「艦隊南方です!」

バーンとアモルがムー製の双眼鏡を覗くと矢のようなものが高速で飛来していた。

「? 矢? それにしてはかなり高速…」

「!!まさか! 不味い!!」

バーンがあれがワイバーンロードを撃墜した物だと考え、ワイバーンロード隊に撤退を命じようとするが、時すでに遅し。

99式空対空誘導弾^Aは143発はワイバーンロード143騎を撃墜^M。その役目を終えた。

「……」

「馬鹿なあ…そんな…」

ワイバーンロードが何も反撃できずに100騎以上もやられたことは、艦隊に大きな狼狽を齎す。

静まり返った艦橋に、机を拳で叩く音が響く。ドン!!と大きな音がし、艦橋の皆は音の発生源を向く。

艦隊司令バーンの拳は、血で赤く染まる。

「バ……馬鹿な。おのれえ!!上空待機中の飛龍隊に、全騎南へ向かうよう指令しろ!!敵を見つけしだい、各小隊判断で攻撃を行うように伝えるのだ!!」

「ははっ!!」

上空の竜騎士に、命令が伝達される。そもそも命令を出しても最高速度350km/h以上のワイバーンロードに音速を超える第4世代主力戦闘機に追いつけるわけがなかったが、バーンらは知る由もない。

その瞬間、上空を隈なく搜索していた見張員が高空から接近する光の矢を見つける。

「!!光の矢!6時方向多数!!」

「!!」

「避けるっ!!」

バーンは祈る。その祈りに呼応するかのように飛龍隊は回避する。バーンは祈りが通じたか…と安堵するが、光の矢は意思を持つかのように姿勢を変え、ワイバーンロードに突っ込む。

ワイバーンロード48騎は『F-14E』から発射された90式空対空誘導弾^Aによつて肉塊に変化させられる。

「くそっ!!」

「…残るは3騎か…」

バーンは考える。そのまま命令を続けさせ、光の矢の元を攻撃させるか?それとも竜母に避難させるか?

だが、考えていると見張員の悲鳴が聞こえる。

「て、敵飛行機械!・高空よりとてつもない速さで急降下!」

「な！」

双眼鏡を覗くと、矢のような形をした飛行機械が迫ってくる。

「ムーのよりも断然早い!!ムーから輸入したのは嘘であったか…上層部め!何がムーの機械を使用している可能性があり。だ!ミリシアルや古の魔法帝国並みの天の方舟ではないか!」

バーンは上層部に悪態をつくも、飛行機械の攻撃は止められない。

「ああ！」

飛行機械から光の雨がワイバーンに降り注ぎ、ワイバーンロードと竜騎士は絶命する。

ワイバーンロードを撃墜した飛行機械は真っ直ぐこちらに向かってくる。

「!!!」

「伏せろお!!!」

パーパルディア竜母艦隊の上空200mの地点を『F-14E』は音速で通過し、衝撃波が竜母艦隊を襲う。

戦列艦は衝撃を喰らい、転覆しそうになる。

パーパルディア竜母艦隊所属のワイバーンロード240騎は海上自衛隊の空母から発艦した『F-14E』の前に全滅した。



同時刻

パーパルディア竜母艦隊より南方約20km空域——

第86合同任務部隊空母任務群の第1次攻撃隊の戦闘攻撃隊長の『小林 美里』は海上から15mの低空で飛行している『F/A-18E』のコックピットのレーダーを見ていた。

レーダーには大編隊を誇っていたパーパルディアのワイバーンが『F-14E』の空対空ミサイルで撃墜され、そこには敵味方識別装置によって味方と判断された青の光

点が映し出されていた。

右を見るとハードポイントに各機2発の9^A3^S式空対艦誘導弾¹が括りつけられている。

「よし……攻撃開始！」

小林の命令により『F/A-18E』が少し上昇し、ハードポイントから9^A3^S式空対艦誘導弾²が落下する。

数秒落下した後、燃料が点火し、48発の9^A3^S式空対艦誘導弾¹は1,150km/hで竜母艦隊へ向かっていった。



数分後——

パーパルディア竜母艦隊旗艦『ワグナー』艦橋

軍師アモルはうろたえていた。

200騎以上の大編隊を誇っていたワイバーンロードが短時間で全滅したのだ。無理もない。

その時、先程光の矢を発見した見張員から報告が上がる。

「見張より艦隊司令！海上を我が艦隊方向へ向かう超高速未確認飛行物体を発見！総数40以上!!!」

「なんだと！もうワイバーンは残っていないぞ!!」

アモルは敵がどうしたかを考える。バーンはその時、ある考えに至る。

「対空用じゃない！対艦用か！」

「!!!」

「回避運動！急げ！」

「了解！回避運動!!」

急いで艦隊の戦列艦は回避運動を取るも、戦列艦はそう簡単に動かない。

海上スレスレを飛翔してきた1発目の対艦ミサイルは、大きく上昇し、斜め上空からバーンらに乗る竜母艦隊旗艦の隣を回避運動中の竜母『アビス』に突入した。

猛烈な閃光がバーンらを襲う。

竜母『アビス』は、船よりも遥かに大きな爆炎に包まれる。少し遅れて、海上に轟音

が木霊する。

「ひいひいひいひい!!!」

アモルは恐怖のあまり、情けない声を出す。アビスは跡形も無く、木つ端微塵に破壊され、海上から姿を消す。

驚愕が艦隊を支配する。誰も、何も言えない。

「……竜母アビス、轟沈」

通信士がつぶやくように報告する。光の矢は竜母の2倍の数で襲ってくる。1発であの威力、至近弾でも致命傷だ。

回避運動をようやく行うが、対空用と同じく、光の矢は姿勢を変え、竜母に突っ込んで来る。

「竜母『ガルガオン』轟沈!! 竜母『セイレーン』轟沈!!」

海上では、敵から放たれた攻撃が連続して着弾し、次々と竜母が沈む。

「くっ!!これまでか」

バーンは、竜母艦隊旗艦『ワグナー』で飛んでくる敵の矢を見つめる。矢は船に突き刺さり、パーパルディア竜母艦隊司令バーンと艦隊参謀アモルは、猛烈な光と共に、この世を去った。

パーパルディア皇国海軍竜母艦隊の竜母20隻は日本国海上自衛隊空母艦載機『F/A-18E』から発射された93式空対艦誘導弾²によって全艦轟沈。

同じく竜母艦隊の艦載機ワイバーンロード240騎も『F-14E』から発射された90式空対空誘導弾³、99式空対空誘導弾⁴、J61A1 20mmバルカン砲の攻撃を受け、全騎撃墜された。



数刻後——

パーパルディア皇国主力海軍第3艦隊 旗艦『ディオス』

パーパルディア王国海軍第3艦隊旗艦『ディオス』の船尾楼甲板で、第3艦隊提督アルカオンは、前方の海を睨んでいた。

間もなく日本海軍と接敵するだろう。正体不明の超音速飛行機械と飛行物体が通り過ぎて行ったので、この先に敵が居るのは間違いない。

「報告します！」

通信兵が声を上げる。

「何だ？」

「我が第3艦隊所属の竜母艦隊が、正体不明の攻撃を受け、全滅しました……!!すでに上空にあった竜騎士250騎も、全騎撃墜された模様です」

「な……なんと!!」

「そんなバカな！ 竜母艦隊は主力戦列艦よりもはるかに後方だぞ!! 攻撃が届くはずが無い!!」

「ワイバーンロードが全滅だと！ 何があつたんだ！」

同じ甲板にいた幹部達は、とても信じられないと言った表情で声を上げる。アルカオンが手をあげると、場が静まる。彼はゆっくりと話し始める。

「敵には、長射程かつ正確に攻撃できる兵器があるのだろう。しかし、一気に全ての戦列艦を叩かず、海戦において最も重要なコアである竜母艦隊のみを狙った……敵の長射程攻撃の数に余裕が無い証拠だ。狼狽えるな」

悲壮感に溢れていた甲板は、アルカオンの一言で精神的に立て直す。

「飛龍隊が全滅したのは痛いな……」

「報告！飛龍隊が全滅したので援護のため、ロテコロイツ基地からワイバーンロード100騎とワイバーンオーバーロード50騎が応援に来るようです!!」

「何！本当か！」

悲壮感は無くなり、変わりに高揚感が溢れる。

「ワイバーンロードだけでなく、ワイバーンオーバーロードも50騎……何としてでも

勝たなくては……」

「ワイバーンオーバードが有れば飛行機械も怖くありません!!」

幹部たちは恐怖を振り払い、現場の監督作業に戻って行った。

「戦列艦『アデイス』から報告!!」

通信士は続ける。

「『アデイス』前方約40km地点に艦影を確認!艦数不明!!」

「ほう、見つけたか!!」

アルカオンは手を突き出し、勇壮に宣言する。

「全艦隊、第1種戦闘配備!目標、敵艦隊!針路修正、右5度!」

「右5度修正了解!」

「艦隊左翼、足並み揃えろ!少し外れにいる竜騎士団にも位置を共有し、航空戦の準備を

指示せよ！」

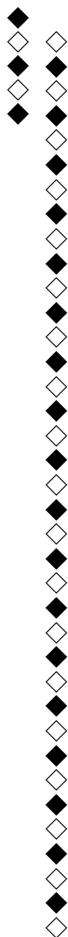
「隊列揃え次第、最大船速！空と海から波状攻撃を仕掛けるぞ!!」

「はっ!!」

命令は正確に伝達され、各艦が緩やかに向きを変え、一斉に加速する。

「竜騎士団の応援が来たのはまさに天啓だな……海と空からの同時攻撃、歴史上今回のような大規模攻撃を受けた者はいない。日本よ、貴様は耐えられるか？」

アルカオンは眼光鋭く、水平線の彼方を睨みつけた。



同時刻

第84合同任務部隊——

艦隊は波を裂いて進む。総数50隻の艦隊はすでに戦闘態勢に移行しており、3つの

輪形陣を組み、敵の大艦隊へ向かう。

中心部の輪形陣には海上自衛隊第4・5艦隊の護衛隊群、右翼の陣にはアメリカ海軍・イギリス海軍、左翼にはフランス海軍・海上自衛隊第6・7艦隊の護衛隊群で構成されている。

中心部の陣の真ん中を航行しているいずも型軽空母『かが』には、海上自衛隊のAV—8B ハリアーII 5機の他に、海兵隊のAH—1Z ヴァイパー20機が配備され、発艦を開始する。

最前方の護衛艦と、敵艦との距離が20kmになった時、第84合同任務部隊司令官『鈴木修一』海将補から一斉指令が繰り返し、はつきりと大きな声で流される。

「攻撃開始!!各艦は砲の射程に入り次第、順次攻撃を開始せよ」

各陣の最前列を行くこんごう型護衛艦『きりしま』、アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦『ヒギンズ』、フォルバン級駆逐艦『シヴアリエ・ポール』の、艦前方に設置された、127mm単装速射砲・Mk. 45 127mm単装砲・62口径76mm単装速射砲が動き始める。

FC S射撃管制システムにより、敵艦と自艦の相対速度が算出され、砲の飛翔速度、弾

道、そして着弾予想地点を計算、砲が寸分違わず斜め上空を向く。

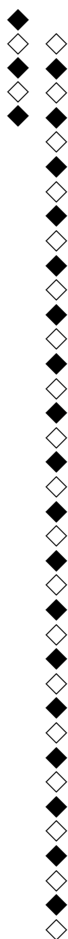
『主砲撃ち方はじめ!!』

『Be sure to guess!! Fire!!』

『Montrez les compétences de votre flotte dans un autre monde! Feu!』

次の瞬間、轟音と共に、4発の砲弾はパーパルディア皇国海軍主力第3艦隊の戦列艦『アデイス』に向け、発射された。

後に世界に『日本』という国を強烈に印象づけ、歴史書には『エストシラント沖大海戦』と記された海戦が始まろうとしていた。



同時刻

パーパルディア皇国海軍主力第3艦隊 戦列艦『アデイス』——

「敵艦発砲!!!」

我が方の艦と、敵艦はまだ20 km以上離れているにも関わらず、日本の軍艦は発砲した。

艦長は副長に話しかける。

「奴らはこれほど距離が離れているのに砲を放ち、いったい何のつもりだ？威嚇か？」

「全く理解できません。敵の砲が我が方の射程距離よりも長かったとしても、あまりにも離れすぎています」

微かにいやな予感がする。今まで戦場で感じる事の無かった確かな死の予感。

「面舵いっぱい！念のため回避行動をとるぞ!!」

艦長の命により、戦列艦アデイスはゆっくりと向きをかえる。突然艦が激しく揺れる。

「一体連中は何をk」

その時、127mm単装速射砲・Mk. 45 127mm単装砲・62口径76mm単装速射砲の127mm・76mmの砲弾4隻が『アデイス』を貫いた。

戦列艦にはオーバーキルすぎる攻撃により、皇国の戦列艦『アデイス』はこの世から消えた。



数分後

パールディア皇国第3艦隊 旗艦『ディオス』——

「戦列艦『アデイス』轟沈!!て……敵の攻撃は砲撃によるものと判明!!射程は20km以上!!たった4発の発砲で全弾命中させています!!!」

「な……ななな……なんだと!?20km!?砲の射程距離が20km以上もあるというのか!!!我が方の10倍も……」

さすがのアルカオンも頬を引き攣らせ、冷や汗を浮かべる。

「しかも、たったの4発で命中!?海上に大砲の外れた水飛沫はないから4発全てを着弾させているぞ!動目標に対する命中率は、距離2kmで発射した我が方の100倍もあるのか!!」

「20kmでの命中率は我が方が2kmで撃つた時の100倍以上か。距離2kmで比較したらどうなる!?まあ、1発では計れないが」

「敵の砲はたったの1発で戦列艦を沈めるほどの威力がある。純粋な火力については、認識以上の開きがあるのかもしれない!」

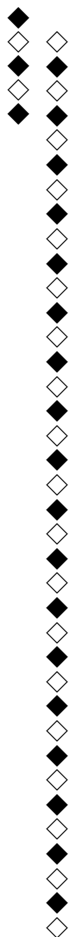
幹部たちは、敵の強大さに対する純粋な驚きと、戦列艦で戦うには難易度があまりにも高すぎる艦の性能差に絶望する。

議論をかわしている間にも、3艦はそれぞれ別の目標を攻撃し、すでに10隻の戦列艦がそれぞれたったの1発で轟沈している。

「間もなく竜騎士150騎が敵上空へ到達します。」

「たのむぞ……」

第3艦隊提督アルカオンは竜騎士による空対艦攻撃に望みを託すのだった。



同時刻

パーパルディア王国 第3艦隊所属 竜騎士団

「見えたぞ!!」

第3艦隊司令部からの魔信により、誘導された竜騎士団150騎は、水平線上に艦影を認める。今までに見た事が無いほどの大きさと速さがあり、彼らの緊張は頂点に達する。

敵艦は友軍から20km近く離れているにも関わらず、砲撃を行い、友軍を沈めていく。彼らは右翼陣形後方ローリーギリス艦隊の方角から突撃する。

竜騎士団長『ダイロス』は覚悟を決める。

「全軍突撃!!日本軍を滅せよ!!!」

「うおおおおお!!!」

自分たちは最強の竜騎士団、自分を信じて彼らは向かう。

パーパルディア皇国軍第12竜騎士団約150騎は、イギリス海軍第1空母打撃群第6駆逐隊の45型駆逐艦『ダイヤモンド』に目標を定め、攻撃しようとする。

「何!?!敵艦が爆発しただど!?!」

ダイロスの目には、日本（実際はイギリス艦だが、日本以外の国をダイロスには知らない）の艦が勝手に爆発したように見えた。

しかし、次の瞬間、猛烈な速さで上空に打ち上げられる光の矢を目にしたとき、それが自分たちに向けられた攻撃であることを理解する。

「何だ!矢が!向かってくる!?!?!」

ダイロスは竜母艦隊飛龍隊の壊滅理由を知らないため、狼狽する。各竜騎士は上空で散開する。

光の矢は信じられない速さで距離をつめ、ダイロスの斜め後方を飛行していた竜騎士に着弾、その体をワイバーンもろとも原型を留めないほどの木っ端微塵に粉碎した。

前部の『シルヴァーA50』VLSから『アスター15』艦対空ミサイルが発射され、パーパルディア竜騎士団に向かう。

「他の我が海軍艦艇・アメリカ艦隊も射撃を始めました！」

「What!?!我が王立海軍はまだしも、ハンバーガー野郎までだと！あの肥満比率33%め！コーラとチーズの食べ過ぎてデブになって、クソトカゲを撃ち落としてダイエツトしようって言うのか!!」

「shit! 急げ急げ！女王陛下への戦果を稼ぐのだ！主砲だけではなくM2とCIWSも撃て！」

「はっ！」

ふと、ハリスは自分のtea cupを見ると、愛飲しているteaがなくなっていることに気がつく。

「Bloody hell! 副長! tea potとお前のcupを持ってこい！」
「了解です」

すぐに副長はtea potとtea cupを持つてくる。
 potからcupにteaが注がれ、艦長はその匂いに興奮する。すぐさま、口に注が
 れハリスは震える。

「oh… agreeable flavor!!うまい!!」

「agreeable!良いもんですなあ!!」

「hahahaha hahahaha hahaha!!!」

一部分だけ見ると紳士達が紅茶を嗜んでいるように見えるが、艦橋の窓からはVLS
 から艦対空ミサイルが発射され、55口径114mm単装砲が咆哮する。

今日も英国紳士達は絶好調だ。



数分後——

パーパルディアア皇国海軍第3艦隊旗艦『ディオス』——

「りゅ……竜騎士団は全滅しました。敵艦に被害なし…」

沈黙する艦橋、誰もが絶望し、なす術が無いと理解し始めていた。もし彼らが敵は紅茶を飲み、ハンバーガーを食べながら迎撃したと知ったなら言葉を失うであろう。

「戦列艦『マルタス』、『レジール』、『カミオ』轟沈、『ターラス』に敵砲着弾……」

絶望的な通信士の声だけが、艦橋に響き続ける。あの歴戦の獅子、第3艦隊提督アルカオンでさえ、額に汗を浮かべ、沈黙している。

皇国の頭脳『マータル』の考えた作戦も、列強ムー相手ならば効果があつただろう。しかし、1000発1000中の長射程砲と、1発で沈むほどの威力のある砲弾なんて、反則すぎるではないか。

作戦は全くの無意味となり、撃沈が続く。

敵の砲は、射程距離が20km以上あり、ほぼ1000発1000中、かつ装填がとてつもなく速い。皇国の魔導砲の射程距離まで近づこうと思つたら、最大船速で40分以上かかってしまう。

敵との相対速度を利用すれば、もつと早く到達できるだろうが、戦場で甘い期待をすべきではないだろう。あんな正確な砲撃を40分以上も避け続けるのは不可能だ。

「……………そ!!」

アルカオンは覚悟を決める。そもそも、皇国主力が皇都の目と鼻の先で、戦力を残して降伏や撤退が許されるはずなどない。

選択肢などは、初めから無いのだ。

「全軍、進攻してきた日本軍に突撃せよ!!! 皇国海軍の意地を見せてやれ!!!」

各船の魔石が輝く。風神の涙と呼ばれる風を起こす魔石により起こされた風を帆いっぱいを受け、最大戦速で敵の巨大船に向かい、加速を行う。

しかし、味方艦はなおも轟沈し続ける。

面のように薄く展開した皇国艦隊、その面に棒が突き刺さるかのように第86合同任務部隊が進攻する。

任務部隊の10km圏内のパーパルディア皇国艦船は次々と粉碎、轟沈され、日本軍の通った後の海上には戦列艦の残骸のみが浮遊する。絶望に包まれる第3艦隊。

あまりの惨劇に、皇軍戦列艦の中には命令を無視し無断で撤退を始め、結果的にそれが艦隊同士での接触・衝突事故を多発させ更なる混乱を招くに至った。

「間髪いれるな！ 次弾攻撃、始め!!」

「Welcome to the party, glorious US Navy people!!」

「All—you—can—eat buffet! Don't leave it behind!」

「a va? Lors que vous dites cela, le premier est le barrage, le second est le barrage, le troisième est le barrage!」

完全なパニックに陥っていた皇国海軍人と異なり、逆に合同任務部隊の人間らはまるでこの戦場を楽しむかのように、艦長から新米水兵まで皆ハイになっていた。

「日本艦隊、我が艦の正面に來ます!!」

パーパルディア皇国主力第3艦隊 旗艦 超F級150門級戦列艦ディオスに、第8合同任務部隊が正対する。その距離は間もなく20kmに達するだろう。

「左に進路を変え、日本艦隊との距離をとる事を申し上げます!!! 旗艦が指揮能力を失う訳にはいきません!!!」

幹部の1人が提督アルカオンに上申する。

「ならん! 進路そのまま維持、皇国主力の旗艦が引いてはならん!!!」

「し、しかし!!!」

「敵艦の主砲、我が艦に向きます!!!」

「提督! 速く進路を変えてください!!!」

「ならん!!!」

アルカオンは吼える。その時、見張り員が悲鳴のような声で報告する。

「敵艦発砲!!!!!!」

全員に緊張が走る。

「砲弾が来るぞ!! 取舵いっばい!!」

艦長が吼え、操舵員が操作する。艦がもどかしいほどゆつくりと、進路を変え始める。その時、閃光と爆発音が辺りを巡らす。

艦が激しく揺れる。アルカオンは激しい揺れで、頭を柱にぶつけ、額から鮮血が流れる。

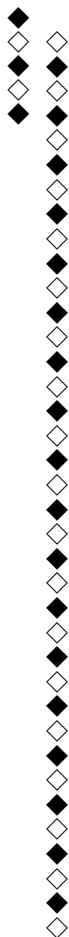
「状況報告!!!」

「船体右後部に被弾! 火災発生!! また、破口から多数の浸水を認める!!!」

『ディオス』の船速が、目に見えて落ち、船体が傾き始める。船内で、火薬が転がる。圧力を受けた火薬は、その能力を解放し、付近の火薬を巻き込み、その炎は弾薬室をかける。

炎は上部天井を突き抜け、最上甲板を突き破り、大きな火柱となって出現する。

パーパルディア王国主力第3艦隊の旗艦『ディオス』は、その猛烈な火柱と共に、船体が真つ二つに折れ、轟沈した。



数分後

パーパルディア王国 海軍本部――

パーパルディア王国海軍海将『バルス』は港を眺めていた。続々と出港していく皇国の主力艦たち、間もなく第1、第2艦隊も出港も完了する。

すでに第3艦隊外円部では日本艦隊との戦闘が始まっているとの報告があがっている。

作戦会議室には、海軍本部の主要幹部が集まり、海図を睨んでいる。その中には、皇国の頭脳と言われた『マータル』も含まれていた。

次々とする戦況報告に、マータルは焦りの色を隠せない。これほどまでに個艦能力に差があるとは思わなかった。

この列強たるパーパルディア王国と、日本軍の個艦性能差は、列強と文明圏外国の差よりも大きい。

「……第3艦隊旗艦ディオス、撃沈されました」

沈黙。

「……よしー」

意を決したようにマータルが発言を始める。

「海将！第1及び第2艦隊は最密集隊形で、日本軍に突入させましょう!!これほど差があるとは思いませんでした」

「幸い日本軍は数が少ないようです。奴らを倒すには、数で押しつぶすしかありません」
「……許可する」

『バルス』の言により、皇国主力第1艦隊と、第2艦隊は、密集隊形で日本軍に向かっていった。



数時間後――

おおよど型揚陸指揮艦『によど』の司令部作戦室^F^I^C

戦場の刻一刻と変化する状況が、司令部作戦室^F^I^Cに伝えられる。

現在のところ、作戦は順調に推移しているようだ。しかし、敵国首都の港から続々と出てくる敵艦の量は、彼らを緊張させ続けるには十分な脅威だった。

敵艦の隊列の報告があがると同時に、幹部に緊張が走る。

「密集隊形をとってきたか!!それにしても、進路上に敵が多すぎる」

艦隊はすでに、薄い面のように広がった敵に食い込む槍のように突っ込んでおり、どの方向に向かっても敵がいる。にも関わらず、撃滅目標手前に、さらに密度の高い敵の量。

司令の鈴木は意を決したようにつぶやく。

「海兵隊のヘリにより、艦砲射程圏外の進路上の敵を攻撃、進路をこじ開ける。艦隊にあつては、砲の節約のため、前方については射程限界、側面については6km圏内のみの攻撃とし、進路上の敵を撃破しつつ突っ込むぞ!!」

「了解です！」

上空に待機していたA H—1 Zヴァイパーが敵艦隊の方角へ飛行する。



数時間後——

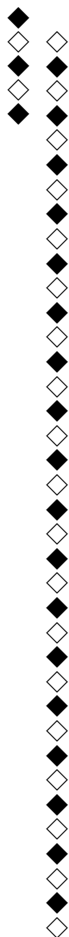
パーパルディア皇国 海軍本部南方150 km先海域

第86合同任務部隊は、皇国の艦隊を沈め続けていた。海上には絶えず砲撃音が鳴り響き、音の数だけ皇国艦は沈んでいく。

上空には攻撃ヘリが飛びまわり、敵の射程圏外からの攻撃を加える。戦列艦は、対戦車ミサイルや、ロケットの攻撃で燃え上がる。

しかし、彼らは勇敢だった。1回の音で、数百人が死んでいくにも関わらず、勇敢に立ち向かっていく。

彼らは正に、列強パーパルディア皇国の守護者にふさわしい、壮絶な最後を遂げる。海上には、皇国艦の残骸が多数浮遊する。



同時刻

パーパルディア皇国海軍本部のある港――

臨時職員として雇われていた『シルガイア』は、港で掃除をしていた。

「おい、おまえ!!その地面にゴミが落ちてるじゃないか!!掃除という、簡単な単純作業が仕事なんだから、掃除くらいきちんとしろ!!」

「すいません」

シルガイアは、海軍の下っ端兵から罵声を浴びながら掃除をする。情けない。今の自分があまりにも情けない。

彼は、パーパルディア皇国海軍本部を見上げる。

「奴は……出世したな」

彼は、目に涙を浮かべ、先日の同窓会を思い出す。同窓会には、皇国海軍の将、バル

スが出席していた。学生時代、バルスとはライバルだった。成績、運動能力、ほとんど変わらなかったが、少しか自分の方が劣っていた。

学生時代のほんの僅かな差、この差の積み重ねが、今の圧倒的な差となつて現われていた。

月とスツポン、天と地、神と虫けら、それほどの差があるように、彼には感じられた。同窓会で戦死の話が出た時の海将バルスの言葉が思い出される。

『はっはっは!!前線に出る事の無い列強国の海将が戦死する事などありえぬよ。もしも、私が暗殺以外で戦死し、断末魔をあげるような事があれば、その断末魔は列強パーバルディア皇国の滅びの呪文となろう』

「すべてを手に入れた者と、何も手に入らなかった者か……」

彼は、人生の不条理に、嘆きたくなる。

シルガイアは、ふと違和感に襲われ、海を見る。彼は目が良い。

「!?何だ?あれは!」

沖合に巨大な艦が展開しており、砲をこちらに向けている。皇国海軍あんな巨大艦は

戦艦『とき』はパーパルディア海軍本部を砲撃するために皇都エストシラント南方5 kmを航行していた。

艦橋では絶世の美女と所謂イケメンと呼ばれる顔立ちの美男子が佇んでいた。ある者が見れば一枚の絵画のようであろう。

だが、美女が放った次の言葉で絵画はネタ絵に変わる。

「あれがあの子のハウスね」

「艦長、おやめください」

美女ー『とき』艦長『松田美麗』一等海佐は美男子ー『京極隆史』二等海佐に不貞腐れた目線を送る。

「だって！この艦異世界に来てからずっと対地攻撃だよ！今回も！だから鬱憤を晴らそうと思って…」

「だからあのセリフは関係ないでしょ…」

松田と京極は幼馴染で距離は近い。

「まあ…任務に集中しますか…」

「主砲左砲戦用意！」

「弾種、榴弾。目標敵海軍本部！」

「了解！主砲左砲戦用意！弾種、榴弾。目標敵海軍本部！」

『とさ』に4基ある46cm3連装砲が回転し、海軍本部へ向く。

「撃ち方始め！」

「撃ち方始め！撃てえ!!!」

耳をつんざくような轟音と腹に響くような衝撃と共に放たれた12発の46cm砲弾が放たれる。

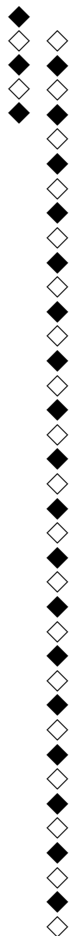
次の瞬間、46cm砲弾が連続して海軍本部に突き刺さり、猛烈な閃光を放つ。

轟音。そして悲鳴。

装飾が施された海軍本部、威厳と威容を放っていた同建物よりも、遙かに大きな爆炎が吹き上がる。猛烈な爆発に耐え切れず、建物は音をたて、跡形も無く崩れ落ちる。

他国を恐怖で支配し続けてきた列強パーパルディア皇国、その恐怖、力の象徴であった海軍本部が崩れ落ち、爆発音は再び皇都エストシラントに木霊する。

ここにおいて、パーパルディア皇国は、海軍全体の指揮能力を失った。



同時刻——

魔導砲を発射するかのような戦闘音が皇都エストシラントにこだまする。

先ほどの陸軍基地攻撃の恐怖から、外にでて確認する住民はおらず、皇国臣民は自宅に入り、窓と鍵を閉め、ただただ震える。

海軍本部のあった港では、崩れ落ちた本部建物を見て、皆唾然としている。

臨時職員の『シルガイア』は海を見る。

戦闘音は徐々に、そして確実に港に近づき、その音を出している原因が水平線上に現われる。灰色で、大きく、そして速い。

敵が発砲した音の数だけ味方の船が沈んでいるようだ。

「やばい!!化け物が来た!!!」

シルガイアは立ち尽くす。その傍ら、港の兵は慌しく動き回り、陸上に設置され、海へ向く砲を稼動させる。

シルガイアは敵の脅威を正確に理解し、動かない足を手で叩き、ようやく動かし始める。彼は兵舎、弾薬庫、そして陸上設置砲台等の重要施設から走って離れる。港から離れ、高台に上り、振り返る。

敵の攻撃が港の砲台に連続して命中し、砲台は火柱をあげる。続いて弾薬庫に命中し、港全体が猛烈な爆発と黒煙に包まれる。

「ちくしょう！ちくしょう！！これではなす術が無い！！」

日本国海上自衛隊による、敵海軍本部のある港に対する攻撃により、港湾施設、武器弾薬貯蔵庫及び兵舎は完全に破壊され、パールディア皇国主力海軍のうち、600隻全艦を撃沈。

本攻撃により、第3文明圏列強パールディア皇国主力海軍は、実質的に壊滅状態となった。





同日夜――

皇都エストシラント 皇城

「それでは、これより緊急御前会議を始めたいと思います」

国家の危機的状況となった時のみ開催され、根回しも何も無く、生の情報をぶつけ合う会議が始まろうとしていた。

会議は国のトップ、皇帝ルディアスを筆頭として、国の重役が顔を連ねる。

皆、顔は暗く、だれ一人として笑顔を見せる者はいない。

会議の面々には、皇族レミール、第1外務局長エルト、第2外務局長ランス、第3外務局長カイオスも含まれている。

今、皇国の未来を左右する、日本対策の会議が始まろうとしていた。

第9話 破壊神の創造

中央暦1640年8月6日 夜――

パーパルディア皇国 皇都エストシラント 皇城

皇城では、日本の対策のための会議が開かれていた。

会議のメンバーは、

○皇帝『ルディアス』

○皇族『レミール』

○パーパルディア皇国軍最高司令官『アルデ』

○パーパルディア皇国第1外務局長『エルト』

○パーパルディア皇国第2外務局長『リウス』

○パーパルディア皇国第3外務局長『カイオス』

○臣民統治機構長『パーラス』

○経済担当局長『ムーリ』

などの皇国幹部だ。

会議に先立ち、日本国の資料が配られる。

ロデニウス沖の海戦やエジエイの戦い、ロウリア王確保など、信じられないことばかりである。

歴史上我が国がこれほどの国家を認知していなかった現状を考えると、突如表れた国であることは間違いない。

各員は、配布資料を読み終わる。一様に顔は暗い。

「まずは軍の現状からご説明いたします」

軍の最高指揮官アルデは説明を開始する。

「海軍の状況については、主力が壊滅し、残存戦力は監査軍の第2級艦であり、戦力は乏しいです」

アルデの額には汗が滴る。2級戦列艦でも蛮族には役に立つが、日本国はムーを上回る戦力。

相手にするなどもつてのほかだ。

「次に、陸軍の状況についてご説明いたします。皇軍3大基地の1つ、皇都防衛隊が全滅いたしました」

「壊滅理由としては、戦力を集中し過ぎたことだと思われまますので、今後基地を作る際には、戦力を集中しすぎないように配慮する必要がありますが生じました。

「ですが、本戦いには間に合いそうにありません」

アルデの説明は続く。

「皇都の防衛に大きな穴が開いてしまったため、属領統治軍を撤回し、皇都防衛の任に当たらせませす」

「なお、属領統治軍を全て撤回したとしても、攻撃を受ける前の皇都防衛隊の戦力までは回復不可能です」

「ちよつ！ちよつと待つてくださいい！」

臣民統治機構長。パーラスはアルデの話に割って入る。

だが、すでに皇帝が指示を出しており、撤回が不可避と知ったパーラスは黙り込む。

アルデが話し終わった後、第3外務局長カイオスが手をあげ、話し始める。

「この状況から、日本を侮ってはいけなと皆さまはお分かりになりましたが…あと一つ必要な事があります」

カイオスは一呼吸置く。

「——今回の戦争の終わらせ方、いわば落としどころです」

「「「ツツ!!」」」

一同に衝撃が走る。

誰もが思っていて、最も口に出したく無い言葉を、この男は皇帝の前で口にしたのだ。

「アルデ最高司令殿にお尋ねする。」

「…何だ？」

「残存戦力で日本に上陸を行い、皇帝陛下の御指示である、日本人の殲滅をなす事は可能か？」

「陛下の御意思達成のため、全身全霊をかけて取り組む所存だ」

「精神論など聞いてはいない。現有兵力で可能かどうかを聞いている」

カイオスに尻尾を掴まれ、アルデは齒軋りする。

「……現有戦力では、不可能だ。海軍が全滅しているため、達成のためには、兵の数をそろえ、もつと船を作る必要がある。時間が必要だ」

「船だけでは不可能であろう。そもそも日本の兵器群に対し、有効な兵器を作れるのかね？」

「それは……」

「いずれにせよ、日本は待つてはくれまい。それでは……今回の戦端を開いた第1外務局長のエルト殿にお尋ねする」

「……何でしょうか」

「この戦争、どのように収束させるおつもりか？」

エルトは、皇帝ルディアスとレミールに視線を走らせる。二人とも、目を伏せていた。

「国家として、すでに日本殲滅を表明している今、皇国が意志を変更すれば、他国や属国に示しがつかないでしょう。国益を考えたとしても、このまま進むしかありません」

「エルト殿は、それが可能と思っておられるのか？」

「アルデ殿が時間をかければ可能と仰るのならば、それに従います。軍事における戦略的な事に私は口を出す立場にはありませんから」

「では、日本は我が国に何を求めているか、担当である第1外務局長にお尋ねしたい」

「日本は……フェン王国において、我が国が行った日本人の殺処分についての公式謝罪と、賠償、そして首謀者、参考人の身柄の引渡し。又、フェン王国に対する謝罪、賠償、物品の保障、人員に対する賠償、これを求めている」

レミールの顔が曇る。

「では、レミール様、この日本の要望についてはどう思われるか」

一時の沈黙。

「わ………私は………」

「——もうよい!!!」

怒声が会議室で短く反響した。レミールの発言に割って入る怒声、すべての者はその声を誰が発したのかを瞬時に理解し、黙り込む。

皇帝ルディアスは第3外務局カイオスを睨みつけ、怒りに震える。

「カイオス、お前は何が言いたい!この列強たるパールディア皇国、その長である皇帝と、そのレミールを、日本に差し出すといった屈辱的な完全敗北がお前の望みか!!」
「いえ、決してそのような。ただ私は、皇国臣民のためを思い、日本が何を求め、我が国としてどういった対策が出来るのか、目を瞑らずに洗い出す、あらゆる可能性の模索をしているのです」

一言間違えば一族の首が飛ぶこの状況下で、カイオスは慎重に言葉を選ぶ。

「日本は強い。私は本当に危機感を感じています。このままでは、もしかすると、皇国が倒れるかもしれないと、危惧を抱いているのです」

「ほう……確かに日本軍は強い。海軍を滅し、大規模陸軍基地の1つを潰した。しかし、

未だ2つの大規模基地が健在であり、しかも我が国の武器を支える工業都市デュロも健在だ。武器が尽きる事は無い。そして、奴らは陸軍を上陸させる事は出来まい」

「何故そう思われるのですか？」

「陸軍の上陸……地の利を生かした列強国の大陸を制圧するとなると、とてつもない量の投入が必要だ。しかし、日本はまだ海軍と空軍しか姿を見せていない。それに日本は島国であろう？ならば海軍の力が強くとも、陸軍は数が少なく精強ではないだろう」

皆は頷く。皇帝の言葉に逆らえるはずもない。

しかし、皇国崩壊に関するカイオスの懸念はそこではないが、現時点の意見具申はカイオスの首がはねられかねないため、彼は言葉をのむ。

日本対策会議はつづく。



数時間後——

パーパルディア皇国 属領クーズ

「ハキは何も解っていない!!」

『クーズ王国再建軍』の長、『ハキ』の右腕『イキア』は憤慨していた。数分前ハキの家を訪れ、日本国によりパーパルディア皇国の基地が消滅し、駐留軍が帰還したと報告した時、ハキはすぐさま反乱を宣言した。

しかし再建軍の人々には当然家族もあり、命をかけるには納得できる理由が必要、反乱後一時的に統治が可能となったとしても、皇国が戦争に敗北するような事が無い限り、力を取り戻した皇国によって再度蹂躪されることは目に見えている。

イキアは反乱の暗号を魔信で流す前に、試しに1つの組織の説得のため、とある建物の前に来ていた。ドアが開き、建物の中に入る。

「……という訳で、本日午後3時00分から、国を取り戻すため、クーズ王国再建軍の一斉決起を行います。準備のため、暗号魔信は3時間前の午後0時00分に流します」
「一時的勝機はあるだろうが、その後の事を考えているのか？ 皇軍が戻ってきたら、あっさりと踏み潰されるぞ」

イキアと同じ懸念を示す組織の人間、やはり人の命を賭けるには、材料が少なすぎる。建物の中に沈黙が溢れる。

その時、ピロリンピロリンと、彼の家に設置してある壊れかけた映像受信機が光り始める。第1文明圏の魔信を拾っていたその受信機に、組織の人間とイキアは振り向く。

『……番組の途中ですが、臨時ニュースをお知らせします。アルタラス王国の元王女、現女王、ルミエス氏が全世界に向け、緊急記者会見を行うとの事です』

一時して、ルミエスが壇上に上がる。

『みなさん、おはようございます』

ルミエスはゆっくりと頭を下げる。その姿は美しく、品性を感じる。

『今から行う発表は、当事国の日本国には了解を得ています』

ルミエス王女の話は続く。

『先日、アルタラス王国の北方、パールディア皇国のエストシラント南方海域で、日本

国とパーパルディア皇国の海戦が行われました』

初の公的機関からの重要発表、記者たちは体を乗り出して聞き耳をたて、映像受信機の前にいるイキアたちも、自分たちに関係する重要情報であるため、体を乗り出す。

『この海戦に、日本国は海上自衛隊の護衛艦隊と新世界連合軍^{NWT}約60隻を投入、一方パーパルディア皇国は、主力戦列艦等約60隻を投入いたしました』

噂では流れていた事象が、政府機関からの正式発表として行われる。マスコミ関係者たちは、必死に記録を行う。

『本戦いの結果、日本国の被害はゼロ、1隻たりとも、1人の死者も出ていません』

『一方、パーパルディア皇国は約600隻が撃沈され、パーパルディア海軍主力戦列艦は全滅。本戦をもつて、パーパルディア皇国主力海軍はほぼ全滅いたしました』

会場がざわつく。

『又、日本国は、パーパルディア皇国本土の陸軍基地、皇都防衛隊に空から攻撃を行い、これを全滅させました。なお、この攻撃には、我が国の基地も使用されています』

話は続く。

『この皇都防衛の穴埋めのため、各属領から軍の引き上げが行われているという情報が入っています』

ルミエスの声に力がこもる。

『パーパルディア皇国の統治に苦しんで来た人々よ!!今が動く時です!!今、皆が一斉に動けば、皇国にそれを止める力はありません!!』

『いまこそ、力を合わせ、自分たちの国を!!平和と幸せ、そして何よりも誇りに満ちた自分の国を取り戻そうではありませんか!!』

『パーパルディア皇国よりも、日本国の軍の方が強い事は、今回の戦いを見たとしても、火を見るよりも明らかです!!!皇国は日本と戦争をしている!そして、彼らは日本には勝てない!!』

『我々も共に戦うのです!!そして悪魔のような国、パーパルディアを倒そうではありませんか!!あなた方が自分の国を取り戻すという行為そのものが、本戦いに大きく影響してきます!』

『戦うのです!!今なら……今なら戦いに勝つ事が出来るでしょう!!!今なら勝てる。そして彼らは列強の座から落ちる事となるでしょう。動くべきは今なのです!!!』

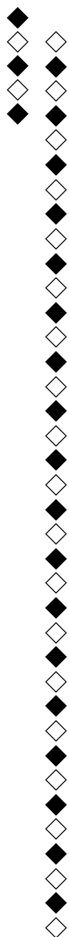
記者たちが質問をはじめ、緊急放送は終了した。

…沈黙。

皇国が手ひどくやられた事は本当だった。日本という国はとんでもない国のようだ。

「……わかりました。やりましょう」

組織の人間は同放送を聞き、ハキとイキアの方針に理解を示す。属領クーズは本日、皇国に対し反乱を起こし、その支配権を取り戻す事を決定した。



中央暦1640年8月19日——

パーパルディア皇国 工業都市デュロ デュロ防衛隊 陸軍基地

パーパルディア皇国最大の工業都市『デュロ』。

都市東部の沿岸部に工場が密集しており、北側・南側が居住区、西側には皇国三大基地の1つ・デュロ防衛隊陸軍基地が存在する。皇国の工業力の要であると共に、北方や南方からの侵略に備える拠点でもある。

デュロ防衛隊長である『ストリーム』は陸軍将軍『ブレム』と話をしていた。

「まさかエストシラントが攻撃されるとは…」

「未だに信じられません。日本はムーの兵器を使用しているのでしょうか？」

日本側の兵器がムーを超越しているとの情報は、首脳部で止められてしまっており、ストリームらは知らなかった。理由は、神聖ミリシアル帝国やムーより強いとの情報が入属領に流れれば、一斉に日本支持を表明しかねないとの警戒からである。

「いや…ムーは輸出などは行わない方針だ…報告を信じるならばムーは日本以上の実力

を持つだろう」

「この戦果…第二種警戒体制に移行した方が良いかと」

「そうだな。たかが文明圏外国にここまでパーパルディア軍が追い詰められるなど…」

「諸君、私が言ったように『たかが』と侮るなよ。敵はヒュドラだと思え」

この日、デュロは第二種警戒体制に突入した。各々は、日本軍の攻撃に備える。



中央暦1640年8月18日――

パーパルディア皇国東部 工業都市デュロ 海軍基地

パーパルディア皇国東部工業都市デュロの海軍基地では、監察軍含む戦列艦42隻が出撃の準備を整えていた。

戦列艦『デアロング』所属の新人水兵『ハーゲルト』は先輩の『レンジ』に質問をしていた。

「先輩、なんで出撃するんですか？ 私たち水兵では日本軍の攻撃から避ける為に出撃するって噂が流れていましたか？」

「さあな？ ベテランは油断しないのさ。ルトス司令も同じだろ」

日本と言うとフェンで監察軍、フェン沖で皇軍と文明圏外国の中では強い軍を保有していることしか知らなかった。

エストシラント沖の海戦の結果は上層部しか把握しておらず、下級水兵は全く知らなかった。

その時、船内放送が流れる。

『諸君、艦長のサクシードだ。我々は準備が完了次第出港。艦隊は北へ向かい、ガハラ神国・フェン王国を迂回して日本へ向かう』

『諸君らは日本から逃げる為に出撃するのだと噂しているが、我々は皇国を侮辱した日本を懲罰するために出撃するのだ』

『日本海軍基地がある都市『上海市』に我々の魔導砲を撃ち込み、火の海にするのが我々の任務だ』

パーパルディア上層部は日本がパーパルディア本土に集中している隙に、油断している日本本土を攻撃する作戦をとった。第3国から『上海市』は海軍の大規模基地がある事がわかっている。

ここを攻撃し、殲滅すれば日本の力は弱まるであろう。そう言う考えだった。

『各員気を引き締めていけ！』

「「おおっ!!!」」

水兵達が声を上げている時、レンジはハーゲルトに耳打ちする。

「ハーゲルト、お前日本を文明圏外国と侮るなよ」

「えっ?」

「いいか、今聞いたことは他に言うなよ」

ハーゲルトは首を上下する。

「実は、日本はムーの兵器を持っている可能性がある」

「ええっ!」

「よく考えろ、フェン、フェン沖、アルタラス。最低でも3つは敗北している。最近上層部の様子がおかしいから他にも敗北しているかもしれない」

「そ、そうですね」

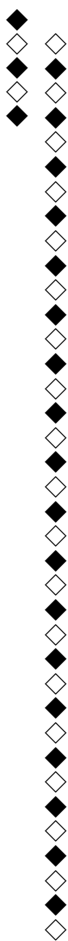
「第3文明圏最強の皇国海軍に勝つ海軍は『神聖ミリシアル海軍』と『ムー海軍』しかない。それに回転砲塔艦や飛行機械の目撃情報もある。ムーが後押ししてるだろう」

「確かに…」

「間違いなくこの海戦は皇国史上最大の海戦になるだろう。だからハーゲルトお前、ムー死ぬなよ」

ハーゲルトは今聞いた言葉を噛み締め、拳に力を入れる。

パーパルディア皇国海軍東部方面隊の戦列艦42隻は日本国中華地方上海府の都市、上海を火の海にする為、堂々と出撃していった。



中央暦1640年8月19日

パーパルディア皇国 工業都市デュロ沿岸部 約300km東の空域

そこには上に円盤を載せているような格好をした飛行機が飛んでいた。その飛行機の名は『E-3J』。アメリカのボーイング社が製造した早期警戒管制機^{A C S}である。

『E-3J』の約100km先にはアメリカ空軍の戦闘機『F-16CJ』が飛行する。『F-16CJ』のハードポイントにはAIM-9XとAIM-120Dが装着されている。

『F-16CJ』の後方50km、『E-3J』より50km前方には護衛の『F-15SE』『F-2E』とデュロ空爆の兵器『MOAB』を積んだ『C-2』輸送機3機が飛行している。

1発だけだとデュロ全域を破壊し尽くせないと判断した上層部は3発を使うことで全域を破壊できると判断した。核兵器の使用も考えたが、戦後統治を考えるとそれは難しい。

先ほどから『E-3J』のレーダーモニターには敵味方識別装置^{I F}に反応はなく、国籍不明機^{A N U}と表示されている。

友好・近隣国には作戦行動中、当該空域の侵入を控えるよう通達しており、近くの国で最も有力な航空戦力を持つ『ガハラ神国』の風龍も人工衛星により全騎把握しており、当該空域は飛行していない。

そのことからパーパルディア皇国のワイバーンと判断し、『F-16CJ』に撃墜命令を出す。

『This is Yatagarasu. Launch an attack on
 Ext to the US Air Force serval corps.
 Repeat, launch an attack 《こちら八咫鳥。アメリカ空軍
 サーバル隊に次ぐ、攻撃を開始しせよ。繰り返し、攻撃を開始せよ》』
 『From the serval to Yatagarasu, I under
 stand. Launch an attack 《サーバルより八咫鳥へ、了解。攻
 撃を開始する》』

『From serval to all servals! Show our
 skill to our longtime friends! 《サーバルよ
 り全サーバル達へ！長年の友に我々の練度を示せ！》』
 『『Yes! Sir! 《了解！》』』

『Fox-3! Fire! 《AIM-120、発射！》』

『F-16CJ』のハードポイントからAIM-120が発射され、パーパルディア皇国

のワイバーンへ向かう。

AIM-120の着弾は、デュロ空爆の先駆けとなった。



同時刻——

パーパルディア王国 デュロ防衛隊陸軍基地所属 第11竜騎士団第1飛行隊第2飛行中隊

青く、透き通るような空。そこをワイバーンロード2騎が飛行していた。彼らは第1竜騎士団第1飛行隊第2飛行中隊、通称マグネ中隊。日本軍の攻撃を警戒する為、デュロ東の海上を警戒飛行していた。

彼らは2騎一組、一騎が低空、もう一騎が高空を飛ぶ不思議な哨戒方法で海と空を監視していた。

高空を飛ぶのは若い竜騎士の『サルクル』。下を見ると中隊を指揮する『マグネ』中隊長の姿も見える。

彼は日本軍へ対抗心を燃やしていた。

「ムーの兵器を手に入れたからって調子に乗りやがって……まあ良い。俺の操縦技術で撃墜してやる」

その時、

「……ん？なんだ？あれは？」

透き通った青空に黒い点が浮かんでいた。

「!!」

常人なら反応できなかったが、竜騎士は目が良く、それが見えた。黒い点は異常な速度で彼に接近する。

本能的に危機感を感じ、手綱を動かして回避行動を取るが……

『ついでくるー!』

黒い点——いや、近くに来ると矢のように見える物体は方向を変えてくる。彼は無意識のうちに魔信の送話スイッチを握っていた。

ついてくる矢。味方の障害となるであろう物を報告しなければ。その思いは届かず、矢は彼の近くで爆発する。

パーパルディア皇国の竜騎士『サルクル』は米空軍の『F-16C』から発射されたAIM-120中距離空対空ミサイルにより撃墜された。



同時刻——

バン！と大きな音が高空から聞こえ、中隊長『マグネ』は意識を上に向ける。

『な……！サルクル！サルクル！』

咄嗟に魔信で上空を飛んでいた部下『サルクル』に声を掛けるも反応はない。

上空にはワイバーンと竜騎士の肉片がバラバラに弾けている。おそらく撃墜されたのであろう。

そして、ワイバーンの上昇限界高度をワイバーンロード、いや、ワイバーンオーバードとも比べるのは烏滸がましい速度で矢のような物がマグネの後方へ向かう。

彼は『サルクル』を撃墜したのは日本軍の攻撃と判断し魔信送話スイッチを力一杯押しつけて叫んだ。

『緊急！緊急！日本軍の攻撃だ！サルクルが撃墜された！サルクルを撃墜したものであろう物体は08分隊の方へ向かった！至急回避行動を取れ!!』

『こちら08分隊、攻撃の詳細をおくられt…ガキツ』

『!!08分隊応答せよ…応答せよ…クソっ!!』

通信中に猛烈な雑音が流れたということは…まさか…。マグネは身震いする。

彼の予想は的中した。

『アスタル！アスタル!!畜生!!08分隊！やられた！アスタルが!』

08分隊の新人竜騎士『アスタル』が3秒でやられる。未だマグネの上空では竜騎士2人を一瞬にして葬り去った矢が乱舞している。

『日本軍は高空のワイバーンを狙っている！高空のワイバーンは至急低空へ侵入せよ！』

『03分隊、り、りようk…ザザッ』

『畜生！ストールが！こつちもやられた!!』

『来るなあ…来るなあ…ヒイ!!やm…ガジャン』

『05分隊！残るは自分だけ！全騎やられ……ダン』

『クソっ!!!誰だ！ムーの飛行機械を使用しているって言ったのは！ムーどころじゃない！うわああああ!!』

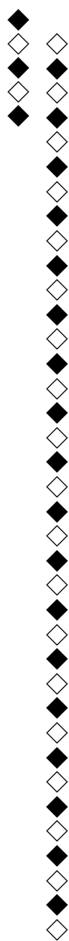
魔信からあり得ないほどの戦死報告が上がる。竜騎士とは皇軍の中で一番殉職率が低かった筈だ！なのに……なのに…

『09分隊！2騎やられた！クソオ!!』

『て…敵騎は低空の騎にも攻撃し始めた!』

「畜生！何故だあ！何故だあ!!……ちくしよおおおおお!!!」

パーパルディア王国デュロ防衛隊陸軍基地所属第1竜騎士団第1飛行隊第2飛行中隊長『マグネ』は米空軍の『F-16C』から発射されたAIM-9X近距離空対空ミサイルにより撃墜された。



数分後

パーパルディア王国東部 デュロ防衛隊 陸軍基地――

皇都エストシラントの建造物と同じく、豪華に作られたデュロ防衛隊陸軍基地デュロ防衛本部にある一室には、防空部通信司令課がある。

此処には魔力探知レーダーや、竜騎士への魔信の送受信、防空作戦系統司令部もあり、竜騎士と一緒に円滑に防衛をすることができる。

魔力探知レーダーにはデュロ上空を防衛する第1飛行隊本部、東の海上を飛行する第1飛行隊第2中隊が映っている。

西の山の先を第2飛行隊が警備しているが、山がレーダーの死角になり見えない。

通信司令課の司令台に座り魔信で交信する『グステン』はいつもの様に淡々と仕事をこなしていた。

『ローこちら第1飛行隊、デュロ上空異常無し』

『デュロ上空異常無し。了解、引き続き任務を続行せよ』

第2種戦闘配置にはなっているがいつもの日々と変わりはない。

日本とかいう国と戦争になっているが、文明圏外のワイバーンが単発攻撃を仕掛けても、此方はワイバーンロードの大量投入ができる。

本土上空という有利な防衛戦で皇国が負けることはあり得ないが、万が一デュロが攻撃された場合、パーパルディアの防空力は低いとあざ笑われる。

上司達はピリピリしているが、文明圏外国の蛮族に神聖なるパーパルディア皇国が負けることはあり得ない。彼はそう考えていた。

だがー

『ツ！ついてくる!!ガギツ!!』

室内に耳を塞ぎたくなる様な大音量で、竜騎士の叫び声が響く。魔信を通じた声であるが、彼の声には生死の危機を感じたような叫び声だった。

一瞬グステンは固まるが、直ぐに我に帰り状況確認の為に魔信送話器を手を取る。

「グステン！何が起こった!!報告せよ!!」

「(こっちも分かんねえよ!!)」

グステンは内心で愚痴を言うが魔力探知レーダー技師が直ぐに報告する。

「反応消失！マグネ中隊01分隊1騎が撃墜された模様!!」

そして次の魔信を蓋切りに司令室は騒然となる。

『緊急！緊急！日本軍の攻撃だ！サルクルが撃墜された！サルクルを撃墜したものであろう物体は08分隊の方へ向かった！至急回避行動を取れ!!』

マグネは、正体不明な矢のような物体をいち早く報告し、回避させようとしたが、遠く離れた司令室では端折った報告では解らない。

「何だ今のは!!今の報告では何が何だか分からんぞ!!何が飛んでいった!??!」
「魔力探知レーダーには反応ありません!飛行機械の可能性が大です!!」

グステンがマグネに確認の魔信を入れようとした時、直ぐに08分隊から彼に確認する為に魔信が入る。

『こちら08分隊、攻撃の詳細をおくられt…ガキツ』

『!!08分隊応答せよ…応答せよ…クソっ!!』

『アスタル!アスタル!!畜生!!08分隊!やられた!アスタルが!』

「ば…馬鹿な!!01分隊から08分隊まで相当の距離があるぞ!!」

「落ち着け!!マグネが確認した物体が08分隊を攻撃したのであればあり得ない速度があるぞ!!ムーの『マリソ』、いや神聖ミリシアル帝国の『エルペジオ』でも不可能だ!!」
「多方向からの攻撃だろう!!だとしても説明がつかん!!」

「一体何が…何が起こっているんだ!!」

司令部は騒然とするが、この間にも魔信は入り続ける、絶望的な報告しか無いが。魔力探知レーダーにも味方を示す光点が光輝いた後に消滅する。撃墜された証拠だ。

『デュロ本部から各騎！敵攻撃の詳細を送れ!!』

グステンは魔信で各騎に送信するが、無線は乱線しており一方的な報告が流れる。

『09分隊！2騎やられた！クソオ!!』

『て…敵騎は低空の騎にも攻撃し始めた!』

ついに低空を飛んでいたワイバーンにも被害が出る。

「広範囲の竜騎士が続々と…まさか…敵の大規模攻勢か?」

「しかし…敵がムーの飛行機械を使用してたとしてもワイバーンが魔信で報告することも許されずに撃墜されることはあり得ないぞ」

「そうです。敵の主力武器は機銃とか言うマスケット銃を連射できる物だったはず!ワイバーンの空戦性能では避けられない事などないはずです!」

「太陽を背にして竜騎士の目を潰して攻撃したのなら解るが、こんな一方的に攻撃されるなど…本格的攻勢と判断するべきです」

魔信を発する間もなく撃墜されたのは不可解だったが、広範囲の竜騎士が次々と撃墜された為、司令部では本格的攻撃と判断された。

ウウウウウウウウウウウ、という音と共に陸上基地全体に非常事態を知らせる警戒音が鳴り響く。

グステンは魔信のチャンネルを、デュロ全空域を哨戒中の飛行隊、待機中の飛行隊指しを出す緊急用チャンネルに切り替える。

魔信が届く範囲の全ての受信機に警戒音が流れ、その音を聞いたもの達は耳を傾ける。

『第1種戦闘配置！第1種戦闘配置！日本軍が大規模侵攻を開始した！第1飛行隊はデュロ上空の防衛に当たれ！西部訓練飛行場待機中の第3飛行隊は、至急離陸を実施せよ！！繰り返す。日本軍が大規模侵攻を開始したーーーー』

緊迫した魔信連絡が続く。

『デュロ陸軍基地全隊、防御体制に移行せよ。対地攻撃に備え、対空防衛兵器、全台稼働

開始!!デュロ防衛飛行隊の支援に当たれ!』

基地内で兵士たちが武装を始め、備え付けの対空魔導砲の他に牽引魔導砲を引っ張り出す。兵士達は始めての事態に慌てて動き回る。

パーパルディア皇国デュロ防衛隊は戦闘配備に移行した。

防衛体制を整えた基地内の兵士達は、上空を警戒監視する。大空の覇者たるワイバーンロードが離陸を開始し、堂々たる姿で飛び立つ。

デュロの市民も防衛隊が戦闘配置についていることに気が付き、何事かと騒ぐ。



同時刻——

日本国 首都東京 官邸地下 内閣危機管理センター

『日本式シチュエーションルーム』と言われる内閣危機管理センターでは総理大臣以下、内閣の重要閣僚が集まっていた。

「米空軍の『F-16CJ』から発射されたAIM-120及びAIM-9X、デュロ東側海域上空のパーパルディア王国のワイバーン全機撃墜。ミサイル全弾を撃ち尽くして帰還します」

「作戦は第2段階に移行します。『F-2E』が前に出ます」
「分かった」

総理はモニターを黙って見つめている。まるで『オサマ・ビンラディン』殺害作戦の時の様だ。

モニターには『F-2E』が前方へ進出していた。



数分後——

パーパルディア王国 工業都市デュロ 上空

第1竜騎士団第1飛行隊長『ジンス』は気を引き締めて防空任務についていた。今日は快晴で、目の良い竜騎士には絶好の天気だ。

いくら敵が魔力探知レーダーで補足できない飛行機械だとしても目で見えないわけ

がない。

マグネ中隊がやられたのは聞いた。おそらく敵は気づきにくい高度からきた為にはやられたのであろう。

なのでジンスは普段は飛行しない部分ー超高空と超低空に意識を集中させる。もしかしたら敵は気づきにくい迷彩、保護色を使用している可能性もある。

「……………ん!?」

本能的に危険を察知し、見ると前方から超高速で向かってくる飛行物体を発見した。それが敵の攻撃だと判断し、彼は部下に叫ぶ。

「避けるおおおおお!!!」

指示を出したと同時に急降下して回避に移行する。その瞬間、先程まで自分と併進していた竜騎士が爆発する。

4発ほど飛来してきた矢のような物体は正確に竜騎士4騎を吹き飛ばした。

矢の爆発はいずれも導力火炎弾の威力を超えていて、ワイバーンを竜騎士ごと、この

世界の存在証明を無くす。

不気味な爆発音がデユロ上空に木霊し、住民や建造物に竜騎士やワイバーンの肉片が雨のように降り注ぐ。

『なんだ!? 一体何が起こっているんだ!!』

竜騎士達は状況が把握できずに狼狽する。

『ジンス隊長! あつちです! 敵騎が来ます!』

部下の報告を聞き、部下の指先の方角に目をやると、2騎の飛行機械と思われる機体が超高速で此方に向かってきていた。

「たったの2騎だと! 舐めやがって!!」

ジンスは導力火炎弾の準備をワイバーンに命令する。敵は未だ射程距離の外側にいるが、烏澁がましいことに敵騎の攻撃可能距離はワイバーンよりも広く、何か牽制を行

わなければならぬ。

隊員達が何も指示されていないのにも関わらず、ワイバーン各騎は導力火炎弾の発射体制になる。ワイバーンの口に火球が灯る。

『発射！』

火球が一定の大きさになった時、敵に向けて導力火炎弾を発射する。
発射された火炎弾は美しく幻想的だ。

『――敵騎!!何かを発射!!』

日本国航空自衛隊『F-2E ファイナル・ゼロ』2機も04式空対空誘導弾をパールディア皇国のワイバーンに向けて発射する。

04式空対空誘導弾はワイバーンを4騎撃墜するが、一方ワイバーンの導力火炎弾は虚空に消える。

続いて『F-2E』は夥しい数の光弾を発射し、2騎が身体中に穴を開けられ墜落する。

その後、『F-2E』は雷鳴のような音を出しながら、ワイバーンの上昇限界高度の遙か先まで上昇し、空の彼方へ消える。

「何で速度だ！」

「あれはムーなんかじゃ無いぞ、神聖ミリシアルか、古の魔法帝国並みだ……！」

若い竜騎士は上昇し、追いつこうとするが、まるで赤子が大人のボディビル大会に出るが如き。たったの2騎に10騎がやられ、ジンスはやり場のない怒りを手にし、腿を殴る。

おそらくマグネ中隊はあの御伽噺のような飛行機械に一瞬でやられたのであろう。

どうしようもないほど兵器の性能差に絶望する竜騎士達。だが、戦場では考える時間などない。

『ツツ！飛行物体多数接近!!!』

部下が絶叫し、ジンスが左の空を見た瞬間、飛行物体を目視する暇無く竜騎士達が次々と爆発する。

「俺は何と！何と戦っているんだあああああ!!!」

その時、目の端を閃光が覆い、視界が反転する。そのままジンスの意識は戻ることはなかった。

パーパルディア王国デュロ防衛隊、第11竜騎士団第1飛行隊長『ジンス』は、相棒のワイバーンと共に世界から消えた。



数分後――

デュロ防衛隊 陸軍基地

最初にやってきた、猛烈な速度の敵騎2騎は、ワイバーンロード10騎を瞬く間に撃墜、途轍もない上昇力で空へ消えた。

その後、目視不可能の距離から謎の攻撃が第1飛行隊を襲い、当該飛行隊は全滅。飛来した敵機は確認できただけでも6騎。

西の山で待機中であつた第2飛行隊が直ぐに駆けつけたが、敵騎は去つた後だった。

敵機には、日本の国旗である赤い丸が描かれており、つまり敵機は現在戦争状態になっている『日本国』所属であることがわかる。

基地上層部は今後の日本国の本格侵攻について緊急的に会議を開き、議論していた。

「あれが日本軍か？あれがムーの兵器だなんて烏滸がましい、軍司令部はお粗末な嘘を吐いたな」

デュロ防衛隊司令の『ストリーム』は顔を引き攣らせている。

「あれほど高速の飛行機械……ムー最新鋭機の『マリン』の数倍、いや数百倍脅威です。我々が戦っているのは列強を超え、かの『古の魔法帝国』と戦っていると認識した方が良いでしょう」

多くの部下を失った竜騎士長『ガウス』の表情は苦悶に満ちている。悲壮感が漂う緊急会議で、陸将『ブレム』は冷静に日本軍の行動を分析する。

「司令、この後本格的な攻撃が行われるでしょう。何故なら皇都防衛隊が受けた対地攻

撃が行われてません。竜騎士を撃墜したのは制空権を確保するためかと……」

「本格的な攻撃が近いという事か？」

「必ずあります、これは断言できます。また、魔導士達の『魔力増幅型対空火炎弾』は空を仰ぐばかりで、敵騎に対しては全くの無力です。そこで、『対空魔光砲』の使用許可をお願いします」

「た…対空魔光砲を使うだ…!!」

『対空魔光砲』とは、誰もが認める世界最強の国『神聖ミリシアル帝国』。その軍で正式採用されている対空兵器である。

帝国の技術に少しでも近づく為、また、現皇帝『ルディアス』が唱える世界平和で戦うであろう帝国の兵器を知る為に、秘密裏に密輸され、皇国最高峰の頭脳を持つ研究者が多数いるこのデュロに運ばれたのだ。

これまで長い調査が行われ、複製も試したが、魔術回路があまりにも複雑で、複製はおろか解析も難航していた。検証・解析用なので一門しかないが、試験でワイバーンロードに対して圧倒的な性能を見せつけていた。

皮肉なことにデュロにある兵器の中で一番高性能な物である。

「…ぬう…仕方あるまい。このまま何もできず陸軍基地が灰燼に帰すよりかは良かろう…あれを使えば、皇国も凄まじい兵器を使用していると敵も警戒するであろう」

ストリームはブレムに『対空魔光砲』の使用許可を認めた。



数分後——

パールディア皇国東部 工業都市デユロ

デユロの市民の多くは、先ほどの精鋭防衛隊竜騎士団を死に追いやった超高速飛行物体に恐怖を持ち、今度はこの都市が狙われるのではないかと戦々恐々としていた。

今更どこに逃げてても同じだ。敵はどこに逃げてても必ず見つけ出し、我々を殺すに違いない。

その時、上空から不気味な音が聞こえ始めた。市民らは上空を見渡す。

「おい！おい！…あれを見ろ!!」

「な…何だあれは?!?!」

まるで高名な画家が書いたような空に、尾を引いた物がデュロに向かってくる。小さい物体の中央には灰色の大型の物体が君臨し、大きな音を立てている。

ある者は『どうせ死ぬなら、愛する家族、愛しき家の中で』とドアを閉めて家族で抱え合い、ある者は不屈と憎悪の表情で、空を見上げていた。



同時刻

デュロ工業地区 中央公園一帯

デュロ工業地区の、ある研究施設から引つ張り出されたそれは広い公園の真ん中に設置されていた。

第3文明圏には無いはずの兵器『対空魔光砲』。

陸軍の新兵器研究開発部に所属する開発主任『ハルカス』は、発射位置固定、魔石接続作業、エネルギー充電作業を監督しながら、デュロに侵入してくる敵を睨みつけていた。

「かなりの高高度だな…しかもオーバード種よりもやたら速くないか？あの巨大で

あの速度…是非鹵獲して分解してみたいが…難しいだろうな」

ハルカスの忌々しそうな呟きに部下が答える。

「この兵器ならあの高さで速度でも対応できます!! 奴らの度肝を抜いてやりましょう!!」

「だと良いがな…しかし…」

対空魔光砲に接続された人間5人入りそうな鉄の筐体6つ、モニターとして並ぶ魔導圧計や水晶版を眺め、ハルカスは苛立ちを隠せない。

「攻撃準備の時点からすぐに準備したのに、未だ魔力充電が終わらないのか?!?! 一体どんなだけの魔力を使うんだ!?! この兵器は!?!」

「ミリシアル技術者も「魔力装填はすぐ終わる」と言っていたのですが…さすが世界最強・最先端の帝国ですね…」

皇国は第3文明圏では最強ではあるが、技術はミリシアルまで届きそうに無い。国に

数人しかいない、大魔導師の称号を持つだけに、認めざるを得なかった。

「エネルギー充電… 98%…99%…100%!!エネルギー充電完了!!」

空に向かって突き出された筒状の兵器。発射口が仄かに赤く光り、球状の小さな粒子が発射口に吸い込まれてゆく。

「属性比率、雷14、風65、炎21、呪文高速詠唱開始」

人には聞き取りにくいほどの速度で自動的に詠唱が開始され、人間が聴くと不快音となる声流れる。

「詠唱完了!連射モード切り替え完了!対空魔導砲、発射準備完了!」

ハルカスは望遠照準機を通じて空を見ると、十字マークの真ん中に敵が来るよう調整していると、見たこともないような形の飛行機械が画面一杯に入る。

大型の飛行機械を狙いたいところだが、射程が足りない為、小さめの飛行機械に照準

を合わせる。

「皇国は蹂躪させん!!」

彼は敵機に敵意を剥き出しにし、発射ボタンを強く押し込んだ。

光の弾が地上から超高速で、連続で上空に発射される。それはまるで地上から天へ光が昇るような光景で、美しかった。



同時刻——

パーパルディア皇国東側 工業都市デユロ上空

パーパルディア皇国の都市デユロ。そこを攻撃せんとする航空自衛隊の編隊。その最後尾を飛行する『A-10C』パイロットの『長田達也』3等空佐はデユロを見ている最中、地上から光が飛び出したのを目にした。

地上からの光、つまり——対空砲火。彼は直ぐに無線を入れる。

『地上に敵の対空兵器を確認！繰り返す！敵の対空兵器を確認！各機、警戒されたし！』

その後、長田はサーマルで敵の対空砲を確認しようとするが、一步遅く、横にいた『F-15SE』の真横を緑色の光弾が掠め、機体がブレる。

「不味い！」

そう叫ぶと同時に『F-15SE』の下部に光弾が直撃し、左のエンジンから炎と煙が出る。

「しまった！」

『F-15SE』のパイロットはそう叫ぶが、機体を制御する。幾つもの光弾に内装されていた爆裂魔法は、光弾分の爆発を生んだ。

機体後部左側の1番エンジンから炎と黒煙が噴き出すが、パイロットはエンジンを停止させ、炎を鎮火させる。

『こちらフェロン2、一番エンジン被弾、出力75%に低下。燃料漏れは確認できるか

『？』

長田は『F-15SE』の機体を見て、燃料漏れがあるかを確認する。エンジンから薄らと黒煙は確認できるが、燃料が漏れているような跡は確認できていない。

『タイガー1よりフェロン2へ、燃料漏れは確認できない。だが、大事を取り北京へ帰還せよ』

『フェロン2、了解』

『F-15SE』は反転し、北京基地へ帰還する航路を取る。

『タイガー1よりサンダーバード1へ、敵対空砲を確認。破壊する』

『サンダーバード1からタイガー1、やってくれ』

『C-2』サンダーバード1に乗っている司令が許可を出し、長田が乗る『A-10C』は降下する。

「…生まれ変わっても『A-10』のGAU-8だけは喰らいたく無いな」

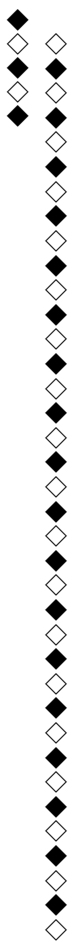
「そうですね」

司令の呟きに『C—2』のパイロットが同調する。

『敵対空砲沈黙状態、再装填中かと思われる。攻撃を開始する、FOX—3!!』

長田はスティックのボタンを押して、GBU—8を射撃する。毎分3、900発の機関砲が咆哮し、最初の1秒で50発を発射し、その後は毎秒65発となる。

直後、パーパルディアの秘密兵器『対空魔光砲』は『A—10C』のGAU—8から発射された30mm機関砲弾によって破壊され、開発主任『ハルカス』も対空魔導砲が撃破された時に出る色取り取りの爆発と一緒に死亡した。



数分後——

デュロ上空 航空自衛隊第6戦術輸送隊所属『C—2』輸送機 貨物室

『C—2』輸送機後部の貨物室では、ロードマスター空中輸送員がある物をじっくりと見ていた。

「うゝむ、でかいな」

彼の目の前の物体は、『MOAB』^{GBU-43/B}——『Massive Ordnance Air Blast bomb』。通常兵器としては史上最大の破壊力を持つとされる爆弾である。

あまりの破壊力から航空自衛隊内部では『全ての爆弾の母』や『バスターコール』『崩星○哮喘』『M8○光線』とも呼ばれている。

長さ約9.1 m、直径 1.03 m、重さ約9,800 kg、炸薬量8,482 kgという超大型爆弾。これを3発も落とすのだ。デユロは確実に灰塵になるだろう、敵が哀れに見える。

だが、我々は国民を殺された。正義は我々にあり、民意もそれを推している。

『残り1分で投下。』^{ロイドマスタ} 空中輸送員は投下準備を『

了解』

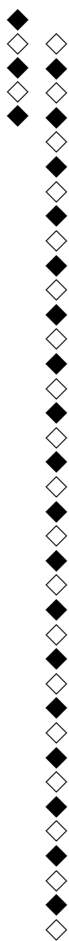
^{ロイドマスタ} 空中輸送員は最後の点検を終える。そうしてるうちに後部カーゴドアが開き、大空が見

える。

『投下まで10……9……5……4……3……2……1……0!!投下!投下!投下!』

MOABから小さなドラッグシュートが投下された後、大きなドラッグシュートが開き、MOABをパレットごと投下させる。

『全ての爆弾の母』は自分の使命に応えるべく、GPS誘導により展開した格子状のフィンドで方向を制御して降下してゆく。



同時刻——

パーパルディア王国東側 工業都市デユロ 陸軍基地 通信室

『対空魔光砲!光弾を受け破壊!!』

『イルカス中隊全滅!イルカス大佐も戦死!』

『敵巨大機侵入!』

通信室で通信長のミルネスは狼狽していた。頼みの綱の対空魔導砲は撃破され、竜騎士隊は全滅。打つ手もない。

その時、屋上から見ていた部下が大声を上げる。

「敵が何かを投下!!」

「なんだあ!」

屋上に行き、双眼鏡で覗くと、敵大型機が転進していた。

「対空魔光砲を警戒したか?」

「いえ、何かを投下しました!」

よく見ると上空に布のような物に繋がれた板があり、そこに円柱状の物体が乗せてあった。それが3つゆっくり降下している。

「?なんだ?」

首を捻っていると、板から円柱状の物体が落下し、こちらに向かつて来る。ミルネスはそれに本能的な恐怖を感じ、後ずさる。

部下も同様に後ずさっていた。彼は感情のままに大声を上げる。

「退避いいい!!逃げろおおおお!!」

直ぐ様階段を降りて地上へ向かう。その時、窓を見ると円柱状の物体が地上へ落下するのが見えた。

「つつ!!」

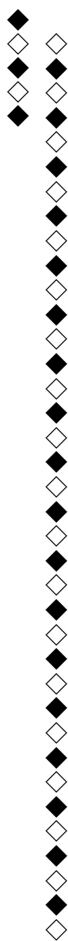
ミルネスは防御体勢を取る。普通の爆弾であつたら有効だが、この母親には効かない。彼が見た最後の光景は、壁ごと吹き飛ばされる自分と部下達であつた。

パーパルディア皇国東側の工業都市『デュロ』は日本国航空自衛隊『C-2』輸送機から投下された『MOAB』3発によって全域が壊滅。陸軍基地・工業地区・住宅地区、全てが灰燼と化した。

だが、投下前に『F-15SE』が被弾。対空砲は『A-10』が撃破したが、敵が

対空砲を持っている可能性が危惧され、『オペレーション・フリーダム』中に計画されていたパールディア皇国都市への爆撃は、高高度から無誘導爆弾による絨毯爆撃に切り替えられる事になった。

皮肉にもブレムとストリームが皇国の為、と決断した事は、余計にパールディアの被害を多くすることになった。



同日午後――

パールディア皇国 皇都エストシラント 皇城

緊急御前会議は、一時の休憩を挟み、夕方である現在も続けられていた。会議の大きな流れとしては、日本に対して徹底抗戦する方向で話が進んでいる。

第3外務局長カイオスは、会議の進行に焦りを持っていた……結局このままでは皇国は滅んでしまう。

これほどまでの国力を誇り、幾多の国が存在するこの世界で5本の指に入った列強パールディア皇国が滅ぼされてしまう。

カイオスはこの会議で、命をかけたある事を決意するのだった。

「……であり、この国は危機的状況下にあり、経済担当局による大規模な支出を行い、工業都市デユロで徹底した兵器の量産を実行」

「さらに属領からの徴兵をもつて再軍備を実施、今までの皇国主力軍の3倍の規模を作り出し、『量』をもつて、日本の首都沖合いへ夜のうちに大船団を送り込み、奴らの首都を火の海にします」

「このような方向性で行きたいと思いますが、皇帝陛下、よろしいでしょうか？」

軍の最高司令アルデが、再建計画を出している。日本が何もしてこない事を前提とした完全なる机上の空論に、カイオスは頭が痛くなる。

会議の席では、皆自信を取り戻したかのような顔をしているが、カイオスには現実から目を背け、馬鹿が雁首を並べているようにしか見えない。

急に、軍の最高司令アルデに幹部が耳打ちする。幹部の顔は焦りに満ち、額からは汗が流れ、顔は青い。

「？」

皇帝が疑問を持ち、アルデに問う。

「どうしたアルデ、何があった？」

アルデの額からも汗が落ち、手が震えている。答えに窮するアルデ。

「どうした？早く申せ」

「……皇国の大規模工業地帯デュロが、日本軍の空襲を受け、全滅いたしました。エストシラントからは黒い巨大な煙がディロから見え、ワイバーン隊が確認を行ったところ、デュロ全体は巨大な爆発があったように窪んでいると……」

「な……なに!!！」

「そ……そんな!!！」

「な……」

衝撃のあまり、沈黙する会議室、しんとしたその場所に音をたて、別の幹部が血相を変え、会議室内に飛び込んでくる。

「今度はいったいなんだ!!!もうアルデに耳打ちしなくて良い、お前がこの場で申せ!!!」

皇帝は軍幹部を怒鳴りつける。

「は……はっ!!!」

軍の幹部は皇帝に平伏し、報告を始める。

「属領の『クーズ』、『マルタ』、『アルーク』が反乱いたしました。既に同3箇所の統治機構は壊滅、反乱軍の手に落ちました」

衝撃……幹部はさらに続ける。

「今申し上げた3つの属領は、すでに落ちたもののみです。現在15箇所の他の属領が反乱を起こし、統治機構は劣勢です」

話は続く。

「アルタラス王国のルミエス女王が、皇国の属領に反乱を起こすよう魔信で呼びかけています!! 今回の反乱はその呼びかけに呼応したものだと思われます」

「今後さらに属領が落ちれば、加速的に他の属領も反乱してくる事が予想されます!!!」

絶句する幹部たち……。

パーパルディア皇国は『恐怖』により他の国を属領とし、支配し、富を吸い上げ続けて来た。しかし、その恐怖を与えるための『力』が、日本国によって碎かれてしまった。『恐怖』は今度は彼らに帰ってくる。皇都の防衛を手放し、属領軍を返す事も出来るが、その方法だと皇都が丸裸になってしまう。

それは出来ない。

「お……おのれえ!!!」

ルディアスはもはや怒りを通り越した言葉を発することしか出来ない。日本対策会

議は深夜まで続いた。

第10話 空の神兵

中央暦1940年8月20日――

北京府より250km北側海域 水深20mの地点

たいげい型原子力潜水艦3番艦『じんげい』は、音響測定艦の過労死寸前の測定によって近海だけが海域の海底、海流、水温とかの詳細の海図が出来た為、試験航海をしてきた。

航行中、試しにアクティブソナーを発信すると、40隻以上の反応があったので、『じんげい』艦長『野田俊之』一等海佐は潜望鏡深度につくよう命令した。

「メインタンク、ブロー。潜望鏡深度につけ」

「了解、メインタンクブロー、潜望鏡深度に付きます」

メインタンクが動き、船体が浮上する。光学マストが海上に出されて、メインモニターに画像が映る。そこには、約30隻以上の戦列艦の姿があった。

「どこの国だ？」

「モニター、ズームします」

モニターが拡大され、戦列艦のメインマスト頂上に付いた国旗が見える。地龍と呼ばれる竜が炎を上げ、上を向き、上の真ん中に城のようなものが書かれた国旗。

資料で見たことがあるこの国旗の国は——『パーパルディア皇国』だ。

「パーパルディアか、帆船だから推進音がなかったのか」

「至急、本部へ打電『我、北京北部250kmの地点で敵船発見、指示を請う。1321』」

「了解、『我、北京北部250kmの地点で敵船団約40隻を発見、指示を請う。132

1』、本部へ送ります」

数分後、『じんげい』が所属する第2艦隊司令部から通信が入る。

「司令部より下令、『敵船団は先日報告されたデュロ艦隊と思われる。陸上自衛隊第12地対艦誘導弾連隊と本艦隊第36フリゲート隊が対応する。貴艦は帰港せよ』とのこと

です」

「了解、本艦は魚雷は殆どないからな。深度200に付け！」

「はっ！」

『じんげい』は推進200mまで潜航し、海上自衛隊北京基地へと戻った。



『じんげい』帰港より数分後——

日本国中華地方河北県奏皇岛市

陸上自衛隊南部方面隊南部方面特科団第12地対艦ミサイル連隊は88式地対艦誘導弾システムを設置していた。奏皇岛市最大の山の棧東山の約8合目付近の位置に、捜索標定レーダーが設置されていた。

すでに部隊から北の方角約250kmの位置からこちらへ向かっている敵艦については海自の『P-3C』哨戒機とリンクしているため、完全に捕捉している。山の中腹には中継装置、射撃指揮装置、ミサイル発射機搭載車4両、弾薬運搬車4両がすでに配置にしていた。

88式地対艦誘導弾は水平線外射撃が可能な150kmを超える射程と、対艦ミサイ

ルとしては本システムだけが持つ地形回避飛行能力を持った地对艦ミサイルである。

攻める側からすると非常にやっかいな兵器であり、たとえば自衛隊に敵対する艦が射程内に侵入してくると、内陸数百キロまで面としての領域を確保しない限り、どこからともなく大威力のミサイルが飛んでくる。

転移前の戦争では、敵艦船を徹底的に沈め、2014年の日中尖閣紛争では、多数の敵艦を撃破して、各国海軍との演習では、海面ストレスをどっから飛んでくるこのミサイルに各国海軍は戦々恐々としていた。

「発射準備完了しました」

「わかった。やってくれ」

「はっ!!、目標、敵艦船」

「てーっーっ!!!」

88式地对艦誘導弾24発が山の中腹から発射される。個体ロケットブースターで十分に加速された地对艦誘導弾は、ターボジェットエンジンに推進法式が切り替わる。

誘導弾はあらかじめプログラミングされたコースを進み、海上へ出た。

地を這うように進む88式地对艦誘導弾は、目標に向かって突き進むのだった。

進11カ国会議』が行われた際、担当艦の航海長として参加したが、その時見たムーの機械文明艦隊は凄かった。航空機もワイバーンロードよりも早かった。

他の国々が『魔法文明』の中、『機械文明』により、第2文明圏の覇者になり、列強第2位に付く強国である。

「確かに、ムーの戦艦を奴らが使ってくるなら戦力の面では難しいでしょうが、海戦では人員の練度で戦力差を覆すことができます。日本の軍人は最低でも1〜2年しか使っていないと思いますが、我々は10年近くもここで戦っています。練度でなら覆すことができるでしょう」

副官は淡々と話す。現場から叩き上げてこの地位まで上り詰めた人だ。彼が言うならそうであろう。

「そうか…」

艦隊は強い風を受け、進む。自分達に脅威が迫ってきていると知らずに…





数分後――

パーパルディア皇国海軍・監査軍混成日本懲罰艦隊 戦列艦『ケイトヤル』
皇国海軍・監査軍混成日本懲罰艦隊『ケイトヤル』の見張員『ウエルネス』は東の方
角の低空から超高速で自分達の艦隊へ向かってくる矢の様なものを発見した。

「なんだ？」

そう言った直後、矢は少しだけ上昇し、ムーライトの右側の艦、『ラルバイト』に突き
刺さり、巨大な爆発を生む。

「う、おおおおおお
!!??」

ウエルネスは叫び声を上げる。ラルバイトが爆沈した周辺には破片と人だった一部
しか無い。

「な！何が!!」

『ラルバイト』！轟沈!!』

艦橋に大声で叫び、ラルバイトが沈んだことを伝える。ふと、また東海域を見つめると、無数の矢が飛来してくるのが見える。

『!!敵の攻撃多数飛来!!』

「何だと！面舵いっぱい！いそげええええええ!!」

ケイトヤル艦長の指示も虚しく、右舷中央部に88式地对艦誘導弾が突き刺さる。誘導弾はその威力を発揮し、ケイトヤルは短時間で海の藻屑になる。

『ケイトヤル』『ラルバイト』など、24隻は敵を見る暇もなく、陸上自衛隊第12地对艦ミサイル連隊の88式地对艦誘導弾の攻撃より沈没したのであった。



同時刻——

パーパルディア皇国海軍・監査軍混成日本懲罰艦隊旗艦『ムーライト』艦橋

艦橋でもムーライト艦長兼懲罰艦隊司令官、サクシードはウエルネスと同じく、地対艦誘導弾を目撃していた。彼の額に汗が垂れる。

「な…なんだ？今のは…？」

「ほ、報告します！」

通信兵がサクシードら懲罰艦隊幹部に先程の超高速飛行物体による被害を伝える。

「我が艦隊は42隻中、『ケイトヤル』『ラルバイト』『ウオー克蘭ド』ら24隻が沈没！生存者は残り少なく、艦隊は半数以上の被害を出しました！！」

「な…何だと…半数以上が…」

サクシードは被害の多さに驚愕する。幹部も相当騒つく。

「24隻がやられたとなれば、当初の作戦は無理だ!!この後海軍も来るだろう！無駄な被害を出すよりかは、一旦デユロへ帰り、体制を整えてから出港した方が良い！」

「貴様！それでも皇国海軍軍人か！この作戦は皇帝陛下が了承し、陛下の注目度も大き

い！そんな作戦で、おめおめと逃げ帰りました。となど言う気か!!」

「残りの艦船で敵地を補足するなど無理だ!!敵はムーの機械艦艇を保有しているのだぞ!!それならば貴官だけで突撃したらどうだ!!皇帝陛下の耳にもきつと入るぞ!無駄な戦死をした大馬鹿者としてな!!」

「何だと!!貴様!!そこに直れ!!この回転式拳銃でその額かち割ってやるわあ!!!」

幹部の一員がムーから輸入したコルトM1848のようなりボルバーを懐から出した時、それまで黙って見ていた副官が吼える。

「貴様ら一旦落ち着かんかああああ!!!」

隣の艦まで届きそうな大声が響き渡り、幹部は一瞬にして黙る。

「いいか、先ほども司令に申し上げたが、海戦では練度がものを言う!!日本海軍がムーの艦艇を使用しても、我が艦隊の練度であつたら必ず勝機はある!!だから、くだらない事などするでは無い!」

「……チッ」

拳銃を抜いていた幹部は舌打ちをしてからリボルバーをしまう。

「ありがとう、助かったよ」

「いいえ、当然のことをしたばかりです」

その時、マストの先で監視をしていた見張員が大声を上げる。

「敵艦発見!! 国籍を日本国と確認! 距離、我が艦隊の進路方向約19km!! 船数3! 大きさは100mを超える!!」

「! ついにお出ましか!! 総員第1種戦闘配置!!」

サクシードの命令に慌てて兵士達が戦闘の準備を進める。

「しかし3隻とは…我々を見くびったか?」

「もしかしたらあまりムーから艦艇を輸入できていないのかも知れませんが… 私達には都合ですが…」

サクシードと副官の会話を予想に、艦隊は『風神の涙』を最大限使い、敵艦隊との距離を詰める。



同時刻——

海上自衛隊第2艦隊第36フリゲート隊旗艦『さつき』戦艦指揮所 C I C

むつき型フリゲート4番艦さつきのC I Cでは第36フリゲート隊司令『安元永久』

1等海佐と、さつき艦長『立川順平』2等海佐が話をしていた。

戦艦指揮所 C I Cのメインモニターには艦橋横のカメラから撮られた敵パールディア艦隊が映

し出されている。

「なんか映画の撮影みたいですね」

率直な感想を立川2佐が漏らす。安元司令は戦艦配置が下礼されたため、被った鉄帽を一回外して被りながら答える。

「そうだな、だが戦列艦と見くびってはいけない。我々の装甲は無いに等しいし、旧式の大砲でも死傷力は十分だ」

「そのために私達がここにいます。日本の地には髪一本でも落としてはしません」

安元司令はすぐに立川2佐に命令する。

『ゆうぎり』『あまぎり』に砲戦準備を伝える。勿論本艦もだ」

「了解、2艦に通達します。砲術長、聞いたか？ 砲戦準備！」

「分かりました！ 砲戦準備急げ！ 目標、敵艦！」

さつきの54口径127mm単装速射砲と、ゆうぎりとあまぎりの62口径76mm単装速射砲が動き、敵パーパルディア艦隊に照準を合わせる。

「目標パーパルディア艦隊、距離19km、弾種榴弾、主砲砲撃射線確保！」

「主砲、撃ちいく方、始め！」

「撃ち方始め！ てえ!!」

3発の127mmと76mmの砲弾はパーパルディア艦隊へ向かう。

「命中!」

「よし。砲術長、良いぞ!」

「ありがとうございます!」

「続いて連射にて撃て! 敵に敗走の機会を与えるな!」

「了解、連射に切り替えます」

パネルを制御し、単射から連射に切り替える。

「撃ちます!」

「やってやれ!」

「はっ!」

45発／分を誇る主砲が唸り、次々とパーパルディア艦隊を撃破する。





数分後――

パーパルディア皇国海軍・監査軍混成日本懲罰艦隊旗艦『ムーライト』最上甲板

最上甲板で作業をしていたハーゲルトは戦慄していた。たつた一発で対魔弾鉄鋼式装甲を貫通する相手の魔導砲は艦隊の全員を恐怖に陥れていた。

司令から敵艦を仕留めるよう命令されたが、側面の魔導砲を打とうと転舵すると真つ先に狙われ、撃沈される。

まるで意志を持っているかのように飛来する砲弾により、次々と攻撃を仕掛けようとする艦から沈没する。

レンジ先輩は『日本国を文明圏外国と侮るな、ムーの兵器を使っている可能性がある』と言っていたが、ムーの戦艦でもこんな芸当の射撃は不可能だ。

皇国は今までに数えきれないほどの蛮族を滅ぼしてきた。魔導戦列艦の主力兵装の魔導砲は、未だに旧式の矢避けの盾やバリスタを使う文明圏外国海軍に圧勝してきた。

その戦力差は圧倒的で、味方に一個の被害も出さず、敵艦を撃沈した後に海上を漂う敵兵をも殺してきた。

今でも、あの殺した敵の顔を思い出すが、今回は自分があの兵士の役だ。弱い国に生まれてきたのだから殺されて当然だと思ってきたが、今度は自分が弱い国になるとは…

殺す側が殺される側になった恐怖。

敵は命中精度、速度でも皇国軍戦列艦に優っており、攻撃を加えるどころか、照準にも入らない。

その時、近くの艦が爆発四散する。

ハーゲルトの脳内に一つの結論が生み出される。列強たる、世界に名だたるパーパルディア皇国の戦列艦が一方的に3隻の艦にやられる。

こんなことができる国はただ一つ——御伽噺話上であった、世界最悪・最強の国家『ラヴァーナナル帝国古の魔法帝国』』

「おい！ハーゲルト！何突っ立っている！動けるなら応急処置を手伝え!!」

「…魔法帝国」

「は？何言ってるんだ！立て！」

「こんなことが出来るのは古の魔法帝国ラヴァーナナル帝国しか居ない!!あの帝国が復活したに違いない!!」

「!!???」
「頭狂っちゃったのか!!良いからこっち来い!!応急処置の手が足りねえんだよ!!」

ハーゲルトは間違った結論を出す。その時、悪魔——悪魔の艦の魔導砲が此方を向

中華地方で2番目、日本国内でも4番目の大きさを誇る鞍山基地。

その基地には、航空自衛隊とNWT0の輸送機が並び、輸送機の機内には各国の空挺部隊が待機している。

C-130やC-2、エアバス A400M、C-5の姿も見える。その中でも一際異彩を放っているのは、世界最大の飛行機『An-225』の日本版、『C-225』である。

この機体は、ソ連崩壊時に放置されていた未完成の2号機とライセンスを日本が高値で買いたいとウクライナ政府に申し出があり、とにかく経済を回したい政府が承認して、日本で完成させた輸送機である。

An-225の近代化・改良型であり、戦略輸送機型で、後部にカーゴドアが設置されている。余談だが、ウクライナはこの出来事により経済が救われ、親日国となった。

その巨人機の中には、陸上自衛隊アジア・太平洋方面軍の空挺部隊、アジア・太平洋空挺軍第1空挺師団第1空挺団らが待機していた。

団と言っても大隊規模の勢力を誇る精鋭部隊である。機体側面と中央部に設置されたシートには空挺団員が座ったり、寝ていたりする。

空挺団員2人が話をしていった。

「離陸が02:00、降下地点到達が03:00、到着後即降下だ。忙しいな」

「そういや、デユロでF-15が対空砲火食らったらしい、もし対空砲があったらこんなデカブツ、即オジャンだぜ」

「安心しろ、軽空母艦載機が先に防御施設を破壊してくれるそうだ」

2人が横を見ると、第1空挺団の副団長、『中村大輔』2等陸佐が立っていた。

「中村副団長!!」

空挺団員は敬礼しようとするが、中村は手で彼らの敬礼を妨げる。

「ああ、敬礼はしなくて良いぞ。あと6時間もある、ゆっくり寝とけ」

「はっ!」

「副団長、気掛かりはありませんか?」

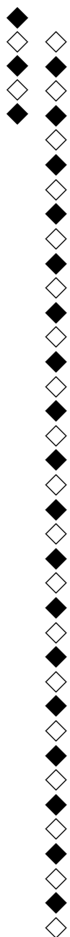
「無い、自分の力を信じる。相手は俺達より文明レベルが下だ。精鋭の空挺軍が勝たなくてどうする」

「はっ…頼もしいな」

「ああ、流石元ゼロ・フォースだぜ」

中村は元特殊戦零分遣隊であり、空挺団員は惚れ惚れとする。

6時間後、陸自やNWT0の空挺部隊を乗せた輸送機は次々と飛び立っていった。



中央暦1640年8月23日 午前2:50分――

元ルーアルス共和国領 スミット 廃墟

元ルーアルス共和国。この国はパーパルディア皇国が最初に獲得した属領で、そのためまだ属領統治軍が占領していた。

その地には陸上自衛隊陸上自衛隊特殊作戦軍団第1特殊作戦部隊第1特殊作戦群1個大隊が敵地对空火炮搜索・敵兵所在確認の潜入をしていた。

第1特殊作戦群第1狙撃班第1組に所属する『榊原康雄』2等陸曹は、相棒兼観測手の『野上拓真』陸士長と共に狙撃位置についていた。

『野上拓真』陸士長と共に狙撃位置についていた。サプレッサーが装着されているM24対人狙撃銃のマウントには、夜間暗示装置が付いている。スコープを視界には、スミット陸軍基地の監視塔に立つ敵兵が照準に収められている。

「狙撃予定時刻まで10……9……8……7……」

野上が号令を掛け、榊原は息を止め、ゆっくりと引き金に指を掛ける。

「3……2……1……今^{n o w}」

パシユ、という音と共に敵兵の頭が弾ける。また、コッキングをし、万が一、敵兵が生きている事態に備える。だが、7.62mmもの弾丸はヘルメットをも貫く。

装着していなかったパーパルディア兵の頭はザクロの様に弾け、野上は見るのがナイトヴィジョンで良かったと安心した。

その時、野上の耳に装着してあった無線機に通信が入り、榊原に報告する。

「2曹、第1狙撃班全員が敵兵排除を確認したとのことですよ」

「そうか、司令部に連絡。『時は来れり』以上」

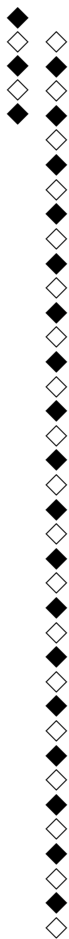
「了解、『時は来れり』送信します」

数分後、廃墟に陣を構えている司令部の無線機に連絡が入り、通信員が第1特殊作戦群長『江島明弘』1等陸佐に報告する。

「第1狙撃班より電報、『時は来れり』との事です」

「そうか、上空空挺部隊に連絡。『下準備は整った、調理を開始せよ。敵対空火砲無し』」
 「待機中の第1・2中隊にも送れ、『空挺部隊、調理を開始せり。皿の盛り付けを頼む』以上！」

「了解、空挺部隊、第1・2中隊に通信します！」



数分後――

上空4700m 陸上自衛隊・NWT0合同空挺部隊

空挺部隊を乗せた輸送機はまもなく降下地点に到達しようとしていた。輸送機の近くには、護衛の『F-15J改』が飛行している。

各輸送機の後部カーゴドアが開き、空挺団員は自由降下の準備を整える。

彼らの目標は、敵の陽動のための敵陸軍基地制圧。制圧後の後続の輸送機による機甲部隊と物資の投下までに塹壕を築き、とてつもない数の敵兵の攻撃を小銃一本で防衛し

なければならぬ。

時間との勝負。降下してから最速で制圧し、物資投下を早め、機甲部隊で戦線を開き、敵の本格攻撃だと思わせる。本命は上陸部隊だ。

「前方スミッド陸軍基地、距離20km！」

「目標地点到達！」

「良いか！全て自分の経験通りにやれ！一刻も早く基地を制圧！物資を受け入れる準備を施せ！」

「！！おっ！！！！」

「アルターエゴ一番機、コースよし、コースよし、用意、用意、降下！降下！降下！降下！」

巨大な機体から空挺団員が飛び降りる。中村も第1空挺団全員の降下を確認し、カーゴドアを蹴って空中に飛び出す。

数十m自由落下した後、紐を引っ張り、背中 of 自由降下傘を出す。

個人暗視装置 JGVSV15を付けているが、降下中は着けないため、高度などが把握しづらい。

腕に付けた計器のみが頼りだ。

陸軍基地脇の大きな広場に五点接地をして着陸後、すぐにパラシュートを畳む。畳むと、暗視装置を付ける。

周りには各国の空挺部隊が降下しており、自分の方に5人が駆け寄ってくる。

「やあ、中村2佐」

「こんばんわジェームズ中佐、被害は？」

「無い。他国もない様だ」

集まってきたのは各国の空挺部隊幹部達。集まったのは自分含め

○ アメリカ陸軍第82空挺師団1／504落下傘歩兵大隊副大隊長『ジェームズ・アロング』中佐

○ イギリス陸軍第16空中強襲旅団落下傘連隊落下傘連隊第2大隊長『ストロング・A・ウィルソン』中佐

○ フランス陸軍第3機甲師団第11落下傘旅団第1猟兵落下傘連隊第1中隊長『アンドレ・ル・シモン』大尉

○ イタリア陸軍フォルゴレ空挺旅団第183空挺連隊『ネンボウ』副連隊長『ロツ

コ・デ・カゼツリ』中佐

○ ドイツ陸軍特殊作戦師団第26空挺旅団第261降下猟兵大隊副大隊長『マンフレート・ネリウス』中佐

○ 陸上自衛隊アジア・太平洋方面軍アジア・太平洋空挺軍第1空挺師団第11空挺旅団第1空挺団副団長『中村大輔』2等^中陸佐^佐

の6人である。先ほどの輸送機から少しだけ投下された物資の机を出し、作戦図や行動内容を書いたプリントを配る。ここに簡易テントで司令部を置く。

途中で第1特殊作戦群第3大隊第2中隊長『平野淳』3等陸佐が合流し、計7名で作戦会議を始める。

「これが基地の見取り図です」

平野3佐が図面を取り出して机に広げ、それを6人が覗き見る。

「基地の中央が司令部、その隣の建物が兵舎です」

「我々の存在は察知されたか？」

「いいえ、まだされていません。ですが監視塔員を狙撃したのでバレるのは時間の問題

でしよう」

司令官の中村2佐は考え込む。

「…AM5:00に襲撃する。米軍と仏軍は西門。英軍と伊軍は東門。自衛隊と独軍は正門を襲撃し、確保後速やかに司令部へ侵入し、それを制圧する」

「兵舎は？数で来られたら厳しいぞ」

「空自のJDAMの精密爆撃を要請します。5時に爆撃をしてもらい、それを合図に突入します」

「基地制圧後は？」

「スミッド都市部はスミッド開放隊に制圧してくれる様頼んであります。なので制圧後は都市周辺に防御陣地を構築し、また、機甲部隊・補給物資を要請」

「到着までは防御陣地で耐え抜きます。陣地構築は工兵隊に襲撃時刻の5時から構築してもらいます」

「機甲部隊・物資投下後は、機甲部隊を前に前進。都市『グリアース』まで進行し、上陸部隊が上陸するまでグリアースで防御します」

「どうでしょう？」

「俺は賛成だ」

「私もだ」

「意義無し」

「問題ないぞ」

「任せろ」

「第1特殊作戦群を代表して賛成します」

中村は周囲を見渡し、一息をついてから声を上げる。

「よし、各部隊の作戦成功を祈ります。では各部隊、配置に付け！」

各部隊が配置に付く。間もなく『トンガ作戦』の真骨頂が見えてくる。

第11話 本土上陸

中央暦1640年8月23日 午前4時——

パーパルディア皇国 属領スミッド 上空4000m

日が明ける数分前、スミッドの上空には、JDA M誘導装置キットが付けられたMk. 82爆弾のGBU-38(V) 2/Bを両翼4つのハードポイントに装着した『A/T-4』攻撃機2機が飛んでいた。

『A/T-4』は練習機『T-4』の外面を模しているが、中身は全く異なり、空対空戦闘・空対地戦闘・空対艦戦闘ができるマルチロール機である。

1番機のパイロット『金子浩康』2等空佐は2番機の『宮本拓海』1等空尉に話しかける。

「しつかし、パーパルディアっていう国は馬鹿だな…我が国に殲滅戦を仕掛けるとは…」
「国民が黙ってないことが分かるのですね…我が国の情報を収集してなかったのでしょうか？」

日本にパーパルディア皇国が殲滅戦を仕掛けたのは既に本国でも察知されており、国民は政府に逆殲滅戦を要請していた。

「殲滅戦迄とはいかないが、二度と列強には戻れんだろうな…まあ、良い。やるぞ」「はっ！」

『此方シグルドーよりプリテンダー1へ、目標に動き無し、準備よし』

丁度、兵舎を見張っていた第1特殊作戦群から通信が入る。

「了解、攻撃開始。投下、今。爆弾投下。レーザー誘導装置起動」

バードポイントからGBU-38(V)2/Bが投下され、数秒後には、モニターの赤外線カメラに、破壊し尽くされた敵兵舎が見える。

「now!よし、目標破壊確認!ミッションコンプリート!」
Return To Base
「プリテンダー2、copy。Return To Base」

『A/T-4』は任務を終え、基地に帰航した。



数分後――

パーパルディア王国 属領スミッド 属領統治軍陸軍基地

属領スミッド属領統治軍陸軍基地は、大混乱に陥っていた。それもその筈、兵舎がいきなり破壊され、人員が生き埋めになっていた。

ワイバーンはいないが、兵員2000、地龍20、牽引式魔導砲30門を誇る大部隊である。

その兵員のうち、半分以上が就寝していたため、生き埋めになっていた。

東門警備隊の『リリークス』は炎上する兵舎を呆然と相棒と一緒に眺めていた。

「な…何が…」

「何かが爆発したか？」

リリークスは敵の攻撃かもしれないと考える。直ぐにパーパルディア王国に敵う国は居ないと考え、思考を途切れさせようとするが、彼はある事を思い出す。

「待てよ：確か皇国は今、日本国という国と戦争中だったな：日本と戦争になってから変だ。皇都守備隊が壊滅したとか、海軍が全滅したとかだ。事実、属領統治軍は撤退しており、属領の反乱が多い：」

「皇国上層部は軍が連戦連敗している事を隠し通そうとしたが、そう上手くはいかない。」

「何れ何処かで情報は漏れ出すのだ。」

「主に日米英の諜報機関が民衆にデマを流していたが、それも加わり、今では皇国民は不安を抱えていた。」

「その時、側に誰かが崩れ落ちる音がした。傍に居る人物は相棒しかいない。」

「どうした？隠れて酒でも飲んで酔ったか?!?!」

「相棒を見ようと振り返ろうとした瞬間、彼の口が塞がれる。そして右半身に何やら温かいものが流れる感じがする。」

「心臓がある場所を見ると、深々とナイフが突き刺さっていた。」

そこでリリークスの意識は闇に落ち、二度とその意識が戻ることは無かった。

パーパルディアア皇国属領スミツドの属領統治軍陸軍基地東門は潜入した英軍と伊軍の空挺部隊の前に占領された。

また、他の門も気づかれる事もなく制圧され、此処で『トンガ作戦』が本格的に始動した。



数分後——

パーパルディアア皇国 属領スミツド 属領統治軍陸軍基地 司令室

『だ：第1大隊壊滅！援軍をkゴバツ』

『畜生！畜生！此方第3小隊！東門を制圧した敵は途轍もない連射力の銃を持って、や
！やめrガガツ』

『第9分隊、西門を殲滅した敵を強襲s：ザザザツザツ』

『不味い不味い不味い！敵は司令部1階へ侵入！数は少ないが銃の性能が…ん？何だこ
の果実みたいnドン！』

「一体何が！何が起こつとるのだ！」

スミッド統治軍陸軍基地の司令室ではスミッド統治軍司令『トリーム』が叫んでいた。魔信からは絶望的な報告が流れ続ける。

「わ…分かりませんが…敵が侵入したのだと…」

「敵？ならばどうやって来たのだ！都市の周りには防衛線があるのだぞ！まさか空から降って来たと言う筈は無いな！」

そのまさかなのだが、トリームは知る由もない。

「！通信回復しました!!都市部防衛隊と繋がります！」

「援軍を早く寄越せと言え!!」

基地内では魔信が使えるものの、都市部などの基地外へは繋がらなかつた。

実は、日本&NWTQがクワ・トイネから輸入した魔信の妨害装置の実験を行なっており、それが故障して繋がるようになったのだ。

だが、都市部防衛隊から帰ってきた返信は絶望に陥れる言葉だった。

「と…都市部防衛隊より伝達…」

「?どうした!早く言え!!」

「『都市部防衛隊は攻撃を受けている。このままでは全滅する可能性が高い。応援を要請する』」

「なっ…何故だ!まさか敵は都市部にも展開しておるのか!!」

「そのようかと…」

「なぜそのような大部隊の展開を許したのだ!この無能どもめ!」

「(うるせえ…敵はここまで侵攻できないからって哨戒のペースを減らしたのはお前じゃ無いか…)」

副司令は心で悪態をつく。その時、扉が少し開いており、そこから棒状の筒が飛んできたのを目にする。

「?なんだっつ!!!」

目の前が光り、耳がキーンと耳元で落雷が落ちたかのような音がする。

「うおおおお!!何だあ!敵かあ!!クソが!!」

近くでバンバンの音がする。基地司令アホが発砲したのであろう。

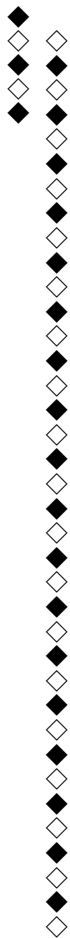
「ぐおっ!痛い!!!やめろっ!ぐあ!!」

発砲直後、パシユパシユという音が聞こえ、血を吐くような声も聞こえる。

「両手を頭の後ろに付けろ!!!」

世界共通語で話しかけられる。自分は指示に従ったが、何人かが抵抗し、侵入してきた奴らが持つてる銃であっけなく排除される。

ここに、パーパルディア皇国属領スミツドの属領統治軍陸軍基地は、日本&NWT0
各国空挺部隊の攻撃により、陥落したのであった。



数分後――

日本国 埼玉県入間基地 『C-3』機内

広大なエプロンには、『C-2』『C-130』や『C-3』などの各貨物機が鎮座している。

エンジンを起動しており、命令が有れば何処にでも行ける体制だ。

各貨物機には、日本の精鋭空挺部隊、『第1空挺軍』1個連隊が出撃を今か今かと待ち侘びている。

ある『C-3』の機体後部では、副連隊長が演説を開始しようとしていた。副連隊長は眼鏡を掛けた肥満した男性である。

「ああ、また少佐殿の演説が始まるぜ」

「あの漫画に影響を受けて体型を変えたほどだからな……」

この連隊の出撃前の恒例行事は第1空挺軍内でも評判で、ネットでも話題である。インカムを持った少佐^{少佐}がゆっくりと喋り始める。

「諸君 私は日本が好きだ」

「諸君 私は日本が好きだ」

「諸君 私は日本が好きだ」

「お寿司が好きだ、ラーメンが好きだ、日本酒が好きだ」

「アニメが好きだ、漫画が好きだ、コスプレが好きだ」

「同人誌が好きだ、新幹線が好きだ、ゆっくり実況が好きだ」

「東京で、京都で、札幌で」

「名古屋で、大阪で、福岡で」

「仙台で、那覇で、横浜で、新潟で」

「この日本のあるありとあらゆる物が大好きだ」

「親子が並んで微笑ましくアニメを見るのが好きだ」

「Twitterで好きな絵柄の絵師の作品をコミケで買った時など心がおどる」

「ニコニコで弾幕を打つのが好きだ」

「俄にも2c○に攻撃を仕掛けてきたサイトを田○砲でダウンさせた時など胸がすくよ

うな気持ちだった」

「我々のへ○タイ文化で外国人の性癖を蹂躪するのが好きだ」

「興奮状態の外国人がコミケで大量の同人誌を買い占めている様など感動すら覚える」

「空腹の後に食べる醤油ラーメンの味などはもうたまらない」

「富士山の綺麗な姿を見て、温泉に浸かりながら飲む日本酒も最高だ」

「哀れな日本があまり好きではない者が健気に入国してきたのを日本潰けにして、私みたいな腹になりながらトランクに入らない程の土産を持って帰国した時など絶頂すら覚える」

「だが、このような平和をパーパルディアは踏み潰した」

「7人もの尊い日本人が犠牲となった…」

「諸君 私は報復を 地獄の様な報復を望んでいる」

「諸君 私に付き従う空挺軍戦友諸君 君達は一体何を望んでいる？」

「更なる報復を望むか？ 情け容赦のない糞の様な戦争を望むか？」

「我々の高度な兵器があいつらの兵器を踏み潰す戦争を望むか？」

「^戦「^争クリーク！^戦クリーク！^戦クリーク！^戦クリーク！^争」

「よろしい ならば^戦クリークだ」

「我々は決してパーパルディアのクソ共を許さない！！」

「大復讐を！！ 一心不乱の大復讐を！！」

「我らは一騎当千の世界最強の^{空の神兵}空挺兵」

「ならば我らは諸君と私で総力100万と1人の軍集団となる」

「我々を蛮族と思いやり眠りこけている連中を叩き起こそう」

「連中に恐怖の味を思い出させてやる」

「連中に我々の 小銃の音を覚えさせてさせてやる」

「「「3等陸佐殿！3佐！副連隊長！副連隊長殿！副指揮官殿！」」」

「自分の常識に当てはまらない強大な敵があることを思い出させてやる」
 「神兵の戦闘団で パーパルディアを燃やし尽くしてやる!!」

「最強の軍団、副連隊長より 全空挺団員へ！」

「連隊各員に伝達 連隊長命令である」

「目標、パーパルディア皇国属領、スミッド上空!!? トンガ作戦、状況を開始せよ」
 「征くぞ 諸君 戦友を救うのだ」

「地獄を作るぞ」

演説が終わるとともに、C-3のエンジンが最高出力になり離陸を開始する。

第1空挺軍第1空挺師団第1連隊はスミッドの空挺部隊救出のために出撃した。



数分後――

元属領統治軍陸軍基地 司令室

「よし、全員集まったな」

元司令室には、空挺部隊の幹部らが集まっていた。これだけドンパチやったのだから、恐らく敵の増援が来る。

地球では体験したことのないような大規模防御戦闘。幹部らに緊張が灯る。

「では、まずこちらの兵力を確認する。山田一尉
「はっ」

一尉が幹部たちにペーパーを配る。

「これが我が軍の保有兵力です」

「6個大隊1200名、迫撃砲145門、無反動砲96門、携帯SAM124発、重機関銃23門、96式装甲戦闘車1両、FV107 シミター2両、LAV-AD1両です」

「敵しいな…特に装甲車は有力に使わなければ…」

「ええ、なので敵の攻撃が一番激しいと思われる正面にクーガーFVは配備し、LAVは後方で敵のワイバーンの襲来を防ぎます」

「既に工兵隊が塹壕を掘り、第1防御陣を構築完了している。敵は恐らくもうすぐ来であろう」

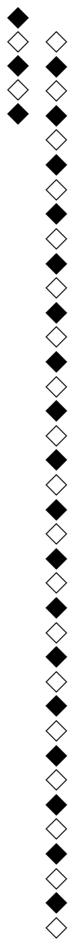
「第1空挺軍は離陸したとの報告が上がったが…到着は12時間後ぐらいになりそうだ」

その時、司令部のドアがノックされ、通信兵が駆け寄ってくる。

「上空を監視中のMQ-9 リーパーから、敵勢力は東方面100kmに迫っているとのことです」

「わかった…全軍配置につけ！」

史上類を見ない大規模防御戦闘。後に『スミッド防衛戦』と呼ばれる戦いが始まった。



数時間後――

パーパルディア王国 東部防衛隊 第2軍

皇国の東部を防衛する東部防衛隊。その第2軍は多数の軍勢を連れて属領スミッドへ進軍していた。

彼らの目的は数時間前スミッドの属領統治軍から入った魔信、

『敵が空より侵攻、援軍を乞う』

との報告だ。それからスミッドからは連絡が取れていない。

第2軍を統率する将軍『ラトリーゼ』は考える。

「(空から参つたと言うことは敵は火喰い鳥かワイバーンから降下したか……人数はさほど多くなかろう)」

いやな予感がするが、目の前の軍勢を見てそれは払拭された。

兵士30,000人、地龍リントヴルム5,600匹、牽引式魔導砲3,880門、ワイバーンロード2000匹。

圧倒的な兵力。この頃軍に不安気な雰囲気蔓延しているが、この軍勢には逆らえない。

「敵発見！」

双眼鏡を覗くと地面に塹壕を掘り、立てこもっている敵が見える。

「馬鹿め、塹壕などにいたら火炎弾の餌食だ。攻撃開始い!!」

「!!!」
「!!!」
「!!!」
「!!!」

現代人が聞いたら某紅茶をキメた三枚舌野郎歌を思い出すような音楽が流れ、兵士が突撃する。

その時、敵地から大きな音が聞こえ、上空から風切り音が聞こえる。

「?なんだ？」

兵士たちは困惑しながら前進するが次の瞬間、地獄が到来した。

「うああああああああ
!!!!!!」

「がああああ!!」

「足がああ：足がああああああ!!」

「くっ！何が起こったあ!!報告しろ!!」

「わ：わかりません!!!頭上からマスケット銃のようなものが降ってきました!!」

各迫撃砲から発射された迫撃砲弾は上空で炸裂、多数の鉄粒となり、第2軍に降り注いだ。

「クソっ!!っ！足を止めるなあ!!!突撃いいいい!!!」

味方の四肢が降り注いでも彼らは突撃するのをやめない、だが

「ぐおおおおお!!!」

「光弾!!!光弾がああああ!!!」

「なんで数だ!!!クソツタレ!!!」

前方から光弾が飛来し、1発で兵士たちと体を肉塊に変える。

「(ワイバーン、ワイバーンだ! 火炎弾なら光弾の元を火炎弾で攻撃できる!!)」
「ワイバーン隊は!! ワイバーンはどうなった!!」

ラトリーゼは側近に唯一の希望を託し、そう問いかけるが、

「わ、ワイバーン隊は敵から放たれた光の矢で全滅しました!!!」
「なっ……」

ラトリーゼは額から汗を垂れ流す。脳内には絶望が支配する。

「なぜ! なぜこんなことにいいいいいいいい!!!」

叫んだ瞬間、上空が光り輝き彼の意識は反転する。

パーパルディア皇国東部防衛隊将軍『ラトリーゼ』は120mm迫撃砲の破片が脳を貫き、死亡した。

「Hey! Hey!!」

「…?」

「It's a machine gun!!」

「…?」

「Machine gun!!!」

「…!!OK!!」

2人一緒に12.7mm弾を乱射する。当たった敵は問答無用に胴体が二つに切り裂かれる。

だが、パーパルディア軍もそう馬鹿ではない。

「敵トカゲもどきワイバーン発見!!」

「何っ!!」

塹壕に立て籠もる敵にはワイバーンの火炎弾が降ってくる。

これが塹壕がこの世界で流行らなかった理由である。

「ジム!!ステインガーで丸焼きにしろ!!焼き加減はウエルダンだ!」

「イエッサー!!!」

兵士がFIM-92 ステインガーを取り出し、照準器を合わせる。

レティクルが収縮し、シーカーの音が鳴る。

「屁に気をつけろよ!Fox2!Fire!!」

トリガーを引き、ミサイルがけたたましく発射される。そのままワイバーンはひき肉に変えられる。

司令官は降ってきたワイバーンの肉片を摘むとジムに投げつける。

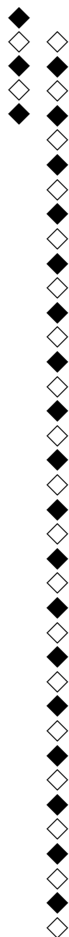
「Fuok!!これじゃあウエルダンじゃなくてミディアムだ!!焼き加減が足りんぞ!!」

「Sorry!サー!!」

「次はないぞ…右翼!なにやっている!弾幕薄いぞ!!」

火力では押しているが、いかにせん数が足りない。数で来られたら近代兵器も無意味だ。

自衛隊&NWT0の空挺部隊はジリジリと押されていくのであった。



数時間後――

元属領統治軍陸軍基地 司令室

「くそっ……キツイぞ……」

総司令官の中村大輔2等陸佐は司令室で頭を抱えていた。戦況は優勢だとは言いがたい。

全体的に押されており、このままでは壊滅するであろう。

「ドイツ軍担当域から連絡、左翼の第23分隊全員KIA、支援を乞うだとのことだす」

「クラーガーFVを回せ!!」

「アメリカ軍担当域から連絡! 12. 7mm弾全弾消耗! 追加を要請するとのことだす」

す」

「なにやってるんだあいつら!」

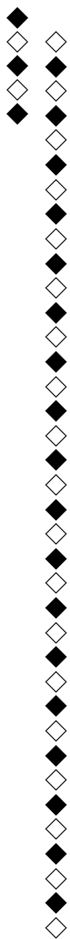
中村は被害が多いことに瞠目する。

「(…工兵団からは第2防衛線は準備完了とのことだった…撤退するか…)」

彼は覚悟を決める。

「全軍に下礼!第2防衛線まで撤々」報告します!!」なんだ!」

「援軍が…第1空挺軍が到着しました!!」



数分前——

第1空挺軍 輸送機『C-3』貨物室内

貨物室では降下長が落下傘降下の準備を進めていた。

「降下10分前！」

「「「降下10分前！」」」

「降下10分前!!」

「「「降下10分前!!」」」

「外側の兵員立てえええ！」

「「「おう！」」」

「内側の兵員立てえええ！」

「「「おう！」」」

降下長の掛け声と共に椅子から腰を上げ、折りたたみ式の椅子を片付ける。

全員に緊張が走る。

「環をかけええつつ！」

「「「おう!!」」」

「装具点検つつ!!」

「1、よし！」

「2、よし！」

「3、よし！」

「4、よし！」

「5、よし！」

「6、よし！」

自働索管、顎紐、救命胴衣、離脱器、予備傘、股帯の順で装備を確認する。
漢達の顔が険しくなる。

「装具点検の為に静まれええつつ!!」

「装具点検完了!!」

「了解！」

後ろから装具点検完了の合図に前の人の肩を叩き、それを前までやる。

1番前の空挺兵は降下長に装具点検完了と声をかけ、降下長と握手する。

「降下よーい!!この位置まで前へ! 位置につけえ!」

「1番機いいいいいくぞお!!」

「「「おう!」」」

「いくぞ!!」

「「「おう!!」」」

「プリテンダー1番機、コースよし、コースよし、用意、用意、用意、降下!降下!降下!降下!」

「青!初降下!!!」

「2降下!!」

「3降下!!」

空挺兵が次々と降下する。1000を超える兵士が降下する姿は圧巻だ。

「反対扉、機内良し!お世話になりました!!」

降下長も全員の降下を確認した後に飛び降りる。

「進路良し！進路良し！投下！投下！投下！」

C—5からも10式戦車や10式装甲戦闘車、16式機動戦闘車、軽装甲車などが
低高度パラシュート抽出システム
LAPES投下で投下される。

「おおっ!!」

「援軍だ！援軍が来たぞ!!」

援軍の搭乗に先遣隊は色めき立つ。戦車や人員は着陸後速やかに前線へ移動する。

数分後、中村の元に第1空挺軍第1空挺師団第11連隊長『大村孝行』一等陸佐、同じく第11連隊副連隊長『門的真葛』3等陸佐、第1空挺軍第1戦車師団第21大隊第211中隊長『佐藤和彦』一等陸尉が到着した。

「大村1佐、門的3佐、佐藤1尉、お待ちしていました」

「中村2佐、今までお疲れ様。後は任せなさい」

指揮権を大村1佐に移し、中村は一旦休憩に入る。

「よし、現在の戦況、そして我々の兵力を教えてください」

「はっ、戦況は全体的に劣勢でしたが、連隊の到着で攻勢に回っています」

「次に兵力です。我々の現在の保有兵力は…」

「6個大隊と1個連隊、1個戦車中隊で約4,200名、迫撃砲211門、無反動砲352門、携帯SAM214発、重機関銃56門、10式戦車C型12両、10式装甲戦闘車3両、16式機動戦闘車5両、96式装輪装甲車8両、96式指揮通信車^{クイガイ}、96式装甲戦闘車^{クイガイ}1両、FV107 シミター2両、LAV-AD1両、MLRS6両、FH-7015門です」

「うん、これなら攻勢に出れるな…5時間後に攻勢に出る。それまで各員休暇を取れ。だが警戒は怠るなよ」

「はっ!!」



数時間後――

パールディア王国陸軍 東部方面隊 第1・3軍

パーパルディア皇国陸軍東部方面隊第1軍を率いる將軍『メンドール』は不安を感じていた。

それもそのはず、先日属領『スミッド』が敵軍によって陥落したと魔信が入った。

どこから進化したかは不明だが、東部方面隊第2軍が出撃した。

ここまでは楽勝だと思っていた。

だが、数時間前、第2軍が壊滅したと魔信が入った。

たった数百名を残して壊滅、將軍ラトリーゼも敵の攻撃で戦死したという。

ラトリーゼはメンドールの旧友だ。あいつが優れているのは知っている。

あいつが負けたのならば気をつけ、敵を取れるならば取ってやりたい。

そう思っていた。その時、遠方から大砲の音が聞こえたのをメンドールは耳にした。

彼は昔から耳が良い。

「?なんだ?」

その時、上空が爆発し、何かが飛散した。

「ん
?!?!?!????」

ドーン、パラパラパラ。そんな音と共に大地が震えた。

「は？は？なんだ?!？」

味方の中で大爆発が立て続けに起こり、味方が消滅する。そして、小さな爆発が味方をなぎ倒す。何かが弾け、兵がバタバタ倒れる。

「くっ！被害報告!!」

「な…何かしらの攻撃で部隊の4割が死傷しました!!」

「…は？何かしらの攻撃とはなんだ!!」

「わかりませんが、魔力の使用形跡はありません!!」

「機械文明…ムーか…小癩n「前方から地竜接近!!」」

前方を覗くとかなり遠くの方から土煙をあげ、角の付いた異物が10輻ほどこちらに向かってくる。

「??なんだ? まあ良い攻撃を開始い??
!!??」

下令しようとした時、敵の地龍の角が光り、近くに着弾する。

「な…:…な…:…」

壮絶な威力、メンドールは絶句する。

敵はまだまだ出てくる。素足で突撃する歩兵を含め1000以上は軽くいるだろう。空には謎の飛行物体も飛行している。

第12話 地獄の黙示録

中央暦1640年8月24日——

日本国 中華地方 北京府 北京基地

広大な北京基地。ここは自衛隊の全部の航空部隊がおり、陸上自衛隊も例外ではない。

第1騎兵師団。その名が示すとおり、当初は騎兵を中核にした部隊であり、日露戦争や第1次世界大戦では大いに活躍をした。

第2次世界大戦終結時には騎兵が衰退した事によりほぼ機甲科となっていたが、ある兵器によって転機が騎兵科に訪れる。

ヘリコプターである。

騎兵科の西竹一陸将が目をつけたのはベル・エアクラフトの『UH-1』。西はこれが今後の戦争においてこのヘリコプターが主流となると確信し、UH-1の大量購入を上層部へ求める。

陸上自衛隊上層部もヘリコプターという未知の兵器（一応オートジャイロの研究は行われていたが、あまり活性ではなく、知名度は低かった）を導入する事に疑問を呈した

が、試験結果が良好であるため300機の大量導入を決定する。

そしてある戦争が今後の騎兵科の転換点と呼ばれる。ベトナム戦争だ。

ベトナム戦争において、戦闘機より遅いが、点から点へ人員を投入できるヘリコプター部隊は大戦果を収めた。

自衛隊が得意な空挺作戦との相性も良く、瞬く間にヘリコプターの名は世界に轟く事になる。

ベトナム戦争後は挙って各科がヘリコプター部隊の管轄を争ったが、結局西陸将が導入を決定したとして、騎兵科にヘリコプター部隊が編入される事になる。

ちなみに陸上自衛隊の戦略決定に置いて、西竹一陸将率いる『空中機動作戦』派、栗林忠道上級陸将率いる『縦横攻撃戦』派、西住小次郎元帥率いる『機甲電撃戦』派、辻政信陸将率いる『縦深防御戦』派、牟田口廉也上級陸将率いる『砲撃火力戦闘』派で血に塗れる争いが起きたと言われているが、それはまたの機会に。

閑話休題。

北京基地の会議室には、陸上自衛隊南部方面隊第6騎兵師団第3空中騎兵旅団第9空中機動連隊第1大隊の幹部達が集まっていた。その室内の一角では、作戦を担当する統合軍から出張してきた参謀は、目をひん剥いていた。

「(なんで会議室にテンガロンハットを被った上半身裸の筋肉モリモリモッチョマンの変態がいるんだよ!!)」

だが、現実是非常である。筋肉モリモリモッチョマンがこの部屋の中心となっている以上、彼がこの大隊の指揮官、『桐生五阿』2等陸佐であろう。

「どうした参謀。何かあったか?」

「(オメーの格好だよ!) えくくくく…なんでもありません、作戦概要を説明します」

死んだ目をした参謀がリモコンを動かし、大隊幹部の目の前に設置されたモニターを起動する。

「これが貴方達に襲撃してもらおう予定の基地です」

「ほう…確かエンベ基地だったかな?」

「はい、その通りです」

参謀は幹部の問いに答えると、リモコンを操作して次の画像に切り替える。

そこには潜伏して撮った様な画像と、基地の見取り図があった。

「統合軍国家統合情報局の諜報員が撮影した画像です」

「情報によると、基地には兵士約1600人、地龍18頭がいる様です」

「ふむ」

桐生2佐は個別に配られた資料を一瞥すると参謀に問いかける。

「我が大隊の練度ならこの様な基地など1時間で占領できるだろう。だが問題は……」

「問題は？」

参謀は見るからに脳筋そうな桐生が気にする点があるなど無いと思っていたが違う様だ。

問題点を尋ねると、彼は深刻そうな顔で聞いた。

「波の調子はどうかね？」

「は？」



中央暦1640年8月25日――

パーパルディア皇国 都市ノルマデイン周辺の皇軍基地エンベ基地より20kmの海上

陸上自衛隊南部方面隊第6騎兵師団第3空中騎兵旅団第9空中機動連隊第1大隊『桐生五阿』2等陸佐らが乗る『UH-1』と『UH-2』『AH-6』約50機の編隊は早朝、北京基地を離陸し、エンベ基地に強襲着陸をしようとしていた。

桐生2佐は、通信機を握りながら話す。

「ムーンキャンサー1、此方フェイカー7、目標確認、予定位置に接近中」

「10時の方向、全機攻撃態勢！」

2佐の合図と共に第1大隊機全機は、針路を変更して日を背にエンベ基地の方角へ向く。

その格好は機体が朝日に照らされ煌めいており、騎兵科が人気なのを納得させる格好であった。

「了解しました！全機攻撃態勢！」

「朝日を背に突入！音楽を流せ！」

「聞いたか？音楽だ!!」

「此方隊長機、神経戦だ」

「音を上げる。行くぞ、ダンスの時間だ」

iPadに繋がれたスピーカーからワグナーのニーベルングの指環第2作ワルキューレの『ワルキューレの騎行』が流れる。

その音に各々は、曲が流れている事に耳を疑ったり、ノリノリになったり、チェンバールチェックを行い、ヘルメットにマガジンを叩いたりしている。

「なんで鉄鉢を下に引くんだ？」

「タマを守るためだよ！」

「ハツハツハツハツハ……」

「(俺もやっつこ)」

その数秒後、沖合の強襲揚陸艦から発艦した『A H—1 Z ヴァイパー』のBGM—71 TOWが火を吹き、基地の端にあつた監視塔に着弾する。それが合図のように、U H—1、U H—2は速度を最大にし、エンベ基地を直指した。

砂浜を眼下に捉えた時、U H—1、U H—2の機体横、スタブ・ウイングの兵装パイロンに設置されたM261ロケットポッドからM151ハイドラ70ロケット弾が放たれ、海岸にいたパーパルディア兵を肉塊に変える。

「敵襲！ 敵襲！」

「動ける人員は銃を持って！ 応戦しろ！」

緊急用の鐘が鳴り響き、パーパルディア兵は右往左往するが、一方的な攻撃に次々と斃れる。

ヘリコプターの機上では、M2ブローニングやM134ミニガンが咆哮し、パーパルディア兵の肉体を引き裂く。

「走れ！ クソ野郎共！」

だが、パーパルディアも負けられず、対空バリスタを起動させようとする。

「お前の槍貸せ!!」

「おう!」

それを上空のAH-6が発見し、桐生2佐に報告する。

「キリがありません、バリスタです!」

「下に対空兵器を確認。高度を下げ調べろ」

「了解、高度を下げます」

その時、バリスタから発射された槍がUH-2の側面に突き刺さる。

「くそ!」

「オリバー3、被弾。右エンジン停止」

「直ちに着陸せよ。ハンター2、目標を攻撃しろ」

「了解、攻撃します」

AH—1ZのM197機関砲から放たれたM53徹甲焼夷弾がバリスタに突き刺さり、破壊される。

「やったー！」

「よくやったー！良いぞー！ビールを奢る！」

パーパルディア兵は負けずとマスケット銃を打ち返すが、アサルトライフルの火力には敵わない。

着陸したヘリコプターからは大隊員が降り、周囲を制圧してゆく。

これによってエンベ基地は制圧されたのであった。

同時刻、ロデコロイツ基地も制圧され、『キルゴア作戦』は成功に終わったのであった。



中央暦1640年8月25日早朝――

パーパルディア皇国 皇都エストシラント 皇軍基地

皇都エストシラントでは、パーパルディア皇国軍総司令官『アルデ』が頭を抱えてい

た。

「クソ！クソ！クソ！クソ！」

「どうやっても日本国に勝てる作戦が思いつかない。アルデは寝る時間を惜しんで作戦を考えたが、何も思い浮かばなかった。

戦況は最悪。西部・東部からは敵の少数部隊が迫ってきている。

「皇帝陛下が言われたとおり、本土には侵攻できぬのが救いだな」

西部・東部に上陸した敵は少数の精鋭部隊のようで、都市スミッドと都市ホペゲヴからは進軍していない。

おそらく補給が間に合っていないのであろう。

「日本軍は攻勢をしてきていない……このうちに属領を取り戻すか……」

最近日本軍は積極的攻勢を仕掛けていない。大規模攻勢の準備も考えられたが、なら

ば日本が攻勢の準備をしている隙に、属領統治軍を戻し、属領を回復。そこから日本と交渉する。というのが今のプランだ。

だが、日本軍の攻勢が一度始まってしまったらまずい。そう考えて今日も防衛作戦を立案するため、アルデは徹夜していた。

「失礼します!!!」

「なんだ!」

アルデは徹夜していたため、不機嫌な様子で入ってきた者に訪ねる。

「皇都から50km先のロデコロイツ基地、エンベ基地が日本軍に占領されました!!」

「——は?」

彼は事の重大さに一旦理解が追いつかなかつたが、すぐに再起動を果たし、伝令をしたものに訪ねる。

「敵の兵力は!?!」

「はっ、西方と東方に上陸した者より少ない兵力だという事です」

「あと、敵は大型のワイバーンのような物に乗って海の方角の空から上陸してきたと」

「そうか……ご苦労。下がってよいぞ」

「はっ」

微々たる人数ならなんとかなる。皇都防衛隊はワイバーン隊こそ壊滅したが、陸軍であれば人数は確保できる。

そう思い、アルデは皇都防衛陸軍長へと魔信を掛けた。

それが自衛隊の陽動だとは知らずに…

第13話 ニュー・ノルマンディー 上編

中央暦1640年8月25日早朝——

《パールディア皇国 都市ノルマディンより300kmの海上》

全長333.1m、基準排水量74,000トン以上。地球上の歴史の中でも最大の艦船が海上を進む。

その艦橋では、一人の男が周りを見渡していた。

プラスチックの無い蒼い海。汚れの無い澄み渡った空。その空を上空警戒のF/A—18Eと対潜警戒・救難者救助のSH—60Kが飛んでいる。

そして——圧倒的な鐵^艦の船^船達。

第825合同任務部隊の一艦、ずいかく型航空母艦『ずいかく』は、パールディア皇国の都市、『ノルマディン』の上陸を試みようとする第826合同上陸任務部隊の援護の為、この海に展開していた。

艦隊を見渡す男の後ろのドアから、副官が姿を現す。

「艦長、ここに居られましたか。艦隊司令部より入電です、作戦の最終確認の為旗艦『は

るな』へ集合せよ。と」

「わかった。すぐ行く」

男——ずいかく艦長『佐野亮太』1等海佐は、振り向きながら答える。艦橋の中に入る前にもう一度艦隊の方を向く。

「(味方ながら…恐ろしい艦隊だな)」

そう思った後、彼は艦橋へ足を踏み入れた。

《第825合同任務部隊艦隊本隊構成》

【日本国海上自衛隊】

第1艦隊 第1護衛隊群 第1空母打撃群

第1空母打撃群直屬ミサイル巡洋艦

第1空母護衛隊群

第1空母航空団

第5軽空母打撃群

第5 軽空母打撃群護衛隊群

第1 護衛隊

第2 護衛隊

第2 護衛隊群

第1 へりコプター空母打撃群

第3 護衛隊

第3 護衛隊群

第3 空母打撃群

第3 空母打撃群直屬ミサイル巡洋艦

第3 空母護衛隊群

第3 空母航空団

第4 護衛隊

第10 護衛隊

第4 護衛隊群

第4 空母打撃群

第4 空母打撃群直屬ミサイル巡洋艦

第4 空母護衛隊群

第4 空母航空団

第2 軽空母打撃群

第11 護衛隊

第5艦隊 第11護衛隊群 第11空母打撃群

第11空母打撃群直屬ミサイル巡洋艦

第11空母護衛隊群

第11空母航空団

第17護衛隊

第24護衛隊

第8艦隊 第12護衛隊群 第12空母打撃群

第12空母打撃群直屬ミサイル巡洋艦

第12空母護衛隊群

第12空母航空団

【アメリカ合衆国海軍】

第1艦隊 第1空母打撃群

第1駆逐戦隊

第3空母打撃群

第2駆逐戦隊

【イギリス王国王立海軍】

本国艦隊 第1空母機動部隊

第1 駆逐隊

第2 駆逐隊

【フランス共和国海軍】

第2 艦隊 第1 航空艦隊

第2 駆逐群

【イタリア共和国海軍】

第1 艦隊 第2 航空打撃群

第1 駆逐戦隊

【ドイツ共和国国防海軍】

第1 艦隊 第1 両用部隊

第1 1 駆逐部隊

【大韓共和国海軍】

主力艦隊 第1 空母機動戦隊

第1 2 1 駆逐部隊

【台湾公国海軍】

第1 部隊 第1 へり空母機動部隊

第1 1 駆逐中隊

【クワ・トイネ公国海軍】

第1艦隊 第1鉄竜艦隊（※）

第11護衛部隊

（※）海上自衛隊の旧型艦、とね型航空巡洋艦『ちくま』を主力とする部隊



15分後――

《はるな型揚陸・艦隊指揮艦『はるな』後部ヘリコプター甲板》

キュツガシヤン、と言う音と共に着艦拘束装置がSH-60Kの尾輪を拘束する。

側面のドアが解放され、機内から佐野1佐が降りて来る。

この艦『はるな』は、はるな型ヘリコプター搭載型巡洋艦の1番艦として1969年に就役。その後1996年に一度退役し、国防予備役艦隊に回されたが、2000年に揚陸・艦隊指揮艦として再就役が決定。その後2005年に改装を終えて再就役した。

元々2基あつた73式54口径5インチ単装速射砲は前方一門を除き降ろされ、主砲跡にはレーダーサイトを設置。

74式アスロクSUM 8連装発射機も排除され、第2砲塔と同じ高さの電波収集

室が設置された。ヘリコプター格納庫も大改装されて格納庫から艦隊司令部施設に生まれ変わった。

佐野1佐は、艦隊司令部施設に入ってエレベーターを起動させ、艦隊作戦・司令室のある2階へ移動する。

エレベーターから出ると、側に控えていた司令部職員が司令室に声をかける。

「ずいかく艦長佐野1佐入られます」

職員の声に司令室中央の大テーブルに座った人物達が佐野の方へ向く。彼ら彼女らの肩章には1等海佐や海将補を示す階級章が縫い付けられている。

つまり座っているのは幹部。この艦隊の首脳部である。佐野1佐が座ったところで上座に座った凛々しい女性が話し始める。

「全員集まりましたね、では会議を始めます」

彼女は『山本実都来』海将。かの連合艦隊司令長官山本五十六の曾孫である。優れたリーダーシップを持つ女性であり、統制力は世界でも一流である。

東亜戦争の東シナ海海戦では自身が指揮する第5空母打撃群が中国空母2隻を撃沈する大戦果を記録した。この作戦では合同任務部隊を指揮する為、一時的に海将補から海将に昇進している。

茶髪ポニテの大和撫子であり、広報活動などから一般の知名度も高い。

「今回の作戦の目的はノルマディンに上陸する第826合同上陸任務部隊のサポートです」

「では東郷1佐、作戦概要を説明して下さい」

「はっ」

山本海将の右隣から表れたのは『東郷蒼斗』一等海佐。かの日本海海戦で勝利し、世界4大提督の1人である『東郷平八郎』の玄孫である。山本の指揮下である第5空母打撃群の首席参謀を務めている。

山本の幼馴染であり、容姿端麗・頭脳明晰・泰然自若であるから女性自衛官の気も高い。今回の作戦も首席参謀として参加している。

「まずこれがノルマディンの空撮画像です」

部屋の壁に設置された大型モニターに空自の偵察機RF-15が空撮した写真が映し出される。

「ノルマデインはかのノルマンデーと同じ様な地形をしています」

「名前も似ているな」

「はい、なので二次大戦の参考資料を用いつつ、ここを攻略します」

東郷はリモコンを操作し、次の写真に変える。

「私たちの目的は山本海将の仰った通り、上陸作戦を行う第826合同上陸任務部隊の援護です」

「既にノルマデイン上空に25騎のワイバーン生物が飛翔しています」

「偵察と情報機関の分析によりますとノルマデインの敵軍勢力は兵士25万、地龍——ドラゴンの地上型ですね。それが5800匹、ワイバーン360騎です」

「ワイバーンは分散して配置しています。地下壕に隠されており、上空からは把握しづらくなっています」

「把握している数がこれだけなので未だ見つからない壕が一定数存在すると私は考えています」

「恐らくエストシラント・デュロの陸軍基地が爆撃されて一気に航空戦力を喪失したことを踏まえたのでしょうか」

「列強と名乗っているだけあるな…対策が早い」

アメリカ海軍指揮官『ウイル・K・ハーネス』少将が尋ねる。

「はい。ですがトマホークと空爆で既存の壕は破壊でき、又見つからない壕も上空警戒の無人偵察機装備の空対空ミサイルと工作員の91式携^S帯^A地^M対空誘導^M弾で離陸したところを迎撃します」

「作戦は11:10に空母からF-14E 48機、F/A-18E/F 72機、F-35B 36機、ラファールM12機、AV-8B12機で構成された第1次攻撃隊が離陸」
「その後12:00JSTに戦闘機隊は上空警戒中のワイバーンを、攻撃機隊は地上設備を攻撃します」

「空母群は艦載機発艦後後退、この際艦隊を第8251合同任務部隊と第8252合同任務部隊と分割します」

「第825―1合同任務部隊は空母を含み後方へ変針、第825―2合同任務部隊は第826合同上陸任務部隊を援護します」

「13:00にアルタラスから離陸した空自戦略爆撃機隊による空爆を実施、13:30からは艦砲射撃とトマホークによる攻撃を行います」

「この時、第825―1合同任務部隊も第2次攻撃隊を編成、第826合同上陸任務部隊と一緒に対地攻撃を行う予定です」

「上陸は15:00に行います」

上陸部隊は兵士50,000人、戦車180両などを誇る大部隊である。兵器の年代差もあり簡単に制圧できるであろう。

「以上が作戦概要になります」

「何か質問がある方は？」

「質問がないようなのでこれで作戦概要の説明を終わります」

東郷が座り、今度は山本が喋り始める。

「東郷1佐、ご苦勞」

「——奴等に我々との兵力の差を見せつけてやろう、本日天氣晴朗なれども浪?し」



同日10時20分——

《『ずいかく型航空母艦『ずいかく』出撃ブリーフィングルーム』》

ずいかく^Vに搭乗する第1^F空母航空団第5^V戦闘飛行隊『トップガン』と第1^V1^F2^A戦闘攻撃飛行隊『ヴァーチユア』のパイロット達が集まっていた。

皆が雑談している最中、第1空母航空団司令の『齋藤 創』一等海佐が室内に入ってくる。1佐が入った瞬間、パイロット達は雑談をやめ、真剣な表情で前を向く。

「起立! 気を付け! 礼!」

全員が敬礼し、齋藤1佐もそれに答礼で返す。

「座ってくれ」

齋藤の言葉で全員が一斉に席に着く。

「今回の任務は皆知っているな？ 奴らに爆弾の使い方を教えてやる事だ」

その言葉にブリーフィングルームは笑いの渦に包まれる。

「——作戦概要を説明する」

その言葉にパイロット達は気持ちを切り替える。

「第5^V5^F戦闘飛行隊⁵は敵哨戒機の撃墜及び飛行場の先制攻撃を行う」

「攻撃後は空中待機し戦闘^C空中哨戒^Aを行え」

「TARCAPですか」

「そうなる」

第55戦闘飛行隊長『氷室零』二等海佐が尋ね、それを齋藤が肯定する。

「第112戦闘攻撃飛行隊は上陸予定地点の敵兵器及び近郊のノルマディン基地を破壊しろ」

「兵装はどの様に」

「F-14EはAIM-9Lサイドワインダー6発にMk. 83の通常が4発」

「F/A-18Eは同じくサイドワインダーを2発、GBU-32 JDAMが10発だ」

「なぜAIM-9Lを？90式空対空誘導弾³や04式空対空誘導弾⁵でも良いでしょうに」

「上層部が言うには上の奴ら^{財務省}が『なぜトカゲ退治に最新のミサイルが必要なんだ？中古品で十分だ』って言われたそうだ」

「またもや室内が笑いに満ち溢れる。」

「了解です」

「よし、全員脳に作戦概要を埋め込んだな？」

「発艦は11:10に行う。それまでに愛機と自身のチェックを行っとけ！」

「では解散!!」



同日11時00分――

《同ずいかく型航空母艦『ずいかく』艦内通路》

廊下では第5^V5^F戦闘飛行隊『トップガン』第1^{トッ}飛行小隊^{プガン}のパイロットが話しながら飛行甲板へ向かっていた。

「隊長、最新作見ました？」

「ああ見たぞ。最高だったな、特に終盤」

パイロット達は飛行隊の名前の元となった映画の続編について語っていた。

「敵から戦闘機奪って帰還するって全日本男児の憧れじゃないですか、俺も一度はやってみたいですよ」

「セイノ、それ一回墜落してないか？」

「うるせーぞレインボー」

氷室の僚機を務める第55戦闘飛行隊第1飛行小隊2番機パイロット『清野聖斗』一等海尉〔TACネーム：セイノ〕と第55戦闘飛行隊第1飛行小隊3番機パイロット『西川玲那』一等海尉〔TACネーム：レインボー〕が話し合う。

2人ともイラク・アフガニスタン・東亜の3つの戦争で大きな戦果を上げたパイロットであり、撃墜記録は清野が3機、西川が2機（及び未確認1機）である。

「隊長、そう言えば隊長のTACネームってどうやって付けられたんですか？」
「ん？それはだな…」

小隊で1番若い第55戦闘飛行隊第1飛行小隊4番機パイロット『竹中義雄』二等海尉〔TACネーム：ダクン〕が氷室に訪ねる。彼は若いものの、東亜戦争で一回の戦闘で2機、その後も1機撃墜した天才パイロットである。

「俺が空自に入った時、トムール・クルーズが来日してな。その時俺が所属していた戦闘飛行隊のF-14に乗ってき」

「トムールに名前を聞かれて、『TACネームは決まっているか？』って聞かれたんだ。

その時は入隊してからまだ日が浅かったから決まっていなかったんだよ」

「んで、決まっていなくて伝えたら『君は今から、マーベリックだ』って言われてね、それで決まったんだ」

「おお、本家公認なんですね」

「ああ、それでこのTACネームに合う様なパイロットになろうと戦ってきたら……」
「戦後最強と呼ばれるパイロットになったんですか、羨ましい〜」

清野の嫉妬する声に笑って応えるのはこの小隊の小隊長である第55戦闘飛行隊第1飛行小隊1番機パイロット『氷室零』二等海佐「TACネーム：マーベリック」。

彼は海自最強と呼ばれるパイロットであり、イラク・東亜の2つの戦いで合計7機も落としたエース・パイロットである。また、イラク戦争ではイラク海軍がソビエト海軍から譲渡されたスヴェルドロフ級巡洋艦を撃沈し、東亜戦争でも雲仙型航空母艦『四川』と山西型戦艦『山西』『重慶』の3隻を撃沈した正に生きる伝説である。

上記の通り、第55戦闘飛行隊はアメリカ海軍のプロパイロット養成所の名前がついている通り、エース級の腕前を持つパイロットを集めた精鋭部隊である。

本来ならば第55戦闘飛行隊は海自の精鋭部隊、第5空母打撃群の旗艦『ひりゅう』所屬なのだが、ひりゅうの機関が壊れてしまい、急遽ずいかに乗ることになった。

「よし、もう直ぐ発艦だ。全員愛機に乗れ」

「了解」

氷室は愛機の『F-14E』に向かうと機付整備士に話しかける。

「森山さん。こいつの調子はどうですか？」

「完璧だ。これで戦果を上げなかったら撃墜マーク消すからな」

氷室の問いに機付整備士の『森山直房』が、操縦席右側に書かれた7つの戦闘機マークと4つの撃沈マークを指す。

「ははは…勘弁してください」

「おう、心配するなジョークだ」

ジョークと言っているものの顔は笑っていない。元ヤの付く自営業と言う噂は本当かもしれない。

彼はHMDヘルメットを被り、梯子を登り操縦席に付く。

「俺は結婚してないから……これを貼っとくか」

操縦席の機器の右側に自分の隊の名前の元ネタとなった映画を元にした競走馬の擬人化した少女のイラストを貼る。彼の趣味はイラストを描くことである。

『此方プライ・フライよりトップガン11へ、聞こえるか?』

「トップガン11、通信感度良し」

『発艦は5分後だ。準備しておけ』

「11、了解」



同日11時5分――

《空母ずいかく 艦橋左舷ウイング》

佐野は艦橋で航空甲板上で行われる作業を見ていた。彼も元空母パイロットである。空母艦長は元空母パイロットであることが多く、艦載機に1番詳しいとまで言われている。

る。

「おお…」

「どうした？」

「旗艦のマスストにZ旗が掲げられています！」

佐野が自分の双眼鏡を覗いてみると、はるな型としらね型の特徴の一つである煙突とマスストが一体化したマツクにZ旗が捧げられていた。

「東郷の入れ知恵か？」

「日本海海戦に倣ったのでしょうか？艦隊決戦をやるわけでは無さそうですが」

「報告！」

見張員と雑談していると、通信員が話しかけてくる。

「どうした？」

「旗艦より通信！『本日11110、ヒトヒトヒトマル自衛艦隊司令部よりフジヤマノボレ11110、と通信

があった。我が艦隊はこれより上陸部隊援護の為第1次攻撃隊を発艦する。戦争の勝敗この一戦にあり、各員一〇奮勵努力せよ』との事です！」

「旅順湾攻撃か…いやあれも上陸部隊作戦援護では無くないか？」

「まあ良い、団司令。発艦を開始せよ」

「はっ、発艦を開始します」

佐野の後ろに控えていた齋藤がインカムを操作して発艦を伝える。

「総勢180機の大編隊か…」

「溜まりもないな…」



同日11時15分――

《第55戦闘飛行隊第1飛行小队1番機コックピット内》

『トップガン1―1、此方デツキ・エツジ・オペレーター。射出が許可された、間もなく発艦する』

「トップガンナー、アイコピー」

そうすると、カタパルト・オフィサーが氷室に向かって指を差して、右の掌を速い速度で揺らす。それを見た氷室は左側にあるスロットルを前に押し込んで、エンジンのパワーを上げる。

氷室は準備が整ったことを報告する為、カタパルト・オフィサーに向かって敬礼をする。また、センター・デッキ・オペレーターもカタパルト・オフィサーへ敬礼する。

カタパルト・オフィサーはそれを確認後、カタパルト・セーフティ・オブザーバーが安全を示す青色のランプが点灯していることを確認し、指を艦首側に指す有名な動作をする。

それを見たデッキ・エッジ・オペレーターがカタパルトの射出ボタンをクリックする。一気にF-14Eに加速が加えられ、2秒で約300km/hまで速度が上がる。

強烈な重力に耐えた後、氷室は機体をコントロールし、発艦後の合流場所へ向かった。

第14話 ニュー・ノルマンディー 中編

中央暦1640年8月25日午前11時58分――

《パーパルディア皇国 都市ノルマディンより15km南の地点》

ずいかくから発艦した第55戦闘飛行隊と第112戦闘攻撃飛行隊は上空約15,000mを飛行していた。

『こちら司令部、トップガン111へ次ぐ。攻撃を許可する、繰り返す攻撃を許可する』
「こちらトップガン111、コピー。攻撃を開始する」

第1次攻撃隊長も務める氷室2佐から攻撃命令が出される。

「どうやら敵さんは気づいて無いな…いや、気づく方が些か酷か？」

「いいかお前ら、攻撃開始！攻撃開始！」

「ロックオン！Fox2!!」

F-14EのハードポイントからAIM-9Lが発射され、上空のワイバーンへ向かう。
 サイドワインダー
 ヨコバイガラガラヘビの名を持つ短距離ミサイルは、マツハ2、5の速度で敵へ向かった。

「ターゲット、ダウン！撃墜確認！」

『こちらヴァーチュアー1、ナイススキル。我が隊はこれより飛行場爆撃を行う。ユーコピー？』

「トップガン1、アイコピー。貴隊の武運を祈る」

氷室の右側では、第112戦闘攻撃飛行隊が転針して飛行場を目指しているのが見えた。12機ものの編隊が一齐に同じ方向へ向くのは絵画の様な綺麗さだ。

「よし、俺らも飛行場へ向かう！トップガン1よりトップガンS^{スコトロ}Qへ次ぐ。トップガン2は西側の飛行場、3は東側の飛行場へ向かえ」

『トップガン2-1、了解』

『トップガン3—1、了解した』

「派手にぶちかまして来い。トップガン1—1よりトップガン1各機へ。突撃陣形作れ」

『1—2、了解』

『1—3、OKです』

『1—4、了解しました』

4機の小隊が菱形の編隊から左下がりの編隊になり、編隊を作る。編隊を作るまでの速度は素早く、練度を思い知らされる。

「飛行場視認！攻撃開始！」

4機の雄トムキヤツト猫は獲物を求め、翼を翻した。

◆◆

同日12時00分——

《パーパルディア皇国 都市ノルマデイン 北飛行場》

ノルマデインの北飛行場の待機場では、迎撃係の竜騎士『メルボス』が待機していた。

彼は元々予備役の騎士であったが、日本との一連の戦闘で竜騎士を大量に失った為、予備役の騎士も現役に差し戻すことになった。

「おうよしよし。ここが気持ちいいんだな」

「グルグルグ〜ルルル」

「よしよし」

メルボスは相棒のワイバーンの頭を撫でる。なぜワイバーンロードではなくワイバーンが使われているのかというと、こちらも大量にワイバーンロードを損失し、またワイバーンロードは戦闘能力強化の代償として、生殖能力が失われており一代限りな為、補完がつかなかった。

ワイバーンロードやワイバーンオーバーロードもある程度残っているものの、殆どが皇都防衛隊に回されている。

「(しかし…ロード種やオーバーロード種でも勝てなかった相手にワイバーンで勝てるのか?…)」

メルボスは皇都攻撃事件（エストシラント空爆のパーパルディア側の呼称。空爆という概念がない為）で日本の戦闘機を目にしており、日本軍が途轍もない高性能の飛行機を持っているのも把握していた。

「はあ……どうすれば良いんだ……」

溜息を付き、その悩みを断ち切る為に空を向く。上空には警戒体制のワイバーン25騎が上空を飛んでいた。ワイバーンの編隊はいつもは悩みを断ち切ってくれるが、今はそうではない。

その時、メルボスの目の端に高速で飛翔する矢の様なものが映った。彼は現役を退いてから何年か経っており、ワイバーンに騎乗するのも久しぶりであったが、現役時代はパーパルディアとも言われる竜騎士だった。

そのため動体視力は良く、今でも通用した。彼はそれを仲間伝えようとした時——上空のワイバーンが飛散した。

飛散し肉片になるワイバーンだった物、四肢が挽げ、臓物を撒き散らす人間の原形をとどめていない物。それを目で把握した瞬間、彼は本能的に一つの単語を思い浮かべる。

「敵襲！敵襲！」

「つつ!!」

その言葉は自分ではなく、北飛行場の管制長によって放たれた。言葉を把握すると共に、彼は日本国の攻撃だと確信する。

「メルボス急げ！緊急発進だ!!」

「はっ!!」

旧知であつた管制長の言葉で彼はワイバーンに跨り、手綱を握る。急いで滑走路へ向かい、発進位置についたらワイバーンの羽を羽ばたかせ、離陸可能な速度まで上げる。

「よし！行くぞー！」

手綱を動かし、ワイバーンに離陸を伝える。それを感じたワイバーンは走り、離陸する。

「——ん？」

その時、左側の待機場近くで兵士達が空を指で指しているのが見えた。彼もそれに釣られて左上の空を向く。

「なっ!!」

左の空には、敵機がいた。戦勝祭（パールパーティア皇国がパールネウス共和国だった時、初めて勝利した事を祝う皇国最大の祭り）の時に見たワイバーンオーバーロードの編隊よりも綺麗に飛んでいる。オーバーロードの編隊飛行を見た時はオーバーロード種の力強いフォルムに感動し涙も流したが、この敵機の姿も綺麗で見惚れてしまいそうであった——それが自分を攻撃しようとするもので無ければ。

「うおおおおおおおおお
!!!!!!」

手綱を力の限り手前に引っ張り、離陸させようとする。その時、後ろから莫大な力と熱を感じ、前に回転する。

「うおっ!」

視界が反転し、体の節々に痛みを感じる。どうやら滑走路の端に転がった様だ。彼は力を入れて立ち上がる。

「——は?」

彼の視界の先には無惨に破壊された滑走路と粉碎された待機場。そして命を散らしている軍人達がいた。現実を理解できずに見つめていると、ドンという音と共に遠方にキノコ雲が見えた。

「……」

おそらくあの辺には陸軍の弾薬庫があった。そこが破壊されたのであろう。メルボスは呆然と破壊された場所を見ることしかできなかった。



同日午後12時15分――

《パーパルディア皇国 都市ノルマディンより南方の海域 旗艦はるな司令部》

「第一次攻撃隊長氷室2佐より通信！ 『トラ・トラ・トラ。我奇襲に成功せり。敵軍陣地被害大、再攻撃の必要無し』」

「おお。流石氷室2佐だ」

「エースパイロット様様だな」

通信員の報告に司令部の司令部幹部達が反応する。

「司令、これより第825―1合同任務部隊と第825―2合同任務部隊に分割します。宜しいですね」

「ええ、やって下さい」

「はつ、全艦に下令。第825—2合同任務部隊は上陸部隊を援護せよ。なお、指揮権は第1護衛隊群司令に委ねる」

「了解しました。『第825—2合同任務部隊は上陸部隊を援護せよ。なお、指揮権は第1護衛隊群司令に委ねる』打電します」

◆◆

5分後——

《第1護衛隊群旗艦 しらつゆ型ミサイル巡洋艦『しぐれ』戦^c闘指¹揮所》

第1護衛隊群旗艦を務めるミサイル巡洋艦の戦^c闘指¹揮所で第1護衛隊群司令『松本大輔』下級海将は、艦隊司令部から届いた命令を見ていた。

「ふむ、では行こうか」

「はつ、艦隊へ通達。全艦針路0—4—5、第2船速。第826合同上陸任務部隊と合流せよ」

「了解、おもおおかあじ45度。両舷第2船速」

「おもおおかあじ45度。両舷第2船速!!」

司令の言葉に艦長が答え、それが航海長から航海員に舵が伝えられる。艦は右に旋回し、針路を一路第826合同上陸任務部隊の方角へ向かう。

前面の大型モニターには各艦の現在位置が映し出される。それを見ながら司令は艦長へこう伝えた。

「私は司令部作戦室^{F I C}に向かうよ。ここは頼んだ」

「はっ」

この合同部隊の指揮権は司令にあるので、針路や作戦を決める幕僚達がいる司令部作戦室^{F I C}へ向かった。

数分後、戦闘指揮所^{I C}に一つの報告が入る。

AN/SPQ-9Bコンタクト
「リーダー探知。目標、速度15ノット、針路1—3—5、距離45km!」

「敵味方識別装置^{F I F}に応答無し。味方艦ではありません」

「…第3文明圏の船か? 敵味方識別装置^{F I F}に応答しないしな。だが、政府から作戦行動中、当該海域の侵入を控えるよう通達しているだろう?」

「確認の為、F—35を上げた方が宜しいかと…」

「うん、司令に具申してみよう」

艦長の具申はすぐさま取り入れられ、第5軽空母護衛隊群『いぶき』から発艦したF—35Bが現場に向かった。



同時刻——

《パーパルディア皇国海軍第1艦隊 装甲艦『パーパルディア』》

パーパルディア皇国海軍の新鋭艦『パーパルディア』はノルマディン沖を航行していた。パーパルディアは国自体の名が付けられている通り、皇国海軍の最新・最強艦であり、ムーの旧式艦『ラ・センティバル』級とマジカライヒ共同体の機甲戦列艦『フォスドルフ』級、ミリシアルの『クロム』級魔導戦列艦をベースにパーパルディア製の新型対魔弾鉄鋼式装甲を乗せて開発された艦であり、皇帝ルディアスも期待している艦であった。

だが、エストシラント沖海戦で海軍が全滅し、この時パーパルディアは大型の洞窟基地に隠れていた為無事であったが、護衛する艦がない為出撃の機会がなかった。(またアルタラスが陥落した為、魔石の在庫が無かったのも関係した。この艦は燃費が悪い

のである)

そのまま出撃の機会は無いと思っていたが、皇国軍上層部は日本軍の本格侵攻が近いことを予測してこの艦を哨戒用として使うと決定した。

だが、普通に哨戒すると日本海軍に直様撃沈されるので、ある事をしていた。

「はあ…」

パーパルディア艦長、『フォレストル』は哨戒を始めてから何度目か分からないため息をついた。理由は彼が見上げる旗にあった。

「まさか我が国の艦が蛮族の旗を掲げることになるとは…」

マストにはパーパルディア皇国の旗ではなく、第1文明圏の中央法王国の旗が掲げられていた。フォレストルは皇国の中でも差別思想が強く、自国と対等の立場を認めるのは列強国のみで、他の国には文明国・文明圏外国を問わず、自国の国民に対する治外法権を認めさせるというパーパルディア皇国自身の具現化のようでもあった。

性格は最悪だが、戦略面では優秀であるので、本艦の艦長を務めていた。

「日本め……皇国に泥を塗るなど……だが、彼の国の兵器はムー以上だと聞く。慎重に戦わなければな」



5分後――

《海上自衛隊第1艦隊第5軽空母護衛隊群第5軽空母航空団 アルバトロス― コックピット内》

第5軽空母護衛隊群第5軽空母航空団のアルバトロス小隊の隊長を務める『迫水洋平』3等海佐はレーダーを見ながらAN/AAG-40 EOTSのカメラを見ていた。

「あれか」

カメラの中に、大型の戦列艦が見えた。迫水は本物の戦列艦を見たことは無いので内心興奮する。

「アルバトロスより司令部、敵艦確認。国旗は恐らく中央法王国だと思われる」

『了解、確認した。アルバトロスは上空で待機していてくれ』

「アルバトロス、コピー」

アルバトロスの報告を聞いた司令部は、台湾公国海軍の第1部隊第11駆逐中隊に臨検命令を出した。

◆◆

15分後――

《パーパルディア皇国海軍第1艦隊 装甲艦『パーパルディア』》

「敵艦発見！」

「遂に来たか」

フォレスタル艦長は首に下げていた双眼鏡を除いて報告にあつた方角を除く。そこには第11駆逐中隊の丹陽型駆逐艦『咸陽』が近づいてきていた。咸陽は日本のやまぎり型護衛艦を輸出した艦である。

「よし、攻撃用意。決して気づかれるなよ、許可あるまで発砲不許可」
「了解」

魔信で現在位置を送り、敵艦の位置を伝える。これでワイバーン部隊が攻撃を開始するだろう。

パーパルディアの魔導砲はミリシアル製を模倣した砲であり、精度も良く連射も効く。

その時、敵艦が手旗で世界共通の通信を試みてきた。

「艦長、敵艦から『我、新世界条約機^N構^W所^T属^O、台湾公国海軍『咸陽』である。貴艦の所属と目的を知りたい』とのことですよ」

「日本では無いのか…だが良い。手旗信号は無視しろ」

フォレストルは咸陽が魔導砲の射程に入った時、射撃命令を出した。

「てえ!!!」

砲門を塞いでいた板が外れて、魔導砲は射撃を開始した。



5分前――

《台湾公国海軍第1部隊第11駆逐中隊『咸陽』艦橋》

「おお…あれか」

「はい、外輪を付けた『ウォーリア』に見えます」

咸陽艦長『品睿』は、双眼鏡で中央法王国の旗を掲げた船を見ていた。

「哨戒に来た船かな？まあ、とりあえず手旗信号で交信を試みてくれ」

「はっ」

哨戒員が手旗で信号を伝えるものの、返答はない。品は、臨検隊に立ち入り命令を出す。その時、船の側面が動いて中から砲が現れた。

「なっ！」

片舷40門ある砲が咆哮し、咸陽の舷に弾が当たって弾ける。碌な防御を施していない現代艦艇は装甲が薄く、簡単に貫通する。

「ぐおっ！くそっ！76mm単装砲用意！」

「ダメです！壊れました！」

「なにつ！」

近距離では最強クラスの艦前部に設置されている76mm砲は、最初の砲撃で破壊されていた。

「^{M2}ブローニングはどうかだ！」
12.7mm機関銃

「ダメです弾かれました!!」

パーパルディアの舷には、最新の対魔弾鉄鋼式装甲が施されており、12.7mm弾では貫通できなかった。

「くっ！ そうだ！ ^{Mk 38 25} 2 5 ^{m m} 機関砲 ^m を使え！」
 「分かりました！」

艦橋側面の Mk 38 25 mm 機関砲が動いて、パールディアに射撃を開始する。



同時刻——

《パールディア皇国海軍第1艦隊 装甲艦『パールディア』》

フォレスタルは、1射目は当たったものの、その後は全く当たらない事にイライラしていた。

「敵艦撃つてきました!!」

敵艦発砲の報に一瞬フォレスタルは身構えるも、撃ってきたのは20mm級の魔光砲であり、船体を貫通するだけで炸裂はしない。

「なんだ？」

そう思っている時、その矢が超高速で艦中央部に突き刺さった。

「——は？」

大きな爆発と共に、艦が揺れ、フォレストルは腰を甲板に打ちつけられる。

「ぐおおおおおお…何があ…」

「ひ…被弾しました！」

それは解っている——そう言おうとした時に、2弾目を被弾した。2弾目は…被弾した位置が不味かった。

機関用魔石の集積所。そこに被弾したパーパルディアは大爆発を起こした。

艦中央から真つ二つにされたパーパルディアは、フォレストル艦長と共に、深い海へ沈んでいった。

「ターゲット、デストロイ。撃沈確定」

『了解、よくやった。帰還せよ』

「了解、
Return To Base
RTB」

F-35Bから発射されたAGM-65Gマーベリックによって、パールディア皇
国海軍装甲艦『パールディア』は沈没した。



10分後――

《パールディア皇国 都市スミントン ラストルコ洞窟基地》

「離陸準備！離陸準備急げ！！」

大規模な洞窟を基地にしたラクストルコ洞窟基地。その中では、装甲艦『パールディア』からもたらされた情報をもとに、現在パールディアに残っているワイバーンの80%を使つた総攻撃をしようとしていた。

また、今回の作戦はある非人道的作戦が模索されていた。

「基地長殿に敬礼っ！」

竜騎士達は基地長に敬礼をした後、酒の入ったグラスを飲み、飲み切った後叩きつける。

「出撃！・出撃!!」

滑走路の脇では、軍人達が離陸する騎に向かって敬礼したり、手を振ったりしていた。パーパルディア皇国軍のワイバーンら950騎は、第825―2合同任務部隊に向かっていた。



同日13時50分――

《第825―2合同任務部隊旗艦『しぐれ』戦_c闘_i指_c揮_s所》

「ECH―53Gより通信、『敵編隊捕捉、編隊数950機、方位2―8―0、距離368km、速度200km』」

「950機!? そんなに隠していたのか!!」

「既に場所がバレているので即急にトマホークが撃ち込まれるでしょう」

しかし場所を破壊しても離陸したものは破壊できない。この950機を撃墜せねばならない。

「もうすぐ本艦A N / S P Y I Aのレーダーでも補足できるでしょう」

「軽空母艦載機で数を減らした方が宜しいかと…」

「そうだな… 第2・5両軽空母打撃群司令に発艦命令を出してくれ」

「了解しました。第2軽空母打撃群・第5軽空母打撃群に迎撃命令を出します」

松本の指示は第5軽空母打撃群司令『涌井継治』海将補の耳にも入った。

「迎撃命令か… 秋津1佐。どうする」

「はっ、アルバトロス隊は迫水3佐が帰還していないので待機。他の隊は全て離陸させた方がよろしいかと」

「うん。完璧だ」

「淵上1佐。スパロウ・ターキー・アウル隊は直ちに発艦せよ」
「了解しました」

『いぶき』艦長『秋津竜太』1佐の具申に涌井は賛同し、第5軽空母航空団司令『淵上晋』1佐に発艦命令を出す。

「発艦！発艦！」

「急げ！」

飛行甲板上が忙しくなり、乗員達が忙しく動き回る。

『こちらCATCCよりスパロウ1へ、離陸を開始せよ』
空母航空管制室

「スパロウ1、離陸を開始する」

第2軽空母打撃群・第5軽空母打撃群の『かが』と『いぶき』は合計25機のF-35Bを離陸させた。



同日14時――

《第825―2合同任務部隊より350kmの海上》

パーパルディア皇国攻撃隊長『エルヴェネス』は前方に目を光らせていた。

彼はパーパルディアでは殆どいない熟練の竜騎士。

そのため、乗るワイバーンもノーマルのワイバーンではなく、ワイバーンオーバーロードである。

彼は今までの情報から、日本軍は高速で飛行する矢で我々を撃墜する事を知っていた。

「つつ!!来た!」

前方には50ほどの光の矢。あれ全てが的確に我々に突っ込む魔矢である。

エルヴェネスはオーバーロードを低空にやり、編隊に指示を出す。

「密集するな!騎と騎の間を取れ!」

密集するほど連なってやられる。そう考えたエルヴェネスは指示を出した。

「ぐおおおおおおおおおおおお」

程なくして矢が着弾し、凡そ100騎程が命を刈り取られる。

「(このペースなら敵艦隊まで十分届く!!)」

「よし！突撃いいいいいいいいいい！！！！」

約850騎のワイバーンは突撃を開始した。



5分後――

《第825―2合同任務部隊旗艦『しぐれ』戦闘指揮所》

「F―35Bの16式空対空誘導弾、04式空対空誘導弾計100発着弾。全弾命中」

「敵編隊依然進路変わらず」

「まだSM―2の距離ではないな、『とさ』に主砲射撃命令」

「了解、『とさ』に主砲射撃を命令します」

とさ艦長『松田美麗』1等海佐は、司令部からの命令を聞いていた。

「ふふふ…来たわ！ついに来たわ！『対地だけする女』『艦砲射撃だけするデブ』と云う不名誉なあだ名を撤回する日がね!!」

「誰から言われているんですかそれ…」

とさ副長『京極隆史』2等海佐の言葉を耳から削除して、松田は主砲射撃の命令を伝える。

「主砲右砲戦用意！弾種対空拡散榴弾！目標、敵編隊」

「右砲戦用意、弾種対空拡散榴弾。目標、敵編隊」

「主砲射撃稜線確保！」

「撃ち方始め！」

「撃ち方、始め。てえ!!!」

連続して放たれた12発の46cm砲弾は、砲弾下部のロケットモーターで位置を修

正して敵編隊に突っ込む。

戦闘A I 『高天原』によって計算された、86式対空拡散榴弾は、対空攻撃に於いて大きな攻撃力を発揮する。

数秒後、敵編隊の前で近接信管が作動し、996個の焼夷弾子は3,000度で約5秒間燃焼する。

高速の粒子は、ワイバーンを容易く貫通し、海に屍をばら撒く。

◆◆

5分後――

《第825―2合同任務部隊旗艦『しぐれ』^C戦闘指揮所^I》

「とさの主砲弾、敵機105機を撃墜。残り745機！」

「敵編隊、SM―2の射程圏内に入りました！」

「全兵装使用自由！1機も逃すな！！」
オールウェポンズフリ

「了解、全兵装使用自由」
オールウェポンズフリ

司令部の命令を受けた各艦は、艦長の元次々と命令を下す。

「745機……だがイージスの^神システムの前には無力だ」

あたご型護衛艦『あたご』艦長、『西村和良』1等海佐は、迎撃命令を出す。

「我が艦の迎撃担当目標は？」

「この編隊です。編隊数15機、高度100m、速度200km/h、距離165kmです」

「この目標を目標群^{アルファ} aとする」

「対空戦闘、方位3―2―0、距離160kmに備え！前部VLS、1番から15番発射準備」

「目標攻撃諸元入力完了！」

「目標群^{アルファ} aに対し前部VLSよりSM―2、15発発射。発射管制は手動で使用！」

「発射管制^{マニュアル}手動で使用！」

「撃ちいー方始め」

艦長の指示に、砲雷長が直様反応する。

「目標、^{アルファ}a 編隊。前部VLS1番から15番、SM-2発射用意！」
 「SM-2、^{サルボ}斉射！てえー!!」

あたごの艦前部に設置されたMk. 41 mod. 20 VLSの内、15のミサイル・セルからSM-2ブロックIIIBが発射される。

全長4.72 m、直径0.34 m、重量708 kgのスタンダードミサイルは15機のワイバーンに的確に突っ込む。

近接信管が作動し、先ほどまで生きていた物は物言わぬ死体になる。

◆◆

10分後――

《第825―2合同任務部隊旗艦『しぐれ』^C戦闘指揮所^C》

「『あたご』SM-2第5波、全弾命中。30機撃墜！」

「『しなのめ』のSM-2、18発。敵編隊へ向かいます」

「残り機数は？」

「残存機数、423機！」

「上陸開始までには間に合わんな」

「はっ、ですが第826合同上陸任務部隊には『きい』や『ひぜん』、『モンタナ』も居ます。上陸作戦は確実に成功するかと…」

「そうだろうな。今は目の前の敵に専念しよう」

そう言つて、松本は目の前のモニターを見る。1秒ごとに数十個の光点が消える。

その一つ一つに人間が乗っていると思うと気持ち悪くなるが、すぐにその思いは消えてなくなる。

「(静香…)」

松本の娘の静香は、フェン王国虐殺事件で亡くなった犠牲者の1人であった。

フェンへの旅行は丁度松本が航海に行っている時であり、知っていたら100%止めていた。

「やられている君たちには関係はないが…この恨み。晴らさせてもらおう」



5分後――

《合同艦隊より50kmの海上》

パーパルディア皇国攻撃隊長『エルヴィネス』はワイバーンオーバーロードを必死に操り、SM-2の攻撃を回避していた。

『ああつ！ちくしょう!!』

『うわあああああ！くそおおおおお！』

魔信では、竜騎士達の決死の叫びが聞こえていた。

「（ああくそつ！我々ベテランがやらなければならない時に！新兵がやられて行く!）」

「（なにか…演説を…）」

考えついた瞬間、彼は魔信を掴んで話し始める。

「死んでいった竜騎士達はみな意味がなかったのか!!!いや違う!」

「騎士達に意味を与えるのは我々だ!!あの勇敢な死者を!!哀れな死者を!!想うことがで

きるのは!!」

「生者である我々だ!!我々はここで死に次の生者に意味を託す!!」

「それこそ唯一!!この残酷な戦場に抗う術なのだ!!」

「騎士よ怒れ!!!」

「騎士よ叫べ!!!」

「騎士よ!!」

「戦ええええええええええ!!」

その瞬間、エルヴィネスの近くでSM-2の近接信管が作動。エルヴィネスは爆発に巻き込まれ、高速で海上に叩きつけられた。



3分後――

《合同艦隊より1kmの海上》

パーパルディア皇国の新人竜騎士、『ヒルトラスト』は、ワイバーンを未熟な手で操り此処まで来ていた。

この空域の迎撃担当はクワ・トイネ海軍であり、練度が低いため、此処まで突入できなかった。

「(サフィールさんも！ソラトスルもやられた！)」

ヒルトラストの目の前には、突撃前30騎もいた仲間は4騎しかいなかった。

一方の迎撃側のクワ・トイネ海軍第1艦隊第1鉄竜艦隊第11護衛部隊所属駆逐艦の『エージェイ』は、RIM-7 シースパローや76mm速射砲、90式30mm機関銃を撃って応戦していた。

エージェイは、元中国海軍の広州級駆逐艦であり、東亜戦争で日本が鹵獲品として獲得、その後海上自衛隊国防予備役艦隊にモスボール保管されていた所を復活させ、クワ・トイネ海軍に譲渡していた。

「撃て撃て撃て！一騎も通すな!!」

「右舷より4騎突破！」

「くそっ！」

まだ練度が十分でないエージエイは、4騎のワイバーンを取り逃す。

「4騎全機こちらに突っ込んできます！」

「後部30mm機関砲射撃開始！」

獣人の艦長が後部の30mm機関銃の射撃を指示する。直様後部の砲塔が回転し、4騎の内3騎の命を一瞬で刈り取る。

ヒルトラストだけが残り、彼は死を覚悟したが、その時30mm機関砲の残弾が切れた。

「30mm残弾無し!!」

「何い!!」

ヒルトラストはチャンスだと思い、最後の力を振り絞って突撃を開始する。

「パーパルディア皇国！皇帝陛下ばんざあああああああいいいい!!!」

エージエイの舷側に突っ込む寸前、ヒルトラストは魔法でワイバーンの体内を爆発させる。その爆発によってエージエイの舷は大破する。

「ぐおおおおお…被害報告！」

「敵騎が舷側に突っ込み、魔法でワイバーンの体を爆発させました!!」

「なんと…捨て身の攻撃か…」

ヒルトラストが突っ込み、エージエイが大破するところは旗艦の『しぐれ』でも見えていた。

「敵機は回避行動を取らずにそのまま突っ込んだそうです」

「…特攻か。クワ・トイネの艦にはCIWSがついていないからな」

「だが脅威になり得る。一機も逃すな」

「はっ」

数分後、突撃したパーパルディア皇国攻撃隊950騎は全て撃墜された。

第15話 ニュー・ノルマンディー 下編

中央暦1640年8月25日12時50分――

《パーパルディア皇国 都市ノルマディン沖 第826合同上陸任務部隊 旗艦『しきしま』》

第826合同上陸任務部隊を務める『秋山正信』下級海将は、『しきしま』の司令部作戦室^Cで通信員の報告を聞いていた。

「第825―2合同任務部隊は敵飛行部隊迎撃の為、合流できない様です」
「そうか」

援軍が居なくなるのは心配であるが、この艦隊も大部隊であり、その考えは杞憂であつた。

《第826合同上陸任務部隊編成》

【日本国海上自衛隊】

- 第1艦隊
 - 第1護衛隊群
 - 第1揚陸隊／第11水陸機動戰隊
 - 第7護衛隊
 - 第8護衛隊
 - 第2護衛隊群
 - 第2揚陸隊／第12水陸機動戰隊
 - 第4護衛隊群
 - 第4揚陸隊／第14水陸機動戰隊
 - 第5護衛隊群
 - 第5護衛隊
 - 第5護衛隊群
 - 第5揚陸隊／第15水陸機動戰隊
 - 第6護衛隊
 - 第6護衛隊
 - 第12護衛隊
- 第2艦隊
 - 第6揚陸隊／第16水陸機動戰隊
 - 第6護衛隊群
 - 第13護衛隊
 - 第20護衛隊
 - 第7護衛隊群
 - 第3輕空母打擊群
 - 第3輕空母打擊群護衛隊群
 - 第3輕空母航空団
 - 第14護衛隊
 - 第21護衛隊

第6艦隊 第8揚陸隊／第18水陸機動戦隊

第9護衛隊群 第5ヘリコプター空母打撃群

第16護衛隊

第23護衛隊

【アメリカ合衆国海軍】

第1艦隊 第1両用部隊

第11駆逐戦隊

【イギリス王国立海軍】

本国艦隊 第1上陸作戦群

第12駆逐艦隊

【フランス共和国海軍】

第1艦隊 第11上陸部隊

第32駆逐隊

【大韓共和国海軍】

補助艦隊 第1揚陸部隊



同日10分後――

《パーパルディア皇国陸軍 新皇都防衛隊 第1軍団 将軍『ノームアルト』》

第1軍団の将軍、『ノームアルト』は心配を隠せないでいた。

彼は日本軍の兵器が異次元であることも知っていたし、もうすぐ本土に上陸してくると、直感的に把握していた。

先程も超高速の飛行機械が飛び回り、軍の備蓄庫を正確に吹き飛ばした。

その時、彼の元に一本の魔信が入る。山頂の高倍率双眼鏡を配備してある監視拠点からであった。

「どうした!」

『て…敵の超巨大飛行機械が高空より接近! 距離10km!!』

「!!」

彼はその超巨大飛行機械が皇都を爆撃したものだ と確信して、指示を出す。

「壕に隠れろ!!」

「了解しました！総員退避！塹壕に立て籠れ!!」

ノームアルトは日本軍との戦闘を分析して、日本にワイバーンがない事を知った。ならば対ワイバーンでは火炎放射で炙られる塹壕に立て籠れば、少しは攻撃を回避できるのではと考えて、塹壕を掘った。

これであればあの空からの攻撃は防げる——。そう思ってた。

塹壕に入ってから数分後、頭上でドシン、ドシンと言う、空からの爆弾の着弾音替え聞こえる。

「ぐおっ！」

「……」

「ぐ……」

塹壕の中は蒸し暑く、蒸し蒸しとするが、死ぬよりはマシだと考えてひたすら耐える。

「……終わったか」

「外に出ましよう」

体感にて1時間、本来はそれよりも短いが——爆撃は終わっていた。

だが、地上は悲惨の一言であつた。

塹壕に入れなかつた兵士が散らばり、塹壕に隠れていても塹壕ごと生き埋めになつたり、爆散していたりした。

「これは……酷い……」

想像を絶する光景に瞠目していると、兵士が勢いよく報告して来た。

「司令！沿岸に敵多数!!」

「なにい！」

首元につら下げていたムー製の双眼鏡を除くと、そこには皇国海軍の数倍もいる艦船が数十隻も鎮座していた。一番大きい艦は、ムーの戦艦のような旋回砲塔を此方に向けている——

「不味い！艦砲射撃だ!!」

昔、ムーの海域の近くで暴れていた海賊の本拠地をムーが攻撃する際、観戦武官として派遣され、艦砲射撃の威力を見た。その恐ろしさに当時は鳥肌をかき、海賊を哀れに思ったが、こちらが攻撃される番となった。

その時、砲塔から煙が上がった。発砲したのだ。ノームアルトの生存本能が刺激され、『逃げろ』と語りかけてくる。

「逃げ——」

瞬間、ノームアルトの下半身の感覚がなくなり、彼は前のめりに倒れる。腕で立ち直り、下を見ると——体が半分無かった。

「あ、あ……あ」

「し……しに……」

死にたくない――

助けて――

そう思つて神に助けを求めるが、神は傲慢であり、非情である。

「あ――」

次の瞬間、炸薬量84kgの51cm砲弾が直撃し、近くに爆炎と爆風が乱れる。
煙が晴れた先には、何も無かった。

◆◆

1時間後――

《日本国海上自衛隊　しなの型強襲揚陸艦『あかぎ』ウエルドック『AAV-7』兵員室内》

俺の名前は、『石鎚健斗』2等海兵曹。日本国海兵隊に所属している。
筋肉達磨野郎だけの狭っ苦しい兵員室に押し敷けられている。

相棒のACOGを付けた89バ式小銃デイもずつしりと重さが伝わる。

今回の敵はパールなんとか？とか言う国らしい。

まあ、俺からしたら日本の敵ってだけで良いけどな！

東亜の時の旅順上陸の時みたいな激戦じゃ無いことを祈るぜ。

「おい、石鎚二曹！へばってんじゃねえぞ！！気イ引き締めろ！！」
「イエツサー！！」

声をかけて来たのは、小隊長の『山下哲也』1等海兵尉。

元レンジャー教官という恐るべき存在だ。

彼に決して髪の話をしてはいけない。

前、髪ではなく紙の話をしていた同僚が10m吹き飛ばされてガラスを破って3階から落ちたのを見たことがある。

…あいつ元気かな。

「間も無く上陸です！」

「分かったか野郎ども！ケツの穴と装備閉め直せ！！」

「「イエツサー！！」」

「第1分隊よし！」

「第2分隊！ケツの締め直し！」

「第3分隊、いつでも行けます!!」

「野郎ども! 出撃だ!!」

「「おう!」」

そう考えていると上陸が近づいたようだ。

神経を研ぎ澄ませる。

「え〜ご購入乗車有り難う御座います。本車両はあかぎ発、ノルマティン行き急行A A V
7です」

「次の駅は終点ノルマティン。お出口は後方です。お忘れ物の無いようご注意ください
い、ハハハハハハ」

「降車降車降車! G O G O G O G O!」

後方のドアから海岸に出ると、そこは地獄であった。

こびりついた血、謎の物体。死体が焼ける匂い。

ウエツ: 此処は旅順よりある意味地獄だぜ。

しかしどうすつか: 殺すべきクソ野郎どもが1匹もいねえぞ。

小隊長殿に尋ねるか？ いや前、訓練でそれ聞いて鉄鉢の上から叩かれて気絶した奴いたな。

…あいつも元気かな？

まあ、丁寧に尋ねれば叩かれないだろう。

「小隊長殿！ どうするのでありますか？」

「うるせえ!! 黙ってろ、ドタマかち割るぞつ!!」

ヒエツ、こつわつ。 やっぱり元ヤンじゃ無いかなこの人。

前寿司と一緒に食った時、『手が汚れるのがやだ』とか言つて素手で食つてたし。

「ほう… ほう… そうですかい。 その仕事、ウチの組がやりましょう」

組つてなんだよ。 ヤ○ザかよ。 やっぱり元ヤンじゃん。

そう考えていると、小隊長が目標を伝える。

「野郎共！ 仕事が入った。 正面の洞窟に数人隠れているらしい。 しかも将校クラスがい

る様だ。将校は捕縛しろ。後は殺せ」
「「イエツサー!!」」

しかし道中は遮蔽物が全く無いな。

気をつけて進まなければ。敵は旧式っていうレベルじゃない程の大砲を使っているらしいが、大砲は大砲だ。

神経を研ぎ澄ませ、注意を払いながら進む。そうすると、目的の洞窟までたどり着いた。

聞き耳を立てると、どうやら階級は少将らしい。あれは多分俺たちの攻撃を見てイカれちまつてるな。

小隊長殿が閃光グレネードを投げるそう。この狭い空間なら確実に平衡感覚を無くせるぜ。

「手榴弾投擲い!!」

光と共に呻き声上がる。：敵は哀れだな。俺たちの姿形を見ずに逝っちゃまう。

「行け行け行け!!」

中に一気に押し入り、兵士だけを殺す。将校はびびって股間が染みてやがる。汚な(本心)。

「ヒイ!なんだ貴様らは!!」

「泣く子も黙る日本海兵隊だあ!!全員お縄に着きやがれ!!」

…お縄に着く前に鉛玉食らってるんですがそれは。

小隊長殿の言葉を半端無視して、喚くデブの将校に拘束バンドを巻き付ける。

「俺は南部上流貴族!!ウォールトン家の長男スミルスト・ウォールトンだぞ!何をする!!」

「ああ?動くなつ。撃つぞゴラ!!貴様は捕虜だ。変な動きをしなけりや命は保証してやる」

「なんだと貴様あ!!寂しい頭で恥ずかしくないのか!!」

「「あつ(察し)」」

「…なんだア?てめエ……」

なんて事だ、もう助からないゾ♡(震え)。

いやマジでどうにかしないと将校殺しちまうぞ!!どうしよ!!

「小隊長殿!!上層部からの命令は生捕りです!殺すのは不味いかと!!」

「…ちっ!助かったな貴様」

第1分隊長殿!!長年の付き合いの分隊長殿の言葉なら聞いてくれる。

よかった。これで治るぜ。

「石鎚二曹!こいつを母艦まで輸送しろ!」

「サー!!イエツサー!!」

◆◆

同時刻——

《パーパルディア皇国 都市ノルマディン沖 第826合同上陸任務部隊 旗艦『しき

しま』》

「海兵隊より連絡！ 『敵少将クラスの捕虜を獲得。母艦へ輸送する』とのことです」
「了解した」

「司令、橋頭堡を確保しました。上陸作戦は成功です！」

「よし！皆よくやってくれた!!」

艦橋の要員が喝采を上げる中、秋山は隣にいる2人の観戦武官に話しかける。

「どうですか？我が海兵隊の実力は？」

その言葉に技術士官の『マイラス』は顎に指を当てながら返答する。

「凄まじいですな。特にあのL C A C?でしたかな？あれは凄まじい」

「どう言う原理で動いているのですか？」

「ああ、あれは吹き込み口以外に穴が空いており、風船の様に浮き上がってるわけではなく、あちこちの穴が十分に小さいので、吹き込み口から十分に空気を送り込んでおけば、狭い穴から逃げられなくて風船内部にとどまり、膨らみ続けるのですよ」

「私は技術系ではありませんからうまく説明できませんが……この様な感じですよ」

考えもつかなかつた原理に驚くマイラスを他所に、戦術士官の『ラッサン』は答える。

「それも凄まじいですが、私が一番驚いたのはヘリコプターです」^{LCA}

「あれがあれば陸の戦場は、兵士達が二次元で戦つて来たのが三次元に広がる。一直線ではなく、点と点をつなぐ様に飛行できるあれば凄いですよ」

「もし我々が輸入できたら戦場の常識が変わるでしょう」

その後も3人の話し合いは続いた。



中央暦1640年8月25日夕方――

《パーパルディア皇国 皇都エストシラント 皇城パラデイス城》

皇城パラデイス城の謁見室では、皇国軍最高司令官『アルデ』が皇帝『ルディアス』に對日本国に対しての作戦を説明していた。数時間前に沿岸部に日本国海軍の姿が見えたと報告され、ワイバーン部隊に攻撃命令が出ていた。

「——よって、先程報告にあった部隊が上陸部隊の可能性は高いですが、皇都防衛隊第1軍団が展開しており、日本軍が上陸しても、付近に駐留中の第2・3軍があり、3個軍団で30万の兵士を従えています」

「ほう…第1軍団が敗れたらどうする」

「はっ、日本軍の陸軍部隊は数は少ないので、人海戦術に寄って敵を追撃します」

「うむ、良いであろう。これならば日本と現在交渉中の和平条約を結べる」

「パーパルディア皇国は日本やNATOと外交が通じていないので、日本と交友があり、パーパルディアとも大使館は撤退したが、一定の関係があるムーを通じて、和平交渉を進めていた。」

「余は降伏は認めぬ。講和か和平条約を結び、なんとでもこの皇国を存続させるのだ」

「はっ、ですが日本国は講和後はどのようにするのでですか？」

「…認めたくはないが、日本は強い。だから属領をまず先にする。日本と和平後、日本を通じて属領軍と講和、数年後力を貯めて属領を取り戻す」

「属領を取り戻さなければ皇国は飢餓で滅ぶ。まずは属領だ。力を貯めるのには神聖ミ

リシアルとも協力を惜しまない」

謁見室にいた全員は驚愕する。皇帝はゆくゆくは神聖ミリシアルも超えると話していた。それは消えたのだろうか？

「皇帝陛下、神聖ミリシアルは超えるとおっしゃっていましたが、どうするのでしょうか？」

「…優先順序と言うものがある。まずは属領。そして日本だ。ミリシアルの技術力ならば流石に日本は超えられるまい。ミリシアルの力で日本を滅ぼし、その技術力を奪う」

「日本は科学技術国と聞いていますが、我が国とミリシアルは魔法技術国です。日本の兵器の運用はどうするのですか？」

「日本の軍人を使う。軍人でも命は惜しかろう。協力すれば褒美を与え、しないのならば殺す。そうすれば使えるであろう」

「最も、皇国兵が使用方法を覚えたのならば殺すがな」

「またもや全員は皇帝の考えに畏怖する。その時、会議室の扉が勢いよく開き、外から通信兵が入ってくる。」

「で…ですが…」

通信兵は言い淀むように話す。

「だ…第2・3軍団は敵軍上陸と同時に高空からの攻撃によって殲滅されたと…」
「……………」

既に第2・3軍団はB―1による爆撃で壊滅していた。
その報告にアルデは放心していた。

「失礼します!!」

「今度はなんだ!!」

次々とする報告に、アルデは胃が痛くなる。

「報告いたします!! 属領15か所が落ちました!!」

「くそっ!! すぐに北部陸軍を派遣せよ!」

「了解です…しかし…」

「他の属領もすべて反乱を始めました。これで72カ所すべての属領が反乱した事になります」

「また、統治戦力はすでに無く、間もなく全属領が落ちると思われます」

会議室の気温が、氷点下まで下がったと思われる。

「さらに悪い知らせが。」

「何だ…」

アルデは気絶寸前の状態で話を聞く。

「反乱軍は互いに通信し、アルタラスを含めた73カ国連合軍を名乗り、パーパルディア皇国に宣戦布告をしてきました」

「これについては元々あった軍が抑えていたため、侵攻してきたとしても、現有兵力で対応可能かと思われず」

「今のところ、反乱以外に目立った動きはありません」

「…そうか。ご苦労」

そう言つて通信兵は出るが、彼はそそくさと歸つていった。
何故ならルディアスの怒りが頂点に達していたのである。

「おのれえ…日本があ…」

それを側近たちは、ビクビクとしながら見るこゝししか出来なかつた。

◆◆

中央暦1640年8月26日早朝――

《パーパルディア皇国 東部地方都市アルフォイ 近郊》

東部地方都市アルフォイの近郊では、陸上自衛隊南部方面隊第6騎兵師団第3空中騎兵旅団第9空中機動連隊第1大隊とパーパルディア皇国陸軍東部防衛第1師団が戦つていた。

沿岸部では、大隊を率いる『桐生五阿』2等陸佐が司令部を率い、サーフボード片手にやつていていた。

120mm滑腔砲を撃つ10式戦車C型の後ろで副司令と桐生は争っていた。

「2佐!!あまりにも危険すぎます!!」

「うるせえぞ!3佐!!俺が安全と言ったら此処は安全なんだ!!玉無し野郎は自宅でマミーの母乳でも吸ってな!!」

「何がなんでもサーフィンをする!!」

そう桐生は言う上半身裸になり、サーフィンの準備を始める。

「クソツタレ!なんで火縄銃相手に苦戦してんだ!サーフィンは神経を研ぎ澄まさない
とやれないんだぞ!!」

「敵がヤシ林の中に立て籠もり、ゲリラ戦を展開しているので迂闊に入れません!」
「ならば貴様らにナパームの使い方を見せてやる!!」

「正確に言えばナパームでは無くMk. 77だけどなあ!H A H A H A」

ナパーム弾は2000年前後に処分されていたので在庫はない。だがMk. 77
はナパームと似た性質を持っている。

彼は無線機を掴み、上空を飛行する前線航空管制機の『O/T-4A』に連絡する。

「無線を貸せ!!」

「ダブ4へ! 近接航空支援を要請する!! あそこのヤシ林を、吹き飛ばせ!!」

「こちらダブ4、了解」

「石器時代に戻せ!!」

O/T-4Aの後部座席に乗る統合末端攻撃統制官の機上前線航空管制官は、近くの『F-15E』へ爆撃命令を出す。

『ホーク1-2機へ、ヤシ林にMk. 77をぶち込め』

『任せろ、やつつけてやるぜ!』

『ヤシ林の敵兵を殺る。編隊を崩すな、投下したら離脱する』

Mk. 77を胴体下に吊り下げるF-15Eは編隊を組み、右へ旋回する。

投下場所の上空をO/T-4Aが飛行し、場所を指し示す。

『行くぞ』

『目標到着まで30秒。下がってろ。派手に行くぞ』

30秒後、第1師団が立て籠っていたヤシ林は爆撃され、大きな火焰が上がる。

灯油284リットルの爆弾は何個も炎上し、パールディア兵は地獄よりも辛い苦痛を味わいながら絶命する。

大規模な火焰を見ながら放心する部下に桐生は話しかける。

「朝のナパームの匂いは格別だ」

「昔イラクで12時間ブツ続けで丘を爆撃してな、その跡を散歩したが死体一つ転がっていなかった」

「そこら中にガソリンの匂いがした」

「……………勝利の匂いだ」

その後も、第6騎兵師団第3空中騎兵旅団第9空中機動連隊第1大隊は快進撃を続けた。



中央暦1640年8月26日午後――

《パーパルディア皇国 皇軍司令室兼大本営地下壕》

大本営が日本軍の飛行機械の攻撃によって破壊された為、急遽資材保管室として管理されていた地下壕を皇軍司令室兼大本営として使用するようになった地下壕。

現在は、日本軍による攻撃から備える為に皇帝『ルディアス』が居た。皇国軍の総司令官はアルデだが、この緊急事態の為に一時的にルディアスが部隊の計画を練っている。

コンクリートで固められている廊下を第三外務局長『カイオス』が歩く。司令室の周りの廊下には参謀らが集まっている。その傍らには、第一外務局長の『アルデ』とその秘書の姿も見える。

「なぜ此処にいる。早く避難をしないと日本軍が来るぞ」

「ならなぜあなたもいるの？」

「私はこの戦争の引き金を引いた責任者として此処にとどまる」

「…大丈夫よ。陛下は仰っていたわ」

「シユータイヤー將軍の攻撃が始まれば状況は改善すると」

カイオスは周りを見渡した後、エルトと秘書にしか聞こえないように話す。

「そんなのは私も知っている。ファンタジーという事をね」

「恐らく陛下自身もな」

「皇帝陛下が私に嘘をつかれる？」

「あり得るさ」

カイオスが司令室に入ろうと動いた時、エルトは声を上げる。

「私は信じないぞ！」

カシヤン、という掠れた音と共にドアが開き、カイオスは入った後、後ろの手でドアを閉める。

室内では中央にこの皇国皇帝であり最高指導者ルディアスがいた。

彼はムー製のメガネをかけて報告を聞いている。彼の周りには参謀らがひしめき、地下という性質も合わさり、異様な風景を作り出している。

「日本軍は広範囲で陣を突破し前進しております」

「北東部ではアルフォイを占拠し、フォルグスに進軍しております」

「北西部ではタルヤードとネルスランの郊外で行動しており、皇都西部ではルリストック・マリクード・カストロストルフの線にまで到達しました」

絶望的な報告が続くが、ルディアスは顔色を変えない。彼はパーパルディアアの将軍『シュータイヤー』が率いる精銳の皇都防衛隊第1近衛軍にノルマディンに上陸した敵を攻撃しろと命令を出していた。

将軍が時間を稼ぎ、和平交渉で停戦をする。それが目的であった。だが、命令を出してから3日経っているのに攻撃成功の報告は上がらない。

「シュータイヤー将軍の第1近衛軍が来れば大丈夫だ」

「……」

「攻撃の成果がまだ上がって来ていないが……」

その言葉に、室内の参謀らは固まる。皇国陸軍総司令官の『カイーテラ・ヴォルペル』

は、新皇都防衛隊長の『アンポータン・ヴェルヘルス』の方を向く。アンポータンは苦しい顔でアルデの方を向く。

「閣下……シュータイヤーは……」

「シュータイヤーは総兵力が乏しく、そのまま日本軍との攻撃を避けました」

「將軍は日本軍に投降したとの事です」

その言葉に、アルデはルディアスを、怒りの為に震える左手で外す。メガネを外した後、彼はゆっくりと話し始める。

「……以下の者は残れ。陸軍総司令官 カイーテラ、陸軍西部方面軍長 ヨードルフ、陸軍東部方面軍長 クレーポスル、新皇都防衛隊長 アンポータン」

呼ばれた4人と、第3外務局長のカイオス、皇国軍広報部長官のゲツベルマンが残る。その他の人員が出てドアを閉めた後、ルディアスは怒りを爆発させた。

「命令したぞ!! シュータイヤーに攻撃しろと!!」

「私の命令に背き、しかも降伏するなどなんて事だ!!」

ルディアスの怒声は、司令室の外まで聞こえ、参謀らは顔を見合わせる。

「どうしてだ！寝る間も惜しんで考えた作戦が水の泡だ!!」

「そもそも、どこの誰が、私の命令に背いたのだ！その結果がこれだ!!」

そう言うと、ルディアスはずっと作戦を考えて痛めた腰を支えながら立ち上がる。

「大っ嫌いだ！誰もが私を欺いた、外務局も！監察軍もだ！」

「将軍どもはくそつたれ以下だ、大っ嫌いだ！」

その言葉に、陸軍西部方面軍長現場上がりのヨードルフが反論する。

「陛下、余の屈辱です!!将軍と兵はあなたのために血を流し…」

「将軍なんて臆病者だ!!大っ嫌いだ！皇国陸軍のバーカ!!」

「皇帝陛下!!いくらあなたと言えども言い過ぎです！」

「うるっせえ！大っ嫌いだバーカ！」

「將軍なんてパーパルディア人の中のクズ共だ!!」

彼はそう言うと、ムーから輸入した鉛筆を机に投げつける。鉛筆は真ん中から折れ、散らばる。

「畜生め!」

ルディアスはそう言い吐き、4人を罵る。

「貴様ら、將軍と言っても知っていることは女の抱き方と兵士の消耗の仕方だ!」

「だが日本の力を見抜けなかったのは……It's judgment力足らんかった!」

「なぜ日本の情報を調べなかったのだ!!最初の報告を信じていればこうはならなかった!!」

彼はそう言い、今度はレミールへ矛先を変える。

「そもそもレミールのせいなのだ!あの姿目に刺さるニヤン!」

「いつもあいつのおっぱいぶるんぶるん！」

「あいつのせいで敗北したのだ！私への恐るべき背信行為だ！」

「私は父上の三男だったが、兄達を蹴落としたりしてこの地位まで上り詰めたぞ!!」

「だがあいつは皇族だからと言って、最初から外務省を統括し、しかも私に伝えないで日本と開戦をした!!」

「だが馬鹿には報いが来る。自分の命で購うのだ。お前ら自身の血で溺れ死ぬのだ！」

その言葉に、エルトは涙を流し、秘書に体を支えられる。

「エルト様、落ち着いてください」

今度は、ルディアスは椅子に座り、ゆっくりと話し始める。

「裏切り者が!!奴らは最初から私を騙していたのだ!!」

「終わりだ。この戦争は負けだ。パーパルディアは滅亡する」

その言葉に6人は刮目する。皇国の最高指導者、皇帝であるルディアスが負けを認め

たのだ。

「だが諸君、私がエストシラントを離れると思うならそれは大きな間違いだ」

「その前に、自身で命を絶つ」

「後は好きにしろ」

室内には、静寂だけが残った。

第16話 クーデター、そして無条件降伏

中央暦1640年9月5日夕刻――

《パーパルディア皇国 皇都エストシラント レミール宅》

レミールは震えていた。先日入った73ヶ国連合軍（属領反乱軍）およびリーム王国軍の皇国の地方都市『アルーニ』侵攻。

更に一週間前の皇都近くの日本軍の上陸。悪夢としか言いようがない。

彼女は考える。いったい何が悪かったのか……と。

自分はいつものように、皇国のために思い、『仕事』をしただけ。それだけのことであった。

恐怖による支配の歴史を重ねてきた皇国にとって、敵対の可能性のある国民に『教育』することは、当然の行為であり、7名程度に死者がとどまった事自体、行き過ぎるほどの慈悲だった。

圧倒的な国力で従属を求めるのも、弱肉強食のこの世界では当たり前のことであった。

しかし現状は、皇国海軍は存在自体が無くなり、陸軍も90%近くが壊滅。

さらに、属国のすべてが反乱し、15か国が落ち、残りのすべてが宣戦布告してくるという、皇国の存亡に関わるほどの状態になってしまった。

もはや皇国は風前の灯だ。しかも日本は私を探している。

犯罪者として、この列強たるパーパルディア皇国の、しかも皇族を裁くつもりらしい。

「(日本が憎い。日本が怖い!)」

レミールは今までの気力なく、小娘の様に布団へくるまつていた。

その時、ドアが叩かれる音がする。

涙を拭い、従者を入らせる。

「何事か?」

「皇帝陛下より緊急招集です。緊急御前会議が開かれる様です」

「何が起こった? 日本軍が皇都へ攻め入ったか?」

「それが…」

従者が言葉を一旦止め、ゆっくりと話し出す。

「日本国が我が国へ、降伏を要請して来ました」



同日午後6時――

《パーパルディア皇国 皇都エストシラント 皇城パラデイス城 謁見室》

日本との戦争後、何度開かれたか分からない緊急御前会議が開かれる。

だが、これまでと違い、かなり重々しい雰囲気漂っていた。

それもそのはず、ムーで日本と和平交渉を行っていた第1外務局職員がやっと日本大使と会えたと思ったら、すぐに降伏要求文書と要求を口にし、パーパルディア側が何も発せぬまま、退室したのだ。

皇帝ルディアスは、彼の相談役であるルパーサに降伏要求を読ませる。

「ルパーサ、読め」

「はっ」

【パーパルディア皇国への降伏要求の最終宣言】

パーパルディアの降伏のための定義および規約

中央暦1640年8月26日、東京における宣言

第一条 我々、日本国内閣総理大臣、アメリカ合衆国大統領、グレートブリテン及び北アイルランド連合王国首相兼第一大蔵卿兼国家公務員担当大臣らは、数億数千万人の国民を代表し協議の上、パーパルディア皇国に対し戦争を終結する機会を与えることと一致した。

第二条 3ヶ国の3ヶ国連合軍は増強を受け、パーパルディアに最後の打撃を加える用意を既に整えた。この軍事力は、パーパルディア皇国の抵抗が止まるまで、同国に対する戦争を遂行する一切の連合国の決意により支持され且つ鼓舞される。

第三条 パーパルディア皇国が、無分別な打算により自国を滅亡の淵に追い詰めた帝國主義者の指導を引き続き受けるか、それとも理性の道を歩むかを選ぶべき時が到来した。

第四条 我々の条件は以下の条文で示すとおりであり、これについては譲歩せず、我々がここから外れることも又ない。執行の遅れは認めない。

第五条 パーパルディア国民を欺いて世界征服に乗り出す過ちを犯させた勢力を永久に除去する。無責任な軍国主義が世界から駆逐されるまでは、平和と安全と正義の新

秩序も現れ得ないからである。

第六条 第五条の新秩序が確立され、戦争能力が目的の達成を確保するため、パーパルディア皇国のパールネウス共和国時代の領域内の諸地点は占領されるべきものとする。

第七条 パーパルディア皇国軍は武装解除された後、各自の家庭に帰り平和で生産的に生活出来る機会を与えられる。

第八条 我々の意志はパーパルディア人を民族として奴隷化し、またパーパルディア国民を浄化させようとするものではないが、パーパルディアにおける捕虜虐待を含む一切の戦争犯罪人は処罰されるべきである。パーパルディア政府はパーパルディア皇国民における民主主義的傾向の復活を強化し、これを妨げるあらゆる障碍は排除するべきであり、言論、宗教及び思想の自由並びに基本的人権の尊重が確立されるべきである。

第九条 パーパルディアは経済復興し、課された賠償の義務を履行するための生産手段が保有出来る。

第十条 パーパルディア国民が自由に表明した意志による平和的傾向の責任ある政府の樹立を求める。この項目並びにすでに記載した条件が達成された場合に占領軍は撤退する。

第十一条 我々はパーパルディア政府が全パーパルディア軍の即時無条件降伏を宣

言し、またその行動についてパーパルディア政府が十分に保障することを求める。これ以外の選択肢は迅速且つ完全なる壊滅があるのみである。

第十二条 降伏条件は、皇帝ルディアスと外務局監査室所属、皇族レミールの日本国への引き渡しを絶対条件とする。

第一三条 上記が中央暦1640年9月9日午前12時までには、パーパルディア政府が受諾せぬ場合、パーパルディア皇国の都市パールネウスへ怒った神々は星を落とす。

この言葉に、謁見室は凍りつく。

事実上の無条件降伏。会議参加者は降伏か抵抗するかを迫られる。

「今すぐ降伏すべきだ！軍は崩壊しているぞ!!」

「なんだと!!我が栄ある皇国をこうも簡単に滅亡などさせて堪るか!!」

「国を存続させると書いてあるだろう!!この降伏を飲まねば逆に滅亡するぞ!!」

「こんなのは無条件降伏だ!!国民が許すはずがない!!」

会議は大荒れになり、乱闘も起きる。

その時、皇帝ルディアスが動き、会議室内は一瞬で静寂が支配する。

「……もう持たんな……」

「(反乱……か……皇国の裏切り者としての汚名を背負う事ではか皇国を救えぬ……皮肉な事よ)」

カイオスは、現政権の打破を目的にし、反乱を決意した。

◆◆

中央暦1640年9月9日深夜――

《パーパルディア皇国 皇都エストシラント沖 浅海》

ある一隻の漆黒の艦が、浅海に浮上し、ある兵器の発射準備を整えていた。

せいりゆう型弾道ミサイル潜水艦2番艦『とうりゆう』である。

降伏文章第12条に記載された星とは、SLBM。潜水艦発射型弾道ミサイルであった。

SLBMは値段が高く、コスパとして最悪だが、地球では行えない実戦でのテスト、7カ国連合軍がもしも日本に逆らう場合の示威効果を狙ったの行動であった。

とうりゆう艦長の『川上晴人』2等海佐はため息をつく。

「まさか地球では無く異世界で使うとは…」

「まあ核ではありませんし…地球で使うと核戦争の危機ですから」

「…そうだな。SLBM発射用意！」

「了解、SLBM発射用意！」

船体後部の24基設置されたSLBM用垂直発射型ミサイルハッチが開き、『UGM—222トライデント I I (D5)』が顔を見せる。

既に、砲雷長と副長が二箇所の鍵穴に鍵を刺しており、発射準備が整えられている。

「トライデント発射初め！」

「てえ!!!」

ロケット燃料が加熱され、爆発的な速度を生み出す。

飛翔開始から2分以内に時速2万1600キロメートルハ以上に達していたトライデントは、数分後に低高度軌道にまで到達した。

本来のトライデントは多弾頭弾であり、14発のW88核弾頭を搭載するが、流石に

核は使用できない為通常弾頭である。

だが、通常弾としても侮る事なかれ。再突入体の質量と、超音速での衝突速度が十分なエネルギーにより、街一つは破壊できる。

既にパールディア皇国側に退避勧告を出し、ご丁寧に上空からビラを散布したが、まだ予想都市人口の3割しか避難してない。

パールネウスは北部の都市であり、未だ日本国の兵器を視認してないからであった。トライデントは、かつて皇国がパールネウス共和国であった頃の首都へ落下して行った。

◇◆◇

5分後——

《パールディア皇国 皇都エストシラント 皇城パラデイス城 テラス》

皇城パラデイス城の北側に設置してあるテラス。そこには皇帝ルディアスとレミールがいた。

ルディアスは大気汚染が無い綺麗な空を見ながら話し始める。

「ふん。星を落とすと言っていたが嘘では無いか」

「はっ、彼の国は進軍で自信をつけ自分を神だと思ったのでしょうか」
「当然だ。ならば神話の真似をしない」

日本側は意図していなかったが、あの星を落とすと言う文章は、神話上のラヴァーナ
ル帝国が神の怒りに触れ、神がラヴァーナ側に移る文書と一致していたので
ある。

それを知らないルディアスは、日本が調子に乗って神話を再現しようとしたと解釈し
ていた。

「ん？」

その時、北側に何かが見えた。

「流れ星か？」

違った。トライデントSLBMである。成層圏へと再突入した三叉槍は、弾頭のノー
ズコーンを真っ赤に輝かせながら、極超音速で落下していた。

流れ星では無いのかとルディアスが思った時、パールニュースの方角から地響きが届く。
える。

「なっ…」

「ひっ」

本当に星を落として来た日本に、ルディアスは言葉を失い、レミールは短い悲鳴を上げた。

夜である為、はつきりは分からないがキノコ雲も発生している。

ルディアスとレミールは、側近がパールニュースと連絡が取れないと報告に来るまで、固まっていた。

◇◆◇

中央暦1640年9月12日午前3時——

《パールディア皇国 皇都エストシラント 上空》

亡国間際の国の首都上空を一機の輸送機が飛行していた。

『C-3』輸送機。アメリカのC-17に対抗して製造された4発輸送機である。

その輸送機の荷物室では、陸上自衛隊の第1特殊作戦部隊零作戦分遣隊、アメリカ合衆国陸軍第1特殊部隊デルタ作戦分遣隊、日本国中央国家憲兵団の中央国家憲兵特殊対応任務部隊が待機していた。

全員が酸素マスクをしており、高高度降下低高度開傘降下に備えている。

「操縦士が通信の受信を確認。5分後に作戦開始だ」

「良いか？任務は敵首都内にある重要施設の細かい位置の調査と重要施設の特定・味方の誘導・ターゲットの拘束だ。それまで俺達は現地協力者と共に敵首都内で活動する」

「その協力者は信用して良いんだな」

「ああ、問題ない。万が一の場合は殺しても良いとさ」

「了解」

パーパルディア王国重要指名手配犯捕獲第1任務部隊隊長を務める第1特殊作戦部隊零作戦分遣隊第1小隊長の『桑原勇氣』一等陸尉が、中央国家憲兵特殊対応任務部隊第1班の『中西拓真』警部補に話しかける。

「中央国家憲兵特殊対応任務部隊は高高度降下低高度開傘はやったことありますか？」

「いえ…資格は持っていますが、あまりやったことがありませんので…」

なぜ警察の特殊急襲部隊^{SAT}では無く、中央国家憲兵の特殊対応任務部隊^{SRF}が対応するのかと言うと、パーパルディア皇国は腐っても列強であり、近衛兵は精強である可能性が高く、特殊急襲部隊^{SAT}であると交戦規定などで縛られる可能性がある為、逮捕権を持つ中で最も武装している組織である中央国家憲兵団^{CNCG}の特殊部隊が選ばれたのだ。

「よし、時間だ。作戦開始」

「高度センサーを確認。500mだ」

各々が、腕につけた高度センサーを見て、高度と風を確認する。

「目標周辺の風は弱い。誤差は最小限で済む」

「高度センサーの数値で判断。一定速度で降下しろ」

「酸素マスク起動」

「赤点滅！赤点滅！」

降下準備を知らせる赤いランプが点灯する。

隊員が側面に設置されたボタンを押し、プラットホームを下ろす。

「緑点滅！緑点滅！」

「降下！降下！降下！！」

武器が入った円柱状のカバンを掴み、一気に降下する。

マクス越しに大気が打ちつけられ、寒く感じる。

その後、高度500mでパラシュートを開き、減速。五点着地で、カイオス邸の裏山に着陸した。

カバンから、20式小銃、M4A1、SIG MCXを取り出し、装備する。

100mほど山を降りると、小洒落た高級そうな住宅が目に入る。

「あれか？」

「そうだ。行くぞ」

敷地を囲っている塀の裏にあるドアをこじ開けて、建物の勝手口の前で立ち止まる。

勝手口を一定のリズムで叩き、現地協力者を待つ。

「君たちか」

口髭の初老の男が、出てきて彼らを招き入れる。

「第三外務局長カイオスさんですね」

「ああ。君たちは？」

「…軍機について答えられません、日本国の者です」

「同じく」

「私はアメリカ合衆国の者です」

「そうか…」

カイオスは、目の前にいる者達が報告にあつたロウリア王国王城を襲撃し、ロウリア王を確保した部隊の兵士だと考える。

「作戦執行日は今日、馬車で皇城へ侵入。貴方は味方の近衛兵と共に皇帝ルディアスと

レミールが居る議会正門から侵入。我々は別ルートで行動します」

「…その事だが…皇帝陛下は助けられぬか？陛下が居なくなれば皇国は崩壊するぞ」

カイオスは、本来ならばルディアスは幽閉しようと考えていた。

だが、それは日本国政府が許さなかつたのである。

「愚問ですな。我々の降伏要請文書では2人の降伏が絶対条件。条件付き無条件降伏は無く、真の無条件降伏しか認めぬと上層部から厳命を受けています」

「しかし…」

「本来ならば言いたくありませんが…貴方は本来敵です。利害が一致している為協力しているに過ぎない」

「要請文にも書いてありますが、本当にこの国を滅ぼしたいのなら核を落とせば良いだけです。徹底抗戦をする様ですしね」

「ですが流石に核は民意が許せない。徹底抗戦を唱えられてゲリラ戦化したら面倒ですので、こうして反乱に協力しているのです」

「…そうか…」

「本日12時に決起する。それまで待機していてくれ」



同日11時30分――

《パーパルディア皇国 皇都エストシラント 皇城パラデイス城 裏口》

エストシラントの街中にある皇城へと続く大通りでは、カイオスを乗せた馬車と、後ろからもう一台の馬車が走っていた。

後ろから続く馬車は、一見すれば幌付きの商人が使う馬車に見えるが、その荷台にはパーパルディア皇国兵に変装した複数人の人間と木箱が置かれていた。

「止まれ！止まれ！！」

「私だ」

「こつ、これはカイオス殿下。失礼しました、お通りください」

「すまんな」

裏門の警備を潜り、荷物搬入口に馬車は進む。そこには荷物を運搬している兵士達が居た。

カイオスは兵士達に声をかける。

「これはこれはカイオス様。どうかさされましたか？」

「うむ。実は書類を運びにきたのだが、私の兵士だけでは運べん。手伝ってくれないかね？」

「はっ、分かりました」

二台目の馬車に居た重要指名手配犯捕獲第1任務部隊が木箱を掴み、下にいる兵士に手渡す。

全員が木箱を持ち、集積場所に運ぼうとした時、桑原が右手を上げる。

「それにしてもカイオス様。この箱、とても重いのですがそんなに書類がつ!!」
「ぐおっ!!」

懐から出した消音器付きのHK45で頭を撃ち抜く。

他の兵士が気づく合間に他の任務部隊の兵士が接近し、近接戦闘で仕留める。

その後、任務部隊員達は来ていたパーパルディア兵の服装を脱ぎ、箱から小銃を取り

出す。

「では案内してください」

「承った」

アルファ ブラボ

「aよりbへ、皇城へ侵入。航空部隊を要請せよ」

『ブラボこちらb。航空支援を要請する』

既に、突入班の^{アルファ}a、監視部隊の^{ブラボ}b、皇城制圧の^{チャーリー}cに分かれている。

カイオスと重要指名手配犯捕獲第1任務部隊員は、皇城へ侵入した。

◆◆

5分後――

《パーパルディア皇国 皇都エストシラント 外れ》

ブラボ 皇都エストシラント郊外の森では、重要指名手配犯捕獲第1任務部隊所属の監視部隊bが待機していた。

「バイキング6、こちらサッチャー3―1。警備詰所を攻撃せよ、南門だ」

『了解、3―1。標的を確認、攻撃まで10秒』

「空爆するって言うってたけど、何発投下するんだ？」

「さあ？でも捕獲対象と突入班が死んだら不味いからJ D A Mでピンポイントだろ」

話していると、南からエンジン音が聞こえた。

「お。来た来た」

上空をF-2Aが通過し、爆弾を投下する。

警備詰所が爆発し、死体が上空へ飛散する。

「うおっ、グロいな」

「…目的達成のため。仕方ないですな」



同時刻——

《パーパルディア皇国 皇都エストシラント 皇城パラデイス城内》

爆撃は城内でも感じられた。城全体が震え、上から埃が降ってくる。

その時、奥の通路から何かが見え、突入班は銃を構える。

「待て！味方だ！」

「カイオス様！ここに居られましたか！」

「ああ」

「して…この人達は？」

「彼等は日本とアメリカの協力者だ」

「なんと！」

見えたのは近衛兵の中でもカイオス側についた者達であった。

潜入班は、協力者に青いバンダナを手渡す。

「これは？」

「バンダナです。誤射する可能性があるのです、付けていただきたい」

「うむ、わかった。付けてくれ」

「はっ」

右腕にバンダナを付けたのを確認した潜入班は、作戦を伝える。

「正面からは、カイオスさんの部隊だけで突入して欲しい。」

「さて、君達はどうするのかね？」

「おそらく魔信？とやらで応援を呼ぶでしょう。議会議室内は議員と少数の近衛兵だけでしよう？それならば君達で制圧できるはずです。カイオスさんからしても、議会議会を占領するのは我々では無く味方の方が市民からの評価も高いはずです」

「そうだな……」

「いざとなったら我々も突入しますがね。ですが、皇帝の逮捕だけは我々がしますよ、宜しいですね」

「うむ」

一方議会議会では、空爆によって議員達が恐慌状態であった。

「なんだあ!!」

「敵襲か！」

議員が慌てる中、気分が180。回って冷静になったルディアスは命令を出す。

「落ち着け！直ぐに警備隊に緊急命令を出し、城の守りを固めるように伝えろ！」
「了解しました！」

近衛兵が正面門から出ようとドアを開けた時、外にいたカイオス側の近衛兵がその仲間を押さえつける。

近衛兵達はパーパルディア皇国歩兵に正式配備されているマスケット銃を構えながら、会議室に押し入る。

「各人動かないでいただきたい!!勝手な行動をされると命の保証はない!!!」

「なんだ貴様らは!!皇帝陛下の面前であるぞ!!」

議員達はカイオス側の近衛兵を恐れた目で見ると、激昂する者たちで分かれる。

そんな中、ルディアスは冷静にカイオスを見つめる。

「陛下……皇国のために、しばし動かないでいただきたい」

「革命か？小癩な…私を逮捕したつて指導者のいない国は全く動かぬぞ。お前らは、パーパルディア皇国を滅ぼしたいのか」

「私が……日本との戦争を止めます。そして、反乱軍からも皇国を救います。もうあなたには任せておけない」

「なんだと！カイオス貴様！！ただ行政機構を押しえただけでは何の解決にもならん！！」

「相手がいるんだぞ！相手が！！何か案を示してみろ！！それが出来なければお前は本当の大馬鹿者だ！！」

第2外務局長のリオスの言葉に、カイオスは俯きながら答える。

「案ならあります。私は既に日本国と話をつけている。後は皇国内の……部内を大掃除すれば、皇国は救われる」

「なに！あの無条件に等しい降伏案を呑むと言うのか！！あれでは国が続いたとしても日本属国になるぞ！！」

「しかも相手は日本だけでは無い！！日本を押しえただけではどうにもならんわ！！」

「反乱軍を……73カ国連合軍と、文明国を押しえない事には我々の未来はないぞ！！」

「降伏したとしても今の皇国軍では到底立ち向かえぬ！」

「仮にそれが成功したとしても、我が国は日本国に対し、殲滅戦を宣言している!!彼らが皇国を守るとは到底思えぬわ!!」

リオスの言葉に、カイオスは顔を顰めながら反論を始める。

「貴方は、私よりも日本の事を知らないと見える。情報は上に行くほど簡素化され、都合の良いように捻じ曲げられるのだな」

「なんだと!!」

「このままあなた方に任せると、日本と73カ国及びリム王国の連合軍によって、近い将来、皇国はこの世から消え去る」

「私が国を掌握すれば、必ず日本や他国とも講和し、国を存続させる事を約束しよう」

その時、後門から異変を感じ取った近衛兵が入ってくる。

カイオス側の近衛兵と銃を向け合うが、仲間であったからか、引き金を引かず、只見合うだけであった。

「何をしている!!早く撃たぬか腰抜け共め!!」

「くっ…」

「……………」

「カイオス殿…」

「つつ…」

このままではいけない。カイオスは日本軍とアメリカ軍が何処にいるかを尋ねたくなった。

その時、会議室の天窓が勢いよく破れる。

「なんだ!!」

瞬間、上からロープが垂れ、ラペリングで降りる突入班は、正確に5.56mm弾をルディアス側の近衛兵の頭に撃ち込む。

その突入に、議員は驚愕し、後門から逃げようとするが、すぐに突入した突入班に取り押さえられる。

「目標確認」

「対象だな…此方ファルコン11。対象確認」

「レミールは居ないな」

後門から突入した中央憲兵団もルディアスを視認する。

ルディアスの顔を写真で確認すると中西が前に出る。

「日本国、中央国家憲兵団だ。ルディアスだな」

「ふん…そうだ」

「貴様とこの会議室に居る議員達に、日本国に対する戦争犯罪の重要参考人ならびに被疑者として出頭命令が出ている。ご同行願う」

「……………」

中西に声をかけられたルディアスは特に抵抗する素振りも見せず、ただ黙ったまま項垂れた。

その時、カイオスがルディアスに声をかける。

「皇帝陛下。レミールは何処に」

「ああ…何か忘れ物があると言つて邸宅に戻つたよ」

「なっ!!」

カイオスは驚愕する。ルディアスとレミール2人の日本側の確保が無ければ、降伏は認められないと通達されたからだ。

中西の方を向くと、彼も困つた表情でいた。

「2人の逮捕がない限り、本国は降伏を認めませんよ」

「つつ!!（不味い不味い不味い!!）」

ただでさえ、此処まで持ち込めたと言うのに、彼女に逃げられたら元も子もない。

彼女は皇国の外交の顔として顔も広く、美貌もあるが故に、文明圏外国に逃亡されたら、本当に日本は皇国が滅び、彼女を見つけるまで攻撃を辞めないであろう。

「くそっ!あの女め!!いつまでも手間をかけさせやがって!!!」

カイオスは顔を顰め、レミールに悪態を突きながら、そばにいた近衛兵に伝える。

「レミールを絶対に見つけ出し、必ず捕らえろ!!」

「はっ!!」

「フハハハハハハハ、カイオスよ、現実というものは、計算通りにはいかないものだ。貴様がどう皇国を運用するのか、牢獄で見よう」

後日レミールは無事捕まり、シルガイアが昇進し人生が大幅に変わる事になるのはまた別のお話。

◇◆◇

中央暦1640年9月15日――

《パーパルディア皇国 皇都エストシラント湾》

カイオスは日本国側が準備した連絡艇に乗って、戦艦きいに乗艦しようとしていた。彼は、きいの巨大さに驚愕する。

「このような国と戦争をしていたのか我が国は…」

最初から勝ち目はなかった——そう彼は思うと共に、この戦争で亡くなった戦死者に、哀悼の意を捧げる。

「お待ちしていました。どうぞ此方に」

連合国軍最高司令官である『松坂忠道』上級陸将が出迎えた。

その後、第2砲塔と艦橋の間の右舷側のテーブルと椅子に掛ける様通達される。署名し、それを確認すると、松坂は連合国軍兵士の方を向き、こう伝える。

「此処にパーパルディア皇国は降伏文章に著名した!!我々の勝利だ!!」

そう言うと、歓声が上がリ、シャンパンの音も聞こえる。

大規模な祝賀会が開かれ、カイオスも巻き込まれ、翌日の執務は二日酔いで大変だったと言う。

問話 異世界の鬼退治—1

——トールパ王国。

フィリアデス大陸より北東、『魔物大陸』とも呼ばれるグラメウス大陸に繋がる細い地峡の中央部に位置する文明圏外国である。国の最も全幅が大きい地点で200m、最西端から最東端までは30kmとかなり国土が細く短い国である。

神話の時代、此処トールパの民達は魔王が住むグラメウス大陸と繋がる長さ100mの地峡に、『世界の扉』とも呼ばれる人類の盾である壁を築いた。それによって今日まで、フェルディアス大陸への魔物侵入を防いでいたのである。

魔物とは全く意思疎通が不可能な生物、つまり地球で言う怪物モンスターであり、人間や亜人を見つけると襲い掛かってくる。彼ら自身は国家を持たず、秀でた身体能力を生かし見つけた人間や亜人に狂戦士のように襲い掛かるという。

その『世界の扉』の一角にある魔獣監視塔に二人の人間とエルフが居た。トールパの騎士の正装を纏うエルフの方は双眼鏡で監視をしているが、もう一人の人間は欠伸をしていた。

「ふあくあ。全く暇だぜ」

「なあ、モア。寝て良いか？」

今にでも寝てしまいそうな顔をしているのはトールパ王国傭兵『ガイ・カールトン』。そのガイの言葉に、彼の幼馴染であるトールパ王国特二級正騎士『モア・ケネス』が呆れたな顔をガイに向ける。

「はあ、ガイ。俺たちの所属の正式名称を言ってみろ」

「ん？……えくと……何だっけ？」

「トールパ王国軍世界の扉常駐騎士団司令部直属城壁監視団第六監視隊だ、良い加減覚えた方がいいんじゃないか？」

「そもそも古くから城壁監視兵は王国で誇りと——」

長苦しくなるモアの話の話を耳から排除させ、ガイは考える。

「（はあ……そもそもここ10年間でこの城壁に辿り着いたのはゴブリン10匹、しかも道に迷った奴らだけだ）」

「(ゴブリンだけならその高さを誇る城壁の上から弓を射下ろして終わりだ。何をビビっているんだ?)」

「(まあ、流石は王国正騎士サマって所だな)」

モアはトーパ王国中級貴族のケネス家の次男であり、大学を出るほど頭がよかった。その時、モアが装備している双眼鏡を見る。

「なあ、モア。その魔導双眼鏡って何処ののだ? パーパルディア? それともミリシアルか?」

「ああ、これは父上からミリシアルから取り寄せたんだ」

「へえ! ミリシアルから! それはすげえ、貸してくれないか?」

「良いが…壊すなよ?」

「わかってるって!」

双眼鏡を覗き、城壁の外を見つめる。その時、景色の上端に黒い靄が掛かったような気がした。

「ん？なんだあれ？」

「何処だ？」

「正面12時方向。黒い靄見たいのが……」

「つつ！あれはゴブリン！ゴブリンの集団だ！」

「オークも居るぞ！なんてこった！」

普通はゴブリンは集団を組むことは無い。つまり統率している輩が居るはずだ。ガイは魔導双眼鏡を操り限なく統率役を探す。その時、体毛が赤色の青色のオークより大きい鬼のような魔獣が確認できた。

「あれは!？」

「レ……レッドオーガにブルーオーガ!? 実在していたとは!？」

その時、ズシンという大きな衝撃が監視塔を襲う。遠方に、巨大な影が現れた。パーパルディア皇国の地竜『リンドリウム』を大きくした赤い地竜のようなものが見える。その上には、レッドオーガよりも1回り大きい魔獣のような物が1体居た。

「赤竜！それに……ま、魔王ノスグーラ!!!」

「くそっ！ガイ！監視塔から降りるぞ。緊急警鐘を！」

「了解！」

そうしている間にも、ゴブリンはドンドンと進行して行った。瞬間、壁内に緊急の警報鐘が鳴る。

「敵襲！敵襲！」

「ガイ！モア！敵は何体だ!?!」

「数え切れません。それにレッドオーガやブルーオーガ、魔王も居ります」

「魔王もか…モア、トルメス城塞都市に行け。貴様は魔物に詳しい。役に立つはずだ」

ガイは古文研究では学者になれる程であり、主席で大学を卒業している。騎士団長はそれを知っており、モアにトルメスまで引くように行った。

「なっ！そんな…」

「命令だ、それに俺たちは簡単には死なん。安心しろ」

「……了解しました」

モアとガイは馬で城塞都市トルメスまで退避した。だがその間に世界の扉常駐騎士団は全滅。100年以上もグラメウス大陸からの魔物を守ってきた扉のあつけない陥落と魔王ノスグーラの登場に、王国内は震撼した。

世界の扉陥落から3日後、魔王軍2万は城塞都市トルメスへ侵攻。トルメスに駐屯する北部守備隊5千は抵抗したものの、魔王軍は復活して直ぐではなく力を溜めてから侵攻してきており、トルメス北部のミナイサ地区を占領してしまった。

世界の壁やトルメスに侵攻したオーガやゴブリンの姿、また戦った兵士達の報告によつて王国軍では勝てる可能性に疑問が残る為に、王国上層部は列強『パーパルディア皇国』と、ロデニウス大陸のロウリアを下し軍事強国として知られることとなった『日本国』に援軍を要請する事となる。



中央暦1639年5月6日――

《日本国 首都東京都赤坂 在日トーパ王国大使館》

日本とトーパ王国が国交を締結したのは、ロウリアが解体された後であった。トーパの近くでカニが採れる事が確認されて、国交を結ぶ事となったのだ。

その時に建設された在日トーパ王国大使館で、在日トーパ王国大使は本国から送られてきた報告に目を疑っていた。

「魔王復活だど!？」

トーパ王国神話第5章6話『魔王降臨』によって王国内に古くから伝わる魔王『ノスグーラ』。彼も幼い頃に祖母に読み聞かされ、魔王の凶暴さを知っていた。

「確か日本にはカイヘイタイという即時に派遣できる軍があつたな……」

彼は日本に来てから魔王再降臨に備えて、日本の自衛隊の訓練を巡視したりしていた。

「日本は自分達が脅かされる危険があると軍隊を派遣するという…魔王の恐ろしさを伝えれば……よしー!」

「大使だ、日本外務省へ会談の連絡を取ってくれ!」

すぐに大使館から外務省に会談の申請がなされ、外務省から中南米局中米カリブ課長『西島 浩』が駆けつけて来た。既に大使にはパーパルディアとの交渉決裂と報告があった。日本国との協議を成功させなければ、魔王は王国を征服するだろう。

「ようこそいらつしやいました、西島さん」

「どうも。ところで今日はどう言った御用件で？」

「実は——」

「我が国の神話上に語られる『魔王ノスグーラ』それが復活したのです」

「……?!」

この世界に来てからは、魔法など異世界しかない文化などの情報をかなり収集して来たはずであった。だが、まさか魔王と言うのが居るとは信じられない。

「その…魔王と言うのばどう言った生き物なんですか？」

「はい、魔王は我が王国建国神話によると、魔物の大群とともにグラメウス大陸から現れ、他種とは隔絶した魔力を持っていました」

「伝説の魔獣である四色のオーガを従え、知能が低く統率の取れるはずのない魔獣を束

ねて、かつてトーパ王国のあった土地を荒らしました」

「その時の人類は種族間の軋轢を超え、『種族間連合』と呼ばれる部隊を結成し抗戦するも敗退を繰り返し、ついにはエルフの神が住まう神森に追い詰められました」

「エルフの神は人類を救うため、自分たちの創造主である太陽神に祈りをささげたと言います」

「神の祈りは通じ、太陽神は自らの使者を召喚、太陽神の使いたちは強大な魔導をもつて魔王軍をグラメウス大陸に押し戻し、この世界から去って行きました」

その時、西島はある事に気がつく。

「（エルフの神が住まう森って…確かクワ・トイネになかったか？後でクワ・トイネ課に伝えておこう）」

「（それに『太陽神の使い』。確かクワ・トイネで自衛隊がそう呼ばれたってどつかの書類に書いてあったな…何か因果関係があるかも知れない。神森の事と一緒に伝えておこう）」

「種族間連合はそこに城壁を築き、『世界の扉』と名付け、それを支えるために城塞都市『トルメス』と、新たなトーパ王国を築きました」

「その翌年、魔王討伐のため勇者一行がグラメウス大陸に派遣され、オーガ2匹を討伐し、勇者3人の命と引き換えに魔王を封印しました」

「その魔王が、復活したのです」

「魔王は、いかなる者をも数十倍は上回る強大な魔力を持ち、大魔導師をもはるかに超える強力な魔法を操ります」

「特に、必殺の大魔法は射程1キロに及び騎士団200人と配下を消滅させ辺りの雪を蒸発させる威力を持つという情報があります」

「——という事で、我々王国軍のみでは魔王を倒す事が難しい。なので日本軍に派兵をして貰いたいのです」

「成程：確かに危険ですね。内閣に伝えておきます。きっと良い報告が得られる事でしょう」

「ありがとうございます！」

その日の夕方、緊急で国家安全保障会議^{N S C}が開催された。協議内容は、トールパ王国大使から要請された魔王討伐の件である。

「統合幕僚長、派遣するとしたらどのくらいの兵力になる？」

「はい、現在パーパルディア王国との緊張が高まっているので、4軍の中では海兵隊が一番適しています」

フエン王国の事件において、日パ間は険悪な雰囲気陥っており、いつ開戦してもおかしくは無かった。

「海兵空地任務部隊の海兵遠征部隊であれば即時に展開できると思います」

「ですが、海兵遠征部隊は独力での継戦能力が15日までであり、海兵遠征部隊によって討伐対象を撃破できなかった場合、上級単位の海兵遠征旅団を派遣しなくてはなりません」

「ただし、海兵遠征旅団では輸送に揚陸艦約20隻が必要であり、即応性が低くなっている為、海上自衛隊の海上総隊所属の第1海上事前集積輸送艦隊による輸送が必須です」
 「ですが、海上事前集積輸送艦隊は再編成中である為に海兵遠征旅団派遣は1ヶ月ほどかかります」

ロウリア戦において、本来であれば海外に展開する部隊も運用した為に、司令部や補給関係で大きな障害があった。その為に、現在元々海外に派遣されていた部隊などの配

置を変更したり再編成をする真つ最中であつた。

「また、現在トーパー王国大使に許可を貰い、航空自衛隊の偵察飛行隊による偵察を命令しました」

「それによる偵察結果によつて派兵する兵力を決めなければなりません」

「そうか……出来るだけ早く派兵兵力を決めてくれ」

「はっ」

「外務大臣はトーパー大使に出来るだけ早くの派兵が決定されたと伝えてくれ」

「了解致しました」



中央暦1639年5月10日――

《日本国 東京都 朝霞共同駐屯地》

陸上自衛隊と海兵隊が共同で使用する朝霞駐屯地。その駐屯地の一角の一室で、海兵総隊第1海兵遠征軍第27海兵遠征部隊から選抜された部隊の隊員達が集まっていた。その時ドアが開き、室内の海兵隊員達は一斉に喋るのを止める。

「起立！ 気をうつけ！ 礼！」

室内の海兵隊員達が一斉に敬礼し、壇上の海兵隊員も答礼で返す。

「着席！」

「諸君、私が今回第12特別任務戦闘団を率いる事となった百田太郎だ」

「まあ、諸君らは第12海兵遠征部隊から選抜された者が殆どである為に知らない者はいないと思うが…」

今回のトーパ王国派遣部隊は、前述の通り海兵総隊第1海兵遠征軍第12海兵遠征部隊の地上戦闘部隊、第12大隊上陸部隊から選抜された部隊で組織されており、隊長も第27大隊上陸部隊長の百田が務める事となった。

「では、先に配布された資料の3ページを見てくれ、今回の派生勢力を確認する」

○戦闘団編成

【第12特別任務戦闘団】

総司令官：百田太郎2等海兵佐

戦闘団指揮部隊^C

司令部管理小隊

戦闘団司令部^C

第27航空・艦砲射撃連絡部隊^{A N G L I C O}

戦闘団戦闘部隊^C

第11海上強襲中隊^{I S T M A S} 中隊長：犬神剛3等海兵佐

第21機械化海兵中隊^{I S T M M C} 中隊長：城島仁史3等海兵佐

第271戦車小隊^{I S T M P} 小隊長：猿渡学1等海兵尉

第27水陸両用強襲車小隊^{I S T M A V P}

第27重迫撃砲小隊^{I S T M H P}

第27軽装甲偵察小隊^{I S T M A R P}

第27施設小隊^{I S T M F P}

第27偵察小隊^{I S T M R P}

戦闘団航空戦闘部隊^C

第27海兵中型テイルローター飛行隊^{I S T M I T 2}

第27海兵軽攻撃ヘリコプター飛行隊^{I S T M L A I 2 7}

— 第^V27海兵戦闘攻撃飛行隊¹²⁷

— 戦闘^C団^T兵站^L戦闘^C部隊^U

— 第²₇7戦闘^s兵站^t中隊^L^S

○戦闘団装備

— 戦^C闘^T団^C戦^U闘^U部隊

— 軍用車両

○10式戦車B型…4台

○10式装甲戦闘車…2台

○87式装甲戦闘車…2台

○16式装甲戦闘車…2台

○96式装輪装甲車…2台

○96式指揮通信車…1台

○96式野戦救急車…1台

○96式自走高射機関砲…1台

○AAV—7水陸両用強襲車…8台

○AAV—8水陸両用強襲車…7台

○74式特大型トラック…20台

○85式高機動車：30台

○01式軽装甲車

○19式汎用軽機動車：8台

— 小火器

○M45A1 CQB P

○16式拳銃

○89式5・56mm小銃

○89式5・56mm短小銃

○12・7mm重機関銃M2

○90式7・62mm機関銃

○10式7・62mm機関銃

○5・56mm機関銃 M I N I M I

○10式対人狙撃銃

○64式7・62mm狙撃銃

○バレットM82A1

○レミントンM870 M C S

○89式擲弾発射器

○96式40mm自動擲弾銃

— 火砲

○SMAW ロケットランチャー…15門

○120mm迫撃砲 RT…2門

○81mm迫撃砲 L16…3門

○60mm迫撃砲 M224…4門

○93式近距離地对空誘導弾…1基

○91式携帯地对空誘導弾…5基

— 無人航空機

○Black Hornet Nano

○RQ-20 Puma

— 戦闘団^C航空戦闘部^A隊^T

○MV-22Bオスプレイテイルローター輸送機…3機

○UH-1Yヴェノム汎用ヘリコプター…3機

○AH-1Z攻撃ヘリコプター…4機

○F-35B Lightning II…2機 (強襲揚陸艦上で待機)

— 戦闘団^C兵站戦闘部^L隊^T

- 74式特大型トラック…10台
- 85式高機動車…8台
- 重装輪回収車…1台
- 重レッカ…1台
- 軽レッカ…1台
- 施設作業車…2台
- 野外フオークリフト…1台
- 3トン半燃料タンク車…4台
- 3トン半水タンク車…2台
- 11式装軌車回収車…1台
- 野外炊具1号…5台
- 野外手術システム…1セット
- 浄水セット…5台

「この様になっている。また、英国陸軍1個中隊が増援として作戦に参加する」

ロウリア戦に勝利した為に、元ロウリア領で『イギリス王国』を建国したイギリスは、

何を嗅ぎつけたか魔王討伐に協力姿勢を示し、一個中隊が派遣される事となった。

因みに日本政府の方は、わざわざイギリスの方から魔王討伐後のトール王国への支援に乗り出している事に違和感を覚えつつも、折角態々やつてくれるのならと資金を調達したりしていた。

【イギリス王国陸軍第1歩兵師団第1¹2²特別任務中隊¹₂^s_t^s_M^P】

○中隊編成

司令官：アーサー・E・ペンドラゴン大尉

——中隊本部

——第1歩兵小隊 小隊長：ランスロット・デュ・ジョーンズ少尉

——第2歩兵小隊 小隊長：ガヴェイン・ブラウン少尉

——第3歩兵小隊 小隊長：トリスタン・A・ロビンソン少尉

——第4機械化小隊

——第1戦車分隊

——第1工兵小隊

○中隊装備

——戦闘車両

○FV4043チャレンジャー2：2台

○FV510ウオーリア歩兵戦闘車…1台

○FV511 歩兵指揮車…1台

○FV430Mk3ブルドッグ…3台

○FV103スパルタン…2台

○FV104サマリタン…1台

○マステイフ…5台

○ハスキーTSV装甲車…10台

○パンサーCLV…15台

— 航空機

○Apache AH Mk. 1…2機

○リンクス AH. 7…1機

「若干中隊長の名前に意図的な物を感じるが…まあ良い」

その言葉に、室内に笑いが包まれる。完全に総司令官や中隊・小隊長の名前が鬼を退治する昔話に登場する者達に関連する名前である。おそらく統合軍幕僚幹部が仕組んだのであろう。空自の偵察機の画像によると、鬼の様な生物が確認された為に確信的

だ。

「——だが、魔王やその配下は人間を食らう。人間よりも危険な生物だ。迷ったら——撃て！」

その言葉に、笑っていた顔が一気に真剣な顔になり、泣く子も黙る日本海兵隊員の漢達の顔になる。

「出発は14日、それまで各自で準備しておけ。解散！」



中央暦1639年5月14日——

《日本国 神奈川県 横須賀市 横須賀港》

日本国海上自衛隊第1艦隊第1護衛隊群の母港である横須賀港。此処にトールパ王国に派遣される日本海兵隊第12特別任務戦闘団とイギリス陸軍第12特別任務中隊は居た。第1護衛隊群麾下の第1揚陸隊/第1水陸機動戦隊に乗り込み、トールパ王国を目指す。

【第1揚陸隊／第11水陸機動戦隊編成】

- ○しきしま型強襲揚陸艦『しきしま』
- ○いず型輸送揚陸艦『のと』
- ○つがる型揚陸艦『みうら』
- ○おおすみ型輸送艦『しもきた』（イギリス陸軍部隊輸送の為臨時編入）
- ○あたご型ミサイル護衛艦『はぐろ』（第1護衛隊群第2護衛隊より派遣）
- ○あたご型ミサイル護衛艦『あしがら』（同上）
- ○あさひ型汎用護衛艦『あさひ』（同上）
- ○あきづき型汎用護衛艦『てるづき』（同上）

派遣部隊の総司令官である百田は、積荷が強襲揚陸艦内に積み込まれる光景を見ていた。その時、後ろから流暢な日本語で話しかけられた。

「モモタ中佐！お久しぶりです！」

「おお、ペンドラゴン大尉！司令表を見た当初は同姓同名の別人かと思っていたがやはり君か！」

流暢な日本語を話す金髪碧眼の兵士は、今回のイギリス陸軍部隊司令である『アーサー・E・ペンドラゴン』。百田とは東亜戦争の武漢包囲戦で共闘し、個人間でも友達であった。

「アフガンではテロリスト、中国では共産主義者と来て次はモンスターですよ」
「ははは……一番厄介かも知れませんか」

「この世界では、日本語が英語に次ぐ世界共通言語として認められており、先進国では日本語の授業は必須となっている。」

「では、次はトーパーで」
「ええ、頑張りましょう」

日本海兵隊員約750名、イギリス陸軍兵約250名を乗せた艦隊は、トーパー王国に向けて出撃して行った。

間話 ムー国への武器輸出 第1話

中央暦1639年10月20日――

《日本国 首都東京 ムー大使館》

この日、東京にあるムー大使館の応接室には駐日大使のユウヒ・マリーニの他にパールディアで日パ戦争の戦闘分析を行っていたマイラス・ルクレール、駐在武官でありマイラスの同期でもある情報技術士官のケイスが大使館を尋ねていた。

ことの発端は2週間前、日本政府より緊急の伝達事項があると大使館へ連絡があり、急遽会合が行われることとなったのである。電話やインターネット回線ではグラ・バルカス帝国による諜報に引っかけられる可能性があるがあった為にレジユメで送信されると言う。当時はグラ・バルカス帝国の技術力がどれほどか観測されておらず、インターネットや核があるかさえも分からなかった。現在ではインターネットが利用されている

また日本国外務省ムー国担当外交官の柳田晶、アメリカ合衆国駐日大使のロバート・ダニエルに加え日本国防長官政務官である小野田松美、防衛事務次官である松本霖之助、防衛研究所副所長の本田泰時陸将補、防衛装備庁防衛技監の松田尚輝が集まっていた。

「本日は急なご来訪ですが、どのような用件でしょうか」

ユウヒは少し緊張した様子で尋ねた。防衛省——つまり事実上の国防省の大臣・副大臣に次ぐトップ3の政務官と地球では最強国家であったアメリカ合衆国の駐日大使が急にやって来たのだ、緊張するなという方が無理である。勿論マイラスやケイスも緊張している。

「実は日本国政府からの重要な決定事項をお伝えいたします」

そう発言したのは外務省の柳田である。ムー側全員に緊張が走る。何かやったのではないのか。例えば日本の軍事力の機密情報などを持ち出したなど——創造は容易に思いつく。

「日本及びアメリカ合衆国からムーに対して行う軍事支援の内容が決まりました」

柳田がそう言うと、ムー側の緊張は四散する。

「本当ですか！」

そう思わず声を大にしてマイルスは言った。彼は元より日本からのムーへの軍事支援を強く希望していたのである。ユウヒやムーゲも安堵の表情を浮かべていた。

「ええ、此方が支援内容になります」

柳田がそう言うのと支援内容が書かれた冊子を鞆から取り出しムー側に渡した。

その冊子に記載された内容をムー側は一読すると、一同驚愕の表情を浮かべた。ユウヒは恐る恐る尋ねた。

「柳田さん、本当にこれだけの支援をして頂けるのですか」

「はい。日本政府は間違いなくその支援内容を実施いたします。なおそれは最低限の支援です。追加支援もあります。その追加支援ですがそちらはダニエル氏の方から説明いたします」

ユウヒの質問に答えた柳田はダニエルにバトンを渡した。

「この度ムー国への支援事業を担当させていただきましたダニエルです。柳田氏からも説明がありました。アメリカ合衆国もこの度のムーへの軍事支援事業に参加させていただきます。」

「詳細な支援内容は後日詰めたいと思いますが、大まかには各種兵器、正確にはグラ・パルカス帝国に対抗可能な兵器の開発・生産の支援を行わせていただきます。」

ダニエルはそう言うとムー側に冊子を手渡した。

「そちらの冊子に記載されているのはアメリカ合衆国から行う支援予定の一覧です。」

そしてムー側はそのレジユメの内容を一読するとユウヒは感謝を述べた。

「これだけの支援ありがとうございます。ごさいます。私個人では判断致しかねますが本国に報告すれば間違いなく快く支援を受け入れるでしょう。」

「わかりました。快い返事をお待ちしております」

柳田がそう言うのと会談は終了した。ゾロゾロと日本側参加者が扉を出ると、ムー側は渡された支援品のレジユメを見て唸った。

「——途轍もない量だな」

「これだけの兵器が我が国に：輸入となれば内閣の承認が必要だが、大臣は認めるのだろうか」

「いや、認めるだろう。認めなければいけない」

特別防衛秘密

20. 11. 10

《left》ムー国大使 殿 《left》

内閣総理大臣 安倍野真三

国防長官 川野小太郎

アメリカ合衆国大統領 レーティシア・ハリスン

日本国及びアメリカ合衆国によるムー国への軍事支援について

グラ・バルカス帝国の第二文明圏侵攻によるムー国の国土・安全を脅かされる事態によりムー国より軍事支援及び開発協力の申し出があったためにこれを許可するものとする。下記の事項について措置されたい。

支援情報は日本国政府・アメリカ合衆国政府・ムー国政府が許可した者のみの閲覧とする。

支援品の訓練は日本国によるものとする。

ムー国政府は日本国及びアメリカ合衆国による各地の港湾施設の改修への参加を許可すること。

ムー国政府は日本国及びアメリカ合衆国による各種兵器の生産・整備施設整備の整備への参加を許可すること。

ムー国政府は日本国及びアメリカ合衆国による対グラ・バルカス帝国に備えての統合

基地の共同整備を許可すること。

ムー国政府は日本国が支援を行なった物品を装備した部隊を戦闘に参加させる場合、必ず日本国政府に報告すること。

建設した統合基地には日本国自衛隊及びNATO軍、大東洋条約機構軍の駐留を認めるものとする。

軍事支援品一覧

陸上兵器

○車両

支援兵器名	数量	現在管轄	訓練実施部隊	74式戦車(D型)	計239台
陸上自衛隊予備役部隊		陸上自衛隊富士教導団機甲教導連隊		51式重戦車(C型)	
アメリカのM103、イギリスのコンカラーと同じくソ連のIS-3に対抗して製造された戦車。正式採用当初から爆発反応装甲を常備しておりベトナムでは航空支援の次に重宝された。1995年退役。外見は『征途』の61式戦車。				計57台	
陸上自衛隊予備役部隊		陸上自衛隊富士教導団機甲教導連隊		56式軽戦車敵陣地の偵	

察などを目的とした軽戦車。史実では75式自走155mmりゅう弾砲を開発するにあたり、25トン級車台をファミリー化する構想で計画された25トン級軽戦車。1995年退役。計32台 陸上自衛隊予備役部隊 陸上自衛隊富士教導団機甲教導連隊

57式装甲戦闘車56式装甲車（現実の60式装甲車）にエリコンKCB 30

mm 機関砲と92式重機関銃改を搭載した砲塔を取り付けた車両。外見は73式

装甲車の試作車SUB I I 1。計28台 陸上自衛隊予備役部隊 陸上自衛隊

富士教導団機甲教導連隊 64式装甲戦闘車1964年に正式採用された歩兵戦闘

車。外見は小松の89式の試作車（B78）計29台 陸上自衛隊予備役部隊 陸上

自衛隊富士教導団機甲教導連隊 74式自走105mmりゅう弾砲 計32台 陸

上自衛隊予備役部隊 陸上自衛隊富士教導団機甲教導連隊 75式自走155mm

りゅう弾砲 計32台 陸上自衛隊予備役部隊 陸上自衛隊富士教導団機甲教導連隊

75式130mm自走多連装ロケット弾発射機 計27台 陸上自衛隊予備役部

隊 陸上自衛隊富士教導団機甲教導連隊

56式対戦車誘導弾発射器56式装甲車（現実の60式装甲車）に56式対戦車誘

導弾（現実の60式対戦車誘導弾）を搭載したもの。計12台 陸上自衛隊予備役部

隊 陸上自衛隊富士教導団機甲教導連隊 57式装甲車現実の60式装甲車 計1

23台 陸上自衛隊予備役部隊 陸上自衛隊富士教導団機甲教導連隊 60式自走

無反動砲（C型） 計36台 陸上自衛隊予備役部隊 陸上自衛隊富士教導団機甲教導連隊 M41A1 ウォーカー・ブルドッグ 12台（試験・参考用） 陸上自衛隊予備役部隊 陸上自衛隊富士教導団機甲教導連隊 73式自走高射機関砲73式装甲車の車体にラインメタル社製Rh202 20mm機関砲を搭載した車台。対空兵器として用いられたが87式高射機関砲の採用により存在意義が薄れ、徐々に退役した。1995年退役。外見はwarthunderのSUB—I—II。 計20台 陸上自衛隊予備役部隊 陸上自衛隊富士教導団機甲教導連隊 M42 ダスター 計12台 陸上自衛隊予備役部隊 陸上自衛隊富士教導団機甲教導連隊 一式半装軌車 M3ハーフトラック 計30台 陸上自衛隊予備役部隊 陸上自衛隊富士教導団機甲教導連隊 一式四輪駆動車フォードGPW 計30台 陸上自衛隊予備役部隊 陸上自衛隊富士教導団機甲教導連隊 一式貨物自動車GMC CCKW 計30台 陸上自衛隊予備役部隊 陸上自衛隊富士教導団機甲教導連隊

○火器

支援兵器名	数量	現在管轄	訓練実施部隊	4mm拳銃M1911A1	ガバメント
75が漢字なのは皇紀採用の為	計125丁	陸上自衛隊武器科	東亜軍事サービス株式会社及び中央国家情報局	65mm回転拳銃コルト・デイトクティブ	東亜軍事サービス株式会社及び中央国家情報局
スペシヤル	計65丁	陸上自衛隊武器科	東亜軍事サービス株式会社及び中央国家情報局		

- 情報局 57式9mm拳銃ニューナンブM57 計258丁 陸上自衛隊武器科
 東亜軍事サービス株式会社及び中央国家情報局 57式9mm短機関銃ニューナン
 ブM66 計129丁 陸上自衛隊武器科 東亜軍事サービス株式会社及び中央国家
 情報局 4mm短機関銃M1/M1A1トンプソン 計5丁(試験・参考用) 陸上自
 衛隊武器科 東亜軍事サービス株式会社及び中央国家情報局 4mm短機関銃M3
 /M3A1グリースガン 計5丁(試験・参考用) 陸上自衛隊武器科 東亜軍事サービ
 ス株式会社及び中央国家情報局
- 62mm半自動小銃M1 ガーランド 計5丁(試験・参考用) 陸上自衛隊武器科
 東亜軍事サービス株式会社及び中央国家情報局 62mm半自動小銃二型M1
 カービン 計5丁(試験・参考用) 陸上自衛隊武器科 東亜軍事サービス株式及び
 中央国家情報局 7mm自動小銃ブローニングM1918 計5丁(試験・参考用)
 陸上自衛隊武器科 東亜軍事サービス株式会社及び中央国家情報局 92mm軽機
 関銃ルイス軽機関銃 計5丁(試験・参考用) 陸上自衛隊武器科 東亜軍事サービス株
 式会社及び中央国家情報局 62mm重機関銃ブローニング M1919 計4丁
 (試験・参考用) 陸上自衛隊武器科 東亜軍事サービス株式会社及び中央国家情報局
 5式75mm無反動砲M20 75mm無反動砲 計3門(試験・参考用) 陸上自衛
 隊武器科 東亜軍事サービス株式会社及び中央国家情報局 7mm重機関銃M2ブ

ローニング 計8丁（試験・参考用） 陸上自衛隊武器科 東亜軍事サービス株式会社及び中央国家情報局

64式81mm迫撃砲 計2門（試験・参考用） 陸上自衛隊武器科 東亜軍事サー

ビス株式会社 二式107mm迫撃砲M2 107mm迫撃砲 計2門（試験・参考

用） 陸上自衛隊武器科 東亜軍事サービス株式会社 九六式40mm高射機関砲ポ

フォース 60口径40mm機関砲 計2門（試験・参考用） 陸上自衛隊武器科 陸上

自衛隊航空教育集団高射教導団 51式75mm高射砲M51 75mm高射砲

計31門 陸上自衛隊武器科 陸上自衛隊航空教育集団高射教導団 68式35m

m高射機関砲35mm2連装高射機関砲 L-90 計30門 陸上自衛隊武器科

陸上自衛隊航空教育集団高射教導団 地对空誘導弾改良ホーク 計12基（36発）

陸上自衛隊武器科 陸上自衛隊航空教育集団高射教導団

海上兵器

支援兵器名 数量 現在管轄 はつゆき型護衛艦 8隻 海上自衛隊予備役艦

隊 055型駆逐艦 1隻 海上自衛隊予備役艦隊 052型駆逐艦 2隻 海

上自衛隊予備役艦隊 054A型フリゲート 2隻 海上自衛隊予備役艦隊 0

56型コルベット 4隻 海上自衛隊予備役艦隊 071型揚陸艦 1隻 海上自

衛隊予備役艦隊 白根型ミサイル大型巡洋艦 2隻 海上自衛隊予備役艦隊 新

高級ミサイル防空巡洋艦 2隻 海上自衛隊予備役艦隊

あまつかぜ型ミサイル駆逐艦 6隻 海上自衛隊予備役艦隊

航空兵器

支援兵器名 数量 現在管轄 訓練実施部隊 F-1E (追加譲渡) 25機

航空自衛隊航空予備軍団第1航空予備軍第411予備航空団 航空自衛隊航空総隊第

1航空戦術教導軍飛行教導群 F-4EJ (追加譲渡) 25機 航空自衛隊航空予

備軍団第1航空予備軍第411予備航空団 航空自衛隊航空総隊第1航空戦術教導軍

飛行教導群 F-86F 2機 (研究用) 航空自衛隊航空予備軍団

第1航空予備軍第411予備航空団 航空自衛隊航空総隊第1航空戦術教導軍飛行教

導群 C-46D 21機 航空自衛隊航空予備軍団第2航空予備軍第421予備

航空団 航空自衛隊航空総隊第1航空戦術教導軍飛行教導群 C-119AYS-1

1の輸送機型 21機 航空自衛隊航空予備軍団第2航空予備軍第421予備航空団

航空自衛隊航空総隊第1航空戦術教導軍飛行教導群 T-3 32機 航空自

衛隊航空予備軍団第2航空予備軍第421予備航空団 航空自衛隊航空総隊第1航空

戦術教導軍飛行教導群 T-2 32機 航空自衛隊航空予備軍団

第2航空予備軍第421予備航空団 航空自衛隊航空総隊第1航空戦術教導軍飛行教

導群 KV-107 16機 陸上自衛隊予備役部隊 陸上自衛隊陸上総隊第1へ
 リコプター団 UH-1B 23機 陸上自衛隊予備役部隊 陸上自衛隊陸上総隊
 第1ヘリコプター団

図面

支援兵器名	分類	M4A3	(76)	W	HVS	中戦車	サウスダコ
夕級戦艦 戦艦	アイオワ級戦艦 戦艦	アラスカ級大型巡洋艦	大型巡洋艦	大型巡洋艦	大型巡洋艦	大型巡洋艦	大型巡洋艦
巡洋戦艦	ミッドウェイ級航空母艦 航空母艦	デモイン級重巡洋艦	重巡洋艦	重巡洋艦	重巡洋艦	重巡洋艦	重巡洋艦
クリーブランド級軽巡洋艦	軽巡洋艦	フレッチャー級駆逐艦	駆逐艦	駆逐艦	駆逐艦	駆逐艦	駆逐艦
6F-5 艦上戦闘機	SB2C-4 艦上爆撃機	TBF-1c 艦上攻撃機	艦上攻撃機	艦上攻撃機	艦上攻撃機	艦上攻撃機	艦上攻撃機
P-51D-5 戦闘機	P-47D-28 戦闘機	戦闘機	戦闘機	戦闘機	戦闘機	戦闘機	戦闘機
6B-50 攻撃機	B-25J-20 爆撃機	B-17G-60	VE	重	重	重	重



中央暦1639年10月23日――

《ムー国 首都オタハイト 政府官邸 通称『ホワイトレジデンス』》

数日後、ムー政府では日本からの軍事支援の申し出を受け緊急会議が開かれていた。この会議には国王を筆頭に政府関係者、各種軍事企業関係者が参加していた。

「以上が日本国から行われる予定の軍事支援です。詳細は皆さんの手元にある資料をご覧ください」

外務大臣がそう締めくくると、財務大臣が発言した。

「これほどの支援を行ってくれるとは大変喜ばしいが、見返りは本当にこれだけなのか？」

「はい。日本国から求められた見返りは各地の港湾施設の改修への参加、今現在マイカル港で行われている工事ですね」

「それと各種兵器の生産・整備施設整備の整備への参加。他に対グラ・バルカス帝国に備えての基地の共同整備。資料には統合基地と記載されています。そしてこの統合基地に日本軍の駐留を認めることです」

財務大臣の問いに外務大臣はそう答えた。

「見返りは殆ど我が国にメリットしかないので問題なく受け入れられますが、統合基地に日本軍が駐留することが問題です。仮に日本軍が駐留するなら我が国は永世中立を放棄する必要があります」

外務大臣がそう述べると会議参加者一同が黙り込んだ。永世中立はムーが掲げてきた方針であるそれをおいそれと放棄していいものなのか一同がそう考えていた。

「国王陛下はどうお考えですか」

首相が沈黙を破り国王に尋ねた。国王であるラ・ムーは国政には関与しないが今回は事が事なので首相は意見を求めた。

「余としては国民。そして国家が存続するために最善と思われる方法を皆には取って欲
つゝ」

「——はっ！」

国王であるラ・ムーはそう述べたが、その言葉は首相そして政府関係者、各種軍事企業関係者の腹を括るには十分であつた。

「日本国からの軍事支援内容を全て受け入れ、永世中立を破棄、日本軍が駐留することを認める事に反対する者は手を挙げてほしい」

首相がそう言ったが手を挙げる者は一人も居なかつた。

「では日本からの提案を受け入れる。皆はムー存続の為に全力を尽くして欲しい。それと外務大臣、日本との同盟を結べるか交渉して欲しい」

「わかりました。オーディクス課長に同盟締結ができるように交渉して頂きます」

首相がそう言うのと外務大臣は今すぐにでもという勢いで応えた。この日ムーは国家存続の為に重大な決定を下した。



中央曆1639年10月23日——

《ムー国 首都オタハイト 国防省本館》

緊急会議終了後、ムー国防省では会議が開かれていた。会議参加者は国防長官、ムー統括軍司令長官、陸軍司令、海軍司令、空軍司令や軍の有力部隊司令の他に各種軍事企業関係者が参加していた。

「まず我が国の現状だが、目下グラ・バルカス帝国の脅威に晒されている」

「今回の日本国からの軍事支援の申し出は神が差し伸べた手と言っても過言ではない。そして我々には一分一秒も惜しいのが現状である。その為諸君には軍の強化の為に全力を尽くして欲しい」

国防長官がそう述べると会議は本格的に始まった。

「まず日本国からの支援で多くの兵器が輸入され我が国でそれらの兵器を整備できるようにする必要があります」

「その為に各種兵器の生産・整備設備の整備に日本企業が関与するが各企業の意見を聞きたい。因みに各工廠では受け入れる事が決まっています」

国防長官がそう言うのと各種軍事企業関係者が次々と発言した。

「リグリエラ・ビサンス社は異議はありません。現在わが社ではラ・ワチカ級史実の河内級となる戦艦。グラ・バルカス帝国出現によって早期の建造がなされたが、日本からの支援品によって不要となり、2と4番艦はスクラップ。1番艦『ラ・ワチカ』は以後実験艦としてムー国製兵器の各種試験をすることとなる4隻の建造依頼を受けていますが、如何せんラ・カサミ級からの進化が凄まじく、ラ・ワチカ級1隻建造するのにも大分手こずっています」

「その為生産設備の整備に経験豊富な日本企業が関与するのは自社の能力向上の為には有難いです」

「ガエタン工業も同じく」

「イレール兵器工業もです」

「わかりました。次に統合基地の整備ですが、以前から一大海軍基地建設の話があったノルフオークに手始めに一つ整備予定です。このノルフオークに各企業の施設を建設していただきたいのですが問題はありますか」

国防長官は再び質問した。この問いに関してだがどの企業も「問題なし」であつた。そして質問対象は各軍司令に移つた。

「次に日本国から輸出される兵器の内、一部の兵器について暫くは兵士に日本国内で訓練を受けて貰う必要があります。それらについて各軍司令について意見はありますか」
「これについては統括軍司令長官である私がお答えします。陸海空各軍司令と協議した結果、兵器を扱う兵士他に整備兵を同行して派遣します」

「わかりました。整備兵を同行させるのでしたら各企業からも生産・整備の技能習得の為に社員を派遣してはいかがでしょう。各工廠からも派遣しようと思ひますが」

国防長官は各企業に問いかけた。

「それはいい提案だな。我が社は派遣する」

「リグリエラ・ピサンズ社も派遣しよう」

「ガエタン工業も乗つた」

国防長官の問いに各企業は即答であつた。やはり技術を習得できるというのはメ

リットが大きかった。そしてその後も会議は続いた。2週間後、ムーから日本に向けて訓練生や技能習得の為の社員を乗せた船団が出航していった。そして時を同じくして日本からもムーへ輸出する兵器やムーで工事を行う企業の重機や社員、技術指導員を乗せた船団が出航した。

第3章 崩れゆく均衡

第1話 世界最強の国

中央暦1640年11月——

《神聖ミリシアル帝国 帝都ルーンポリス 外務省》

——神聖ミリシアル帝国

世界最強とこの世界の誰もが認める最強国、それがこの国である。

人々は他の文明圏と一線を超える文明に畏怖と尊敬を込め、ミリシアルがある大陸を『中央世界』と呼んでいる。

帝国は世界で最も高い魔法技術や国の基礎を安定して支える高度な政治システムなどを持ち、また『古^{ラヴアーナル}の魔法帝国^{帝国}』の遺跡を調査し、魔法帝国の兵器を再利用して使用していることから、地球とは違った歪な発展をしている。

「まさかこの短期間で五大列強のうち2国がやられるなど…しかも両国とも文明圏外の国に…いまだに信じられないぞ…」

その世界最強の国の外交を司る外務省の一室で2人の男が話していた。1人は外務省統括官リアージュ。もう1人は情報局長のアルネウスである。

「列強で1番弱いレイフォルならまだしも第3文明圏唯一のパールディアが負けるか……しかも国土が狭い文明圏外の国に」

「我が国の魔導戦艦であつたらパールディアの魔導戦列艦など一瞬で消し去るのに造作も無いが、第3文明圏では突出した軍事力を持っていた国だ」

「文明圏外の船でどうやって勝つたのか知りたいところではある。日本国、か。興味はあるな」

「はい、ですから是非とも早期に使節団の派遣を検討していただきたく……」
「しかしねえ……」

リアージュは、目の前の机を右の人差し指でトントントン、と叩く。彼の癖だ。

「アルネウス君、君もわかると思うが神聖ミリシアル帝国は世界最強であり、この世界のトップに位置する国なのだよ」

「その国が文明圏外の国に自ら使節団を派遣するなど……列強国ですら無い国にだぞ」

「リアージュ様、日本国はパーパルディア皇国亡き後、第3文明圏乃至は東方国家群の盟主となるべき存在だと私は思います」

「我が国が主導の『先進11か国会議』の開催に先立ち、日本はパーパルディアの代わりに参加を打診すると言う形でそれらの準備すべき事柄の指導や国交開設などを目的として使節団を派遣するという事はどうでしょうか？」

「うゝむ。それなら議員の皆様方も賛同してくれるだろう」

「それに…」

「どうした？」

アルネウスは、側に控えてあった鞆から一枚の魔写を撮り出す。魔写にはムーの首都オタハイトで取られた日本の戦闘機『F-11C』のムー国への輸外型『スピットファイア』戦闘機が映っていた。

「これを」

「…なんだねこれは？新しい発掘品かね？」

「いいえ違います。ムーの新型戦闘機『スピットファイア』です」

「ふむ。我が軍の制空型天の浮舟『エルペシオ3』と同じ魔光呪発式空気圧縮放射エンジ

ンを搭載してるそうだが…」

「ムーもあの複葉機から随分と進化したな」

「いいえ、これはムーの戦闘機ではありません。これは日本の戦闘機をムーが輸入したものだそうです」

「ほう…なんと…」

我が国よりも下であるものの、ムーはこの世界の中でも2番目、機械文明では最強と呼ばれる国である。その国が戦闘機を輸入するなど信じられない。

「日本国はムーよりも機械文明が進んだ国だそうです。是非とも今後のため…対魔法帝国の為にも仲良くした方が良いかと…」

「よし、わかった。検討と根回しをしておく」

後日、神聖ミリシアル帝国は、日本国に使節団の派遣を決定した。



中央暦1940年12月3日――

《グラ・バルカス帝国 帝都ラグナ 情報局》

薄暗く、モールス信号の様なトンツーン音が響き渡る建物の中、唯一格式がある茶色いドアの前に一人の男が報告のために訪れる。男は上司に報告を行うため、ドアをノックする。

「入れ」

「失礼します」

中から低い男の声が聞こえ、入る様伝えられる。男はゆっくりと部屋に入る。

「閣下、日本に関する総合戦力分析報告書が出来ましたので、報告と決裁に参りました」

男は閣下と呼ばれた男に書類を手渡す。書類に目を通す間、部下は口頭で概要を説明する。

「私としては日本国は神聖ミリシアル以上の強敵となり得ます」

「ほう…慎重な君としては随分珍しいな」

閣下と呼ばれるグラスコードをつけたメガネの男——情報局長『ムスドリフ』は、見ている資料から目を離し、部下の方へ目を向ける。

「資料の5ページを見ていたくださいたい」

「むう…これは…なんと…」

資料には、パーパルディア東部の街で撮られた陸自の戦車、『90式戦車C型』が撮られていた。

「側にいる人間の比率から考えるに我が国の『ワイルダー』よりも大きいでは無いか!!」

「はい、主砲も100mm越え、艦砲を流用したものかもしれないぞ」

「自走砲か…いや戦車であつたら我が軍では勝ち目は無いぞ…」

まさに戦車の化け物。だが第⁹二次⁷世界^式大^戦期^中の戦車しか知らない男達にとって現代^Mの主力^B戦車^Tは驚くべき存在であろう。

「次に15ページをご覧くださいたい」

戦車の衝撃から取まらないうちに次のページに進む。そこには帝国軍最強の戦艦『グリード・アトラスター』よりも大きい戦艦——きい型戦艦の姿があった。

「……」

「衝撃は解ります。私もこの大きさは目を疑いました」

ムスドリフは言葉を失っていた。それに追い討ちをかける様に部下は推測した敵戦艦の諸元を言い始める。

「全長は推定で300mと少し、速力もグリード・アトラスターと同じくらい、主砲は着弾した水柱を見るに46cm以上だと思えます」

「……まさか……これまでとは……」

ムスドリフは帝国の威信をかけて建造されたグリード・アトラスター級より性能が上の日本国の戦艦に恐怖を抱く。

「ですが日本軍には不可解な点と弱点があります」

「なんだね？」

「まず不可解な点は、これほど大きな艦を建造できるのに、巡洋艦の砲がたったの1門のみでありしかも豆鉄砲のような小口径砲です」

「なに？空母も我が軍のと比べると超々々大型なのにか？」

「はい、17ページの写真の通りです」

「…不可解だな」

ムスドリフは46cm以上の砲を実用化できるのに、豆鉄砲しか巡洋艦に装備しない日本に疑問を抱く。

「弱点は人口が3億2千万人と、国土面積に比べて多いのですが、その分食料自給率が低く、ロデニウス大陸が日本の生命線となっております」

「我が国と日本が、将来的に衝突した場合、帝国の海上戦力で日本とロデニウス大陸間の海域を封鎖するだけで、日本は干上がります」

「成程、兵糧攻めが弱点か」

「だが、この空母と戦艦、戦車は脅威だ。我が国のライバルは日本になるかもしれん」

グラ・バルカス帝国は、日本についての情報を集め始めた。



中央暦1941年1月16日

《神聖ミリシアル帝国 帝都ルーンポリス ゼノスグラム空港》

世界最強の国、神聖ミリシアル帝国は、第3文明圏よりさらに遠くの日本国へ、世界の先進11カ国会議への出席要望と、国交開設の準備のため、30名にも及ぶ先遣使節団を派遣しようとしていた。

【神聖ミリシアル帝国遣日本国先遣使節団】

- 外交官 ファイアーム
- 情報局員 ライドルカ
- 武官 アルパナ
- 技官 ベルーン

「ではこれより出発します」

使節団の目の前には、世界初のジェット旅客機『コメット』の様な旅客機が鎮座して

いた。だが、エンジンには不思議な型が刻んであり、プロペラは無く、一見ジェット機のようにも見える。

だが速度は遅く、ジェット機レベルでは無い。

神聖ミリシアル帝国の天の方舟『ゲルニカ』である。

今回の派遣は、ムーの支援も得られる事から、一旦アルタラス王国ムー基地で燃料となる魔石を交換し、日本国中華地方の都市、香港へ向かう。

その後、日本の元首の即位記念の陸軍のパレードに参加、その後、北京市という所から日本本土の福岡市に移動し、首都東京で会合する。

また、会合した後は日本の元首の即位式典にも参加する予定だ。日本内の移動は全て日本が負担する。

天の浮舟はムーが用意した高純度魔石燃料により、燃料交換を行う。帰りは再度アルタラス王国で燃料補給し、帰る事となる。

情報局員『ライドルカ』は、ゲルニカに乗り、大きな椅子に腰掛ける。

ミリシアルが国の意地をかけて開発した旅客機だ。座り心地は最高だ。

ふと右側を見ると、先に乗り込んだ外交官『フィアーム』がおり、その顔は優れない。

「フィアームさん、どうかしましたか？」

話しかけられたフィアームはライドルカの方向を向く。

「いや…事前に説明されましたが、我々中央世界の、しかも世界最強の神聖ミリシアル帝国が自ら足を文明圏外の国に運ぶことが気に入らないのです」

「日本国はパーパルディアに勝つたと説明を受けましたが、私は違うと思います。あの国は第3文明圏に恐怖で支配を強いており、日本国は圧政を受けていた属領を先導してパーパルディアを壊滅させたと思っています」

「そもそも第3文明圏は私は文明圏と思っけません。この飛行機のような飛行技術はワイバーン以外保有しておらず、パーパルディアもロードだかオーバーロードだかのワイバーンの発展型しか保有してませんでした」

「更にその日本国と言うのは文明圏外国でしょうか？文明圏と非文明国では技術力は大幅に違くなります。文明圏と言えるかどうかの第3文明圏より外れの日本にこのゲルニカが着陸できる飛行場があるかが心配です」

「(おつと…上層部はムーのスピットファイアの事話してないのか。意地悪だな)」

「滑走路については、ムーにもきちん確認を行っているので大丈夫です」

「そういえば…今回の派遣は情報局の要望らしいですね、まずはあなた達で情報を集め

るべきではないでしょうか？先ほども言った通り、世界一の国が自ら行くにはプライドというものがありません」

「国交を結ぶにしても、まずは日本から来させるように工作くらいはしてほしかったものです」

「申し訳ありません。……事前の情報によれば……いや、どうせすぐにわかります」

フィアームはムーの『スピットファイア』戦闘機のことを言おうとしたが、留まった。

「日本を直接見ていただければ感じる事があるでしょう」

天の浮舟は、エンジン後方から青い光を発しながら滑走する。舟は浮き上がり、日本を指して飛び立っていった。



中央暦1641年1月20日――

《日本国岐阜県岐阜試験場 防衛装備庁先進技術実証機試験隊》

「ええっ！これを使うんですか!？」

自衛隊の兵器について色々と試験する防衛装備庁。

そこで実験機を管轄する先進技術実証機試験隊長の『萩原和樹』2等空佐は上層部から派遣された職員に驚愕していた。

「やっぱり難しいですか？」

「いいえ…完璧に飛行できませんが…なぜ使節団の護衛に実験機を？」

「実は、今回の使節団の派遣国は神聖ミリシアル帝国、世界一と呼ばれる国なのですよ」「そこで日本の技術を知ってもらおうとこの実験機を護衛に…」

その言葉に萩原は後ろの実験機、『X-7 (ATD-X7) 先進技術実証機』を指す。

「…まあ、出来る限りの事はします」

「！ありがとうございます!!」



中央暦1640年1月23日――

《日本国 中華地方南西約700km 上空》

人類は皆大空に憧れた。だが、自身では飛べない。だから空を飛ぶ物を作り、それに乗り込んだ。

神聖ミリシアル帝国の天の方舟『ゲルニカ35型』は、雲一つない大空を飛んでいた。時速310kmで、彼女は日本へ向かっていた。

『間も無く日本国上空です。なお、日本国空軍の戦闘機が2機、着陸誘導を行う為接近します。戦闘機を視認されても敵対行動を取ることはないのでご安心ください』

「ん〜やつと着くぞ!!」

機内放送が終わると共に、ライドルカはシートベルトを掛けて、手を上に伸ばす。そのまま隣を見ると、フィアームがイライラしていた。

「全くもって遠い。それに後ちよつとで東の果ての文明圏外国家を相手にしなければいけないと思うと、頭が痛くてしょうがない」

ライドルカはそつと視線をずらす。女の怒りは怖い。その事は、異世界であつても同様であつた。

フィアームはそのまま、ライドルカに釣られて首を鳴らす。

「…戦闘機が来ると言う事だが、ワイバーンではないのか。戦闘機を持っている事自体が驚きでいるが、さすがムーの影響国だな」

「と言う事は、パーパルディア皇国を倒したのも納得がいく。どの様な戦闘機が来るのか楽しみだ」

フィアームの脳内には、ムーのレシプロ戦闘機がイメージされる。だが、スピットファイア戦闘機のことを知っている事ライドルカは、苦笑をするしかなかった。

「フィアームさん…日本国に対しては『文明圏外の頭のおかしい蛮族』と言う先入観無しに接した方が良いでしょう」

「わかっている」

彼女も外務局の外交官であることから、プロである。それ以上、ライドルカは何も言

わなかった。

「いやあく僕も日本の戦闘機がどのような物か楽しみですよ。ですがレシプロ機は見飽きたので別のがいいですな」

「いや、レシプロだろう。我が国の魔光呪発式空気圧縮放射エンジンを実用化しているとは到底思わない」

技官である『ベルーノ』の言葉に、ファイアームが答える。3人一緒に窓の外を見た。遙か下の青い海と、2機の魔光呪発式空気圧縮放射エンジンの音が聞こえる。

突如、2機の機体がゲルニカの横を横切った。遅れて甲高い音が聞こえ、座席が小刻みに揺れる。

「なっ！なんて速さだ!!」

「早すぎる!!制空型天の方舟の速度を大幅に超えているぞ!!」

武官の『アルパナ』とライドルカは叫び、ファイアームは只々放心していた。

2機の機体は後方で向きを変え、あっという間にゲルニカに接近する。

一機がパイロットの視界に入る様に先導し、もう一機は横に着く。

「はっ!!機の前方に空気取入口があるぞ!!我が国と同じく日本国も魔光呪発式空気圧縮放射エンジンを実用化しているのか!!」

「…なんてことだ!!水平尾翼がないぞ!!全翼機か!?なんで形だ!!」

だが、次の瞬間。4人は今までの中で一番驚愕する。

翼が変形したのだ。ミリシアル国内で流行っている未来小説の戦闘機と酷似している。

横についた戦闘機——否、実際は実験機なのだが、『X-7 (ATD-X7) 先進技術実証機』は翼が変形する。元となったゲームの戦闘機の特徴から、主翼に内蔵した翼を前方に引き出し、前進翼とする高機動形態になる可変翼構造が設計されているのである。

「な……な……変形したあ?!?!?!」

「どう言うことなの (真顔)」

「なんてことだ!!翼が変形するだ!!そんな事はあり得ない!?!」
「そんな!...我が国は最先端だろう!?!魔法帝国の遺跡を他の国よりも早く、そして正確に解析するのが我が国の特徴だ!?!他国に比べて大きなアドバンテージがあるのに、重要な航空機分野で負けるとは!?!」

ファイアームは、ヒステリーをおこしながら、『X―7（ATD―X7）』を見ていた。

第2話 世界最強の国の驚愕

中央暦1641年1月23日――

《日本国中華地方香港上空 神聖ミリシアル帝国使節団 天の方舟35型》

「つつー！」

神聖ミリシアルの外交官『ファイアーム』は、目の前の光景にプライドを破壊された。

眼下に広がるのは神聖ミリシアル帝国の首都『ルーンポリス』を遥かに凌駕する大都市。
市。

しかも其れが首都ではなく、地方都市だと言う事が、彼女の思考を停止させる。

「日本は機械文明国だと聞いたが……これほどの大都市を魔法なしで作れるのか!？」

「……なんて国だ……まるで古の魔法帝国ラヴァーナナル帝国の都市のようだ……」

技官『ベルーノ』と情報局員『ライドルカ』は感嘆した言葉を口にする。

数分後、香港国際空港に到着する。彼らの祖国のそれより、遙かに大きい空港に。

「デカいな……」

「これが……日本の旅客機か……天の方舟とは一線を画しているぞ……」

使節団は、天の方舟35型の横に駐機している、『MRJ-150』と、『ボーイング767』型機を見て惨めな気持ちになる。

中央世界の、ひいては世界最強を誇る神聖ミリシアル帝国の最新型機『天の方舟35型』。その丸みを帯びた美しい機体、他を大きく突き放す速度は彼ら彼女らが見るたびに自信とプライド、誇りを覚えていた。だが、横の機体を見ると惨めな気持ちになる。

機体を降りると、日本軍の儀仗隊と、黒い服の外交官がいた。使節団は儀仗隊を巡視した後、外交官が近づいてくる。

「ようこそ遠路遙々お越しくございました、神聖ミリシアル帝国の使節団の方々。私は日本国外務省中央世界局長を務めさせていただきます『近藤伸宏』と申します。今回は皆様方の案内を務めさせていただきます。宜しく願います」

日本外務省は、日パ戦争日本とパーパルデイア皇国の日本側の呼称。他国では大陸の名前をとってフィルアデス大陸戦争や第三文明圏戦争とも呼ばれるの教訓から、異世界の地域別の局を作るために、5つあった局を統合して文明圏別に設立した。北米局&欧州局↓中央世界局^{第一文明圏}。アジア大洋州局↓第二文明圏局。中南米局↓第三文明圏局。中東アフリカ局↓文明圏外局

「こんにちはは日本国の皆様。私は神聖ミリシアル帝国遣日本国使節団長を務めるフィームだ。よろしく願います」

2人は握手すると共に、側に控えていた日本の記者がフラッシュをたく。其れを見ていた技官『ベルーノ』は舌を巻いた。

「(あのカメラ!連写できるのか!我が国のカメラよりも性能が良さそうだ...)」

使節団はその後、リムジンに乗ってホテルへ向かった。

「(この『リムジン』と言う車。我が国の魔導車よりも滑らかに進むぞ...)」

「近藤さん。この車はオーダーメイドですか？実に素晴らしい」

情報局のライドルカは近藤へそう尋ねる。

「ええ。この車は政府の特注品ですね」

「ほお…貴国は車技術は素晴らしいですね。我が国にも車がありますが」

「貴国にも車があるのですか！乗ってみたいですね！」

「もしよろしければ国交を結べたら何台かお譲りしますよ。所で日本には何台の車があるのですか？」

「我が国にはおよそ一億二千万台ありますね。ほら、あのように」

「「「つつ!!」」」

4人が見る先には、何台もの車が走る高速道路があった。あの車の数、もしかして日本は一般人でも車を保有しているのかもしれないと4人は考えた。

「近藤さん、日本では民間人も車を持てるのですか!？」

「ええ…小型車だと新品で100万から200万で買えるので、一家に一台普通ですね」

4人はさらに驚愕する。ミリシアルでは魔導車は政府の高官でもないと乗れないほど高級であつた。

使節団は日本への畏怖の念を強めながらホテルへ向かつた。



翌日――

《日本国中華地方香港府香港市　ザ・ペニンシユラ香港》

神聖ミリシアル帝国の使節団は、日本の説明のビデオを見ていた。

日本神話から戦国時代、明治維新に世界大戦。其れを見ているうちに、使節団は日本が本当に転移国家だと言うことを実感する。

特に驚いたのは、2度あつたと言われる世界大戦。世界が二分され、国民が一丸となり戦う総力戦。2回合計で9,000万人もの死者が出た大戦。

神聖ミリシアル帝国も体験したことがない戦争。かの神話に語られる竜魔戦争とも引けを取らない。

1番驚愕したのは、『核兵器』と言われているもの。これは古ラヴァーナの魔法帝国ナルのコア魔法ではないか。

つまり日本国はコア魔法を実用化している。外交官にさりげなく聞いた所、日本は約

5, 400発のコア魔法を保有していると言う。

——絶句。しかも日本がいた世界はコア魔法を保有している国が日本の他に9カ国有ったと言う。それで世界が減びなかったのは、それらの国は、互いに核兵器を突き付け合っており、1発でも撃つたら、報復攻撃で自国も確実に滅ぶと解っていたからだと言う。

まさに修羅の世界。古^{ラヴァーナル帝国}の魔法帝国が複数いる世界など想像を絶する。

歴史の解説が終わった後、外交官がマイクを持って使節団の前に出る。

「改めてこんにちは、神聖ミリシアル帝国の使節団の皆様方。先ずは明日からの予定についてご説明させて頂きたいと思えます」

「明日は、8時から朝食のバイキング、その後このホテルを9時30分に出発。もう一度香港国際空港に行き、江西大演習場隣接の飛行場に着陸します」

「着陸後、江西大演習場で陸上自衛隊の兵器について説明します」

「その後、ヘリコプターで上海国際空港へ移動。上海からは総理大臣専用機で中部国際空港へ移動し、空港隣接のホテルで一泊します」

「翌日は、名古屋駅から品川駅まで中央新幹線で移動、横田基地へ移動し、そこで航空自衛隊の装備説明・展示飛行・体験搭乗を行わせていただきます」

「当日夜には、政府関係者らとの実務者会議を行います」

「翌日には天皇陛下の即位礼正殿の儀に参加いただき、その後ホテルで一泊」

「一泊後、横須賀に移動し、天皇陛下即位記念国際観艦式に参加頂きます。その後香港港へ入港します」

「それでは皆様、よろしくお願いいたします」

挨拶が終わり、食事が運ばれてくる。見たことがない料理に目を輝かせながら、ライドルカは隣のフィアームに話しかける。

彼女は苦い顔をしながらも食事を楽しんでいた。

「フィアームさん、さっきの映像を見てどう感じられました？ 私は、とんでもない技術を持った国だと思います！ 興奮が抑えられませんよ！」

「…うむ。魔法文明ではないから些か国力が読みづらい。魔法について何も触れなかったから、魔法がないかもしれないな」

「確かに、魔法がないかもしれませんがね。ですが機械文明だけでムーより上だとは…ベルーノ殿はどう思いますか？」

ベルーノは、食べていたちまきを飲み込み、話し始める。

「私としてはあの新幹線……あれが気になります。1日に何百本も運行し、それでも事故を起こさせない技術。あれにはかなりの演算装置が使われていると思います」

「……………」

フィアームは、カバンの中にある電卓を思い出す。まさかあれよりも高度な電卓が日本にあるのだろうか……。彼女は外交官へ電卓を渡すのをやめた。

その後、使節団は各々の部屋に戻り、日記を書いたり、部屋を探索して1日を終えた。

◆◆

翌日――

《日本国中華地方香港府香港市 ザ・ペニンシユラ香港》

ザ・ペニンシユラ香港のロビーには、神聖ミリシアル帝国の使節団らが集まっていた。ライドルカは、眠そうな顔をしているベルーノに挨拶をする。

「おはようございます、ベルーノさん。眠そうですが昨夜何かしていましたか？」

「ああ、おはよう。昨日従業員に図書館があると聞いてね。本を借りてきて読んでいたら徹夜していたのだよ。コーヒーがあつて助かったね」

「バリスタ?とか言う機械ですね。あれは凄い。機械であんな美味しいコーヒーが飲めるなんて…是非情報局内に一台欲しいですね」

軽話をしていると、近藤が話し始める。

「皆様、おはようございます」

「本日は、先日お話した通り、江西大演習場での陸上自衛隊の演習を見ていただきます」

一向は、リムジンで香港国際空港へ向かい、手荷物検査などを受けて『MRJ—90』に乗り込む。

乗り込んだライドルカは、シートのかかふか具合に驚嘆する。

「ほお！実に柔らかい！」

「天の方舟35型よりも…悔しいですが、一歩先を進んでいますな」

その後、飛行機は離陸体制に入る。

『間もなく離陸します…もう一度シールドベルトをご確認ください…』

「もうすぐですな」

「魔光呪発式空気圧縮放射エンジン以外の飛行機…楽しみです」

その瞬間、エンジンの回転数上がり、凄まじい振動と音が流れる。

「うおっ！」

「きゃっ!!」

ブレーキが解除され、一気に加速される。離陸可能速度まで達した旅客機は、機首を上げて、北へ針路を向ける。

一向は、天の方舟とは違う日本国の飛行機に言葉を無くしていた。

◆◆

1時間後——

《日本国中華地方江西県 江西大演習場》

神聖ミリシアル帝国の使節団は、着陸後陸上自衛隊南部方面団総監『平山清之』の説明を受けていた。

一向は、10式戦車の前に移動する。

「これは…」

「この車両は、陸上自衛隊の主力戦車の10式戦車A型です。武装は120mm滑腔砲と、90式車載7・62mm機関銃などを備えています」

「鉄を纏っているのですか!？」

「ええ、複合装甲と呼ばれています。軍事機密から詳しくは言えませんが、厚さ400mm以上の鋼鉄に匹敵する装甲です」

「[[[!]]]]」

400mmの鋼鉄に匹敵する装甲を纏った、120mmの巨砲を持った車両。武官であるアルパナは、この車両がミリシアルに侵攻した場合、止める術がない事に冷や汗をかく。

「そ…速度は…」

「約70 km/hですね」

「……………」

つまり目の前のこれは、時速70 km/hで動き回る120 mm巨砲を持った撃破不可能の鉄竜である。彼らは他にも説明を受けたが、インパクトが強すぎて説明が終わる頃には、頭を痛くしていた。



翌日夜――

《日本国関東地方東京都 帝国ホテル一室》

日本が誇る帝国ホテルの一室では、神聖ミリシアル帝国の使節団幹部の4人が話していた。

1時間後に控えた日本政府高官との会談、其れと今までの訪問のまとめである。

「戦車…あれは是非欲しいですな。輸入するか日本から技術を貰うか…だが、そう易々

と技術は渡してくれないだろう、輸入するにしても頭の硬い上層部がそれを許すかどうか……」

「私のはあのリニアモーターカーという鉄道が1番興味深いですね……エルペシオより早い鉄道など考えたくないですが……」

「やはりあの『F-15』が想像以上でした。護衛機がああのレベルなので想像はしていましたが、あれほどの高性能機を何百機も保有しているなど……悪夢ですね。技術については是非とも見てみたいですが」

三人が考察する中、フィアームは頭を抱えながら言葉を口にする。

「……文明圏外にこれ程の国があるとは……グラ・バルカス帝国といい、何でこのような国がポンポンと現れるのだ……」

「もしかすると、古の魔法帝国の遺産である魔王『ノスグーラ』が最後に語っていた通り、古の魔法帝国の復活が本当に近いのかもしれない」

「「なに!!」」

ライドルカの言葉に、三人は一斉に目を丸くする。

「そのような事、我々は一切把握していないぞ!!」

「…確信が持てなかつたので情報局内で止まっていました。すいません」

「ですが、日本は歴史を見る限り、自国に敵対的行動をする国以外とは戦争をしておらず、自国から戦争を吹っかけることをしていません」

「魔法帝国が復活したら、良い味方になってくれるでしょう」

「…情報局は良いな気楽で。私は頭が痛い。今までのこと全てを上層部に説明せねばならないのです、国ごと転移などという現象は、現実的では無すぎます」

「報告書を作っても左遷されるのがオチですよ…情報局上層部から外務省に話を通して欲しいですな…」

「帰ったら伝えておきます」

その時、部屋にあった電話が鳴り、日本国の準備が整ったと連絡があった。

「よし、行くぞ」



10分後――

《日本国関東地方東京都 帝国ホテル大会議室》

フィアームは緊張していた。自国よりも発展している文明を相手するのは初めての経験であり、さらに事前に連絡が無かったこの国の政治のトップ、内閣総理大臣も出席していたのだ。

「何故国のトップまでが：そうか、我が国が本当に世界一の国なのか見計らう訳か。なるほど、見せてやろう神聖ミリシアル帝国の外交官の力を！」

フィアームはそう考えたが、実際の理由は外務省からフィアームが美人と伝えられ、予定を全部キャンセルして急いで駆けつけたのだ。こんな奴が総理大臣で良いんか国民 by 官房長官

そんなことがありながらも、会議は無事に開かれた。政府幹部の前には、紙が配られていた。要約するところだ。

○先進11カ国会議は、4年に1回、神聖ミリシアル帝国の港町カルトアルパスで開

かれる。

○次回は、1642年に開催する予定である。

○世界に多大な影響力を持つ大国が参加し、今後の世界の流れを決定する。参加するだけでも名誉なことであり、世界中から「大国」として認識される。

○世界中（彼らの把握している範囲の世界）の国々が列強を打ち破った日本国に注目しており、参加すれば国益にも叶うと思慮される。

○参加国は、世界運営について、新たな意見を述べる事ができる。

○第3文明圏については、今まで固定参加1か国、持ち回り参加1か国の計2か国であったが、固定参加国のパールディア皇国が貴国に降伏し、参加権を失ったことから、今回は固定参加国を日本国にしたい。

〔前回中央暦1638年先進11か国会議

参加国〕

○神聖ミリシアル帝国〔列〕（第一文明圏・中央世界）

○ムー〔列〕（第二文明圏）

○エモール王国〔列〕（第一文明圏・中央世界）

○トルキア王国（第一文明圏・中央世界）

- アガルタ法国（第一文明圏・中央世界）
- マギカライヒ共同体（第二文明圏）
- ニグラート連合（第二文明圏）
- パンドーラ大魔法公国（第三文明圏）
- アニユンリール皇国（文明圏外、南方世界）
- パーパルディア皇国〔列〕（第三文明圏）参加権剥奪
- レイフォル国〔列〕（第二文明圏）滅亡

「開催まで残り一年程しかないと悔やまれますが、参加するだけで日本国の世界での影響力は上がり、国益にも十分プラスされると思います」

「是非、我が国としては日本国を大国と認め、第3文明圏の長として——いや、ここは文明圏ではなかったですね」

「東方国家群の長として、是非先進リーカ国会議には参加していただきたい」
「質問ですが」

「どうぞで」

「前回参加国に、取り消し線が引かれています。レイフォル国とあります。グラ・バルカス帝国に滅亡させられたと聞きましたが、レイフォルの代わりには何処の国が入るので

すか？」

「レイフォルの抜けた部分は、いまおつしやられたグラ・バルカス帝国が参加する方向で、検討をしています」

「まだ日本国と同じように、打診をしている段階なので、1年後という国際会議としてはあまりにも急な打診に対応できるかわかりません。故に、貴国も含めて参加するかどうかはわかりません」

「解りました、ありがとうございます」

他にも様々な質問が飛んだ後、会議は終了した。

後日、日本国政府は、中央世界、神聖ミリシアル帝国の開催する先進11カ国会議に出席する事を正式に決定した。

神聖ミリシアル帝国遣日本国使節団は、戦艦『きい』の巨大さに腰を抜かしながら、香港へ向かっていった。



中央暦1641年9月18日――

《グラ・バルカス帝国 帝都ラグナ 国会会議議事堂会議室》

——グラ・バルカス帝国、通称『第八帝国』。列強レイフォルをたつた1日で滅ぼしたこの国は、日本と同じく転移国家である。

転移前に存在していた惑星ユグドでは、世界最強国家の地位にあつたが、本土のみ転移したため、広大な属領と植民地を失つたが、偶然戦力の大半を本土に集めていたため軍事力はほとんど低下していない、日本と同じ偶然に見舞われた。

ここ、帝都ラグナの国会会議事堂会議室では、軍の幹部や情報部幹部などが集まり、国家戦略・安全保障会議が開かれようとしていた。

〔国家戦略・安全保障会議参加者〕

- グラ・バルカス帝国軍本部長 『サンド・パスタル』
- グラ・バルカス帝国陸軍最高司令官 『ベテルスルス』
- グラ・バルカス帝国海軍最高司令官 『カリウス』
- グラ・バルカス帝国海軍東方艦隊司令長官 『カイザル』
- グラ・バルカス帝国監察軍司令長官 『ミレケネス』
- グラ・バルカス帝国帝都防衛隊長 『ジークス』
- グラ・バルカス帝国海軍戦艦「グレードアトラスター」艦長 『ラクスタル』
- グラ・バルカス帝国情報局局长 『ムスドリフ』

他にも、各重工業の社長や代表取締役らが集まっている。

「本日はご集まり頂いたのは、日本国のことです」

この会議の司会を務めるムスドリフは、一息付いてから話し始める。

「日本国は、ロウリア王国・パーパルディア皇国と、列強或いは列強レベルの国々を短期間で打ち破ってきました」

「その何が問題なんだ？我が国も同じことをしているぞ」

グラ・バルカス帝国海軍東方艦隊司令長官であり、帝国3大將軍の1人でもあるカイザルの言葉に、ムスドリフはうなづく。

「はい。我が国も同じような事をしています。ですが、問題はこれです」

彼は、一枚の写真を中央の机に置く。それを見たグラ・バルカス帝国監察軍司令長官のミレケネスは、驚きの表情で写真を見つめる。

「これは…グレード・アトラスターではないか!？」

「いえ、違いますなミレケネス殿。若干違いますな」

ミレケネスの言葉を修正するのは、会話に出たグレード・アトラスターの艦長、ラクスタルである。

彼は近くに置いてあったグレード・アトラスター級の図面をムスドリフが出した写真の横に置いて話し始める。

「まず、主砲塔の数が違います。グレード・アトラスター級が3連装3基9門に対し、この写真の艦は連装4基8門です」

「む…門数で勝っているならばこの戦艦の何が問題なのだ?」

「実は情報局では、これらの写真と情報員の報告を元に、グレード・アトラスター級の性能と比較してみたところ、驚くべき事が分かりました」

「推測ですが、全長:約425m、全幅:約43m、満載排水量10万トン以上、主砲は確実に46cm以上、用途不明の火器幾つかです」

絶句。語られた性能に会議室の誰もが言葉を失う。

「信じられん…46cm以上の主砲など…」

「こいつを名づけるならば…超グレード・アトラスター級だな。もしこの艦とグレード・アトラスターが殴りあつた場合…負けるぜ」

帝国3大將軍の1人、しかも海軍の東方艦隊司令長官が負けると口にした事で、会議室は騒然とする。

「カイザル將軍!!グレード・アトラスター級は帝国の威信を掛けた戦艦ですぞ!それを簡単に負けると認めるのは不愉快です!」

「だが、グレード・アトラスターの装甲は重要防^{バイタル}区^{パート}画は46cmに耐えられるぐらいだぞ。46cm以上の砲に耐えられまい」

「しかも戦艦っていうのは、自身の攻撃に耐えられる装甲を施すものだ。こいつが46cm以上クラスを耐えられる装甲を持っていたら単純に撃ち合いで負けるぜ」

「そこです。パスタル本部長殿。例の作戦、グレード・アトラスターも参加するのですね」

「ああ、部隊の中核を担う」

「カイザル殿にお聞きしますが、もし、先進11カ国会議にこの戦艦が参加し、我が部隊と戦闘する場合、どの程度の艦隊が必要ですか？」

カイザルは、一旦息を吐くと、ゆっくりと話し始める。

「…グレード・アトラスター級が2隻：いや4隻だな。それでも何隻かは沈むだろう。確実に屠るならばグレード・アトラスター級2隻を中核とした戦艦 4隻、巡洋戦艦4隻、巡洋艦30隻の戦艦部隊、そして正規空母8隻の空母機動部隊も投入しないといけない」

カイザルの言葉に、各重工業の社長や代表取締役が苦言を言う。

「そんなの不可能だ！海軍だけに予算は使われているのではないぞ！戦車や航空機などの製造ラインを停止しないとやっていけない!!」

「現在は世界征服の為、国家総動員法を定めているところだぞ!!さらに民に重圧を敷いたら、いつクーデターが起こるか分からないぞ!!」

会議が論争までに発展した時、軍の最高司令官であるパスタルが喝を入れる。

「静まれ!!…全く、今考えるべきは戦艦の新造ではなくこの戦艦をいかにして沈めるかだ」

「日本もこの戦艦を会議に出席するだろう。まずは海軍の編成を見直さねばならない」

「カリウス、カイザル、ミレケネス君達。君たちはZ作戦における海軍の戦力の増強を図ってくれ」

「了解しました」

「それに置いて本部長殿、ド・デカテオン社代表取締役殿、お願いが。これがこの戦艦に勝てる鍵になります」

「なんだ」

カイザルは、パスタルの目を見て話す。

「グレード・アトラスター級2番艦——『グレード・ウォール』。これをZ作戦までに就役させて欲しい」

「なっ…」

ド・デカテオン社代表取締役である『ヒルラス』は、絶句する。グレード・ウォールは、1年前に進水したばかりであり、未だに艤装作業中であつた。

「Z作戦までは、後7ヶ月でしょう!!最高速度でやつても8〜9ヶ月はかかります!しかも色々と試験を行わなければいけないのですよ!!」

「私からもお願いする」

「パスタル様!」

「ガイザル君は、海軍内では1番優れている將軍だ。その人が言うならばグレード・ウォールが必ず必要だ。この作戦は、皇帝陛下の強い要請、そして今後の帝国の未来にも関わる案件だ。よろしく頼む」

「…つつ!完成しても対空砲などの一部は間に合わないかもしれません」
「そうですか…だが最悪主砲が撃てれば良いのです。頼みます」

パスタルは、他の参加者の方を向いて伝える。

「取り敢えず、日本国は神聖ミリシアル帝国よりも強大な敵になろう」
「各員全力を注いで日本国と、この戦艦に関する情報の収集と精査に励んでくれ」

第3話 先進12カ国会議

中央暦1642年4月22日——

《神聖ミリシアル帝国 港町カルトアルパス》

『神聖ミリシアル帝国第二の心臓』とも称される、港町『カルトアルパス』。

中央世界の貿易拠点であり、世界中の商人たちの生の声が聞けるため、様々な情報が飛び交いスパイが集まる町でもある。

最大幅14kmほどの細長い湾の奥にあるこの町は、フィヨルドのような地形をしており、天然の良港であった。

町と言うには些か不釣り合いなこの大都市では、今まさに4年に1回の世界会議『先進11カ国会議』が開かれようとしていた。

現在、大規模な港湾施設には現在、会議出席国の護衛艦隊が姿を現していた。その様子を港湾管理責任者である、港湾管理局長『プロンド』は港湾監視塔の上から、ミリシアル製の双眼鏡を首に下げながら、入港を指示していた。

港湾施設は、現在第一文明圏エリア・第二文明圏エリア・第三文明圏エリアと区切られており、既に第二文明圏エリアには、『ムー』の機動部隊のラ・カサミ級戦艦率いる戦

艦2隻、装甲巡洋艦4隻、巡洋艦8隻、空母2隻の計16隻の艦隊、そして『ニグラー
ト連合』の戦列艦4隻、竜母4隻の計8隻が入港している。

また、第三文明圏エリアには、南方世界を収める大国の『アニウンリール皇国』の戦
列艦4隻と『パンドーラ大魔法公国』の魔導船団8隻が入港しており、此処にはいない
が、第一文明圏の列強『エモール王国』が世界最強の竜種である風龍22騎を護衛につ
けて外交団を派遣しており、現在カルトアルパス近郊の神聖ミリシアル帝国海軍航空隊
基地に着陸している。

「局長。第一文明圏国の『トルキア王国』及び『アガルタ法国』使節団到着！王国が戦列
艦7隻、使節船1隻、計8隻、法国が魔法船団6隻、民間船2隻、此方も計8隻です！」
「了解、魔信で誘導せよ。先に到着した方からだ」
「はっ」

第一文明圏エリア担当官が出ていったのと入れ違いに、第二文明圏エリア担当官が入
室してくる。

「失礼します。第二文明圏国『マジカライヒ共同体』使節団が到着しました。機甲戦列艦

7隻、使節船1隻です」

「第二文明圏エリアに入れられるか？」

「可能です」

「ならば第二文明圏エリアへ誘導せよ」

「はっ!!」

ブロンドは、担当官が居なくなつた後に、双眼鏡を覗き込む。

双眼鏡には、トルキア王国及びアガルタ法国の魔導戦列艦が目に入る。

彼は、港湾管理局に入局した26年前から、このイベントが大好きであつた。

軍艦好きで、各国の最新鋭の艦隊を見ることができるとこの会議は彼にとって夢のよう
な『お祭り』であつた。

だが、数年前から世界中からの船が寄港するカルトアルパスの性質上、ほとんどの国
の艦船を見飽きていた。

参加国が持ち回りであるにしても、新しい国ができなければ毎回毎回同じような船ば
かりであつた。

「第零式魔導艦隊が此処にあれば、各国軍も貧相に見えるのだからなあ……」

神聖ミリシアル帝国が、過去に古の魔法帝国の技術を一部解析し初めて作ったプロトタイプを集めた艦隊を祖とする、練度と質で世界最強の艦隊の第零式魔導艦隊。

カルトアルパス近くに基地を置いてあつたが、軍艦がひしめくこの会議の際には、様々な事情から西にある群島に訓練に行くのが毎年恒例となつていた。

第零式魔導艦隊は、いつ見ても優雅であり、見惚れる美しさであつた。

いつもは憂鬱なこの会議だが今回は違つた、日本国とNWT0、そしてグラ・バルカス帝国の参加である。

3カ国とも、事前に戦艦を派遣すると伝えられており、久しぶりに見る新鋭戦艦に彼は内心どんなものかと期待していた。

日本国そしてNWT0——人口だけは一流列強クラスのロウリア王国を制圧し、第三文明圏で屈指の軍事力を誇つたパーパルディア皇国を無条件降伏まで追い込んだ国。

グラ・バルカス帝国——パガンダ王国を軽く滅ぼし、列強レイフォルを1日で、それも1隻で滅亡まで追い込んだ国。

その国の戦艦はどの様な艦かと、彼はまだかまだかと待ち侘びていた。その時、水平線上に城——いや小島のような影が現れた。

監視員が騒ぐ中、第三文明圏エリア担当官が慌ただしく入室してくる。

「第三文明圏外国、日本国及びNWT O 合同使節団到着！戦艦2隻、超々大型空母1隻、小型艦17隻、計20隻！！」

「おお!!なんて大きさだ!!」

ブロンドが除く双眼鏡には、日本が誇る超大型戦艦きいとアメリカ海軍の象徴であるモンタナが到着したところであった。

近くに、ミリシアルの双胴航空戦艦であるロデオス級を遥かに超える大きさの航空母艦と、戦艦の大きさから小型艦と判断された艦もいる。

「空母もデカイ!!しかし、20隻など大部隊を連れてきたな日本とNWT Oは」

「恐らく初参加ですので、国力を見せつけるためかと…」

「多分な…しかし、あの戦艦はミスリル級にも劣らぬ大きさだ」

ブロンドは、きいとモンタナの艦影を舐めるように見渡す。

2艦の中央には、神聖ミリシアル帝国の首都ルーンポリスの市街地の高層住宅を引っこ抜いてつけたような、美しい艦橋が生えており、両艦とも『ミスリル級魔導戦艦』の

主武装の『零式38・1cm三連装魔導砲』を大幅に超える大きさの砲が取り付けられていた。

だが、あまり対空魔光砲がなく、小口径砲が少しと、時代遅れとも捉えられる回転式魔光砲が少しあるだけであった。

また、チヨラルトこの世界のチヨコレート。献上されて初めて食べたミリシアル皇帝の本名に由来するような形をした板が甲板に取り付けられているが、何なのかさっぱり分からない。

「魔光砲は余り無いな。命中率に自信があると言うことか？」

「局長、あの空母の甲板を見てください。甲板のあの航空機、制空戦闘型天の方舟の『エルペシオ』のような『魔光呪発式空気圧縮放射エンジン』が取り付けられています」

「日本もあのエンジンを実用化しているのでは無いのでしょうか」

「そうだな…日本は列強レベルの技術力を持っているようだ。流石パーパルディア皇国を下した国だな」

「と…いかんいかん。あの大部隊が入れるスペースは無いぞ。魔信で空母と戦艦だけ入港するように伝えてくれぬか」

「分かりました」

「第一文明圏エリアに空気があつたらう。そこに入港させよ」

第三文明圏エリア担当官が出ていったと共に、第二文明圏エリア担当官が入ってくる。

「局長、グラ・バルカス帝国使節団、戦艦1隻、巡洋艦1隻、小型艦3隻！」

「おお！あれも大きいな!!」

ブロンドは、又もや巨大艦が入港してきたことに興奮する。だが、日本国の戦艦と比べるとどうも巡洋艦の大きさに見える。『グレード・アトラスター』は、ゆつくりとカルトアルパスに入港する。

「やはり日本の戦艦の方がかっこいいな」

ブロンドの視線は、きくに釘付けであつた。彼は、部下に肩を叩かれるまできいを見ていた。



同時刻——

《日本国海上自衛隊 第1合同特務任務部隊旗艦『きい』艦橋》

全長300mの巨艦の艦橋で、この大部隊を指揮する第1合同特務任務部隊兼第5空母打撃群司令の『山本実都来』海将と同じく第1合同特務任務部隊兼第5空母打撃群主
席幕僚の『東郷蓮』1等海佐が虹色の煙をあげる神聖ミリシアル帝国の曳船に引つ張ら
れるグレード・アトラスターを見ていた。

「やはり大和型に酷似していますね」

「高角砲が長10cm砲では無いですから……1943年の大改装前の姿ですね」

「やはりこの艦を連れてきてよかったです。唯の護衛隊群を派遣していたら苦戦して
ましたね」

実は、日本政府は最初は一個護衛隊群でお茶を濁そうとしていた。

だが、それに待ったをかけた者がいた。中央国家情報局と当事者の海自である。

中央国家情報局の理由は、スパイによるグラ・バルカス帝国の情報収集によって分
かった情報。

——グラ・バルカス帝国の全世界への宣戦布告である。

それはそれで大きな衝撃を内閣に齎したが、殆どの閣僚は、もし攻撃されても護衛隊群であつたら70年前の旧式部隊など殲滅できると考えていた。だが、それを海自が否定する。

海自は前世界でも対戦艦を考えていた。自身が3隻戦艦を保有している為、仮想敵国も対抗して戦艦を出してくる可能性があつたのだ。

それが実際に東亜戦争で発揮された。中国は、西側諸国の対艦ミサイル対策として、対空ミサイルと装甲をガン積みした戦艦を新造したのだ。

その対処に海自は当初、撃沈させる為にかなり試行錯誤した。護衛隊群が保有する対艦ミサイルだと装甲や対空ミサイルで無効化され、艦砲で対抗するにも、海自艦艇が保有する127mm砲や76mm砲だと大したダメージを与えるのは難しく、逆に接近したら紙装甲の現代艦艇はやられてしまう。

問題の戦艦は、極超音速対艦ミサイルや潜水艦の長魚雷、51cm砲弾を改造した大型爆弾や、『眼には眼を、歯には歯を、戦艦には戦艦を』と言う精神で70年振りの戦艦群による砲撃戦によって撃沈したのだが、これでもかなりの手痛い出費があつた。

グラ・バルカス帝国は、恐らく会議に超大型戦艦グレード・アトラスター級を投入する。グレード・アトラスターは旧海軍の大和型戦艦に酷似している為、中国戦艦と同等

かそれ以上の防御力を保有していると考えられる。

中国戦艦と比べると対空ミサイルを積んでいない分、対艦ミサイルを当てては容易だが、艦橋構造物などを無力化するだけで砲は無力化できない。

また、潜水艦の長魚雷もカルトアルパス周辺の海図がない為、投入するのは難しく、51cm砲弾を改造した大型爆弾も新造は難しい。

その為、きいを中核とした戦艦と、空母打撃群の航空戦力で対処することになった。

【日本国・NWT^JO第1合同特務任務部隊^S】

司令官： 山本実都来海将（エストシラント沖大海戦と同じく臨時昇格）

主席幕僚：東郷蓮1等海佐

第5空母打撃群 司令官： 山本実都来海将（部隊司令兼任）

——司令部直属

——ひりゆう型航空母艦『ひりゆう』

——第5空母打撃群直属ミサイル巡洋艦

——すずや型ミサイル巡洋艦『すずや』

——すずや型ミサイル巡洋艦『よしの』

——第5空母護衛隊

— きい型戦艦『きい』

— やまと型ミサイル護衛艦『やまと』

— やまと型ミサイル護衛艦『むさし』

— なかと型ミサイル護衛艦『なかと』

— なかと型ミサイル護衛艦『むつ』

— ふぶき型ミサイル護衛艦『ひびき』

— ふぶき型ミサイル護衛艦『あかつき』

— あきづき型汎用護衛艦『あきづき』

— あきづき型汎用護衛艦『すずつき』

— ゆうぐも型汎用護衛艦『ながなみ』

— ゆうぐも型汎用護衛艦『あきぐも』

第5空母航空団

— 第2_V7_F戦闘飛行隊『トップガン』〔使用機種：F—14E〕

— 第8_V5_F戦闘飛行隊『アタランテ』〔使用機種：F—35C〕

— 第1_V5_F6_A戦闘攻撃飛行隊『バトルフィールド』〔使用機種：F—2C〕

— 第6_V8_F9_A戦闘攻撃飛行隊『デーブインパクト』〔使用機種：F—2D〕

— 第2_V4_A7_Q電子攻撃飛行隊『バーボン』〔使用機種：E/A—18G〕

— 第42艦^V上空^A中^W早期警戒⁴飛行隊² 『シャークス』【使用機種：E—2D】
 — 第51ヘリコプター^H海上戦闘⁵飛行隊¹ 『アーサー』【使用機種：SH—60K】
 — 第36ヘリコプター^H海洋打撃³飛行隊⁶ 『タチャンカ』【使用機種：SH—60I】
 — 第1艦隊^V兵站支援¹飛行隊⁵第5分隊⁵ 『ダイヤモンド』【使用機種：C—2A】
 新^N世界^W条約^T機構^O外交^D官^E護衛^J合同^M任務^U部隊¹ 司令官： ジョニー・T・ハリソン少将

— 第1水上打撃部隊

— モンタナ級戦艦 『モンタナ』
 — アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦 『バリー』
 — アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦 『デューイ』
 — 45型駆逐艦 『ダイヤモンド』
 — フォルバン級駆逐艦 『シユヴアリエ・ポール』
 — デ・ラ・ペンネ級駆逐艦 『フランチェスコ・ミンベツリ』

「しかし…艦艇数が足りませんね。東郷1佐、衛星で確認されたグラ・バルカス帝国の艦艇数は？」

「はい、57隻の大艦隊が帝都であるラグナを出港したと確認されています」

「まさか嵐などで52隻が沈没するなどあり得ないでしょうし…次回この地域を衛星が

偵察する日は？」

「一週間後になります」

「：グラ・バルカス帝国もそこまで待つてくれないでしょう。ハリソン少将に連絡を、駆逐艦一隻を湾外へ移動させてほしいと」

「了解しました」

1時間後、デ・ラ・ペンネ級駆逐艦『フランチェスコ・ミンベツリ』が湾外へ移動した。



同時刻——

《ムー国海軍先進12カ国会議外交官護衛機動部隊 旗艦『ラ・カサミ』艦橋》

ムーの誇る最新鋭戦艦『ラ・カサミ』の艦橋では、入港してきたきいに対する品評が開始されていた。

「ふむ、大きいな」

「はい、全長300mはあります」

ラ・カサミ艦長『ミニラル』は、機動部隊司令官の『ブレンダス』の言葉にそう返す。ブレンダスは、きいをゆっくりと舐め回すように見る。

「…初めてラ・カサミ級を見た時は凄いと思ったが、この艦を見ると見劣りするな」
「ですが兵の練度では遜色ないでしょう。我が軍も日本と共同設計した艦を建造中です」

「私はあまり日本を気に入っていないのだが…これを見るとどうも認めざるをえない」

ブレンダスは、ふと隣に停泊している英国海軍の航空母艦『イーグル』に酷似した航空母艦、『ラ・ヴァニア』級航空母艦『ラ・ヴァニア』の方を見る。

「あの新型航空機の整備は万端かね？」

「はい、整備万端との報告です」

「だが、何故この艦隊に試験を頼んだのだ？」

「さあ？」

ブレンドンダスは知らなかったが、日本政府は一応伝えていないよりはマシだと言うことで、国交を開いたミリシアルとムーにも、グラ・バルカス帝国の大部隊が出港したと伝えた（スパイの事は伝えなかった）

だが、両国ともこれがブラフだと思い、上層部までは伝えていなかった。

しかし、ムーのマイラスは日本の軍事力から信憑性は高いとして、派遣部隊の増加を提唱した。

実際これは却下されたが、これだけとはしてマイラスは日本と共同開発した新型航空機をラ・ヴァニアへ乗せることになった。

これが後の戦いに影響すると言う事は、まだ誰も知らない。



同時刻——

《グラ・バルカス帝国海軍東部方面艦隊先進11カ国派遣部隊 旗艦グレード・アトラス
ター艦橋》

大和型に酷似するグレード・アトラスター。レイフォルを1日で下したこの伝説的戦艦の艦橋で、グラ・バルカス帝国海軍東部方面艦隊司令長官であり、グラ・バルカス帝国海軍東部方面艦隊先進12カ国会議派遣遺隊総司令官でもある、『カイザル・ローラン

ド』大将は、グレード・アトラスター艦長『ラクスタル』と、きいを見ながら話をして
いた。

「ふむ、あれが日本の戦艦か…」

「信じられませんな。グレード・アトラスターよりも大きいとは…3000mはあります。
主砲も恐らく、51cmです」

「部隊を増強させてよかったな。最初の部隊であつたら危なかつた」

グラ・バルカス帝国は、情報局の日本の情報からかなり危険と認識して、部隊を増強
させていた。

グレード・アトラスター以外は、既にカルトアルパス湾外に展開しており、指示があ
れば直ぐに攻撃可能だ。

【グラ・バルカス帝国海軍東部方面艦隊先進12カ国会議派遣隊】

総司令官：カイザル大将

第1戦艦部隊 司令官：カイザル大将（総司令官兼任）

——司令部直属

- グレード・アトラスター級戦艦『グレード・アトラスター』
- グレード・アトラスター級戦艦『グレード・ウオール』
- 第11戦艦戦隊 司令官：オスルトウス中将
 - ブラッドムーン級戦艦『ブラッドムーン』
 - クエーサー級戦艦『クエーサー』
 - オルフエウス級戦艦『カノープス』
- 第5巡洋艦戦隊 司令官：ライネス少将
 - キャプリーコン型航空巡洋艦『デネブ・アルゲデイ』
 - タウルス級重巡洋艦『ケラエノ』
 - タウルス級重巡洋艦『プレイオネ』
- 第1水雷戦隊 司令官：カリトリス准将
 - レオ級巡洋艦『デネボラ』
 - 第112駆逐隊 司令官：プレイオネス大佐
 - エクレウス級駆逐艦『キタルファ』
 - エクレウス級駆逐艦『エクレイ』
 - アクエリアス級駆逐艦『サダルメリク』
 - アクエリアス級駆逐艦『サダルスウド』

——第56駆逐隊 司令官：ウイルオス大佐

——アクエリアス級駆逐艦『スカト』

——アクエリアス級駆逐艦『アルバリ』

——キャニス・ミラー級駆逐艦『ゴメイサ』

——キャニス・ミラー級駆逐艦『ルイテン』

——第365駆逐隊 司令官：ナルリウス大佐

——パイシース級駆逐艦『アルレシヤ』

——パイシース級駆逐艦『フム・アル・サマカー』

——パイシース級駆逐艦『レーヴァテイ』

——パイシース級駆逐艦『トオーキュラー』

第2戦艦部隊（グラ・バルカス帝国海軍東部方面艦隊東征艦隊）

司令官：アルカイド

中将

——第16戦艦戦隊 司令官：アルカイド中将（部隊司令兼任）

——ヘリオスファイア級巡洋戦艦『プレアデス』

——プロミネンス級巡洋戦艦『プロミネンス』

——オリオン級戦艦『ベテルギウス』

——オリオン級戦艦『プロキオン』

——第5巡洋艦戦隊 司令官：ランヴァルド少将

——タウルス級重巡洋艦『アルデバラン』

——タウルス級重巡洋艦『プレアルレス』

——タウルス級重巡洋艦『アルキオネ』

——第4水雷戦隊 司令官：カリムウエル准将

——キヤニス・メジャー級巡洋艦『ムリフェイン』

——第56駆逐隊 司令官：ツヴァルド大佐

——A型駆逐艦『A—1』

——A型駆逐艦『A—3』

——A型駆逐艦『A—6』

——第123駆逐隊 司令官：ニコライ大佐

——A型駆逐艦『A—15』

——A型駆逐艦『A—23』

——A型駆逐艦『A—28』

第5機動部隊

指揮官：ウイルネックス中将

— 第1航空艦隊 司令官：ウイルネックス中将（部隊司令兼任）

— 第1航空戦隊 司令官：ウイルネックス中将（部隊・艦隊司令兼任）

— アクイラ級航空母艦『アクイラ』

— アリエス級航空母艦『アリエス』

— 第2航空戦隊 司令官：アリカトス少将

— アンドロメダ級航空母艦『アンドロメダ』

— アンドロメダ級航空母艦『アルフェラッツ』

— 第5航空戦隊 司令官：ヴォーダズム少将

— ペガサス級航空母艦『アルゲニブ』

— ペガサス級航空母艦『エニフ』

— 第6戦艦戦隊 司令官：ダストリウス中将

— ラグランジュポイント級戦艦『ラグランジュポイント』

— サイクリツク級巡洋戦艦『ケルベロス』

— シュヴァルツシルト級巡洋戦艦『ハリメデ』

— 第2巡洋艦戦隊 司令官：ヒツパー少将

— ビッグ・デイツパー級重巡洋艦『ビッグ・デイツパー』

— ビッグ・デイツパー級重巡洋艦『ドゥーベ』

- ビッグ・ディッパ 級重巡洋艦 『メラク』
- 第3水雷戦隊 司令官：メジウス准将
- キヤニス・メジャー 級巡洋艦 『アルドラ』
- 第59駆逐隊 司令官：ロストリウス大佐
 - ジエミナイ 級駆逐艦 『ポストル』
 - ジエミナイ 級駆逐艦 『ポルックス』
 - ジエミナイ 級駆逐艦 『アルヘナ』
- 第4駆逐隊 司令官：カリウム大佐
 - パイシース 級駆逐艦 『ヴァン・マーネン』
 - パイシース 級駆逐艦 『カハト』
 - パイシース 級駆逐艦 『リントウム』
- 第12駆逐隊 司令官：キレトリス大佐
 - A型駆逐艦 『A—50』
 - A型駆逐艦 『A—56』
 - A型駆逐艦 『A—67』

「しかし……シエリア殿はまだ出てこないのかね？」

「はい。どうやら日本艦隊に怯えている様子で…」

「…まあ無理もないか…」

一方、グラ・バルカス帝国外務局外交官の『シエリア』は、グレード・アトラスターの一室で頭を抱えていた。

「はあ…全く、日本とNWT Oの戦力がはつきりしていないと言うのに、上層部は何を考えているんだ…」

「戦う相手の戦力を認識せずに戦うなど…兵法の基本中の基本に反しているのではないのか…?」

士官室の横の窓から見える、日本とNWT Oの戦艦と空母を一瞥し、シエリアは考える。

「ここまでの経緯に、彼女は頭を巡らす。」

「(パガンダやレイフォルとの戦い以降、帝国内では軍や議会で主導権を握った過激派議員たちの汚職が蔓延している…恐らく軍需産業の重役と密接な関係にあるのだろう)」

「(新世界の世界征服を皇帝陛下に認めさせ、軍の強化と称して発注を増加させて、重役から金を貰う。この国はいつか破綻する!)」

既にグラ・バルカス帝国では総力戦体制一步手前の国家総動員法を定めてあり、国民は重税に耐えかねている。このままでは、いつかクーデターが起きて国が破綻するであろう。

「(皇帝陛下に新世界への宣戦布告を取り下げてもらおうように上申するか…? いや、恐らく議員たちに言いくるめられてダメだ)」

「(海軍や陸軍、情報局や穏健派議員達が何を言ってもダメであった…いつか臣民たちが反乱を起こしたら真っ先に狙われるのは皇帝陛下だ! 過激派議員達は黙って逃亡するであろう)」

今回の作戦で、海軍や陸軍、情報局は、日本とNWT Oの情報が集まってからZ作戦を開始するよう要求したが、既に過激派議員達の傀儡に成り下がった皇帝陛下はそれを良しとしなかった。

「ああ…胃が痛い…ラグナで映画鑑賞をしたかった…」

「失礼します。間も無く会議開始45分前になりますので連絡に参りました」
「分かった、ご苦勞」

連絡に來た水兵を下がらせ、シエリアは覚悟を決める。

「（私が選ばれたのだから、私は使命を全うする。だが帰国したら必ず皇帝陛下を目覚めさせるぞ！）」

彼女は覚悟を決めて、グレード・アトラスターから離艦した。

◆◆

15分後――

《神聖ミリシアル帝国 港町カルトアルパス 帝国文化館国際会議場待合室》

繁栄を象徴する大きなステンドグラスが攣り下げられている、帝国文化館国際会議場待合室。

そこでは、日本全權委任大使の『長瀬俊樹』とその部下の『井上直久』、そしてNWT

○全権委任大使の元駐日英国大使の『エドワード・リー・マーシャル』とその補佐の『ジョン・ギーンソン』が配られた紅茶を口にしながら軽口を叩いていた。

「ふむ、我が祖国の茶よりは劣るが良い茶だ」

「ええ…それにしても緊張しますな。異世界初の国際会議ですからね」

2人とも、長瀬が駐英日本大使であつた昔からの顔見知りであり、今回の会議でも互いに代表として出席できる事に嬉しさと緊張が入り交じていた。

この会議では、一週間に渡つて開催され、初めの5日間で外交担当の実務者級の会議、最後の2日間で外務大臣級の会議と意思決定がある。既に日本とイギリスの外務大臣は、カルトアルパス近くのホテルに入っていた。

「して、エドワード大使、あの準備は？」

「既に万端だ。任しておきなさい」

その時、中東風の伝統的衣装を見に纏つた大柄な男3人が、4人の前に現れ、2人が前に出る。

「日本国と：N W T Oの方々ですな？」

「ええ、何か用でも？」

「お初にお目に掛かります、私は中央世界のアガルタ法国代表の『マギ』と申します。」

「私は第1文明圏のトルキア王国の『トリキウル』です。宜しく願います」

「ご丁寧にもありがとうございます。日本国全権委任大使の長瀬です」

「私はイギリス王国全権委任大使のエドワードです」

4人は、にっこりと笑って握手をする。

「お二方ともお会いできて光栄です。両国の戦闘力と技術力は中央世界でも噂になっています。私としてはあの分ならずやのパーパルディア皇国を潰してください感謝しています」

「いえいえ：本来では話し合いによる解決が一番ですので、あの様な結果になってしまったのは私達外交部の力不足だと痛感しています」

「なんと謙虚な：ですが心配しないでください。どうやら貴国は転移国家である様ですな」

「ええ……と言つてもほとんどの人は信じてくれませんが」

「私は信じます。転移でもしなければあのような戦艦そう作れますまい。この世界は華夷秩序の力こそ正義の世界、あまりに気にする事はありません」

「そうですか……ありがとうございます」

「我々は、貴国とNWT Oに対して非常に強い興味を持っています。機会があれば是非とも、貴国にお伺いしたいものです」

「了解しました、本会議が終了し本国に帰国次第、政府にお伝えします」

「我が機構も同じように、前向きに検討させて頂きます」

その時、女性の声で待合室内にアナウンスが流れる。

『お伝えいたします。間も無く先進12カ国会議が開始されます。ご出席なされる方は、本会議室までお越しください……』

「間も無く始まりますな」

「ええ、初参加で緊張なされると思いますが大丈夫ですよ」

「恐縮です」

7人は、本会議室へ足を進めた。



15分後――

《神聖ミリシアル帝国 港町カルトアルパス 帝国文化館国際会議場》

「只今から、中央暦1642年度先進12カ国会議を実施します!!」

議長である神聖ミリシアル帝国外務局統括官『リアージュ』の言葉に、多くの拍手がさざげられる。これより、先進12カ国会議が始まろうとしていた。

「まず初めに、神聖ミリシアル帝国外務局より連絡があります」

その言葉に、神聖ミリシアル帝国代表官である『ミリウス』が立ち上がる。

「我がミリシアルとムーは、日本国とNWT0を列強に加盟させることに合意した。理由は列強パーパルディア皇国を滅ぼし、魔王撃退、エスペラント王国解放、グラメウス大陸の安全確保など世界に於いて多大なる成果をあげたことが理由である」

「反対意見がある国は？」

この会議室は、手元にある赤いボタンを押すと、目の前のモニターに反対数が出る仕組みになっている。だが反対意見は無い。日本とNWT0の列強加盟が決まった瞬間であった。

「反対意見がありませんので、只今を持って日本国とNWT0は列強に加盟します！」
「おお!!」

拍手が長瀬とエドワードに向けられ、二人は席を立って深々と礼をする。

だが、それを見てグラ・バルカス帝国代表のシエリアが手を挙げる。

「グラ・バルカス帝国代表、何か不満が？」

「いや、二国の列強加盟に異議は無い。だが、何故同じ列強を倒したのに我が国は列強入りできないのか？」

「む、それもそうだな」

「しかし、レイフォルは列強と言っても最弱だぞ」

「でも列強は列強であろう」

会議室が討論になりそうになった時、リアージュがガベルを叩いて場を鎮める。

「そこまで、投票を行います。反対の国はボタンを押してください」

数分後、目の前のモニターに、投票数が表示される。

「賛成8、反対2、棄権2、よってグラ・バルカス帝国の列強加盟が可決されました」

先ほどより少し小さい拍手がシエリアへ送られる。

だが、シエリアは長瀬やエドワードの様に礼はせず、当たり前だと言う様に腕を組んでいる。

次に、エモール王国の外務卿『モリアウル』が手を挙げ、発言権を得る。

彼は、2m近い身長の人特有の2本と角と赤目・赤髪の男である。

「今回は、皆に伝える事がある。重要な事であるため、心して聞くがよい」

「先日、我が国で空間の占いを実施した」

日本とN W T O、そしてグラ・バルカス帝国の違う世界からきた国の者以外が緊張に包まれる。空間の占いとは同国が実施する空間の神々に干渉するれつきとした魔術であり、実に98%の的中率を誇る物だ。

「——結果、古の魔法帝国、ラヴァーナル帝国が4〜25年後、すなわち中央暦1646〜1667年の間に復活するとの結果が出た」

「おおおおお!!」

「なんだと!」

「魔法帝国が!」

「伝承が本当ならば、我らが抗する術はないぞ!!」

異世界人たちが驚く中、別世界からやってきた長瀬とエドワードは困惑するしかなかった。

彼らからしたら『なんで国際会議で伝説の話をしているんだ?』と言う感じである。

例えば、国際連合総会で、ノストラダムスの予言についてまじめに話し合うのと同

じことであり、2人ともこのままで大丈夫か!?!と心配していた。

だが、シエリアが何か行動を起こそうとするのを見たエドワードは素早く手を挙げる。

「新^N世界条約機^T構^O代表、エドワード大使。何か不明な点でも?」

「発言を許可されたい」

「分かりました、発言を許可します」

エドワードは、立ち上がった後未だエモールの発言の余波が収まりきれない周囲を見渡して発言する。

「ラヴァアーナル帝国が神話通りの強大な国であるのならば、全世界の力を合わせねば対抗は不可能と我が国は考えます」

「故に、対ラヴァアーナル帝国を主軸とした軍事同盟を我が機構は提唱したい。猶予は僅かしかないのです、各国は早急に検討して頂きたい」

「ふむ…神聖ミリシアル帝国は賛成です。神話通りであるならば、数は多いに越したことがない」

その後もムー、エモールや殆どの国が賛成し、残るはグラ・バルカス帝国とアニユンリール皇国のみになった。

「グラ・バルカス帝国はどうしますかね？」

「…本国に持ち帰らせてもらいたい」

シエリアは、ここで宣戦布告するならばこの同盟も有名無実となると考え、そう発言する。

そして、残るは1カ国。それをエドワードは待っていた。

「アニユンリール皇国はどうなされますか？」

「…わ、我が国は文明圏外国家で、大した戦力にならないので」

「世界存亡の危機にそう悠長なことは言ってられませんまい。この話は童女でもわかる簡単な話であり、選択肢は『はい』か『いいえ』です。どちらですか？」

「ほ、本国に持ち帰り検討を」そういえば今思い出しました。我が国はグラメウス大陸にある鬼人族の国とも国交を結んでおりましてね。彼の国ではアニユンリールの過激派

に鬼姫と呼ばれる重要人物を誘拐されたとか」

「なっ!!」

「なに!?! どう言うことだアニユンリール皇国!」

「説明しろ!!」

「説明責任を果たせ!!」

超大型の爆弾か投下され、国々は声を大にしてアニユンリール皇国を罵る。

アニユンリールの代表は、アニメで見える様な真つ青な顔をしていた。

だが、此処で終わるイギリスブリカスでは無い。中高生が歴史の教科書を深く読むたびに『ええ…』とドン引きする国、また世界史を引つ掻き回す国が此処で止まるはずが無いのだ。

「そうそう、また思い出しました。エスペラント王国の王城付近で魔帝復活ビーコンが発掘されましたね。アニユンリール代表は何かご存知ですか?」

その言葉と共に、会議室内は暴風雨の如く大荒れし、遂にアニユンリール皇国代表は倒れた。

一緒に倒れた神聖ミリシアル帝国代表と共に、ミリシアルの医療チームにより担架によつてえつちらおつちらと運ばれていくのであつた。

「ふむ…じやがいも野郎やエスカルゴに比べると異世界人は脆いな」

「いや、容赦ないですね」

「私は世界平和を目指す紳士だからね」

その言葉に、シエリアは内心震え上がった。

「な、なんなんだあいつは!!こんな所に居られるか!!私は国に帰らしてもらおう!!」

そして、すぐこの会場を後にするためにいきなり立ち上がる。

「フハハハハハハハハハハ…神話を信じるなど流石蛮族ということか!」

「なに!」

「これは失礼。占い如きでこんな反応するとは思わなくてね」

シエリアは、日本とNWT0以外怒りの表情を向けられるが、微動だにしない。だが、内心ではかなりビビっていた。

「今此処に宣言する。グラ・バルカス帝国、皇帝グラルークスの名において全世界の国々へ達する。我らが軍門に下れ!!」

「正気か小娘!!」

「全世界を敵に回すと言うことは、それなりの覚悟を持っていると言うことだな!!」

「そうだとも!ふつ、将来貴様らの屈辱的な顔を見るのが楽しみだ。我が国に降りたい国はレイフォルまでくるが良い。ではさらばだ!!」

そう言うと、シエリアとグラ・バルカス帝国使節団はそそくさと退室して行った。

「ふむ、彼女かなり早足で退室したな。お花摘みに行きたかったのだろうか」

「(十中八九、あんたのせいじゃないかな?)」

長瀬は、まさか本当に宣戦布告するとはと言う気持ちと共に、『この会議やばいな』と思いはじめていた。

第4話 フォーク海峽迎撃戦 前編

中央暦1642年4月23日午後7時——

《神聖ミリシアル帝国 帝都ルーンポリス 外務省》

神聖ミリシアル帝国外務省統括官であるリアージュは困惑していた。

彼は先進12カ国会議の議長である為、本来であればカルトアルパスに一週間滞在せねばならない。

だが、外務省から緊急の連絡とされて、此処帝都ルーンポリスに招集されることの理由がわからなかった。彼は、豪華な模様が施された廊下を進み、大会議室へ着く。

戸を開けると、帝国の上層部の錚々たるメンバーがいた。

情報局長アルネウスを始め、国防省長官であるアグラ、貴族出身である軍務大臣シユミールパオの姿も確認できる。

リアージュは、軍に関するトップが二人もいることに、軍事上で何か重大な出来事が起きたに違いないと断定し、中央の円卓に着く。

「それではこれより、緊急会議を開催します」

海軍の担当官が声を上げて、全員にレジユメが配られる。また、円卓の中央部から光が出て立体モニターの用に展開する。

担当官は口頭で概要を説明するが、それよりもリーアージュは、レジユメに記された内容に驚いていた。

「報告いたします。先日ー時頃、マグドラ群島で訓練中の第零式魔導艦隊より『我艦隊国籍不明艦隊より攻撃を受けている』との魔信と共に消息不明になっています」

「また、同群島に駐留する海軍航空隊地方基地も『現在攻撃を受けている、救援を請う』の後に、連絡が取れなくなっています」

「現在、陸軍離島防衛隊のみが唯一連絡が取れる状況下であり、防衛隊によると第零式魔導艦隊は敵艦隊の砲撃と空襲により全艦撃沈。基地も敵航空機による爆撃で壊滅状態に陥ったとのことでした」

リーアージュは、ガバツと列席する軍関係者の中の海軍将校を見る。彼は、顔が真っ青を通り越して死人の顔になりそうであった。その時、アグラ国防長官が、驚きながら担

当官に告げる。

「待つてくれ、第零式魔導艦隊が全滅だと…一隻も残らず撃沈されたのかね!？」

「はい、事実だと思われます。最初の艦隊決戦では五分五分でしたが、その後の航空機による空襲によつて壊滅に陥つたと…」

「…敵国の正体は掴めているのかね？」

シユミールパオ軍務大臣の問いに、担当官は重重しく口を開ける。

「はっ…敵国は——グラ・バルカス帝国だと思われます」

「グラ・バルカス帝国だど!？」

「あやつらは西の果てにある文明圏外国であつた筈!!レイフォルを滅ぼすだけの力はあ
ると思うが、蛮族の艦隊に第零式魔導艦隊は敗北したと言うのかね!？」

その時、情報局長アルネウスが手を挙げる。

「聞きたいことがある…リアージュ君。グラ・バルカス帝国は先進12カ国会議で全世

界に宣戦布告したのだね？」

「はい」

「我々は気が狂ったと思っていたが…本当であったか」

「して、リアージュ君、グラ・バルカス帝国はどのような艦で来ていたのだね？」

「…確かミスリル級を超える戦艦だったと思います」

「なっ…ミスリル級を超えるだど!？」

「それならば艦隊が敗北したのもうなづけるな」

「待ってください…リアージュ君、グラ・バルカス帝国の船が出港したのは？」

「午後2時近辺だったと思います」

その言葉に、会議の全員があることに気がつく。

「時間があわないぞ…つまり…」

「グラ・バルカス帝国は、使節団を乗せた船以外の艦隊を派遣していると言うことか！」

「くそっ！やつら最初から宣戦布告する気満々だと言うことか!!」

その時、アグラがふと担当官に尋ねた。

「そういえば…敵艦隊の針路は？」

「…東へ向かったと思われませう」

「!!!」

その瞬間、リアージュは真つ青になった。

「ひ、東ということとはつまり！」

「はい…現在先進12カ国会議が開催されている場所——カルトアルパスに向かってい
ると考えられます」

全員に衝撃が走る。その時、シユミールパオが手を鳴らす。

「一旦整理しよう」

「敵——グラ・バルカス帝国軍は3艦隊に分かれている」

「使節団の乗せた艦隊・第零式魔導艦隊を襲撃した艦隊・機動部隊の3つだ」

「速力などを考えると…25日の昼にはカルトアルパスに着くぞ」

その言葉に、リアージュと軍関係者は真っ青になる。

「防衛状況はどうなっている！」

「は、はっ！現在、ベリアーレ海に展開中であつた第2魔導艦隊及びゴースウィーヴス港に停泊中の第3魔導艦隊が全速力でカルトアルパス周辺に展開させるように手配を行つていますが…速力的に間に合わないかと…」

「現在カルトアルパス防衛に当たれるのは、南方地方隊の魔導巡洋艦8隻のみとなりません」

「エアカパーとしては制空型天の方舟『エルペシオ3』や爆撃戦闘型『ジグラント2』などを配備しているカルトアルパス空軍基地所属の第7制空戦闘団約40機があります…空軍はともかく魔導艦隊が間に合わない可能性が高いです」

「現在カルトアルパスでは先進リーケ国会議が行われているため、外務省統括官の方の意見も伺いたいと思ひ、今回の会議にお呼びしました」

リアージュは顔を真っ青にしながら担当官に淡々と告げる。

「じ…冗談じゃないです!!世界最強である神聖ミリシアル帝国が、帝国の威信をかけて防衛している会議に、『東の小国が攻めてくるのでお逃げください』など言えるはずがありません!!」

「我が国がそんなことを言ったら、文明圏外国の保護国でも我が国を見くびるものが増え、列強や文明圏外国も我が国を軽く見始めます!」

「まあ、待ち給えリアージュ君。各国も奇襲でそして地方隊が被害を受けたと説明すれば良からう」

「ここは正直に、各国の代表に事情を説明して一時避難を申し出れば良いだろうか?」

アグラの言葉に、リアージュは反論する。

「…そんなことをして、各国の外務大臣が移動中に航空攻撃などで狙われて死んだのであれば、『ミリシアルは世界最強なのになぜ敵の襲撃を許したのか』と言われるでしょう」

「艦隊が間に合わないのなら、シユミールパ才殿。空中戦艦。パル・キマイラか海上要塞。パルカオンの投入は可能か?」

その言葉に、シユミールパオは重々しく首を横に振る。

「100%不可能だ」

「空中戦艦。バル・キマイラはまだしも、海上要塞。バルカオンは全体の半分程度しか解析終了しておらず、また両方共皇帝陛下の決裁が必要である」

「しかしー」

「先ずは各国代表をどうするか決めるのが先だー」

その後、深夜までに以下のことが会議で発表される事が決定された。

○グラ・バルカス帝国海軍の艦隊がカルトアルパスに迫ってきている。

○先日地方隊が卑劣な奇襲攻撃によって壊滅し、また現在展開している魔導艦隊では撃ち漏らしの可能性が高い。

○万が一の場合、会議参加国代表使節団の方々は、東の都市『カン・ブリッド』へ一時退避を願いたい。



中央暦1642年4月23日午後――

《日本国・NWT0第1合同特務任務部隊旗艦『きい』司令部作戦室》

戦艦『きい』の司令部作戦室では、フランチェスコ・ミンベツリから送られてきた映像を見る為、艦隊の司令官と艦長、幕僚全員が集まっていた。

「メインモニターに映します」

そう通信科の乗員が言うと、カメラによつて遠方から撮られた動画が映し出される。

戦艦と思われる艦などが映し出され、海面には砲弾が着弾したと思われる水柱が上がつている。

「砲撃戦だな」

「砲煙が虹色？形的にミリシアル艦か」

「魔法文明だからか？」

そう司令部員たちが話していると、近未来的なフォルムのミリシアル戦艦が撤退する

のがわかった。

「…損害は五分五分か？」

「いや…ミリシアルの負けだ」

そう東郷1等海佐が言うと、ミリシアル艦の乾舷に水柱が上がる。ゆつくりと傾斜が増え、終いには転覆して海の藻屑になってしまった。

「東郷1佐、なぜ分かったのです？」

「駆逐艦だ、接近した後転進していた。魚雷だ」

「ミリシアルは回避行動を取っていない…魚雷を知らないのか!？」

室内がざわめく中、山本海将が右手を上げて静める。

「一旦落ち着きましよう…通信員、この場所は？」

「フランチェスコ・ミンベツリからの情報によりますと、此処カルトアルパスの西側500 kmの地点、マグドラ群島と呼ばれる地点だと言うことです」

「オイオイオイ、現代艦船ならば超至近距離じゃないか……」
「30ノットならば半日だ……此処も安全だとは言いがたいぞ」
「……今私たちに出来るのは、最悪の事態を想定して作戦を考えるのみです。全員此処に残ってください」

対グラ・バルカス帝国会議は深夜まで続いた。

◇◆◇

中央暦1642年4月24日正午——

《神聖ミリシアル帝国 港町カルトアルパス 帝国文化館第一大会議室》

「只今より、先進10ヶ国会議実務者協議を開催致します」

参加国が1日で2カ国も減ったこの世界会議。最初に、議長のリアージュが言葉を上げる。

「開催に先立ちまして、議長国の神聖ミリシアル帝国から各国代表へ連絡があります」

そういうと、神聖ミリシアル帝国の代表官（初日とは違う人）が席を立ち上がる。

「昨日、カルトアルパス西方であるマグドラ群島に置いて、我が国の地方隊がグラ・バルカス帝国と思われる艦隊による奇襲攻撃を受けて、被害を受けました」

「地方隊を奇襲した部隊は、此処カルトアルパスに向かっているとの情報です。ですがカルトアルパスには魔導巡洋艦8隻が配備されており、また空軍のエアカパーもあるため問題ありません」

「ですが、万が一の場合カルトアルパスが被害を受けることを考慮して、皆様の安全を確保する為に本日の夕方までにカルトアルパス港から全代表護衛艦隊を引き上げていただき、開催地を東の『カン・ブリッド』に移したいと思えます」

「お手数おかけしますが、ご理解いただきたく存じます」

地方隊、また奇襲攻撃と言っても、世界最強の神聖ミリシアル帝国海軍が被害を受けたことに各国代表が驚く中、外務大臣護衛の任に付いている中央国家憲兵団の『松本雄平』は、地方隊が、また被害を受けたと曖昧な言い方をするミリシアルへうんざりしていた。

「おそらく自身が見くびられるのを守るためか……しかし、もし会議参加国の護衛部隊が戦うと言ったらどうする？」

「事前に情報入手していた我が国はともかく、他国も精鋭の艦隊を派遣している筈だ」

「(しかも、グラ・バルカス帝国は列強とはいえ、下したレイフォールが列強最弱の為に見くびられている)」

「(あ、グレイド・アトラスターの艦を見たならわかる筈だが、華夷秩序のこの世界のことだ。好戦的な奴も現れるだろう)」

その予想は、見事的中することになる。

エモール王国代表のモーリアウルが立ち上がる。角が生えている顔は怒りの表情に染まっている。

「あの無礼者が攻撃してきたからと言って、世界の強国である我らが尻尾を巻いて逃げろと申すのか？」

「此処に來ている者たちを護衛する艦隊は、精鋭なのであろう？ならば、魔力数値の低い人種如きが使用する艦隊など、殲滅できるだろう」

「我が国は内陸国の為艦隊は派遣していないが、控えの風龍22騎ならば、この戦いに投入しても良いぞ」

「「おおお…」」

世界最強の航空戦力とされ、列強からも『一騎当千の風竜騎士団』と呼ばれ一目置かれていた風龍。各国が一目置く列強エモールの精鋭部隊の投入表明に、場は静まり返った。

「わ…：我が国の戦列艦7隻も無礼な行動をとるグラ・バルカス帝国を叩くならば喜んで手を貸しましょう!!」

「我が文明圏ではあやつらは我が物顔で暴れ回っている。中央世界の皆様と共に戦えるのであれば我が艦隊もお貸ししましょう」

「我が国もレイフォルで暴れ回っているグラ・バルカス帝国にお灸を据えたいと思っていました。機動艦隊を投入させましょう」

第一文明圏国のトルキア王国、第二文明圏国のマジカライヒ共同体とムーも参戦も表明する。まあ、トルキア王国はエモールと同盟を結んでいる為、エモールに追従しなけ

ればいけないのもあるが。

その時、長瀬の隣に座っていた第三文明圏国パンドーラ大魔法公国の代表が目を輝かせながら長瀬に尋ねる。

「日本国とNWT0の対パールディア戦の伝説は数々伺っています。貴国はどうなされるのですかな？」

この言葉に長瀬は困る。確かに彼は全権委任大使だが、護衛艦隊を動かせる地位ではない。開催場所の移動も本国に問い合わせる必要がある。

「開催地変更と参戦については、本国に問い合わせます」

「我が機構も同じくです」

井上とギーンソンは、二人の連絡を受けて、きいとモンタナの通信室に駆け込んだ。

◆◆

中央暦1642年8月24日午後3時——

《日本国 首都東京 千代田区永田町首相官邸 地下2階内閣危機管理センター》

首相官邸では、国家^N安全^S保障^C会議が開催されていた。

上座に座る阿倍野総理は、茶を啜りながら話を聞いていた。

「やはりか…大変なことになったな」

「世界大戦ですか…」

「第三次世界大戦はゴリゴリですよ」

じつは、2014年の東亜戦争の際、中国がロシアに参戦を依頼しており、ロシアが参戦すれば世界大戦の危機であった。

中国と関係が悪かったロシアが、国連側で参戦したので世界大戦の危機は去ったが、この世界ではグラ・バルカス帝国と戦える国はミリシアルやムーなどしかおらず、正面切つて戦い勝てるのは日本とNWT0ぐらいであった。

「とりあえず、護衛部隊はどうする？」

「参戦させるしかないですが…ミリシアルの地方隊がやってくれるのでないですか？」

そう言った法務大臣の言葉を防衛大臣の川野が否定する。

「マグドラ沖の艦隊がミリシアルの最新鋭艦隊らしいですから…期待できませんね」

「正直言ってお荷物です」

「それマスコミの前で言わないでね？」

正直にミリシアルを馬鹿にする川野だが、それには理由があつた。

「ミリシアルが勝てばこのようなことにならなかつたんです。世界最強の国ならもつと実力があつて欲しかったですね」

「それはわかる」

数時間後、護衛艦隊にこの事態への国家安全保障会議^Nの回答が送信された。



中央暦1642年4月25日——

《神聖ミリシアル帝国 港町カルトアルパス 帝国文化館第一大会議室》

「とゆう為に、やはり万が一の場合を考え、早期に移動を願いたい!!」

「仮にカルトアルパスが攻撃を受けた場合、時間がありません! 此処で話をしている時間はないのです!!」

リアージュが声を上げるも、会議は紛糾する。

避難に反対する国も、もし最新鋭の外交官護衛艦隊が戦わずに逃げたなど報道されれば、他国に国力をみくびられると共に、国内からも非難の声が出かねない。

「…大使!! 長瀬大使!!」

元地いた世界と全く違う世界会議に頭を痛めている時、きいへ連絡に行つた井上が声をかけてくる。

「政府見解が出ました!!」

「どうなった?」

「やはり、交戦を許可すると…」

「分かった。ミリシアルに伝えよう」

そう手を上げようとすると、リアージュが横にいた女性から紙を受け取り、顔が驚愕した表情に包まれる。

「皆様……静粛ください!!重要な発表があります!!」

「先程、我が海軍の哨戒機がカルトアルパス南方約150 km地点を北上するグラ・バルカス帝国戦艦部隊を発見致しました。なお、空母機動部隊はまだ発見出来ておりません」
「これより航空部隊による攻撃を行う予定ですが、このままグラ・バルカス帝国艦隊が北上するとカルトアルパス湾入口のフォーク海峡に至ります」

「グラ・バルカス帝国艦隊の巡航速度は約20ノットであり、この速度と海峡への距離を考慮すると避難はもう間に合わないでしょう」

「それによつて皆様の案を採用し、臨時的に世界連合艦隊を編成し、これを迎え撃つことに決定しました」

「ですが、我が国の威信と義務をかけて外交官の方々と外務大臣様の身は確保させていただきます」

「よつて、本会議に出席中の各国使節団の皆様には、早急に鉄道で東の都市カン・ブリッ

ドに避難していただきます」

その言葉によつて会議室内がざわつく中、長瀬とエドワードが手を挙げる。

「長瀬大使、エドワード大使、どうかなされましたか？」

「本国より回答が来ました。我が艦隊もグラ・バルカス帝国艦隊を撃滅するならば、交戦を許可することです」

「我が機構も同じく、傍若無人なグラ・バルカス帝国を許してはいけません」

「「おおおお」」

エモールと同じく、パーパルディア皇国を一方的に下した日本とNWTの参戦に会議室内は色めく。最終的に、会議では以下のことが決定された。

○ 会議参加各国の外務大臣護衛艦隊は一丸となつて、自衛のためグラ・バルカス帝国軍を迎え撃つ。

○ 外務大臣及び外交官一向に関しては、神聖ミリシアル帝国の誘導で避難を行う。

○ 避難先は東部の都市カン・ブリッドとする。

○先進10ヶ国会議を続けるかどうかは、そこで決定する。



中央暦1642年4月25日午前8時——

《神聖ミリシアル帝国 港町カルトアルパス港》

「——以上の事から、グラ・バルカス帝国との交戦許可が下されました」

「日パ戦争と同じく、我々外交部が情報局の情報を軽く見ていた弊害です。誠に申し訳ありません」

「頭をお上げください長瀬大使。その為のこの艦隊です。必ず勝利を掴みましょう」

頭を下げる長瀬に山本と東郷は頭を上げるよう告げる。

その後、長瀬が退艦した後、山本は通信マイクを掴み、艦隊の全艦に告げる。

『総員傾注、艦隊司令の山本です』

『現在停泊中のカルトアルパスで行われている先進12ヶ国会議である事態が発生しました』

『この艦隊に配備されている諸君は知っているでしょうが、情報部から知らされたグラ・バルカス帝国の全世界への宣戦布告です』

『そして先程、主権国である神聖ミリシアル帝国が此処から西にあるマグドラ諸島の地方隊が被害を受けたと公表しました』

『実際はミリシアルの最新鋭艦隊が全滅した事を確認しました。大本営発表です』

その言葉に艦隊が笑いに包まれる。大本営発表は第二次世界大戦の中国軍の総司令部が発表した戦果の事であり、大きな誇張が含まれていた。

『話が逸れました。この攻撃はグラ・バルカス帝国艦隊によって行われ、此処アルトカルパスに向かっている可能性があるとこの事です』

『神聖ミリシアル帝国を筆頭とした9ヶ国が、この事態に対し臨時に世界連合艦隊を結成する事を決定しました。我が国もこれに参加する事を決定し、我が艦隊は臨時世界連合艦隊の1隻となります』

『相手は今までの木造船やワイバーンと違い、第二次世界大戦レベルの航空機と戦艦群がカルトアルパス湾の先、フォーク海峡に展開していると予想されます』

『しかも相手の規模から、我が艦隊以外はおそらく役に立ちません』

『ミリシアルの航空部隊だけが性能が不明ですが、対等以上の敵との実戦経験が無い。パイロットで、果たしてどれだけの戦果が期待出来るのかは不確定です』

『ですがこの艦隊は世界最強の艦隊、全艦の能力を持つてすれば第二次世界大戦文明程度の艦隊など鎧袖一触で屠れると私は信じています』

『総員、第二種戦闘配置』



1時間後――

《神聖ミリシアル帝国 港町カルトアルパス港》

港湾監視局長であるブロントは『恐怖』と『期待』が混じった感情を抱きながら、出港してゆく世界連合艦隊を見ていた。

恐怖は、あの巨大戦艦を保有するグラ・バルカス帝国が此処カルトアルパスに向かつてきていると言う事。

だが、彼は恐怖こそ感じていれど、冷静であった。それは期待を感じる世界連合艦隊である。

既にカルトアルパス上空には空軍カルトアルパス基地から離陸した制空型天の浮舟

『エルペシオ3』や爆撃戦闘型『ジグラント2』が飛来している。

「マギカライヒ共同体、機甲戦列艦隊出港！」

『マギカライヒ共同体』。世界でも珍しい各州がそれぞれ独立した政府を持ち、単一の国家であることを主張していない為に学院連合の『マギカライヒ学院連合』が国として認められている国家。

ムーから入手した機械技術を魔導技術と融合させ、世界的にも珍しい『魔導機械工学』という機械と魔法の良いところを掛け合わせた技術を専攻しており、一部列強を上回る技術力から準列強とされる強国。

この国の機甲戦列艦は、レイフォルには数は劣るものの、速度と防御力は上であり、第二文明圏周辺はもちろん、世界的に見ても高い戦闘力を持つていた。

「アガルタ法国、魔法船団出港します！」

『アガルタ法国』。マギカライヒと同じ学院制であり、冷涼な気候のせいでワイバーンが棲息できない為に一人一人の魔法の強化に力をいれている中央世界の国家。

今出港している魔法船団は、第三文明などの帆船には見えないが、アガルタの意地をかけた魔法が搭載されているという。

「トルキア王国、魔導戦列艦7隻出港しました！」

『トルキア王国』エモールと同盟を結んでおり、かつての神聖ミリシアル帝国が宥和政策に切り替えることとなった国家。

その魔導戦列艦は、王国東部の森林で伐採された最高品質の木を使っており、性能は高い。

「ニグラート連合、戦列艦4隻、竜母4隻出港中!!」

『ニグラート連合』。第二文明圏文明国の一つであり、連邦制を採用している国家。

かつてのムーに侵攻した住人が、急成長を遂げたムーに危機感を感じて構成された国であり、今ではムーとは仲が良いが、ムーに対抗する為に竜母を多数保有しており、この戦いではミリシアル、エモール、ムー、日本に次ぐ航空戦力を保有しており、期待度は高い。

「パンドーラ大魔法公国、魔道船団8隻出港していきますー!」

『パンドーラ大魔法公国』。パーパルディア皇国の属国であったのにも関わらず、文明国の中でも軍事力が高い国家。

パーパルディアには劣るものの、レイフォル並みの戦力が期待されている。

「ムー国、機動部隊出港!!戦艦2隻、装甲巡洋艦4隻、巡洋艦8隻、空母2隻、計16隻!!」

『ムー国』。この戦いでは、最大の隻数を保有しており、列強2位の為に期待されている。特に空母2隻に搭載されている『マリン』はワイバーンロード以上の戦闘力を秘めており、艦隊防空に役に立つだろう。

「日本国及びNWT0、外交官護衛艦隊出港準備完了との報告です!!」

「了解した、出港許可を出す。武運長久を祈ると返信してくれ」

「分かりました!」

『日本国』『新世界条約機構』。本戦いで最も期待される東の新興国家。日本が有する大戦艦はミスリル級をも上回っており、各国はあの戦艦の戦闘力がどのようなものかと大きく期待している。機械文明の為に機関の始動、巨艦ゆえの大きさから一番最後の出港となつたが、艦隊の勇壮は圧倒的だ。

「…頼むぞ…」

ブロンドは、彼の愛するカルトアルパスが被害を受けないように、世界連合艦隊へそう祈つた。

【9か国臨時世界連合艦隊】・

〔艦船〕

- ○神聖ミリシアル帝国海軍南方地方魔導巡洋艦艦隊 《シルバー巡洋艦8隻》
- ○ムー国海軍外交官護衛艦機動部隊 《ラ・カサミ級戦艦2隻・ラ・デルタ級装甲巡洋艦4隻・ラ・ホトス級巡洋艦8隻・ラ・ヴァニア級航空母艦2隻、計16隻》
- ○トルキア王国海軍先進12カ国会議護衛部隊 《オールコック級魔導戦列艦7

隻

——○アガルタ法国海軍外交官護衛魔法船団 《ラスオコアガ級魔導戦列艦6隻》

——○マジカライヒ共同体海軍外交団護衛機甲戦列艦隊 《ハナサケス級機甲戦列艦

7隻》

——○ニグラート連合海軍外交部隊護衛艦隊 《ヴェーベルン級戦列艦4隻・ハルネ

ス級飛龍母艦4隻、計8隻》

——○パンドーラ大魔法公国海軍外交部隊護衛魔導船団 《ナナボーゾ級魔導戦列艦

8隻》

——○日本国海上自衛隊第1合同特務任務部隊 《きい型戦艦1隻・ひりゆう型原子

力航空母艦1隻、すずや型ミサイル巡洋艦2隻・やまと型ミサイル護衛艦2隻・ながと

型ミサイル護衛艦2隻・ふぶき型ミサイル護衛艦2隻・あきづき型汎用護衛艦2隻・ゆ

うぐも型汎用護衛艦2隻、計14隻》

——○新世界条約機構海軍 外交官護衛合同任務部隊 《モンタナ級戦艦1隻・アー

レイ・バーク級ミサイル駆逐艦2隻・45型駆逐艦1隻・フォルバン級駆逐艦1隻・デ・

ラ・ペンネ級駆逐艦1隻、計6隻》

計88隻

〔航空戦力〕

—○神聖ミリシアル帝国空軍第7制空戦闘団 《制空戦闘型天の浮舟『エルペシオ3』42機》

—○神聖ミリシアル帝国第15爆撃戦闘団 《爆撃戦闘型天の浮舟『ジグラント2』36機》

—○ムー国海軍外交官護衛艦機動部隊第6空母戦闘機部隊・第8空母戦闘機部隊
《『CM-16 マリン』48機》

—○エモール公国外交部隊護衛第16風竜戦闘団 《風龍22騎》

—○日本国海上自衛隊第1合同特務任務部隊第5空母打撃群第5空母航空団

《『F-14E』12機、『F-35C』12機、『F-2C』12機、『F-2D』12機、
『E/A-18G』4機、『E-2D』4機、『SH-60K』6機、『SH-60I』3
機、『C-2A』2機》

計215機



同時刻—

《グラ・バルカス帝国海軍東部方面艦隊先進11カ国派遣部隊第5機動部隊 旗艦アキラ級航空母艦『アキラ』艦橋》

——第5機動部隊、それはグラ・バルカス帝国が前世界『ユグド』で初めて編成した空母打撃群である。空母を集中運用することによって、ユグドで3番目に海軍が強かった『聖リタブニア教国』の第1艦隊を空襲して艦隊の全戦艦を葬ったことから、他国に加えて自国の大艦巨砲主義にも多大なる影響を与えた部隊である。

空母6隻、計480機もの艦載機が所属するこの部隊の指揮官、『ウイルネックス・スルドルフ』中将は、旗艦の第1航空艦隊第1航空戦隊所属、アキラ級航空母艦『アキラ』の艦橋で今まさに発艦しようとする艦載機を見ていた。

アンタレス07式艦上戦闘機、シリウス07式艦上爆撃機、リゲル07式艦上雷撃機ね順番で飛行甲板に並べられ、それが一斉に暖気運転している様子は圧巻であった。

だがウイルネックスは一つ疑問に思っている事があった。

「主席参謀、なぜ上層部は空母を6隻も投入したのだね？」

「……わかりません、ですが上からの命令です。我々はそれに従うしかありません」

ウイルネックスの言葉に、主席参謀は肩を竦めて答える。

当初は、第2・5航空戦隊のみを投入し、最精鋭の第1航空戦隊は投入しないつもりであった。

だが、海軍上層部と情報部からの強い提言によって、艦隊の規模は倍にまで膨れ上がっていた。

「世界最強とされるミリシアルは弱かっただろうか？何を上層部と情報部は恐れているのだね？」

「…もしかしたら日本とNWT0が関係してゐるのではないのでしょうか？」

「ああ…確か我々と同じ転移国家だという国々か。なら彼らの何を恐れてる？」

「さあ？」

「まあ、我々にできるのは職務を全うするということだけだ」

「そうですね」

彼らはカルトアルパスに停泊しなかつたため、きいとモンタナ、ひりゆうの事を知らないのである。

その時、艦載機の暖気運転が終わつたという報告と共に、一本の電信が入る。

「第1戦艦部隊、グレード・アトラスター座乗のカイザル大将から伝達、『グティマウンザンノボレ、0900』！」

「了解した、第1次攻撃隊発艦せよ！」

前述の聖リタブニア教国を空襲する際に出された帝国最高峰の山であるグティマウン山を意味する隠語が通達される。ウイルネックスは、艦橋横のブリッジで航空隊を見送った。

◇◆◇

30分後――

《神聖ミリシアル帝国 カルトアルパス湾》

日本及びNWT外交官護衛艦隊は、出港してから直ぐに艦隊を二分していた。空母ひりゆうを主とした機動部隊と戦艦きを主とする水上打撃群である。理由は、300mもある艦が戦闘運動をすると戦列艦などが横転しかねない為であった。

『此方シャークスーより司令部へ、敵編隊確認。機数189、相対方位220。、距離約130km』

「了解」

「日本国外交官護衛艦隊司令部より、ミリシアル、ムー、ニグラートに連絡する」

「我が警戒機がグラ・バルカス帝国航空部隊を機数189、相対方位220°、距離約130kmの地点に確認した」

「迎撃を要請する」

『了解した、神聖ミリシアル帝国空軍第7制空戦闘団42機離陸する』

『ムー、マリン33機、発艦体制に入った』

『ニグラートより艦隊へ、ワイバーンロード12機、間もなく発艦する』

主席幕僚の東郷は、CICのモニターから発艦するムーのマリンとワイバーンロードを見る。

「(何分持つか…10分で御の字だな)」

だが彼はこの航空部隊が戦果を上げるのを期待していない。ワイバーンとグラ・バルカス帝国の主力戦闘機だと確認されている零戦もどきとでは100%勝てる筈がないし、マリンでも複葉機特有の旋回性能の高さで落とせるかどうかだ。

そのままレーダーを見ていると、不可解な事を見つけた。IFFに反応があるのだ。

「レーダー担当士、IFFに反応があるのはどこの国だ？」

「ムーだと思われませう。確か試作戦闘機に我が国製のIFFを載せていると」

「…これ以外は期待できんな」

唯一未確定なのはミリシアルの航空部隊である。魔法文明の為に国力が分からないが、ジェット機のような航空機は衛星で確認されていた。だがマグドラ群島沖の海戦の結果からあまり期待していなかったが、その予想はレーダーモニターを覗いて確信した。

「オイオイオイ…これがミリシアルの航空部隊か？」

「はい、時速400kmです」

「…これでジェット機なのか？」

「ええ、確か正式には魔光呪発式空気圧縮放射エンジン？とかだったはずですよ。燃料が違うだけで原理は同じだと思っていました…」

「…やけに遅いですな…」

艦隊幕僚らがミリシアルの航空部隊について考察している時、レーダー員が言葉を発

する。

「ミリシアル、ムー、ニグラートの混成航空部隊。空戦開始しました」

その言葉に、幕僚はもう一度レーダーモニターに釘付けになるが、すぐにその顔は達観に変わる。

「レシプロ機より遅いジェット機なんて…1940年代の実験機ではあるまいし…」

「比較対象がムーのマリンだけだったから良かったのかもしれないが…ミリシアルは魔法帝国の打破を目指しているんだろう？」

「お荷物がまた増えたな」

東郷のその言葉に、CICにいた全員が同感する。

「司令、このままでは全滅いたします。ひりゅうの戦闘飛行隊の発艦許可を具申します」
「分かりました。通信士、ひりゅうへ一個飛行隊を発艦させるように伝えてください」
「了解致しました！」

通信士が通信室に駆けていく様子を横目に見ながら、東郷はレーダーモニターに目を戻した。

◆◆

5分前――

《神聖ミリシアル帝国 カルトアルパス湾 上空》

ムー試作艦上戦闘機『XCM―1』に乗るパイロット『アルノス』は、眼下のマリンとワイバーンロード、エルペシオ3の編隊を見ながら、1ヶ月の事を思い出していた。

「これが……」

「ええ……我が国の試作艦上戦闘機、XCM―1になります」

技術士官のマイラスと一緒に、飛行場の格納庫に収納された戦闘機を見た1番初めの感想は、随分ずんぐりとした機体だと思った。

「この機体は、日本から情報提供してもらい製作されたムー初の近代型戦闘機になりま

す」

「そういえば、スピットファイア戦闘機だかはどうなるんですか？ 確かあれが次期主力戦闘機だと噂されていた筈ですが」

スピットファイア戦闘機は、アルノスが所属する飛行隊の飛行場で試験を行なっており、高性能さに『あれに乗れるのか』とワクワクしていたが、あれは廃案になったのかに思った。

「いいえ、スピットファイアは確かに高性能ですが、日本からの完全輸入なので、ムー国内の航空機産業が衰退してしまう可能性もあります」

「また、一機当たりの値段も高いので、ハイローミックスという形で、スピットファイアは陸軍は首都防衛飛行隊、海軍は本国艦隊第1空母部隊のみの配備に決定されました」

「以上の事から、この機体が製作されました」

「ほう、武装はどんな感じですか？」

「12.7mm機関銃が4門、20mm機関砲が2門となっています」

「高火力ですね」

「対グラ・バルカス帝国のアンタレス戦闘機を主軸に考えてありますから。防御力も折

り紙付きです」

「して…あの棒のようなものは？」

アルノスは、機体の脇で整備士が整備している、棒のような物体を指す。

「ああ…あれは…訓練の時のお楽しみです」
「??」

その時は不思議に思ったが、訓練で操作するとその理由がわかった。

この機体なら十分アンタレスと張り合える。

『左下!!敵機!!』

『散開しろ!ブレイク!』

『うわあ!!助けてくれえ!!』

魔信に入った言葉に驚きながら、眼下を見ると、マリンやワイバーンロードが一方的にアンタレスに屠られているのが見えた。あの神聖ミリシアル帝国のエルベジオも

虫を叩き落とすかのようにやられている。

『隊長！』

「おう！いくぞ！！」

魔信から聞こえた、相棒兼2番機パイロットの『ノルース』の言葉に同調し、左下のフットペダルを踏む。機体が180°回ったところで、操縦桿を手前に引き、急降下させる。

前方中央に設置された光学照準器をアンタレスの少し先に合わせ、操縦桿の引き金を引く。

数秒後、アンタレスの右翼が爆発して、大きな火焰を上げながら墜落する。

「次！」

直ぐに、違う敵機に合わせて短く一連射。今度は操縦席付近に当たり、風防が赤く染まる。

操縦者を失った機は、急降下をして重力に逆らえずに空中分解する。

「（これは機銃を撃つ暇がないから…ロケットで！）」

距離から計算して、機銃を当てる時間が無いと判断したアルノスは、操縦桿のボタンを押す。

機体左翼内側に搭載されたL A U—3から、M k 4 マ
イ
テ
イ・M マ
ウ
ス F F A Rを模したムー製空対空ロケット弾『R—1 ブールド』が発射される。

近接信管が備えられたこのロケットは、回避行動を取っているアンタレスの近くで爆発し、それに耐えきれなかったアンタレスは、黒煙を撒き散らしながら地面に激突する。一方、グラ・バルカス帝国軍のパイロットは大慌てだった。これまで不敗を誇ったアンタレスが一方的に落とされたのだ。

『ノーン!! ムーの新型機だ!!』

『ブレイク散開! ブレイク散開!!』

「くそっ!!」

慌てるパイロットの声が聞こえる無線に、グラ・バルカス帝国海軍アリエス級航空母

艦『アリエス』戦闘機隊長の『ノースポリアル』大尉は悪態をつく。

「落ち着け！敵機は速度はアンタレスより上だが格闘性能は低い！各個で格闘戦に持ちかけろ！」

『『了解！』』

最初は慌てていたグラ・バルカス帝国のパイロットも、ベテランであるため落ち着きを取り戻す。

ノースポリアルは、操縦桿を動かし、XCM-1の後方へ回る。

「喰らえ!!」

前方の7、7mm機銃を操作して、敵機に撃ち込む。これでやったと確信したが――
「なっ！」

全く効いていなかった。実際には白煙を吐いているが、彼にそれを確認する暇はな

かった。

『大尉！後ろに敵機！』

「なに!!」

上を向くと、急降下してくる敵と、機銃を発砲する閃光が見えた。数秒後、大尉の意識が永遠に戻ることは無くなった。

「ノルース！助かった!!」

『ちよろいもんですよ。帰ったら酒一本奢ってください』

「勿論だ」

そう言って敵編隊から遠ざかる2機。アンタレスも追ってはくるが、最高速度がXC M-1のほうが上の為、途中で追撃を止める。既に2機とも残弾は無く、帰還しようとしていた。

『ムー艦隊司令部よりアルノス編隊へ、どうぞ』

「こちらアルノス、感度良好どうぞ」

『日本艦隊の艦載機が攻撃を開始するようだ。誤射を防ぐ為に退避してほしいと連絡があつた』

『至急帰還してくれ』

「了解、帰還する」

「——見せて貰おうか。日本軍の戦闘機の性能とやらを」

アルノスはそう呟いた。

◆◆

同時刻——

《神聖ミリシアル帝国海軍 南方地方隊巡洋魔導艦隊旗艦『ゲイジャルグ』艦橋》

神聖ミリシアル帝国海軍の主力巡洋艦『シルバー級』の6番艦、ゲイジャルグの艦橋で、南方地方隊巡洋魔導艦隊司令のパデスは、魔信探知機の画面を覗いていた。

「ま……魔力探知機から、第7制空戦闘団の反応が消えました」

「まさか……全機撃墜されたのか!？」

「はい…リーダーに反応はありません」

「なんてことだ！我が神聖ミリシアル帝国が誇るエルペジオがこうも一方的に!？」

艦橋内がざわめく中、日本艦隊から一本の通信が入る。

『日本艦隊司令部より世界連合艦隊全艦へ連絡する。我が航空部隊が上空を通過する。敵機と間違えて誤射をしないように注意してください。方位…』

「日本機はどこから来る」

「はっ……この方角です」

「…何も反応が無いではないか」

この魔信探知機は距離60km離れている敵を探知できる優れ物だ。それが探知できないということはおかしい。

「ブラフか？いや、そもそも戦闘機を出したというブラフを流すか？」

そう考えている時、見張員が大きな声で報告して来る。

「飛行機械確認！日本艦隊が示した方角と一致します！」

「なに!! 魔信探知機に反応は!?!」

「ありません!!」

「(探知機に反応が無い!?!魔力が無いのか!)」

魔信探知機の短所として、魔力を伴っていない機械は反応が薄くなったり、なくなる場合があった。だがこれまでは機械文明のムーでも魔法は使っており、運用には支障はなかった。

だが、彼に考える暇はなかった。

急いで見張場に向かい、魔導双眼鏡を除くと高速で接近して来る飛行機械が目に入った。

「!!」

パデスが驚いているのも束の間、飛行機械は高速で艦隊上空を通過する。

轟音が鳴り響き、戦列艦の中には傾いているものもある。

「あれが！日本機！」

パデスは、冷や汗を流しながら空軍の皇都防衛飛行隊にも勝る練度で、そして見たこともないような速度で上昇する日本機を見送った。

◆◆

数分後――

《神聖ミリシアル帝国 カルトアルパス湾》

第5空母航空団第27^F戦闘飛行隊『トップガン』は、F-14Eを操作して世界連合艦隊上空を通過した後、敵編隊の方角へ向かっていた。

第1飛行小队4番機パイロット、竹中義雄2尉は、隊長の1番機パイロット、氷室零2佐に話しかける。

「隊長、ミリシアルの艦。随分近未来的でしたね」

『ステルス性持つてるぽいけどレーダーには反応してるんだよね』

ミリシアルの艦は近未来的であつたが、些かステルス性は無かつた。海自は、今後対

決するであろう魔法帝国用にミリシアル艦を解析するのだが、それは別の話。

『此方シャークス1よりトップガンS^{スコードロン}Qへ。方位2-1-0、距離42km、高度32、000に空中目標を確認。機数169、ミリシアルらが迎撃に当たったグラ・バルカス航空部隊と思われる』

『各機に割り当てを送る。攻撃を許可する、^{Cleared attack}繰り返す、攻撃を許可する』

『トップガン1-1より、^{スコードロン}SQへ、聞こえたか？ 割り当ての目標に対して16式空対空誘導弾を発射しろ。全機攻撃開始！』

E-2Dからの攻撃許可が下され、パイロットは各々でJHMCSによってレーダーを照射する。

既に探知距離150kmを誇るAN/APG-81によって敵編隊は捕捉されており、いつでも攻撃が可能な状態であった。

機体の機首方向から左右60度以上に位置している敵機に対して、顔を向ける（つまり敵機を見る）だけでミサイルのロックオンができるようになっていたJHMCSの特徴を使い、敵をロックオンする。

「レーダー照射、ロックオン」

「(169機……1機あたり空対空^Aミサイル^Mが8発だとして……撃ち漏らしは73機か……)」

「まあ良い……FOX——！発射^{Fire}！」



同時刻——

《グラ・バルカス帝国 第5機動部隊 第1次攻撃隊》

第1次攻撃隊長を務める『ノルドーズ・フィルトス』は、司令部型に改造されたシリウス07式艦上爆撃機に搭乗していた。

シリウス爆撃機は旧海軍の彗星艦爆に酷似しており、また、周囲の編隊を構成するアンタレス07式艦上戦闘機は零戦21型、リゲル07式艦上雷撃機は97式艦攻に外見が酷似している。

「此方第1次攻撃隊より、アクリラ管制へ次ぐ……繰り返す、第1次攻撃隊より、アクリラ管制へ。応答どうぞで」

「ダメです……通じません」

「クソつたれ……何で無線が使えないんだ!？」

ノリドースは悪態をついていた。先程は、ムーの複葉機、ミリシアルの戦闘機、ニグラートのワイバーンは難なく撃退したものの、途中で参戦してきたムーと思われる新型機によって、アンタレスが4機、シリウスが3機、リゲルが1機撃墜されていた。

そのことを報告するために、母艦であるアクイラに連絡しようとしたが、何故か繋がらないのである。

東部方面艦隊司令カイザル大将が直々に指揮する第1戦艦部隊とは繋がり、また戦艦部隊から機動部隊は繋がるので、全く理由が分からなかった。

実際には、F-14Eが発艦してから順に発艦した第247^A電子攻撃飛行隊『バーボン』所属の『E/A-18G グラウラー』による電子妨害^Mによって、空母艦載機から機動部隊、機動部隊から空母艦載機の連絡を完全に遮断していたのだが、そもそも電子戦^Wを知らないノリドースにそれを理解する術は無い。

「どうしますか中佐？ 一旦母艦へ帰還しますか？」

「いや…そのままだ。作戦中止の命令は未だ出ていない」

「了解しました」

「通信士、湾までの距離は？」

「凡そ35kmです!!」

「そうか——ん?」

その瞬間、ノリドースは編隊の前方から黒い矢のような物が向かって来るのを目にした。

一回の瞬きの後、アンタレスとシリウスが、理解の及ばない僅かな時間を置いて一斉に爆散した。

◇◆◇

3分後——

《神聖ミリシアル帝国 カルトアルパス湾 日本国海上自衛隊第1合同特務任務部隊旗艦『きい』》

「F-14Eから発射された16式空対空誘導弾^A及び04式空対空誘導弾^A96発、全弾着弾。敵編隊残機数73機」

「了解」

元々司令塔であった戦闘^C指揮所^Iでは、山本がレーダー画面を見ていた。

96機もの機数が失われた編隊は、そのまま突撃を開始していた。

全滅の定義は、部隊の30%が消耗した時であり、この編隊は事実上崩壊しているわけだが、勇猛果敢にも突撃を開始していた。

「敵編隊さらに接近!」

「——対空戦闘用意!」

「対空戦闘用意!」

艦内に対空戦闘を知らせるブザーが鳴り響く。既に戦闘レベルが第二種から第一種に変わった時に、乗員全員が持ち場についているため、水密扉が閉められる。

第5空母護衛隊に属するやまと型ミサイル護衛艦『やまと』艦長『瀬戸 衛』は、対空戦担当士官からの情報を聞いていた。

「我が艦の攻撃目標は?」

「此方です。方位25、アルファ距離34、機数15」

「これより目標を目標群 アルファ aとする」

「了解」

既に、きいに搭載されている戦闘型人工知能『高天原』によって瞬時に各艦に迎撃目標が振り分けられている。

『各部、対空戦闘用意よし』

艦橋から全員が配置についたことを知らされる。

「各部、対空戦闘用意よしとの報告です」

「了解」

「艦橋、第三船速」

「面舵——030度宜候」

『第三船速、面舵030度宜候』

既に護衛艦全艦が世界連合艦隊を囲むように輪形陣で展開している。

右方向から飛来する敵機に対して90°になるように、やまとも右に針路を変える。

「25度仰角45に備え！」

「前部VLS、1番から15番発射準備」

「目標攻撃諸元入力完了！」

「目標群^{アルファ} a に対し前部VLSよりSM-6、15発射用意、発射管制は手動で使用！」

「発射管制手動^{マニユアル}で使用！」

「攻撃を開始します」

「了解、やってくれ」

「TDS指示の目標、SM-6攻撃初め」

「目標、^{アルファ} a 編隊。前部VLS1番から15番、SM-6発射用意！」

「SM-6、攻撃初め。斉射^{サルボ}、てえ！」

やまとの^{6.2口径5インチ単装砲}主砲と艦橋の間に設置された^{垂直発射システム}VLSであるMk. 41垂直発射システム^{SM-6}のセル・ハッチが開く。

ミサイル・ハッチ内の^{SM-6}6のブースターが起動して、発射炎がUの字になつている通路を通り、アプテイク・ハッチから噴き上がった。

落下防止用のカバーを突き破り、^{イージス}神の盾によつて制御されるミサイルは、グラ・バルカス帝国海軍艦載機を撃滅しようと牙を剥いた。

——この戦いは、各国で名称が異なる。

迎撃側である神聖ミリシアル帝国では、『カルトアルパス防衛戦』と呼ばれる。

また、攻撃側のグラ・バルカス帝国では、『Z作戦海戦』と呼ばれる。前世で戦いが多かった為に、作戦の名前がそのまま戦いの名前になるのだ。

だが、日本など大多数では、『フォーク海峡海戦』と呼ばれ、また、海戦は4段階に区分される。

その最初の戦い『フォーク海峡迎撃戦』は、日本艦隊のSM—2、SM—6の発射によつて幕が開かれた。

第5話 フォーク海峽迎撃戦 後編

中央暦1642年4月25日――

《神聖ミリシアル帝国 カルトアルパス湾》

グラ・バルカス帝国第1次攻撃隊は、既に殆どが撃墜されていた。

その中で、隊長機が撃墜されたために最先任になってしまった『ヤルドル』は、乗機の『リゲル07式艦上雷撃機』の機長席で悪態をついていた。

「くそっ！なんなんだあれは!？」

「分かりません！矢のように見えましたが…」

169機の機数の内、73機しか残っていないなかった。彼は帰還することも考えるが、母艦と無線が繋がらない。その時、彼は一つの可能性に至る。

「まさか…機動部隊が全滅した!？」

機動部隊所属の母艦である『アクイラ』が撃沈されれば、当たり前であるが無線は繋がらない。

「いや…世界最強の第5機動部隊が全滅するか？」

グラ・バルカス帝国内で『最強の艦隊は？』と尋ねると9割以上の割合でその言葉が返ってくる部隊である。その部隊がそうやすやすと全滅するとは考えにくい。

「(それにしても敵は何で艦載機を撃墜しているんだ!?)」

「(まさか——無人機か!ロケットをつけた無人機を飛ばしている!?)」

ミサイルを知らない場合、上手い表現である。だが、彼にそれを考える暇はなかった。

「敵飛行物体接近!!」

パイロットの報告に、ヤルドルは前方を注視する。前方から、矢のような物体が飛んできているのが確認できた。ただの矢ではない、必中の魔矢だ——

「回避！回避！低空へ移動しろ！」

ミサイル^矢を確認した瞬間、ヤルドルは無線で生き残っている機に命令を伝える。

前世界では近接信管の対空砲火を回避する術は低空で飛行することであった。

ユグドでケイン神王国が援助する国と軍事的衝突があった時、ケインから輸入された近接信管でグラ・バルカス帝国航空部隊が思わぬ損害を食らった為に、上層部はパイロットに対空砲火を受けた場合は低空へ避難することを教えていた。

あの矢が近接信管を使っている場合、それが通用する筈——そう信じてヤルドルは命令した。

だが対空砲は無誘導だが、ミサイルは目標を捉えて向かってくる。

ふぶき型ミサイル護衛艦『ひびき』とながと型ミサイル護衛艦『むつ』から発射されたESSMは、48発全弾が指向された目標近くで近接信管を作動させ、爆発した。

「畜生！クソツタレ!!」

ヤルドルは行き場のない怒りを覚える。死んだ者達は全員が顔見知りだ。死人も出

る厳しい訓練も乗り越えてきた仲間であった。それが敵の姿も見えずにやられるなんて、こんなクソツタレなことは無い。

「くっ、仕方ない！突撃！敵艦隊を叩く！」

本来であれば敵艦隊の側面を取り、そこから攻撃であったが側面空域に行く前までにこのままでは全滅する。そう判断したヤルドルは突撃を指示する。

だが、この世界最強の防空網を打破するには、些か武器の性能差が違いすぎた。数秒後、E S S Mの第2波が着弾、ヤルドルも乗機が近接信管に巻き込まれて即死した。

再度指揮官を失った編隊は、次の指揮官が選ばれる暇もなく殲滅された。

此処にグラ・バルカス帝国航空部隊第1次攻撃隊は全滅したのである。

◆◆◆

同時刻——

《神聖ミリシアル帝国 カルトアルパス湾 臨時世界連合艦隊》

「敵編隊の殲滅を確認、対空戦闘用具収め」

「日本艦隊司令部より世界連合艦隊へ、敵機の殲滅を確認」

魔信で送られた言葉に、世界連合艦隊の将兵達は大いに湧いた。だが、それを素直に喜べない者も居る。当事者の神聖ミリシアル帝国、エモール王国、そしてアガルタ法国だ。

神聖ミリシアル帝国南方地方隊第3魔導巡洋艦艦隊司令であるハデスは混乱していた。

「あれは古の魔法帝国ラヴァーナナル帝国の誘導魔光弾ではないのか!？」

伝承上に語られる世界最強・最悪の国、古の魔法帝国ラヴァーナナル帝国。その圧倒的な軍事力の要因の一つであった対空魔船に搭載されていたのが誘導魔光弾である。

伝記によると、自ら目標に向かって進路を変えて、確実に目標を射落とす兵器であったそうだ。それは目の前の光景に当てはまった。日本艦から発射された矢のような物は敵編隊の方へ向かい、またその方角には黒い煙がうっすらと確認できた。

「まさか……この神聖ミリシアル帝国が魔導技術で遅れをとるとは……」

「そもそも日本は機械文明国であった筈。なぜ魔光弾を…」

部隊参謀達が考察する中、ハデスは一旦落ち着き、通信士に命令を伝える。

「通信士、カルトアルパスの外交官に伝えろ。日本が誘導魔光弾を実用化している可能性があると」

「はっ、了解しました」

通信士を見送り、ハデスは双眼鏡で日本艦隊を見つめた。



同時刻——

《神聖ミリシアル帝国 カルトアルパス湾 上空 エモール公国国外交部隊護衛第1
6 風竜戦闘団》

エモール王国風竜騎士団長『ウーヅ』は、もしもの場合の為に、艦隊近くの上空に風龍22騎を展開させていた。

その為に、日本艦隊が発射したミサイルを間近で見ることとなった。

「相棒！あれは誘導魔光弾か!？」

ウージは相棒である風龍に話しかける。風龍は知性が高く、念波を介して人と会話を交わすことが出来るのである。

「——そうだな。少し形などが違うが誘導方法は同じであろう」

相棒の風龍の言葉に、ウージは動揺する。

「まさか実用化しているとは!？」

「うむ…それに下の艦は凄いな…」

「あの日本艦か」

ウージは下を見て日本艦を見る。艦隊を囲む輪形陣から大きな戦艦を中心とした輪形陣への入れ替わりの最中であつたが、恐ろしく素早く、練度を思い知らされる。

「あれの船からは其方からは見えまいが線状の光が様々な方向に高速で照射されてい

る」

「我々が遠くの同胞と会話をする際に使用する光に酷似している。普通の種族であれば不可視の光だ。何かか飛んでいるかも知認も出来るであろう」

「なっ…」

ウージは言葉を失う。それは伝説に語られる正に古ラヴァーナの魔法帝国ナル帝国の対空魔船の原理と同じであつたからだ。

「ど、どのくらい距離まで把握できるか分かるか？」

「ふむ…我であると120kmぐらいは把握できるが…それ以上であろうな」

ウージはまたも言葉を失う。先ほど飛来した日本の飛行機械も高速であつた。まさか風龍が敗れるかもしれない。

彼は直様この事を先進会議に出席していたモーリアウルに、エモール独自の魔信で伝えた。



同時刻——

《神聖ミリシアル帝国 カルトアルパス湾 臨時世界連合艦隊 アガルタ法国海軍外交官護衛魔法船団》

アガルタ法国海軍外交官護衛魔法船団の船団長『バクター』は、大魔導師を見つめていた。

大魔導師は、船団員が声を掛けられないほどにブツブツと何かを呟いていた。

理由は日本が使った誘導魔光弾と思われる兵器である。

アガルタ法国Ⅰの大魔導師である彼は、法国の一大国家プロジェクトであり、また彼の人生を賭けた大魔法、『艦隊級極大閃光魔法』の主任開発技師であった。

だが、前回試作で発射した艦隊級極大閃光魔法と日本の誘導魔光弾では、ワイバーンとミリシアルのエルペシオを比べるぐらい性能が違った。

「バクター殿、ワシは一旦休む…声をかけないでくれたまえ」

「は、はっ」

トボトボと自室に歩いてゆく大魔導師に、誰も声をかけることはできなかつた。

◇◆◇

5分後――

《神聖ミリシアル帝国 カルトアルパス湾 フォーク海峡》

「針路上に味方航空部隊確認できません」

「…航空部隊は壊滅したか」

「恐らく」

カイザルの言葉に、ラクスタルが同調する。

レーダーは先ほどから使い物にならなくなっており、対空指揮所の高倍率双眼鏡でカルトアルパス湾上空を確認させることとした。

結果は恐らく航空部隊が壊滅した。

前世でも精強であったグラ・バルカス帝国海軍航空部隊が壊滅するなど俄には信じられない。

「エアカバーは期待できんか」

「アルカイド中將が気を利かせてくれれば良いのですが」

「そうだな」

無線も使用できず、もしかしたら機動部隊も壊滅している可能性がある。

「ラクスタル君。航空部隊が壊滅した理由はなんだと思う？」

「——日本。そしてNWT0でしょう」

「君もそう思うか。同意見だな」

カイザルは、肩を鳴らしながらラクスタルに話しかける。

「小口径の砲ばかりであって機銃が少ないと思つたら……命中精度が高いのかね」

「この戦い——厳しくなるかもな」

軍神と呼ばれ、帝国一の将軍とも呼ばれるカイザルの言葉に、艦橋内の空気が一変した。

それを感じたラクスタルは、カイザルに言葉をかける。

「ですが、我々は軍人です。軍人と言うのは強い敵と戦う程燃える者達です」

「それに——自分達より強大な敵を撃破した時は爽快です」

「……………そうだな」

そう言うと、カイザルは眼光を鋭くして艦橋内に響く大声で号令を告げる。

「全艦隊連動、第一戦速！第一種戦闘配置に着け！」

「陣形を単縦陣に変更！フォーク海峡へ突入する！」

「了解。全艦隊連動、第一戦速！陣形を単縦陣に変更！」

「総員、第一種戦闘配置！！」

次々と号令が行き渡り、それを見たカイザルはラクスタルを一瞥する。

「——征くぞ」

「はっ」

グラ・バルカス帝国海軍東部方面艦隊先進11カ国派遣部隊第1戦艦部隊21隻は、フォーク海峡へ突入する——フォーク海峡海戦第2幕、『フォーク海峡砲撃戦』の幕が開かれようとしていた。

第6話 フォーク海峽砲撃戦——1

中央暦1642年4月25日——

《神聖ミリシアル帝国 カルトアルパス湾 フォーク海峽》

臨時世界連合艦隊は、一隻の落伍艦も無く、カルトアルパス湾を南下していた。

その一角である日本国海上自衛隊第1合同特務任務部隊旗艦の『きい』の戦闘指揮所^Cでは、任務部隊司令官である『山本実都来』海将ら任務部隊幹部らかメインモニターを見ていた。

「第5空母航空団^C第689^V戦闘攻撃飛行隊^F所属F—2Dからの画像です」

「戦艦部隊か」

「これは…1943年頃の武蔵ですかな」

「情報部からの情報を推測するに、艦名は『グレード・ウォール』だと推測されます」

「グレード・アトラスターにグレード・ウォール…全部宇宙関係だな」

「それに画像を見るに…全艦が二次戦頃の我が海軍の艦艇に似ていますな」

艦隊幕僚らが考察している時、山本海将は手を鳴らしてまとめ上げる。

「考察は後です。先ずはこの部隊の対処にまわります」

「対艦ミサイルの攻撃でよろしいですか」

「ええ、二次戦の艦艇にどれ程通じるか分かりませんが…駆逐艦や巡洋艦であれば撃沈できるでしょう」

「了解しました。対水上戦闘用意！」

号令が艦長の五条蒼一等海佐によって通達され、戦闘指揮所要員が動き出す。

「艦隊で対艦ミサイルの総数は64発…つまり1艦当たり3発でグレード・アトラスターのみ4発でよろしいですね？」

「ええ」

「了解です。90式艦対艦誘導弾発射用意！」

「発射準備完了！」

「撃て！」

瞬間、きいの船体後部に設置された90式艦対艦誘導弾四連装発射機2基から8発の90式艦対艦誘導弾が発射される。

また、各艦からも90式艦対艦誘導弾、17式艦対艦誘導弾、ハーブーンが発射される。それを見た臨時世界連合艦隊は、あれがかの誘導魔光弾だと思い、日本への畏怖の念を強める。

一旦空中に飛び出たミサイルは、ブースターによって加速された後、慣性航法装置やGPSによって誘導され、敵のレーダーを躲すためにプログラムされたシースキーマーモードに切り替えられる。狙われれば回避することが難しい矢は、敵対する艦艇を屠ろうと向かっていった。



5分後――

《神聖ミリシアル帝国 カルトアルパス湾 グラ・バルカス帝国海軍東部方面艦隊先進12カ国会議派遣部隊》

グラ・バルカス帝国海軍東部方面艦隊先進12カ国会議派遣部隊第1戦艦部隊は、フォーク海峡を北上していた。大艦隊の威容は、航空部隊が壊滅したと思われる事を記

憶から無くしてしまいそうだ。

「素晴らしい艦隊だ：此れならば日本艦隊と戦っても負けはしないだろう」

「だが：この嫌な感じはなんなんだ？」

この部隊の指揮官でいるカイザルは、旗艦グレード・アトラスターの対空指揮所で艦隊を見回していた。だが、その心は何か引つかかるような感じであった。

「何かがおかしい：敵はどうやって航空部隊を壊滅させたんだ？」

「黒煙が敵艦隊から見えないという事は、命中弾を得られなかったという事：幾ら日本艦隊の対空砲火の命中率が高いと言っても、そんなことが出来るか？：：）」

「まさか：：日本艦隊は航空部隊が手出し出来ない距離から攻撃できる手段が有る——」

それに行き着くには、時間が足りなかった。

「未確認機多数、艦隊一時方向より超低空から急速接近！ 一分以内に艦隊と会敵予定

!

「——対空戦闘用意！」

「対空戦闘用意！」

艦隊に対空戦闘用意が伝えられ、一斉に12.7cm高角砲や40mm連装機関砲が正面を向く。

正面にはあまり対空砲は向けられず、狙いずらい。

だが、そもそも対空砲で対艦ミサイルを落とす事は限りなく不可能に近いが、彼らはそれを知る術はない。

マツハで接近する90式艦対艦誘導弾^{S S M}、17式艦対艦誘導弾^{S S M}、ハーブーン^{R G M}は対空砲が1発2発発射したところで着弾した。

艦隊の中で最初に犠牲になったのは第56駆逐隊所属のアクエリアス級駆逐艦5番艦『アルバリ』であった。

ふぶき型ミサイル護衛艦『ひびき』から発射された17式艦対艦誘導弾^{S S M}は、正確に目標を捉えるために一旦急上昇^{ホップアップ}し、慣性誘導からミサイル本体が目標に電波(レーダー波)を照射することでミサイルを誘導するアクティブ・レーダー^{A R}・ホーミング誘導^Hに切り替わり、急降下してアルバリの艦中央部に突入した。

アルバリは、命中箇所が悪かった。艦中央部には、四連装の魚雷発射管があったのだ。それに誘爆し、アルバリはものの数十秒で竜骨をへし折りながら轟沈した。

アルバリの轟沈は、これから始まる地獄の最初でしかなかった。

アルバリの轟沈から数秒遅れて、今度は全艦に破壊の矢が襲いかかった。

アルバリの後ろを航行していたキャニス・ミラー級駆逐艦『ゴメイサ』『ルイテン』の2艦に閃光が走り、また第1水雷戦隊旗艦のレオ級巡洋艦『デネボラ』が大爆発を起す。

タウルス級重巡洋艦『ケラエノ』の特徴的な艦橋がまるで爆破解体されるビルのように崩壊し、次の瞬間にはクエーサー級戦艦『クエーサー』の艦首が吹き飛び、急速潜航する潜水艦の様に海中に消える。

そして破壊をもたらす矢は、グラ・バルカス帝国海軍の象徴である『グレード・アトラスター』『グレード・ウォール』にも接近していた。

「敵弾接近！」

「総員衝撃に備え！」

ラクスタルが叫ぶとほぼ同時に、グレード・アトラスターの船体に未だ経験したこと

がない衝撃が加わる。

地震の様に昼戦艦橋の床が揺れ、何かに掴まらなかった艦橋要員は頭をぶついたり、転倒する者も現れる。

「ぐっ、被害報告！」

「只今被害集計中です!!」

「艦長！他の艦が！」

「くそっ……」

日本艦隊より発射された全ての対艦ミサイルが着弾した後、グラ・バルカス帝国海軍第1戦艦部隊において洋上に浮かんでおり、かつ戦闘行動が可能な艦は2隻のみであった。

グラ・バルカス帝国海軍が誇るグレード・アトラスター級戦艦『グレード・アトラスター』と『グレード・ウォール』である。帝国の威信を懸けて建造された巨艦は、見事にグレード・アトラスターが4発、グレード・ウォールが3発の着弾に耐え切れたのであった。だが、無傷とまではいかなかった。

「被害集計完了しました」

「教えてくれ」

「はっ、敵弾は艦首・右舷対空銃座・後部カタパルトに被弾。右舷対空銃座では多くの死傷者がで出ているとの報告です」

グレード・アトラスターに着弾した4発は、まず1発が艦首に命中。大幅に変形させて錨を吹き飛ばした。また喫水線下にも被害を与え、グレード・アトラスターの艦速を23ノットまで落とした。

続く2発目と3発目はそのまま艦中央部に突入。127mm三連装高射砲と40mm連装対空砲を破壊し、多数の海兵を殺傷した。最後の1発は後部のカタパルト付近に命中。クレーンや偵察機などを吹き飛ばした。

「グレード・ウォールは？」

「グレード・ウォールは夜戦艦橋・煙突・第3砲塔に被弾。第3砲塔は砲塔要員が気絶してしばらく戦闘不能との報告です」

「…そうか」

一方のグレード・ウォールは、グレード・アトラスターよりも被弾した数は少なかったにも関わらず、グレード・アトラスターより被害が大きかった。1発目は艦橋の中腹部である夜戦艦橋に命中。炸薬によって窓ガラスは割れ、ミサイルの金属片と高温ガスを夜戦艦橋の中にばら撒いた。幸い昼間で、用員がいなかったため死傷者は無い。

2発目は煙突に着弾。煙の向きを変化させ、機関に少くない影響を及ぼした。3発目は3番砲塔に着弾。ミサイル自体は前盾650mm、天蓋250mm、側盾250mm、砲塔防御甲鉄板だけで790tにも及ぶ厚さの鉄板に阻まれ、貫通には至らなかったものの近接信管を作動させて爆発。

前述の装甲厚のおかげで、砲塔自体は若干表面が焦げただけであつたが、砲塔内の給弾員が脳震盪で倒れた。その為に第3砲塔はしばらく使用不能になり、グラ・バルカス帝国海軍第1戦艦部隊は砲撃戦を行う前に砲撃力の6分の1を失うこととなつた。

「他艦は？」

「残っているのは本艦とグレード・ウォールのみです」

「たった2艦で海峡突入か……」

ラクスタルとカイザルの顔が苦渋に染まる。たった2隻での敵勢力区域への突入。

しかも相手は恐らくこの部隊の半数以上を一瞬で屠り、また航空部隊も撃滅した日本艦隊である。

その2隻が帝国一の戦艦グレード・アトラスター級であるとしても、2艦とも中破乃至小破している。

「(行けるか…?)」

「カイザル司令、どうされますか」

艦橋要員の視線を一矢に受けたカイザルは、目を開きラクスタルの言葉に返す。

「——そのまま突入する。砲撃戦に持ち込むぞ」

その言葉に艦橋内が騒然となる。幾ら帝国最強の戦艦としても護衛艦艇なしで敵に向かうのは難しい。

「理由をお聞きしても?」

「本部隊の主目的は敵艦隊を海峡内に封じ込め、撃滅する事だ」

「その対象は日本艦隊のみでは無い。日本艦隊以外は弱小だ。それを撃滅すれば我々が相打ちになっても目的は完遂できる」

普段のカイザルとは違う強硬な姿勢に、一同が驚愕する。

「カイザル司令、既に航空部隊は壊滅しております。一旦転進し、第2戦艦部隊と合流すべき

かと」

「いや、ラクスタル。私もカイザル司令に賛成だ」

「ウイルツクス…」

ラクスタルと海軍大学校同期であり親友で、またライバルでもある主席参謀『ウイルツクス・ポートウエル』がカイザルに同調する。

「今の日本艦隊は世界連合艦隊という要介護者を背負っている」

「だが敵戦艦の主砲口径は46cm以上だ。単純な撃ち合いなら向こうに軍配が上がるぞ」

「現在の敵艦隊までの距離は約45km。機関に負荷がかかることを考慮して27ノッ

トで進むと55分程で着ける。相手もこちらに突入してきているのならば尚更だ」

「近距離に持ち込めば主砲口径など関係ない」

「くっ…」

言い淀んだラクスタルに、カイザルが追撃をかける。

「このグレード・アトラスターは、最大の艦砲を備える為、最大の防御力を誇る。被害を喰らう前提のこの作戦に最適だ」

「…了解致しました。司令かそう仰るのであれば私も最善を尽くします」

「すまん」

そうしてグレード・アトラスター、グレード・ウォールの2艦はフォーク海峡に突入した。



3分後——

《神聖ミリシアル帝国 カルトアルパス湾 フォーク海峡》

一方『きい』でも、対艦ミサイルの着弾結果の解析と砲撃戦の準備が進められていた。

「対艦ミサイルSSMは全弾が着弾。グレード・アトラスター、グレード・ウォール以外は沈没しました」

「しかし残りの2艦は依然フオーク海峡に突入し、北上しています」

「砲撃に持ち込むつもりですか」

「司令、我が部隊も砲撃戦で対抗するのがよろしいかと」

主席幕僚の東郷が発言し、山本がそれに同調する。

「そうですね。対艦ミサイルSSMで大和型を撃沈に持ち込むのは難しいでしょう」

「幸い本艦は東亜戦争の際に敵戦艦を撃破した経歴があります。砲撃戦に最適です」

「では」

「ええ、久村1佐。対水上戦闘に移行してください」

「了解しました。対水上戦闘用意！」

戦闘指揮所《CIC》の要員が慌ただしく動き回る。

「現代艦に砲撃戦は難しいでしょう、本艦とモンタナ以外は後方で待機。待機部隊の指揮権はやまとの瀬戸一佐に委ねます」

「それと臨時世界連合艦隊に到達、『我が艦はこれより敵戦艦との砲撃戦に移行する。敵艦が突撃を敢行した場合、其々で対処を求む』」

「了解致しました、『我が艦はこれより敵戦艦との砲撃戦に移行する。敵戦艦が突撃を敢行した場合、其々で対処を求む』。艦隊全艦に通達します」

輪形陣から、きいとモンタナが速力を上げ突出する。2艦は単縦陣で突撃する。一旦取舵を切り、主砲を敵艦隊の方へ向ける。

「右砲戦用意！」

「右砲戦用意!!」

「目標グラ・バルカス帝国艦隊、弾種徹甲^A弾、主砲砲撃射線確保！」

「201番⁵20インチ¹の1番砲^Cという意味から204番^M」

「201番から204番！」

「30度、仰角45度！」

「30度、仰角45度！」

「発動用意！発動！」

1基で駆逐艦ほどの重量がある砲塔が一斉に回転し、敵艦隊の方角へ向けられる。

「1分前、斉射1分前」

「全照準、射撃管制手動マニュアルして行う！」

「照準……よし！」

「交互一斉斉射！」

「発射用意！」

「撃てえ！」

51cmの砲から、重量1.9tもの重さの徹甲弾が発射される。最大仰角で発射された砲弾は成層圏まで到達し、グラ・バルカス帝国第1戦艦部隊に降り注いだ。今、ここにフォーク海峡砲撃戦の第1ラウンドが開始された。

第7話 フォーク海峡砲撃戦—2

中央暦1640年4月25日——

《神聖ミリシアル帝国 カルトアルパス湾 グラ・バルカス帝国海軍東部方面艦隊先進
12カ国会議派遣部隊》

「敵艦発砲！」

対空指揮所からの報告と、ラクスタルの双眼鏡に砲炎が見えたのはほぼ同時であつた。

「やはり我が艦より主砲口径は大きいか」

「総員衝撃に備え！」

無線によつてグレード・アトラスター全体に通告すると同時に、近くの物に捕まり、衝撃に備える。数秒後、グレード・アトラスターに就役後2度目となる大規模な衝撃が加

わった。

「ぐっ！」

「(初弾から命中だど!?)」

通常艦砲は、初段で命中することは無い。普通は初めに対水上レーダーで標的の距離を確認、その後何発か試射、その情報を元に修正して当てる。

それまでの時間を短縮させ、どちらが早く敵に当てるかが砲撃戦の基本だ。その時間を短縮させるには、射手の練度を上げる方法がある。

レーダーによってかなり測量は楽になったが、砲を撃つのは射手だ。だからこそグリード・アトラスターの主砲主任射手『フラグストーン・ノートレダム』や砲術長『メイル・ヴォーカルズ』は高い練度を持つ。

だが、日本はそれを上回る練度の射手を持っている事となる。

「被害報告！」

「はっ！右舷対空銃座に1発、後部に2発、至近弾1発です」

「特に右舷対空銃座の被害は甚大で、もう対空砲は使用出来ないと責任者は言っ

す」

「それに後部に着弾した内の1発は貫通し左舷外側の缶2基を破壊、速力が18ノットまで落ちました」

「ちつ…ボイラーがやられたか」

グレード・アトラスターは、推進軸1軸に対して機関室1、缶3基がセットで割り当てている。缶・機関はすべて独立した区画に設置され各缶が1基ずつ防水区画を持つという、他に例をみない贅沢な配置をしている。これは一つの缶が損害を被つても、他の缶に損害を与えない為である。

その12基の内2基が破壊された。先ほどの艦首の損害と合わさり、グレード・アトラスターの速度は18ノットまで落ちる事となった。

「最初からこの被害か…」

「ラクスタル、グレード・アトラスターは戦えるか?」

カイザルと問いに、ラクスタルは重々しく答える。

「正直微妙です。本艦は未だ射程に入っていないのにも関わらず、相手は打ち放題。本艦の射程に入るのには後3分ほどかかります」

「それまでの間に主砲弾薬庫にでも当たったら…お陀仏ですね」

グレード・アトラスターの46cm砲の装填時間はおよそ30秒。敵艦の主砲が約51cmなので5秒ほど遅くなるにしても先程は交互一斉斉射——つまり半分の火力での射撃だ。すぐにでも第2波が襲いかかってくるであろう。

「どうする…」

艦橋内が沈黙で覆われる中、見張所から無線である報告が聞こえた。

「グレード・ウォールが本艦の前に出ます！」

「なんだと!?!」

カイザルとラクスタルは直様側面の窓からグレード・ウォールを見る。そこには速力を上げ、グレード・アトラスターの前へ出ようとする艦の姿があった。



中央暦1640年4月25日——

《グレード・アトラスター級二番艦グレード・ウォール第一艦橋》

「本艦、グレード・アトラスターの前へ出ます」

「うむ」

操舵員からの報告に、グレード・ウォール艦長『ベリアル・ドットスミス』はうなづいた。彼はグレード・アトラスター艦長『ラクスタル・ノーレッジ』、艦隊主席参謀『ウィルクス・ポートウエル』と同期であり、海軍兵学校では三人で色々ヤンチャした仲であつた。

そのような事からグレード・アトラスターがやられる様を黙って見過ごせなかつた彼は、速力を上げ、グレード・ウォールがグレード・アトラスターの盾となる様にした。

「対空指揮所、敵艦から発砲があつたら直ぐに報告せよ」

「はっ」

グレード・アトラスターは巨艦である、そのために旋回も時間がかかり、被弾する事も多い。そのために装甲は類を見ないほど強力なのだが、相手が46cmを超える巨砲を持つているために無力だ。

また、グレード・アトラスター級は巨大な為、舵が完全に効くまで90秒はかかる。敵艦との距離と先程の敵弾の弾着の時間から計算するに、発砲から数秒以内に転舵しなければ至近弾や直撃の可能性がある。

ベリアルはグレード・アトラスター級が回避に徹しなくてはならない事に苛立ちを覚えながらも、敵艦を双眼鏡でしっかりと視認する。その時、敵艦から大きな砲煙が上がる。発砲の印だ。

「敵艦発砲！」

彼が認識したと同時に対空指揮所の見張員が叫び、第一艦橋に無線で伝えられる。それを確認したベリアルは、操舵室の操舵員に無線で指示を送る。

敵弾がここに着弾するまではおおよそ90〜100秒。一方、グレード・アトラスターは船体が大きいために舵を動かしてから旋回するまでに90秒はかかる。

そのために敵弾が発射されてから少ない時間で転舵を指示しなければ確実に当たる。

「右舷スクリューそのまま！左舷スクリュー後進一杯!!」

『!?艦長、本当によろしいですね!?!』

「ああ、やってくれ!」

『はっ、右舷スクリューそのまま！左舷スクリュー後進一杯、宜候!!』

通常の旋回ではなく、片側を前進、片側を後進とする事によつて旋回半径を少なくする。速度は落ちるが、一発で戦闘不可能にさせられるよりはマシだ。

グレード・ウォールの巨体がゆつくりと旋回し、左側に旋回する。その時間をもどかしく思いつつも、ベリアルは弾がグレード・ウォールに当たらないように願う。

「(当たるな…当たるな…)」

全乗員の想いが一つになった瞬間、衝撃がグレード・ウォールを襲う。ベリアルは咄嗟に羅針盤を掴み、転倒を免れたが他の艦橋要員は転倒したり壁に額を打ち付けて血を流している者も見える。

「艦橋より医務室！負傷者多数発生、至急治療を頼む！」

立ち上がったベリアルは医務室に連絡を取り、衛生兵を艦橋に派遣させる。衛生兵が負傷した者を治療する中、ベリアルは砲術長を呼び出す。

「主砲は発射できるか！」

「射程内に入っていますが測距が間に合っていないません！40秒ほどかかります！」

「では30秒で済ませ」

「了解であります！」

既に主砲は3基とも右舷に旋回しており、最大仰角で発射を待ち構えている。ピツタリ30秒後、砲術長からベリアルに主砲発射準備完了の報告が挙げられる。

「主砲発射準備完了であります！」

「了解、全主砲交互一斉打方！てえ！」

耳をつんざくような発射音と反動が艦橋に響き渡る。グレード・ウォールは彼女初と

なる射撃をきいへ向けて撃ち放った。



同時刻——

《海上自衛隊『きい』CIC》

「敵2番艦発砲、しかし全弾着弾する針路ではありません」

「見過ごせ。SAMを無駄に使うわけにはいかん」

実は第5空母打撃群は全艦兵装は満杯では無い。リークはあれど本当にグラ・バルカス帝国が攻撃してくるのかは不明であったために7割程しか兵装は搭載していない。しかも敵空母航空部隊迎撃に3〜4割は使用してしまった為に残り3割ほどのSAMで迎撃しなければいけない。

「(くそっ……ミリシアルがちゃんとしていれば……)」

東郷は世界最強と自負しているように、日本からの目線では80年も前の航空機を碌に撃墜できないミリシアルに怒りをぶつける。

その時、『ひりゅう』からの報告がCICに伝達される。

「司令、ひりゅうより第325^V戦闘攻撃飛行隊^F『デーブインパクト』所属のF-2D1
2機が発艦、武装は司令が指定されたものです」

「そうですか、VFA-325には編隊構成後速やかに攻撃位置につくように伝達を」
「はっ、了解しました！」

VFA-325と通信を取る通信員を横目に挟みながら、東郷は自身が山本と凶上演習した時にやられた奇策を実行したことに気づいた。彼と山本の凶上演習の戦績は7勝6敗。第1合同特務部隊^Jを構成する前にやり、勝ち越しされた試合だ。

「まさか…戦艦をSSMで撃沈できないことを見込んで——？」

東郷が考察する中、46cm砲弾9発はその身を海に打ちつけるに留まった。



数分前——

《第5空母打撃群ひりゅう型航空母艦『ひりゅう』第三エレベーター》

「久しぶりの対戦艦戦だ！気合い入れていくぞ！」

「と言つても現代の戦艦ではなくて80年前の技術の艦なんだが…あいつ聞いてねえな」

第3^V2^F5^A戦闘攻撃飛行隊『デーブインパクト』の第3飛行小隊2番機である『村上英輝』二等海尉と『大山元昭』二等海尉が第三エレベーター上で談笑していた。既にエレベーターは上昇を開始しており、しばらくすると甲板上的の様子が見受けられた。

既に第1小隊のF-2Dは発艦しており、第2小隊の機がカタパルトに設置されている。エンジンの排気によってムアツとした空気が肌に当てられる。二人はJHMC Sを被り、収納ステップで操縦席に乗り込む。

「DEEP IMPACT3-2、スタートアップをリクエストstart up」
 「DEEP IMPACT3-2、スタートアップを許可するclear for startup」

航空管制室からスタートアップの許可を貰い、スタートアップを開始する。

「バッテリーオン、ジェット燃料始動装置 J F S、START II」

「グリーンライト点灯よし、右エンジンクランク開始始動」

「回転数 20 RPM 確認」

「右エンジン回転数正常、右エンジンアイドル」

まずはエンジンを起動する為に補助動力装置APUを起動する。起動を確認するグリーンライトが点灯したのを確認したら右スロットルをアイドル位置に動かす。徐々に右エンジンの回転数が上がっていき、音が大きくなるのがヘルメット越しでも確認できる。

「電力供給エンジンに転換完了、デジタルディスプレイインジケータ左DDI、ヘッドマウントディスプレイ右DDI、H M D、AMP CD 起動」

「PLOBE HEATオン、FLCS BIT RUN、IFF NORMセット」

「UHF BUP BOTH、カウンタメジャー MAN、CH・FLオン」

「MWS・JMR・RWRオン、RWR起動」

「STORES CONFIG CAT III。武装アライン開始」

「レーダーSTBY、スタンバイ、慣性航法装置INSCVセット」

DDIの起動に時間がかかる為、村上は左エンジンのクランクに移行し、^{O_BO_GS}酸素供給も起動する。また、INSのアラインを行う為、DDIからHSIを開き、STD HDGを選択して90秒待つ。次にキャノピーも閉め、^{フライトコントロールシステム}FC Sとトリムをセットする。

「ブリアードドア、リセット。FCS—MCスタート」
 「両エンジンスタート！APU停止」

自己診断が可能なFCS—MCによってスラットやパイロンが稼働し、異常が無いから確認される。同時に両エンジンが正常に始動したのを確認したので、APUを停止させる。

「フラップ、ハーフ確認。^{姿勢指示器}ADI正常よし」
 「気圧高度計、^{高度計規制値}QFE27.75セット」
 「レーダー高度計300ft設定、HMD起動」

フラップ、ADI、気圧高度計、レーダー高度計を順番に起動・操作し、HMDも起動させる。

「INSアライン終了確認。INS、IFAへ移行」

「^{戦術タータリング}D/Lオンよし。輪止め解放をお願いします」

『了解、今外す』

車輪を固定する輪止めを甲板作業員が外したことを確認し、パーキングブレーキを解除してカタパルトへ向かう。

「DEEP IMPACT3|2、^{リクエスト}taxi」
 「^{DEEP IMPACT3|2 from Prefly}プリフライよりDEEP IMPACT3|2、Clear^シ for tax^許i、
 Use^{カタパルト} the 4th^{は4番} for^{カタパルト} the catapul^トt^を」
 「DEEP IMPACT3|2、^{了解}Copy」

プリフライから発艦の承認とカタパルト番号がコールされたら、LAUNCH BA
 Rを下げて指定されたカタパルトにタキシングする。カタパルトに近づいたら速度を

落とし、慎重にカタパルトに入って行く。機体がカタパルトに固定された時点で既にホイールブレーキがかかる。

「DEEP IMPACT3—2、
Preparing to eject the catapult
 プリフライよりDEEP IMPACT3—2、
 カタパルトの射出準備中」
 「DEEP IMPACT3—2、了解。待機する」
copy. Stand by

Pre catapult
 プリカタパルト。

カタパルトにLAUNCH BARが固定されただけゆつくりと前進する。機体の後方ではジェット・ブラスト・デフレクターが立ち上がり射出準備が行われる。

「主翼展開」

「主翼展開確認」

「トリム調整よし。DEEP IMPACT3—2、
Request takeoff
 離陸をリクエストする」

「DEEP IMPACT3—2、
Clear for takeoff when ready
 準備出来次第発艦を許可する
 高度計規正値は29.92で300まで昇れ」

「右コンソール、左コンソール、HUD確認、異常無し！」

そうすると、カタパルト・オフィサーが氷室に向かって指を差して、右の掌を速い速度で揺らす。それを見た氷室は左側にあるスロットルを前に押し込んで、エンジンのパワーを上げる。

『D E E P I M P A C T 3 | 2 f r o m P r e e f l y
 プリフライよりDEEP IMPACT3|2、
 Launch at any time.
 いつでも発艦せよ』

C l e a r d f o r t h e s h o o t i n g
 射出準備完了。

『D E E P I M P A C T 3 | 2、
 Take off
 発艦する』

氷室は準備が整ったことを報告する為、カタパルト・オフィサーに向かって敬礼をする。また、センター・デッキ・オペレーターもカタパルト・オフィサーへ敬礼する。スロットルを開き、フルミリタリーパワーまで上げ、パワーを上げたらホイールブレーキを解除する。また、操縦桿から手を離し、風防の手すりに捕まる。

カタパルト・オフィサーはそれを確認後、カタパルト・セーフティ・オブザーバーが安全を示す青色のランプが点灯していることを確認し、指を艦首側に指す有名な動作をする。それを見たデッキ・エッジ・オペレーターがカタパルトの射出ボタンをクリックする。一気にF|2Dに加速が加えられ、2秒で約300km/hまで速度が上がる。

強烈な重力がかかり、機体と二人の体は一気に前方に押し出される。そして艦を離れ

ると同時に縮んでいた前脚が一気に延びることで機首が跳ね上げられ、自然と機体が浮き上がる。

「ギアアップ、フラップアップ。RWRオン、レーダーオン」
『DEEP IMPACT 3—2、Join the formation as it is.そのまま編隊へ合流せよ』
『Okay, please guide me.了解、誘導を頼む』

秘策を載せたF—2Dは、編隊合流地点へと変針した。